

富田林市埋蔵文化財調査報告35

新堂廃寺跡

オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳

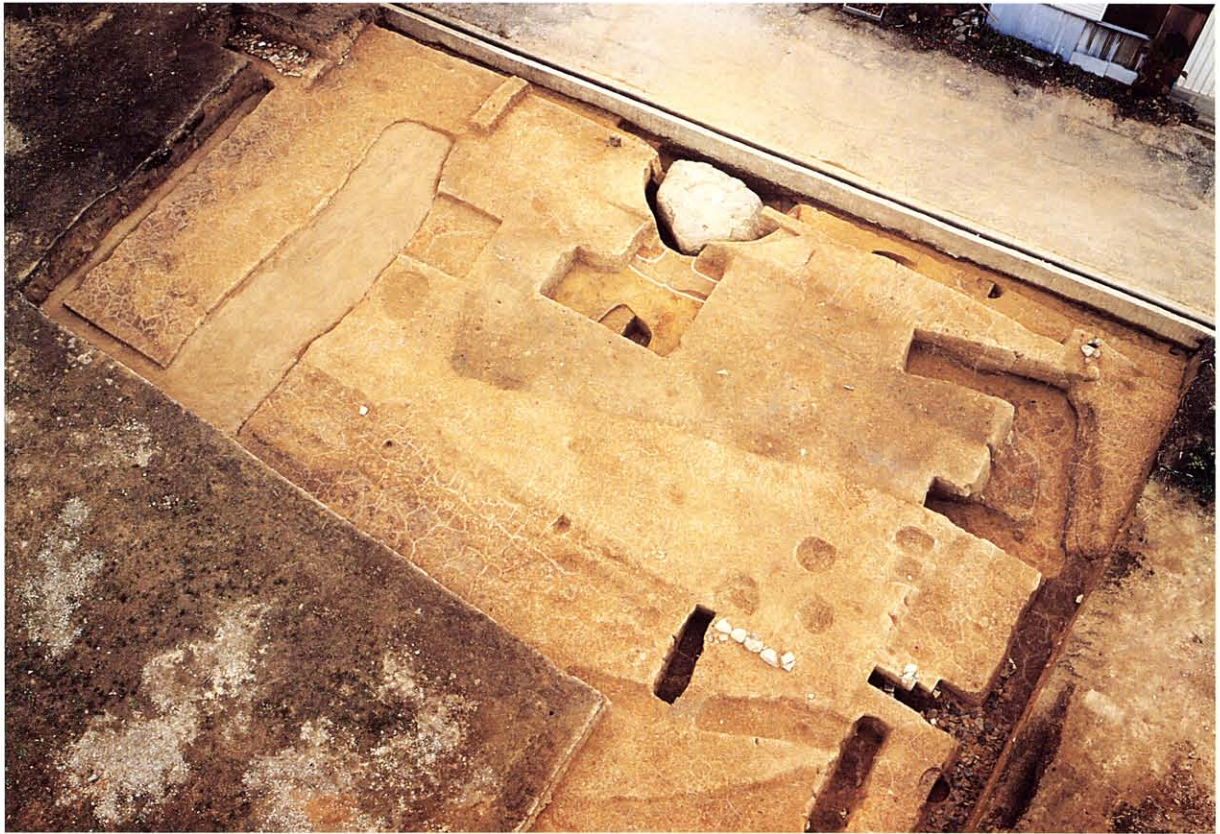
本文編

2003・3

富田林市教育委員会



新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳航空写真 南東上方から



塔基壇全景 南西から



塔心礎石検出状況 北東から



オガンジ池瓦窯跡航空写真 南東上方から



オガンジ池瓦窯跡Ⅰ・Ⅱ号窯全景 南から



お亀石古墳近景 北西から



正面から見たお亀石古墳開口部 南東から

富田林市埋蔵文化財調査報告35

新堂廃寺跡

オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳

本文編

2003・3

富田林市教育委員会

はじめに

新堂廃寺跡は飛鳥期に創建された南河内最古の寺院として古くから学界で注目されてきた遺跡です。また、この寺院の北西約150mにある羽曳野丘陵東南裾には、その屋瓦を焼いていたオガンジ池瓦窯があり、そのすぐ北西の羽曳野丘陵上には、その寺院を創建した壇越の墓と想定されているお亀石古墳があることでも有名です。このように新堂廃寺跡は我が国においても数少ない飛鳥期に創建された寺院というだけでなく、その周辺をも含めて、我が国でも希有な歴史的環境を備えていることで注目されてきました。

富田林市では、このように貴重な歴史的ゾーンを恒久的に保存・活用していくためには国の史跡指定を受ける必要があると考え、平成9年度から5ヶ年計画で範囲確認調査を実施して参りました。そしてこの調査期間中に多大な成果をおさめることができたことと自負しております。まず、平成10年度の調査で中門が発見されました。それまで新堂廃寺については飛鳥期の屋瓦が多量に発見されるにもかかわらず、飛鳥期に遡る伽藍はまったく知られていませんでした。また、新堂廃寺が南向きの寺院であるのか、東向きであるのかもわかっていませんでした。中門の発見は飛鳥期創建時の新堂廃寺が南向きの「四天王寺式伽藍配置」であったことを明らかにしました。その翌年の東方建物の発見は、再建後の新堂廃寺が、それまで我が国で知られていた伽藍配置ではなく、「新堂廃寺式伽藍配置」と呼ぶべき我が国で唯一のものであることをも教えてくれました。そして、平成12年度の調査では、それまで残っていることが絶望的と考えられていた飛鳥期創建時の塔心礎の発見にとどまらず、回廊、築地塀、参道、宝幢遺構の発見もあり、創建時から再建後を通じての新堂廃寺の変遷の全貌をほぼ明らかにできたと考えています。さらに平成13年度におこなったお亀石古墳の調査では、墳丘の形態が、現在残されている形から想定されてきた円墳ではなく、方墳であることが分かりました。これらの発掘調査と併行して進めた膨大な量の出土瓦の研究は、新堂廃寺の伽藍の造営の実体を明らかにしたばかりでなく、その新しい研究方法は、広く瓦研究に寄与するものと思っています。

このような調査の成果を踏まえて、新堂廃寺跡、オガンジ池瓦窯跡、そしてお亀石古墳は平成14年12月19日に国の史跡に指定されました。そしてそれを裏付けた調査研究をここに公にすることができました。今後は多くの人々に親しまれ、富田林市民のみなさまに活用されて、この歴史的遺産が受け継がれていくようにと、全力を注いでいく所存です。

最後になりましたが、新堂廃寺跡の調査に際しましては緑ヶ丘町のみなさまに、お亀石古墳の調査に際しましては、中野昌幸氏、中野覚氏、そして中和物産株式会社にも多大なる協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。さらに調査期間中を通じて地元関係各位のご協力をなくしては、このような成果をあげることができなかつたと考えております。また、調査に際しまして有益で暖かいご指導をいただきました文化庁、大阪府教育委員会、ならびに諸先生方にも併せて厚くお礼申し上げます。今後とも富田林市の文化財保護行政に対しまして、一層のご理解とご協力を賜りますように各位にお願い申し上げます。

平成15年3月

富田林市教育委員会
教育長 清水 富夫

例 言

1. 本書は、富田林市教育委員会が新堂廃寺跡、およびお亀石古墳の保存と活用を目的として、平成9年度から平成13年度の5ヶ年にわたって実施した範囲確認調査の報告書である。
2. 本書には、昭和44年度と昭和60年度に富田林市教育委員会が実施したオガンジ池瓦窯跡、および昭和59年度に実施した新堂廃寺跡の調査成果も併せて報告する。
3. 新堂廃寺等調査指導委員会は下記の方々に構成されている。

委員長	北野耕平（神戸商船大学名誉教授）
副委員長	森 郁夫（帝塚山大学教授）
	猪熊兼勝（京都橘女子大学教授）
	金田章裕（京都大学大学院教授）
	栄原永遠男（大阪市立大学教授）
	廣瀬和雄（奈良女子大学大学院教授）
	菱田哲郎（京都府立大学助教授）
	松村恵司（奈良文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部考古第2調査室長）
	玉井 功（大阪府教育委員会文化財保護課指定文化財グループ補佐 平成10～13年度まで）
	瀬川 健（大阪府教育委員会文化財保護課指定文化財グループ補佐 平成14年度から）
4. 現地調査にあたっては、新堂廃寺等調査指導委員会のほか、文化庁ならびに大阪府教育委員会などの指導・助言のもとに、新堂廃寺跡は平成9年度から平成12年度の4次にわたり、お亀石古墳は平成13年度に実施した。調査担当は以下のとおりである。

平成9・10年度	中辻 亘
平成11・12年度	栗田 薫
平成13年度	横山成己
5. 遺物整理作業は、現地調査に引き続いて平成14年度に実施されたが、新堂廃寺跡については栗田薫が、お亀石古墳は横山成己が担当した。
6. 本書に掲載したオガンジ池瓦窯跡の現地調査は、昭和44年度は北野耕平氏が、昭和60年度は中辻亘が、昭和59年度に実施した新堂廃寺跡は中辻亘が担当した。
なお、これらの調査の遺物整理作業は栗田薫が担当した。
7. 本書の執筆は、本文目次に示すように栗田薫、北野耕平氏、中辻亘、横山成己がおこなったが、編集は栗田薫が担当した。

なお、奥田尚氏からは、「お亀石古墳の石材に関して」の玉稿を賜った。

8. 英文要旨は、山中一郎（京都大学教授）氏が、また、韓国語要旨は、田福涼氏の手を煩わせた。
9. 新堂廃寺跡出土瓦の整理方法として採用した属性組成表記の考察については、山中一郎氏の指導を受けた。
10. 本書に掲載した遺構実測のうち、新堂廃寺跡は、中辻亘、粟田薫、小島（平方）扶左子、田中正利、瀬戸直子が、お亀石古墳は、横山成己、今西淳、瀬戸直子が、オガンジ池瓦窯跡は北野耕平氏、中村浩氏、中辻亘、本並俊也、杉山泰敏、北国友一がおこなった。
遺物の実測のうち、新堂廃寺跡とオガンジ池瓦窯跡出土品は楠木理恵、松本友美、粟田薫が、お亀石古墳出土品は楠木理恵、横山成己がおこなった。瓦の拓本は楠木理恵、山本節子が、土器・瓦の復元作業は前野美智子、山本節子が、瓦の接合作業については瀬戸直子、前野美智子、山本節子、粟田薫がおこなった。また、瓦の分類作業については瀬戸直子と粟田薫がおこなった。
遺構の製図は、新堂廃寺跡については粟田薫と小島（平方）扶左子が、オガンジ池瓦窯跡については粟田薫が、お亀石古墳については横山成己がおこなった。遺物の製図は新堂廃寺跡とオガンジ池瓦窯跡は粟田薫が、お亀石古墳については横山成己がおこなった。
11. 遺構写真の大半は北野耕平氏、中辻亘、横山成己、田中正利が撮影したが、遺構写真の一部と遺物写真については、阿南辰秀、伊藤慎司（〈有〉阿南写真工房）に委託して撮影した。
12. すべての出土遺物、図版、写真等は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
13. 現地調査、遺物整理、および報告書作成にあたっては、下記の方々から指導、助言を賜った。ここに記して感謝します。（五十音順、敬称略）

會田容弘、網伸也、和泉大樹、井藤徹、伊藤聖浩、井西貴子、井上薫、岩瀬透、上田睦、上野勝己、上原真人、大橋泰夫、大脇潔、奥田尚、小沢毅、尾谷雅彦、笠井敏光、梶原義実、金子裕之、亀田修一、河上邦彦、黒崎直、小浜成、小林義孝、近藤康司、西光慎治、狭川真一、佐久間貴士、佐々木理、清水昭博、菅谷文則、鈴木嘉吉、瀬戸哲也、大洞真白、高野学、竹谷俊夫、立岡和人、田中清美、田中宏明、田福涼、田村圓澄、坪井清足、中島正、中西靖人、中村浩、西山昌孝、朴淳發、箱崎和久、花谷浩、林部均、樋口吉文、広瀬雅信、福岡澄男、藤井利章、藤澤一夫、藤澤典彦、藤澤真依、藤田徹也、堀田啓一、水野聡哉、水野正好、森岡秀人、森屋直樹、森山義博、山下隆次、山路直充、山田幸広、山中一郎、山本彰、横山佐夜子、吉沢貴、吉田晶

凡 例

1. 平成9年度から平成13年度に実施した範囲確認調査に際しては、国土座標第IV系に基づいて測量をおこなっている。
2. 遺構実測図に示した断面水準線の数値は、東京湾の平均海面を基準とした海拔標高を示している。
3. 方位は、昭和44年度、昭和59年度、昭和60年度に実施した調査については磁北を、平成9年度から平成13年度に実施した範囲確認調査は、座標北を示している。
4. 遺物実測図の縮尺は軒丸瓦、軒平瓦、土器、石器が1/4、丸瓦、平瓦、道具瓦、埴、瓦棺が1/6、土製品が2/3と1/4、玉類が2/3である。なお、お亀石古墳出土の平瓦については1/4で示している。
5. 瓦の断面実測図は、被損面を細い実線で示し、さらに輪郭線に破線を付加して被損資料であることを示している。焼成後に意識的に分割したと推測される資料の破碎部分については輪郭線として一点破線を付加することで区別している。また、製作の途中で生じた分割破面が処理されないうちで残る場合は、断面図にその範囲をギザギザ線を施すことで示している。
6. 長さを示した数値の下に線を付してあるものは、実存長を示している。
7. 時期の名称で、飛鳥期、白鳳期、天平期と表記している場合、それぞれ飛鳥期は7世紀前半、白鳳期は7世紀後半、天平期は8世紀に該当する。

本文編目次

はじめに

例言

凡例

第I章 遺跡の理解

第1節 位置と環境……………(栗田 薫)……………1

第2節 調査に至る経過

第1項 新堂廃寺跡……………(栗田 薫)……………3

第2項 オガンジ池瓦窯跡……………(栗田 薫)……………5

第3項 お亀石古墳……………(横山成己)……………5

第II章 遺構の発掘

第1節 新堂廃寺跡……………(栗田 薫)……………11

第1項 調査区の設定……………11

第2項 伽藍中心域の調査

1 塔……………11

2 金堂……………23

3 西方建物……………24

4 東方建物……………28

5 中門……………32

6 回廊……………35

7 築地堀……………38

8 参道……………40

9 宝幢遺構……………40

第3項 寺域外の調査……………43

第2節 オガンジ池瓦窯跡……………46

第1項 I号窯……………(中辻 亘・栗田 薫)……………46

第2項 II号窯……………(北野耕平)……………53

第3節 お亀石古墳……………(横山成己)……………56

第1項 古墳の立地状況……………56

第2項 調査区の設定……………58

第3項 墳丘構造の調査成果……………60

1 第1調査区……………60

2 第2調査区……………61

3 第3調査区……………63

4 第4調査区……………65

5 第5調査区……………66

6 第6調査区……………66

7	第7調査区	70
8	第8調査区	72
9	第9調査区	74
第4項	埋葬施設	
1	石槨部	75
2	前室部・羨道部	76
3	閉塞石	80
4	埋葬施設の構築順序	80
第Ⅲ章 遺物の読み		
第1節	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類資料……（栗田 薫）	84
第1項	資料の特色と読み—目的と方法を兼ねて—	84
第2項	観察属性の設定と主属性の認定	85
第3項	機能形態ごとの属性組成表記	118
第4項	瓦埴類資料の観察	130
1	軒丸瓦	131
2	軒平瓦	145
3	丸瓦	
3-1	玉縁式	151
3-2	行基式	157
4	平瓦	180
5	垂木先瓦	233
6	熨斗瓦	
6-1	切熨斗瓦	235
6-2	割熨斗瓦	235
7	隅平瓦	236
8	螻羽瓦	237
9	面戸瓦	
9-1	切面戸瓦	237
9-2	割面戸瓦	238
10	鴟尾	239
11	鬼瓦	242
12	隅木蓋瓦	242
13	埴	242
第2節	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類以外の資料……（栗田 薫）	243
第1項	新堂廃寺跡に出土した資料	
1	土器類	243
2	土製品	244
3	玉類	245
4	金属器類	245

5	石器類	245
第2項	オガンジ池瓦窯跡に出土した資料	
1	瓦窯焼成品	245
2	瓦窯周辺出土品	246
第3節	お亀石古墳に出土した資料……(横山成己)	246
第1項	須恵器類	246
第2項	中世・近世遺構出土遺物	
1	土器・土製品	247
2	平瓦	248
3	鉄器類	248
4	銅銭	248
[付]	……(栗田 薫)	253
第IV章 まとめ		
第1節	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類資料の所属時期	
	……(栗田 薫)	255
第2節	新堂廃寺の伽藍の復元……(栗田 薫)	270
第3節	お亀石古墳の復元……(横山成己)	280
第1項	墳形・墳丘規模の復元	280
第2項	古墳築造工程の復元	284
引用文献		290
資料総覧	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類資料	
	……(栗田 薫)	293
付編	お亀石古墳の石材の石種と採石地……(奥田 尚)	330
英文目次	……(山中一郎)	341
日本語要旨	……(山中一郎)	359
英文要旨	……(山中一郎)	360
韓国語要旨	……(田福 涼)	362
調査抄録		

巻 頭 図 版

巻頭写真1	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳航空写真 南東上方から
巻頭写真2	(上) 塔基壇全景 南西から (下) 塔心礎石検出状況 北東から
巻頭写真3	(上) オガンジ池瓦窯跡航空写真 南東上方から (下) オガンジ池瓦窯跡Ⅰ・Ⅱ号窯全景 南から
巻頭写真4	(上) お亀石古墳近景 北西から (下) 羨道から見たお亀石古墳開口部 南東から

表 目 次

表 1	お亀石古墳検出遺構一覧表	56
表 2	飛鳥期の軒丸瓦	256
表 3	飛鳥期の軒丸瓦の丸瓦部と同群の丸瓦	257
表 4	布から見た飛鳥期の丸瓦	258
表 5	叩き目からみた飛鳥期の丸瓦	259
表 6	布と叩き目から見た飛鳥期の平瓦	260
表 7	白鳳期・天平期の軒丸瓦	261
表 8	白鳳期の軒丸瓦の丸瓦部と同群の丸瓦	261
表 9	布から見た白鳳期・天平期の丸瓦	261
表10	白鳳期・天平期の軒平瓦	262
表11	白鳳期の軒平瓦の平瓦部と同群の平瓦	262
表12	布から見た白鳳期・天平期の平瓦	263
表13	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した丸瓦・平瓦・道具瓦の所属時期	266～269
表14	お亀石古墳墳丘裾部標高一覧表	280

挿 図

第 1 図	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳位置図	4
第 2 図	新堂廃寺跡調査区設定図	12
第 3 図	塔基壇平面図・断面図	15・16
第 4 図	創建塔所用瓦群出土状況平面図・南側断面図	17
第 5 図	塔基壇内トレンチ 1・2・3 土層断面図	18
第 6 図	心礎石実測図	20
第 7 図	四天柱礎石推定位置の平面図・断面図	21
第 8 図	金堂南西隅平面図・断面図	23
第 9 図	西方建物・西面回廊・西面築地塀（2000年度・第 5 調査区）平面図・断面図	25・26
第10図	創建西方建物基壇（1960年度調査区）断面図	27
第11図	東方建物（1999年度調査区）平面図・断面図	29・30
第12図	中門南半部（1998年度調査区）平面図・断面図	33・34
第13図	東面回廊（2000年度・第 1 調査区）平面図・断面図	36
第14図	東面築地塀（2000年度・第 2 調査区）平面図・断面図	39
第15図	塔・金堂間参道平面図	41
第16図	中門・南門間参道平面図・断面図	42
第17図	寺域外西側の調査区（1984年度調査区）平面図	44
第18図	溝 1・区画溝 1 断面図	45

第19図	オガンジ池瓦窯跡（Ⅰ・Ⅱ号窯）平面図	47・48
第20図	オガンジ池瓦窯跡（Ⅰ・Ⅱ号窯）平面図・断面図	49・50
第21図	オガンジ池瓦窯跡（Ⅰ号窯）上部焚口・燃烧室平面図	51
第22図	オガンジ池瓦窯跡（Ⅱ号窯）壁面断面図	53
第23図	オガンジ池瓦窯跡（Ⅱ号窯）平面図・断面図	54
第24図	お亀石古墳現況測量図・調査区配置図	57
第25図	第1調査区平面図・断面図	59
第26図	第1調査区墓壙埋土・墳丘盛土土層断面図	60
第27図	第2調査区墓壙埋土・墳丘盛土土層断面図	61
第28図	第2調査区平面図・断面図	62
第29図	第3調査区平面図・断面図	63
第30図	第3調査区・第7調査区墳丘盛土・墓壙埋土土層断面図	64
第31図	第4調査区墳丘裾部盛土土層断面図	65
第32図	第4調査区・第5調査区平面図・断面図	67・68
第33図	第6調査区平面図・断面図	69
第34図	第7調査区墳丘裾部盛土土層断面図	70
第35図	第7調査区平面図・断面図	71
第36図	第8調査区平面図・断面図	73
第37図	第8調査区墳丘裾部盛土土層断面図	74
第38図	第9調査区平面図・断面図	75
第39図	埋葬施設平面図・断面図	77・78
第40図	埋葬施設略図	79
第41図	お亀石古墳石槨部 石栓	80
第42図	墳丘南西部川原石（閉塞石）群検出状況平面図	81
第43図	平行叩き	88
第44図	正格子叩き	91
第45図	斜格子叩き・平行線－斜線の組み合わせ文叩き・交差文叩き	95
第46図	重ね菱文叩き・麻様文叩き・格子－斜線の組み合わせ文叩き・縄目叩き	96
第47図	縄目叩き（2）	99
第48図	縄目叩き（3）	101
第49図	布の種類	104
第50図	軒丸瓦各部位の名称	118
第51図	丸瓦部凡例図	119
第52図	軒平瓦各部位の名称	121
第53図	平瓦部凡例図	122
第54図	軒丸瓦A群の丸瓦部接合位置	131
第55図	軒丸瓦B群の丸瓦部接合位置	133
第56図	軒丸瓦C群の丸瓦部接合位置	134
第57図	軒丸瓦D群の丸瓦部接合位置	135

第58図	軒丸瓦E群の丸瓦部接合位置	137
第59図	軒丸瓦F群の丸瓦部接合位置	139
第60図	軒丸瓦G群の丸瓦部接合位置	140
第61図	軒丸瓦H群の丸瓦部接合位置	142
第62図	軒丸瓦J群の丸瓦部接合位置	143
第63図	鴟尾	240
第64図	新堂廃寺伽藍建造変遷図	273・274
第65図	創建伽藍配置復元想定図	275
第66図	最終の伽藍配置想定図	278
第67図	お亀石古墳墳丘プラン復元図	281・282
第68図	お亀石古墳調査主軸断面図	285・286

付編挿図目次

第1図	お亀石古墳の石材の石種	336
第2図	お亀石古墳の石材採石推定地	337
写真1		338
写真2		339

第 I 章 遺跡の理解

第 1 節 位置と環境 (図版 1)

大阪平野の東南部に位置する富田林市は、東は金剛・葛城山系が南北に連なって奈良県と域を分かち、西は同じく南北に、しかし低く伸びる羽曳野丘陵で画される。嶽山から金胎寺山が、南の河内長野市域に続き、その背後に岩湧山をはじめとする和泉山脈を遠望する。北は、古河内潟へと向かう緩やかな傾斜地で羽曳野市域に接している。市の中央部を石川が北へと貫流し、石川谷と呼称される低地帯が、南西から北東に長くのびる市域主要部分を形成する。市域の西半部は石川の段丘が発達して背後で羽曳野丘陵に続き、東半部には石川の氾濫源が大きく広がっている。

新堂廃寺跡 (14) は石川の西岸に形成された中位段丘上に立地する。この中位段丘には羽曳野丘陵から派生した幾筋もの谷が存在し、その谷筋に分断されながらも、豊富な湧水を利用して古くから人々が生活し続けてきた。

新堂廃寺跡の所在する周辺でもっとも早い時期の人々の生活の痕跡を認めるのは、同じ中位段丘上にすぐ東接して大きく広がる中野遺跡 (13) においてである。後期旧石器時代に於てられる国府型ナイフ形石器が出土している (中辻・忍 1982)。また、その 1.3km ほど南に所在する谷川遺跡 (86) からは木葉形尖頭器が (西口 1995)、石川を挟んだ東岸の丘陵上に所在する彼方遺跡 (68) では国府型ナイフ形石器が出土している。このように富田林市域でも確実に後期旧石器時代に遡る人々の生活の営みの跡が認められるものの、「さまよえる子羊」的な石器の採集にとどまっておき、当時の人々の生活の実態は分かっていないのが現状である。

旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての知見も、後期旧石器時代のそれと変わらない。新堂廃寺跡をはじめとして、前述の中野遺跡、さらに中野遺跡の北側に大きく広がる喜志遺跡 (1)、喜志西遺跡 (2)、そして新堂廃寺跡から南西 1.6km ほどのところに所在する太郎池遺跡 (34) から有茎 (舌) 尖頭器が出土しているだけである。

縄文時代に入ると、前期の遺跡としては錦織遺跡 (44) を認める。北白川下層式を主とする縄文土器が採集されている。古くに紹介されたことから、学史的に著名な遺跡である (北野 1951; 渡辺 1971)。後期から晩期になると、前述の錦織遺跡の南西に隣接して所在する錦織南遺跡 (93) で縄文時代の河道跡が見つかり、そこから滋賀里Ⅱ式とⅢ式の土器が多量に出土している (山本 1981a; 中辻・田川・粟田 1993; 中辻・粟田 1994)。さらにこの縄文時代の晩期河道跡からは、滋賀里Ⅲ式の土器と一緒に大洞 C1 式の土器が確認され、富田林市域と他地域との交流関係を推測させるとともに、土器型式共存関係を考えるうえで貴重な資料を提供する。

弥生時代に入ると状況は変わり、石川西岸の中位段丘上に多くの遺跡が確認されるようになる。この時代のもっとも古い遺物が出土しているのは、市域の北部に広がる喜志遺跡においてである。前期 (第Ⅰ様式期) 中段階あるいは新段階に比定される壺が確認されている (粟田・田中 1997)。また、第Ⅱ様式期の土器もまとまって出土している。第Ⅲ様式期古段階以降には、住居址、方形周溝墓、集落を画する溝など、集落を構成する遺構の状況がかなり明瞭になる。さらに第Ⅲ様式期新段階に入ると、遺構や遺物の確認範囲が大きく広がり、出土遺物量も増え、集落の規模が拡大したこ

とを推測させる。第Ⅲ様式期古段階以降に出現した遺跡には、石川西岸の中位段丘上にある喜志遺跡のほかにも、そこから南西へ約0.3kmに喜志西遺跡、さらに南へ1.5kmに中野遺跡、そして南西へ2.6kmに甲田南遺跡(42)と存在する。これらの遺跡群については、比較的調査データが蓄積され、集落の構成、規模、変遷などがかなりの程度に推定され、それらの分析も活発になされている(小林 1983; 1994; 岩瀬・栗田 1994; 栗田 1996)。とりわけ喜志遺跡と中野遺跡については、サヌカイトの原産地である二上山に近いという地の利があったのであろうか、石器製作が盛んにおこなわれたことが早くから知られている。それに対して甲田南遺跡では、サヌカイト製の石器の出土が少ないことから、喜志遺跡や中野遺跡とは「場」の機能の違いがあったことが指摘されている。このように石川中流域西岸の河岸段丘上と同じ立地状況にありながらも、「場」の機能に若干の違いをもつ「集落」が存在した状況は、弥生時代後期になるとすべて廃絶してしまうのである。最近の調査では、喜志遺跡や中野遺跡でも後期の土器の出土が認められるので、今後の調査に注目する必要があるとはいえ、それら新出資料はすべて後期後半に比定でき、中期に盛行した集落とは断絶したものと考えるべきかもしれない。

弥生時代後期になると、遺跡の立地は石川東岸の丘陵上に展開するようになる。彼方遺跡、滝谷遺跡(71・72)、尾平遺跡(65)(小浜 1995)など富田林市域でも南東部に、遺跡が多く認められる。その立地からそれらの遺跡は、いわゆる高地性集落と分類されているものにあたる。最近の調査で、石川西岸にある羽曳野丘陵上の一古墳の下層から弥生時代後期に比定される土器の出土例が見られ始めている。今後は羽曳野丘陵上にも石川東岸の丘陵上に認められるような高地性集落の存在を想定しておかねばならないことを示唆している。

古墳時代前期の古墳としては、石川西岸では北から南に向かって鍋塚古墳(4)(井藤 1966)、真名井古墳(6)(北野 1964)、甘山古墳(梅原 1914; 北野 1985)がそれぞれ羽曳野丘陵東縁に点在する。一方東岸では、山中田1号墳(50)・2号墳(51)、板持丸山古墳(55)(北野 1985)、板持3号墳(63)(北野 1985)がやはり丘陵上に存在する。中期に入ると富田林市に北接する羽曳野市やさらに北側にある藤井寺市を中心地域にして、誉田御廟山古墳(応神天皇陵)を始めとする古市古墳群が展開するが、富田林市域ではわずかに川西古墳(43)、新家古墳(39)(北野 1985)、彼方丸山古墳(69)(北野 1985)が確認されているだけである。

古墳時代後期に入ると富田林市周辺では、太子町および河南町に一須賀古墳群や寛弘寺古墳群、羽曳野市では飛鳥千塚などの群集墳が出現し、富田林市域でも石川西岸の羽曳野丘陵上には平古墳群や宮神社裏山古墳群(5)を、東岸には板持古墳群(60)、西野々古墳群、田中古墳群および嶽山古墳群などの群集墳を認めることができる(北野 1985)。6世紀中葉以降には集落址も増加するが、新堂廃寺跡周辺では中野遺跡を特筆すべきであろう。このころになると、中野遺跡にも、弥生時代以来の集落域であった東高野街道沿いに加えて、さらに西側でも遺構・遺物の検出が増加し、新堂廃寺跡に接するまでに遺跡の範囲が広がる。このことはとりもなおさず、中野遺跡を残した人々が新堂廃寺の造営に主体的にかかわったのではないかと注目すべきことを示唆している。中野遺跡では6世紀後半の韓式系土器のほか、7世紀後半には統一新羅の土器類も出土しており、朝鮮半島の文物が6世紀後半以降、この地に多くもたらされていたことが明らかになっている。『日本書紀』敏達天皇12年条の日羅の記事を引くまでもなく、渡来人のかかわりの強さを示唆する遺物の出土が富田林市域で増加しているのである。中野遺跡以外では、石川西岸の中位段丘上には錦織遺跡が、

また東岸には別井遺跡（49）や岸之本遺跡など、韓式系土器を含む初期須恵器の出土する遺跡があり、そこには朝鮮半島からの渡来人が大きくかかわっていたことが示唆される。

このような背景のなかで新堂廃寺が創建される。寺院の創建が南河内地域でもっとも古い時期に比定されていることとともに、新堂廃寺が特筆されるのは、寺院とかかわりの深い古墳が北西約0.3kmの羽曳野丘陵上に存在するからでもある。お亀石古墳（16）と呼ばれている、家形石棺を内部構造にもつ横口式石槨墳である。お亀石古墳が新堂廃寺とかかわりが深いと認定されたのは、新堂廃寺所用瓦と同じものが横口式石槨の外護施設に使用されていたことによる（藤沢 1961b・粟田 2002）。さらに注目すべきはこのお亀石古墳のある羽曳野丘陵南東裾には御観寺池という谷を堰き止めて作られた灌漑用水池があり、この堤上にオガンジ池瓦窯跡（15）が存在することである。新堂廃寺の屋瓦を焼くとともに、お亀石古墳の外護施設の瓦を焼いていたことも判明している（粟田 2002）。寺院とその屋瓦の生産の場、さらには寺院造営者の墓域が近接して存在した。それは、全国的にも希有な例であることは言を待つまでもないであろう。

我が国に仏教が伝えられ、初めて飛鳥寺が建立されてから遅れることわずかののちに、富田林市域にも寺院が造営されたのである。このことは6世紀後半からすでに朝鮮半島からの渡来人がこの地で活躍していたからこそ可能であったとも推測できる。新堂廃寺跡に知られる最古の瓦の一部を奈良方面からの搬入品とする考え（例えば井西ほか2001：266頁）は、具体的な証拠を伴った仮説提示ではないので現状では議論のしようがないが、オガンジ池瓦窯跡からの出土瓦を検討して初期の段階から瓦生産体制も同時にこの地に整えられていたと仮定するならば、飛鳥期の特異な寺院造営主体が今日の富田林市域内に存在していたということになり、それは特筆すべきことである。朝鮮半島からの渡来人の関与を想定せざるをえないという、特別な事情を窺うことができるからである。

第2節 調査に至る経過（第1図）

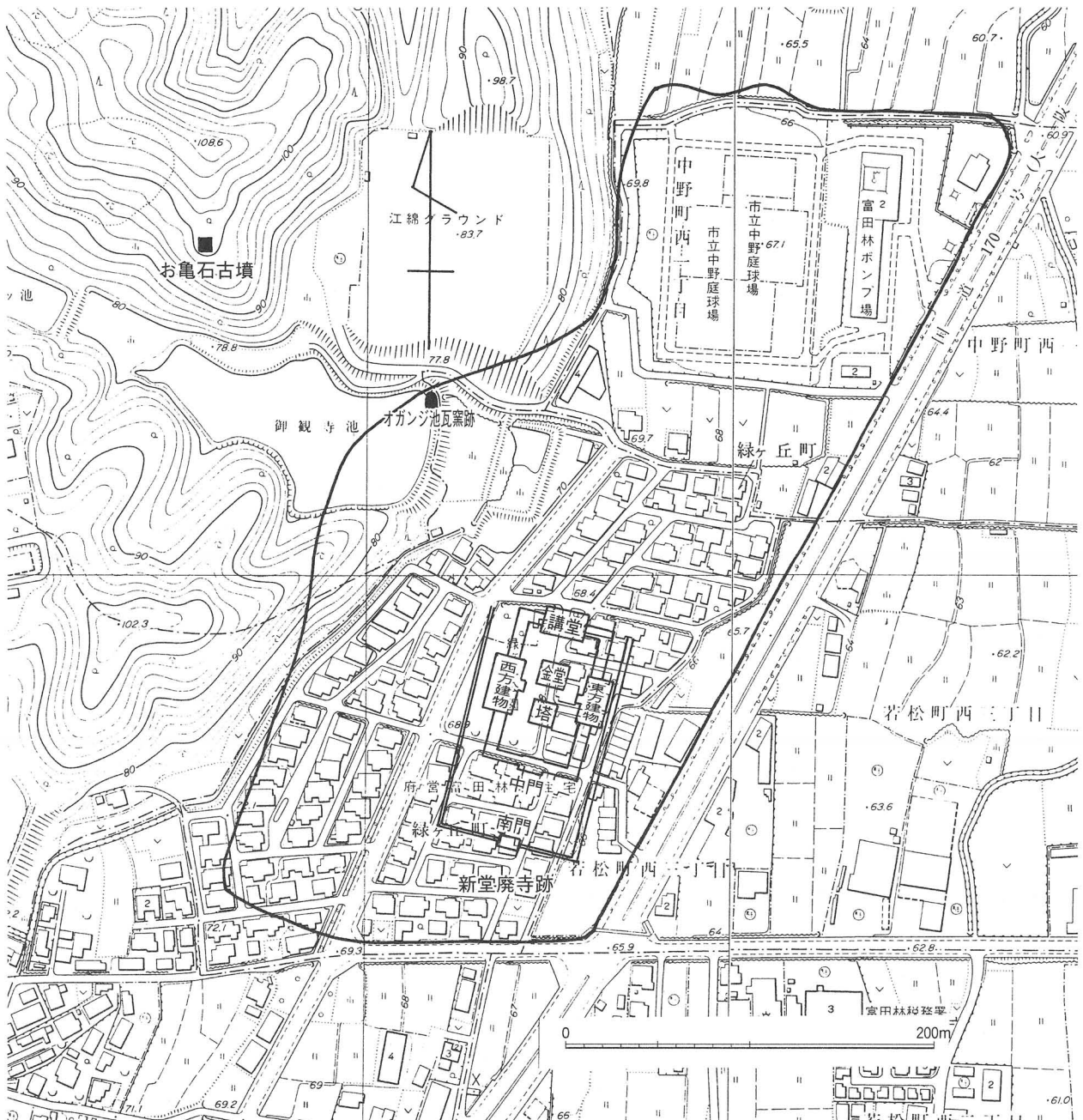
第1項 新堂廃寺跡（写真1～3, 14）

富田林市新堂の、とりわけ小字「堂ノ前」のあたり（現在の富田林市緑ヶ丘町）は、大正の初めころから古瓦の散布することで知られていた。1936年に石田茂作氏によって紹介されたことで広くその存在が認められるようになった（石田 1936）。そののち、藤澤一夫氏によって、出土瓦から南河内最古の寺院として位置づけられた（藤澤 1941）。1959年、新堂廃寺の広がるあたりに府営住宅建設計画がもちあがり、飛鳥時代の寺院跡を確認するために北野耕平氏を中心とする大阪大学国史学研究室の人々によって予備調査がおこなわれた（藤・北野 1961）。その結果、建設予定地の西側に瓦積基壇をもつ建物のあることと、広範囲に飛鳥時代から奈良時代に年代づけられる瓦が厚く堆積していることが判明し、府営住宅建設予定地の一部が広場として保存されることになった。

翌1960年、遺跡の重要性を認めた大阪府教育委員会は、広場として残された3,500㎡を発掘調査した。その結果、南から北に向かって三棟の建物が一直線上に並び、西側に一棟の建物が配置されることが確認された。この一直線上に並ぶ三棟の建物は南から南方建物、中央建物、北方建物と呼称されたが、その平面プランからそれぞれ塔、金堂、講堂としての機能が与えられた。しかし、西側で確認された西方建物と呼称された1棟の建物についてはその性格付けに苦慮し、複数の案が提示されるとともに、南向きの伽藍であったのか、東向きの伽藍であったのか、課題として残されたままになった。また、検出された建物がすべて白鳳期以降に再建された建物であったことから、瓦

から予測された飛鳥期の伽藍はすでに消滅してしまっていて残っていないと結論づけられた（浅野・坪井・藤沢 1961）。つまり、新堂廃寺の建てられた場所は北が高く、南が低い斜面地であるということと、南側の低いところに飛鳥期の瓦の堆積を多く認めることを併わせ考えて、飛鳥期には北側に伽藍が配置されていたものを、白鳳期に寺院を再建するときに南側を埋め立て、平坦地に整地し直して寺院が再建されたと結論づけられたのであった。と同時に、予備調査の結果として保存のために広場として残された場所は、新堂廃寺跡にとっては、実はその西半部分に過ぎないことが明らかになるのであった。

1992年、府営住宅の老朽化に伴って、住宅の建て替え計画がおこり、新堂廃寺の寺域の確定と保



第1図 新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳位置図

存区域の見直しをはかるための試掘調査が、大阪府教育委員会によっておこなわれ始めた。保存区域はとりあえず東西100m、南北200mに設定されていたが(井西 1996)、この試掘調査の結果、南部地域の調査が不十分であると分かり、保存範囲はあくまでも暫定的なものとされ、最終結論はそののちの調査に委ねられることになった。

1995年、第一期府営住宅建て替え工事に伴い、大阪府教育委員会によって推定寺域範囲に隣接する北東部約5,400㎡が調査された。その結果、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群が検出され、再建後の新堂廃寺を経営・維持した人々の居住域と想定された(井西 1996, 1997)。

1997年、富田林市教育委員会は、新堂廃寺跡を始めとして、寺院の瓦を焼成していたオガンジ池瓦窯、壇越の墓と想定されているお亀石古墳が近接して存在する地域を、全国的にも希有な歴史ゾーンと認識し、国の史跡指定を受けるべく、その範囲を確定する5ヶ年の調査計画を策定した。

その年度内に新堂廃寺等調査指導委員会が組織され、新堂廃寺に関する現地調査を4年間かけておこない、残りの1年間はお亀石古墳を調査することが決められた。

第2項 オガンジ池瓦窯跡(写真27)

オガンジ池瓦窯跡については、1969年11月に『富田林市史』執筆のために、新堂廃寺跡の北西に接する御観寺池畔を踏査していた北野耕平氏によって、池の北東隅の堤防中に多くの瓦片が包含されているのが発見され、その存在が初めて注目された。同年12月末から翌1970年2月にかけて北野氏の指導のもとに富田林市教育委員会によって発掘調査がおこなわれた。その結果、半地下式の平窯が1基所在することが確認され、天平期の新堂廃寺に葺かれていた屋瓦を焼成していた窯であることが明らかになった(北野 1985)。

1985年、御観寺池の改修工事がおこなわれることになり、1969年当時、池のコンクリート護岸壁に阻まれて調査できなかった焚口から南側を調査することになり、灰原、作業場など窯に付属されると想定される施設の調査をおこなった。ところが、1969年に発見されていた窯の南側にさらに古い時期の窯がもう1基存在することが判明した。丘陵の地山を掘り込んで構築した有段の登窯で、飛鳥期から白鳳期の瓦が多量に出土したことで、オガンジ池瓦窯が新堂廃寺の飛鳥期創建時から操業されていたことが判明した。

第3項 お亀石古墳

「お亀石古墳」は、現在まで飛鳥時代の墳墓を考察するうえで重要な資料として取り扱われてきた。その理由としては、お亀石古墳自体の重要性はもちろんのこと、ほかの飛鳥時代の多くの古墳が現在までに盗掘・破壊を受けて、その築造当時の姿を良好には留めていないこと、また、現存する当該期の古墳と考えられるもののなかで、考古学的な考察の基礎資料となりうるものの少なからずが、陵墓もしくは陵墓参考地として治定を受けているため、考古学的な調査がおこなわれていないことに起因するものと考えられる。

本項では、そのお亀石古墳が考古学の舞台上にどのように登場し、どのような調査を経て、どのように検討を加えられてきたかという概要を紹介する。

お亀石古墳の過去の調査

お亀石古墳の文献としての初めての登場は、大正2（1913）年にまで遡る。この年、河内一帯を精力的に踏査していた梅原末治氏によって、雑誌『歴史地理』上に、「～此宮村の南々西約七町の山中に一大石槨あり、俗にお龜石と稱す、形式河内式の特徴を有するものにして其の槨の奥に棺を造り付けあるは飛鳥の観音塚、同千塚中の一切石石槨及春日の切石石槨に似たるも、奥にある石槨そのものは之と異なり、彼の輕墓淺野氏所有の石槨徳樂山石槨、山田磨の墳等に似て、正に兩者の中間に位せり、たゞ凡てと異なる點は棺に把手を有する事なりとす、其他此種の石槨の横口に入るべき蓋の現存せる事又珍とすべし、～」と報告されている（梅原 1913）^(註1)。この直後、同年8月に梅原氏は高橋健自氏、谷井濟一氏らを伴い再度お亀石古墳を訪れている。高橋氏はその際の調査をもとに「河内に於ける一種の古墳」という論考をまとめ、現在で言うところの「横口式石槨」の検討をおこなっている（高橋 1913）^(註3)。この論考は、横口式石槨の形態的な特徴の解説とともに、その文中において「河内に於けるこの特殊なる古墳は上古の末から奈良朝にかゝるころにできたものと推定される」と述べている。現在においても的確な時期の推定をおこなっており、まさに横口式石槨研究の嚆矢となるものと言える。

こののち、昭和9（1934）年には『大阪府史跡天然記念物調査報告第5輯』が出版され、このなかでお亀石古墳の写真とともに埋葬施設の簡略な実測図が掲載されているが（谷井ほか1934）、これは大阪府が新たに調査をおこなったものではなく、大正2年8月に梅原、高橋、谷井の3氏らによって調査された資料を掲載したものであることが記されている。

その後のお亀石古墳に関する調査・研究は、第2次世界大戦後まで待たなくてはならない。昭和35（1960）年には、大阪府教育委員会によってお亀石古墳の発掘調査がおこなわれている（藤沢 1961b）^(註4)。この調査は、古墳の南東に位置する新堂廢寺跡の調査の終了ののちにおこなわれたものである。調査は埋葬施設を中心におこなわれたようであるが、この際に石槨として用いられている刳拔式家形石槨の横口部側を除く周囲3辺に平瓦を積み上げて護壁とした施設が確認された。この平瓦の造瓦技法上の特徴が新堂廢寺跡から出土する平瓦と類似することから、新堂廢寺を創建した檀越の墓という認識を生むに至ったのである。^(註5)^(註6)^(註7)

お亀石古墳に関する研究

ここではお亀石古墳に対してどのような考古学的な検討がおこなわれてきたか、その概略を記す。

(1) 横口式石槨墳のなかでの位置づけ

戦後、横口式石槨に関して初めて体系的な検討をおこなったのは堀田啓一氏である。堀田氏はその論考（堀田 1965）のなかで横口式石槨を

第Ⅰ形式…石室を内部構造の主体にし、その石室の内部に横口式石槨が安置されているもの

第Ⅱ形式…横口式石槨を内部構造の主体にして、簡単な羨道を作りつけたもの

第Ⅲ形式…横口式石槨を内部構造の主体となし、石槨以外には何らほかの施設が見られないもの
の3形式に大別し、さらに第Ⅱ形式を

ⅡA…石槨そのものの本来的性質をもつ「石櫃的アイデア」のものに簡単な羨道があるもの

ⅡB…「石室的アイデア」の性質のものに簡単な羨道があるもの

に細分し、お亀石古墳は、この第ⅡA形式に属するものとされている。

さらに堀田氏は河内地域には各形式が存在するが、第ⅡA形式が圧倒的に多く、第Ⅲ形式もほかの地域より多いことを指摘したうえで、「私見」としながらもお亀石古墳を起点とする河内地域での発展系譜を示している。

このうち、昭和47（1972）年に奈良県橿原市高松塚古墳の調査がおこなわれたことを契機とし、飛鳥時代の古墳（終末期古墳）の再検討がおこなわれるなかで、横口式石槨墳の検討も活発化する。主な論文としては、昭和47（1972）年には森浩一氏が（森 1972）、昭和51（1976）年には吉岡哲氏（吉岡 1976）、猪熊兼勝氏が（猪熊 1976）、昭和53（1978）年には山本彰氏が（山本 1978）相次いで横口式石槨に関する検討をおこなっている。

このなかでも猪熊論文は、石棺式石室をA 観音塚型石室、B 鬼厠俎型石室、C 高松塚型石室に分類したうえで、各型式の変遷を述べるに当たり、いずれもお亀石古墳を「プロトタイプ」として位置づけている。

上記のような「お亀石古墳」＝「横口式石槨の初出形態」という論考に対し、北垣聰一郎氏は埋葬施設の構造的な検討から、お亀石古墳は大阪府太子町に所在する松井塚古墳（上野 1978）に後出する形態と見なしている（北垣 1985）。

また、和田晴吾氏は畿内で確認されている横口式石槨を10型式に分類し、それらをA～Eの5系統（註8）にまとめることで横口式石槨の成立・展開過程を分析している（和田 1989）。そのなかではお亀石古墳はC系統の「お亀石型」に属するが、論文の概略を記すと、畿内の横口式石槨は畿内外部から伝来したA系統（槨部の前に前室が付き、その前に羨道が付く形に始まるもの）の影響下にB系統（石槨化しつつある小型で両袖型の横穴式石室の奥壁に槨部が付設される形に始まるもの）・C系統（横口を設けた家形石棺を槨部とし、石、瓦、埴でこれを「室」状に覆い、その前に羨道が付く形に始まるもの）が出現し、そのうち新たにD系統（ほかの系統とは直接結びつかず、槨部の前に羨道が付く形に始まるもの）が出現したと考察している。この和田氏の論考は、横口式石槨の分類基準にいまひとつ明確さを欠いてきた感のある先行研究に対し、形態のみならず材質、技術、分布状況を総合的に検討したものであるとして、新たな視点を提示したものであった。

近年では広瀬和雄氏により横口式石槨の分類・編年が試みられている（広瀬 1995）。広瀬氏は、横口式石槨を玄室の形態からA～Fの6型式と1 亜型式に分類し、側壁・奥壁などの石材の積みかた、羨道の形態や有無、石材の切石化、漆喰の使用や漆棺の採用などを指標に6期に編年をおこなっている。この中でお亀石古墳は、「～刳抜き式や組合せ式の「家形石棺」（箱形石棺）を玄室にする～」B型とされ、「～石材の加工度に高低はみられるものの切石が使用されだす。ただ羨道の切石化は一部にとどまって、まだ自然石の使用頻度が高い。漆喰の使用がはじまり、板石閉塞もみられるようになる～」3期（註9）に位置づけられている（広瀬 1995：37頁）。氏はB型を1・2期に先行して出現するA型（註10）の影響下で創出されたと考察しているのであるが、1期に出現するA型横口式石槨を南河内の石川流域に高句麗系の渡来人がもたらしたと推定した上で、大型横穴式石室を持つ古墳を頂点とした被葬者の階層的な位置づけを、また3期においても同様に切石をもちいた大型横穴式石室を頂点として、その下位にB・C型横口式石槨を、さらにその下位にA・D型横口式石室を位置づけている。また、3期に出現するB・C・D型の被葬者としては、「～高句麗系の渡来人と政治関係、もしくは婚姻関係というかたちでの関係をもつことによって、旧来の横穴式石室を変質させたかな

り上位の階層～」(広瀬 1995: 57頁)と想定している。広瀬氏は、横口式石槨の分類・編年を、7世紀(律令国家)の社会的な階級関係を解明する基礎的研究としておこなっている部分にその特徴がみられる。

このように、横口式石槨はその出現から変遷過程においてさまざまな論が展開されており、そのなかでのお亀石古墳の位置づけも一定してはいない。上記のものはいずれも埋葬施設の構造的な検討を主とした考察であるが、実年代ではお亀石古墳はどのように位置づけられていたのであろうか。

(2) お亀石古墳の実年代

これまでお亀石古墳の実年代に関して述べられる際には、主に石槨周囲から検出された平瓦と石槨として用いられている家形石棺を根拠とした年代が与えられてきた。

平瓦に関しては、その年代に関する初出は藤澤一夫氏による「飛鳥時代完形平瓦」という記述である。^(註11)藤澤氏は同書のなかで遺物に関する時期区分をおこなっているが、それによると第1期(飛鳥時代)、第2期(奈良前期(白鳳))、第3期(奈良前期末葉から奈良後期初葉)、第4期(奈良後期(天平))となっており、お亀石古墳出土の平瓦を白鳳期以前に位置づけていたことは明確である。しかしながら、昭和35(1960年)の調査はその平瓦を積み上げた護壁の上面を検出したに過ぎなかったようであり、現在出土遺物の平瓦は大阪府教育委員会の所蔵している1個体に過ぎない。新堂廃寺跡出土の平瓦の位置づけが現在まで不明確なままにお亀石古墳の編年的な位置づけが早められてきた背景には、大阪府教育委員会による発掘調査の翌年に出版された『世界考古学大系第4巻』における坪井清足氏の記述によるところが大きいようである(坪井 1961)。坪井氏は、お亀石古墳の石棺を「～石棺の形式から天王山古墳の石棺と艸墓古墳の石棺の中間に位置づけられ、縄掛突起に蓮華文のきざまれていることで著名な、奈良県御所市葛町の水泥石古墳の石棺が、大阪府富田林市新堂廃寺の創建と同時期に造営されたお亀石古墳の石棺とほぼ同じ形態をもつ～」と位置づけ、その実年代を紀元610年代と比定している^(註12)(坪井 1961: 90頁)。

この両者の記述が根拠となり、多くの論文等でお亀石古墳の実年代が「飛鳥時代、7世紀の初頭～前半」などの取り扱いを受けてきたようである。

これに対し、北野耕平氏はお亀石古墳出土の平瓦を「～新堂廃寺の飛鳥期屋瓦と広い条件では同一範疇に属するといえても、厚手の平瓦として新しい時期に属することがいえる。」とし、その実年代を「～お亀石古墳はやや遅れて7世紀中葉すなわち640年ごろの時期に築造されたものと推定する。」(北野 1985: 451頁)と、その実年代をやや引き下げて推定している。

また、林部均氏はお亀石古墳と松井塚古墳の構造上の類似を指摘し、「～お亀石古墳の次の段階に位置づけうる松井塚古墳が飛鳥Ⅲの時期で確定的であることから、お亀石古墳だけを七世紀中ごろより古く遡らせて、型式学的に孤立させることには、無理があろう。」(林部 1998: 938頁)と指摘している。

これらの論考に対し、お亀石古墳の護壁に用いられた平瓦の詳細な検討のもとに古墳の築造年代をもとめたものに、栗田薫氏の論考がある(栗田 2002)。栗田氏は、「お亀石古墳の横口式石槨の外護施設として積み上げられた瓦が、すべて同じタイプの平瓦で占められているのかどうかの問題を残すが～」(栗田 2002: 17頁)と述べた上で、現在大阪府教育委員会が保管している1枚の平瓦の観察から、その諸属性の多くが新堂廃寺の飛鳥時代創建期中門の所用平瓦と一致することを明らかに

している。この事実を根拠に、同じ新堂廃寺創建期中門の所用瓦の中には法隆寺若草伽藍金堂の創建瓦とされる素弁8葉蓮華文軒丸瓦の同紋瓦が含まれることから、お亀石古墳に積まれた平瓦の製作年代に622年に近い年代を与えている。この栗田氏の論考は、お亀石古墳の出土遺物の詳細な検討に始まり、年代が推定できる他遺跡出土の遺物との比較から古墳の築造年代を提示するという考古学の基本的な資料操作を用いたものであり、より具体的な年代観を与えるものとなっている。

以上のように見ると、お亀石古墳は横口式石槨墳として飛鳥時代の代表的な古墳として取り上げられるその頻度に対し、その形式的分類・系譜・編年のなかでの位置づけ、また年代的な位置づけ等が非常に曖昧であったことが看取できる^(註13)。

(3) 平成13年度のお亀石古墳の調査目的

上述したように埋葬施設に関しては昭和35(1960)年に調査がおこなわれているが、墳丘に関しては現在まで発掘調査がおこなわれることはなく、現況地形から直径約15m、高さ約3mの円墳と推定されてきた(北野1985:444頁)。今回の調査は、国の史跡指定を受けることを目的としたものであるため、その不明確であった墳丘規模、墳形を確認するための範囲確認調査をおこなうこととなった。

第I章の【註】

- 1) この雑誌の発行日は大正2(1913)年11月1日となっているが、梅原氏の文章末には(大正二年七月廿六日稿)と記されている。また(九月八日再記)として、「此稿を草した後、高橋、谷井両先生初め諸先輩の一行に随従して、南河内地方の諸遺跡を踏査せり、～」(梅原1913:55頁下段17行~19行)と記している。
- 2) 現在まで「横口式石槨」に対する明確な分類基準は提示されていない。また用語に関しても、近年には「横口式石槨」が主流を占めているが、「横口式石棺」(堀田1965)、「石棺式石室」(猪熊1976)などの用語も存在する。本稿では「横口式石槨」という用語を用いるが、これは明確な分類を意識してのものではないことを了承願いたい。
- 3) この論考の契機に関しては、高橋氏が梅原氏とともにおこなった調査だけではなく、喜田貞吉氏による南河内の横口式石槨の紹介などにより(喜田1912)、考古学界に特異な形態の埋葬施設を有する古墳への関心が高まっていたことを受けてのものと考えられる。
- 4) 昭和35(1960)年のお亀石古墳の発掘調査に関しては、その単体としては正式な報告はされておらず、大阪府による新堂廃寺跡の報告書にわずかに触れられているのみである(藤沢1961b:30頁上段13行~下段11行)。
- 5) 本報告書「第I章第2節 第1項新堂廃寺跡」参照。
- 6) この瓦積みの護壁は、「最奥に安置されている横口式石棺の周囲に、寺跡の屋瓦と共通する飛鳥時代完形平瓦を積上げて槨室壁面を構成していたものの基部を検出した」と述べられており(藤沢1961b:30頁上段19行~21行)、『富田林市史』では「瓦積は石棺を囲んで東・北・西の各側にあり、全体として南側を除きコの字状をなして、他の古墳にはまだ類例の知られていない珍しい遺構であった」と記述されている(北野1985:447頁5行~6行)。しかし、当時新堂廃寺跡の発掘調査をおこなっていた北野耕平氏の記憶によると、調査では瓦積は石槨の東西側長壁、北側短壁の「コ」の字状の範囲すべてを確認したわけではなく、東側、北側に「L」字状に廻らされていたことを確認したに過ぎないようである。
- 7) この「お亀石古墳」=「新堂廃寺の檀越の墓」という解釈は、昭和35年の調査の唯一の公式な記録である藤澤氏の記述に端を発する。藤澤氏はその文章中に調査の経緯を、「この古墳と廃寺とは位置的また年代的に見ても、両者の親密な関係は考えられるところであって～」(藤沢1961b:30頁上段15行~17行)と記したうえで、家形石棺の周囲に検出された平瓦を「寺跡の屋瓦と共通する飛鳥時代完形平瓦～」(同頁上段18~19行)

と位置づけ、そのあとに「この檀越の墳墓をとおして～」(同頁 下段 8 行)と自説を展開している。

- 8) E 系統(横穴式石室が石槨化したもの)に関しては詳細には触れられていない。
- 9) 広瀬氏は、横穴式石槨墳から出土した須恵器にもとづいて各期の年代を付与しており、3 期の年代を飛鳥期、実年代で 640 年～660 年としている(広瀬 1995: 45 頁 14 行～48 頁 4 行)。
- 10) A 型は、「～奥壁・両側壁・天井石・床(底)石の玄室各部が別個の石材で構成される。」ものとされ、1 期は「～玄室・羨道ともに数枚の自然石を 2～3 段にわたって積む。」時期、2 期は「～玄室、羨道ともに自然石で構成されるが、玄室は 2～3 石の 1 段積みになる。しかし、羨道は 2～3 段積みのままである。玄室に床石を敷くようになったが、漆喰の使用はまだみられない。」時期としている(広瀬 1995 37 頁)。
- 11) 前掲註 7 の文献参照。
- 12) この実年代に関する根拠を、坪井氏は 2 側面から導いている。1 つは、巨石古墳の第 I 期を奈良県石舞台古墳を標識とする時期とし、その石室の構築技術を飛鳥寺の造営にあたった石工に求め、その年代を 6 世紀末、7 世紀初頭に求めている。さらに玄室の高さと羨道の高さの比率から奈良県天王山古墳を同じ第 I 期の古墳とし、それに小林行雄氏による家形石棺の形式的な変遷を導入し、天王山→(水泥・お亀石)→艸墓→西宮への変遷を導き出している(坪井 1961: 13 頁 上段 5 行～7 行)。
しかしながら、この論拠ではお亀石古墳の上限年代の一端は示せるものの、実年代までは示せないはずである。したがって、この「610 年代」という根拠は、主に「新堂廃寺の創建と同時期に造営されたお亀石古墳」という部分に求められるようである。
坪井氏も藤澤氏とともに『新堂廃寺・烏舎寺跡の調査』(浅野・坪井・藤沢 1961)に「2 予備調査・調査経過」、「3 遺構」の部分を執筆しているが、藤澤氏が同書のなかでお亀石古墳出土の平瓦を「飛鳥時代」と述べるに止まっているのに対し、同年に刊行された『世界考古学大系第 4 巻』では坪井氏はさらに年代を限定して「610 年代」と見なしていることが分かるが、このことに関する根拠の詳細は不明と言わざるをえない。
- 13) お亀石古墳に対する各研究者間での見解の相違は、平成 6 年 11 月 23 日に開催された大阪府羽曳野市でのシンポジウム、「第 9 回はびきの歴史シンポジウム 横穴式石槨の謎ー河内飛鳥の終末期古墳ー」での討論にも表出している(白石ほか 1998)。

第Ⅱ章 遺構の発掘

第1節 新堂廃寺跡

新堂廃寺跡の調査はすでに述べたとおり、1959年の大阪大学による予備調査にはじまり、1960年の大阪府教育委員会による本格的な伽藍の調査、1992年度からの大阪府教育委員会による試掘調査、あるいはそののちの府営住宅建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査など、本市以外の機関による調査でも多くの成果が蓄積されてきている。そのなかには1998年度の大阪府教育委員会による南門の調査など、新堂廃寺にとっては伽藍配置にかかわる重要な調査成果も含まれている。それらの本市以外の機関による成果は、新堂廃寺の全体像をみるにはきわめて重要な成果ではあるが、それらについてはすでに報告書が刊行されている（藤・北野 1961；浅野・坪井・藤沢 1961；井西 1996；1997；小浜ほか 1999；井西ほか 2001）。ここでは、本市教育委員会が1997年度から2000年度の計4ヶ年にわたって実施した新堂廃寺の伽藍中心域の調査成果を報告する。なお、他機関の調査成果に関しては、記述の関係から必要とするもののみを最低限に含めることにする。本市教育委員会は、講堂を除く主要伽藍を新たに調査あるいは再調査した。おのおのの伽藍ごとの成果を要約するが、既往の調査成果の検討を経て、わたしたちが新たに調査を加えるべきであると考えた理由を述べ、そして1997年度から2000年度の調査成果を具体的に詳述していく。

第1項 調査区の設定（第2図）

4年間にわたる調査区は第2図に示すとおりである。

1997年度は富田林市緑ヶ丘町1604-1の約50m²を調査対象とした。調査区をA地区からF地区の6つに分割した。ただしE地区については隣接するF地区とB地区の調査で、調査区全体を近世の土壌が占めることが分かったのであえて発掘をしなかった。

1998年度は富田林市緑ヶ丘町1604-1の約85m²を調査対象とした。調査区の中心に伽藍の中軸線が通るように調査区を設定し、中軸線を中央に挟んで3分割し、中央の調査区をA調査区、西側をB調査区、東側をC調査区として調査をおこなった。

1999年度は富田林市緑ヶ丘町1604-1の約60m²を調査対象にした。1997年度の調査の補足をおこなったため、1997年度の調査区設定を踏襲し、そのうちD地区とF地区を再度調査対象にし、それより北側に新たに調査区を設定し、南から北に向かってG地区、H地区、I地区とした。

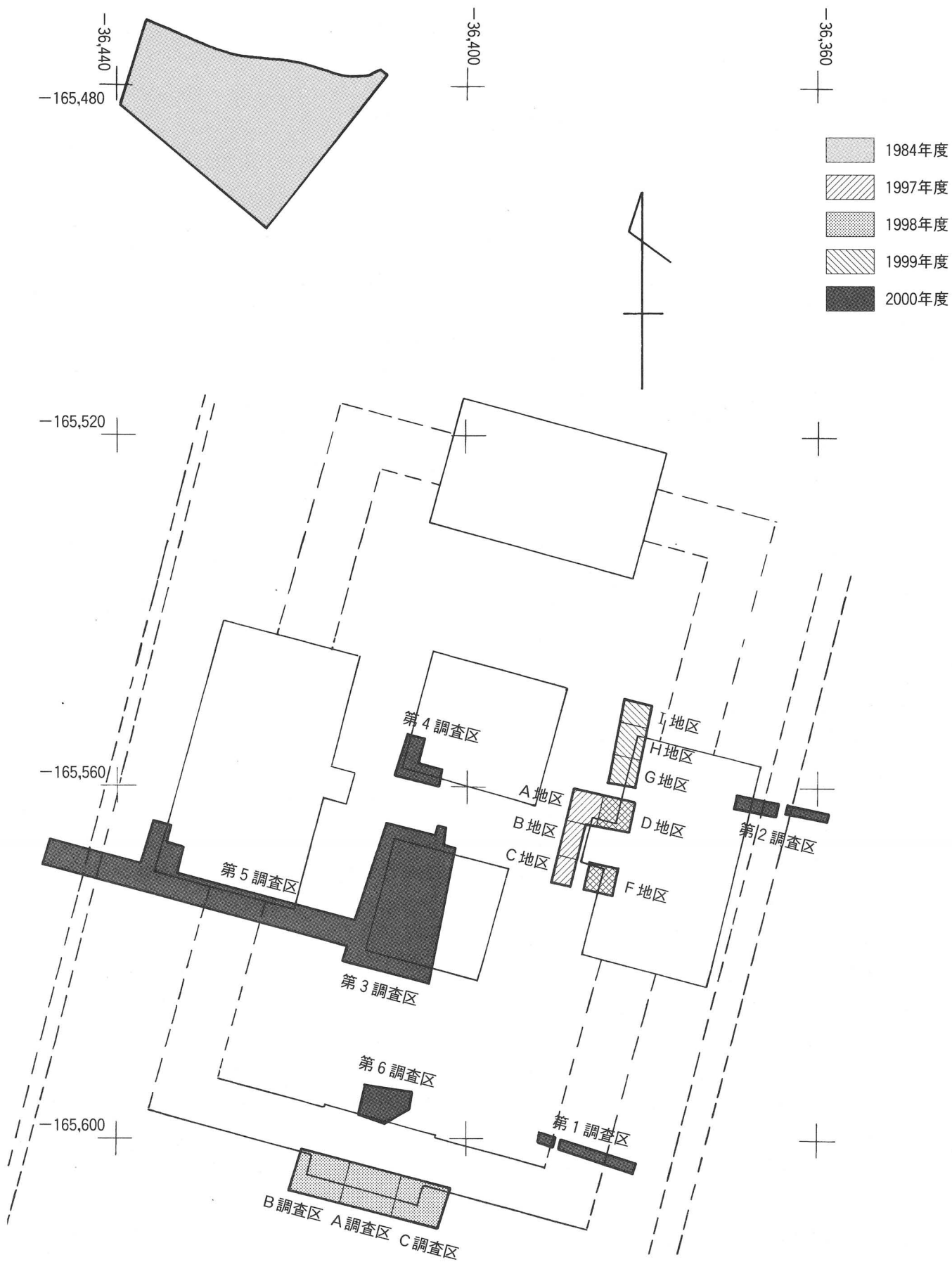
2000年度は富田林市緑ヶ丘町1604-1の約343m²を調査対象にした。調査区は、新堂廃寺跡の主要伽藍のある場所として保存されてきた広場に4ヶ所（第3調査区～第6調査区）、その北東部に1ヶ所（第2調査区）、さらにその南東部に1ヶ所（第1調査区）の計6ヶ所を設定した。

なお、1984年度に調査した寺域外西側の調査区についてもその位置を示しておく。

第2項 伽藍中心域の調査

1 塔

創建は飛鳥期で、一辺13.5mの正方形の基壇をもつ。中央に平面五角形の地下式あるいは半地下



第2図 新堂廃寺跡調査区設定図

式の心礎石を、その四方に2.1m間隔で四天柱を配していたと想定できる。側柱の間隔も四天柱と等間隔であると考え、側柱中心から基壇の外縁まで約3.6mあり、初層の一辺は約6.3mと推測できる。心礎石上面に約0.81mの円形の柱座が彫り込まれていたことから、直径が約0.8mの心柱が立てられ、高さ30m程度の五重塔が建てられていたと推測できる。基壇の外装は地覆に玉石が置かれた瓦積基壇で、北側中央には階段が設けられていた。

飛鳥期創建時の塔所用瓦には、軒丸瓦A－玉縁I2Za群の軒丸瓦、玉縁I2Za群の丸瓦、および平瓦II3Za群の平瓦が使用されている。

基壇の南部域約4分の1が崩れたために白鳳期に再建されるが、崩れていない北側はそのまま再利用し、周辺も含めて整地し直し、基壇を修復したと推測できる。再建塔は、創建時と規模、基壇の外装方法などが変えられることなく建て替えられている。

再建後の塔所用瓦のうち垂木先瓦については、垂木先瓦U群とするものである。

既往の調査成果と新たな調査の目的

1960年の大阪府教育委員会の調査で、一辺13.35mの正方形の平面プランをもつ基壇の遺構（南方建物）が検出された。ただ発掘された部分は想定されることになった建物の西半部分に足らず、中央部にメスを入れないうまになつたので心礎の検出はなかつたものの、平面プランが正方形であることに注目して、《塔基壇》と認定された（浅野・坪井・藤沢1961）。この指摘を重視して、未発見の塔心礎を発見するべく、本市教育委員会は2000年度にその部分に第3調査区を設定した。この調査区は、1960年の大阪府教育委員会の調査区である約120㎡に、未調査部分であった中心部を約36.6㎡追加したものである。塔心礎の有無を確認することを主目的にしたが、さらに、飛鳥期創建時の塔跡が残されていないかどうかを確認することも目的としていた。1960年の調査時の見解では、「心礎あるいはその据付痕跡の有無を綿密に探査したが全く見出すことが出来なかつた」（浅野・坪井・藤沢1961：7頁）と報告されるとともに、検出された南方建物が「奈良前期を下らない頃に再建されたもの」（同書：9頁）、すなわち、北が高く、南に低い傾斜地の南側を埋め立てて整地し、平坦地を形成したうえで白鳳期以降に建てられたものであったことと、さらにその南側の埋め立てて整地した土のなかから飛鳥期の瓦が多量に出土したことを併わせ考えて、「この伽藍は飛鳥時代に埋立地でない北方の地山部分の上に創建されたと考える」（同書：12頁）と結論づけられていたのである。つまり、南方建物はもともと北側に創建された伽藍が、再建時に南へ移動して建て直された想定されたのである。果たして報告されたように、塔心礎の痕跡すらないのか、また、創建時に北にあった伽藍を、そののち南へ移して再建されたという「伽藍移動説」が成立するのかどうかということ、さらに、飛鳥期創建の遺構がまったく残っていないのかどうかという問題点の解明を重要課題として取り上げたのである。

2000年度の調査では、伽藍中央と考えられる場所も追加し、さらに基壇の一部を断ち割り、飛鳥期の遺構の有無も併わせて確認する調査をおこなった（栗田2001）。

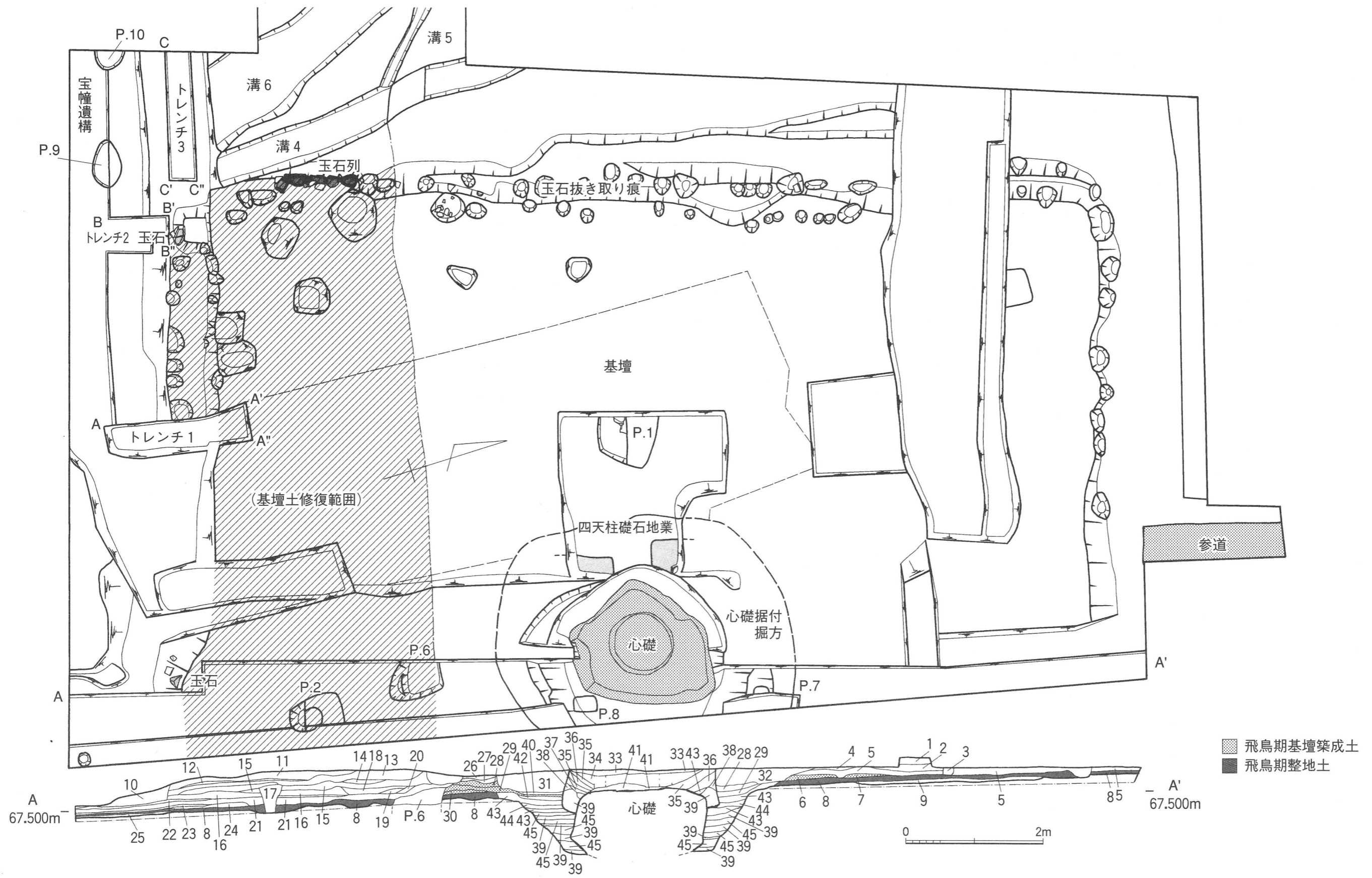
(1) 基壇（第3～5図 写真5～9）

1960年の大阪府教育委員会の調査で検出された南方建物を再発掘し、再建された基壇を確認したのち、調査区の東側の未調査部分を発掘して建物基壇中央部の上面を検出した。1960年の調査で検

出された基壇の西辺南部の玉石列と、南辺の玉石に加えて、東側拡張調査区（基壇中央部）の南辺でも玉石1個を追加検出するとともに、玉石の抜き取り痕跡を確認して、基壇の南辺のラインの西半部を確定させた。なお、西辺の玉石列はさらに北側にも延び、基壇の西辺に沿って玉石の抜き取り痕跡が検出された。また抜き取り痕跡は北辺でも東西に並んで検出できたことから、一辺13.5mの規模の基壇であることを確認した。さらに1960年の調査で検出された南辺の玉石の下に重弧文軒平瓦（軒平瓦AA1～AA4群とするもののどれかにあたる）が1点（写真9上）、西辺南部の玉石の下を含めた周囲に、白鳳期でも「山田寺式」期に比定する平瓦II0Za[Ga]群、および平瓦II0Za<i>i</i>群とする平瓦が置かれていたこと（写真5下）、さらに残存基壇の直上で垂木先瓦U群（垂木先15）とする垂木先瓦を確認したことから、再建後の基壇は白鳳期以降に構築されたことをも追認した。

次に、基壇の構築状況を確認するため基壇の南辺に直交する方向に3ヶ所、基壇の西辺に直交する方向に1ヶ所のトレンチを設定して基壇を断ち割り、基壇下層の断面観察をおこなった。さらに建物基壇のほぼ中央部にあたる調査区東辺を南北方向に断ち割り、基壇の中央部の断面観察をおこなうことで基壇の構築状況を観察した。その結果、基壇の中央部の南北方向の断面に、基壇の南部域約4分の1だけが大きく作り替えられ、北側については改変されていないことを確認した。すなわち、基壇は南辺から北へ約3.8mのところから南側が大きく崩れていて、新たに積み直されていることが確認された。ただし、その積み直された範囲は建物基壇だけにとどまらず、さらに調査区の南辺をも越えた範囲にまで及ぶことを確認した。この整地土の南側への広がり、この調査区よりさらに南約12.5mの位置に設定した調査区（2000年度・第6調査区）でも認められた。ただし、まったく同じ堆積で見られたのではなく、あとで述べる創建塔所用瓦を多量に出土させた、にぶい黄褐色弱粘質土（10YR5/4）だけを、第6調査区の全体で確認した。また、この整地土は調査区の南辺および西辺に直交する方向に設定した計4ヶ所のトレンチでも確認でき、西側へもさらに広がることが判明した。その広がり、西側に隣接して設定した調査区（2000年度・第5調査区）にも続き、塔基壇の西辺より西へ約10.8mのところまで広がることを確認できた。この基壇の南部域約4分の1に積み直された層は、基壇を再構築することだけを目的にしたのではなく、周辺も含めて整地されていたと想定できる。この整地土は第3調査区の南辺では黒褐色弱粘質土（10YR5/2）をベース面にして、上に向かってにぶい黄褐色弱粘質土（10YR5/4）、灰黄褐色砂質土（10YR6/2）、褐色弱粘質土（10YR6/2）、灰黄褐色砂質土（10YR6/2）と積み上げられている（写真8下）。粘質土と砂質土を1層あたり0.03～0.08mの厚さで互層にして、叩き締めて積み上げていることから、伽藍中心域の南域の基礎整地を目的にした版築土と認定すべきであろう。この整地土の基底面にあたる黒褐色弱粘質土は、この基礎整地土の最下層に見られるだけでなく、塔基壇を確認した第3調査区全体、さらには北側に設けた第4調査区、南側に設けた第6調査区、西側に隣接して設けた第5調査区の東端から西へ約8.8mの範囲でも確認でき、それらは北から南に向かって約10度の傾斜をもってほぼ0.1mの厚さで傾斜を覆うように認められる。したがってこの黒褐色弱粘質土は飛鳥期創建時に伽藍を建造する範囲を決めるために積まれた整地土と認定すべきであろう。なお、この層から土師器の細片が1点出土している^(註2)。

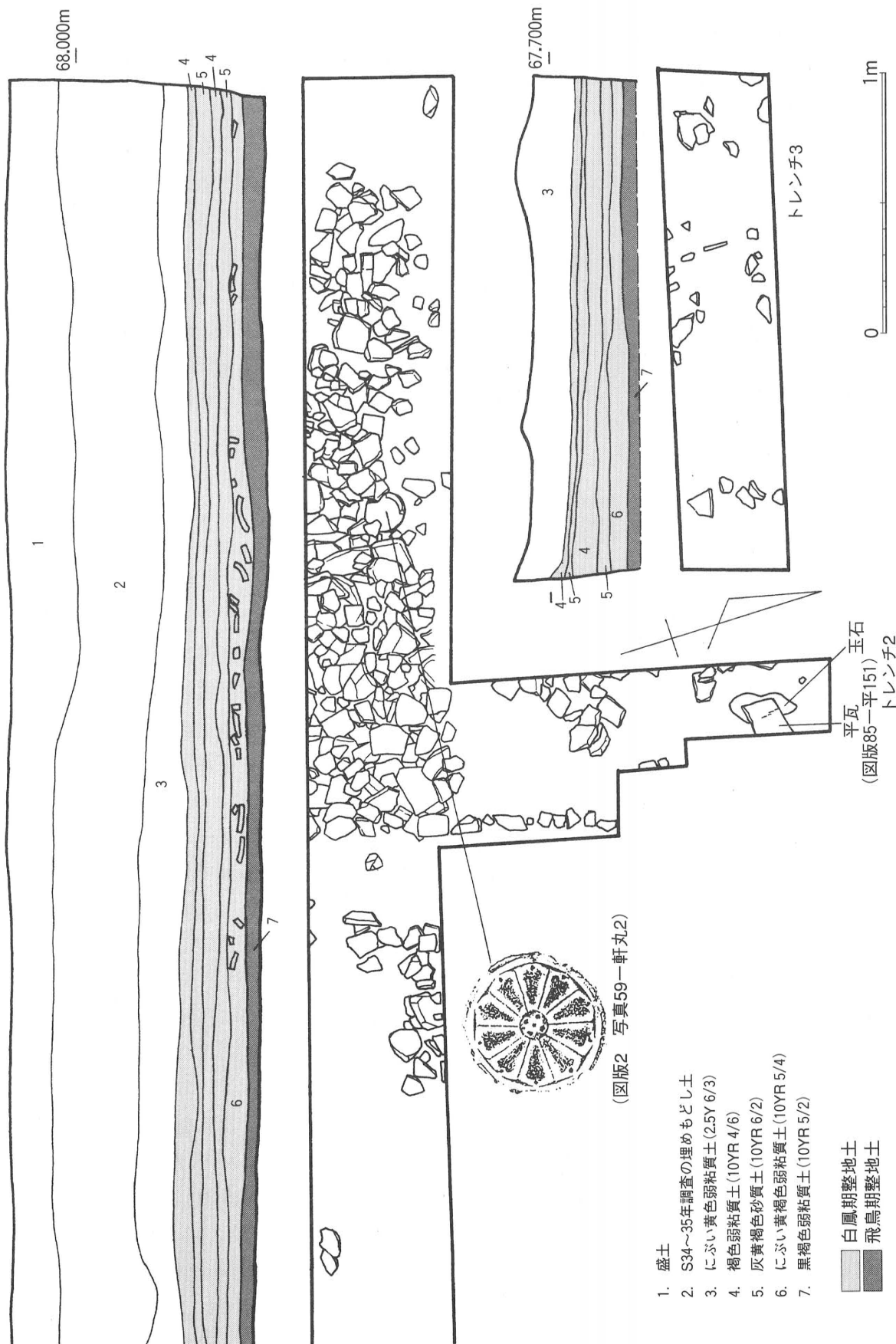
塔基壇の南辺に沿うようにして南側に飛鳥期の瓦が多量に廃棄されているのを確認した（第4図写真8上）。これらの瓦は飛鳥期創建時の伽藍を建造する範囲を決めるための整地土とした黒褐色



飛鳥期基壇築成土
 飛鳥期整地土

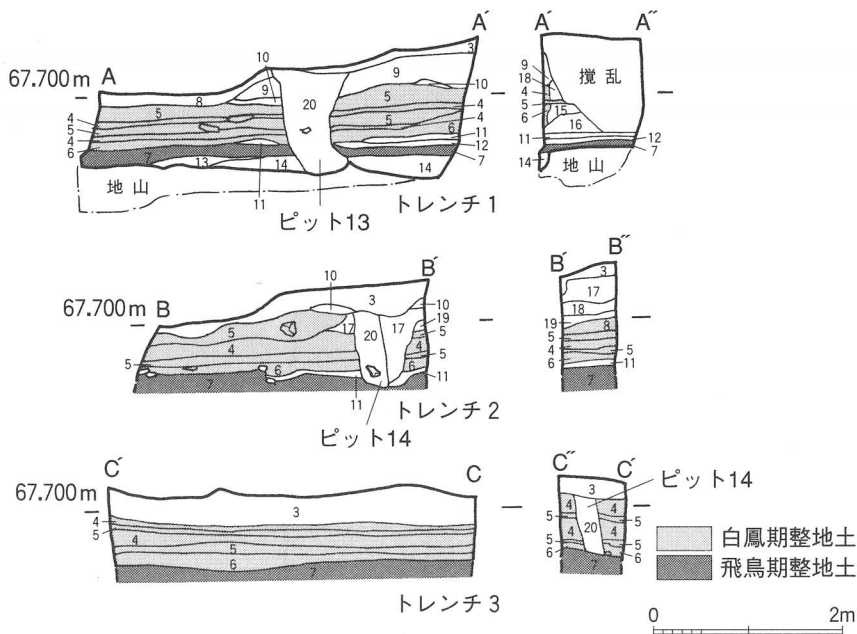
- | | | | | | |
|-------------------------|---|---|---|------------------------|---|
| 1. 表土 | 10. 明褐色弱粘質土 (7.5YR5/8) | 18. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/8) | 26. 灰黄色弱粘質土 (10YR6/2) に浅黄色弱粘質土 (10YR8/4) が混じる | 33. 灰黄色弱粘質土 (2.5Y6/2) | 42. 褐色弱粘質土 (10YR5/1) |
| 2. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) | 11. 明褐色弱砂混じり粘質土 (7.5YR5/6) | 19. 明黄褐色粘質土 (10Y6/6) | 27. 浅黄色弱粘質土 (2.5Y7/3) | 34. 暗灰黄色弱粘質土 (2.5Y5/2) | 43. 褐色粘質土 (7.5YR5/1) に明黄褐色粘質土 (10YR7/6) と浅黄色弱粘質土 (2.5Y7/4) がブロック状に混じる |
| 3. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) | 12. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) | 20. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR5/3) に黄褐色粘質土 (10YR8/6) がブロック状に混じる | 28. 灰黄色弱粘質土 (2.5Y6/2) に黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) が混じる | 35. 褐色砂質土 (10YR4/6) | 44. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) |
| 4. にぶい黄褐色粘質土 (10YR6/4) | 13. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) | 21. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR6/4) | 29. 褐色弱粘質土 (10YR6/1) | 36. 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) | 45. 褐色粘質土 (7.5YR5/1) に浅黄色弱粘質土 (2.6Y7/4) がブロック状に混じる |
| 5. 褐色弱粘質土 (10YR4/6) | 14. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) に灰黄色弱粘質土 (10YR6/2) がブロック状に混じる | 22. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) | 30. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) | 37. 灰色砂混じり土 (5Y6/1) | |
| 6. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) | 15. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR5/3) | 23. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 31. にぶい黄褐色砂混じり弱粘質土 (10YR7/3) | 38. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/8) | |
| 7. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR5/3) | 16. 灰黄色弱粘質土 (2.5Y6/3) | 24. 灰黄褐色炭混じり弱粘質土 (10YR4/2) | 32. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) | 39. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) | |
| 8. 黒褐色弱粘質土 (10YR5/2) | 17. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR7/4) | 25. 灰白色弱粘質土 (10YR8/6) | | 40. 浅黄色弱粘質土 (2.5Y7/3) | |
| 9. 褐色弱粘質土 (10YR4/4) | | | | 41. 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) | |

第3図 塔基壇平面図・断面図



(図版2 写真59-軒丸2)

第4図 創建塔所用瓦群出土状況平面図・南側断面図



- | | |
|----------------------------|--|
| 3. にぶい黄色弱粘質土 (2.5Y6/3) | 13. 褐灰色弱粘質土 (2.5Y7/1) |
| 4. 褐色弱粘質土 (10YR4/6) | 14. 灰白色弱粘質土 (2.5Y7/1) |
| 5. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) | 15. 明黄褐色弱粘質土 (10YR7/6) |
| 6. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR5/4) | 16. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR5/) に地
山土がブロック状に混じる |
| 7. 黒褐色弱粘質土 (10YR5/2) | 17. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) |
| 8. 灰黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/2) | 18. にぶい黄色弱粘質土 (白色礫混じる)
(2.5YR6/3) |
| 9. 明褐色粘質土 (7.5YR5/8) | 19. 褐色砂質土 (粘性あり) (10YR4/6) |
| 10. 灰色弱粘質土 (5Y6/1) | 20. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) |
| 11. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | |
| 12. 灰黄褐色炭混じり弱粘質土 (10YR4/2) | |

第5図 塔基壇内トレンチ1・2・3土層断面図

塔基壇の南辺に直交する方向に設定したトレンチ1～3で、塔基壇の南部域約4分の1の範囲に積み直された白鳳期の整地土の最上層から掘り込まれたピットが2基（ピット13, 14）、基壇の南辺に並ぶ位置で確認された（第5図）。ピット13は直径約0.3m、深さ約0.38m、ピット14は直径約0.4m、深さ約0.53mを測る。これらのピットは南辺に設けたトレンチの断面で確認できただけであるので、間隔については不明である。これらのピットは掘り込まれた位置と大きさからみて、基壇を再構築するために設けられた矢板を止めるための杭を打ち込んだ痕跡と認定した。すなわち、白鳳期に塔を再建するにあたり、基壇周辺も含めた基礎整地をおこなったのちに塔基壇を再構築しているのであるが、再構築された塔基壇はまったく残っておらず、かろうじて基壇を再構築するために設けた土止め用の板を固定する杭の痕跡だけが基壇の南辺に残っていたことになる。ただし西辺については確認できていない。

飛鳥期創建時に構築された基壇土は、後述する心礎石据え付け掘方のすぐ南側で3層分が確認できた（写真7上）。前述の飛鳥期の整地土である黒褐色弱粘質土の上に積み上げられたものであるが、下から上へ明黄褐色弱粘質土（10YR6/6）、褐灰色弱粘質土（10YR6/1）、灰黄色弱粘質土（2.5Y6/2）に黄褐色弱粘質土（10YR8/4）が混じる層で構成されている（第3図）。これらの層は心礎石据え付け掘方の埋め戻し土の上でも認められるが、心礎石据え付け掘方の南端から南へ約0.82mの位置で、南側へ向かって大きく崩れて途切れている。心礎石より北側では、飛鳥期整地土である黒褐色弱粘質土が認められるものの、その上層では堆積土が異なるため、それらの堆積土が飛鳥

弱粘質土の上面に廃棄され、その瓦群は軒丸瓦Aー玉縁I2Za群の軒丸瓦、玉縁I2Za群の丸瓦、および平瓦II3Za群の平瓦だけで構成されている。この瓦の上には前述の基礎整地を目的にした版築がなされているのであるが、にぶい黄褐色粘質土より上の版築土からは瓦はほとんど検出されていない。瓦の構成と出土位置からみて、この瓦群を飛鳥期創建時の塔に葺かれていた瓦群と認定した。さらに基礎整地土の上に、にぶい黄色の弱粘質土（2.5Y6/3）が堆積しているが、この層からは縄目叩きの施された一枚作りの天平期の平瓦が出土している。これらのことを併わせ考えると、飛鳥期の整地土（黒褐色弱粘質土）の上に積み上げられた前述の版築土は白鳳期の整地土と認定できるであろう。

期に構築された基壇土が残されているものかどうかは、土層観察からは確定できなかった。しかし、これらの層は心礎石の南側で認められたものとは異なるものの、遺物がまったく検出されなかったこと、南側で確認されたような基壇の崩れた状況が北側には認められないことなどを併わせ考えると、北側の堆積土は創建期の基壇土の残ったものと見なすべきであろう。なお、基壇の北辺の認定は、玉石の抜き取り痕跡と、約0.08mというわずかな段差を確認したことを根拠とするにすぎないが、この残りの悪さは、あとで述べる塔・金堂間の参道をほとんど同一面で検出したこととも整合する。廃絶ののちに1.0m以上の削平を受けた結果であり、かろうじて基壇の最下底面が残されているに過ぎないからである。

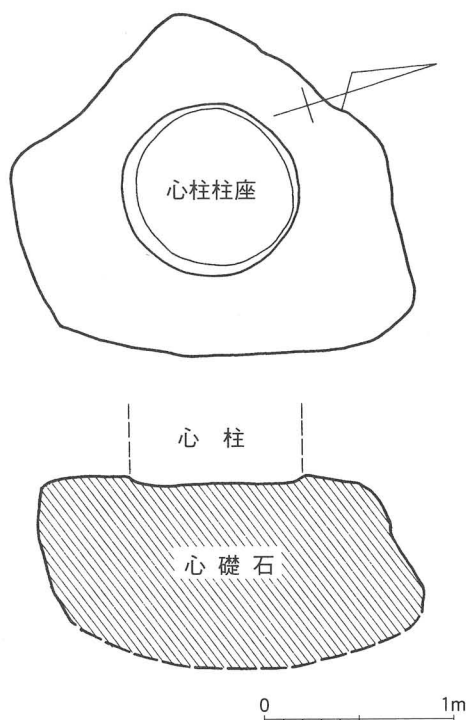
創建期の基壇化粧については、基壇の南部域を修復するときに再構築した白鳳期の版築土のなかから玉石が4個体分出土した。出土位置は原位置を保っておらず、塔基壇の南辺の玉石直下0.5mのところから出土したもの（写真9下）、あるいは飛鳥期の整地土の直上で創建時塔所用瓦群に混じって出土したものなどがあるが、それらが創建時基壇の裾に置かれていたことは間違いのないであろう。このことから創建時の基壇化粧も再建後のものと同じ方法で仕上げられていた可能性がきわめて高いことが窺える。さらに基壇の南辺の南側で出土した創建時所用瓦（軒丸2，軒丸10～12，玉縁2～4，平325，平328～330，平332～336）が、基壇の南辺に沿って出土するものの、基壇下にまで入り込む状況で出土しないことから（写真9上）、創建時基壇の南辺と再建後基壇の南辺は同じ位置であったことが想定できる。

基壇化粧については、玉石とその下に置かれた若干の瓦から想定するよりほかないが、南辺、西辺に残る玉石列を観察すると、隣り合って置かれた玉石の上面が平坦になるように配列されているとはいえ、さらに上に玉石を積み上げるには不安定な状況であることが見て取れる（写真5下）。検出された玉石は乱石積基壇として置かれたものではなく、瓦積み基壇の地覆に据え付けられたものと想定すべきであろう。なお、地覆に据え付けられた玉石列あるいは玉石抜き取り列は、西辺と南辺では2列に段差をもって確認された。これらは0.3～0.4mの間隔をもって並び、内側が高く、外側が低く巡り、その段差は0.09m程度である。段差については削平を受けていることから確実なことは言えないが、両列とも玉石の抜き取り痕跡が同じようにあることから、もともとは段差もなく、ほとんど同一レベルで置かれていた可能性が高い。この石列の間隔の狭さからすると、外観を二重基壇風に見せるために置かれたものなのか、一段高く築かれた犬走りなのか判然としない。

（2）心礎（第3，6図 写真6，10下）

第3調査区の東辺中央、残存基壇上面から約0.38m掘り下げたところで検出した。心礎石を据え付けるための掘方は、飛鳥期の整地土である黒褐色弱粘質土を掘り込んで設けられている。南北長約4.3m、東西幅3.0m+ α （長さの数値に下線を付すものは実存長を示す）、深さ1.0m+ α の規模で、ほぼ東側に頂点をもつ平面卵形に掘り込まれていると推測できる。据え付け掘方の北側・西側・南側の傾斜角は40～50度を測る。東側は調査区外になるため東端を確認することができなかったが、心礎石の据え付け位置と掘方の傾斜角を併わせ考えると、東側に緩やかな傾斜角を想定しなければ心礎石を引き込むことができないことから、東側を頂点とする卵形を想定した。

塔基壇については、すでに見てきたように心礎石および四天柱礎石の周辺を除いて、掘り込み地業などの基礎地業をおこなってから構築されたのではなく、創建時の伽藍を建造する範囲を決める



第6図 心礎石実測図

ための整地をおこなったのちに塔基壇を構築していったようである。それにあたってはいきなり基壇土を積み上げず、心礎石の据え付け位置を決めることから始めているようである。すなわち、飛鳥期創建時の整地土である黒褐色弱粘質土から心礎石の据え付け掘方を掘り込み、東側から心礎石を引き込んで据え付けたのち、埋め戻している。埋め戻しは、下から約3分の2までをまず、にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) と褐灰色粘質土 (7.5YR5/1) に浅黄色弱粘質土 (2.6Y7/4) がブロック状に入る土を交互に入れて叩き締め、そののち、上部約3分の1に褐灰色粘質土 (7.5YR 5/1) に明黄褐色粘質土 (10YR7/6) と浅黄色弱粘質土 (2.6Y7/4) がブロック状に入る土と明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) を交互に入れて、飛鳥期創建時の整地土上面まで埋め戻している。これらの層は0.05~0.08mの厚さで水平に積み上げられている (第3図)。これらの埋め戻し土に遺物の混入はほとんどなかったが、土師器の細片を2片だけ検出できた。そのうちの1点には内面に細

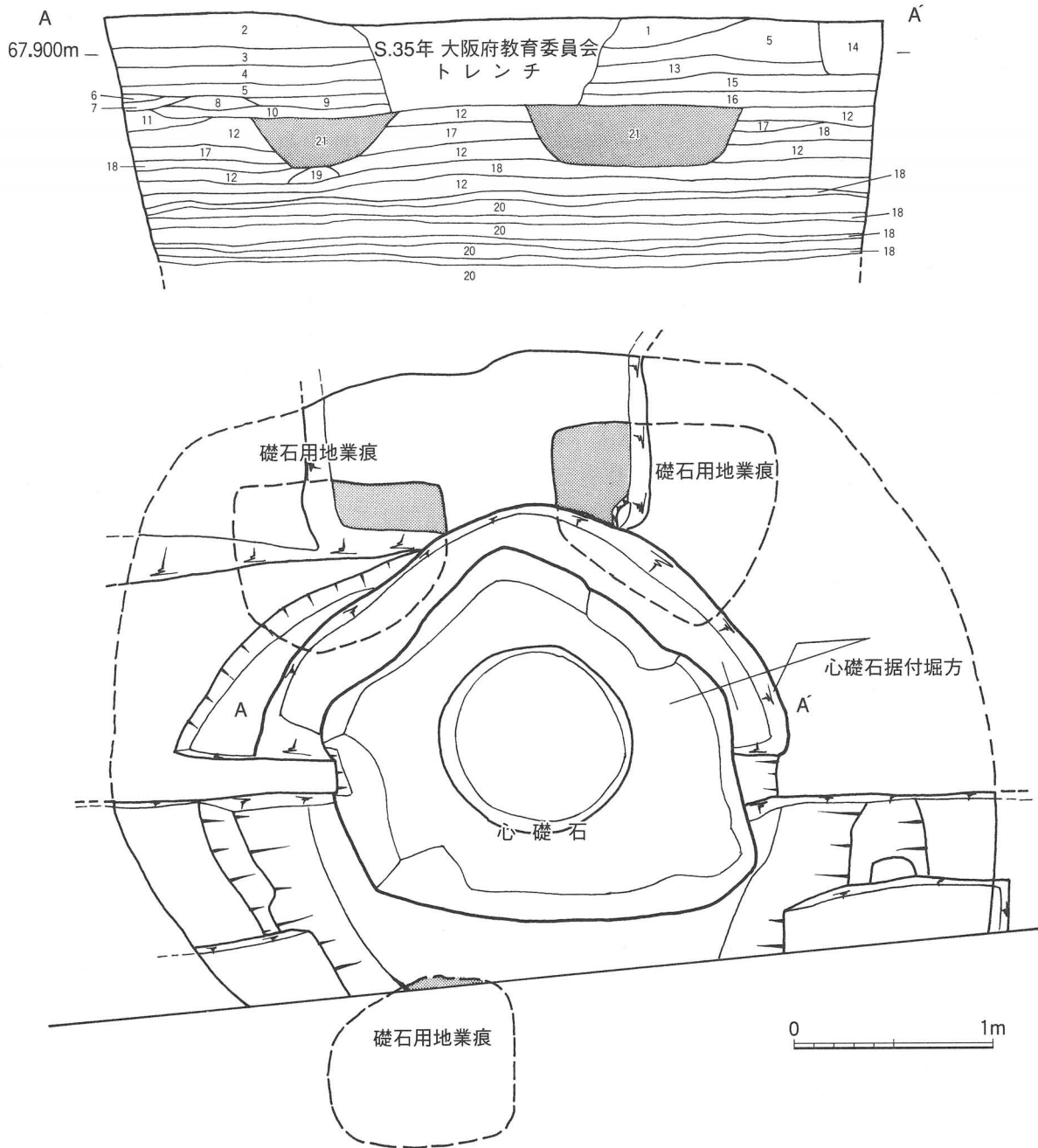
かな正放射状の暗文が認められることから、7世紀前半期の坏片と認定でき、この心礎石の据え付けが飛鳥期におこなわれたことと整合する。この整地土上面が地表面であったと仮定すると、心礎石はその上面と、下へ約0.33mの部分だけが地表より上に出ていたことになる。

心礎石を引き込むために使用したと考えられるピットを、心礎石据え付け掘方の底面で1基検出できた。直径が約0.2mを測る隅丸方形のピット8で、埋土は黄褐色弱粘質土 (2.5Y5/4) で、遺物は出土していない。検出位置から見て心礎石を据え付けるときの作業の痕跡と想定できる。

次に四天柱を立てるための礎石を据え付ける位置を決め、その箇所を再度掘り込んで、また埋め戻すというような部分地業をおこなっている。そののち基壇土を積み上げるのであるが、実際の基壇土は、すでに述べたとおり削平されてほとんど残っておらず、かろうじて心礎石の南側で確認できただけである。

心礎石は角閃石黒雲母石英閃緑岩製で、最大長約2.24m、最大幅約1.8m、高さ約1.0mの扁平な平面五角形に加工されている。心礎石上面は平坦にされ、中央には上面直径約0.87m、底面直径約0.81m、深さ約0.07mの平面円形の柱座が浅く彫り込まれている (第6図 写真6)。心礎石の上面でも、あるいは側面にも舍利孔は穿たれていなかった。心礎石上の埋土に舍利荘厳具が散らばっている可能性を考慮して、上面の埋土をすべて水洗ふるいがけに付し、取り上げ漏れのないように細心の注意を払ったが、瓦片や土器片が確認されただけで荘厳具にかかわるものは何も確認できなかった。

心柱の痕跡は確認できなかったが、創建時に心柱を立てるのに使用したと考えられるピットが2基検出できた。ひとつはピット6で、第3調査区の東辺、心礎石の南端から南側へ約2.2mの地点で白鳳期の整地であるにぶい黄橙色弱粘質土が積まれる以前に掘り込まれているのを確認した。こ



- | | |
|---|---|
| <p>1. にぶい橙色弱粘質土 (7.5YR6/4)</p> <p>2. 灰黄色弱粘質土 (10YR6/2) に浅黄色弱粘質土 (10YR8/4) が混じる</p> <p>3. 浅黄色弱粘質土 (2.5Y7/3)</p> <p>4. 灰黄色弱粘質土 (2.5YR6/2) に黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) が混じる</p> <p>5. 浅黄色弱粘質土 (砂質が弱い) (2.5Y7/3)</p> <p>6. 褐灰色弱粘質土 (10YR6/1)</p> <p>7. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6)</p> <p>8. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/8)</p> <p>9. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6)</p> <p>10. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6)</p> <p>11. 褐灰色弱粘質土 (10YR5/1)</p> | <p>12. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6)</p> <p>13. 褐色弱粘質土 (10YR6/1)</p> <p>14. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/8) (攪乱)</p> <p>15. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6)</p> <p>16. 褐灰色弱粘質土 (10YR5/1)</p> <p>17. 褐灰色粘質土 (7.5YR5/1) に明黄褐色粘質土 (10YR7/6) と浅黄色弱粘質土 (2.5Y7/4) がブロック状に混じる</p> <p>18. 褐灰色粘質土 (7.5YR5/1) に浅黄色弱粘質土 (2.5Y7/4) がブロック状に混じる</p> <p>19. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) に灰色粘土がブロック状に混じる</p> <p>20. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)</p> <p>21. 明褐色弱粘質土 (7.5YR5/6) (地業の土)</p> |
|---|---|

第7図 四天柱礎石推定位置の平面図・断面図

のピットは全体を検出できなかったので平面形が不明であるが、最大長約0.8m、最大幅約0.55m+ α mを測る。埋土は黄橙色弱粘質土（10YR6/4）で遺物は出土していない。もうひとつはピット7で、心礎石の据え付け掘方の北東斜面で地山面を掘り込んで設けられている。直径約0.23m、深さ約0.06mの円形のピットで、オリーブ褐色弱粘質土（2.5Y4/4）の埋土から遺物は出土していない。ともに検出位置と掘り込み面から、飛鳥期に心柱を立てるのに使用された工事用の丸太穴と推定する。

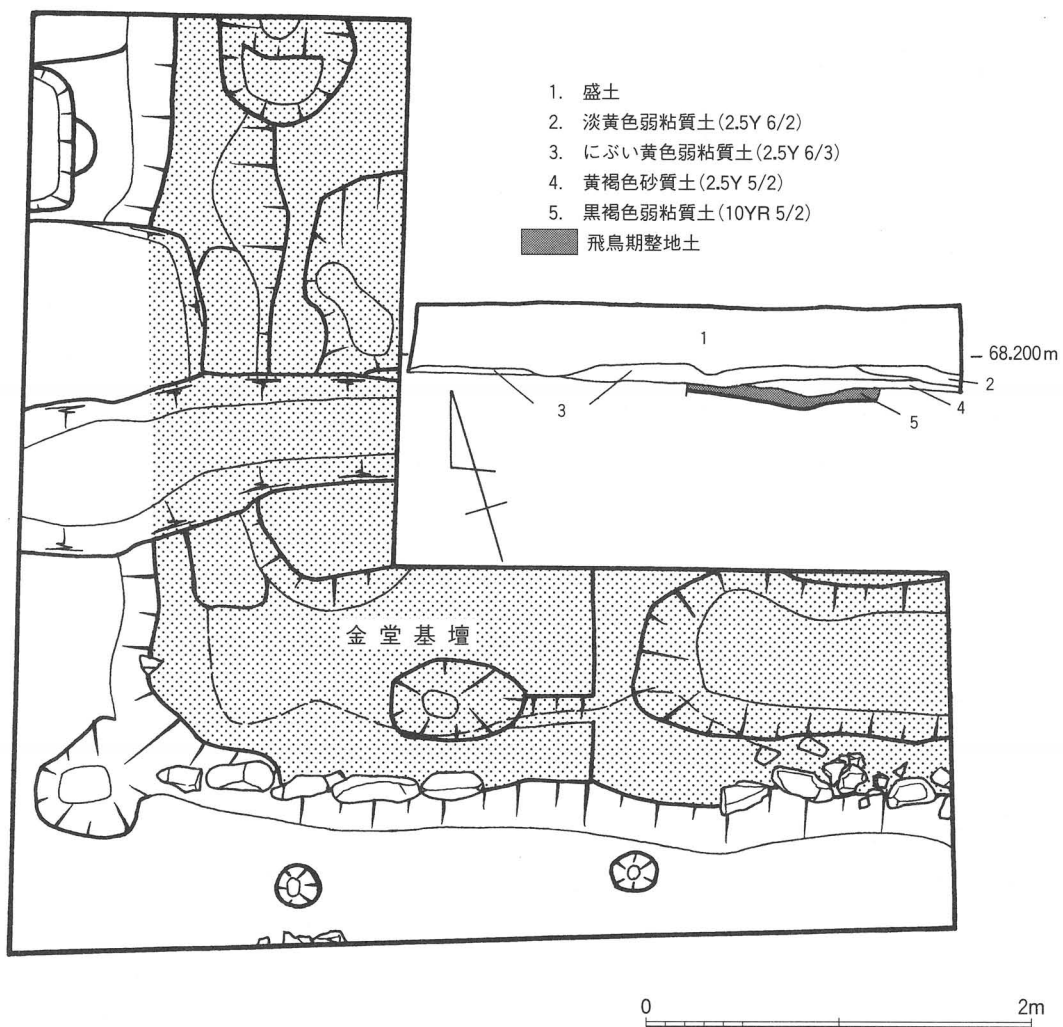
現存基壇の上面で心柱の抜き取り痕跡を確認した。^(註3)心礎石の上面から約0.38m上方、すなわち、現存基壇の上面で直径約1.8mの平面円形の掘方を検出した。掘方は深さ約0.85mで心礎石の側面にまで及んでいる。埋土の下層、すなわち心礎石上面と同じ高さまでは、心礎石を据え付けたあとの埋め戻し土と同じ土が、すなわちにおい黄色粘質土（2.5Y6/3）や褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）に明黄褐色粘質土（10YR7/6）と浅黄色弱粘質土（2.6Y7/4）がブロック状に入る土が認められるが、心礎石の上面には黄灰色粘土（2.5Y5/1）が柱座を埋めるように約0.12mの厚さで堆積している。その上の堆積は約38度の傾斜角をもつ土壌の内部に心柱部分を残して流れ込むように灰色砂混じり土（5Y6/1）、褐色砂質土（10YR4/6）、灰黄色弱粘質土（2.5Y6/2）が堆積している（写真10下）。土壌の中央部には暗灰黄色弱粘質土（2.5Y5/2）と灰黄色弱粘質土（2.5Y6/2）の2枚の皿状の堆積が認められ、前者の埋土からは奈良時代（天平期）の瓦片や土器片が出土し、後者の埋土からは14世紀後半に比定する瓦質の皿（図版128：23～25）が出土している。この瓦質の皿は、堺環濠都市遺跡とその周辺か、南河内南部域でのみ出土が認められ、そのうえ鎮壇具などの特殊な使用例で認められることが多いとされていることからすると（森島1995）、新堂廃寺跡の廃絶ののちの鎌倉時代以後に建ったとされる堂宇にかかわると考えるべきであろう。

（3）四天柱礎石地業（第7図 写真6上、7下）

すでに述べてきたとおり基壇の削平が著しく、礎石あるいは据え付けのための痕跡は、心礎石を除いて検出されなかった。しかし、心礎石据え付け掘方内部の心礎石を据え付けたあとの埋め戻し土の上面から、四天柱礎石据え付けのための部分地業をおこなった痕跡を確認した（第7図 写真6上）。心礎石の北西角、南西角、南東角の計3ヶ所で確認されたが、南東角の1ヶ所については調査区外の東側へさらに広がるため、断面で確認したにとどまる。おそらく北東角にも同じような地業の痕跡があると推測できるが、調査区内では確認できなかった。

四天柱礎石を据え付けるための地業はすべて、その位置が心礎石据え付け掘方内にあり、また埋め戻し土の上面から掘り込まれていることからすると、四天柱礎石の据え付け位置の地盤を強固にするためにおこなわれたものと推測できる。心礎石周辺の断面観察と西側の一部を平面観察しただけであるので、全体の規模、形状などの正確なデータを得ることはできなかったが、おそらく最大長1.3m程度の不整形な平面形態に掘り込まれたと推測できる。北西部と南西部の地業位置はかなり近接して認められるが、南西部と南東部の地業位置の間隔から復元想定すると、おそらく2.1mの間隔で礎石が据え付けられていたと推測できる。部分地業掘方の埋め戻し土は明褐色弱粘質土（7.5YR5/6）で、きわめて堅く叩き締められていた（写真7下）。遺物は検出されなかった。

側柱の礎石下も四天柱の礎石下と同じような地業がおこなわれている可能性を想定して、1959年の予備調査のトレンチの一部を再発掘した。西側の四天柱礎石のための部分地業掘方から、さらに



第8図 金堂南西隅平面図・断面図

約2.1m西側にまで調査部分を広げて地山面を検出したが、側柱礎石を据え付けるための部分地業は確認できなかった。おそらく側柱礎石の据え付け位置の基底面が地山であることから、四天柱礎石のようにわざわざ地業をおこなう必要がなかったと考えておきたい。

なお、基壇の残存状況が悪かったため、四天柱礎石の据え付け面は確認できなかったが、塔・金堂間の参道の高さから推測すると、心礎石上面と四天柱礎石の据え付け面との高低差は1.5m程度はあったと考えられる。

2 金堂

創建は飛鳥期で、南北長14.1m、東西幅15.9mの長方形の基壇をもつ。基壇の外装は地覆に玉石が置かれた瓦積基壇である。

残存基壇は、玉石下に置かれた平瓦からみて、再建後のものである。

既往の調査成果と新たな調査の目的

1960年の大阪府教育委員会の調査で中央建物として検出された（浅野・坪井・藤沢 1961）。基壇の削平が著しいものの、最下底の玉石列が認められ、規模は南北長が、西辺の玉石列から一辺約14.4mであるとされたが、東西幅については東側が住宅によって破壊されていたことから、東辺を確定するのに2案がもたれた。ひとつは西辺から東へ約13.5mの地点で確認された玉石1個を考慮して、ほぼ正方形に近い建物とするもの、あとひとつは玉石列の西辺より東へ約15.9mのところ確認された地形の落差から東西に長い建物とするものである。そしてこれらの2案を検討して、もし中央建物と南方建物の両伽藍の南北中軸線が一致すると仮定すると、中央建物の基壇上伽藍の西辺が南方建物の基壇上伽藍の西辺の引通し線より約0.8m西にあることから、東西に長い建物とする方が妥当であるとされ、後者の段差を東辺と解釈する。さらにこの解釈は、東西に長い建物と想定した中央建物の回りに鎌倉時代以降に掘り込まれたV字溝が存在することからも裏付けられる。中央建物が平安時代後期に廃絶したあと、鎌倉時代に、中央建物のあった土壇の上にひとつの堂宇が再建され、近世まで残存していたことが確認された。

2000年度の本市教育委員会の調査では、第4調査区として、1960年度に検出された中央建物（金堂）の創建時の状況を確認することと、国土座標に載せた測量図を作成することを目的にし、中央建物（金堂）の西南角を含む約16m²の再調査および再測量を実施した（栗田 2001）。

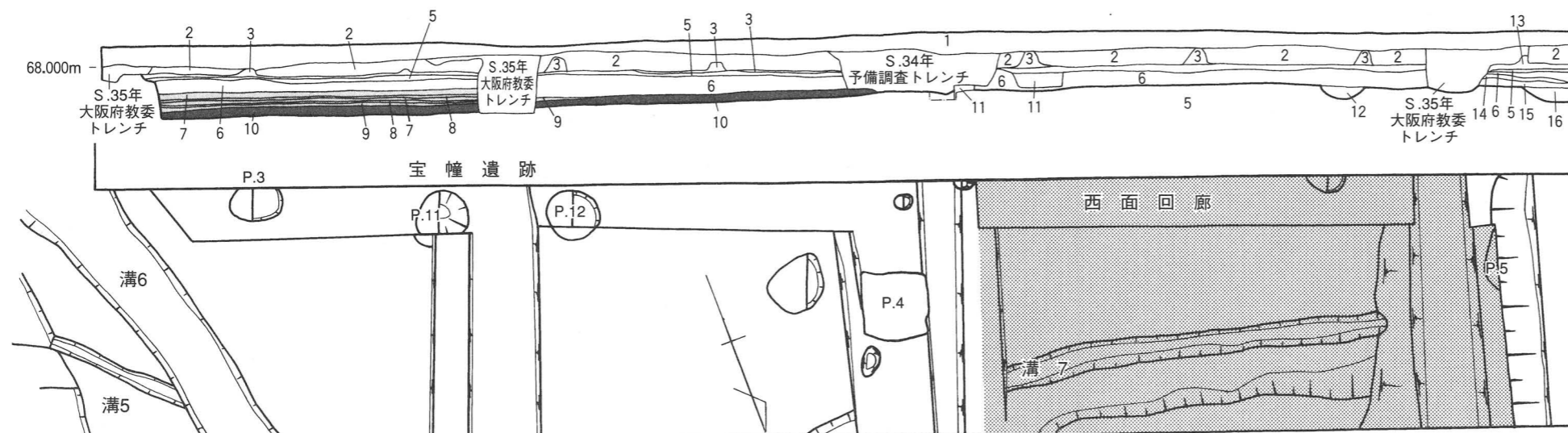
(1) 基壇（第8図 写真11）

1960年の大阪府教育委員会の調査で確認された金堂基壇の西南角を再発掘し、基壇のわずかな高まりと玉石列を検出して1960年調査の成果を追認した（第8図 写真11上）。さらに、玉石の下あるいは玉石と玉石のあいだには丸瓦や平瓦が認められ、そのなかの平瓦には、平瓦Ⅱ0 Za [Bd] 群から平瓦Ⅱ0 Za [Bj] 群とするもののどれかに群表記される白鳳期（「川原寺式」期）のものが存在することから、1960年調査の報告のとおり、塔と同じく金堂も白鳳期以降に再建されたものであることを追認した。

金堂の基壇については1960年調査の成果以上に新しい知見を得ることができなかったが、飛鳥期創建時の層が金堂の基壇下で残っていることを確認した（写真11下）。すなわち、塔基壇下層で認められた飛鳥期整地土である黒褐色弱粘質土が金堂基壇下にも広がっていたことから、飛鳥期創建時の金堂基壇も塔基壇と同様に、同じ位置で建て替えられた可能性が高い。また、基壇には基壇端の玉石列に沿うように0.2m前後の幅で带状に土層の違いが認められた。これは基壇の外装のための裏込めと考えられるが、このことと上面を平坦にして配列している玉石の状況から併わせ考えると、塔基壇と同じように、金堂基壇の外装も瓦積みであった可能性が高いと考えられる。

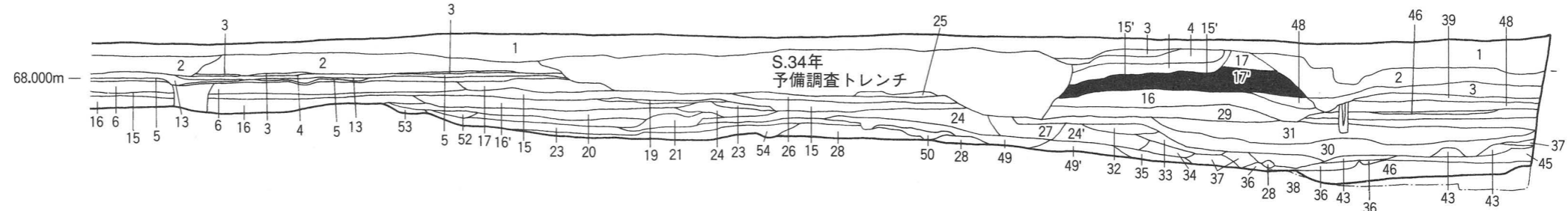
3 西方建物

創建は白鳳期で、南北長約31.36m、東西幅約16.5mの東面する建物として建造され、天平期に南北長約27.6m、東西幅約16.42mの同じく東面する建物として、南北に縮小して建て替えられている。ともに建物基壇の東辺中央に階段が取り付けられていた。創建時基壇の外装は不明であるが、再建後基壇の外装は地覆に玉石の置かれた瓦積基壇である。階段部の外装は創建時には凝灰岩でなされ、再建後は玉石で改装されている。



1. 盛土
2. S.35年調査埋め戻し土
3. 旧耕土
4. 旧床土
5. 橙色弱粘質土 (7.5YR6/8) (新堂廃寺廃絶期の層)
6. にぶい黄色弱粘質土 (2.5YR6/3) (天平期整地土)
7. 褐色弱粘質土 (10YR4/6)
8. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)
9. にぶい黄褐色弱粘質土 (10YR5/4)
10. 黒褐色弱粘質土 (10YR3/1) (飛鳥期整地土)
11. 灰オリーブ色弱粘質土 (5Y4/2) (ピット埋土)
12. 黄褐色弱粘質土 (2.5Y5/4) (ピット埋土)
13. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6)
14. 灰黄褐色炭混じり弱粘質土 (10YR4/2)
15. 明褐色弱粘質土 (7.5YR5/6)
- 15'. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/6) (築地塀基壇土)
16. にぶい褐色弱粘質土 (7.5YR5/3)
- 16'. 16に地山の土が混じる
17. 明黄褐色粘土 (10YR6/6)
- 17'. 17に地山の土が混じる (築地塀基壇土)

- 築地塀基壇土
- 白鳳期整地土
- 飛鳥期整地土



18. 褐色焼土混じり粘質土 (10YR4/4)
19. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6)
20. 灰黄褐色弱粘質土 (10YR5/2)
21. 黄褐色粘質土 (10YR5/8)
22. 灰黄色弱粘質土 (7.5Y6/2)
23. 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)
24. 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) ににぶい黄褐色弱粘質土 (10YR4/3) が混じる
- 24'. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) に明黄褐色粘質土 (10YR6/6) が混じる
25. にぶい黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/3)
26. 明褐色弱粘質土 (7.5YR5/6)
27. 褐灰色弱粘質土 (10YR6/1) に黄褐色粘土 (10YR5/8) が混じる

28. 浅黄色粗砂 (2.5Y7/3)
29. 明黄褐色粘質土 (10YR6/8)
30. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) に灰黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/2) が混じる
31. 暗灰黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y5/2) ににぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) が混じる
32. 灰黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/2) ににぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) とにぶい黄褐色弱粘質土 (10YR4/3) が混じる
33. 灰黄色砂 (2.5Y6/2)
34. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) に褐色粘質土 (7.5Y4/4) が混じる
35. 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1)
36. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2)

37. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/2) に浅黄色粗砂 (2.5Y7/3) が混じる
38. 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1) ににぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) が混じる
39. 黄褐色砂混じり弱粘質土 (10YR5/6)
40. にぶい黄色炭混じり弱粘質土 (2.5Y6/3)
41. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) に灰黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/2) が混じる
42. 灰オリーブ色弱粘質土 (5Y6/2)
43. 灰黄色粗砂 (2.5Y7/2)
44. 明褐色弱粘質土 (7.5YR5/6)
45. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) に黄灰色粗砂 (2.5Y6/1) が混じる
46. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1)

47. オリーブ黄色弱粘質土 (5Y6/3)
48. にぶい黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/3)
49. 暗灰黄色砂混じり粘質土 (2.5Y5/2)
- 49'. 暗灰黄色砂混じり粘質土 (2.5Y5/2) ににぶい黄色粘質土 (10YR4/3) が混じる
50. 黄灰色砂混じり弱粘質土 (2.5Y4/1)
51. 明褐色粘質土 (7.5YR5/8)
52. 灰黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/2) に明褐色弱粘質土 (7.5YR5/8) が混じる
53. 黄褐色弱粘質土 (2.5Y5/3)
54. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)

第9図 西方建物・西面回廊・西面築地塀 (2000年度・第5調査区) 平面図・断面図

既往の調査成果と新たな調査の目的

1959年予備調査で瓦積基壇の西辺の一部が確認され（写真14）（藤・北野 1961）、翌1960年の調査でこの建物の規模が明らかになった（浅野・坪井・藤沢 1961）。瓦積基壇の規模は南北長約27.6m、東西幅約16.42mで、基壇の東辺中央に間口約5.6m^{（註5）}、奥行き約3.2mの階段部がある。基壇上面はほとん

ど削平され、土壇がわずかに約0.1mの高まりとして残っただけであった。瓦積基壇の残存部分は西辺がもっとも長く、基壇の西南隅より北に約14.5m分、東辺がこれに次ぎ、階段部から南に約6.4m分、南辺は西南隅から東に約3.5m分残存していた。北辺は残りが悪く、地層の下がりによってわずかに推定された。瓦積基壇は主として平瓦を半截したものや四半分に割ったものが用いられ、一部丸瓦の破碎したものを含んでいた。西辺では平瓦の縦半截のものが使われた部分もあるが、東辺では四半分に割ったものが多く、平積みあるいは小口積みにした粗い作業で、報告者は瓦積基壇としては雑な作りのものと評価している。東辺の階段部より南側が残存状態がもっとも良く、4枚の瓦を重ねた部分が見られるが、約0.1m幅の瓦積みの内側には基壇積土までのあいだに瓦を小さく割り込んで堅く叩き締めた瓦積基壇の裏込めが0.2～0.3mの幅で認められた。瓦積基壇の瓦には格子叩きのもののほか、縄目叩きのものも確認された。L群にあてられる軒丸瓦が認められることから、基壇が天平期以降に作られたものと結論づける。また、階段部南側の基壇外の瓦堆積層のなかから平安時代後期の灯明皿が出土したことで、この建物の存続年代の下限を平安時代後期と推定している。

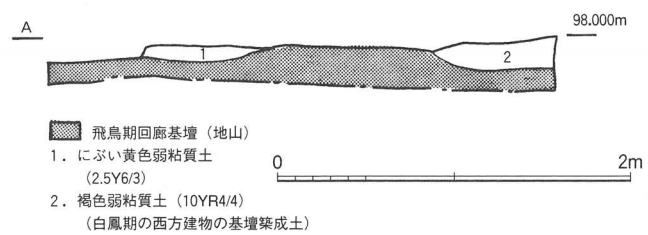
なお、階段部の作り替えの事実に加えて、基壇中央を断ち割っておこなった断面観察から、瓦積基壇の建物以前にも規模の異なる西方建物が建てられていたことが確認された。この創建時の西方建物も再建後のものと東西幅はほぼ同じで、南辺は南側に約3.36m、北辺は北側へ約0.4m広く作られていたことから、南北長が約31.36mを測ることが判明した。なお、創建時の階段も基壇の東辺中央部に作られていたことが確認されている。

2000年度の本市教育委員会の調査では、第5調査区として、1959年および1960年に検出された西方建物の白鳳期創建時の基壇の南西部の平面的な広がり状況を確認すること、創建時および再建後の西方建物の西南角を国土座標に載せた測量図を作成することを目的にして、西方建物の西南角を含む約125m²の再調査および再測量を実施した。

（1）基壇（第9, 10図 写真12, 13）

1960年の大阪府教育委員会の調査で確認された、天平期再建後の西方建物の西南角の瓦積基壇を再発掘して瓦積基壇を検出し、1960年調査の成果を追認した（第9図）。瓦積基壇は残存状況が悪く、基壇のわずかな高まりとまばらに積み上げられた瓦を検出できただけであった。2000年度の調査で確認できた基壇に積まれた瓦には、平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群、平瓦Ⅱ0 Bm群あるいは平瓦Ⅱ0 Bn群のどちらか、および平瓦Ⅱ0 Cb群から平瓦Ⅱ0 Cd群とするもののどれかが認められる。

白鳳期創建時の西方建物は、再建後のものより南へ約3.36m広く建てられていたことを追認した。



第10図 創建西方建物基壇（1960年度調査区）断面図

白鳳期の西方建物は西側にある谷を埋め立てて寺域を拡張し、飛鳥期創建時の西面回廊を壊して建てられている。西方建物を建てるために、まず、西面回廊の基壇土であった地山面を深さ約0.4m分掘り込み、そこに褐色弱粘質土（10YR4/4）を入れて地業をおこない（第10図）、その上に基壇土としてオリーブ黄色弱粘質土（5Y6/4）、明褐色黄色弱粘質土（2.5Y6/8）、オリーブ黄色弱粘質土（5Y6/4）の順に積み上げて基壇を構築していることも追認した。しかし、白鳳期創建時の西方建物の基壇は後世の削平が著しく、南辺部のうち西側の約2.6mの範囲でのみ0.06m程度の段差として確認できただけである。

天平期再建後の西方建物については、1960年の調査成果を追認したにとどまった。ただし、1960年調査時に西方建物に付く排水溝と結論づけられていた東方部の溝の続きを検出したが、その溝は西方建物の廃絶ののちの堆積層から掘り込まれていることを確認した。しかして西方建物に付属する施設でないことを明らかにできた。

なお、白鳳期の西方建物所用瓦には、軒丸瓦J群の軒丸瓦、軒平瓦A A 6 - 平瓦II 0 Za [Bh] 群の軒平瓦、行基I 1 Za < x ix > 群の丸瓦、平瓦II 0 Bd群から平瓦II 0 Bj群とする平瓦といった、一群の瓦が多用されている。また、再建後の西方建物所用瓦には、軒丸瓦L群の軒丸瓦、軒平瓦P群の軒平瓦、行基I 1 Za < x x ii > 群の丸瓦、平瓦III 2 J2aa群から平瓦III 2 J2ad群とする平瓦といった、一群の瓦が多用されている。

4 東方建物

創建は天平期で、推定南北長は約26.3m、推定東西幅が約14.6mの西面建物である。西辺には素掘りの雨落溝が設けられている。基壇の外装は確認できなかったが、基壇の縁辺で確認された玉石の抜き取り痕跡が塔や金堂のそれと類似することは特筆しておく。東方建物付近出土瓦からみて、東方建物は天平期の初めに創建された可能性が高い。西方建物のような建て替えの痕跡は確認されていない。

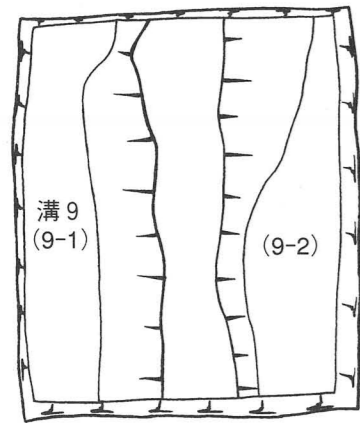
既往の調査成果と新たな調査の目的

1959年予備調査で東方建物周辺にもトレンチが開けられているが、基壇の残りの悪さから建物の存在は認識されず、その周辺は寺域として認識されなかった。とりわけトレンチ40とされた箇所は、東方建物基壇上に設定されたトレンチであることが、東方建物の存在が認識されたあとでは分かるものの、トレンチの設定が基壇内部にとどまっていたことから、瓦の出土量が少なく、それだけでは基壇の存在を認識するのは困難であった（藤・北野1961）。予備調査で採用された試掘法が適切でなかったのでは決してない。運悪く遺構の残りが良くなかっただけである。

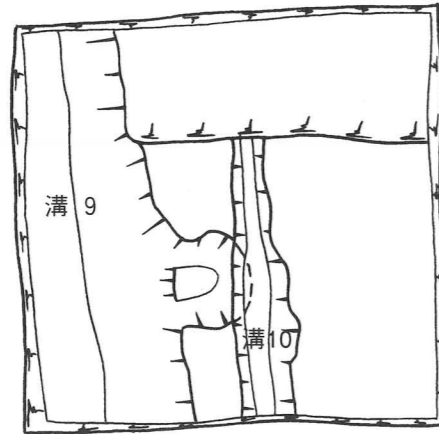
1960年調査の結果として、1959年予備調査で確認された瓦積基壇建物（西方建物）の検出位置を勘案して保存地域が決められたのであるが、その地域は新堂廃寺跡の伽藍配置を考慮すると西半部分にすぎないことが明確であるので、西方建物に対応する東側も調査する必要が感じられた。

そこで1997年度、1999年度、2000年度にわたって寺域東部域を調査した。1997年度の調査では、西高東低であるはずの自然地形に反して東高西低の地山の高まりになる事実を検出し、その高まりが真北より17度20分振れる伽藍の中軸線とほぼ平行して走ることから、何らかの建物が存在したことを確認したが、基壇化粧の痕跡、あるいは雨落溝など建物基壇と認定するには至らず、調査は不

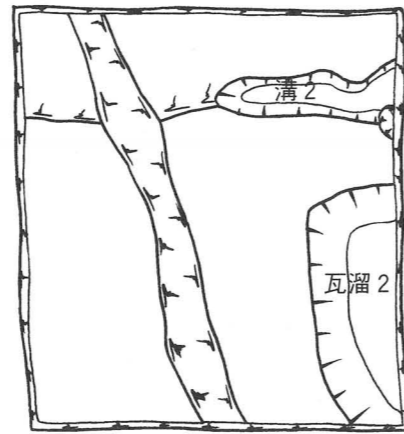
上層遺構



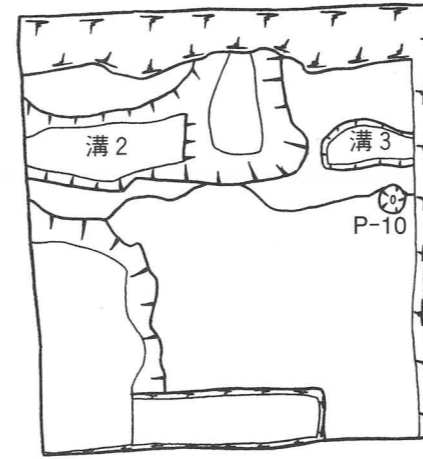
I 地区



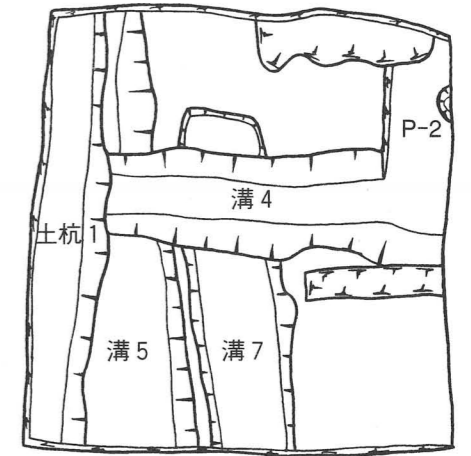
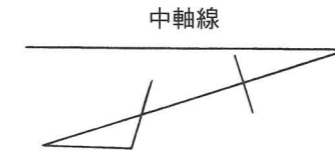
H地区



G地区

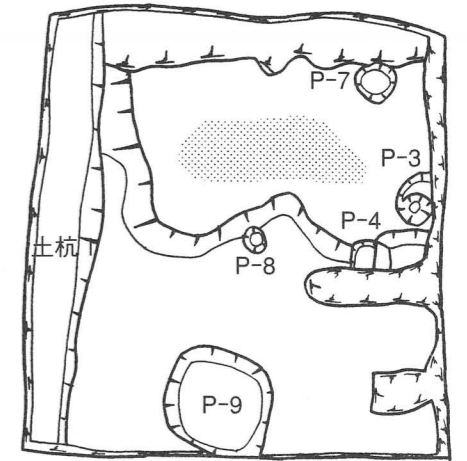
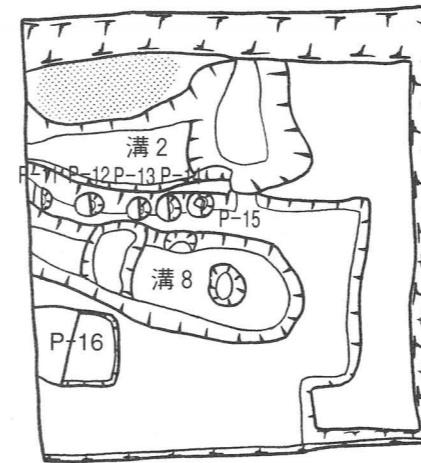
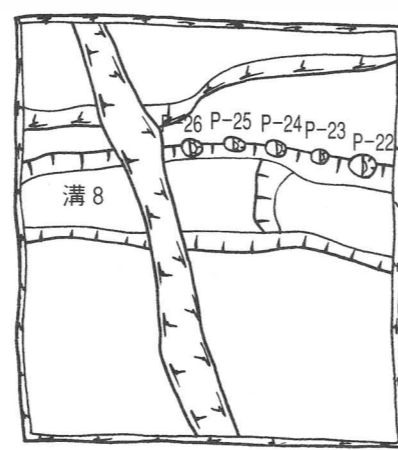
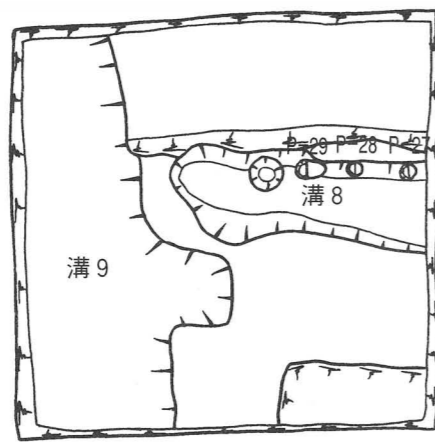
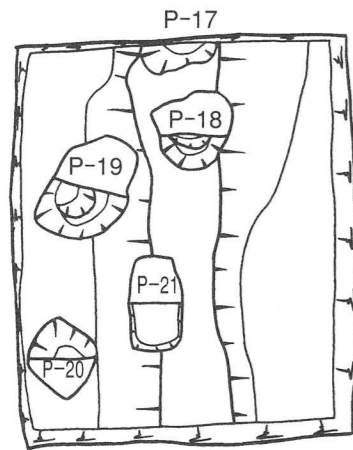


D地区



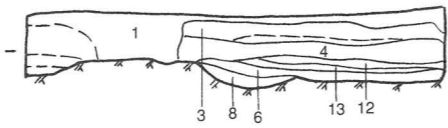
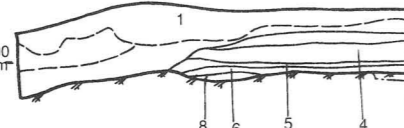
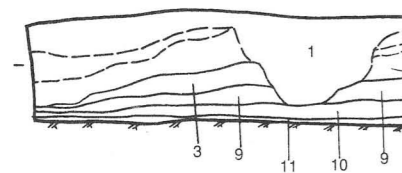
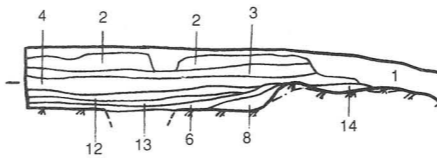
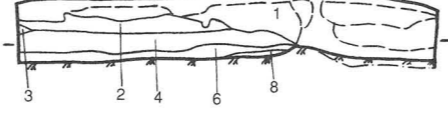
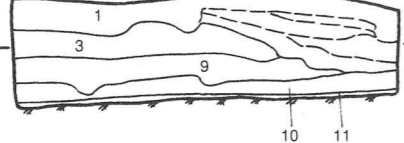
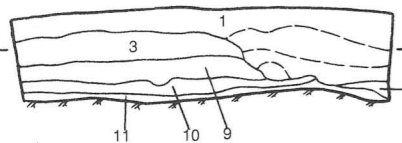
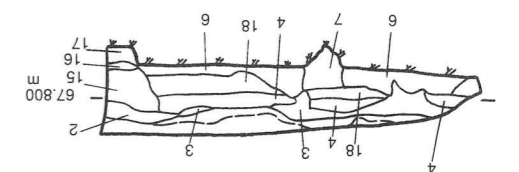
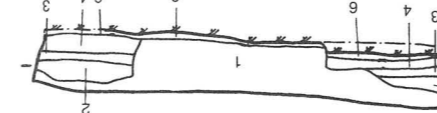
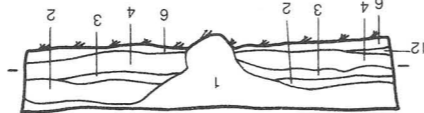
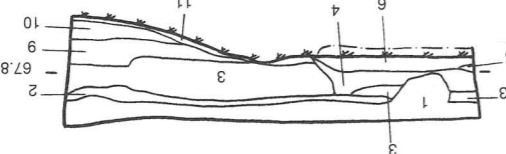
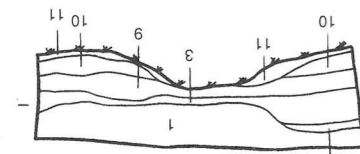
F地区

下層遺構



1. 表土
2. 黄褐色粘質土(10YR5/6)
3. 灰黄褐色粘質土(10YR5/2)に黄褐色粘質土(2.5Y5/3)がブロック状に混入
4. にぶい黄褐色弱粘質土(10YR5/3)
5. にぶい黄褐色弱粘質土(10YR6/4)
6. 橙色弱粘質土(7.5YR6/6)に灰色弱粘質土(N6/)が混じる
7. 灰黄褐色弱粘質土(7.5TR6/2)に暗褐色粘質土(7.5YR3/3)がブロック状に混じる (P-4)
8. にぶい橙色弱粘質土(7.5YR6/4)に灰色弱粘質土(N6/)が混じる(溝8)

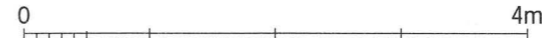
積土の残る範囲



(西壁断面)

(北壁断面)

(南壁断面)



9. 灰色粘質土(N4/) (溝9 第1層目)
10. 灰色粘土(N4/) (溝9 第2層目)
11. 灰色砂(N5/) (溝9 第3層目)
12. 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2) (瓦溜2 第1層目)
13. 黄褐色混砂弱粘質土(2.5Y5/4) (瓦溜2 第2層目)
14. 黄褐色砂質土(2.5Y5/4) (溝2)
15. 暗灰黄色弱粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混入 (土杭1 第1層目)
16. 暗青灰色粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混入 (土杭1 第2層目)
17. 青灰色砂質土(土杭1 第3層目)
18. 黄褐色粘質土(2.5Y5/6) (溝5、溝7)

第11図 東方建物 (1999年度調査区) 平面図・断面図

十分なままで終了した（中辻・栗田1999）。

1999年度の調査では、1997年度の調査区を北側に広げ、1997年度に検出した自然地形に反する地山の高まりの北への続きを確認し、その北西端を検出できた。さらには階段部の痕跡をも検出し、その位置が西方建物の階段部とほぼ対応する位置にあることを明らかにした（栗田2000）。

2000年度の調査は、寺域のさらに東側に第2調査区を設け、1997年度および1999年度に確認した東方建物の東西規模を確定するための調査を進めた。しかし遺憾ながら、後世の攪乱が著しく、東辺を確認することはできなかった（栗田2001）。

（1）基壇（第11図 写真15～17）

基壇は北西端から南に向かって約19.0mの部分だけを検出できた。地山の削り出しとして検出したが、約0.01mと低くしか残っていない。盛られたにぶい黄橙色弱粘質土（10YR6/3）が、基壇の一部の範囲（積土と図示）に薄く残っているだけである。基壇の西辺の北西角から約8.85mのところ、西辺に直交するように突出部が作り出されている。突出部は、基壇の西辺との取り付け部から約1.47m西へ延びたところで、北へ曲がって約0.32m延び、そこでさらに西へ曲がって約0.32m延びる、という具合に逆L字状を呈している。おそらく西へさらに延び、さらに曲がって南へ延びて、西辺を形成していたと推測できる。しかし、さらにその西側については、平安時代の瓦溜によって掘削されていたことから、西辺を確認するには至らなかった。突出部の東西幅についても南半部が近世の土壌によって掘削されていることから、正確な規模を知ることができなかったが、南端の調査区（F地区）で南辺が確認出来なかったのも、それより北にある近世の土壌のなかにその遺構はおさまると推測できる。突出部の東西幅は最大に見積もっても5.4～5.7mであろう。この突出部の北辺の位置が西方建物の階段部の北辺位置とほぼ一致し、さらに規模から考えても適当であるので、東方建物の階段部として認定した（写真16上）。

基壇化粧は基壇の西辺に沿うようにして検出できた玉石の抜き取り痕跡によって推測するしかない。玉石の抜き取り列は5～20cmの間隔で認めるが（写真17上）、この間隔は塔基壇で検出したそれとほぼ同じ規模であることから、東方建物の基壇化粧も塔基壇のそれと同じような外装であったことは確実であろう。

東方建物所用瓦には、天平期の平瓦Ⅱ0 Bm群、平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群、平瓦Ⅱ0 Cb群から平瓦Ⅱ0 Cd群とする平瓦の一群と、行基Ⅰ1 Za〈x x ii〉群とする丸瓦が圧倒的に多いが、上層で検出した平安時代の瓦溜りや、近世の遺構である土壌1からは、桶巻き作りではあるものの縄目叩きのつく平瓦Ⅱ1 Za [J1b] 群から平瓦Ⅱ1 J1f群とする平瓦の一群や、縄目叩きのつく一枚作りの平瓦Ⅲ2 J2aa群から平瓦Ⅲ2 J2az群とする平瓦の一群、そして玉縁Ⅰ321 Za [J1b] 群や玉縁Ⅰ332 Za [J1b] 群とする丸瓦が多量に出土しているので、それらの瓦も葺き替えに使われたと推測できる。

（2）雨落溝（第11図 写真16,17）

基壇の西辺の西側には、基壇辺に沿うように溝が取り付くが、その位置から雨落溝と認定した。この溝は基壇の北西角から約1.1m北に延びるところで終わることが確認できたが、北西端で東側に折れ曲がって、さらに東向きに延びるかどうかは、府営住宅建築時の造成で東側が大きく掘削されているため確認できなかった。しかし、基壇の北西角よりさらに北に延びた範囲で0.1m程度で

はあるものの東向きに拡張している状況を併わせ考えると、溝が北東へ折れ曲がり、基壇の北辺にも巡っていた可能性を想定する必要がある。雨落溝は、長さが約9.2m、最大幅は約0.87mで、遺構の残りは全体的に悪いが、南へいくほど残りがよく、北にいくほど残りが悪く、浅くなっている。もっとも深いところで約0.12m、もっとも浅いところでは約0.04mを測る。埋土はにぶい橙色弱粘質土(7.5YR6/4)に灰色弱粘質土(N6/)が混じる(写真17下)。遺物としては、土師器の坏、蓋、高坏の片が各1点ずつ、須恵器の坏身の底部片(平底)が2点、金属片1点のほか、平瓦片が30点、丸瓦片が2点出土している。なお、平瓦や丸瓦には平瓦Ⅱ0 Bm群、行基Ⅰ1 Za〈x x ii〉群とするものが含まれる。

5 中門

創建は飛鳥期で、規模は東西幅が約13.4mであるが、南北長については南北両辺ともが確認されていないので確実ではないが、中門周辺の状況からみて9m前後の可能性が高い。

飛鳥期創建時の中門所用瓦は、軒丸瓦としては、軒丸瓦D—行基Ⅰ1 Za群およびそれ以外の軒丸瓦D群や軒丸瓦E群とするものを主体にして、軒丸瓦B—行基Ⅰ1 Za [CgおよびCh]群、軒丸瓦C—行基Ⅰ1 Za [CgおよびCh]群、軒丸瓦A—玉縁Ⅰ2 Za群とするものが使われた。

天平期に南門を造営するとき、中門も再建されている。創建時中門の南側にあった谷を埋め、このときの整地土が、創建時中門の基壇を埋め尽くすまでに盛られたことは、先に述べるように、中門・南門間に参道を整備することからも明らかである。この整地土には、飛鳥期の瓦のみならず、白鳳期の瓦でも「川原寺式」期の瓦が多量に含まれる事実は、天平期での中門再建の想定を補強する根拠となる。

既往の調査成果と新たな調査の目的

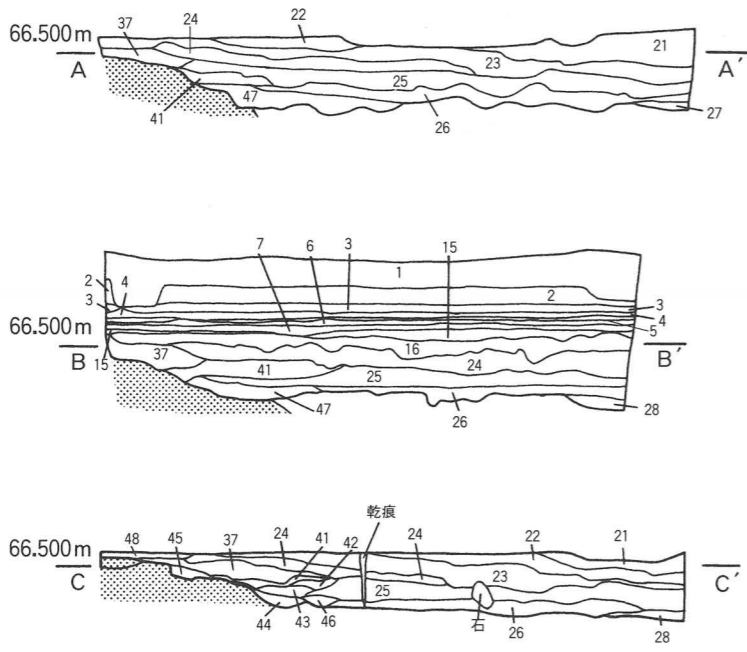
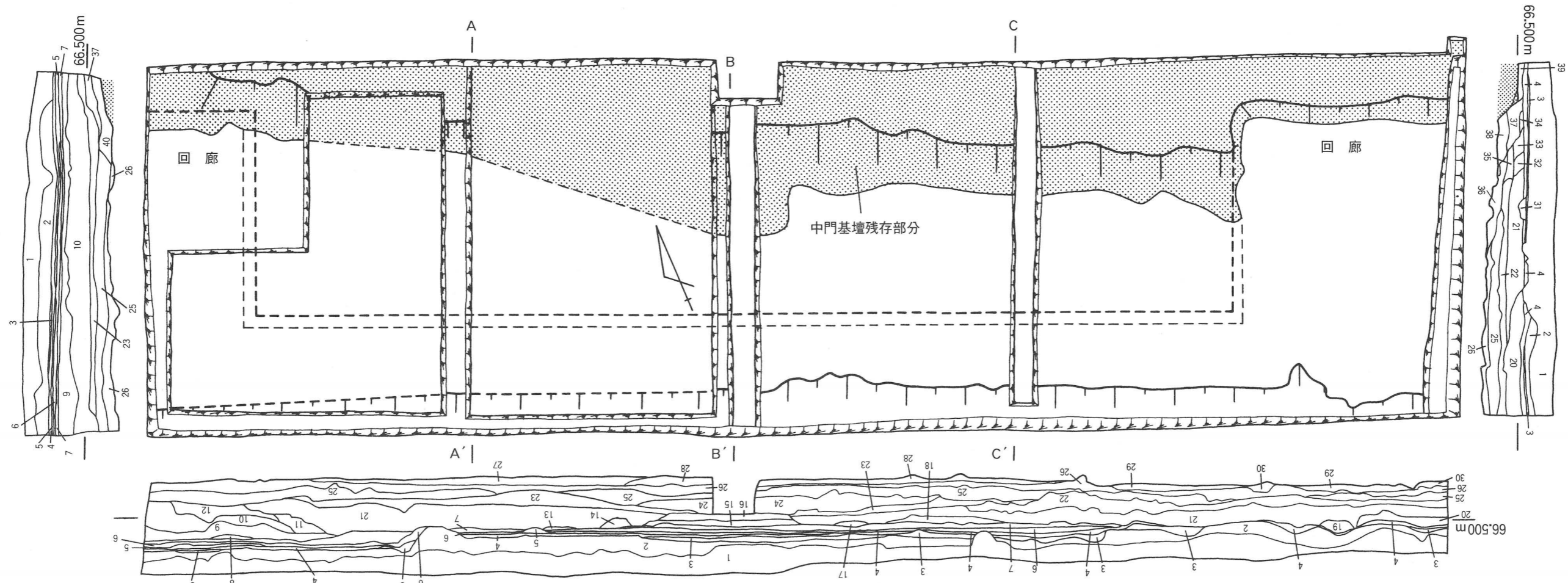
1998年度の調査で初めて確認した(中辻・栗田1999)。東側で南面回廊との取り付け部を確認したので、基壇の東西規模が判ったが、南側が大きく損壊し、回廊取り付け部からの張り出し部分の規模すら確認することができなかった。しかし、中門の回廊取り付け部から約3.2m南側に谷地形が飛鳥期には広がることを確認したので、そこまでに中門の基壇がおさまることは確実である。

2000年度の調査では、中門の基壇の北辺を検出するために第6調査区を設けたが、北辺を確認することはできなかった(栗田2001)。

(1) 基壇(第12図 写真18, 19)

回廊から南側に張り出す基壇のうち東半分の部分をも面的に検出した。基壇は地山の削り出しで作られているが、残存基壇の上面の一部には盛土が認められる。また、基壇が中門東脇の南面回廊と取り付く部分での張り出しが1.5mしか残存していないことと(写真19)、基壇の残存高が約0.4mと低いことを併わせ考えると、基壇の前面がかなり損壊を受けていると考えざるをえない。基壇の周辺で玉石や凝灰岩片が出土していることから、それらが基壇化粧として用いられていたことが推測できるが、残念ながら原位置をとどめていない。

中門の規模は、推定中軸線と中門東脇の回廊の取り付け部までの距離が約6.7mであることから、東西幅は約13.4mと想定できる。南北長については、2000年度の調査で中門の北辺を第6調査区で



1. 盛土 (府営住宅建設時の整地土)
2. 暗灰色土 (N4)
3. 黄灰色土 (2.5Y6/1)
4. 褐色土 (7.5YR4/4)
5. 黄褐色土 (2.5Y5/3)
6. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6)
7. 暗灰黄色弱粘質土にマンガン・白色砂含む (2.5Y5/2)
8. 灰オリーブ色砂質土 (5Y5/2)
9. 灰黄褐色粘土 (10YR5/2)
10. にぶい黄橙色弱粘質土 (10YR6/3)
11. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/8)
12. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
13. 暗灰黄色弱粘質土 (2.5Y5/2)
14. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)
15. 暗灰黄色弱粘質土 (2.5Y5/2)
16. 暗灰黄色弱粘質土 (2.5Y5/2) に明黄褐色粘質土 (10YR6/8) がブロックに混入
17. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)
18. 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1)
19. 灰黄色弱粘質土 (2.5Y7/2)
20. 灰黄色弱粘質土 (2.5Y7/2)
21. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
22. 黒褐色粘質土 (10YR3/1)
23. 黄褐色砂質土 (10YR5/6)
24. 黒褐色粘質土 (10YR3/1)
25. 灰色粘質土 (5Y5/1)
26. 灰色粘土 (5Y5/1)
27. 灰色粘土 (5Y4/1) に黄褐色砂質土 (10YR5/8) がブロックに混入
28. 黒色粘土 (10YR2/1)
29. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6)
30. 明黄褐色粘土 (10YR6/6) と灰色粘土 (5Y5/1) が混入
31. 黄褐色土 (2.5Y5/3)
32. 褐色粘質土 (10YR4/4)
33. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
34. 褐色粘質土 (10YR4/6)
35. 黒褐色粘質土 (10YR3/2)
36. 灰色炭混じり粘質土 (5Y5/1)
37. 灰白色砂 (10YR7/1)
38. 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) に明黄褐色粘質土 (10YR6/6) がブロックに混入
39. 明黄褐色粘質土にマンガン含む (10YR6/6)
40. 黒褐色粘質土 (10YR3/2)
41. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
42. 灰色砂質土 (5Y5/1)
43. 褐灰色砂 (10YR5/1)
44. 灰色砂質土 (N4) に黄褐色粘質土 (10YR5/6) がブロックに混入
45. 灰褐色砂質土 (7.5YR5/2) に明黄褐色粘質土 (10YR6/6) がブロックに混入
46. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
47. 暗灰色粘質土 (N3) に明黄褐色粘質土 (10YR6/6) が混入
48. 灰黄色弱粘質土 (2.5Y7/2)



第12図 中門南半部 (1998年度調査区) 平面図・断面図

も検出できなかったので未だに明らかにできていない。しかしながら、第6調査区全体に飛鳥期創建時の寺域確定のための整地土である黒褐色弱粘質土が認められたことから、第6調査区より南側におさまると推測できる。また南辺については、基壇の南側で谷部地形が検出されたので、それより北側に中門の基壇がおさまることは確実である。これらのことを併わせ考えると、中門の南北長は9m前後の可能性が高い。

なお、中門の基壇の造営時期については、残存基壇の周辺から飛鳥期の軒丸瓦D群（軒丸31、軒丸33）、およびE群とする瓦（軒丸53、軒丸56、軒丸57）が比較的まとまって出土したことから飛鳥期に遡ることが分かる。中門で所用された飛鳥期の瓦には、行基I1Za〈ii〉群、行基I1Za〈x〉群、行基I1Za〔Cg〕群、行基I1Za〔Ch〕群とする丸瓦、および平瓦II20Za〔Cg〕群、平瓦II27Za〔Cg〕群、平瓦II20Za〔Ch〕群、平瓦II27Za〔Ch〕群、平瓦II0Za群などとする平瓦がある。そののちは、白鳳期まで瓦が葺き替えられて中門は存続した。なお、白鳳期の「川原寺式」期に大量に瓦が葺き替えられたことが、その時期の瓦の多さから裏付けられる。それらには、軒丸瓦J群の軒丸瓦、行基I1Za〈vi〉群、行基I1Za〈xviii〉群、行基I1Za〈xx〉群、行基I1Za〈xxi〉群とする丸瓦と、平瓦II0Bp群、平瓦II0Bq群、平瓦II0Za〈iii〉群とする平瓦が認められる。

中門は南門が造営されたときに再建される。再建後の中門の基壇および礎石などの痕跡はすべて後世に削平を受けて確認できていないが、創建時の中門の基壇の上面に整地土が盛られ、その面の南側のところで中門・南門間の参道が整備されるので、地盤の嵩上げによる再建を想定せざるをえない。なお、再建後の中門には、軒丸瓦L群の軒丸瓦、行基I1Za〈xxii〉群の丸瓦、平瓦II0Bk群の平瓦とともに、縄目叩きが施された桶巻き作りの平瓦（平瓦II1Za〔J1b〕群から平瓦II1J1f群の5群のいずれかに当たる）、および一枚作りの平瓦（平瓦III2J2aa群から平瓦III2J2ba群のいずれかに当たる）が多用される。

6 回廊

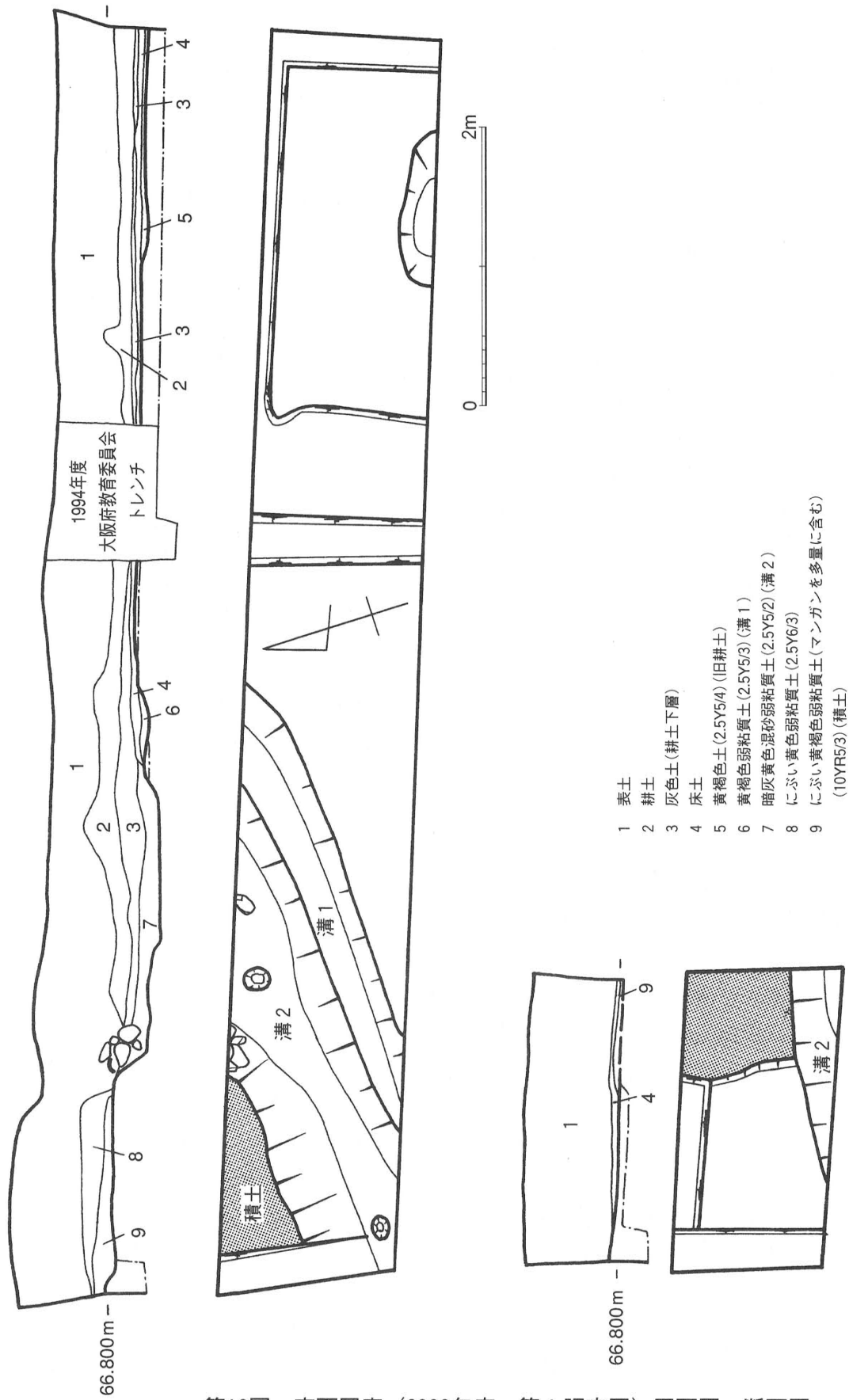
創建は飛鳥期で、中門の両脇から派生した回廊が、中門との取り付け部から18.0mほど延びたのち（伽藍中軸線から約26.0mのところ）、北に曲がって82.0m以上（おそらく83.5m程度）延び、そこで東面および西面の両回廊とも講堂に向けて曲がり、講堂に取り付いたと想定される。

白鳳期に新堂廃寺の寺域が大きく拡張されたあと、西方建物と東方建物が加え建てられるが、そのときに飛鳥期創建時の西面回廊および東面回廊はともに、その東方建物と西方建物の部分が壊されている。おそらく中門から派生した回廊が創建時と同じ規模で、西方建物および東方建物に取り付き、さらに北側に付いた回廊は延びたのちに曲がり、講堂に取り付いていたと想定される。

既往の調査成果と新たな調査の目的

1998年度の調査で初めて回廊の存在が確認できた。

1998年度の本市教育委員会の調査では、飛鳥期創建時の中門の東側脇に取り付けられた南面回廊の取り付け部を確認し（中辻・栗田1999）、同時に併行しておこなわれた大阪府教育委員会の調査区で、さらに東側に続く南面回廊が検出された（小浜ほか1999；井西ほか2001）。この南面回廊は中門と連続していたことから、中門と同じく飛鳥期に創建されたものとされ、中門との取り付け部から東



第13図 東面回廊(2000年度・第1調査区)平面図・断面図

へ約18.0mのところ^(註6)で南東角を検出した。

2000年度には東面および西面の回廊の有無を確認するため、第1調査区と第5調査区を設けた。

(1) 東面回廊基壇 (第13図 写真20)

2000年度の第1調査区において東面回廊の存在を確認しようとしたが、中門東脇で確認された南面回廊から予測できる東辺が、1994年度の大阪府教育委員会の調査で遺構非確認のまま掘削されているうえに、後世の攪乱も著しいのを認めた。表土、旧耕土、そしてその床土下にすぐ地山層を認めるのが、調査区のほぼ全体であった。しかし、調査区の西側一角で基壇の積土と考えられる、にぶい黄褐色弱粘質土（マンガンを多量に含む）が認められたので、東面回廊の一部が残っていると認定した。さらに、寺域の北端部に設けられた1959年予備調査のトレンチ39の東側の部分で約0.59m落ちる段差が検出されていたのであるが（藤・北野 1961）、この位置が伽藍配置の中軸線から約26.0mのところにあたり、1998年度の調査で検出した中門東脇の南面回廊の東端とした位置から北に延ばす延長部に一致してくることから、東面回廊の存在は確実であろう。

回廊の創建時期については、中門と回廊が飛鳥期に同時に建造されていることが確認できるが、東方建物を建てるときに東面回廊が潰されたとしても、東面回廊全体が潰されたのかどうかは問題として残されていた。しかし、1959年予備調査のトレンチ39で検出された段差の東側にも瓦の厚い堆積があり、そこに「山田寺式」期の軒丸瓦が含まれていることから判じると、白鳳期以降にも回廊が機能していた可能性がきわめて高いことが分かる。

調査区1と東方建物周辺で出土する飛鳥期に比定する瓦は、飛鳥期の東面回廊所用瓦であると推測できるが、軒丸瓦にはやはり軒丸瓦D群とするものが多く、丸瓦には行基I1Za [Am]群、行基I1Za < ii > 群のほかに、行基I1Za < x iv > 群、行基I1Za < x v > 群とするものが、また平瓦には平瓦II0Za [Bs]群とするものをまとまって認める。また、白鳳期の「山田寺式」期にあてはまる行基I1Za < x vi > 群と行基I1Za < x vii > 群とするものも比較的まとまって認めるので、それらの瓦に葺き替えられながら、東面回廊は存続したと推測できる。

(2) 西面回廊基壇 (第9, 10図 写真21上)

2000年度の第5調査区において、伽藍配置の中軸線から西方へ約26.0mのところ^(註6)で西側に落ちる段差を確認した。地山の削り出しによる段差であり、1998年度調査で検出した中門東脇の南面回廊の東端位置の中軸線からの距離を西側へ反転させた位置にほぼ対応することから、西面回廊の西辺部と認定した。段差は西側に0.1m程度の緩やかな傾斜として検出できたが、段差の西側に雨落溝が検出できなかった。また、東端は1959年予備調査のトレンチで掘削されていたため、明確な段差を認めることはできなかったものの、このトレンチの東側にはほぼ同じレベルで飛鳥期創建時の整地土とした黒褐色弱粘質土が東へ広がっていることから、回廊基壇の東辺がこのトレンチ内でおさまっていたと推測でき、西面回廊の幅は約6.2mに復元できる。

なお、西面回廊の西側にあった谷を白鳳期に埋め立て、寺域を拡張して西方建物が建てられている。このときに西面回廊が取り壊されて回廊基壇が設けられていた地山面に西方建物のための掘り込み地業がおこなわれていることはすでに述べたとおりである（第10図）。このことから、検出された西面回廊が飛鳥期に設けられたと推測できるが、中門東脇の南面回廊および東面回廊の存続状

況を併わせ考えると、西方建物建造ののちも建物に取り付く回廊として存続した可能性が高い。

西方建物周辺で出土する飛鳥期に比定する瓦は、回廊の瓦として使われていた可能性が高いと考えられる。飛鳥期の西面回廊所用瓦には、軒丸瓦D群と軒丸瓦E群の軒丸瓦、行基 I 1 Za < iv > 群の丸瓦のほかに、東面回廊所用瓦として多く認められた行基 I 1 Za < x iv > 群、行基 I 1 Za < x v > 群の丸瓦と平瓦 II 0 Za [Bs] 群の平瓦を比較的まとまって認める。なお、飛鳥期以降にも回廊が存続したことはすでに述べたところであるが、西面回廊の西辺の西側に落ちる段差は、天平期に築地塀を作るための整地で埋められているが、その整地土から出土した瓦には飛鳥期のものとともに、白鳳期でも「川原寺式」期の行基 I 1 Za < vi > 群、行基 I 1 Za < x x i > 群、平瓦 II 0 Bh群とするもののほかに、天平期に比定する平瓦 II 0 Za < iv > 群とするものが確認される。ただし、整地土からは縄目叩きのつく瓦は出土していない。

7 築地塀

天平期に南門が整備されてからののちに、伽藍配置の中軸線から西側へ約39.0m、東側に約33.5mの位置に築地塀が設けられた。

既往の調査成果と新たな調査の目的

1995年の大阪府教育委員会の試掘調査で築地塀の東辺と推測できる段差を確認しているが、調査範囲が狭すぎたために、基壇全体が検出できず、その段差が築地塀に由来するとは認識されなかったようである（井西1997）。

1998年の大阪府教育委員会の調査で、南門の西側に取り付く築地塀が確認された（小浜ほか1999）。

2000年度の調査では、東西の築地塀を確認するために、第2調査区と第5調査区を設けた（栗田2001）。

(1) 東面築地塀（第13図 写真22上）

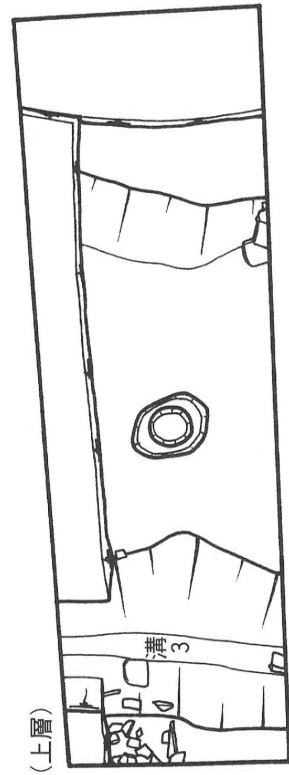
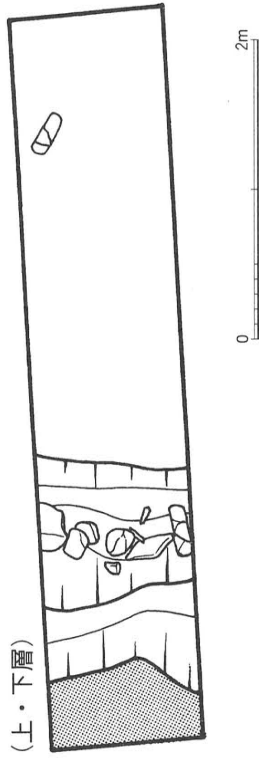
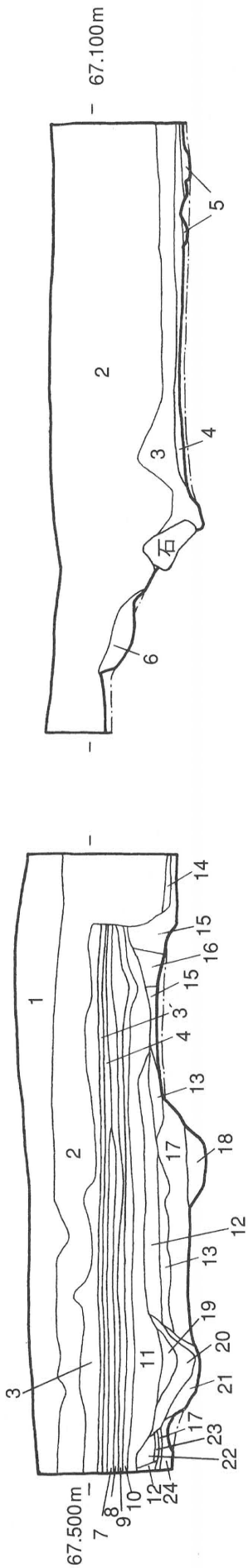
2000年度の第2調査区で検出した。伽藍配置の中軸線から約33.5mの位置を東辺にして、幅が約3.5mで0.3mほどの高まりの地山として検出した。この築地塀の西側には白鳳期から天平期の瓦を含む溝を約0.65mの幅で検出した。築地塀の東側は旧地形の傾斜の変換点にあたり、さらに東側へは大きく落ちている。

基壇の規模については、西面築地塀と比較すると大きいことが気に掛かるが、これについては犬走りなどを含めた基壇の基底面が検出されたと考えておく。なお、1995年度の大阪府教育委員会による試掘調査のトレンチ（D区）で、南北方向の地山の落ちが確認されているが、そこに多量の天平期の瓦が出土したことが報告されている（井西1997）。東面築地塀として検出した東辺を南へ延長させると、この地山の落ちの南北ラインとほぼ一致する。このことから東面築地塀が設けられていたことは確実であろう。

調査区2からは玉縁 I 322 Za [J1b] 群や行基 I 1 Za < x x ii > 群の丸瓦と縄目叩きの施された一枚作りの平瓦が多く出土していることからすると、これらが築地塀に使われていた可能性が高い。

(2) 西面築地塀（第9図 写真22下）

2000年度の第5調査区で検出した。伽藍配置の中軸線から西へ約40.4mの位置を西辺にして、約



- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1. 表土 | 13. にぶい黄色砂混じり弱粘質土 (2.5Y6/4) |
| 2. 盛土 | 14. 灰土 (5Y5/1) |
| 3. 耕土 (1) | 15. 明黄褐色砂混じり弱粘質土 (10YR6/8) |
| 3. 耕土 (2) | 16. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) |
| 4. 床土 | 17. 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) |
| 5. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/2) | 18. 灰白色粘質土 (5Y7/1) (雨落ち溝) |
| 6. 暗灰黄弱粘質土 (2.5Y5/2) | 19. 明灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) |
| 7. にぶい黄色土 (2.5Y6/3) (旧耕土 I) | 20. 灰色粘質土 (5Y5/1) |
| 8. 褐色弱粘質土 (10YR4/6) (旧耕土 II) | 21. 灰オリーブ色弱粘質土 (5Y6/2) |
| 9. 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) (旧耕土 III) | 22. にぶい黄色弱粘質土 (2.5Y6/4) |
| 10. 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) | 23. 黄灰色弱粘質土 (2.5Y5/1) |
| 11. 黄灰色弱粘質土 (2.5Y4/1) | 24. 灰白色粘質土 (5Y7/2) |
| 12. にぶい黄色弱粘質土 (2.5Y6/3) | |

第14図 東面築地塀 (2000年度・第2調査区) 平面図・断面図

2.4mの幅で0.07mほどの高まりとして認めただけである。築地塀には犬走り、雨落溝などは確認していない。築地塀は、西方建物を建てるために埋められた西側の谷の上を、再度、にぶい褐色弱粘質土（7.5Y5/3）で整地し、その上に基壇土として下からオリーブ褐色粘質土（2.5Y4/6）、明黄褐色粘土（10YR6/6）と積み上げたのちに建造する。

なお、1998年度の調査で検出された南門の西側に取り付く築地塀は、推定幅が約2.1mで、約0.6m幅の犬走りが付くと報告されている（小浜ほか1999）。その規模は西面築地塀のそれとほぼ整合する。

西面築地塀を建造するために施した整地土から、天平期に比定する平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群とする平瓦が認められるものの、縄目叩きのつくものは認めなかったため、同じ天平期の瓦でも、縄目叩きのつく瓦の方が遅れて使われたと推測できる。そこで、西面築地塀周辺で出土した瓦から、縄目叩きのつく瓦を抽出すると、丸瓦では玉縁Ⅰ332 Za [J1b] 群とするものが該当する。

8 参道

塔と金堂のあいだに東西幅が約3.6mの瓦敷参道が、また中門と南門のあいだに東西幅が2.5～3.0mで、長さは南北に32.0mの参道が設けられていた。

既往の調査成果と新たな調査の目的

1998年度の本市教育委員会と大阪府教育委員会の調査において、中門と南門のあいだの参道が（中辻・栗田1999）、また2000年度の調査で、塔と金堂のあいだの参道が確認された（栗田2001）。

（1）塔・金堂間参道（第15図 写真23上）

2000年度の第3調査区で、塔基壇の北辺から約1.0m北に寄るところで、平瓦および丸瓦の破片を、凸面あるいは凹面を上にして敷き詰めた遺構を検出した。南北長が約1.8m、東西幅は約0.8mの範囲であるが、西辺位置が伽藍配置の中軸線から約1.8mのところにあたることと、瓦の検出範囲がさらに北方および東方の調査区外に広がる状況を示すことが分かった。このことから参道は、東西幅が約3.6mで、塔・金堂間に存在していたと推測できる。

敷き詰められた平瓦には、凸面に格子叩きが残るもののほかに、縄目叩きの残るものも存在する。天平期に使用されていた参道と推測できる。なお、参道面が塔の残存基壇とほぼ同じレベルで検出されたことから考えると、塔基壇が如何に削平を受けているかが分かる。

（2）中門・南門間参道（第16図 写真23下）

1998年度の調査で検出した。東西幅は2.5～3.0m、南北に長さが約32.0mを測る。参道の両側にはおのおの1条の溝が設けられている。それらの参道側溝の幅は0.3～0.7mである。

9 宝幢遺構

南門の前面に6ヶ所、塔の南面の西側で2ヶ所、塔の西面の西側で塔辺に平行する方向に2ヶ所が検出された。南門の宝幢遺構を別にして、ほかはその間隔から2ヶ所で1組をなすと考えられるので、幢竿支柱の掘方の可能性が高い。なお、塔の東側は未調査であることから、西側と対応する位置にも設けられていたかどうかは不明である。

既往の調査成果と新たな調査の目的

1998年度の大阪府教育委員会の調査で、南門の南側で6ヶ所の宝幢遺構が確認された。また2000年度の第3調査区で、塔の南辺に沿って1ヶ所、第5調査区で塔の西側で1ヶ所を確認した。ここでは2000年度の調査で検出したものに限って記述する。

(1) 塔の南辺の宝幢遺構

(第3図 写真24上)

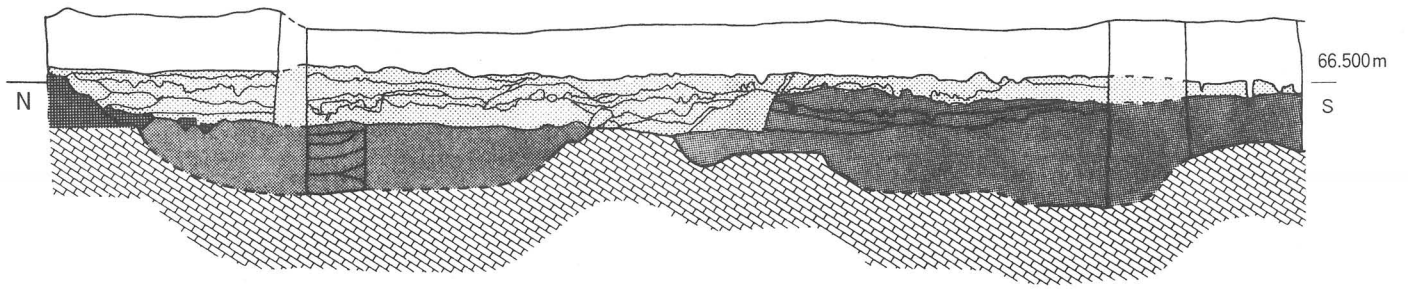
2000年度の第3調査区で検出した。塔の西側で塔基壇の南面に平行する、2ヶ所の楕円形の掘方（ピット9とピット10）である。ピット9はほぼ $0.68\text{m} \times 0.44\text{m}$ の平面形で、深さは 0.30m 前後であり、ピット10はほぼ $0.25 + \alpha \text{m} \times 0.44\text{m}$ の平面形で、深さは 0.23m 前後を測る。掘方の検出面が天平期の整地土上面から掘り込まれていると判断できるので、天平期に使用されたものである。埋土は灰黄褐色粘質土（10YR4/2）である。2つの掘方の間隔は約 1.5m である。



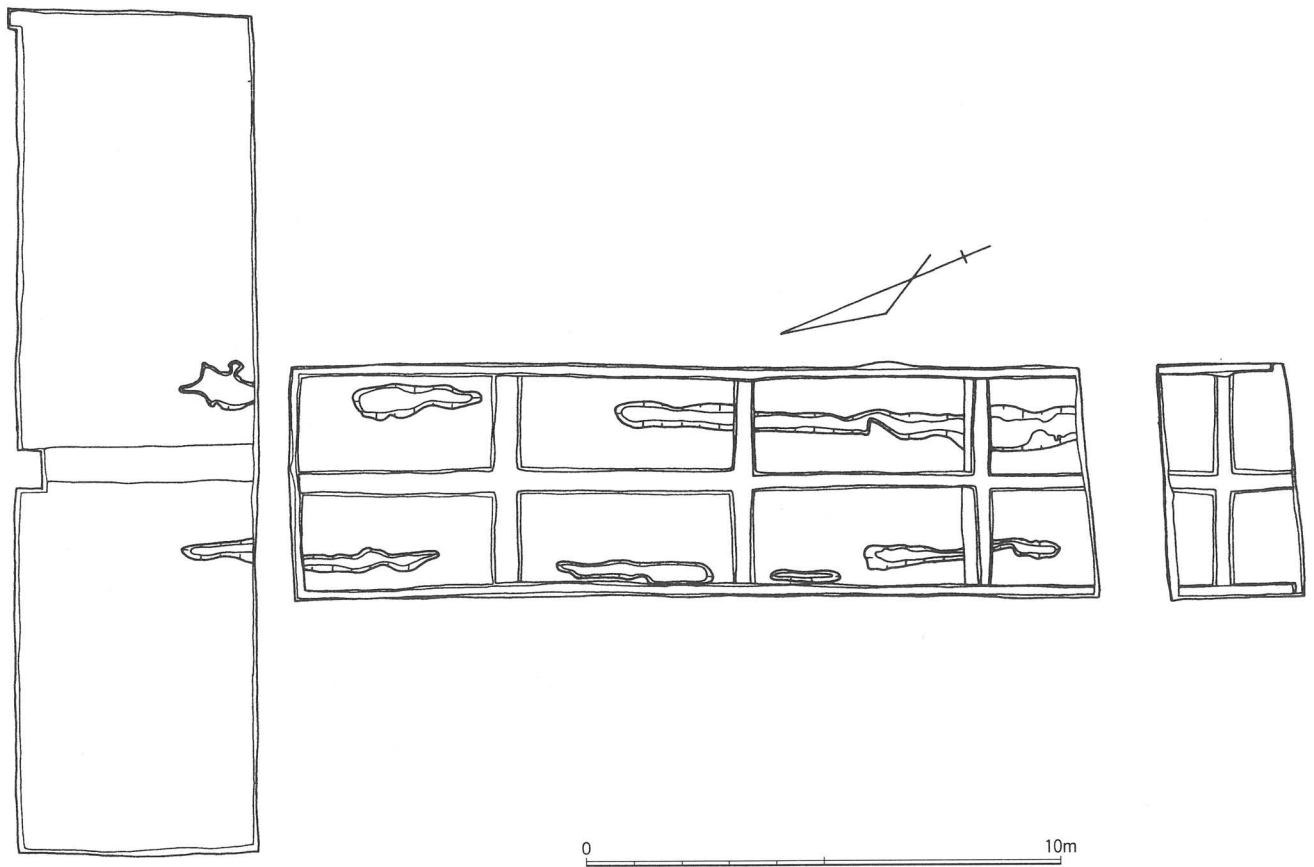
第15図 塔・金堂間参道平面図

(2) 塔の西側の宝幢遺構（第9図 写真24下）

2000年度の第5調査区で検出した。塔基壇の西辺から約 5.6m 西に寄るところで、前述の宝幢遺構から 2.0m ほど北にずれて、同じく塔の南辺に平行して2ヶ所の掘方（ピット11，ピット12）を検出した。ピット11はほぼ $0.58\text{m} \times 0.45\text{m}$ の平面形で、深さは約 0.53m 前後であり、ピット12はほぼ $0.65\text{m} \times 0.44\text{m}$ の平面形であり、深さは 0.30m 前後を測る。塔の南辺の宝幢遺構と同じく、掘方の



- 創建当初の遺構・中門基壇土
- 中門・南門間の整地土
- 地山
- 谷地形埋土



第16図 中門・南門間参道平面図・断面図

検出面が天平期の整地土上面から掘り込まれていると判断できるので、天平期に使用されたものである。埋土は灰黄褐色粘質土（10YR4/2）である。2つの掘方の間隔は約1.5mある。

第3項 寺域外の調査

新堂廃寺の寺域推定北西端から北西に約30.0mの所での調査成果である（第17図 写真25）。溝と掘立柱建物2棟のほか、性格の不明なピットが検出されている。溝には新堂廃寺の寺域の拡張に伴って掘削された溝1と11世紀以降の掘立柱建物に伴う区画溝1、2とがある。

ここでは新堂廃寺に関連する溝1について述べるが、溝1の廃絶時期を知るためには、掘立柱建物1に伴う区画溝1も関係してくることから、この2つの遺構についてのみ簡単に触れることにする。

溝1（第18図 写真26）

新堂廃寺の築地塀の推定北西端から北西へ約25.0mで検出された北から南方向に流れる溝である。新堂廃寺の伽藍中軸線にほぼ平行して流れ、規模は幅2.4m、深さは1.7mを測る。検出した部分の長さは18.5mで、地山を掘削して作っている。溝の底面は幅が0.4mを測る平坦面をなし、溝底に堆積した層は、北側では下層部分でわずかな流水堆積を示すのに対して、南側では溝底から0.2mの厚さの部分で、淡灰白黄色混砂粘質土にブロック状に暗灰色粘質土が混じって平坦に堆積していることから、常に灌水して、泥が溜まったような状態になっていたと推測できる。それに対して最下層とした溝底から0.2mをこえての上側の堆積状況は、かなり激しい流れによったと推測できる。

遺物としては、溝底より0.65m上から始まり、さらにその上の約1.05mに至るあいだの土層（上層・下層）に、7世紀～8世紀に比定する少量の土器類とともに（図版128）、飛鳥期から天平期の瓦が多量に出土した。その土層より下側の層（最下層）は激しい流れの流水堆積を観察するが、ここからの遺物の検出はほとんどない。

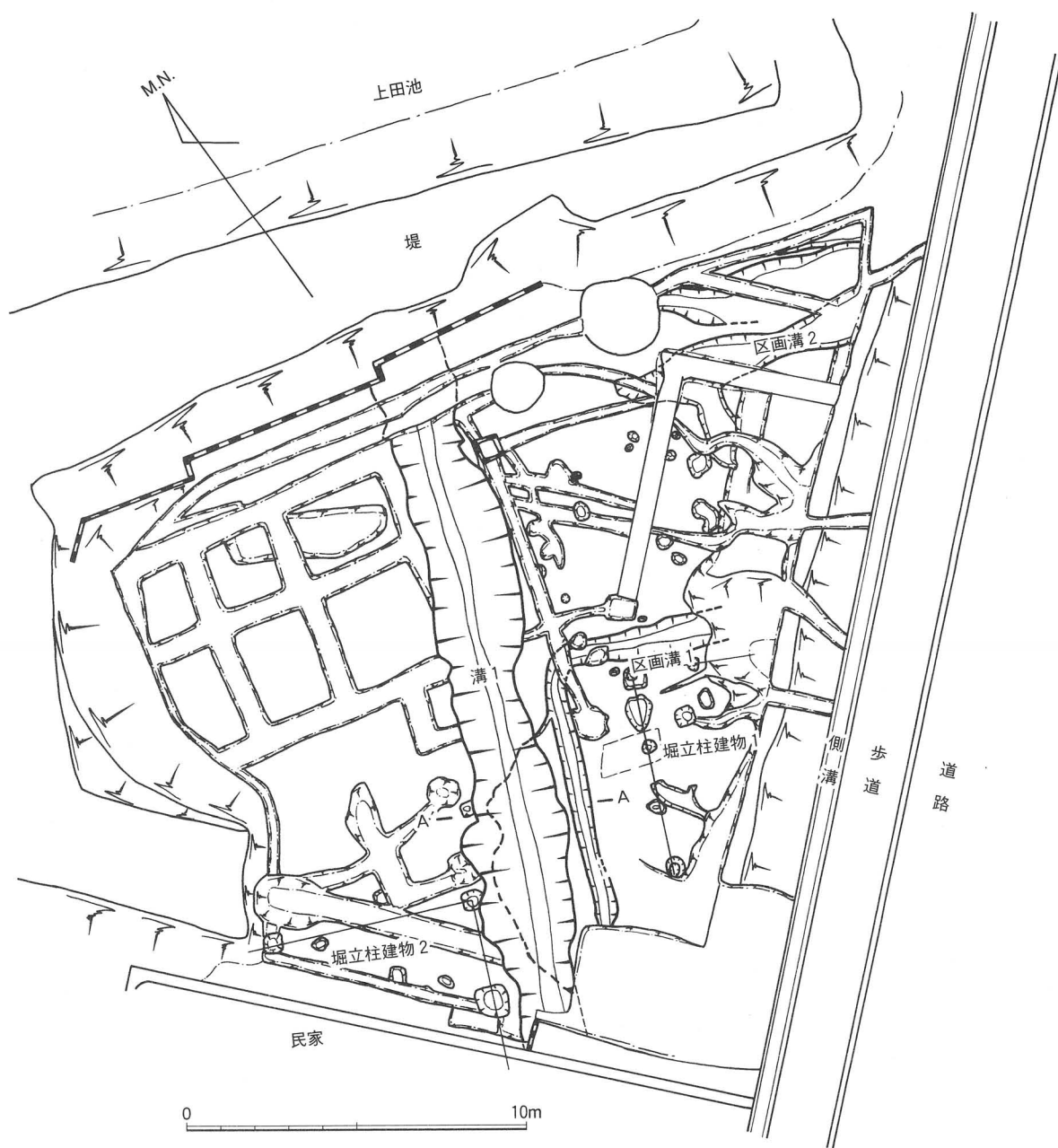
溝1が新堂廃寺の中軸線に平行すること、深く掘削されていること、そして北西にあたる羽曳野丘陵からの流水を集める溝としての機能を果たしていたこと、それら3点を併わせ考えると、溝1の掘削時期は、西面回廊のすぐ西にあった谷が西方建物を建てるために埋め立てられたとき、その谷に代わる排水施設として、西側に掘削されたと考えられる。

廃絶時期は11世紀ころと推測できるが、溝1の上部に重複して検出した区画溝1の状況から考えてのことである。また、溝1内の瓦の堆積状況から判じると、飛鳥期から天平期に比定する瓦が混在しているので、新堂廃寺が廃絶されたのちに、それまで新堂廃寺に使われ、機能を失ってどこかに集め置かれていた瓦が溝を埋めるのに一気に捨てられたと考えられる。

なお、この溝からは熔着した平瓦も出土している（写真142）。

区画溝1（第17図）

掘立柱建物1の回りを取り囲む溝のうちの、北側と西側の部分をL字状に検出した。規模は、西側にあたる溝が、幅は0.5m、深さが0.2mを測る。この溝の西側の部分がさらに西側に冠水し、埋没した溝1を掘り込んでいるのを認める。この冠水して広がった範囲に、溝1に廃棄されていた新

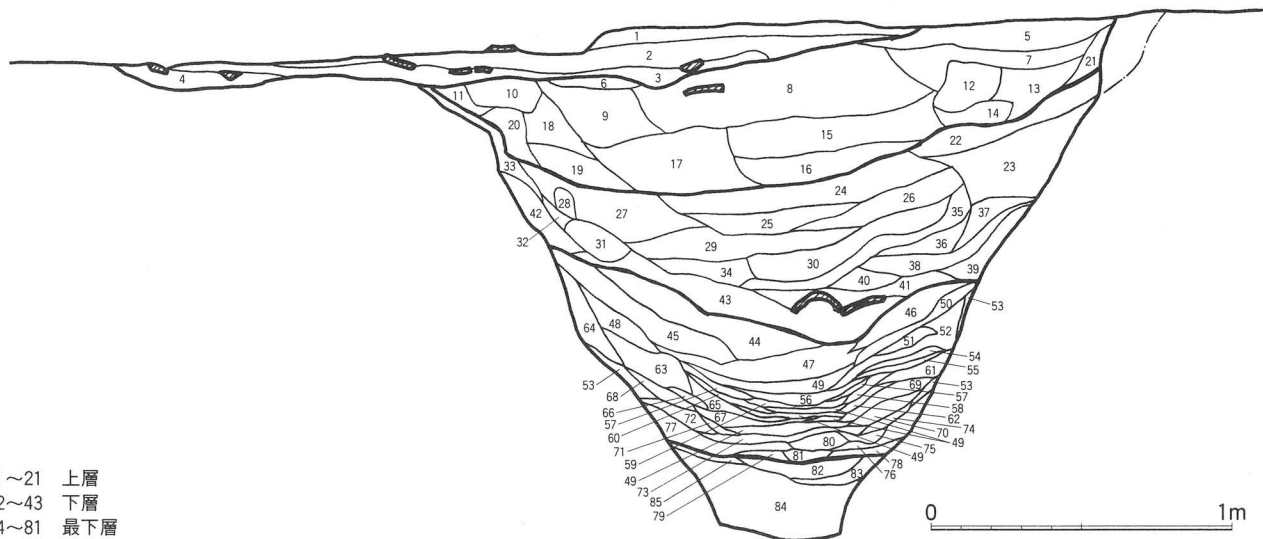


第17図 寺域外西側の調査区（1984年度調査区）平面図

堂廃寺所用瓦の再堆積とともに、9世紀末～11世紀に比定する遺物が出土した（図版128）。この区画溝からは、14世紀代まで下る土師器も出土した。この区画溝1の位置よりも北側に、方位も規模もほぼ同じくする区画溝2も存在することから考えると、その区画溝2も別の掘立柱建物に絡むも

A
79,000m

A'



溝1

- 5~21 上層
- 22~43 下層
- 44~81 最下層
- 82~84 溝底

【区画溝】

- 1. 灰茶褐色土
- 2. 褐灰茶色土
- 3. 灰黄色砂質土
- 4. 濁灰色砂質土 (炭片若干含む)

【溝1】

- 5. 黄灰褐色土
- 6. 黄茶灰色土
- 7. 濁褐灰黄色弱粘質土
- 8. 灰褐色土に黄茶色土が斑に混じる
- 9. 濁灰褐黄色弱粘質土
- 10. 黄褐灰色土
- 11. 濁灰褐黄色弱粘質土 (9よりやや褐色が強い)
- 12. 濁褐黄灰色土
- 13. 褐灰黄色土
- 14. 暗褐黄色土
- 15. 黄褐色土に灰色土が斑に混じる
- 16. 灰褐色土に黄灰色土が斑に混じる
- 17. 灰色土に黄褐色土が斑に混じる
- 18. 灰黄褐色土
- 19. 灰褐色弱粘質土
- 20. 濁灰褐色弱粘質土
- 21. 濁褐灰黄色弱粘質土 (7よりやや黄色が強い)
- 22. 灰褐色土に黄灰色土が斑に混じる (16よりやや褐色が強い)
- 23. 淡黄灰白色細砂 (葉層状を呈する)
- 24. 灰白色細砂 (ブロック状に灰黄白色粘質土が混じる)
- 25. 黄灰白色シルト (葉層状を呈する)
- 26. 黄灰白色砂質土
- 27. 灰黄白色砂質土 (葉層状に茶色砂質土が入る)
- 28. 灰白色混砂粘質土 (ブロック状に暗灰色混砂粘質土が混じる)
- 29. 濁灰色混砂粘質土 (ブロック状に淡灰白色細砂が混じる、炭化物含む)
- 30. 暗灰色混砂粘質土 (ブロック状に淡灰白色細砂が混じる)

- 31. 黄灰白色砂質土 (ブロック状に暗灰色粘質土が混じる、炭化物含む)
- 32. 濁灰黄色混砂粘質土 (ブロック状に暗灰色粘質土が混じる)
- 33. 明茶灰白色砂質土 (ブロック状に暗灰色粘質土が混じる、炭化物含む)
- 34. 明茶灰白色砂質土
- 35. 淡灰白色砂質土 (ブロック状に灰色混砂粘質土が混じる)
- 36. 明茶灰黄色砂 (ブロック状に暗灰色粘質土が混じる)
- 37. 明茶灰黄色砂
- 39. 明茶灰黄色砂質土
- 39. 黄灰色粘質土
- 40. 黄灰色混砂粘質土
- 41. 濁黄灰色粘質土 (ブロック状に灰白色砂質土及び暗灰色粘質土が混じる)
- 42. 黄灰色粘質土 (暗灰色粘質土が葉層状に入る)
- 43. 灰色粘土 (若干の砂混じる)
- 44. 暗灰色混砂粘質土 (葉層状に明黄茶色砂質土が入る)
- 45. 淡灰青黄色砂土 (ブロック状に暗灰色粘質土が若干混じる)
- 46. 淡灰白色砂質土 (ブロック状に暗灰色粘土が若干混じる)
- 47. 灰白色粘土 (葉層状に明黄茶色砂質土が入る)
- 48. 灰白色混砂粘質土
- 49. 灰白色粘土 (葉層状に明黄茶色砂質土が入る)
- 50. 灰白色混砂粘土 (葉層状に明黄茶色砂質土が入る)
- 51. 淡黄灰白色細砂
- 52. 灰白色砂質土
- 53. 灰色砂質土
- 54. 淡灰色細砂
- 55. 灰白色細砂 (ブロック状に暗灰色粘土が混じる、葉層状に明黄茶色細砂が入る)
- 56. 灰白色粘土 (ブロック状に暗灰色混砂粘

- 土が一部混じる)
- 57. 灰白色細砂
- 58. 淡灰白色砂質土 (葉層状に明黄茶色細砂が入る)
- 59. 灰白色粘土 (ブロック状に明黄茶色砂質土が一部混じる)
- 60. 明黄茶色細砂 (ブロック状に灰色細砂が混じる)
- 61. 灰白色細砂
- 62. 灰白色砂質土 (ブロック状に明黄茶色細砂が混じる)
- 63. 灰白色砂質土
- 64. 灰白色砂質土 (炭化物含む)
- 65. 明茶灰白色混砂粘質土
- 66. 淡黄灰白色細砂
- 67. 灰色混砂粘質土 (葉層状に明黄茶色細砂が入る)
- 68. 黄白色細砂
- 69. 黄白色細砂 (葉層状を呈する)
- 70. 灰黄色混砂粘質土 (葉層状を呈する)
- 71. 灰白色粘質土
- 72. 灰白色細砂 (サンドイッチ状に淡黄灰白色細砂が入る)
- 73. 淡灰白色粘質土
- 74. 灰黄色細砂
- 75. 淡灰色細砂
- 76. 黄灰色細砂
- 77. 灰白色混砂粘質土
- 78. 黄灰白色細砂
- 79. 灰白色混砂粘質土
- 80. 明茶黄灰色粘質土
- 81. 灰色粘質土 (炭化物細片含む)
- 82. 淡茶灰白色砂 (部分的に暗灰色混砂粘質土が混じる)
- 83. 淡灰白色混砂粘質土 (ブロック状に暗灰色混砂粘質土が混じる)
- 84. 淡灰白色混砂粘質土 (ブロック状に暗灰色粘質土が混じる)
- 85. 灰白色細砂 (ブロック状に淡黄白色細砂が混じる)

第18図 溝1・区画溝1断面図

のと思われるので、11世紀ころに新堂廃寺が廃絶されたのちのこの周辺には、区画溝の巡る掘立柱建物が少なくとも2棟はあったことが確認されている。このほか区画溝は確認されていないものの、別の掘立柱建物も存在することも併せ考えると、このあたりに建物がより多くの数で広がっていたと推測できよう。

第2節 オガンジ池瓦窯跡

新堂廃寺跡の北西部にある御観寺池の東北隅に操業時期を異にする2基の瓦窯が確認されている。操業順にⅠ号窯、Ⅱ号窯として記述する。

第1項 Ⅰ号窯 (第19～21図 写真28～32)

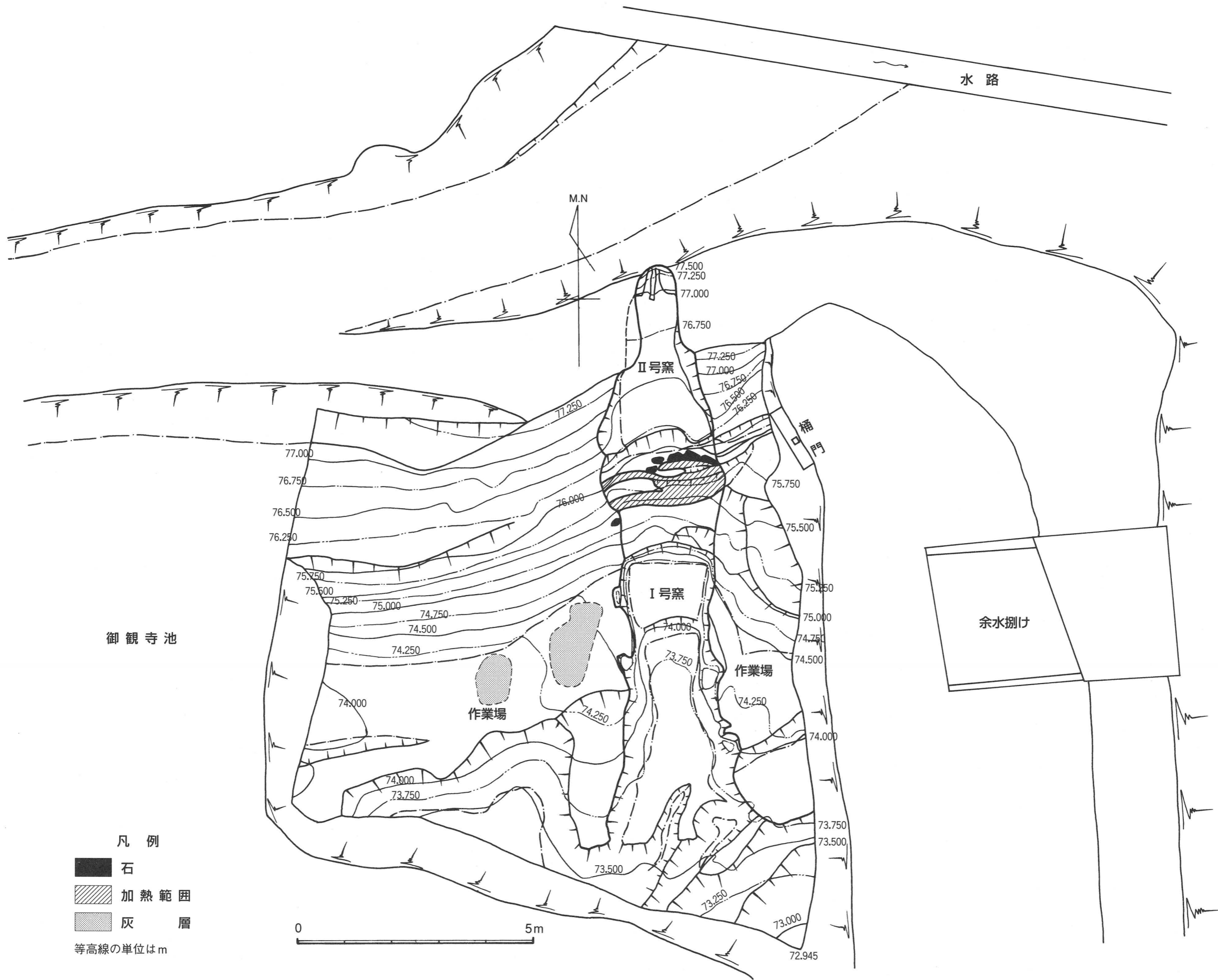
丘陵の地山を掘り込んで構築した有階有段式の登窯で、焼成室、燃焼室、焚口、前庭部が残っていた。天井部は崩壊し、煙道部と焼成室の上半部はⅡ号窯によって破壊されていた。検出長は3.5m、焼成室の最大幅は2.0mを測る。Ⅱ号窯燃焼室の下層からⅠ号窯焼成室の床面と、Ⅱ号窯の煙道部直下で飛鳥期に比定する平瓦Ⅱ0 Da群 (平182) や平瓦Ⅱ20 Za群とする平瓦、行基Ⅰ1 Za〈X V〉群 (行基109) とする丸瓦などが窯壁の補修に使われていたのを検出したので、当初のⅠ号窯の全長は9.5mはあったと考えられる。窯の主軸は磁北に対してN3° Wである (第19図)。

窯体は、長胴の窯体部に焼成室と燃焼室をもち、焚口部分からハの字状に開く平面形態の前庭部をもつ。この焚口には作り替えを認める。最初はハの字状の前庭部の付け根に焚口を設けていたが、そののちさらに上部にあった燃焼室と焼成室の境目のところに、焚口を新たに作り直している。

最初の焚口は幅が0.7mで、そのときの燃焼室は、長さが0.2m、幅は0.1mの長円形で、底面は浅い皿状に窪んだ部分を呈する。燃焼室と、より北側にある焼成室とは、高さが0.3mの低い段によって分けられる。燃焼室から前庭部にかけて、掻き出した灰の層が堆積している。このときの焼成室は、Ⅱ号窯を作るときに破壊されたので、平面的には長さを1.6mの部分しか検出できなかったが、断面観察からは、Ⅱ号窯の燃焼室の床面の下に確認する部分を加えて、長さが3.5mの部分が残っている。本来の窯体の長さは7.5m近くはあったと思われる。焼成室の床面には階段が設けられていたが、残存しているのは1段の部分だけである。しかし、Ⅱ号窯の焼成室の下側に残る床面の部分を含めると3段は確認でき、本来の窯体の長さを想定すると、おそらく5～6段の階段状構造が作られていたと思われる。焼成室の床面の勾配は約30度である (第20図)。

そののち、燃焼室の床面に多くの瓦や粘土を入れて、焼成室と同じ高さまで積み上げ、燃焼室と焼成室を平坦にしている。この平坦面は硬く焼き締まっているので、この上面を焚口とする燃焼室に作り替えて、使ったことが推測される。つまり、上部に焚口を移設し、焼成室の長さを縮めて操業したと考えられる。焚口部分の内側の片側には、粘土と行基式丸瓦 (行基101, 行基103) を置いて、わずかに幅を狭めて焚口を作り出している (上部焚口)。粘土は瓦と窯壁のあいだに入れられているが、焼かれた結果、きわめて堅くなっている。反対側は、対称的に同じ構造を認めるはずであったが、遺憾ながら、その痕跡すら残っていなかった (第21図)。このときの長さを縮められた焼成室と燃焼室の境目には、もとの焼成室に設けられていた約0.7mの段がそのまま使われている。

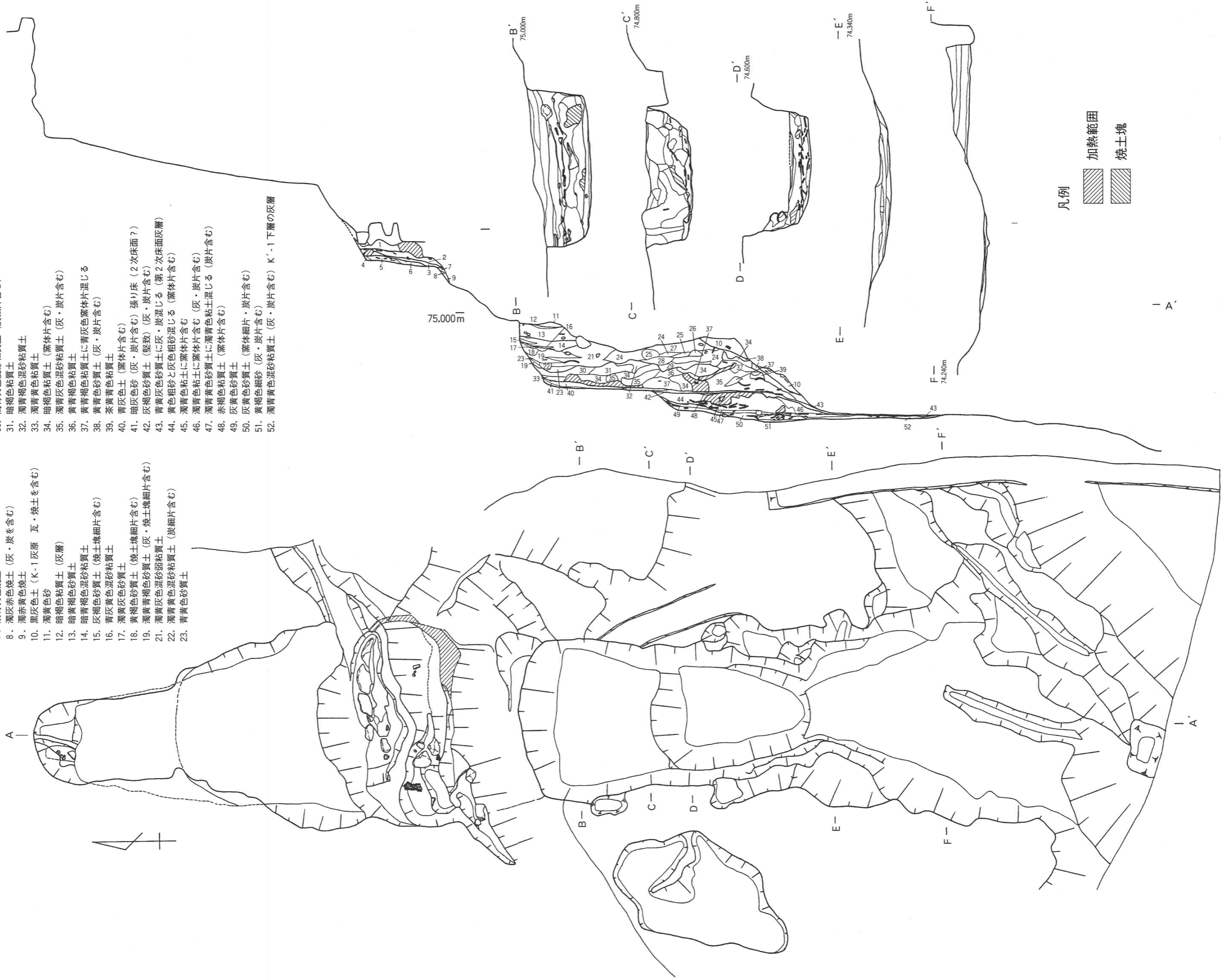
検出したⅠ号窯は、遺構の保存を優先して、最終床面を確認したところで、調査を終了した。そ



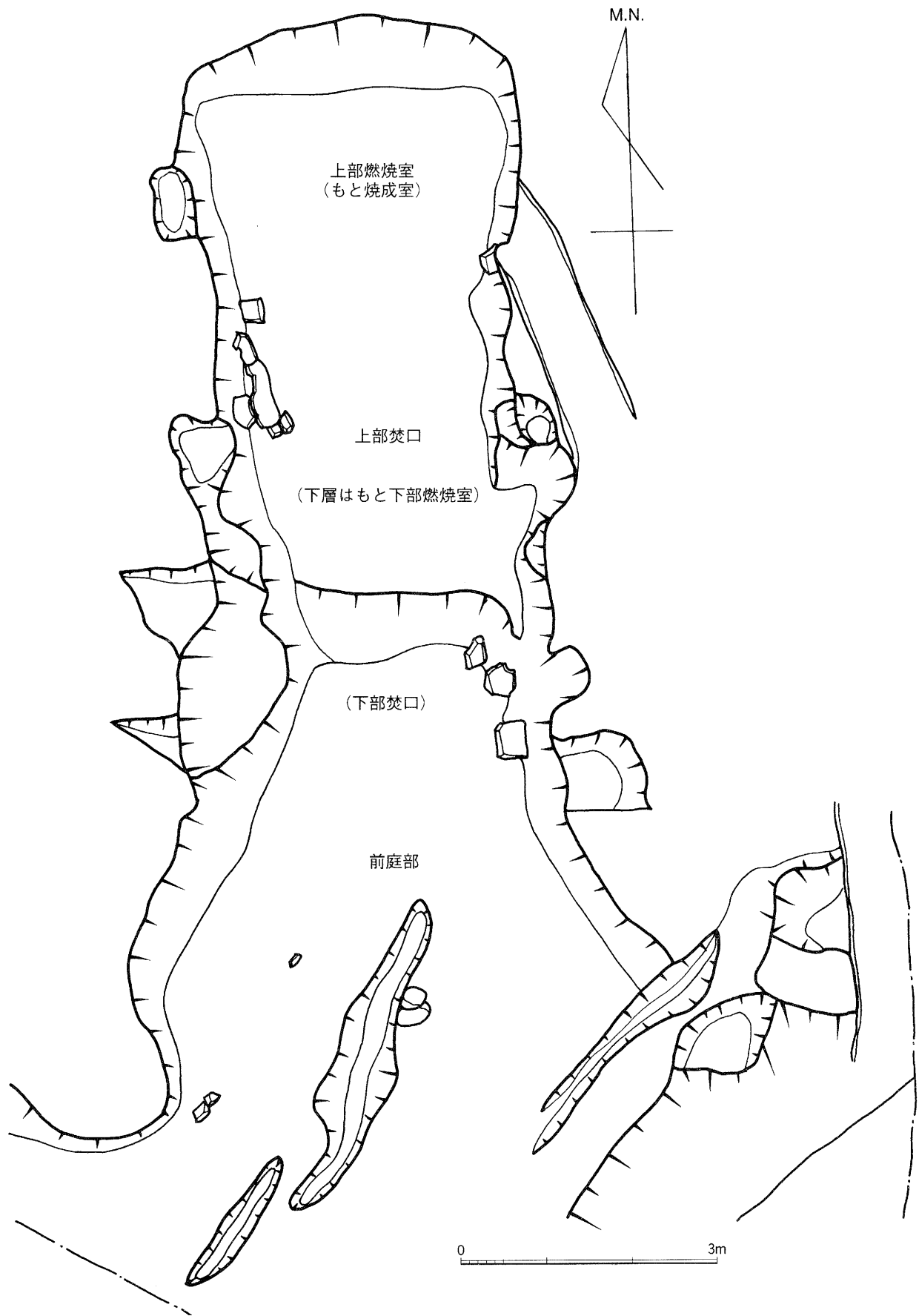
第19図 オガンジ池瓦窯跡（I・II号窯）平面図

1. ロストル (粘土)
2. 淡黄灰色焼土 (灰・炭を含む)
3. 黒灰色灰 (第2次床面灰層)
4. 青灰褐色混砂粘質土
5. 赤褐色砂質土
6. 濁黄灰色砂質土 (灰・炭を含む)
7. 淡黄黄色焼土 (灰・炭を含む)
8. 濁赤赤色焼土 (灰・炭を含む)
9. 濁赤黄色焼土
10. 黒灰色土 (K-1 灰原 瓦・焼土を含む)
11. 濁黄色砂
12. 暗褐色粘質土 (灰層)
13. 暗黄褐色砂質土
14. 暗青褐色混砂粘質土
15. 灰褐色砂質土 (焼土塊細片含む)
16. 青灰黄色混砂粘質土
17. 濁黄灰色砂質土
18. 黄褐色砂質土 (焼土塊細片含む)
19. 濁黄青褐色砂質土 (灰・焼土塊細片含む)
21. 濁黄灰色混砂粘質土
22. 濁黄黄色混砂粘質土 (炭細片含む)
23. 青黄色砂質土

24. 濁青褐色混砂粘質土 (炭細片含む)
25. 淡黄灰色焼土 (灰・炭を含む)
26. 濁青褐色粘質土
27. 黄青褐色砂質土
28. 黄灰白色砂質土 (灰・炭片含む)
29. 濁黄青褐色混砂粘質土 (黄みがかる)
30. 濁黄黄色混砂粘質土 (炭細片含む)
31. 暗褐色粘質土
32. 濁青褐色混砂粘質土
33. 濁黄黄色粘質土
34. 暗褐色粘質土 (窯体片含む)
35. 濁青灰色混砂粘質土 (灰・炭片含む)
36. 黄青褐色粘質土
37. 黄青褐色粘質土に青灰色窯体片混じる
38. 黄青色砂質土 (灰・炭片含む)
39. 茶黄青色粘質土
40. 青灰色土 (窯体片含む)
41. 暗灰色砂 (灰・炭片含む) 張り床 (2次床面?)
42. 灰褐色砂質土 (堅致) (灰・炭片含む)
43. 青黄灰色砂質土に灰・炭混じる (第2次床面灰層)
44. 黄色粗砂と灰色粗砂混じる (窯体片含む)
45. 濁青色粘土に窯体片含む
46. 濁青色粘土に窯体片含む (灰・炭片含む)
47. 濁黄黄色砂質土に濁青色粘土混じる (炭片含む)
48. 赤褐色粘質土 (窯体片含む)
49. 灰黄色砂質土
50. 灰黄色砂質土 (窯体細片・炭片含む)
51. 黄褐色細砂 (灰・炭片含む)
52. 濁黄黄色混砂粘質土 (灰・炭片含む) K'-1 下層の灰層



第20図 オガンジ池瓦窯跡 (I・II号窯) 平面図・断面図



第21図 オガンジ池瓦窯跡 (I号窯) 上部焚口・燃烧室平面図

のため操業開始時の窯体の状況については確認できていない。しかし、窯の焚口から南へ約8.0mにある御観寺池の樋門工事に伴う立ち会い調査でI号窯の灰原が確認され、そこから多量の飛鳥期に比定する瓦を検出したことから、窯の操業の開始時期は飛鳥期に遡ることが確実にになった。

I号窯の上半部は、天平期に入ってから構築されたII号窯によってすべて破壊されている。つまり、I号窯の上半部は平窯（II号窯）に、下半部はそのII号窯の作業面に作り替えられている。II号窯の構造については、次の記述に譲るが、I号窯の下半部が作り替えられる作業面とは、I号窯の最終の燃焼室の部分（上部燃焼室、すなわちもと焼成室）と、I号窯のもともとの燃焼室の部分（下部燃焼室）とを、最終の焚口より0.7mほど上の高さまで、すなわち焼成室の高さと同じレベルまで、粘土と瓦を埋めて平坦面に行っているのである。さらにそれと同じレベルで、窯体の両側もそれぞれ約3.0mの外側の範囲も含めて平坦にし、結果として広い作業面を確保している（第19図）。なお、この平坦面の南辺からの斜面にはII号窯から掻き出されたと推測できる灰が層をなすのが確認されている。

以上のように確認した焼成室、燃焼室のほか、2度にわたって焚口部および作業面を平坦に作り直すのに埋めた土に瓦資料を認める。最初の燃焼室を埋めた土からの出土資料には、飛鳥期に比定する瓦や埴（埴2～4）（図版125, 126）のほか、「山田寺式」期に属する軒丸瓦F群、軒平瓦AA4群、平瓦II0Za〈i〉群、平瓦II0Za〈ii〉群、行基I1Za〈xvi〉群とする瓦が比較的にとままって出土しているが、II号窯の作業面を作るのに埋めた土からは、飛鳥期から白鳳期にあてられる瓦が含まれる。

注目すべきは、この層に見つかった玉縁I2Za群とする丸瓦（玉縁5）である。型木I2とする造瓦器具に特徴をもつこの丸瓦は、飛鳥期にあてることであるが、図版25と同じく写真60に示すように、幅を半分する中央に穴が穿たれている。ところで大阪大学保管資料に完形品（藤・北野1961：図版第2）を見るように、この群の丸瓦でそのような穴を穿たれたものは、今までに新堂廃寺跡に知られる限りでは、すべてが軒丸瓦の丸瓦部なのである。また、飛鳥期に比定される軒丸瓦の丸瓦部は、白鳳期のそれとともに、すべてが行基式のもの付き、玉縁式のもの付き、軒丸瓦は天平期のものであると言えるなかで、唯一玉縁式のもの付き、玉縁式のもの付き、この玉縁I2Za群とするものである。しかもそのときの瓦当部は軒丸瓦A群に限られる。そうすると、この丸瓦は軒丸瓦の瓦当部がはずれたものと考えられるべきであろう。この事実が示唆するところは何か。「最古型式」の瓦はオガンジ池瓦窯では焼成されていなかったとする評価は（井西2001：159頁；井西ほか2001：267頁）、実は資料の残りの悪さか、あるいは灰原が完全に掘り切られていない事実を無視した誤りにすぎないということであろう。

現在の御観寺池の堰堤という事情から、灰原は完全に掘り切れていないので、部分資料としての制約を伴うが、実際に灰原から得られている瓦は、飛鳥期に比定するものが圧倒的に多いと言える。しかし「山田寺式」期や「川原寺式」期の瓦も認められる。したがって、そこに得られている資料は、長いあいだの複数回使用の焼成品が当然混ざっているとしても、比較的飛鳥期の産がまとまっていた部分を掘り当てたにすぎないと言えよう。また他所ではまったく例を見ない瓦棺の破片（図版131）や、珍しい瓦硯の破片（図版130）を認める。オガンジ池瓦窯の生産品の多様さを想定しても無理はないであろう。すなわち、オガンジ池瓦窯の灰原出土品は、操業開始以来の多様さを示唆するが、焼かれていなかった「型式」や「群」を推論できる性質の資料ではないのである。

なお、灰原に多量に認める平瓦Ⅱ0 Za「Ba」群とする平瓦は、新堂廃寺の寺域内からはほとんど出土していない。

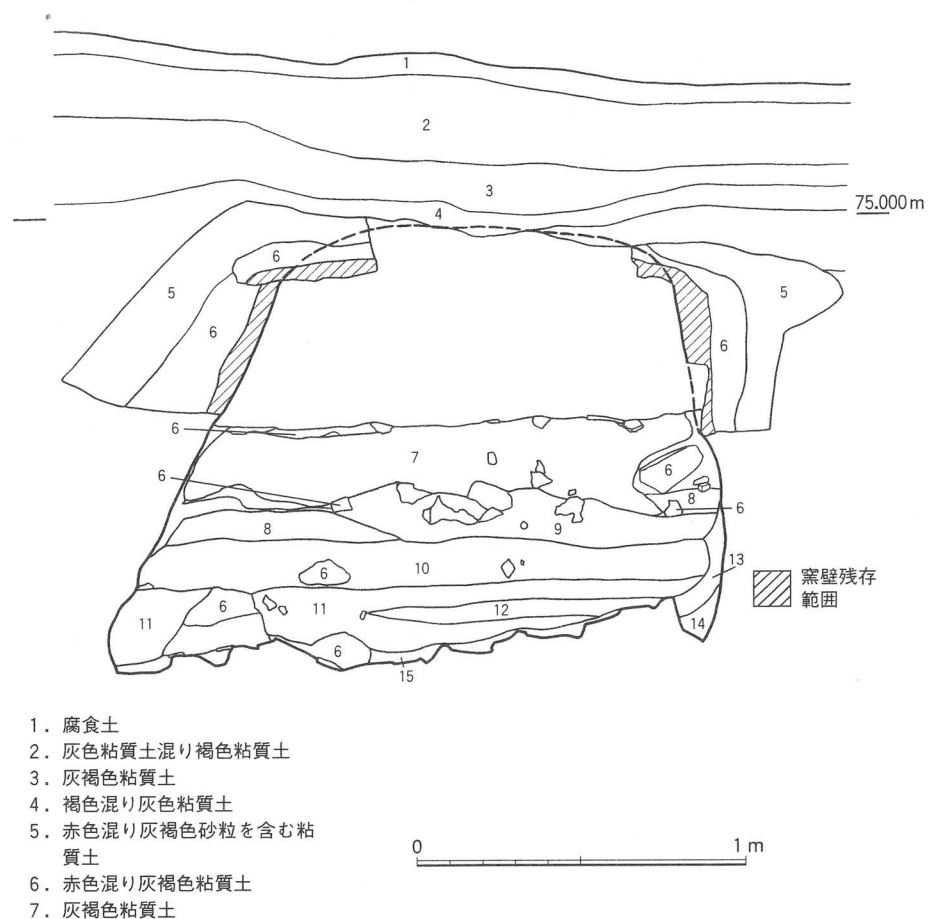
第2項 Ⅱ号窯 (第22, 23図 写真32~36図)

Ⅱ号窯は、Ⅰ号窯のある御観寺池東北隅の、すぐ上の斜面上に位置し、Ⅰ号窯廃絶後に窯体の長軸線と同じくして営まれたものである。Ⅰ号窯は既述したように、飛鳥期から白鳳期にわたって操業された登窯であるが、これに対してⅡ号窯は天平期に下る瓦窯で、平窯の構造をもつことが注目される。

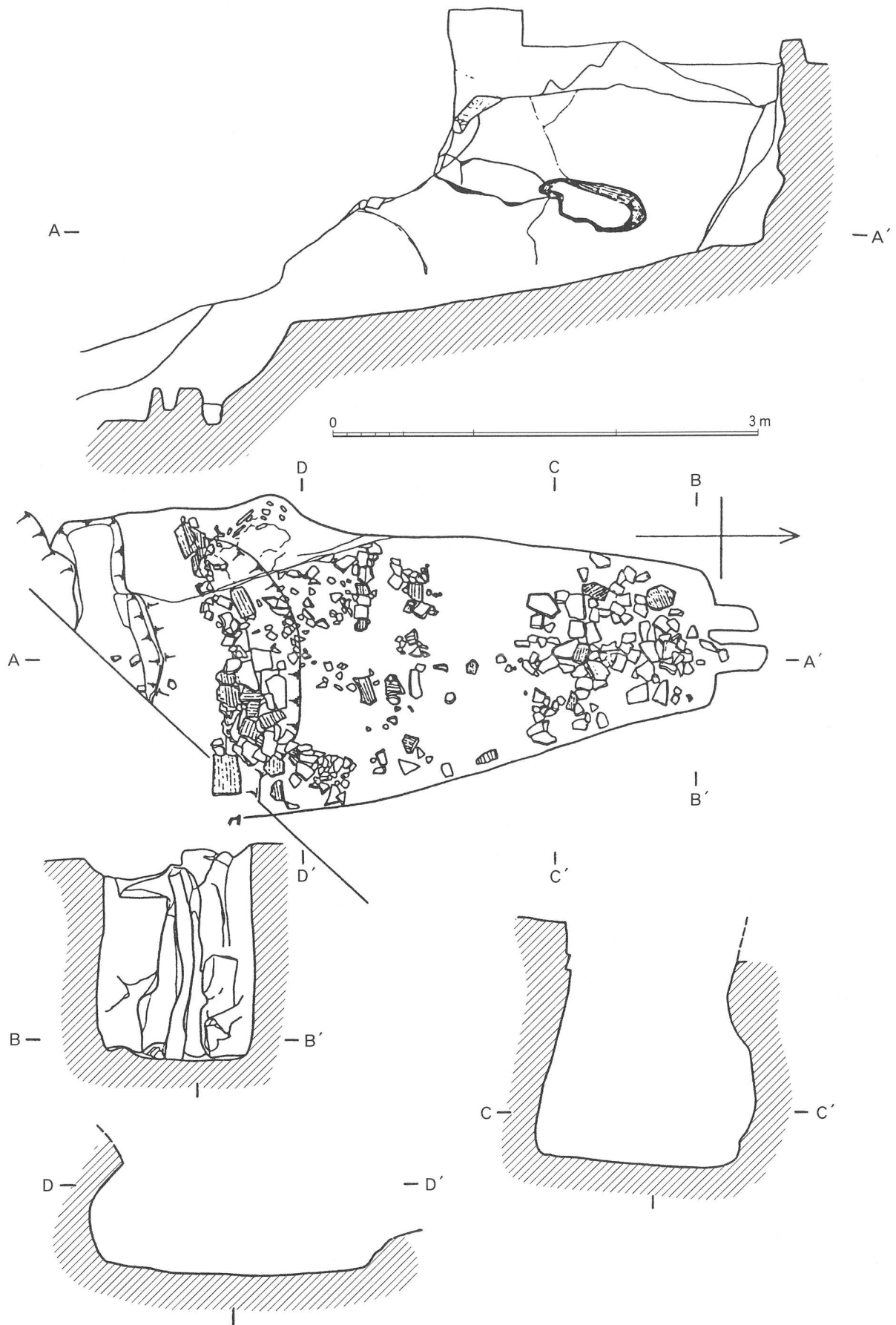
Ⅱ号窯の床面に堆積した瓦片のなかから検出した複弁蓮華文をもつ軒丸瓦L群(軒丸154)は、新堂廃寺で使用されていた天平期後半の瓦当と同一の型木から造られていたものであった。このことからするとⅡ号窯は、新堂廃寺の伽藍で大規模な瓦葺工事がおこなわれたなかの最後の段階で瓦を供給したものとみることができる。この2基の瓦窯が、現在までのところ、御観寺池の谷に営まれたすべての窯であったかどうかは分からない。その理由は、御観寺池の堤防が丘陵の斜面に取りついている東方にも多数の瓦片が散布していて、2基の瓦窯と並行して堤防下にも別の瓦窯があった可能性を残しているからである。

調査したⅡ号窯の平窯は天井部が陥没し、焚口は調査当時池の水に浸食される崖面に接していて上面は露出していたものの、燃烧室、焼成室および煙道はよく残り、正面の奥壁には2条の煙道施設を設けるなど注目すべき構造を有していた。

床面は無段の半地下式平窯で、長軸の方向は磁石の南北線の方向とほぼ一致して南に開口する。窯体の地質を見ると羽曳野丘陵を構成する大阪層群上部の粘土層と堅硬な砂層との互層からなる地山に深い窯体を穿ち、上部にはスサ混じりの粘土で葺いた天井を架設したものである。側壁の内面は焼成時の火熱により赤変、硬化した地山と、その剥離した部分を補修した貼り壁からなり、とくに西壁の補修の痕跡が著しい。



第22図 オガンジ池瓦窯跡(Ⅱ号窯)壁面断面図



第23図 オガンジ池瓦窯跡（Ⅱ号窯）平面図・断面図

Ⅱ号窯の内法の全長は4.98m、幅はもっとも広いところで2.15m、北端の奥壁にあたる煙道付近は狭くなって0.91mを測り、ほかの平窯の規模に比べると奥行きに対して幅がやや狭い。また床面の傾斜が約12度と緩やかなことは、ほかの窯の例とほぼ共通する。構築された天井部はアーチ形をしていたと推測できるものの、奥壁のごく一部を除いてほぼ全面に陥没していたので、正確な高さを復原できない。おそらく床面からもっとも高いところで1.6m内外に達したであろう（第22図）。

窯体の中央から北端にかけての焼成室と煙道は原状をほぼ完全にとどめていて、焼成室の長さは約3.5mあった。窯壁の表面には刃幅4cmの工具を用いて削った痕跡が斜め方向に密に残っていて、強い火勢の影響を受けて赤変、硬化していた。燃焼室は焼成室の南端から約0.7mの段差をもって設けられ、焚口とのあいだに舟底状の底部をなして、床面にはかなりの量の木炭末を混じた焼灰層の堆積を認めた。

燃焼室の床面には厚さ10cm余りに堆積した古い灰層の上に、高さ28cmの薪載せの火床の施設があった。この施設は窯の長軸と直角に三重に設けられ、そのあいだには二条の深い溝がある。火床の構造をもつ粘土壁の上部は平瓦片や丸瓦片で覆って燃焼台としていて、そのために上部は強い火熱を受けて赤変している。また溝のなかには長径35cm、短径20cm内外の丸石7個を一行に配置するなど焚口補強の工夫をしている（第19図）。

1969年の調査時には燃焼室の下方に厚さ10cm余りの古い灰層がある理由を解釈できなかったが、1985年にこのⅡ号窯の下に接して飛鳥期から白鳳期の古いⅠ号窯が営まれていたことを発見して、この灰層がⅠ号窯の床にあたるということが判明した。すなわちこの地点には、まずⅠ号窯が9.5mに近い長さをもつ登窯様の瓦窯として築かれ、のちにその上半部を改築してⅡ号窯の平窯としたわけである。Ⅱ号窯の床面は傾斜が削られて12度の緩やかなものとなり、幅もⅠ号窯のときより拡張された平窯となった。焚口の前は古い瓦片の堆積した上に左右がそれぞれ3m内外の仕事場の平坦部が設けられたとみられる（第19図）。平窯の改築は天平期であって、貼り壁のなかに飛鳥期から白鳳期の瓦片が塗り込まれていても不思議ではない。ただⅡ号窯の煙道は平窯への改築に際して新しく設けられたとみられるにもかかわらず、付近の貼り壁の補修にあたって飛鳥期の瓦片（平瓦Ⅱ0 Da群；写真142）を、塗り込んでいることに問題は残る。

Ⅱ号窯の操業時期の下限は、焼成室の床面に堆積していた瓦片から天平期の後半にあたる8世紀中葉以降とみられる。この瓦片は焼成室の床面から燃焼室の一部にかけて堆積し、20～30cmの厚さをなしていた。発掘に際して地点ごとに区分するとともに、4層に分層して全瓦片を採取したが、整理した段階で床面の瓦片の大部分は天平期後半の一時期に限定しうることが判明した。とくに床面に接した瓦片の遺存状況について、焼成に際して窯底に列をなして立て並べた形跡の有無を観察したが、全面に互って雑然とした堆積を呈していて、焼成時に有意に配列した痕跡はなかった。

Ⅱ号窯で焼造されたこの時期の瓦は、新堂廃寺跡の大阪府教育委員会の調査にかかる南門地区から集中して出土しているので、南門とその付属建物の葺料として主に供給されたものと判断される。なおオガンジ池瓦窯群はこのⅡ号窯の瓦の焼造をもって終了していて、それ以後に瓦を焼造していない。

奥壁中央に堅硬な地山を穿って作った煙道について観察しておく。この煙道は2条の垂直な縦溝で、奥壁に幅28cm、深さ35cmの上方が狭くなる溝を穿ち、その中間に幅10cmの高い仕切り壁を粘土

で作りつけて2条に分岐したものである。この溝状煙道の下端は床面に達し、その底部から上方の旧地表面に開口するところまでの高さは1.6mある。煙道の効率をよくするために2条の溝の上面上には平瓦（平瓦Ⅲ2 J2am群；平246）をそれぞれ縦に重ねて並べて覆いとしている。これらの平瓦列を支えて煙道下部の溝に開口部を作るために、最下部には3個の丸瓦（玉縁I 321 Za [J1e] 群；玉縁17, 玉縁18）を溝の部分だけ隙間を開けて立て並べるなど、煙道の排煙と通気に工夫をしている（写真35）。これらの平瓦・丸瓦はいずれも天平期後半の所用瓦である。

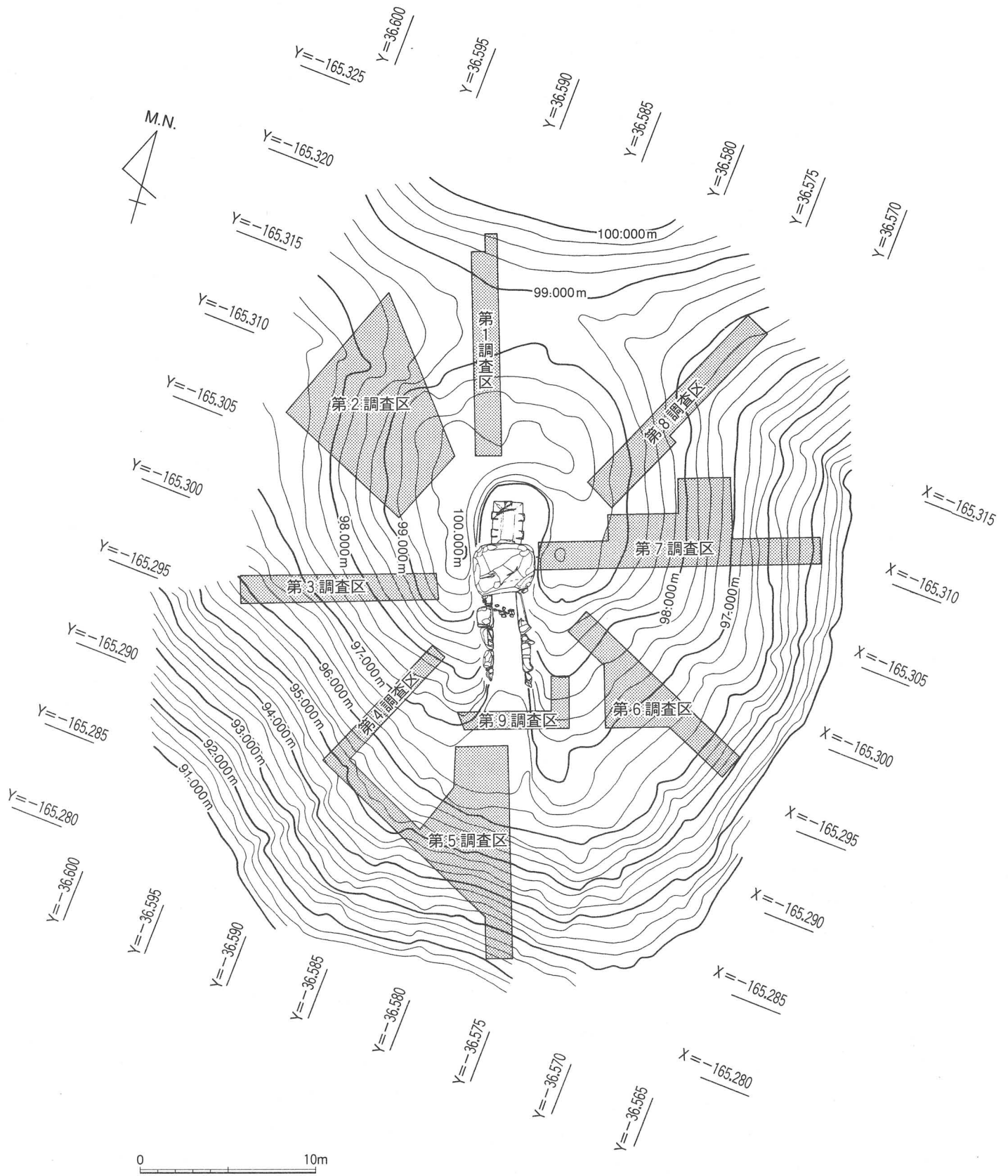
第3節 お亀石古墳

第1項 古墳の立地状況（写真37下）

お亀石古墳は、富田林市域西部を南北に走る羽曳野丘陵から派生した東方に伸びる支脈上、現在

表1 お亀石古墳検出遺構一覧表

第1調査区 第25図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
土壌	寛永通宝・鉄器（釘・鏝）・土師器片	近世（17世紀後半以降）
溝状遺構1	土師器（皿）・瓦質土器（播鉢）・平瓦 川原石	中世（14世紀後半～15世紀初頭）
溝状遺構2	土師器片・須恵器片	お亀石古墳築造時
墓壇		お亀石古墳築造時
墳丘盛土		お亀石古墳築造時
第2調査区 第28図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
中世遺構面	瓦器（椀）・瓦質土器（羽釜） 土師器（高杯）・川原石	中世（14世紀後半～15世紀初頭）
溝状遺構	平瓦	
墓壇		お亀石古墳築造時
墳丘盛土		お亀石古墳築造時
第3調査区 第29図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
墳丘盛土	花崗岩細片・炭化物	お亀石古墳築造時
第4調査区 第32図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
墳丘盛土		お亀石古墳築造時
墳丘南西突出部		
第5調査区 第32図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
石組遺構	鉄釘	中世？
第6調査区 第33図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
中世遺構面	瓦質土器（羽釜）・土師器片	中世（14世紀後半～15世紀初頭）
墳丘盛土	川原石小礫・炭化物	お亀石古墳築造時
第7調査区 第35図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
土壌	土師器片・瓦器片・平瓦・川原石	中世
中世遺構面	瓦質土器（羽釜）・土師器（皿）・平瓦 鉄釘・炭化物	中世（14世紀後半～15世紀初頭）
墳丘盛土	花崗岩細片	お亀石古墳築造時
墳丘裾部設定溝	縄文時代晩期土器片	お亀石古墳築造時
墓壇	炭化物	
第8調査区 第36図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
中世遺構面	土師器片・土師質土器（播鉢）	中世（14世紀後半～15世紀初頭）
溝・土壌	瓦質土器（播鉢）・平瓦・鉄釘	
墳丘盛土		お亀石古墳築造時
墳丘裾部設定溝	土師器片	お亀石古墳築造時
第9調査区 第38図		
検出遺構	出土遺物	所属時期
中世遺構面	土師器（皿）・瓦器（皿） 瓦質土器（羽釜）・土製品	中世（14世紀後半～15世紀初頭）
墳丘盛土		お亀石古墳築造時



第24図 お亀石古墳現況測量図・調査区配置図

の地名では富田林市大字中野に位置している。古墳は、その支脈がさらに南東方向に突出する尾根上に位置しているが、尾根の頂部に立地しているわけではなく、さらに南東方向に小さく伸びる尾根の中腹、標高約97mの地点に築かれている。尾根の東・北・南斜面は急勾配であり、丘陵に築かれた単独墳という景観を示している。古墳の南東方向約300mに位置し、石川の中位段丘上に創建された新堂廃寺との比高は約30mに及んでおり、飛鳥・白鳳期に特徴的に見られるいわゆる「山寄せの古墳」という立地状況を備えている。

現在は、古墳上から東方の葛城山・金剛山とともに石川により形成された低・中位段丘の平地部が一望の下に見渡せるが、古墳の東側、現在はグラウンドとして造成されている位置には本来もうひとつの南北方向の尾根が伸びており、古墳と平地部とを遮る地形となっていた。また現在は御観寺池という名称で溜め池になっているが、古墳の立地する尾根の南側は旧来は西から東に流れる谷筋であった。このように、墳丘の南を谷筋とし、北側背後を含めて周囲を丘陵に囲まれる地形は、この時期の古墳選定地として特徴的に見られる現象であり、大陸からの風水思想の影響を受けているものと解釈されている（北野 1985：444頁）。

お亀石古墳の主体部は、石槨として用いられている家形石棺の長辺主軸方向と羨道部の主軸方向とにずれが生じている。また、羨道部両側壁も平行しておらず、東側側壁がやや外方に開く形状となっている。開口部は南側に位置しているものの、やや東側に偏している。これは、古墳の立地する尾根自体が南東方向に伸びていることに起因するものとも考えられるが、羨道部東側壁が東側に開いていることからみて、古墳東方の平地部、さらに限定するならば新堂廃寺を意識しての設計である可能性が高いと言える。

第2項 調査区の設定（第24図 写真37上）

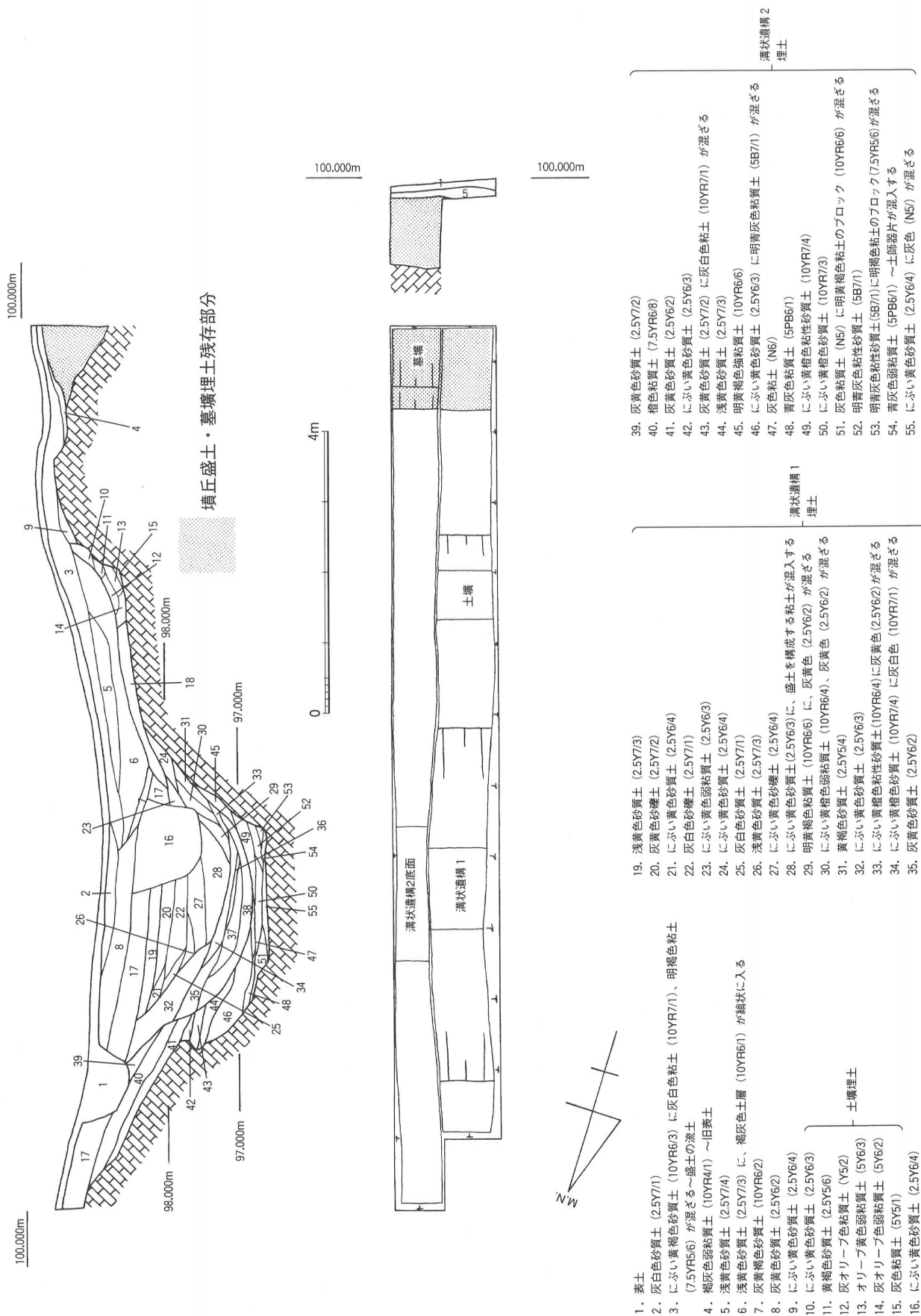
前述したように、お亀石古墳の主体部は石槨と前室及び羨道の方向が僅かではあるが不一致である。そこで、調査区設定の基点は割付の便宜を考え現況の古墳の最頂部に当たる天井石の中心に求めた。その地点から、羨道幅中央を通すラインを調査の南北主軸として設定した。この軸は、国土座標北に対してN22.5°Wを測る。

調査区の設定をおこなう前に、墳丘及び墳丘周辺の現況地形に対し、高さ0.25mのコンタラインを用いて平板測量をおこなった。その結果、墳丘北半部ではコンタラインが直線的に走るのに対し、南半部では弧を描き円形に走ることが確認された。この状況下においては、お亀石古墳が円墳、方墳、多角形墳のいずれの可能性も想定しえたため、基点から放射状に8方向に調査区を配置することにした（第1～第8調査区）。

このなかでも、現況測量からもっとも墳丘の残存状況が良好であろうと判断した墳丘北西部分、第2調査区に関しては、墳形・墳丘規模を確定しうる地点と考え、調査範囲を広く設定した。また同様に現況測量中に確認された墳丘南西部に伸びる台形状の高まりに対しては、第4調査区の南西端部を直角に南東側に拡張させることにより断面確認をおこなうことになった。

以上の8ヶ所を調査した結果、墳丘の南端部に関しては良好な成果を得ることができなかったため、羨道開口部の南側に東西方向で東端部を北側に「L」字状に拡張した調査区を設定し、第9調査区とした。

これら9ヶ所の調査区は、調査過程において必要に応じて範囲の拡張をおこなっている。



墳丘盛土・墓壇埋土残存部分

第25図 第1調査区平面図・断面図

第3項 墳丘構造の調査成果

各調査区の調査結果に関しては、本市教育委員会が発行した平成13年度発掘調査の報告書（以下『概報』と呼称する）に詳細を記述している（横山 2002）。各調査区で検出した遺構としては、お亀石古墳墳丘盛土、墳丘裾部設定溝、墓壙、中・近世遺構が挙げられる。調査区ごとの検出遺構は表1のとおりである。

これらのうち、中・近世の遺構に関しては『概報』にその詳細を記述しているため省略することにし、本書では本来の調査目的であるお亀石古墳の墳丘構造を中心に、各調査区で確認することのできた調査成果を調査区別に記述する。

1 第1調査区（第25図・写真39上）

【墳丘区画溝】中世の溝状遺構（溝状遺構1）のさらに下層において、丘陵斜面から墳丘を切り離す区画溝（溝状遺構2）を確認した。

この溝は底面が平坦であり、断面形は台形状を呈している。底面の南北幅は約2mを測る。調査区東壁断面で見ると、溝の北側肩部は地山が不自然な降下を見せている調査区の北端部から南方に0.3mの地点に位置するようである。この地点から地山は南方にやや傾斜を強めており、さらに2.2m南から断面「U」字形に深く掘り込まれている。層序から溝の北側は溝状遺構1による攪乱を受けていないことが確認されたため、古墳築造時の形状をよく留めているものと考えられる。

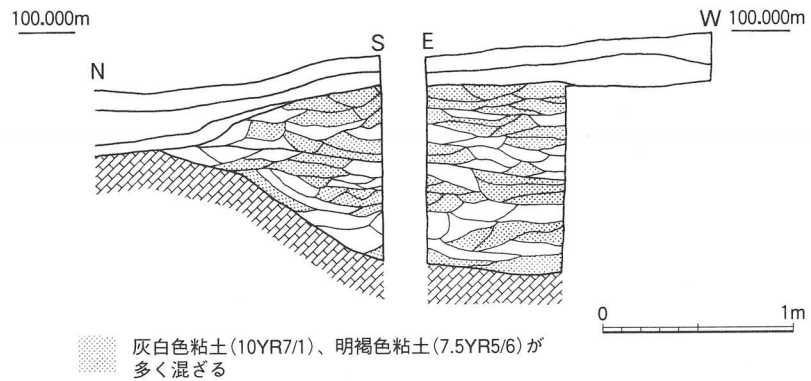
一方溝の南側の掘方は溝状遺構1によって肩部が削平を受けている。しかしながら、溝状遺構1による攪乱を受けていない溝状遺構2の底面付近の地山の整形を見ると、約60度の急傾斜で墳丘側に立ち上がっていることが確認された。

また、この区画溝が形成されている地点は、現況の地形から見ても分かるように、尾根筋が一端狭まる地点に位置している。従来の自然地形も、北から延びる尾根の稜線はこの地点で降下し、さらに南方に向かって上昇していたであろうことは断面観察による地山の確認からも推測できる。したがって、古墳築造設計段階で、尾根の隆起部分を墳丘の中心とし、背後の尾根の降下部分を区画溝とする前提での選地がおこなわれたものと考えられる。このことは、換言すると墳丘の南北（主軸）の規模に関しては自然地形による制約があったことを意味している。

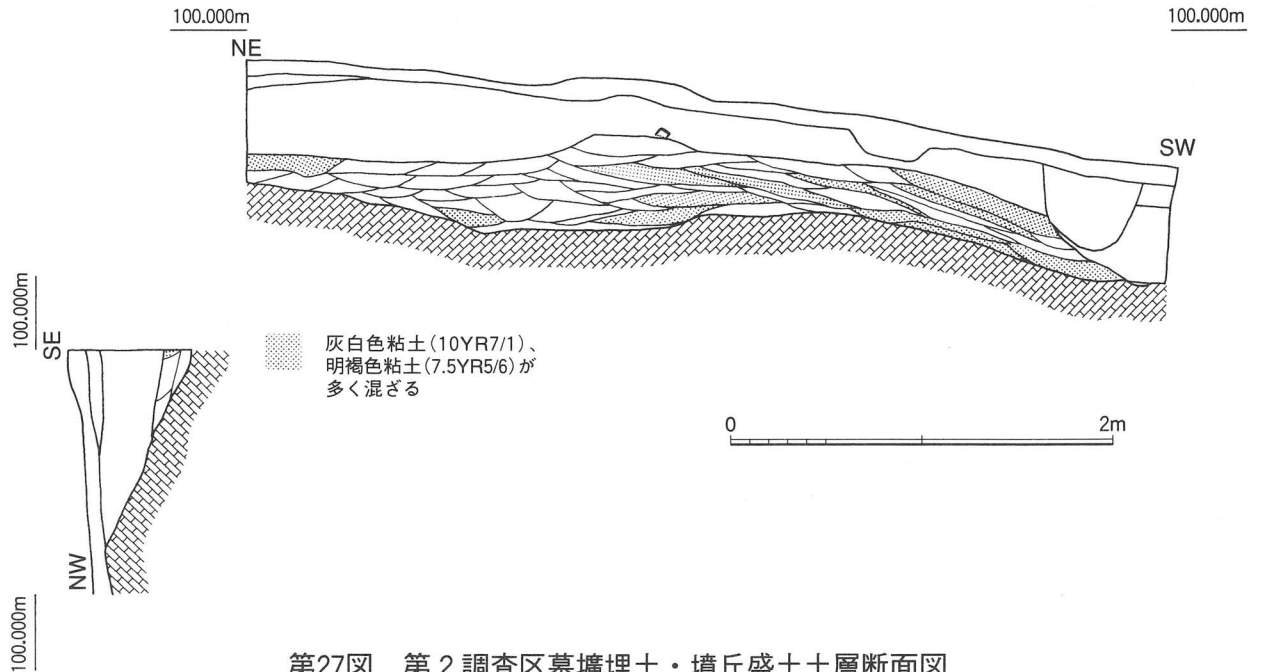
【墓壙（第26図 写真39下）】調査区の南端部において、墓壙の肩部を検出した。掘方は、肩部から約15度の傾斜角で南方に掘り込まれており、さらに0.5m地点から傾斜角約35度とやや傾斜を強めている。

また後述することであるが、この傾斜角で墓壙を復元すると石槨基底面北端部には至らないため、さらに南方で傾斜角を強める掘方であることが推定される。

墓壙の埋土には、土質の特徴から古墳が立地する丘陵の土（地山の土）が用いられたと考えられ



第26図 第1調査区墓壙埋土・墳丘盛土土層断面図



第27図 第2調査区墓墳埋土・墳丘盛土土層断面図

る。したがってこれらの土は、墓墳、区画溝の掘削、または墳丘形成の際に排出した土と解釈できる。

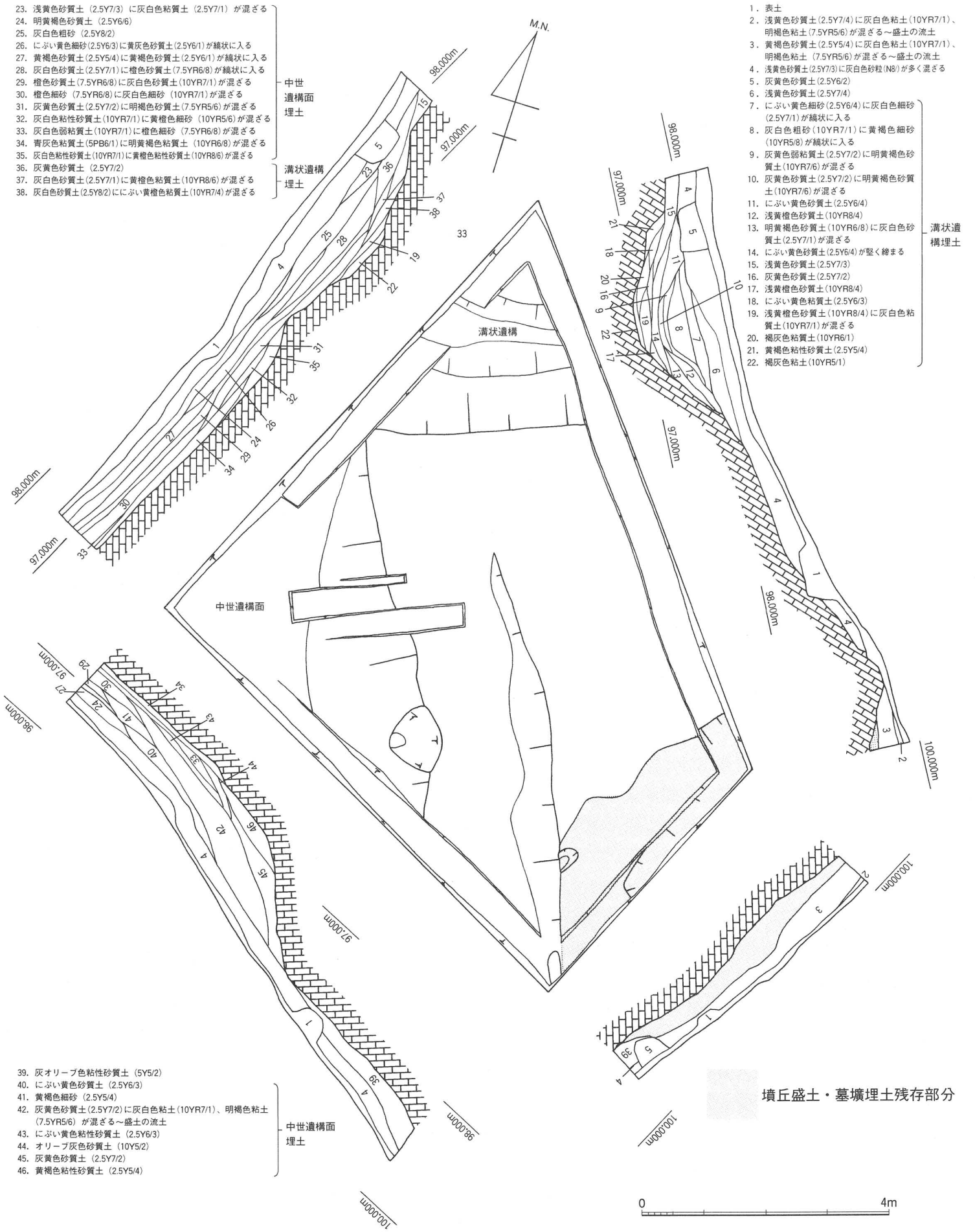
【墳丘盛土（第26図 写真39下）】この調査区においては、墳丘盛土は墓墳上面に薄く残存しているに過ぎなかった。盛土に用いられている土は墓墳埋土と同様のものである。断面観察では、墓墳の埋め戻し終了から盛土形成に移行する作業工程の変化は確認できなかった。

2 第2調査区（第28図 写真40）

【墳丘区画溝（写真40）】調査区の北端部において東西方向に走る溝状遺構を検出した。この溝の断面は「U」字形であるが、底面に僅かな平坦面を形成している。溝内埋土からは最下層から平瓦片が1点出土しているだけであり、この溝の形成時期が問題となる。

北東側に隣接する第1調査区では、中世に属する溝状遺構1と古墳築造時の区画溝である溝状遺構2が上下に重複して形成されている。第1調査区では溝状遺構1の底面堆積土が暗青灰色粘土（5PB3/1）であり、なおかつ中世の確実な遺物の出土を見たために遺構の切り合い関係は比較的明瞭であったが、第2調査区の溝状遺構は、北東壁断面には明確な切り合い関係を確認することはできなかった。しかしながら、北西壁断面を観察すると、調査区西部で確認された中世遺構面への堆積層が溝状遺構埋土（第28図の第36～38；19層）を切る形で堆積していることを確認した。したがって北東壁断面で見ると、溝の底面付近は古墳築造時の区画溝の残存部分であり、第14層の上面もしくは下面を底面とする掘り直しの溝が第1調査区の溝状遺構1に対応するものと考えられる。また、中世遺構面最下層からは第1調査区溝状遺構1と時期差の見出せない土器が出土しているため、この平坦面が中世の溝と同時期に形成されたものと推定できる。

【墓墳】調査区南東端部において墓墳の肩部を検出した。調査区の北東・南東壁側でのトレンチ調査をおこなうに留めたため墓墳の正確な輪郭は不明であるが、確認しえた部分から第1調査区で検



第28図 第2調査区平面図・断面図

出した墓壙との関係を見ると、墓壙の平面形態は楕円形もしくは隅丸方形状になる可能性が高いと思われる。

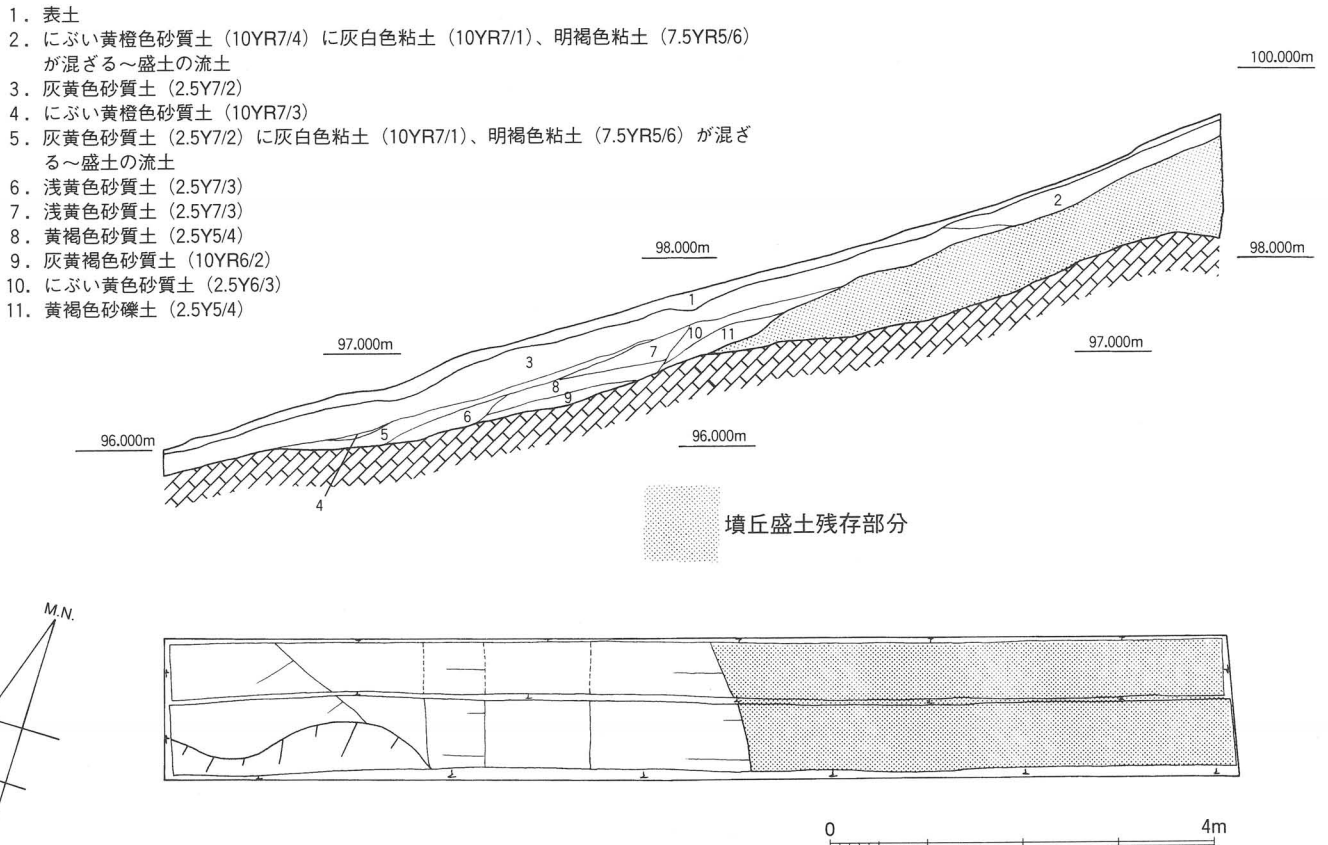
【墳丘盛土（第28図）】墳丘盛土は、墓壙上と調査区南端部に僅かに残存しているに過ぎなかった。墓壙埋土および盛土に用いられている土は第1調査区と同様であるが、南端部の盛土最下層部分には粘土ブロックを多量に含む土が用いられていることが指摘できる。

3 第3調査区（第29図 写真41上）

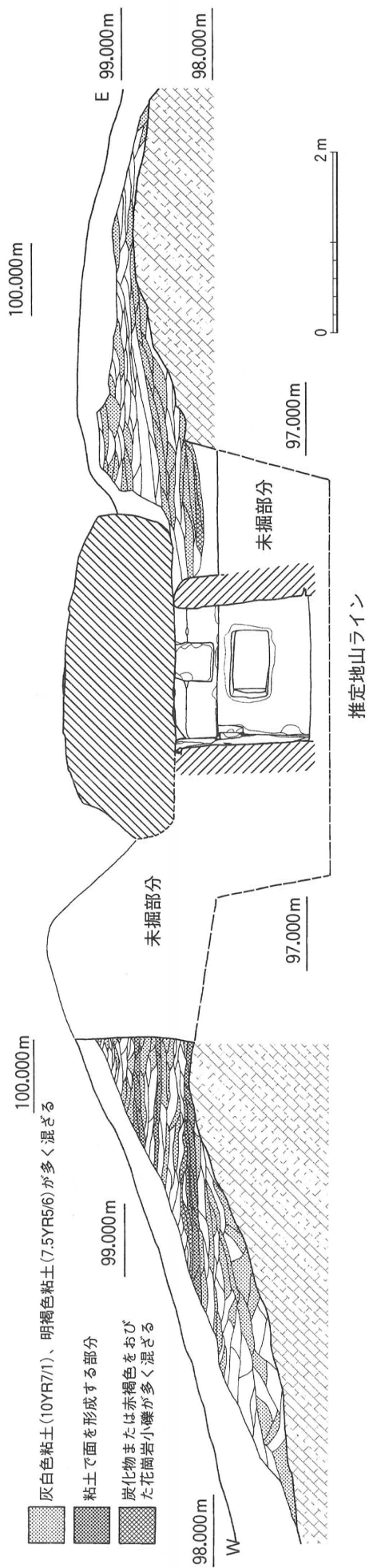
【墳丘盛土（第30図 写真41下, 写真42上）】今回の調査範囲で墳丘盛土がもっとも良好に残存していた調査区である。

盛土は、調査区東端部から西に4.55mの範囲に残存していた。調査基点から盛土西端部までの距離は9.55mを測る。盛土の最厚部は調査区東端部であり、厚みは現状で約1.1mである。盛土傾斜角は約20度～25度であるが、検出した盛土上面には盛土を構成している土（粘土ブロックを多く含む土）が堆積しており、現在は攪乱を受けているものの墳丘のさらに上方、埋葬施設上に構築されていた盛土が流失した状況を窺わせる。

調査区北半部にトレンチを入れて断面観察をおこなったところ、盛土の構築過程を確認できた。盛土は、標高で97.8mを境に下部を1単位が大きな盛土で、上部を1単位が小さな盛土で積み上げられている。盛土には、ほかの調査区に見られるものと同様の土が用いられているが、そのなかでも砂質土と粘質土を意識的に使い分けていることが確認できる。

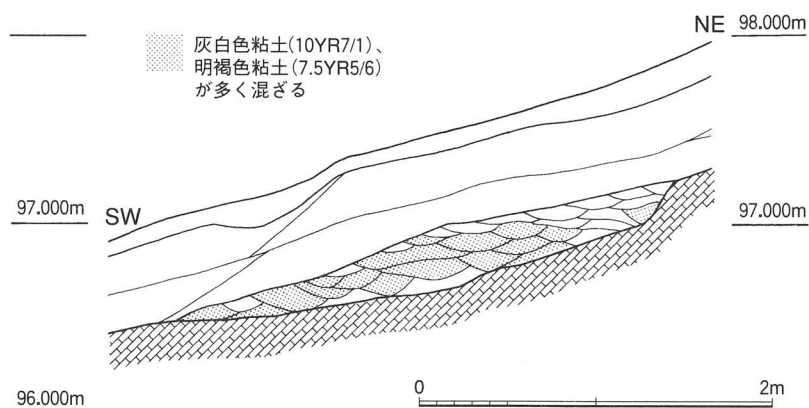


第29図 第3調査区平面図・断面図



第30図 第3調査区・第7調査区墳丘盛土・墓壇埋土土層断面図

このことがもっとも顕著に観察できる部分が標高98.3m付近、すなわち調査区内で地山が頂点に達するラインである。土層断面を見ると、墳丘はこの高さで粘土ブロック（灰白色粘土10YR7/1、明褐色粘土7.5YR5/6）を多量に含んだ土によって



第31図 第4調査区墳丘裾部盛土土層断面図

水平に整えられていることが分かる。また、その上面には炭化物とともに赤褐色を帯びた花崗岩の小礫が層状に堆積していることが確認された。このことから、墳丘はひとまずこの高さまで形成され、その時点で埋葬施設の天井石の加工など何らかの古墳築造工程がおこなわれたのち、さらに盛土を積み上げて墳丘が構築されていくという過程が復元できる。

さらにこの面より上位の盛土においても、高さ0.2~0.3mの間隔で粘土ブロックを多量に含む土が水平に積まれている状況が確認できるため、墳丘上部では一定間隔で盛土を安定させる工法が用いられているものと推定される。

また、ほかの調査区でも確認されたことであるが、これらの盛土と地山のあいだには旧表土などの間層は確認できない。このことは、古墳を築造する段階で丘陵の表面に整地がおこなわれていることを示している。

4 第4調査区 (第32図 写真42下)

【墳丘裾部盛土 (第31図 写真43上)】調査区の北東部において墳丘盛土を確認した。盛土は現状で北東-南西幅約0.7mの範囲に残存している。盛土の構築方法を土層断面で観察すると、調査区北東部で地山を0.25m程度掘り下げ、その内部に土を充填する方法が用いられている。この工法は、後述する第6~9調査区でも確認されており、お亀石古墳墳丘裾廻りの特徴的な工法のひとつと認識できるが、第3調査区では確認されていない。

盛土に用いられる土質に関してはほかの調査区と同様であるが、盛土単位的な特徴としては全体的に比較的粘土ブロックが多く含まれる土が用いられている。

【墳丘南西突出部】本節の第2項で述べたように、除草後の現況測量図製作時に、墳丘の南西部に北東-南西方向に直線的に伸びる台形状の突出部が確認された。この突出部と古墳との関係を明らかにするため、第4調査区南西端部を南東方向に拡張させ、突出部の断面確認をおこなった。

調査の結果、この高まりが盛土ではなく地山を削り出すことによって形成されていることが確認された。調査地点においての突出部の規模は、上面幅が約4.5m、高さが約0.25mを測る。地山上には表土と流土が薄く堆積しているだけであり、層位的な見地からも墳丘との関係を明らかにすることが出来なかった。今後の調査の課題となる部分である。

5 第5調査区（第32図 写真43下）

埋葬施設開口部の南方に設定した調査区である。調査範囲内では盛土などの明確な墳丘施設は検出されなかったが、開口部前面において地山が平坦に形成されている部分が存在することを確認した。

【平坦面】 調査区北端部から南方に幅約3.7mの規模で平坦面が形成されていることを確認した。開口部から平坦面南端部までの距離は約7.2mを測る。この平坦面の外縁は、現況の丘陵南側斜面を反映する形で北東方向に「く」の字状に屈曲している。

平坦面上、調査区の北東部分において地山上に川原石5個を用いた石組遺構を検出した。この石組遺構は20cm～30cm大の石が用いられており、4個の石を円形に敷いた上に1個の石を被せた状態で遺存していた。石の下部は地山が薄く掘り込まれており、内部からは鉄釘が1本出土した。この遺構が形成された時期は判断材料が乏しく明言しかねるが、表1を見ても分かるように今回の調査で検出した中世の遺構から同様の川原石が数点出土している。この石の性格に関しては後述するところであるが、おそらくこの遺構も中世に位置づけられるものと考えられる。したがってこの平坦面も中世にある程度削平を受けている可能性が高いと言える。しかしながら、埋葬施設の石槨部（家形石棺）の身部底面の標高が96.87m^(註9)であることに対し、調査区北端部の地山面が96.35mとあまり低下していないことから、削平はおこなわれたとしてもごく僅かであったものと考えられる。

平坦面以南の地山は急勾配で降下しており、調査範囲内では段状の施設等人為的な成形がおこなわれた痕跡は確認できなかった。

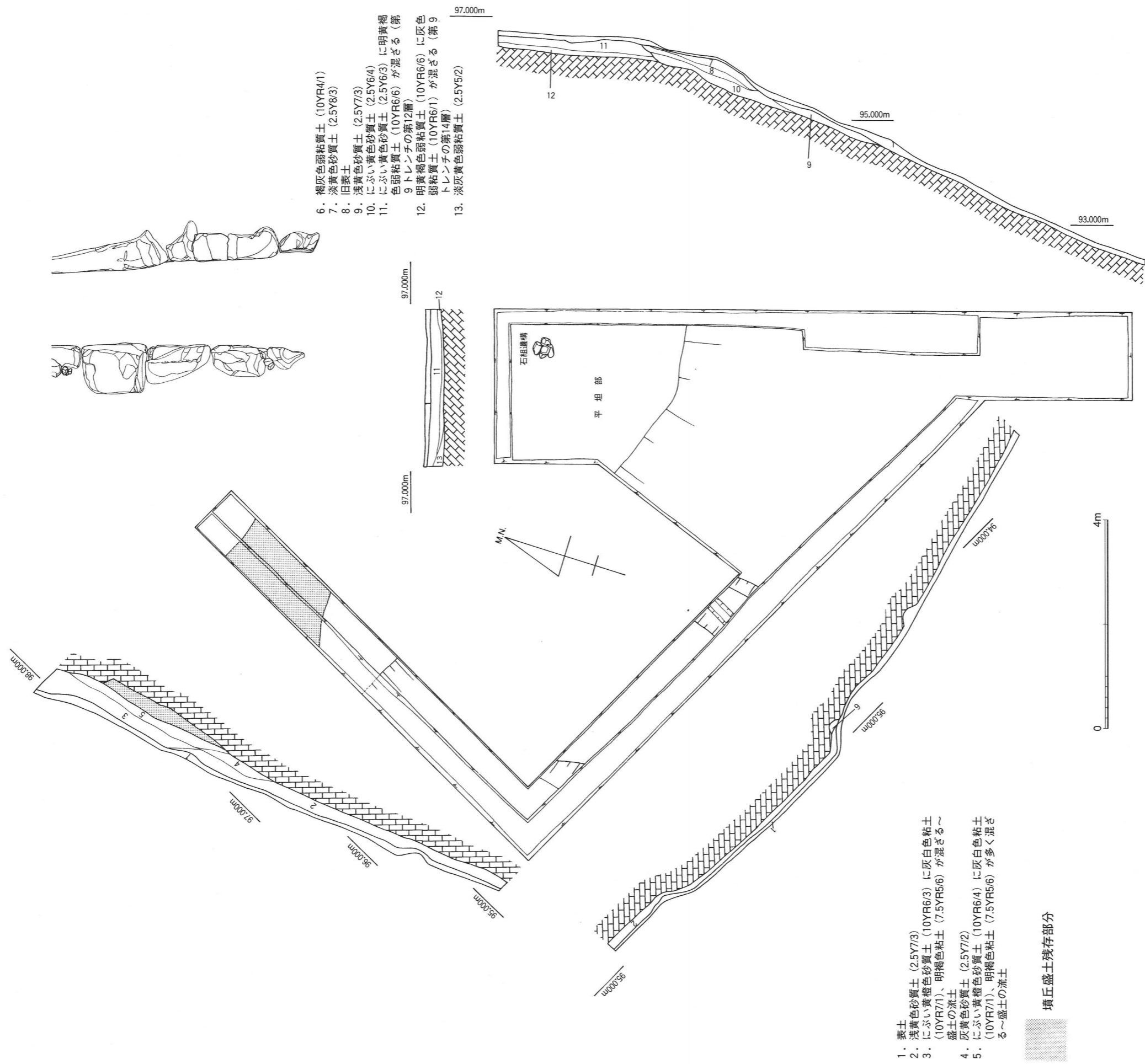
6 第6調査区（第33図 写真44上）

【墳丘裾部盛土（写真44下）】 この調査区は、現況測量から墳丘の削平が大きい部分であることが推測された。発掘調査の結果もそれを裏付けるものであったが、調査区北東壁側と西壁側に断面観察のためにトレンチを入れたところ、僅かではあるが墳丘盛土が残存している部分が確認された。

北東壁土層断面では、第4調査区と同様に地山を掘り込み内部に盛土をおこなっている状況が検出された。現状でこの掘り込みは深さ約0.2mを測るが、第4調査区とは異なり階段状に2段に掘り込まれている。

また調査区を南方に拡張した部分においては、平面的な調査で盛土状の土が北東壁側から南西方向に広がることを確認されたが、土質にやや異なる点が見受けられたため、西壁側にトレンチを入れ、土層断面の確認をおこなった。その結果、この部分では地山が約0.7mの深さでほぼ垂直にカットされており、その前面に盛土状の土が充填されていることを確認した。この土は性質的には盛土と同様のものであるが、締まりが弱く盛土の積み上げ単位も確認できないものであった。ただし、最下層の地山直上からは極少量の炭化物とともに埋葬施設の羨道部の床面に敷かれているものと似た川原石の小礫が検出された。このような状況は西接する第9調査区の東壁側の断面調査でも確認されている。現段階では他の調査区で確認されている盛土との相違が何に起因するのか、また何を意味するものなのかは明らかに出来なかったため、今後の調査での解明を期待するほかないが、本稿では古墳に関連する遺構として理解しておく。

【平坦面】 調査区の中央部分、上述した墳丘盛土の南側において、地山に平坦面が形成されていることを確認した。調査区南西部の地山の降下部分を見ると、この平坦面はやや西側を南に偏する東

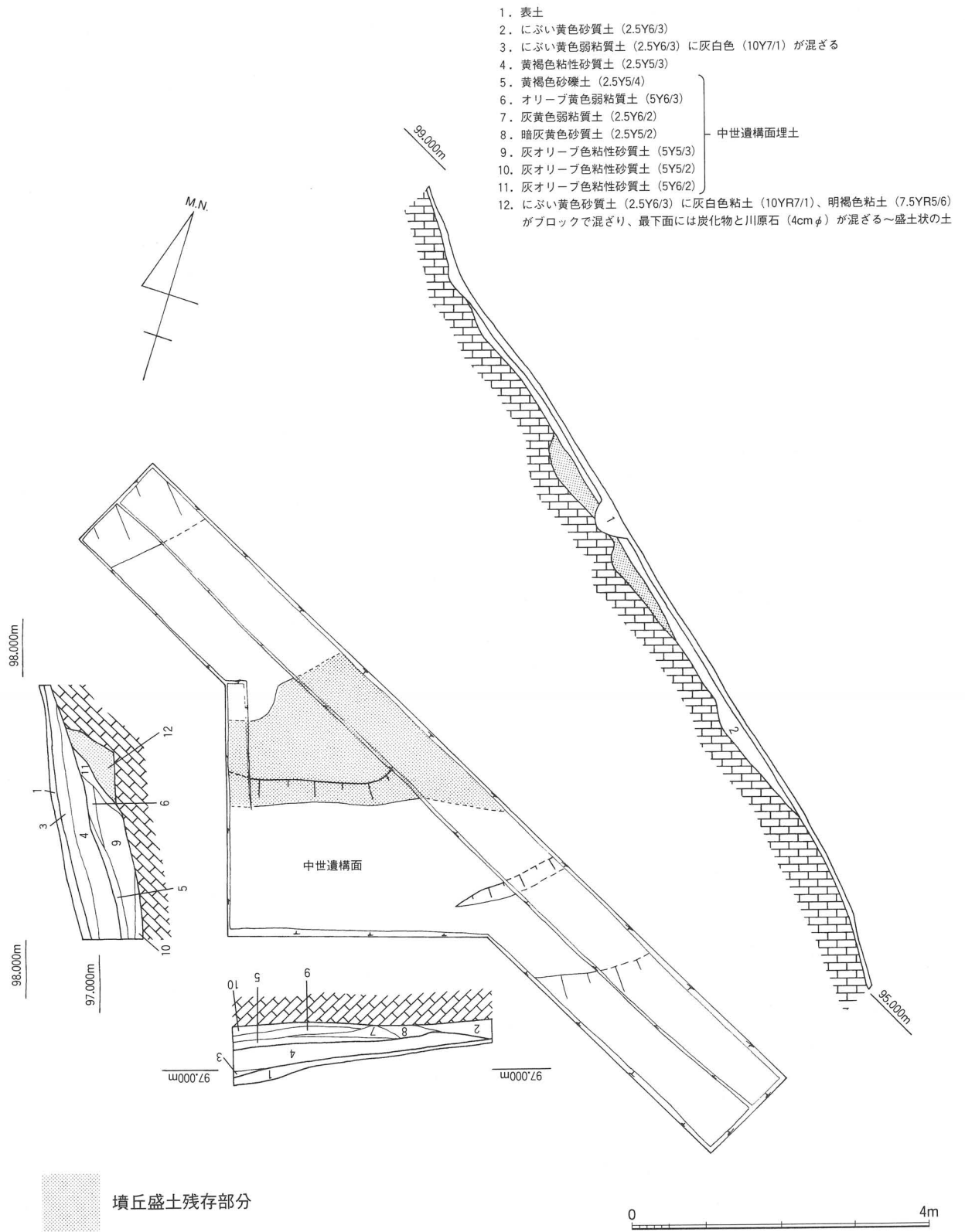


- 6. 褐灰色弱粘質土 (10YR4/1)
- 7. 淡黄色砂質土 (2.5Y8/3)
- 8. 白黄土
- 9. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)
- 10. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)
- 11. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) に明黄色弱粘質土 (10YR6/6) が混ざる (第9トレンチの第12層)
- 12. 明黄色弱粘質土 (10YR6/6) に灰色弱粘質土 (10YR6/1) が混ざる (第9トレンチの第14層)
- 13. 淡灰黄色弱粘質土 (2.5Y5/2)

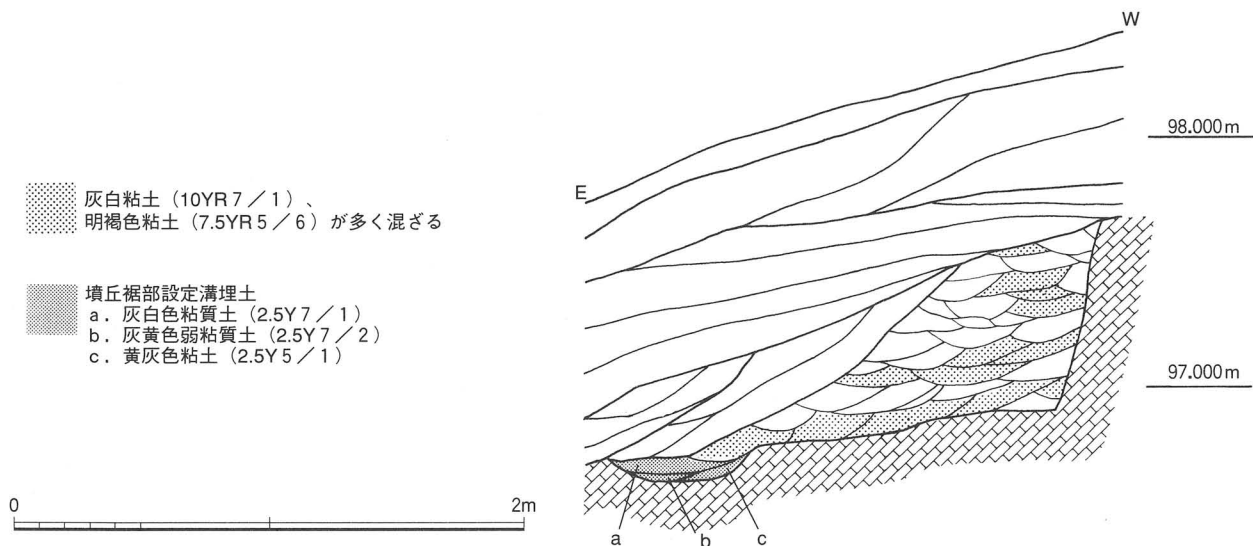
- 1. 表土
- 2. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)
- 3. にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/3) に灰白色粘土 (10YR7/1)、明褐色粘土 (7.5YR5/6) が混ざる～盛土の流土
- 4. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2)
- 5. にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/4) に灰白色粘土 (10YR7/1)、明褐色粘土 (7.5YR5/6) が多く混ざる～盛土の流土

墳丘盛土残存部分

第32図 第4調査区・第5調査区平面図・断面図



第33図 第6調査区平面図・断面図



第34図 第7調査区墳丘裾部盛土土層断面図

西方向に伸びていくようである。この平坦面の直上からはほかの調査区同様に中世の遺物が出土しており、墳丘築造後にある程度削平を受けたことを窺わせるが、調査区北東壁で確認した盛土の下端部との高低差があまりみられないことから、墳丘築造時に形成された平坦面がほぼそのまま残存しているものと推測される。

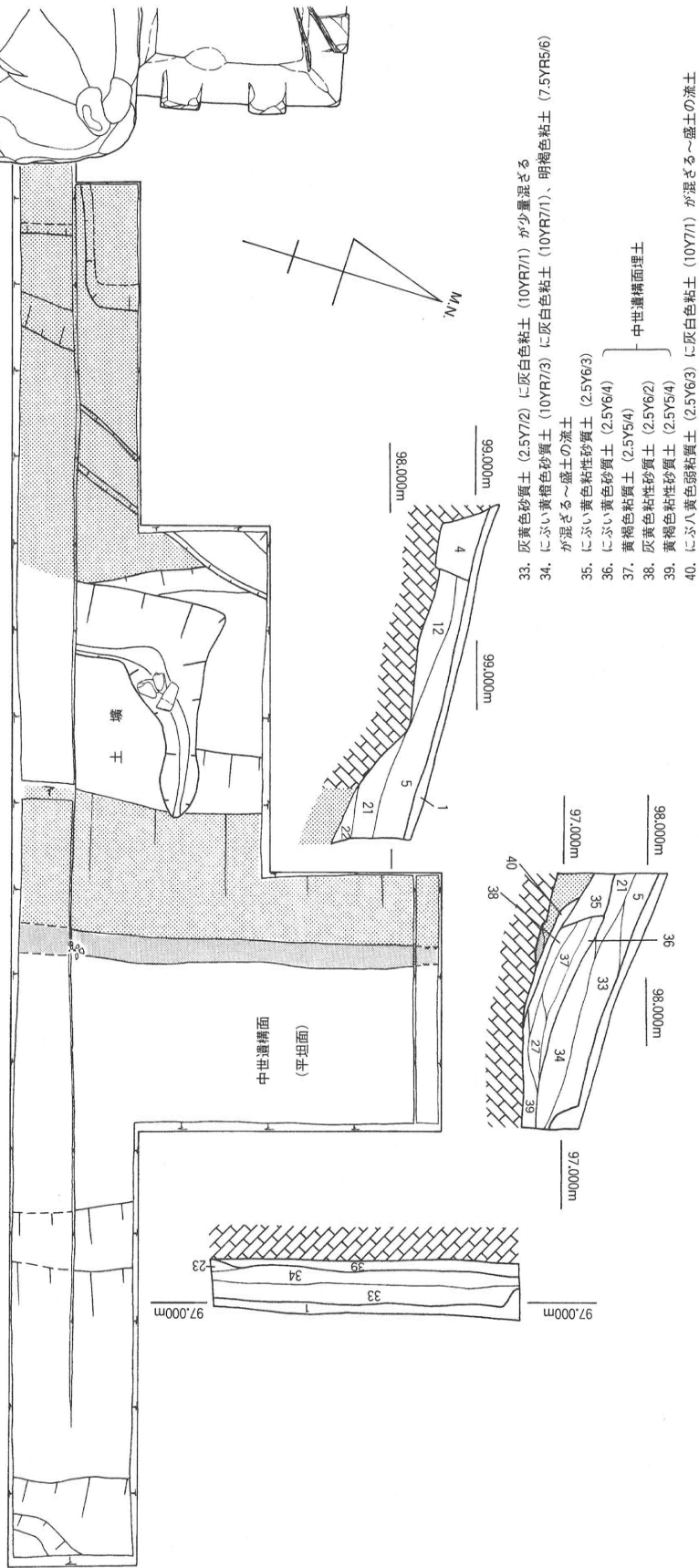
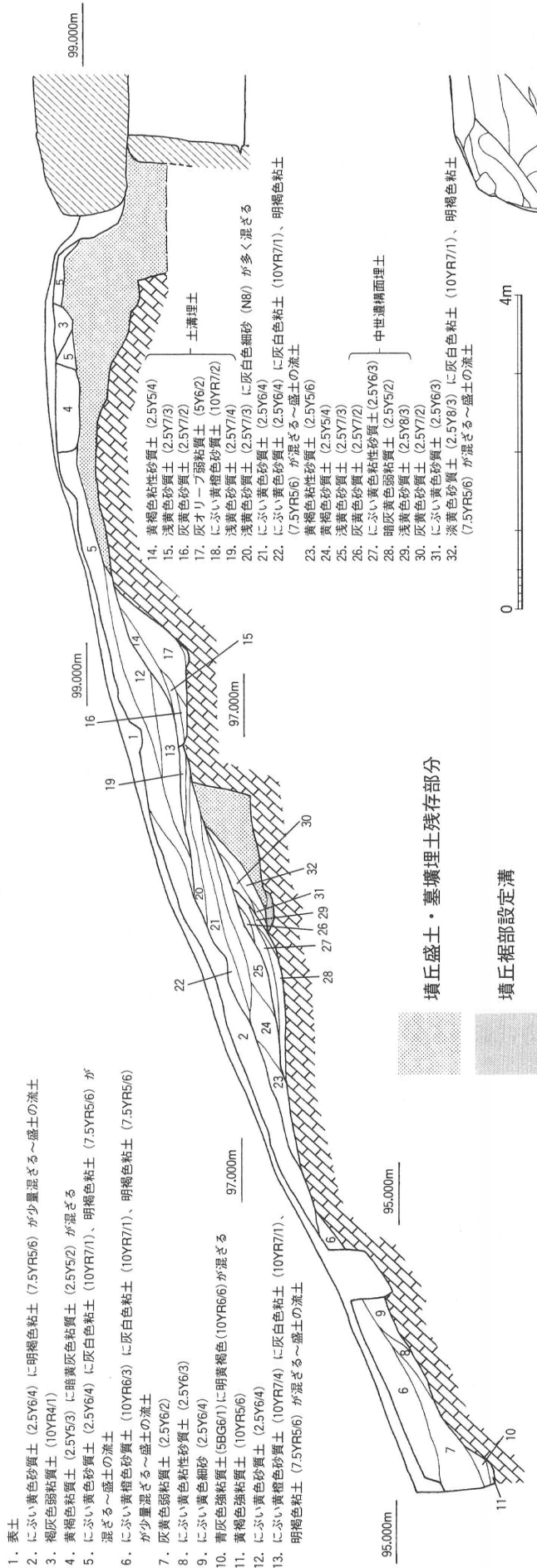
7 第7調査区（第35図）

【墓壙（第30図 写真45上）】調査区西端部において、地山を掘り込む墓壙が確認された。地山は調査基点から東に約4.5m、標高98.9m地点を頂点として、その地点から西に緩やかに傾斜している。調査主軸の西側に対応する第3調査区の地山高（標高98.3m）との関係からみると、この傾斜は墓壙の掘削によるものと言うよりは、古墳築造前の丘陵の自然地形を反映している可能性もある。しかしながら、第3調査区と同様に墳丘盛土と地山とのあいだには間層が入っていないため、ある程度丘陵上面の整地がおこなわれていたことが分かる。

確実な墓壙の掘削は、基点から東に2.6m、標高98.33m地点からおこなわれている。この地点から、地山は約75度の急傾斜で西側に向かって掘り込まれている。この肩部から約0.35mの深さまで掘削した地点で必要な情報は入手できたと判断し、また調査の安全面の問題からも掘削を中止した。

墓壙内埋土に関しては、肩部付近の埋土は堅く締まり、埋土の単位がはっきりと確認できるが、それより下方の埋土は粘土ブロックが若干混入するものの砂質で締まりが弱く単位も確認できない。その境界部は、標高で98.1mを測る。特筆すべきこととしては、境界部の直上に炭化物を多く含む層が検出されたことである。第3調査区の盛土の整形面（標高98.3mライン）上にも同様の炭化物が検出されていることとともに注目される。

この墓壙で注目されることは、肩部の高さ（標高98.33m）が羨道部東側側石の上面高（標高98.42m）にほぼ一致していることである。このことは、換言すると天井石の下面の高さとほぼ一致するということになる。また地山頂部付近から墓壙上にまで僅かに残存している墳丘盛土の土層断面を観察すると、地山面の頂部から天井石の下面に向かって粘土ブロック（灰白色粘土10YR7/1、明褐色粘土7.5YR5/6）を多く含む盛土が西側に傾斜しながらひとつの面を形成していることが確認できる。これは埋葬施設の構築過程、とくに天井石の設置にかかわる部分である可能性が高いため



第35図 第7調査区平面図・断面図

に明記しておく。盛土内からは埋葬施設に用いられている石材の破片と考えられる花崗岩の小片が出土している。^(註10)

【墳丘裾部盛土（第34図 写真46上）】断面観察のために調査区南壁側にトレンチを入れたところ、調査基点から東に9.0m地点で地山がほぼ垂直にカットされており、その部分に盛土がおこなわれていることが確認できた。この地山カット地点の西側上部には中世に形成された土壌（写真45下）が存在しており、古墳築造時の状況を留めていないが、現状で地山は標高97.65mの高さから0.85mの深さでカットされており、東に1.6mの範囲（基点から東に10.6m）に盛土がおこなわれている。現存する盛土東端部の標高は96.7mを測る。盛土の特徴としては、土質はほかの調査区のものと同様であるが、底面に粘土ブロック（灰白色粘土10YR7/1、明褐色粘土7.5YR5/6）を多く含む土を用いていることが挙げられる。現状での盛土の上面傾斜角は、下半部で約25度、上半部で約45度を測る。

この墳丘盛土上に堆積した流土内（第34図；第30～32層）から、須恵器甕の破片（図版132；4、5）が出土している。層位的に中世の掘り込みの及んでいない部分からの出土であり、お亀石古墳と関係する遺物である可能性が指摘できる。

【墳丘裾部設定溝（写真46下）】さらに、盛土の東端部下に、地山に掘り込まれた幅0.55m、深さ0.1mの浅い溝が検出された。調査区南壁面での溝の東側肩部は調査基点から10.9mを測る。この溝は、調査区内で南北方向に直線的に伸びており、北壁断面でも盛土の下に位置することが確認された。発掘調査による墳丘の破壊も考慮に入れたが、断面確認だけではこの溝の性格が不明確であると判断し、盛土端部を掘削して溝の平面形態を記録したうえで溝の完掘をおこなった。その結果、この溝が素掘りのものであり、溝内に木杭のピット等の痕跡がないことを確認した。溝内埋土は灰白色（2.5Y7/1）を帯びており、地山の明黄褐色（7.5YR5/6）とのコントラストが際立っている。これらの事実から、この溝は墳丘の東限を設定している溝と考えられる。墳丘盛土が溝埋土の上面からおこなわれていることから、溝内埋土には意識的に地山と色・質の異なる土を用いて視覚的に墳丘裾部のラインが明確になるように工夫されたものと考えられる。

また、調査区内で盛土の残存部分とともにこの溝が南北方向に直線的に伸びることで、お亀石古墳の墳丘の平面形態が方形をなすことが明らかとなった。

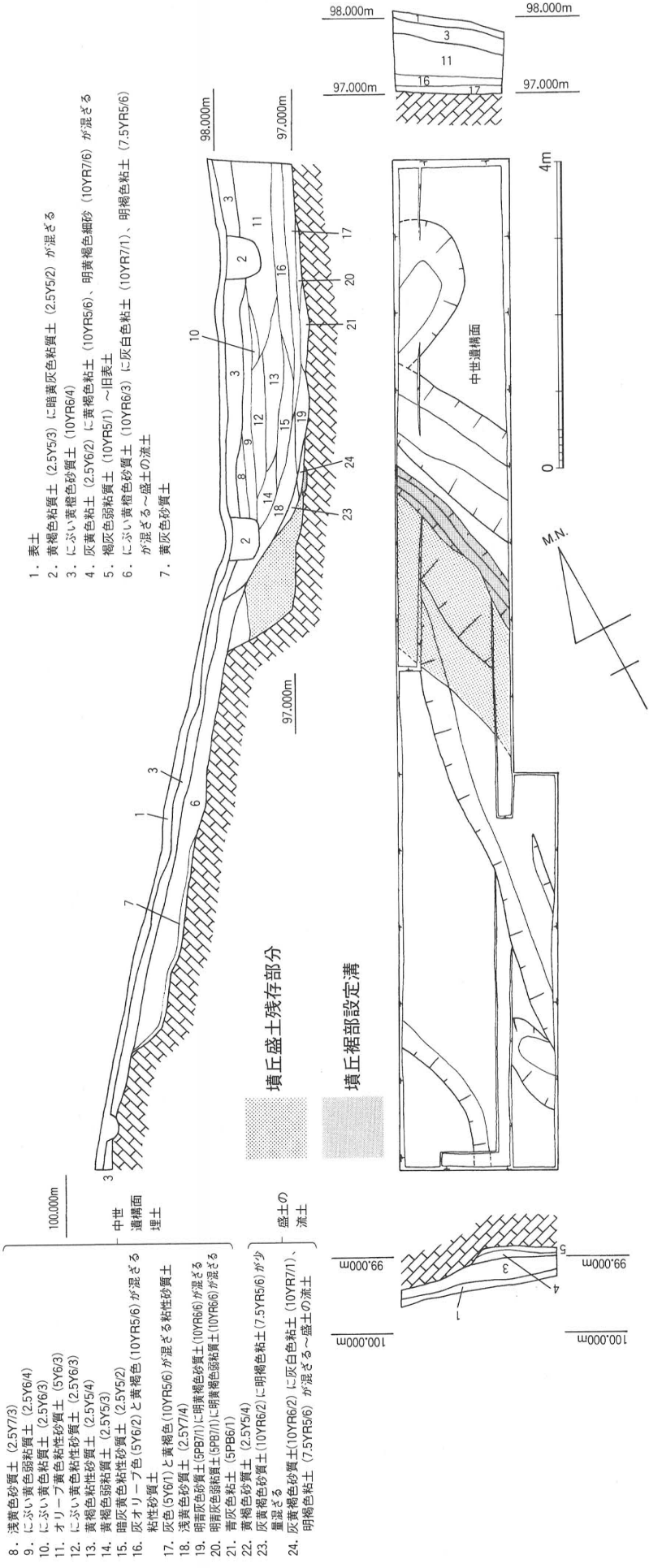
溝埋土内からは縄文時代晩期に属するものと思われる土器片が1点出土しているに過ぎない。

【平坦面】墳丘盛土の東側に関しては、第2・第6調査区同様中世に地山を底面とする遺構面が形成されているものの、古墳築造時に盛土の東側地山が上昇していたとは考えがたく、築造当時に平坦面は形成されていたと考えられる。現状で地山は調査基点より東に約14.0m地点から傾斜を強めて東方に降下している。したがって、お亀石古墳の墳丘東側面には、墳丘裾部から幅約3.5mの平坦面が形成されていたと考えられる。

8 第8調査区（第36図 写真47）

【墳丘裾部盛土（第37図 写真48上）】断面観察のため調査区北西壁側にトレンチを入れたところ、第7調査区同様に地山をカットした部分に残存する墳丘盛土を確認した。

現状の地山カット部分の肩部は、調査主軸からの距離では東に9.6mに位置しており、標高97.9mを測る。その地点から約0.9mの深さまでカットされており、その部分を充填する形で盛土がおこ

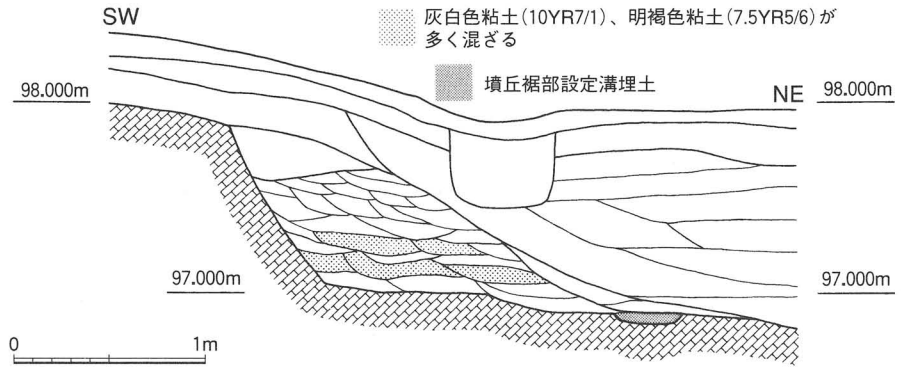


1. 表土
2. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) に暗黄灰色粘質土 (2.5Y5/2) が混ざる
3. にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/4)
4. 灰黄色粘土 (2.5Y6/2) に黄褐色粘土 (10YR5/6)、明黄褐色細砂 (10YR7/6) が混ざる
5. 褐色弱粘質土 (10YR5/1) ~旧表土
6. にぶい黄褐色粘質土 (10YR6/3) に灰白色粘土 (10YR7/1)、明褐色粘土 (7.5YR5/6) が混ざる ~盛土の流土
7. 黄灰色砂質土

8. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)
9. にぶい黄色弱粘質土 (2.5Y6/4)
10. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)
11. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/3)
12. にぶい黄色粘性砂質土 (2.5Y6/3)
13. 黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/4)
14. 黄褐色弱粘質土 (2.5Y5/3)
15. 暗黄褐色粘性砂質土 (2.5Y5/2)
16. 灰オリーブ色 (5Y6/2) と黄褐色 (10YR5/6) が混ざる粘性砂質土
17. 灰色 (5Y6/1) と黄褐色 (10YR5/6) が混ざる粘性砂質土
18. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
19. 明黄灰色砂質土 (9PB7/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) が混ざる
20. 明黄灰色弱粘質土 (9PB7/1) に明黄褐色粘質土 (10YR6/6) が混ざる
21. 青灰色粘土 (5PB6/1)
22. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4)
23. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) に明褐色粘土 (7.5YR5/6) が少量混ざる
24. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) に灰白色粘土 (10YR7/1)、明褐色粘土 (7.5YR5/6) が混ざる ~盛土の流土

第36図 第8調査区平面図・断面図

なわれている。盛土は調査主軸からの距離で11.05mまでの範囲に残存している。盛土東端部の高さは標高96.9mを測る。盛土を構成する土質に関してはほかの調査区と同様であるが、特徴としては



第37図 第8調査区墳丘裾部盛土土層断面図

第7調査区と同様に地山面付近に粘土ブロック（灰白色粘土10YR7/1、明褐色粘土7.5YR5/6）を多く含む土が用いられている。

【墳丘裾部設定溝】また、第7調査区で確認した墳丘裾部設定溝の延長をこの調査区でも検出した。墳丘盛土が流失しているため、検出時に溝の平面形態が確認できる状態であったが、一部盛土が溝の埋土に被さる部分も確認された。溝の東側肩部は調査区北西壁で調査主軸から東に11.3mに位置している。溝内埋土の性質も第7調査区のものと同様である。埋土内からは、図化はできないものであるが僅かにハケ調整の観察できる土師器の小片が出土している。

【平坦面】第7調査区同様、本調査区でも墳丘盛土の東側に地山を床面とする中世の遺構面が検出された。しかしながら、この調査区においても墳丘盛土の下端面と遺構面（地山面）とに大きな高低差がみられないため、古墳築造時にはこの平坦面が形成されていたものと解釈される。ここで注目すべき点は、調査主軸からの平坦面の距離である。第7調査区では調査基点から平坦面の東端部までの距離が約14.0mであるのに対し、この第8調査区では調査区北東端部、調査主軸からの距離が14.5mの地点でも地山は降下を見せていない。このことから、墳丘東側の平坦面は墳丘の前方（南）から背後（北）に向かってその幅を拡張させているものと推定できる。

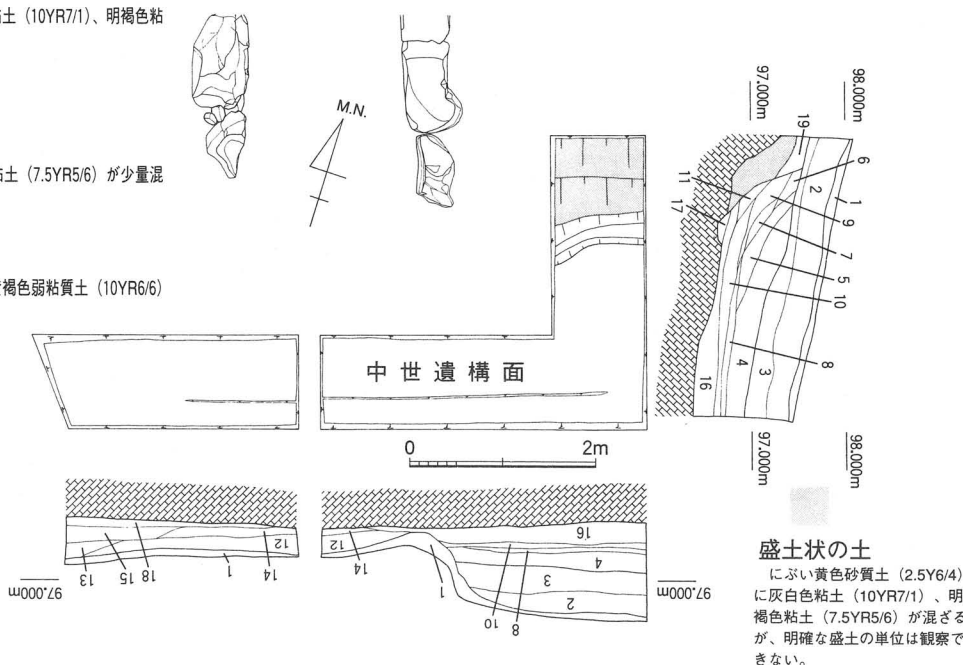
9 第9調査区（第38図 写真48下）

第1～8調査区の調査終了時点で、主に墳丘の東半部の成果からお亀石古墳が方墳であること、また墳丘の北限、東西幅に関してはある程度の復元が可能な状態に至った。しかしながら、墳丘の南側部分に関してはなお不明確な部分が残ったため、羨道部南側に幅1.0m、長さ6.0mの東西方向の調査区を設定し、さらに調査区東側を北に2.0m拡張させることとなった。

【墳丘盛土（写真49下）】

東側調査拡張区の北側で、墳丘盛土と思われる土が残存している部分を確認した。地山は調査区北端において急傾斜でカットされており、その部分に土を充填する形態はお亀石古墳の墳丘裾部における盛土構築の特徴と性格を一にしている。南端部は、標高96.75mを測る。しかしながらこの土は、質的にはほかの調査区の墳丘盛土と同様に粘土ブロック（灰白色粘土10YR7/1、明褐色粘土7.5YR5/6）が多量に含まれる土であるが、締まりが弱く、盛土の単位も確認できないものである。これらの状況は隣接する第6調査区の南側拡張区で検出されたものと類似しており、一連のものと思われる。現状では、古墳の墳丘に関連する遺構として理解しておきたい。

1. 表土
2. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) に灰白色粘土 (10YR7/1)、明褐色粘土 (7.5YR5/6) が混ざる～盛土の流土
3. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)
4. 灰オリブ色粘質土 (5Y5/3)
5. オリブ黄色粘性砂質土 (5Y6/3)
6. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)
7. 灰オリブ色弱粘質土 (7.5Y6/2)
8. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) に明褐色粘土 (7.5YR5/6) が少量混ざる
9. にぶい黄色弱粘質土 (2.5Y6/3)
10. 灰白色砂質土 (5Y7/2)
11. オリブ黄色弱粘質土 (5Y6/3)
12. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) に明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) が混ざる (第5トレンチの第11層)
13. 灰オリブ色粘性砂質土 (5Y6/2)
14. 明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) に灰色弱粘質土 (10YR6/1) が混ざる (第5トレンチの第12層)
15. 灰色弱粘質土 (5Y6/1) に明黄褐色弱粘質土 (10YR6/6) が混ざる
16. 灰オリブ色粘性砂質土 (5Y6/2)
17. 灰オリブ色砂質土 (5Y5/2)
18. 灰色粘性砂質土 (5Y6/1) に明黄褐色粘性砂質土 (10YR6/6) が混ざる
19. 明黄褐色砂質土 (2.5Y6/6) に灰白色粘土 (10YR7/1)、明褐色粘土 (7.5YR5/6) が混ざる～盛土の流土



第38図 第9調査区平面図・断面図

また、この調査区の南面においても地山を底面とする中世の遺構面を検出した。第5調査区でも記述したように、今回の調査で確認した開口部南面の地山高は、埋葬施設の石槨部底面高に対して大きな低下を見せておらず、削平も小規模であったものと推定される。

第4項 埋葬施設 (第39図, 第40図 写真38, 50～58)

すべての調査区での発掘調査を終えたのち、埋葬施設内部を清掃し、平面図・断面見通し図^(註11)の作成をおこなった。本項では、図化作業過程で確認できたお亀石古墳埋葬施設の構造的な特徴を記述する。なお、埋葬施設に用いられている各石材の説明のため、便宜上羨道部東壁と西壁に分けてそれぞれ石材に番号を付けて記述をおこなう (第40図)。

また各石材の石種に関しては、本書付編に奥田尚氏による鑑定を掲載しているのので、参照して頂きたい。

1 石槨部

お亀石古墳は、削り抜きの家形石棺を石槨として用いている。形態的な特徴を見ると、まず棺身の羨道部木口片側に横穴を設けていることが挙げられる。この横口の規模は、現在では外面部分の風化・剥離が激しいものの、遺存状態の良い内面側で計測をおこなうと、横幅0.67m、高さ0.39mを測る。横幅、縦幅ともに外面部分が広く内面部分が狭い構造となっており、断面形態は「ハ」の字状になっている (写真57下)。

お亀石古墳の大きな特徴のひとつとして、この横口の栓として用いられた石 (写真58) が遺存していることが挙げられる^(註12)。この石栓は、外側面の周囲3方に鏝状の突帯が廻らされており、各辺の鏝部内面中央には手がかげられるように長方形の把手が彫り込まれている。外側面から内面に向かっては棺身の横口の形状と同様に「ハ」の字状に細くなっている (第41図)。この石栓の重量の計

測は未だおこなっていないが、現地では成人男性3人がかりで僅かに持ち上げられる程の重量であり、狭い羨道部内において人力で横口に栓をおこなうのは無理な感がある^(註13)。この種の横口式石槨の構造を考えるうえで重要な要素と考えられるため、ここに付記しておく。

棺身内部床面の規模は長さ1.78m、幅は最大幅が0.87mであるが、幅に関しては入り口側が広く、奥側がやや狭くなっている。床面はごく僅かではあるが凹面を形成している。今回の調査では石槨部周囲の掘削はおこなっていないため、家形石棺後部の形態は推測するしかないが、棺身の木口側壁の厚みは、横口側が後部側に比べて厚く作られているようである。これは、横口施設を設けるために強度を高めたものと考えられることから、この家形石棺は単純な「転用」で石槨として用いられたのではなく、当初より横口を設ける前提で製作されたものであることが分かる^(註14)。

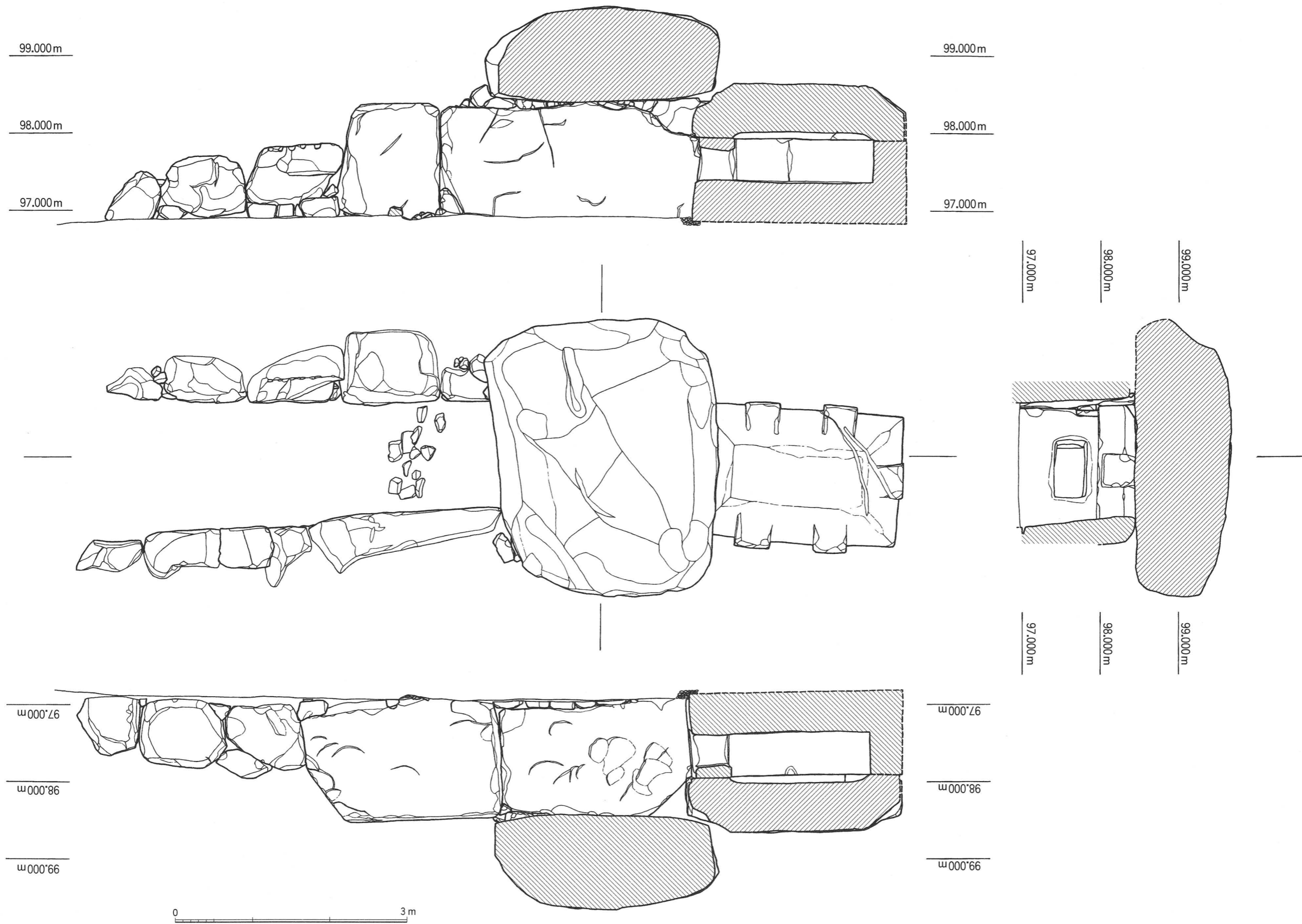
また棺身の前面西側上部には、縦幅28cm、横幅8cmの長方形の凹部が存在する。その凹部に嵌め込む形で加工された石材が充填されている(写真55上)。機能的には意味を有する部分とは考えられないため、棺身製作過程、もしくは搬送・埋葬施設構築過程において偶発的にできた破損部分を加工して補修したものと考えられる。さらに観察を進めると、西側壁1の右上部には棺身石材充填部分に合わず形状で石材を「L」字形にカットしている部分が存在し、その部分にもうひとつの石材を充填することにより棺身充填石材を固定していることが分かる(写真57上)。棺身破損部分の底面と側壁カット部分の底面は正確に一致しているところからみて、この加工は西側側壁1設置後におこなわれたであろうことが推測できる。

棺蓋部分に関しては、突起部を除いた規模は長さ2.65m、最大幅1.74mである。棺身底面からの全高は1.79mを測る。棺蓋幅は中央部がもっとも膨らみ両短辺側が僅かではあるが縮約する樽形である。内面は棺身に合わせて凹面が形成されており、棺身内部底面からの高さは最高所で0.67mを測る。内面長、幅とも棺身と整合するように精緻に作られているが、棺身に対して蓋がやや前方にずれて置かれているため、接置部分では棺身と3cmほどの段差が生じている。外面には両長辺に2個、両短辺に1個の縄掛突起が形成されている。突起は形骸化の進んだものであり、蓋周縁に対する突出は僅かに3～6cmに過ぎない。天井部の平坦面は、昭和35年の調査写真と比べても著しく風化が進行しており、正確な数値を求めるのは困難である。比較的残存状況の良い部分で計測すると、長さ1.7m、幅0.73mを測る。

また、調査主軸断面ラインで見ると、天井部と棺身床面は僅かに前面が高く後面が低くなっている。これは石槨(家形石棺)自体の構造的な特徴ではなく、墓壇床面の高低差を反映しているものと考えられる。

2 前室部・羨道部

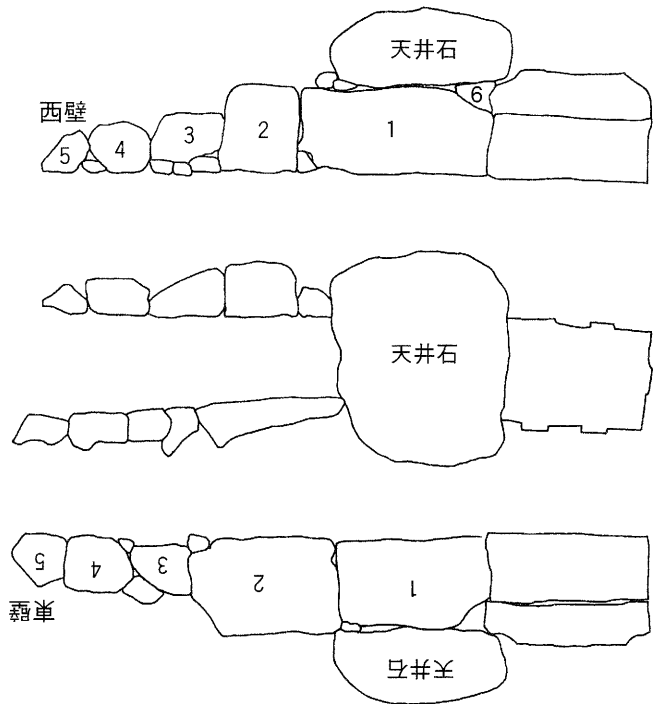
昭和35(1960)年の調査により、羨道部床面、石槨部南端から約3.5mの地点に溝状の施設が確認されている。この溝に関しては、『富田林市史』に「～羨道の床面全体が約五拵の厚さに礫石敷となっていた中で、棺端から三・五拵離れて羨道を横断する狭い溝状遺構があり、両縁に玉石を併列して、ここに羨道の入口を閉塞する扉を設けていたと見られる点をあげることができる。」と記述されている(北野1985)。今回の測量時にもこの溝を確認したが、この部分に何らかの閉塞施設があったと復元すると、石槨の前方部分をすべて羨道部と呼称するわけにはいかなくなる。現に石槨前方部からこの溝までを「玄室」もしくは「前室」として積極的に理解しようとする研究者も多い^(註16)。



第39図 埋葬施設平面図・断面図

しかしながら、本稿は埋葬施設の構造的な特徴を資料として記述することが目的であるため、不明確な部分は無理な意味づけをせず石槨部より前方の施設を「羨道部」として認識しておく。

羨道部側壁は、基底部の主石で見ると両側壁とも5石で構成されている。両側壁とも第2石までは花崗岩の巨大な切石で構成される。東壁は東壁1が横幅約2.5m、東壁2が横幅約2.6mとほぼ同規模の石が用いられている。これに対し西壁は西壁1が横幅約3.5m、西壁2が横幅約1.3mと不揃いの横幅の石で構成されている。この第2石までの両側壁は、側面的な規模では西壁に比べて東壁がやや長いが、面取り加工の施されている壁石上面の長さはほぼ同一に揃えられていることが分かる。現在羨道部



第40図 埋葬施設略図

の天井石は北（石槨）側の1石しか遺存していないが、築造時はこの上面の整えられている部分までは天井石が被せられていたものと考えられる。現在残っている天井石の前側面に面取り加工がおこなわれていることもこの補強材料となるであろう。

また、第7調査区における墓壇内の掘削により、東壁1は背面にも加工がおこなわれ、板石状に整形されていることが確認されている。

これより前方の3石は、やや小ぶりの石が用いられている。現状では、両側壁とも第3石から第1石に向かって上面の高さが低下している（写真51）。開口部の第5石は両壁とも前面が斜角をなしている。とくに西壁5の南側面（開口部面）には面取り加工がおこなわれているため、元来羨道部はこの石をもって開口部としていたものと考えられる^(註17)。

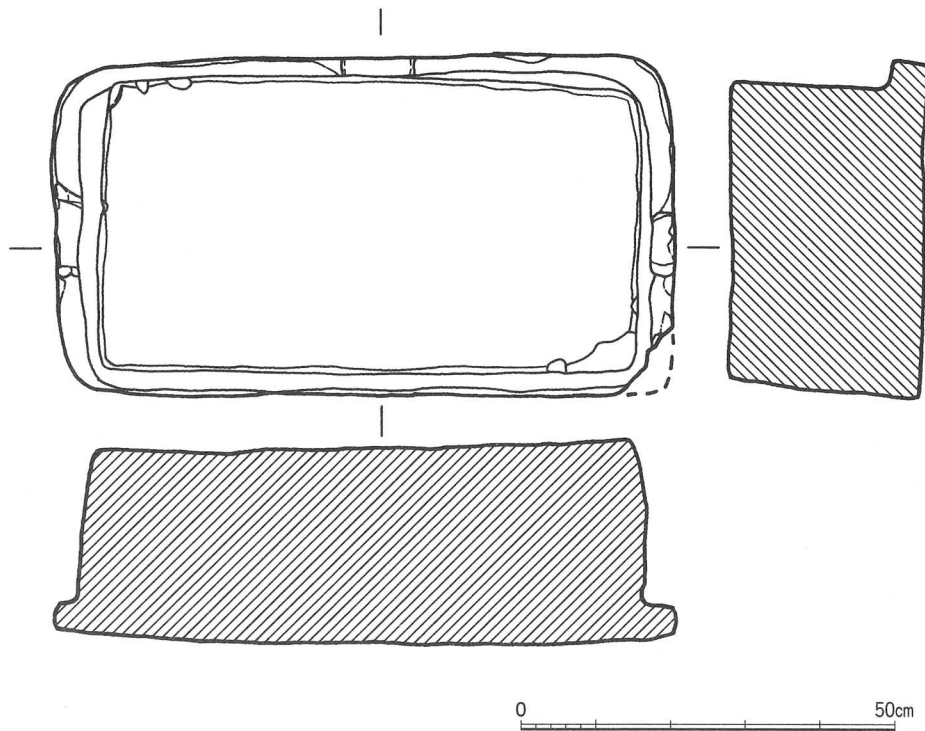
さらに観察を進めると、両側壁の第3～5石の上面には面取り加工がおこなわれている。第3石より前方の墳丘上部構造に関しては、解明は今後とも困難であろうが、少なくとも第3～5石の上部に何らかの構造物が存在した可能性は高いと言える。

このほかに、西壁3には石割の矢穴が残っている。矢穴は上面から13～20cm間隔で5ヶ所に穿たれている。鑿幅は約7cmである。

現在1石しか残っていない天井石には、縦幅2.85m、横幅3.6m、厚さ最大1.22mの巨大な花崗岩が用いられている。上面は粗割による整形がおこなわれており、下面は面取り加工がおこなわれている。また前述したように前側面には明瞭な面取り加工がおこなわれているが、後側面にも粗く面取りがおこなわれている。

天井石と両側壁第1石のあいだには花崗岩、安山岩の小礫を用いて填石をおこない、天井石の安定を保っている。またこのような填石は側壁の下部やあいだにもおこなわれている。

前述したことであるが、羨道部の床面には川原石の小礫が敷き詰められている。この小礫は石槨



第41図 お亀石古墳石槨部 石柱

部の下にまで及んでいることが確認された。このことにより、墓壙の床面に小礫が敷かれたのちに石槨部が設置されたことが判明した。

3 閉塞石 (第42図 写真42下)

墳丘の南西側、第4調査区と第5調査区とのあいだにおいて、川原石が集中して検出された。これは、調査当初におこなった現況測量のための除草時に表土内から数個の川原石が露出していたため、表土を除去する形で

川原石の広がりを確認したものである。

その結果、羨道開口部南西側に集中して、10cm～50cm大の川原石が約100点検出された。これらの石の性格に関しては、発掘調査の結果お亀石古墳の墳丘には石が用いられていないこと、また開口部付近に集中して存在することから、お亀石古墳に用いられた閉塞石と考えられる。

この石の存在により、お亀石古墳の埋葬施設には石槨部を閉塞する石柱のほかさらに前方に閉塞施設が存在した可能性が高まった。

前述したように、同種の石は今回の調査において中世の遺構からも出土している。このことは、中世にお亀石古墳が盗掘・破壊を受けた際に、閉塞石が再利用された、もしくは混入した状況を示すものであろう。^(註18)

なお、この川原石は検出時にすでに不安定な状態であったため、写真撮影と図化をおこなったのち、調査終了時に取り上げている。^(註19)

4 埋葬施設の構築順序

ここでは、以上の観察から想定できるお亀石古墳埋葬施設の構築順序を記述する。

①墓壙の床面に小礫を敷く

ただし、羨道部側壁の構築においてはこの小礫は障害物となるため、石槨部底面にのみ先行して礫敷きをおこなったものと考えられる。側壁下部に小礫が確認できないことからみても、羨道部の礫敷きは埋葬施設構築の最終段階であったものと考えられる。

②石槨部 (家形石棺棺身) を設置する

棺身と両側壁第1石との設置状況からみて、棺身を設置したのちに両側壁を構築していることが

分かる。ここで注目すべき点は、棺蓋と側壁との関係である（写真56上 57上）。両側壁第1石の北側（石槨側）側面には加工がおこなわれているが、ともに北側に向かってその上面を傾斜させており、石槨部との接触面では両側壁ともに棺身部分にしか当たっていない。とくに東壁1の北端部を見ると、側壁と棺蓋のあいだには1cm内外の僅かな隙間しか生じておらず、また前述した西壁1北端部の棺身破損部を補修するための加工状況を見ても、両側壁の構築は棺蓋の設置前であることが窺える。

③羨道部側壁の構築

上述したように、石槨部（棺身）設置後に羨道部側壁が構築される。構築は両側壁ともに北側（石槨側）から南側（開口部側）の順におこなわれる。

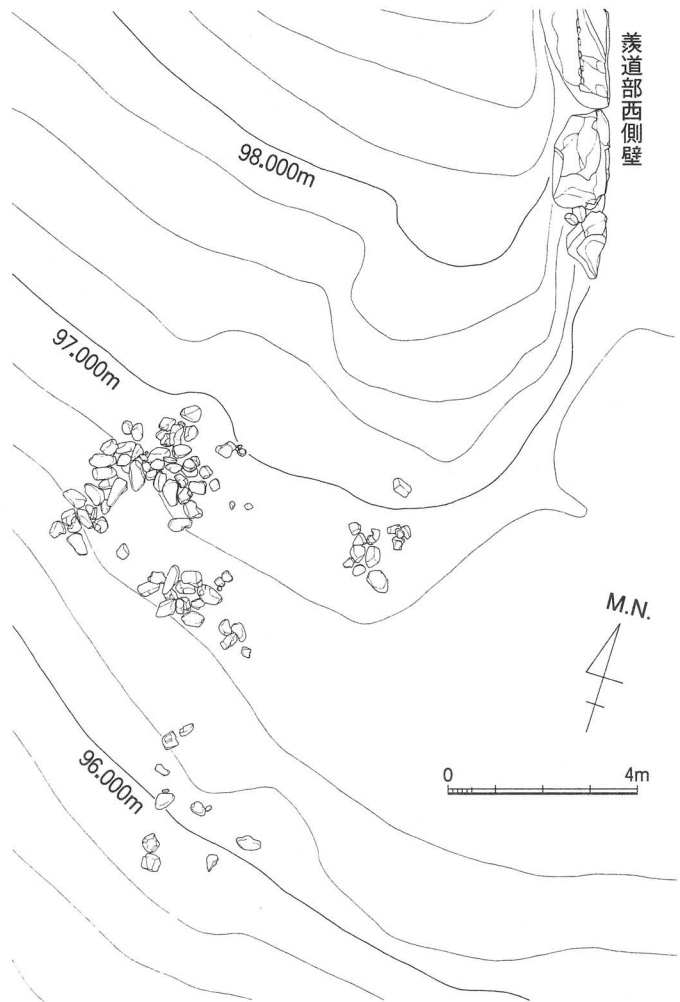
④石槨部（家形石棺棺蓋）を設置する

棺蓋と西壁6の接触状況から見て、棺蓋の設置はこの段階でおこなわれたものと考えるのが妥当であろう。しかしながら、棺蓋と東壁とが接触していないことを重視すると、あるいは天井石設置後に北側（後方）から棺蓋をずらしながら設置することも可能かと思われる。したがって、この第4過程と第5過程は順序が前後する可能性を有する。

⑤天井石を設置する

西壁6や小礫による填石をおこない、天井石を安定させ設置する。なお、前述したように築造時には少なくとも現在遺存している天井石の南側（開口部側）、両側壁第2石上まで天井石は存在したものと考えられる。

このほかに、石槨部周囲の平瓦を用いた護壁がどの段階で構築されたのかに問題が残る。昭和35（1960）年の調査では、この護壁は棺底から約0.7mの高さまで遺存していたらしい（北野 1985：447頁）。お亀石古墳築造時にこの瓦積みは護壁としてのみ存在していたのか、または石槨部上面まで被覆する形で構築されていたのかは重要な問題であるが、現在我々はこれを確認する術を持たない。しかしながら、その材質の脆弱さや棺蓋設置時の作業空間を考えると、構築過程としては護壁とした場合でも第4過程の棺蓋設置後もしくは第5過程天井石設置後と考えられる。また石槨部全体を被覆していたと考える場合は第5過程天井石設置後の埋葬施設の構築最終段階でおこなわれたものと見なされる。



第42図 墳丘南西部川原石（閉塞石）群検出状況平面図

第Ⅱ章の【註】

- 1) 石田茂作氏の研究によると、飛鳥期および白鳳期の塔の高さは、塔心礎の柱座径（太さ）の30倍代、天平期の塔では40倍以上になるとされる。飛鳥期の新堂廃寺の塔の規模をあてはめると、その高さは30m近くになると想定できる（石田 1948, 221頁）。
- 2) 1960年の大阪府教育委員会の調査では、この黒褐色弱粘質土を地山と認識している（浅野・坪井・藤沢 1961）。しかし、この層が西側に隣接して設けた第5調査区の調査区東端から約8.8mの位置で完全に途切れることと、1片とはいえ土師器片が検出されたことを併わせ考えると、地山と認定することはできない。この層は約10度の緩傾斜の地形を0.1mほどの均質の厚さで覆うように、広い範囲で認められるので、飛鳥期創建時の整地土と便宜的に呼称するが、盛り土でこの層が形成されたのか、あるいは、古墳築造の範囲を確定させるときになされたのと同じように、地表面を焼いて形成されたのかは確定できていない。この層の上面で炭片を多量に検出したので、後者の可能性が捨て切れない。
- 3) 『平成12年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（粟田 2001）で、白鳳期再建時の心柱の立て直し痕跡と報告したものは、そののちの検討結果から抜き取り痕跡とすべきであることが判明した。ここで訂正しておく。
- 4) 1960年の調査でも「基壇上面を排土したところ、玉石上面とほぼ同じ高さで肌分かれする部分もあるが、上に明瞭な柱痕跡を認められず、玉石列の外は玉石下面の高さにわずかにこの土の堆積があつて旧地表面を示すものと考えた」と報告されている（浅野・坪井・藤沢 1961：4頁）。この肌分かれする部分と記述されるのが瓦積基壇の裏込めに積まれた土層と推測できる。
- 5) 西方建物の東辺中央に間口が5.6m、奥行きは2mの突出部が取り付くとされる。その突出部は2つの部分からなり、南半は南側辺に凝灰岩を据え付けた痕跡があり、全体が黄色粘土からなり、北半は一段低く、幅2.5mの範囲に瓦が敷き詰められ、北縁に玉石が並べられていたとされた。突出部は最初南半部だけが造られ、凝灰岩で外装されていたのが、あとで北半部が継ぎ足され、そのときに玉石で改装されたと想定されている（浅野・坪井・藤沢 1961）。ところで、この突出部はそれぞれが、創建時と再建後の階段部であると推測できるが、創建時の階段部については「最初南半部だけが作られ」（浅野・坪井・藤沢 1961：6頁）たとされ、「東辺中央の改作前の突出部はこの基壇（創建期の基壇）の中央にあたり」（傍点筆者加筆）（浅野・坪井・藤沢 1961, 6-7頁）と考えられているだけで、規模についての数値は記述されていない。報告された実測図の南辺に玉石の抜き取り痕跡と推測できる穴を認めるが、この部分で計測すると、再建後の間口は6.08mとなる。この計測値を再建後の間口の規模とするべきであろう。なお、この間口の計測値は、再建後の西方建物の東辺中央に取り付けられていたとされるものに整合する。実測図に書き込まれた数値を採用しておく。
- 6) この回廊を検出した大阪府教育委員会の調査では、「北トレンチ」の東側は中世の耕作による削平が著しかったが、回廊の途切れる箇所を検出した調査担当者である小浜成氏は、「創建回廊は、中門東辺から東へ長さ約18.0m付近で北に曲がる可能性があり、調査区内で検出した地山削り出しの東傾斜の段差によって、これ以东にはのびないことが考えられる」と報告した（小浜ほか1999：10頁）。しかし、そののちに刊行された『報告書』は、小浜氏が南東角とした想定位置が正しいとすると、「創建時の伽藍配置を四天王寺式と考えても、塔、金堂、塔の建物規模に比して東西回廊の間がかなり狭くなる」と述べられている（井西ほか 2001：29頁）。そのうえでその『報告書』は、2000年度に本市教育委員会が、東面回廊を検出するべく設けた第1調査区を組上にあげて否定する見解を述べる。すなわち「註9文献（『新堂廃寺』現地説明会資料 2000年11月）では東面回廊基壇を検出したとされているが、平面図、断面図の掲載がなく、根拠は不明確である。現地で説明を受けた限りでは、「積み土」とされた土層は層厚10数cmの古代以前の整地土と考えられる土層で、A区で検出した回廊基壇築成土（小浜氏の検出した回廊基壇土）とは異なっている。回廊基壇西側の落ちとされた南北方向のわずかな段差については、断面を見る限り、上層は現代の床土が同じ形状で覆っていることから、古く考えても中世の耕作に伴う段差であろう。」（井西ほか 2001：29頁）と書く。しかし、本市教育委員会は2000年度の調査終了ののち、直ちに『概要報告書』を刊行して、そこに東面回廊の調査に関する平面図、断面図を掲載し、東面回廊の基壇土とした積土が、小浜氏が検出された基壇土と若干違いのあること、また、東面回廊の西端とおぼしき箇所で検出された段差が0.05mとわずかであるうえに、段差に沿うように床土が堆積していることから、積土自体からは東面回廊基壇を積極的に認定できる状況でないことを説明した。その

うえて、「積土」と認定する土は、新堂廃寺跡の多くの箇所では認められる地山土を混ぜ込んだ新堂廃寺跡の整地土と類似する堆積土である点を重視し、さらに西面回廊を検出した第5調査区の状況をも併わせ考えて東面回廊を認定したと報告した(傍点筆者加筆)(栗田2001:18頁)。

- 7) 奥田尚氏(奈良県立橿原考古学研究所)に現地での鑑定をおこなって頂いたところ、この礫の鉱物構成がお亀石古墳の羨道部天井石のものと類似するというご教示を得た。お亀石古墳には埋葬施設以外には石材が使用されていないことは確実に考えられるため、この礫は埋葬施設の構築に伴う産物と見なすのが妥当と考えられる。
- 8) 調査終了後、周辺地形の航空測量のためさらに丘陵下方、現在御観寺池の北縁を東西方向に走る里道まで除草をおこなったところ、この突出部は現在の里道付近まで伸びている可能性が高いことが判明した。
- 9) 今回の調査では埋葬施設は調査対象となっていないが、石槨部の底面高に関しては墳丘の規模の確認に必要な情報であったため、石槨部前面、調査主軸ラインに0.2m×0.2mの範囲で掘削をおこなった。
- 10) 註8)同様にこの小礫も奥田尚氏に鑑定して頂き、羨道部側壁に見られる花崗岩アプライト脈部分の破片ではないかというご教示を得た。
- 11) 断面に用いたラインは今回設定した調査主軸である。
- 12) この石栓は、現状でも周縁部が欠けるなどしており、保存状況に問題があると判断したため、現在では富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
- 13) 羨道部内で石栓を持ち上げられない大きな要因はその重量であるが、そのほかの理由としては羨道部の天井石の存在がある。羨道部床面から天井石までの高さは約1.5mであり、成人男性が腰を伸ばして立つことは困難である。当然重量のあるものを抱え上げる際には中腰では負担が大きすぎ、現に石栓を槨部前から移動させる際にも成人男性3人で台車に乗せるのが困難な程であった。
- 14) 北垣聰一郎氏は富田林市宮前山古墳石槨の横口部と松井塚古墳・お亀石古墳の横口部との違いに関して、「～松井塚古墳やお亀石古墳に使われている家形石槨が転用であるのに対して、宮前山古墳の組合せ石槨は、製作当初からあらかじめ意図して作られたものである。このことは宮前山古墳の組合せ石槨が、遺骸を上から納める家形石槨の機能を喪失したことを意味する。」(北垣1985:858頁)と述べている。この後半部分に関しては筆者も同意する部分があるが、横口の機能問題は別として、お亀石古墳の石槨(家形石槨)は製作当初から横口を設けることを前提に作られたものである可能性が非常に高いことを指摘しておく。
- 15) 実測図(第39図)に図示しているが、『富田林市史』第1巻に掲載されている実測図(北野1985:448頁)と比較すると溝周囲の石の配置などによりかなり相違が見られる。現状では溝自体の形状も非常に不明瞭なものであり、市史編纂時の測量以降に攪乱を受けているものと思われる。また、羨道部床面に敷き詰められている小礫に関しては、大阪府教育委員会による調査、また市史編纂時に過去2度の上面検出がおこなわれており、現在では遺構としての状況を留めていないと判断したため、今回の調査では図化作業を省略した。
- 16) 猪熊兼勝氏はその論文中で「～玄室と羨道を画する位置になる。そのため、石槨式石室は、通常の横穴式石室に奥室が付設された構造となる。」(猪熊1976:44～45頁)と解釈しており、この溝に横穴式石室で言う「玄門部」の性格を見い出している。また山本彰氏も「～石槨が奥室的要素を持つ系列(A系列)～」(山本1988:652頁)のなかにお亀石古墳を位置づけており、この溝に羨道と前室とを区分する機能を見い出している。
- 17) 開口部側壁の同様な面取り加工を有する古墳として、大阪府羽曳野市オーコー8号墳が挙げられる。山本彰氏はオーコー8号墳に関して、「～その先端は約60度の角度で面取り加工がみられ、築造当時から墳丘外に露出していたと考えられます。」(山本1988:16頁)という指摘をおこなっている。
- 18) 大正2(1913)年に撮影された写真を見ると(谷井ほか1934:図版46下)、羨道部内、石槨前面の床面には人頭大の石が多数存在している。したがって今回確認された川原石群はそれほど古い時期に移動させられたのではなく、大正2年以降、大阪府教育委員会の発掘調査前(昭和35年)のあいだに現在の位置に排出された可能性がある。
- 19) この川原石は、現在富田林市立埋蔵文化財センターに保管してある。

第Ⅲ章 遺物の読み

第1節 新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類資料

第1項 資料の特色と読み ——目的と方法を兼ねて——

新堂廃寺跡およびオガンジ池瓦窯跡からは膨大な量の瓦埴類資料が出土した(中辻・栗田 1999; 栗田 2000; 2001)。この章では、そのなかでも未報告の調査の記述に意を尽くすとともに、富田林市教育委員会が積み重ねてきた発掘調査の成果と、とくにそれによって得られた瓦埴類資料の属性組成的認識を試みる。

新堂廃寺跡に出土した瓦資料に「朝鮮半島でおこなわれた瓦製作」の匂いがきわめて強いことを直感された藤澤一夫氏は、近くに位置した「オガンジ」の地名を、これまた鋭感的に朝鮮半島における造瓦に結びつけられた(藤沢 1961b)。果たしてそのオガンジ池に瓦窯跡を発見されたのは北野耕平氏であった。かくしてオガンジ池瓦窯跡は、北野氏の指導のもとに富田林市教育委員会によって2度の発掘調査がなされることとなり、そのときに出土した瓦埴類資料の検討の成果も併せて報告する。すなわち、そのほかの新堂廃寺関連瓦窯が未発見であるかどうかは問えないとして、少なくともその瓦当を主として取り扱った予備研究から分かったことであるが、オガンジ池瓦窯は、新堂廃寺で使われた瓦埴を長いあいだにわたって生産した場所であることは確かであるとの前提に立って、双方に出土した瓦埴類資料を詳細に観察して、瓦埴の生産場所と使用場所の関連を明らかにしようと意図した。さらにオガンジ池瓦窯跡のすぐ後ろの丘の上にはお亀石古墳があり、そこにはオガンジ池瓦窯跡や新堂廃寺跡の発掘調査で出土したものと同種の瓦を積んだ施設が確認されている。この3者の相関関係を解明するには、お亀石古墳に残る瓦積み施設を構成する瓦資料を分析することが必須であるが(栗田 2002)、これについては今後の調査を待つしかない。

ここでは良好な残り方をしたとは思えなかった資料を用いてではあるが、新堂廃寺に使われた瓦埴類の、生産場所と使用場所の相関関係を明らかにするため、個々の瓦埴類資料がもつデータを、細かくかつ構造的に把握しようと努めた。そのため膨大な量に達した資料に対して、破片を可能な限りのひっつける作業(「接合作業」)を採用して、1枚の瓦をなす諸属性の組成を設定することで、微視的観点から瓦埴類資料の個々を区別しようと試みた。

その過程の破片をひっつける作業をかなり進めた段階で、北野氏(藤・北野 1961)や藤澤氏(藤沢 1961a)の研究以来の到達点(井西 1996・1997・2001; 広瀬 2001; 岩戸 2001; 梶原 2001)とは異なった研究への視野が開けるところとなった。そこで実際には次のとおりの資料を扱う作業をおこなう。多くの種類の瓦埴類資料をまず形態に従って、機能形態として分類し、そのおのおのについて、観察できる技術形態属性を抽出し、個々の1枚の瓦埴類資料を構成する属性組成を求め、そのように認識できる群(「型式」とか「類」と呼べるが、これらの概念用語は、さまざまなふうにも先学によっても、またわたしたちによっても、使われてきたところであるし、その概念の整理を未だなしえていないので、あえてここでは「群」としておきたい。)の瓦埴類資料が、オガンジ池瓦窯の、あるいは新堂廃寺の、どのような場所に、どのような姿で残存したかを理解しようと試みる。

従来の研究の積み重ねによって用いられてきた「型(形)式分類」の枠組みでは、実際に長い時

間の経過のなかで繰り広げられた瓦埴類資料のオガンジ池瓦窯での生産から新堂廃寺の配置伽藍のなかの具体的に特定できる場所での使用・廃棄に至る、「動作連鎖」的な全貌を叙述するには、不十分である。また藤澤氏の研究以来の「型式分類」に「先験的」^{アプリオリ}につきまってきた、「飛鳥時代の」とか、あるいは「飛鳥様式」というような時間次元の概念は、本来的には型式学的研究の分析の到達点として引き出されるべき要素である、と思う。長いあいだにわたって「先験的」に使用されてきた概念が、多くの遺跡での多くの研究者の努力の積み重ねを伴って、過去の時間枠を設定する（編年）作業において有効的に作用してきたことも、事実として否定しがたい一面がある。しかし、型式学的認識は考古資料の分類視点の設定に意味をなして作用しているとはいえ、時間の流れの上でののおのの分類された型式の分布を求める作業（編年作業）では、一括遺物の同時性^(註1)の仮定に基づく、いわゆるセリエーション（組列化）をおこなう作業が基礎をなすことが考古学研究のひとつの確実なあゆみであると指摘されたうえは（山中 2002）、「先験的」に時間枠を付与する型式設定作業は、ひとまず思考のなかからはずして、瓦埴類資料の認識の仕方を問う作業を出発点にかかげて、その具体的な資料整理の第一歩を、破片資料をひっつけることの徹底にわたしたちは求めたのである。

この作業は、当然のことながら、時間をかければかけるほどひっつけられる個体数が増加するという性質のものであり、どの程度でひっつける作業を止めるかも成果の質に反映する。しかし完形としての1枚の平瓦に復元しえた例をこえて、桶巻き作りの平瓦資料について、桶の上にあった分割される以前の状態を見いだすことができた。平瓦に関しては分割断面・破面がそのまま残されているという希有な特色をもつ資料に恵まれたともいえようが、破面調整の施された丸瓦に関して布目の織りを微視的に観察して、直接には付かないにもかかわらず、型木の上での関係を見つけることができたのである。

ただこの報告では、時間的な制約もあって、破片をひっつける作業の成果を技術形態的データとして取り扱うことだけに終わった恨みが残る。平瓦の完形復元作業からは、サイズの明らかに異なる平瓦が造り分けられた事実が分かり、それらのサイズの異なる平瓦が葺かれる場を違えていたことも部分的に分かったとはいえ、それぞれの機能形態が実際に機能を与えられた屋瓦の姿をなした事実を示すには至っていない。ルロワ＝グーランの提唱した「動作連鎖」の概念（西秋 1998）をもって瓦資料を扱うには、なお少しの道のりを残すことになってしまったのである。

第2項 観察属性の設定と主属性の認定

分析の対象となる瓦埴類資料は、それらの形態から、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦、熨斗瓦、隅平瓦、螻羽瓦、面戸瓦、鴟尾、鬼瓦、隅木蓋瓦、埴といった機能形態に分けることができた。これらの機能形態は従来の研究によって呼称されてきたとおりである。それぞれの記述に当たっては、記号化をせずに、漢字のまま分類に当てることにする。

これらの瓦埴類の製造は、粘土を採取し、それを整備し、そしておのの機能形態に成形・調整し、乾燥させてから窯入れする、という一連の「動作連鎖」から構成される。粘土を整備するまでについては、製品の胎土の観察から推察するデータ以上に検討を加えなかったが、成形・調整の仕方を技術形態属性のレベルで捉え、変異のある属性の組成の形で、1枚の瓦埴類を認識する試みをおこなった。

たとえば鬼瓦や鴟尾の機能形態は、それぞれ独自の製作工程をもつ。そこで、ほかの機能形態の資料とのあいだで同じ使用工具を認定させる属性の一致がなければ、その機能形態は「独立した製作」であった、という表現以上に語るには、出土状況などのほかの要因からの論拠が求められる。しかし別のいくつかの機能形態のあいだには、製作工程で同じ過程を併せもつものが考えられる。丸瓦と軒丸瓦、平瓦と軒平瓦の関係にみるように、軒丸瓦、軒平瓦は、瓦当部を除くと、それぞれ丸瓦、平瓦と同じ製作工程をもつことがある。当然のことながら、一本作りの軒丸瓦、一枚作りの軒平瓦の場合は、それぞれ独自の製作工程をもつということになる。それを除いた、瓦当部と瓦部を別々に造って接合した例にあっては、その機能形態に特有の属性はそれとして観察する必要があるが、複数の機能形態にわたって採用された同じ製作工程が反映する属性は、共通属性（共通する技術形態属性）として観察するのが適切であろう。さらにもうひとつのカテゴリーにまとめられる機能形態が存在する。平瓦を半裁した熨斗瓦や、同じく斜めに半分近くを割り取った隅平瓦、そして丸瓦を打ち欠いて造り出した面戸瓦である。まずは同じ機能形態を造り出すのであるから、その段階までは製作にかかわる同じ技術形態属性を観察することになる。熨斗瓦、面戸瓦および隅平瓦の場合は、割り方の変異を属性的に捉えてそこに追加することになる。これまた当然のことであるが、一本作りや一枚作りの例は別である。

そこで、まず複数の機能形態にまたがって共通する技術形態属性について、そこにありうる変異を想定する。次いでおのおのの機能形態ごとに、それぞれ独自の技術形態属性の変異を検討して、そこに先に想定した共通する技術形態属性の変異を併わせることで、観察属性のリストを設定する。作業を進めるに際しての鍵属性となる主属性には、それらの観察属性のなかから、造り手の違いによってでは生じにくい表出属性であることを第一の視点で選定する。^(註2)

主として、胎土を整備してから成形・調整する工程のひとつが製品のうえに反映される技術形態属性と定義できる、異なった機能形態にまたがって認めることができる共通属性を考えてみる。

(i) 素材

胎土および焼成後の色調。

それに加えて、出発形態に粘土紐を作るか、粘土板を作るかの区別も認定することができる。粘土板の場合は、糸切り痕の有無、粘土板の重ね方も区別することができる。粘土板の重ね方については佐原真氏に従い（佐原 1972）、以下の記号を使用する。

S型：粘土板の左端を上重ねる

Z型：粘土板の右端を上重ねる

(ii) 造瓦器具の反映属性

I 型木作り — 1：截頭円筒形の型木

2：円柱形の型木

3：瓶形の型木 — 3 1：筒部と玉縁部の境目は明確な段状を呈する

— 3 2：筒部と玉縁部の境目に明確な段がない

— 3 2 1：玉縁部が大きく屈曲する

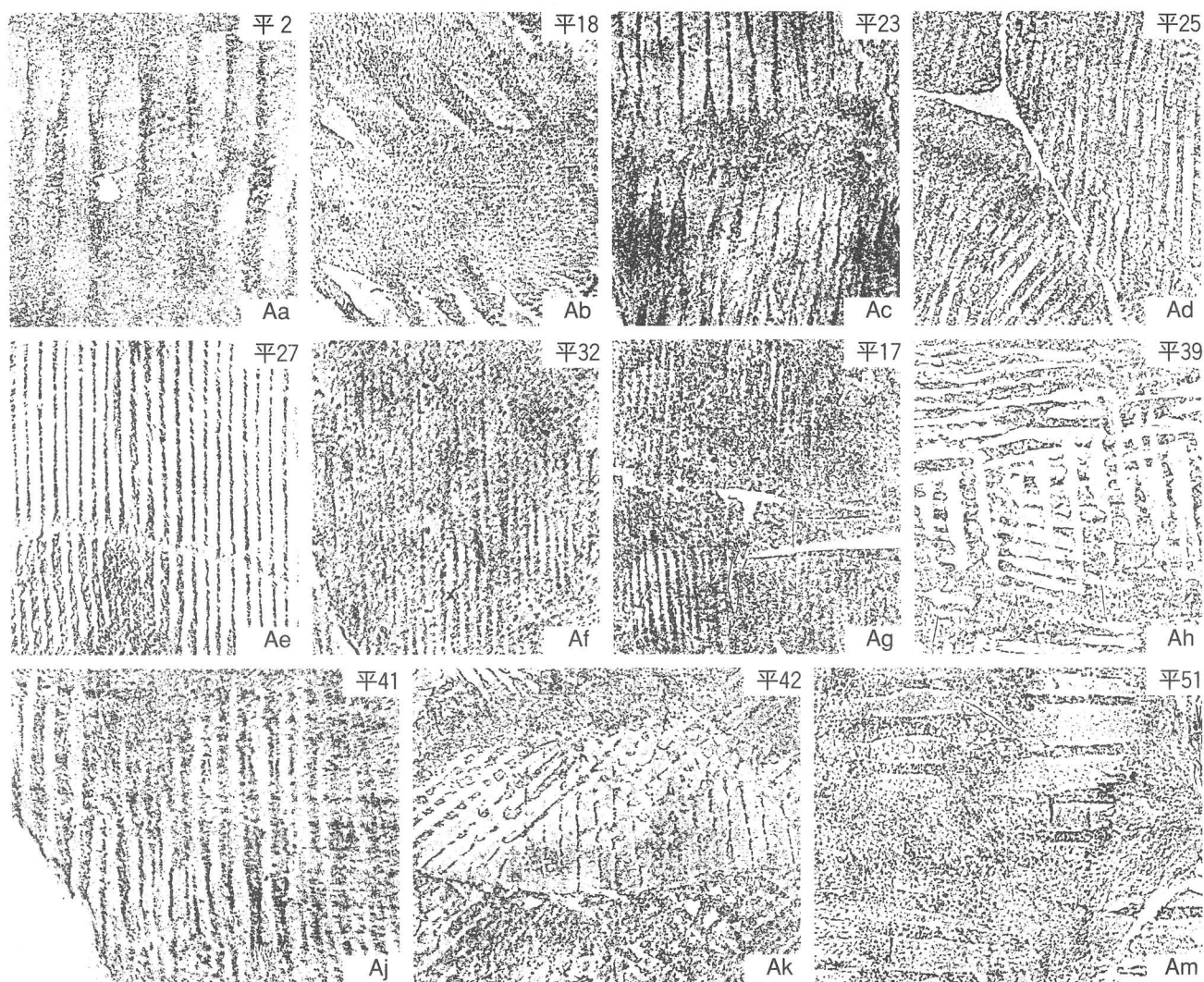
- 3 2 2 : 玉縁部がわずかに屈曲する
- 3 2 3 : 玉縁部がごくわずかに屈曲する
- 3 3 : 砲弾に近い瓶形
 - 3 3 1 : 肩の高さと凹面屈曲点の距離が5 cm以上
 - 3 3 2 : 肩の高さと凹面屈曲点の距離が5 cm未満

- II 桶作り**
- 0 : 杵側板圧痕も綴じ紐圧痕も観察できない桶
 - 1 : 杵側板圧痕だけが観察できる桶
 - 2 : 杵側板圧痕と綴じ紐圧痕のある桶
 - 2 0 : 紐で綴じていることしか分からない
 - 2 1 : (表短目+表短目) の紐の綴じ方
 - 2 2 : (表短目・表短目+表短目・表短目・表短目) の紐の綴じ方
 - 2 3 : (表短目+表短目・表短目・表短目) の紐の綴じ方
 - 2 4 : (表短目+表短目+表短目) の紐の綴じ方
 - 2 5 : (不明+表短目+表短目・表短目) の紐の綴じ方
 - 2 6 : (表短目+表長目) の紐の綴じ方
 - 2 7 : (表短目+連続目) の紐の綴じ方
 - 2 8 : (不明+連続目・表短目) の紐の綴じ方
 - 3 : 不明瞭ながら杵側板圧痕と綴じ紐圧痕のある桶 (識別には分割界点の存在を指標とする)
- III 成形台作り**
- 1 : 丸瓦一本作り用成形台
 - 2 : 平瓦一枚作り用凸型台

(註3)
(iii) 叩き板の反映属性

A : 平行叩き (第43図 写真155, 156)

- Aa : 叩き目は、長さが12.0cm、幅は約4 cmの範囲に4本、1本あたり0.7~0.8cm幅の縦位の平行線として認める。叩き板は、約5.0cm×約12.0cmの、把手が長辺につくT字形の板に、把手に直交して0.3~0.4cm幅の刻線を5本刻んだものと推測される。
- Ab : 叩き目は、1本あたりほぼ0.8cm幅の平行線として、見かけ上、左上がりの斜め方向に認める。線の間隔は0.5~0.6cmである。叩き板の原体は不明であるが、線の幅は平行叩き [Aa] のそれと同じほどであるが、間隔はよりやや広い。叩き目の上縁または下縁のあり方から、[Aa] の叩き板のように把手に直交して刻線が刻まれたのではなく、斜め方向に刻まれた可能性が高い。
- Ac : 叩き目は、5 cmあたりに8本の密度で、1本あたり0.5~0.6cm幅の線が、長さが9.5cm以上、幅は6.0cm以上の範囲に、10本平行するのを認める。叩き目の上下端には叩き板の端辺の圧痕を見るが、叩き板の全体が分かる例はない。叩き板の上下端の圧痕から判断して、叩き板は、6.0cm以上×9.5cm以上の、把手が長辺につくT字形の板に、把手に直交してほぼ0.2cm幅の刻線を11本以上刻んだものと考えておく。
- Ad : 叩き目は、5 cmあたりに11~12本の密度で、1本あたりほぼ0.2cm幅の線が、長さが5.0



第43図 平行叩き

(1:2)

cm、幅は4.5cm以上の範囲に、9本平行するのを認める。その平行線は、見かけ上、右上がりの斜め方向に円弧を描くように走る。叩き板の全体が分かる例はないが、叩き板は、4.5cm以上×5.0cm以上の、把手が長辺につくT字形の板に、把手に直交してほぼ0.2cm幅の刻線を10本以上刻んだものと推測できる。なお、叩き目の刻線のなかに、刻線が一部埋まっているのが観察できる。おそらく、叩き板についての傷であろう。

Ae：叩き目は、5cmあたりに12~13本の密度で、1本あたり0.25~0.3cm幅の線が、長さが14.0cm、幅は6.0cm以上の範囲に、縦位に15本平行するのを認める。叩き板の全体が分かる例はないが、叩き板は、6.0cm以上×14.0cmで、把手が長辺につくT字形の板に、把手に直交して0.1~0.15cm幅の刻線を16本以上刻んだものと考えておく。

Af：叩き目は、5cmあたりに15~16本の密度で、1本あたり1.0~1.5cm幅の線が、長さが10.0cm、幅は6.0cm以上の範囲に、斜め方向に18本平行するのを認める。その平行線は、右から左へ方向に円弧を描くように走る。叩き板の全体が分かる例はないが、叩き板は、6.0cm以上×10.0cmの、把手が長辺につくT字形の板に、把手に直交して0.1~0.15cm幅の刻線を19本以上刻んだものと考えておく。

- Ag：叩き目は、5cmあたりに20～22本の密度で、1本あたり0.5～1.0cm幅の線が、長さが10.0cm、幅は5.0cm以上の範囲に、20～22本平行するのを認める。叩き板の全体が分かる例はないが、叩き板は、5.0cm以上×10.0cmの、把手が長辺につくT字形の板に、把手に直交してほぼ0.05cm幅の刻線を23本以上刻んだものと考えておく。
- Ah：叩き目は、5cmあたりに4～6本の密度で、1本あたり0.2～0.4cm幅の線が平行するのを認める。叩き板は、13cm前後×7.0cm前後の、把手が短辺につく羽子板形の板に、把手に平行して0.5～0.6cm幅の刻線を9本程度刻んだものと考えておく。
- Aj：叩き目は、5cmあたり7～8本の密度で、1本あたり0.3～0.4cmの幅の線が平行するのを認める。叩き板は、12cm以上×7.5cm前後の、把手が短辺につく羽子板形の板に、把手に平行して0.4～0.5cm幅の刻線を10本程度刻んだものと考えておく。
- Ak：叩き目は、5cmあたり9本の密度で、1本あたり0.4～0.5cm幅の線が平行するのを認める。叩き板は、10cm以上×7.0cm前後で、把手が短辺につく羽子板形の板に、把手に平行してほぼ0.1cm幅の刻線を12本程度刻んだものと考えておく。
- Am：叩き目は、5cmあたり4本の密度で、1本あたり約0.7cm幅の線が平行するのを認める。叩き板は、10cm以上×7.0cm前後の、把手が短辺につく羽子板形の板に、把手に平行して0.2～0.3cm幅の刻線を6本程度刻んだものと考えておく。なお、この叩き目は、叩き重ねによって正格子叩きを施したように見える場合がある。

B：正格子叩き（第44図 写真156～158）

- Ba：叩き板は、約7.0cm×約12.0cmで、把手が長辺につくT字形の板に、0.3～0.4cm幅の刻線を、把手に直交して4本、さらに平行して4本刻み、長辺が2.0cm前後、短辺は1.3cm前後の長方形の格子を25コ作り出したものと推測される。
- Bb：叩き板の全体が分かる例はない。叩き板は横長のものか、縦長のものかが分からないので、長い方を長さとする、長さが21.0cm、幅は6.0cm以上の範囲に、0.5cm幅の刻線を長さに直交して10本、さらに0.7cm幅の刻線を平行して4本刻み、0.8～0.9cm四方の正格子を27コと、長軸の両側にその半分の大きさのものを9コずつ、計18コ配したものと推測される。
- Bc：叩き板の全体が分かる例はない。叩き板は横長のものか、縦長のものかが分からないので、長い方を長さとする、長さが6.0cm、幅は5.0cm以上の範囲に、0.1～0.2cm幅の刻線を長さに直交して6本、さらに0.1～0.2cm幅の刻線を平行して7本刻み、長辺が0.6～0.7cm、短辺は0.3～0.4cmの格子を42コ配したものと推測される。
- Bd：叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、約0.7cm四方の正格子として認める。この正格子の3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が3.1cm、横は2.8cmである。それらの格子目を作り出すために、叩き板に縦横に交差して刻線が刻まれる。瓦の上端縁および下端縁に対して平行あるいは右上がりの斜め方向に走る方を横の刻線、直交あるいは左上がりの斜め方向に走る方を縦の刻線とすると、縦の刻線は0.2cm程度のほぼ同じ幅で一直線に通るのに対して、横の刻線の幅は、0.3cm程度あるいは0.5cm程度と一定ではなく、さらにそれらは横一直線に通らずに途中でずれるラインも認められる。縦の刻線と横の刻線はほとんど同じ深さに

刻まれる。なお、これら叩き目のなかには格子が潰れて、木目が認められる部分もある。叩き板の木目は、横とする方向で走っている。

Be： 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、約0.6cm四方の正格子として認める。

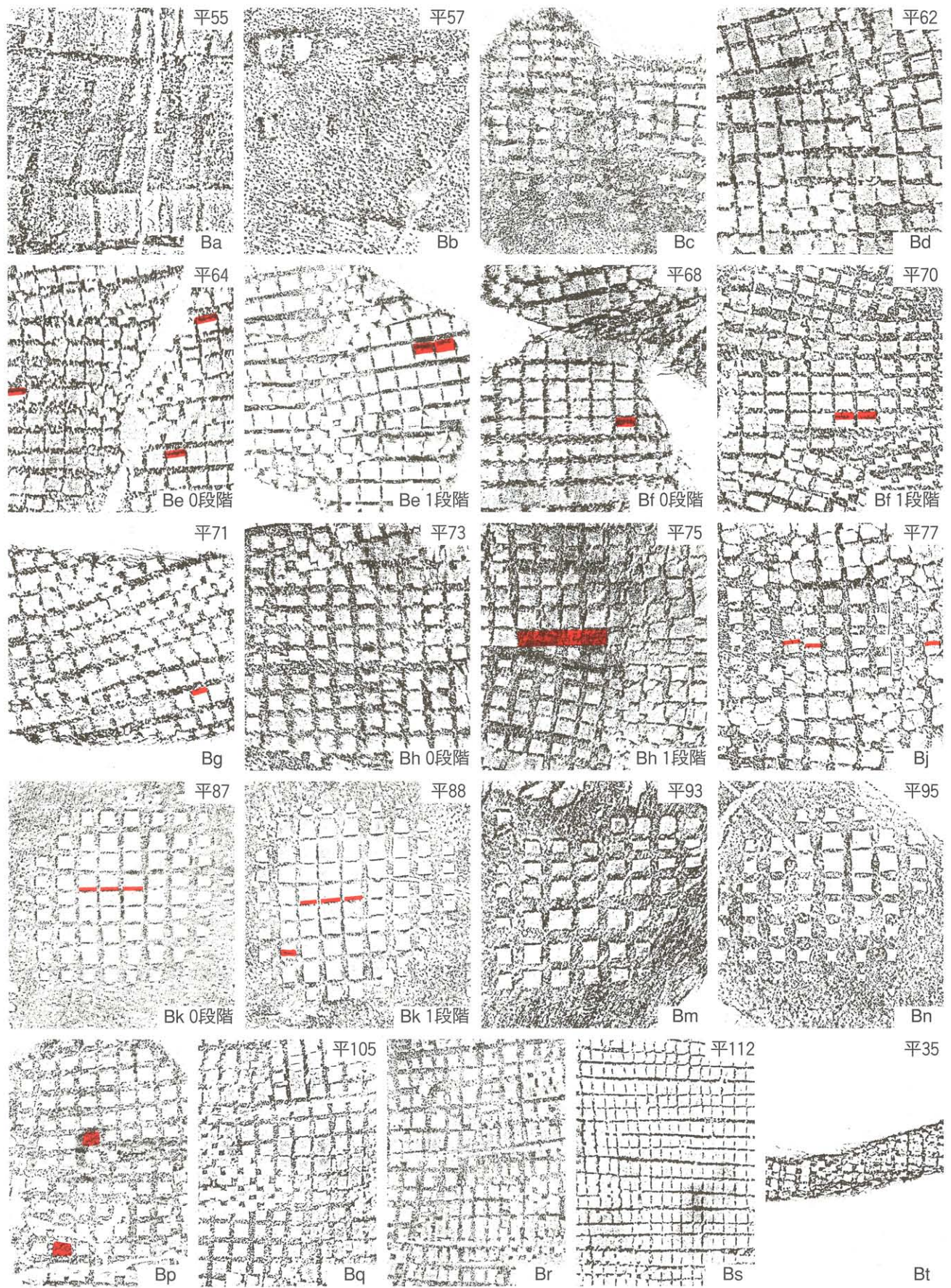
この正格子の3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が2.8cm、横は2.6cmである。それらの格子目を作り出すために縦横に交差して刻線が刻まれる。瓦の上端縁および下端縁に対して平行あるいは右上がりの斜め方向に走る方を横の刻線、直交あるいは左上がりの斜め方向に走る方を縦の刻線とすると、縦の刻線の幅が0.15cm程度、横の刻線の幅は0.2～0.25cmで、それぞれはほぼ一直線に通る。

なお、この叩き板は格子の潰れ具合から時間差の使用が確認できる。この格子叩き目は、格子の1升のなかに外枠に接して横方向に傷の入るものと、さらに隣の格子にも傷が増え、2つの格子に傷の入る2種類がある。傷によって格子の1升内のおよそ3分の1程度が潰れてふさがっている。今のところ傷のないものが見つからないので、まったく傷のない段階のものがあつたかどうか分からないが、1つの格子内だけに傷の入る段階を0段階、隣の格子内にも傷が増える段階を1段階としておく。

Bf： 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、長辺が0.6cm、短辺は0.55cmの格子として認める。この正格子の3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が2.5cm、横は2.6cmである。それらの格子目を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻まれる。瓦の上端縁および下端縁に対して平行あるいは右上がりの斜め方向に走る方を横の刻線、直交あるいは左上がりの斜め方向に走る方を縦の刻線とすると、縦の刻線の幅は0.15cm程度である。一方横の刻線は、0.2～0.25cm幅のものが並ぶなかに、0.5～0.6cm幅と太い刻線が1本入る。刻線はそれぞれがほぼ一直線に通る。縦の刻線より横の刻線の方が深いのがほとんどであると言えるが、ほぼ同じ深さの縦の刻線もある。

なお、この叩き板は格子の潰れ具合から時間差の使用が確認できる。この格子叩き目は、格子の1升内に外枠に接して横方向に傷の入るものと、さらに隣の格子にも傷が増え、2つの格子に傷の入る2種類がある。傷が入る場所は太い横の刻線に接するすぐ上の格子であるが、その格子の上辺に入った傷によって格子の1升内のおよそ3分の1程度が潰れてふさがっている。今のところ傷のないものが見つからないので、まったく傷のない段階のものがあつたかどうか分からないが、1つの格子内だけに傷の入る段階を0段階、隣の格子にも傷が増える段階を1段階としておく。

Bg： 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、約0.55cm四方の正格子として認める。この正格子の3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が2.6～2.7cm、横は2.1～2.2cmである。それらの格子目を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻まれる。瓦の上端縁および下端縁に対して平行あるいは右上がりの斜め方向に走る方を横の刻線、直交あるいは左上がりの斜め方向に走る方を縦の刻線とすると、縦の刻線の幅が0.2cm程度、横の刻線の幅は0.2～0.3cmで、それぞれはほぼ一直線に通る。縦の刻線より横の刻線の方が深く刻まれるのがほとんどである



第44図 正格子叩き

(1 : 2)

と言えるが、ほぼ同じ深さの縦の刻線もある。これら叩き目のなかの1つの格子には上辺に入った傷によって1升内のおよそ3分の1程度が潰れているものがある。

Bh：叩き板は、12.0cm×7.5cmの長方形の板に、短辺に平行してほぼ0.4cm幅の刻線を11本、さらに直交してほぼ0.3cm幅の刻線を8本、加えて0.6cm幅の刻線を1本、すべてほぼ同じ深さまで刻み込んでいる。直交する方向の刻線の刻み込み方は、原体の上から6本目、すなわち下から4本目が太い方の刻線になる。格子はほとんどがほぼ0.6cm四方の正格子として認められるが、太い刻線に沿うところで長辺が0.6cm、短辺は0.3cmの長方形の格子になる部分がある。太い刻線を含めて格子3コを1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が約2.8cm、横は約2.3cmである。

なお、この叩き板は格子の潰れ具合から時間差の使用が確認できる。叩き板にほとんど傷の認められない0段階と、叩き板の右上辺の4升分が潰れて格子がなくなり、木目が走る1段階がある。木目は叩き板の長軸方向に走る。

Bj：叩き板は幅約8.0cm、長さ10.0cm以上の長方形の板に、短辺に平行してほぼ0.3cm幅の刻線を12本以上、さらに直交してほぼ0.2～0.3cmの刻線を10本、すべてほぼ同じ深さまで刻み込まれ、それぞれがほぼ一直線に通る。叩き目は、約0.6cm四方の正格子として認める。この正格子の3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、一辺3.0cmの正方形である。これらの叩き目のなかの右辺から4筋目の上・下（見かけ上は左右）2段の格子には、右辺および左辺に入った傷によって、各升内のおよそ3分の1程度が潰れているものがある。

Bk：叩き板は、約13.0cm×約8.0cmの長方形の板で、短辺に平行して0.3～0.6cm幅の刻線が15本、直交してほぼ0.3cm幅の刻線が11本、すべてほぼ同じ深さで刻み込まれる。格子は、叩き板の中央では、ほとんどが約0.6cm四方の正格子として認めるが、両端ではその限りではない。これは叩き板と瓦表面とのあたり方から生じた差違と推測できる。格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が2.7～2.9cm、横は2.3～2.5cmである。

なお、この叩き板は格子の潰れ具合から時間差の使用が確認できる。叩き板の上辺右端から7筋目、上辺から7つ目の升を起点に下辺へ向かって3升分に右辺に沿ってかすかに縦方向（見かけ上は横方向）に傷を認める段階を0段階とすると、その起点の傷から、右へ3筋目、上辺へ1つ目の升の中央に縦方向（見かけ上は横方向）に傷が付加される段階を1段階とする。

Bm：叩き板は、約11.0cm×7.0cmの長方形の板で、短辺に平行して0.4～0.6cm幅の刻線が11本、直交して0.4～0.7cm幅の刻線が8本、すべてほぼ同じ深さで刻まれる。格子は叩き板の中央では、ほとんどが0.7～0.8cm四方の正格子として認めるが、両端ではその限りではない。これは叩き板と瓦表面とのあたり方から生じた差違と推測できる。この正格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が3.2～3.5cm、横は3.1～3.5cmである。

Bn：叩き板は、11.5cm以上×約8.5cmの長方形の板で、短辺に平行して0.2～0.5cm幅の刻線が13本以上、直交して0.2～0.5cm幅の刻線が11本、ほぼ同じ深さで刻み込まれる。格子は、

叩き板の中央では、ほとんどが約0.7cm四方の正格子として認めるが、両端ではその限りではない。これは叩き板と瓦表面とのあたり方から生じた差違と推測できる。この正格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が3.7～3.9cm、横は2.7～2.9cmである。

- Bp：** 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は約0.5cm四方の正格子として認める。格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦、横とも約2.5cmである。それらの格子目を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻み込まれるが、縦の刻線、横の刻線とも幅は0.2～0.4cmで、ほぼ同じ深さで刻み込まれて、それぞれがほぼ一直線に通る。ただし、刻線が太くなる場所があったり、また、一部で格子の部分が潰れて完全にふさがってしまっているところが認められる。
- Bq：** 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、約0.4cm四方の正格子として認める。この正格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦、横とも約2.2cmである。それらの格子目を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻み込まれるが、縦の刻線、横の刻線とも幅は0.2cm程度で、ほぼ同じ深さで刻まれ、それぞれがほぼ一直線に通る。ただし、一部で、刻線が太くなる場所がある。
- Br：** 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、長辺が0.5cm、短辺は0.4cmの格子として認める。格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が約1.9cm、横は約2.3cmである。それらの格子を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻み込まれるが、縦の刻線、横の刻線とも幅は0.15～0.2cm程度で、ほぼ同じ深さで刻まれ、それぞれがほぼ一直線に通る。
- Bs：** 叩き重ねが多いため、叩き板を復元できない。叩き目は、長辺が0.4cm、短辺は0.3cmの格子として認める。格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が約1.8cm、横は約1.2cmである。それらの格子を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻み込まれるが、縦の刻線、横の刻線とも幅は0.05～0.2cmで、それぞれがほぼ一直線に通る。縦の刻線より横の刻線の方がほとんどで深く刻み込まれるが、ほぼ同じ深さまで縦の刻線が刻み込まれるところもある。
- Bt：** 補助叩き用の叩き目であるため、叩き板を復元できない。叩き目は、長辺が0.4cm、短辺は0.2cmの格子の部分と、0.2cm四方の正格子として認める部分がある。長方形の格子3コ分を1単位とすると、単位あたりの刻線（瓦では突線）の長さは、縦が約1.7cm、横は約1.25cmある。それらの格子を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻み込まれるが、縦の刻線、横の刻線とも幅は0.15～0.2cmで、ほぼ同じ深さで刻まれ、それぞれがほぼ一直線に通る。

C：斜格子叩き（第45図 写真158, 159）

- Ca：** 叩き目の全体が分からないが、1コあたり2.2cm×1.8cmの斜格子である。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.4cm程度である。
- Cb：** 叩き板は、10.0cm以上×7.5cmの長方形の板で、異なる形の斜格子からなる横帯を上下に接して配している。上側の斜格子横帯は4.2cmの幅を、また下側の斜格子横帯は3.3cmの幅をなす。上側の横帯は、一辺1.0cm程度の斜格子を中央に2列置き、そしてその格

子を半裁した三角形をその上下に配する。下側の横帯は、一辺1.1cm程度の斜格子を中央に1列置き、その上下に半裁した三角形を逆さに配する。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）は、幅が0.4～0.5cmで、すべてほぼ同じ深さで刻み込まれる。

Cc：叩き板を復元できないが、1コあたり0.9cm×0.8cmおよび0.7cm×0.5cmの斜格子を認める。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.4～0.6cmである。

Cd：叩き目の全体が分からないが、1コあたり1.1cm×0.6cmおよび0.8cm×0.5cmの斜格子が、9cmの長さに9列、8cmの幅に10.5コ分、配される。それが1単位と推測できるが、全体を残す資料がないので確実ではない。左側から6列目で、下辺から2.5コ目と3.5コ目、左側から7列目で、下辺から3.5コ目、左側から8列目で、下辺から3.5コ目の斜格子は、下半分に三角形状の傷が入る。

Ce：叩き目の全体が分からない。1コあたり1.1cm×0.5cmおよび0.6cm×0.5cmの斜格子が、5cmの長さに9列、7cmの幅に6コ分、配されることが観察できるだけである。

Cf：叩き目の全体が分からない。1コあたり0.6cm×0.5cm前後の斜格子が、5cmの長さに5.5列、5cmの幅に5コ分、配されることが観察できるだけである。

Cg：叩き目の全体が分からない。1コあたり1.0cm×0.9cm前後の斜格子が、5cmの長さに5列、5cmの幅に3.5コ分、配されることが観察できるだけである。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.3～0.5cmである。

Ch：叩き目の全体が分からない。1コあたり0.6cm×0.5cm前後の斜格子が、5cmの長さに7.5列、5cmの幅に6.5コ分、配されることが観察できるだけである。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.3～0.5cmである。

Cj：叩き板の全体が分かる例はない。叩き板は横長のものか、縦長のものかが分からないので、長い方を長さとする、長さが10.0cm、幅は7.5cmの範囲に、長さに対して左上がりの斜め方向に0.3～0.4cm幅の刻線を8本、右上がりの斜め方向に0.5～0.6cm幅の刻線を8本刻み、0.9cm×0.7cmの斜格子と、それを半裁した三角形とを合わせて60コ程度配するものと推測される。

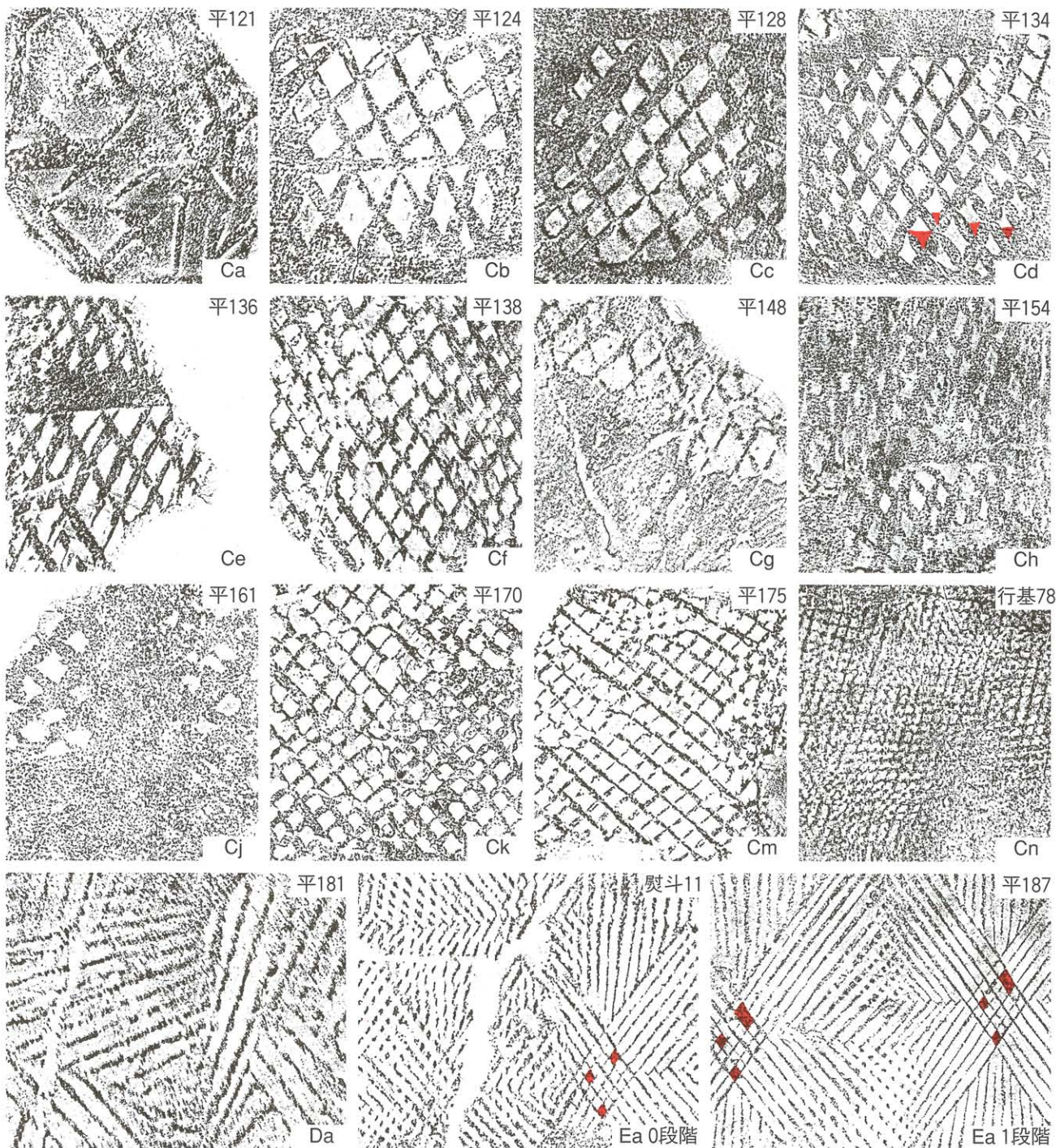
Ck：叩き板は、8.5cm以上×6.5cmの長方形の板に斜格子を配置したものである。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.2～0.3cmで、14本と10本以上を交差させるが、それらはほぼ同じ深さまで刻み込まれる。斜格子の大きさは1コあたり0.5cm四方で、格子3コ分を1単位とすると、2.5cm×2.4cmのほぼ正方形を呈する。

Cm：叩き板は、8.0cm以上×6.5cmの長方形の板に斜格子を配するものである。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.2～0.3cmで、14本以上と13本を交差させるが、左上がりの刻線の方が深く刻み込まれる。木目は斜格子を作り出す右上がりの刻線の方向に沿って認める。斜格子は1コあたり0.3～0.4cm×0.4cmの形で、格子3コ分を1単位とすると、1.8cm×2.3cmの長方形を呈する。

Cn：叩き板は復元できない。1コあたり0.3cm×0.2cmの斜格子を認める。斜格子を作り出す刻線（瓦では突線）の幅は0.1～0.15cmである。

D：平行線－斜線の組み合わせ文叩き（第45図 写真160）

Da：叩き板は、10.0cm以上×8.5cm以上の長方形の板に平行線と斜線を組み合わせて刻むも

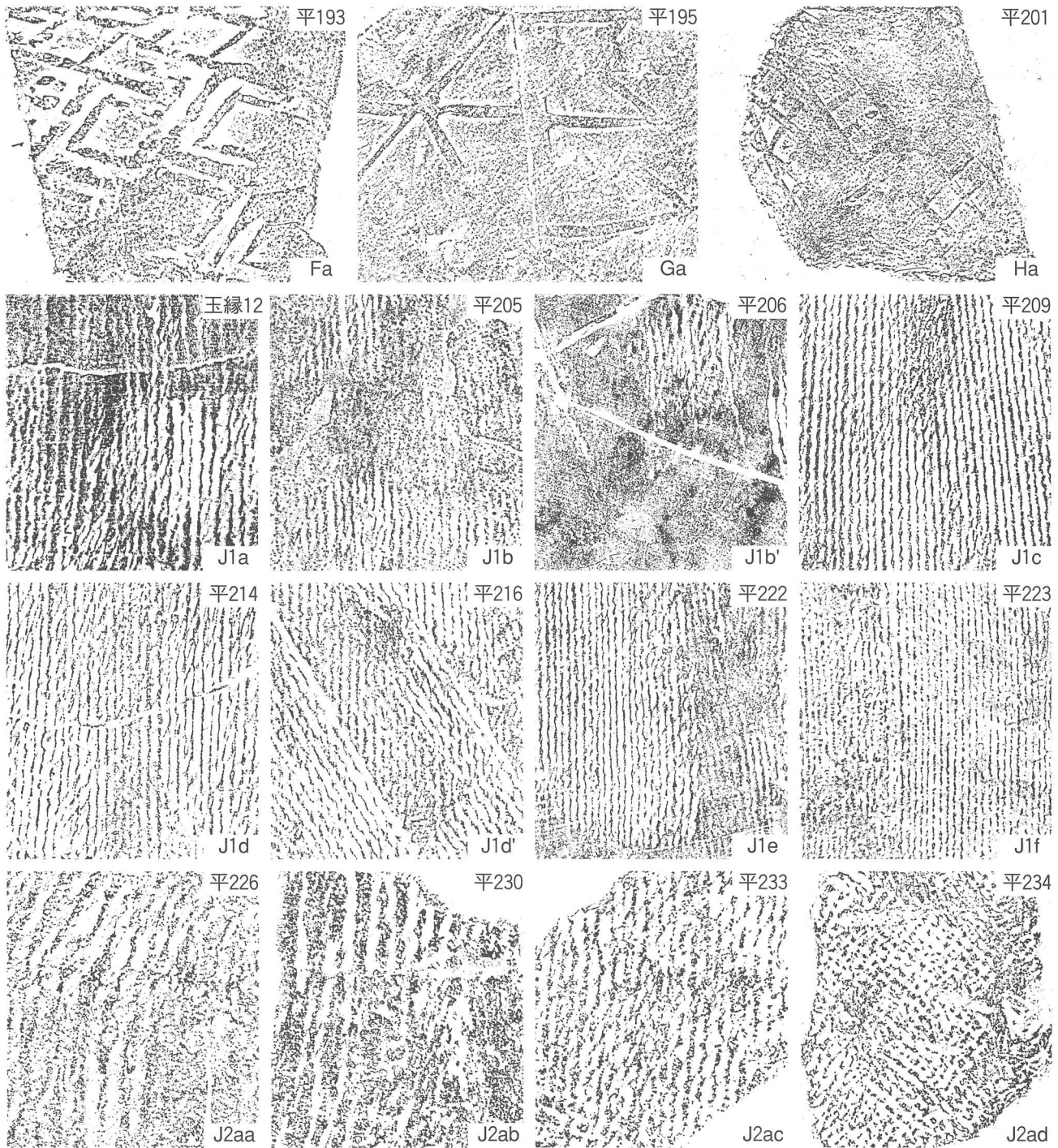


第45図 斜格子叩き・平行線一斜線の組み合わせ文叩き・交差文叩き (1:2)

のである。平行線と斜線をなす刻線（瓦では突線）の幅は0.05～0.25cmで、0.5cm程度の間隔で刻まれる。

E：交差文叩き（第45図 写真160）

Ea：叩き板は、14.0cm以上×10.0cm前後の長方形の板に平行線を交差させるものである。平行線を作り出すための刻線（瓦では突線）の幅は0.15～0.2cmで、0.2cm前後の間隔で刻



第46図 重ね菱文叩き・麻様文叩き・格子—斜線の組み合わせ文叩き・縄目叩き (1:2)

まれている。なお、この叩き目は、平行線が交差してできた格子部分の潰れ具合から時間差の使用が確認できる。叩き板の中央にある菱形は25コの格子で形成されるが、菱形の頂点と、頂点を基準に左上から右下へのラインの2列目の上から4つ目と、5列目の中央(上から3つ目)の格子が潰れて、合わせて3つの格子がふさがっている。この段階を0段階とする。さらに5列目の上から4つ目の格子も潰れて合計4つの格

子が潰れた段階がある。それを1段階とする。

F：重ね菱文叩き（第46図 写真160）

Fa：叩き板は、8.5cm以上×7.0cm前後の長方形の板で、中央に二重に重ねた菱形文を配し、その四方に一重の菱形文を配する。

G：麻様文叩き（第46図 写真160）

Ga：叩き板の全体が分かる例がない。0.5cm幅の刻線（瓦では突線）を放射状に交差させて、麻様文を作り出す。

H：格子－斜線の組み合わせ文叩き（第46図 写真160）

Ha：叩き板の全体が分かる例がない。格子と斜線を組み合わせるもので、それらを構成するための刻線（瓦では突線）の幅は0.4cm程度である。

J：縄目叩き（桶巻き作り・型木作り）（第46～48図 写真160～164）

J1a：叩き板は、9.0cm以上×4.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「7～8粒／5cm」の右撚りの縄を11本程度巻き付ける。

J1b：叩き板は、10.0cm以上×4.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「7～8粒／5cm」の右撚りの縄を14～15本程度巻き付ける。

J1c：叩き板は、15.0cm以上×5.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「12粒／5cm」の右撚りの縄を18～20本程度、ほぼ等間隔に巻き付ける。

J1d：叩き板は、17.0cm程度×5.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「8～10粒／5cm」の右撚りの縄を17～18本程度、ほぼ等間隔に巻き付ける。縄の撚りは中央が甘く、端の方が密になっている。

J1e：叩き板は、16.0cm以上×4.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「12粒／5cm」の右撚りの縄を18本程度巻き付ける。

J1f：叩き板は、12.0cm以上×5.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「12～13粒／5cm」の右撚りの縄を22～23本程度、ほぼ等間隔に巻き付ける。

(一枚作り)

J2aa：叩き板は不明である。「4～5粒／5cm」の右撚りの縄を、5cmのあいだに5～6本程度、叩き板に巻き付けると推測できる。

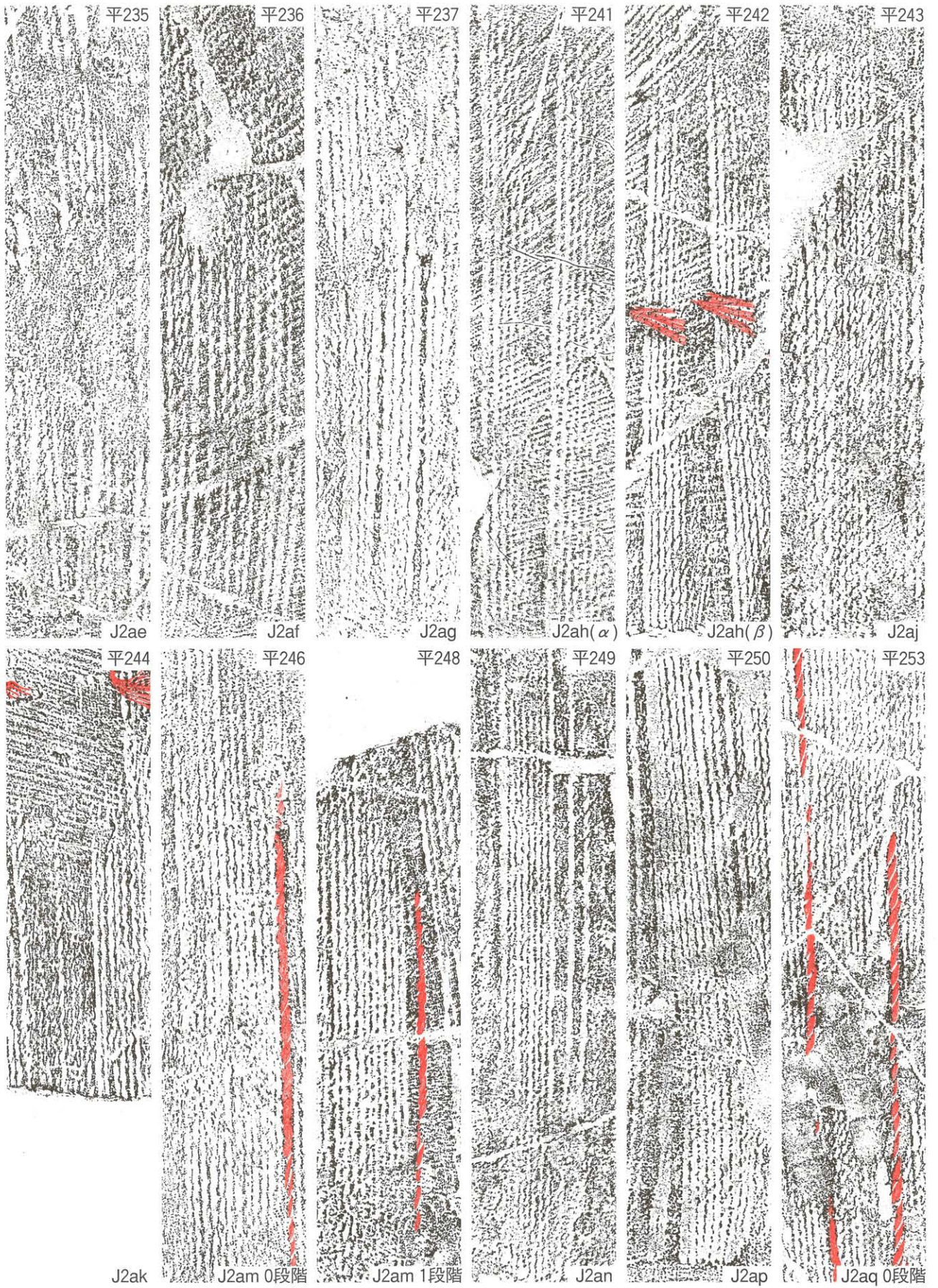
J2ab：叩き板は不明である。「5粒／5cm」の右撚りの縄を、5cmのあいだに7～8本程度、叩き板に巻き付けると推測できる。

J2ac：叩き板は不明である。「5粒／5cm」の右撚りの縄を、5cmのあいだに13～14本程度、叩き板に巻き付けると推測できる。

J2ad：叩き板は不明である。「9～10粒／5cm」の右撚りの縄を、5cmのあいだに14～15本程度、叩き板に巻き付けると推測できる。

J2ae：叩き板は、21.0cm以上×4.5cm前後の長方形の板である。短辺に直交して右撚りの2種類の太さの縄を合計9本以上巻き付ける。縄は太い方が「5.5～7粒／5cm」の、細い方が「8～8.5粒／5cm」の撚りのかかるもので、両脇と中央におのおの1本ずつ太い縄を計3本置き、太い縄のあいだに細い縄を3本ずつ配する。巻き方はかなり緩いのか、上下端で縄は萎えたような曲線を描く。

- J2af : 叩き板は、33.0cm以上×5.1cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「5～8粒／5cm」の右撚りの縄を9本以上巻き付ける。巻き付ける間隔は不規則で、全体にまばらな感じを受ける。
- J2ag : 叩き板は、35.0cm以上×5.2cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「6～8粒／5cm」の右撚りの縄を12本巻き付ける。4本を等間隔で巻いて1組とすると、3組分が0.25cm程度の間隔をあけて配される。
- J2ah : 叩き板は、33.0cm以上×4.0cm前後の長方形の板で、表裏で使用されると推測できる。短辺に直交して「6～8粒／5cm」の右撚りの縄を10本以上、ほぼ等間隔に巻き付ける。これを表面とする (α)。裏面とするものは、縄の構成がまったく同じであるが、叩き板の上端から約20.0cm下がる右端に、巻かれた縄の端部が認められ、しかも先端の撚りがほどけてフリンジ状を呈する (β)。
- J2aj : 叩き板は、34.0cm以上×5.1cm前後の長方形の板である。短辺に直交して右撚りの2種類の太さの縄を合計15本以上巻き付ける。縄は太い方が「5～7粒／5cm」の、細い方が「9～10粒／5cm」の撚りのかかるもので、中央に太い縄を計4本置き、その両脇に細い縄を5～6本ずつ配する。
- J2ak : 叩き板は、16.0cm以上×4.6cm前後の長方形の板である。短辺に直交して右撚りの2種類の縄を合計13本巻き付ける。縄は太い方が「7～8粒／5cm」の、細い方が「8～11粒／5cm」の撚りのかかるもので、両脇とほぼ中央におのおの1本ずつ太い縄を計3本置き、そのあいだに細い縄を右側に4本、左側に6本配する。なお、右端の太い縄の上端は縄の端がほどけたためにフリンジ状を呈する。
- J2am : 時間差の使用が窺える叩き板である。叩き板は、33.0cm以上×4.8cm前後の長方形の板である。短辺に直交して右撚りの2種類の縄を合計13本巻き付ける。縄は太い方が「6～8粒／5cm」の、細い方が「9～10粒／5cm」の撚りのかかるもので、中央に1本だけ細い縄を置き、その両脇にほぼ等間隔に6本ずつ太い縄を配する。これが0段階の叩き目である。1段階とするものは、縄の構成は同じであるが、位置が若干ずれを見せる。すなわち、同じ並びで配される縄の左端の1本がさらに右にずれたため、等間隔で巻かれたものが、12本と1本の組み合わせのように見える。その開いてしまった間隔は0.2～0.3cmである。
- J2an : 叩き板は、34.0cm以上×4.4cm前後の長方形の板である。短辺に直交して右撚りの3種類の縄を合計10本以上巻き付ける。縄は、太いものが「6～10粒／5cm」の、中間の太さのものが「8～10粒／5cm」の、細いものが「11～12粒／5cm」の撚りがかかるもので、左端に太い縄を置き、その右隣に接するように細い縄を等間隔で7本置き、その右側に0.4～0.5cmの間隔をあけて中間の太さのものを2本同じ間隔で配する。ただし、叩き目の圧痕に見る縄の締め方は、上端と下端で若干の違いがあり、瓦の狭端部（上端側）にいくほど撚りが甘くなっている。なお、左端の太い縄は瓦の広端部（下端側）で、より右側へ1cm程度斜めに飛び出す。叩き板に縄を固定している痕跡があると推測できる。
- J2ap : 叩き板は、34.0cm以上×4.7cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「9～10粒／



第47図 縄目叩き (2)

(1 : 2)

5 cm」の右撚りの縄を11本巻き付ける。等間隔に巻かれていたと考えられるが、実際には左端の2本が重なって1本の太い縄のように見える。なお、縄の撚り方は、叩き板の上下の端部と中央部で見かけに若干の違いがあり、端部ほど撚りが強い。

J2aq：時間差の使用が窺える叩き板である。叩き板は、30.0cm以上×4.3cm前後の長方形の板である。短辺に直交して右撚りの2種類の縄を合計13本以上巻き付ける。縄は、太い方が「5～7粒／5 cm」の、細い方が「10～13粒／5 cm」の撚りのかかるもので、右端に太い縄を置き、その左に細い縄を12本程度、等間隔に巻き付ける。これが0段階の叩き目を与える。1段階のものは、縄の構成は同じであるが、縄の位置が若干ずれを見せる。すなわち、右端の太い縄が隣の縄の上に重なり、細い方の縄も、5本と7本のまとまりをなすように見え、太い縄に近い5本と他の7本のあいだに0.4～0.5cmの隙間が開き、2組の縄で構成されるようになる。

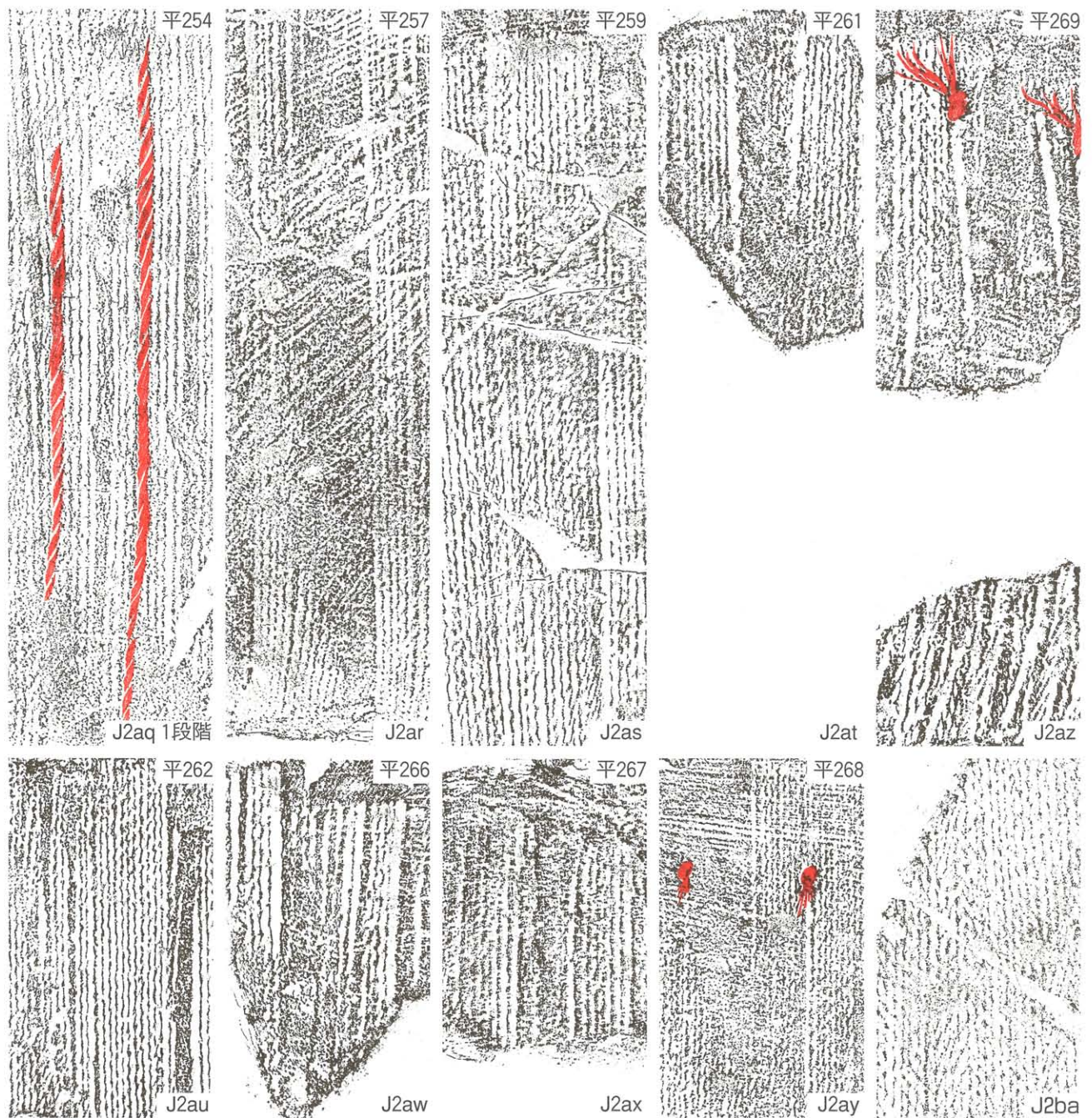
J2ar：叩き板は、35.0cm以上×4.1cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「10～11粒／5 cm」の右撚りの縄を、ほぼ等間隔で12本巻き付ける。なお、叩き板の左端の縄は、上端部（瓦の広端部側）で、より左側へ1 cm程度、斜めに飛び出して認める。叩き板に縄を固定する痕跡であると推測できる。

J2as：叩き板は、30.0cm以上×4.1cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「9～10粒／5 cm」の右撚りの縄を、ほぼ等間隔で12本巻き付ける。

J2at：叩き板は、10.0cm以上×4.6cm前後の長方形の板である。短辺に直交して3種類の右撚りの縄を合計13本以上巻き付ける。縄は、太いものが「6～7粒／5 cm」の、中間のものが「11粒／5 cm」の、細いものが「12～13粒／5 cm」の撚りがかかるもので、右端から細い縄を3本、その左隣に中間の太さのものを1本、その左隣に細い縄を7本、左端に再び太い縄を1本配する。右端から4本目の中間の太さの縄は右に傾き、左側の3本の縄の上に重なる。広端部の状態を確認できる資料がないので、巻き方が緩いため生じたものか、上端と下端で固定した位置が違っていたためなのかは明らかでない。

J2au：叩き板は、37.0cm前後×4.8cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「10～12粒／5 cm」の右撚りの縄を、ほぼ等間隔に17本巻き付けている。

J2aw：叩き板は、11.5cm以上×4.0cm以上の長方形の板である。短辺に直交して2種類の右撚りの縄を合計11本以上巻き付ける。縄は、太いものが「7～9粒／5 cm」の、細いものが「10粒／5 cm」の撚りのかかるもので、左端に太い縄を1本置き、その右隣に細い縄を3本置いて、そのさらに右隣に0.3cm程度の間隔をあけて、太い縄を1本置き、そしてその右隣に0.2cm程度の等間隔で細い縄を7本配する。なお、ほぼ中央にある太い縄は叩き締めに使われた結果としての擦れのために、縄が一部で毛羽立った状況を呈する。この叩き板については、縄を巻いていない板自体の上端左角をも瓦の凸面に圧痕として認めることができる。このことから、長方形の板に繰り込みを入れずに、直接、縄を巻き付けることが分かる。縄の太さに匹敵する0.2～0.3cmほどの飛び出しを、板の端をこえて認めるからである。その縄の飛び出しは縄の巻き始めを示すが、板の側縁から0.7cm程度内側にある。



第48図 縄目叩き (3)

(1 : 2)

J2ax : 叩き板は、8.0cm以上×3.5cm以上の長方形の板である。短辺に直交して「7～8粒／5cm」の右撚りの縄を、ほぼ等間隔に9本以上巻き付ける。この叩き板については、縄を巻いていない板自体の上端左角をも瓦の凸面に圧痕として認めることができる。このことから、長方形の板に繰り込みを入れずに、直接、縄を巻き付けることが分かる。縄の太さに匹敵する0.2～0.4cmほどの飛び出しを板の端をこえて認めるからである。その縄の飛び出しは縄の巻き始めを示すが、板の側縁から0.5cmほど内側にある。

J2ay：叩き板は、12.0cm以上×4.9cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「10～14粒／5 cm」の右撚りの縄を20本巻き付ける。右端から10本目の縄には、叩き板の上端から下端の方にはほぼ3.5cm下がるところに、玉結びの痕跡を認める。

J2az：叩き板は、12.0cm以上×4.0cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「7～8粒／5 cm」の右撚りと左撚りの2種類の縄を合計12本巻き付ける。ほぼ等間隔で、中央に左撚りの縄を4本、その両脇に右撚りの縄を4本ずつ配する。左撚りの縄のうち左端の縄は、上辺で叩き板に固定したと考えさせる玉留めの痕跡があり、さらにその先端部はほどけてフリンジ状を呈する。

J2ba：叩き板は、27.0cm以上×5.5cm前後の長方形の板である。短辺に直交して「7～8粒／5 cm」の右撚りと左撚りの2種類の縄を合計17本巻き付ける。ほぼ等間隔で、中央に左撚りの縄を9本、その両脇に右撚りの縄を4本ずつ配する。

Z：すり消し^(註5)

Za：調整によって叩き目がほとんど消されている。

Za：ナデ調整によって叩き目がほとんど消されている。

Za*：カキ目調整によって叩き目がほとんど消されている。

Z0：摩滅などによって叩き目がまったく観察不能。

(iv) 面調整手法

一位置 ①：凸面 ②：側面 ③：凹面

[凸面調整]

①0：調整なし

①1：叩き目をほぼ完全にすり消す

①2：叩き目を全体にすり消すが不完全か、部分的なすり消しにとどまる

①3：ヘラケズリ

①4：カキ目

①1から①4については方向を観察して、横方向は1、縦方向は2、斜め方向は3、方向不定は4を付加して2桁表記とする（例：①1 2＝凸面に縦方向の全面ナデ調整がある）。

[側面調整]

②0：側面調整なし

②1：分割破面だけを削る

②2：分割断面および破面を削る

—②2 1：ケズリ面が表・裏面に垂直をなす

—②2 2：ケズリ面が凸面側に傾く

—②2 3：ケズリ面が凹面側に傾く

—②2 4：ケズリ面が凹凸両面側に傾く

②3：側面を切り取る（一枚作り）

—②3 1：切り取り面が表・裏面に垂直をなす

—②3 2：切り取り面が凸面側に大きく傾く

- [凹面調整] ③0：凹面調整なし
③1：凹面ナデ
③2：凹面ヘラケズリ
③3：凹面に同心円当て具痕
③4：凹面カキ目

(v) 分割方向

- 凹方向：凹面側から分割
凸方向：凸面側から分割
不明：観察不能

(vi) 布袋の種類

瓦に布目圧痕を残した布袋を特定するために、布の織り目と綴じ合わせ痕を観察する。^(註6)

布の種類 (第49図 写真153, 154)

縦糸と横糸の3 cmあたりの本数を数えて、その密度と糸の引き具合から織り方を観察し、布の種類を特定する。今のところ、織り目から見て布の種類は以下のとおり認められる。

「布イ」：縦糸43本×横糸60本／3 cm
最も糸目の細かい布である。

「布ロ」：縦糸35～40本×横糸36～42本／3 cm
縦糸と横糸の本数はほぼ同じか、横糸の方が1～2本多い。

「布ハ」：縦糸32～37本×横糸33～42本／3 cm
糸の太さは「布ロ」より太く、縦糸と横糸の本数は、横糸の方が3～6本多い。

「布ニ」：縦糸32～40本×横糸33～45本／3 cm
糸の太さは「布ロ」と「布ハ」の中間で、縦糸と横糸の本数は、横糸の方が3～9本多いため、横糸が目立つ。

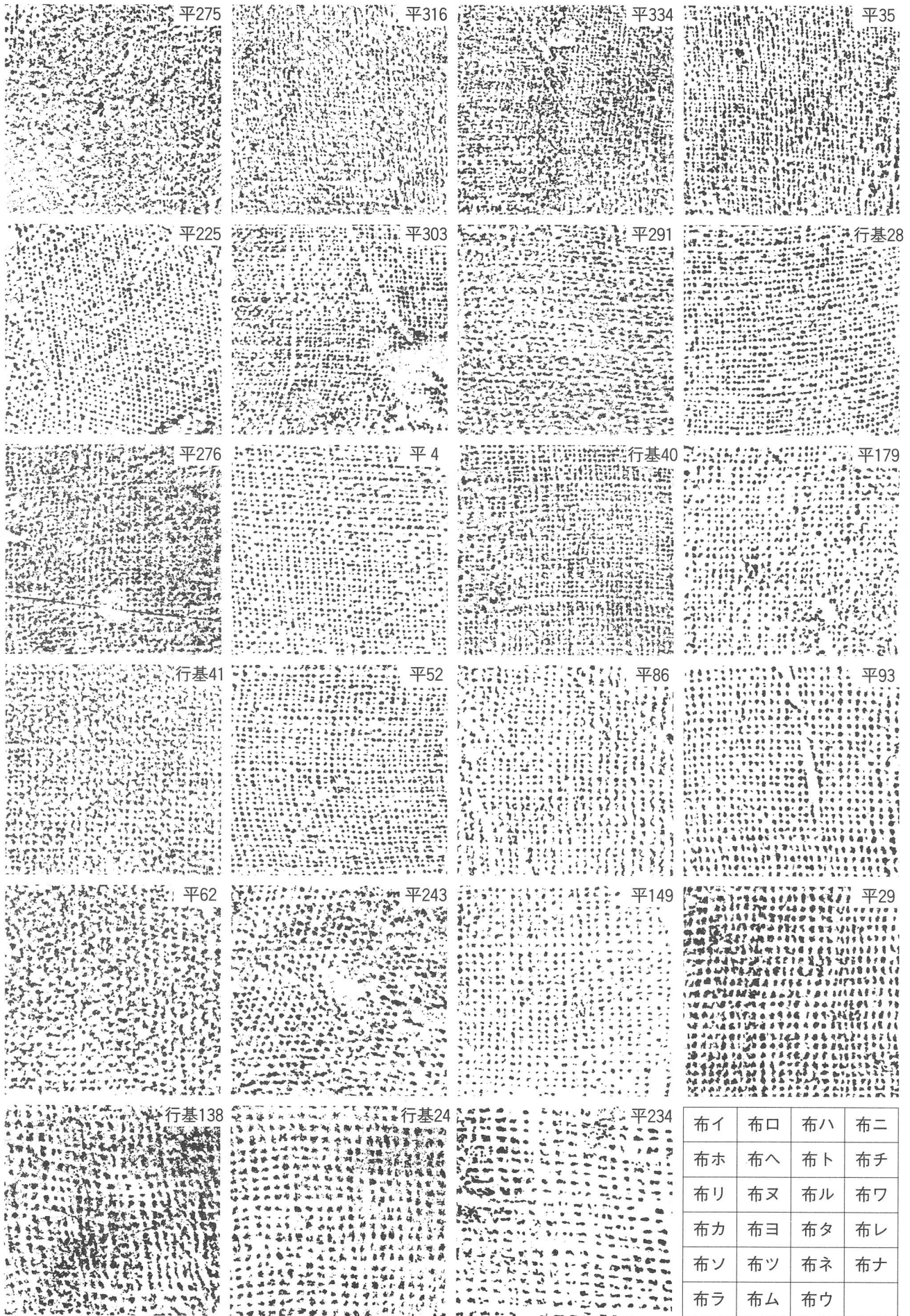
「布ホ」：縦糸29～38本×横糸32～40本／3 cm
「布イ」～「布ニ」に比較すると1本あたりの糸の太さはより太くなる。縦糸と横糸の本数は、ほぼ同じか、横糸の方が1～2本多い。

「布ヘ」：縦糸34～38本×横糸30～36本／3 cm
縦糸と横糸の本数は縦糸の方が多いため縦糸が目立つ。

「布ト」：縦糸26～32本×横糸31～36本／3 cm
縦糸と横糸を比較すると縦糸の方が太いため縦糸が目立つが、縦糸と横糸の本数は、横糸の方が多い。

「布チ」：縦糸29～33本×横糸28～31本／3 cm
縦糸と横糸の本数は、ほぼ同じである。

「布リ」：縦糸29～33本×横糸28～31本／3 cm



布イ	布ロ	布ハ	布ニ
布ホ	布ヘ	布ト	布チ
布リ	布ヌ	布ル	布ワ
布カ	布ミ	布タ	布レ
布ソ	布ツ	布ネ	布ナ
布ラ	布ム	布ウ	

第49図 布の種類

(1 : 1)

縦糸と横糸を比較すると横糸の方が太く、さらに縦糸と横糸の本数は、横糸の方4～5本が多いため、横糸の方が目立つ。

「布ヌ」：縦糸24～30本×横糸28～34本／3 cm

糸の太さは縦糸は2.5～3.0cm間隔で、横糸は2.0～2.5cm間隔で1本、わずかに太い糸が入る。縦糸と横糸の本数は、横糸の方7～8本が多いため、横糸の方が目立つものの、数cm間隔でわずかに太い縦糸が入るからか、縦糸もよく観察できる。

「布ル」：縦糸24～30本×横糸28～34本／3 cm

一見、糸目の細かい布に見えるが、縦糸に細めの糸が、横糸に太さの違う糸が配されているため、実際の糸の本数はそれほど多くない。縦糸と横糸の本数は、横糸の方が2～8本多い。

「布ワ」：縦糸29～32本×横糸22～25本／3 cm

縦糸と横糸の糸の太さは同じであるが、縦糸と横糸の本数は、縦糸の方が5～7本多い。また、丸瓦や焼成度が軟質の平瓦では横糸が波状に通るため、全体にメリアス編みの裏目のように見えることが多い。

「布カ」：縦糸20～25本×横糸26～32本／3 cm

縦糸と横糸を比較すると横糸の糸の断面が丸く見える。さらに縦糸と横糸の本数は、横糸の方4～10本が多いため、横糸の方が目立つ。

「布ヨ」：縦糸20～24本×横糸23～30本／3 cm

糸の太さが「布カ」や後で述べる「布タ」より太く、糸の断面が四角くみえる。また、縦糸と横糸を比較すると縦糸の方がわずかに太い。縦糸と横糸の本数は、横糸の方3～4本が多い。

「布タ」：縦糸22～26本×横糸26～32本／3 cm

糸の太さは「布カ」と「布ヨ」の中間で、縦糸と横糸の糸の太さは同じである。さらに縦糸と横糸の本数は、横糸の方3～4本が多いため、横糸の方が目立つ。

「布レ」：縦糸20～24本×横糸18～26本／3 cm

縦糸の太さはほとんど一定であるが、横糸に太い糸と細い糸が混在する。

「布ソ」：縦糸16～20本×横糸24～30本／3 cm

布の織りが粗く、横糸の通し方にむらがあるため、密に見える範囲と、粗に見える範囲が混在する。

「布ツ」：縦糸20～24本×横糸22～28本／3 cm

縦糸と横糸の糸の太さはほとんど同じで、縦糸と横糸の本数は、横糸の方2～4本が多い。

「布ネ」：縦糸19～24本×横糸19～24本／3 cm

縦糸と横糸の本数は、ほぼ同じである。

「布ナ」：縦糸18～22本×横糸14～19本／3 cm

縦糸と横糸を比較すると縦糸の方がわずかに太く、縦糸と横糸の本数は、縦糸の方1～6本が多いため、縦糸が目立つ。

「布ラ」：縦糸16～18本×横糸14～19本／3 cm

縦糸と横糸の糸の太さはほとんど同じで、縦糸と横糸の本数は、ほぼ同じである。

「布ム」：縦糸13～18本×横糸14～16本／3 cm

縦糸の太さはほぼ一定であるが、横糸に太い糸と細い糸が混在する。織りが粗いため、基本的には縦糸と横糸の本数は、ほぼ同じであるものの、計測ヶ所によっては縦糸と横糸の本数が若干変動する場合もある。

「布ウ」：縦糸11～16本×横糸11～16本／3 cm

最も糸目の粗い布である。縦糸と横糸の糸の太さはほとんど同じで、縦糸も横糸も糸の断面は四角く見える。

* ヲはオとの混同を避けて用いていない。

(註7)

布袋の種類

布袋の種類は、使われた布の種類「布イ」～「布ウ」（「布ヲ」は設定していない）と、綴じ合わせ方を併わせ見て特定する。当然のことながら、玉縁式丸瓦用の布袋あるいは行基式丸瓦用の布袋と、平瓦用の布袋は同じ種類の布で同じような綴じ合わせ方をしても別の布袋であるため、それらを区別する必要がある。そこで布の種類と綴じ合わせ痕のあいだに「玉縁」、「行基」あるいは、「平」と記述して、それらを区別する。また、布袋のなかには異なる布を縫い足しているものもある。「布○」と「布△」を縫い足しているときは「布○+△」のように、縫い足した布の種類を+でつないで並列させる。先に記す方が主体布で、後に記すのが補足布である。次に、丸瓦の2種類および平瓦の別を記し、さらに綴じ合わせ方の違いを1、2、3……と区別し、それを続けて、例えば「布袋イ玉縁1」あるいは「布袋イ+口平1」というように表記する。また、布の種類が特定できても、綴じ合わせ痕が特定できない場合は、綴じ合わせ痕を0として表記する。しかし、破片資料を観察しているので、綴じ目痕がその部分にたまたま残らないことがあり、そのような破片は多い。この0を付すべき破片資料はすべての布袋に認められる。そこですべての資料が0に当たるときか、足し縫い痕を認めるなど、記述の必要に応じるときのほかは0を付した表記を示さない。また0を付すしかない資料のなかにも特徴ある足し縫い痕やかかり縫い痕などを認めて区別できるときには、0'、0+などと記す。

資料に実際に認められる布袋は以下のとおりである。

玉縁式丸瓦の布袋

布袋ハ玉縁1：ぐし縫いの綴じ目痕しか分からない。「綴じ合わせGXx」である。

布袋ハ玉縁2：完全な袋状にしない「非閉袋布」で、筒部狭端側の約8.0cm分だけをまつり縫いで綴じるが、ほかの左右両端はほつれないようにまつり縫いでかかる。布の重ならない部分は1 cm程度の幅で隙間ができています。「綴じ合わせMIXx」である。

布袋ハ玉縁3：完全な袋状にしない「非閉袋布」であるが、綴じ付けられている範囲が「布袋ハ玉縁2」よりわずかである。広端縁の1ヶ所でわずかに綴じつけられているだけである。狭端側から広端側の綴じつけているところまでは、幅が1.0cm程度の隙間ができていて、綴じつけ部分で一旦ふさがれるが、すぐに広端側に向かって三角形の

開きができる。

布袋ホ玉縁 1 : 綴じ合わせ目で破れているため、綴じ合わせ痕を判別するのが困難である。

布袋ト玉縁 1 : 広端側で認める 2 本の綴じ合わせ痕が、玉縁部では 1 本に繋がる。ともに右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕を認める。ともに「綴じ合わせGSg」である。

布袋ヌ玉縁 1 : 左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が1.0~1.5cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。

布袋タ玉縁 1 : 綴じ合わせ目の一部で開口している。綴じ合わせ痕は、右側にまつり縫いかぐし縫いか定かに認めない綴じ目痕が、左側のぐし縫いの縫い目痕と、0.6cmの間隔で平行する。「綴じ合わせMISg」か「綴じ合わせGSg」である。

布袋レ玉縁 1 : 右側に綴じ目痕、左側には、その綴じに襷をとるための部分的な縫い目痕（以下、襷縫いとする）がある。ともにぐし縫いである。筒部上端から長さが約6.0cm、幅は約0.7cmの範囲に深い窪みを認めるが、襷縫いのために布を重ねて厚くなった部分の反映であろう。玉縁部と筒部の境目から狭端側に13.5cm下がるところに、襷縫いの縫い目痕を部分的に綴じ込んだ痕跡がある。「綴じ合わせGSg」か「綴じ合わせGXx」である。

布袋レ玉縁 2 : 右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕が、1.0cmほどの間隔で平行する。ともにぐし縫いである。「綴じ合わせGSg」である。

布袋レ玉縁 3 : 左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕が、0.6cmほどの間隔で平行する。ともにぐし縫いである。「綴じ合わせGZg」である。

布袋ツ玉縁 1 : 綴じ合わせ目で破れているため、綴じ合わせ痕を判別するのが困難である。筒部では 2 本の綴じ合わせ痕を認めるが、玉縁部では 1 本になっている。

行基式丸瓦の布袋

布袋イ+リ行基 1 : 「布イ」と「布リ」が綴じ合わせ痕を残して足されている。主体布と補足布の関係は不明である。「布イ」を右側に、「布リ」を左側に置いてみると、綴じ合わせ痕は左側にまつり縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕として認められる。両者の間隔は1.0cmである。「綴じ合わせMIZg」である。逆に、「布リ」を右側に、「布イ」を左側に置いてみると、綴じ合わせ痕は右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にまつり縫いの縫い目痕として認められる。両者の間隔はもちろん1.0cmである。「綴じ合わせGSmr」と表記しなければならなくなる。

布袋ロ+ロ行基 1 : 狭端部に 1 本の綴じ合わせ痕が、中央部から広端部にかけては 2 本の綴じ合わせ痕が、合わせて逆 Y 字状を呈している。さらに、広端側3.5cmの範囲には、共布をまつり縫いで縫い足している。筒状に縫い足すはずであるが、筒状にするための綴じ合わせ痕は、逆 Y 字状を呈している綴じ合わせ痕と続くことが確認できない。以下に主体布の綴じ合わせについて述べる。狭端部に認める綴じ合わせ痕は中央部から広端部では右側の綴じ合わせ痕に続く。それは、右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認められる。両者は0.5cmの間隔で平行する。中

中央部から広端部にかけて認める左側の綴じ合わせ痕も、右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。この両者も0.5cm間隔で平行する。左側、右側ともに「綴じ合わせMISg」である。

布袋ニ行基1：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にまつり縫いの縫い目痕が、0.5cmほどの間隔で平行する。狭端側から中央部までは斜めに、それより広端部側では方向を変えて縦に認める。「綴じ合わせMISml」である。

布袋ニ行基2：綴じ合わせ痕が2本が、1.0cmの間隔でほぼ平行する。右側の綴じ合わせ痕には、右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は0.6cm程度の間隔で平行する。左側の綴じ合わせ痕にはまつり縫いの綴じ目痕が1本認められるだけである。右側は「綴じ合わせMrSg」であり、左側は「綴じ合わせMrXx」である。

布袋ニ行基3：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕を認める。両者の間隔は広端部で4.0cmであるが、狭端側に向かって6.0cm以上に広がる。「綴じ合わせMISg」である。

布袋ニ+口行基0：広端側で「布ニ」と「布口」を配置して、足し縫いしている。布袋にするための綴じ合わせ痕は確認できない。

布袋ニ+ナ+口行基0：狭端側に「布ニ」、中央に「布ナ」、広端側に「布口」を配置して、ぐし縫いで縫い足している。布袋にするための綴じ合わせ痕は確認できない。

布袋へ行基1：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にまつり縫いの縫い目痕を認める。両者は0.5cmの間隔で平行するが、狭端縁から広端側に2.5cm下がるところから13.0cmのところまで綴じ合わせ目が破れて、布袋が開口している。「綴じ合わせGZmr」である。

布袋ト行基1：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕を認めるが、途中で綴じ合わせ目が破れて、布袋が開口している。「綴じ合わせMISg」である。

布袋ト行基2：綴じ合わせ痕を2本認める。右側の綴じ合わせ痕は、左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕として認める。両者の間隔は1.5cmである。左側の綴じ合わせ痕にはまつり縫いの綴じ目痕を認めるだけである。右側は「綴じ合わせGZg」であり、左側は「綴じ合わせMrXx」である。

布袋チ行基1：綴じ合わせ痕が2本、ほぼ平行する。両者の間隔は広いところで5.5cm、狭いところで3.5cmを測る。ともにまつり縫いの綴じ目痕しか認めない。ともに「綴じ合わせMrXx」である。

布袋チ行基2：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕が、0.8～0.9cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

布袋チ行基3：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。狭端側では両者の間隔が0.5cm程度でしかないが、広端縁から8.0cm前後上がるところより下の広端縁側では、その間隔が2.5cmに広がっている。すなわち綴じ目痕と縫い目痕と合わせて、広端部で三角形状を呈する。「綴じ合わせMISg」である。

布袋チ行基4：まつり縫いの綴じ目痕を認めるだけで、縫い目痕は認めない。綴じ目痕の糸は太い。「綴じ合わせMIXx」である。

- 布袋チ行基5：綴じ合わせ目で大きく破れているため、綴じ目痕も縫い目痕も判別できない。「布袋チ行基1」から「布袋チ行基4」のどれかと同じ可能性が残る。
- 布袋り行基1：綴じ合わせ痕を3本認める。ともに綴じ目痕と縫い目痕の間隔は1.0cm前後である。右側の綴じ合わせ痕を狭端側から広端側に右下がりの斜め方向に認めるのに対して、中央、あるいは左側の綴じ合わせ痕は端縁にほぼ直交して認める。右側の綴じ合わせ痕は、左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕として認める。「綴じ合わせGZg」である。中央の綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にまつり縫いの縫い目痕として認める。「綴じ合わせGSmr」である。左端の綴じ合わせ痕は、左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕として認める。「綴じ合わせGZg」である。表裏で使われている。
- 布袋り行基2：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が、1.0cmほどの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。
- 布袋り行基3：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が、1.5～2.0cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。
- 布袋り行基4：綴じ合わせ痕が3本ある。右側の2本は広端縁から13.0cm上がるところで交差し、片側は引きつったようになっている。その右側の綴じ合わせ痕は、綴じ目痕が左に、縫い目痕が右に1.0cmの間隔であり、ともにぐし縫いで、「綴じ合わせGZg」である。他方はぐし縫いの綴じ目痕しか認められないので、「綴じ合わせGXx」である。残る1本は両縁に対して直交気味で通り、先の2本の近い方に対して2.0～6.5cmの間隔をとる。左に綴じ目痕、右に縫い目痕を同じ間隔で、ともにぐし縫いで認め、「綴じ合わせGZg」である。
- 布袋り行基5：まつり縫いの綴じ目痕だけを認める。縫い目痕は確認できない。「綴じ合わせMrXx」である。
- 布袋り＋り行基0：広端部に共布の足し縫いを認める。布袋にするための綴じ合わせ痕は確認できない。
- 布袋り＋り行基1：直角三角形の共布を縫い足す。布袋にするための綴じ合わせ痕は、その三角形の足し縫いの右側の斜辺にあたる部分の縫いを兼ねて綴じがなされる。綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。両者の間隔は0.7cm前後である。「綴じ合わせGSg」である。
- 布袋ル行基1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。広端側でこの綴じ合わせ目で大きく破れて開口している。「綴じ合わせGSg」である。
- 布袋ル行基2：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕が、0.5～0.7cmの間隔で平行する。「綴じ合わせMISg」である。
- 布袋ル行基3：綴じ合わせ痕が2本ある。右側の綴じ合わせ痕は、左側にまつり縫いの綴じ目痕、右側にまつり縫いの縫い目痕として認める。両者は1.0cmの間隔で平行する。左側の綴じ合わせ痕は、左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕として認める。この両者は0.5cmの間隔で平行するが、この綴じ合わせは広端側で右側の綴じ合わせ痕の方に大きく曲がっている。右側は「綴じ合わせMrZmr」であり、左

側は「綴じ合わせGZg」である。

布袋ル行基 4：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕が、1.5cmの間隔で平行する。「綴じ合わせMISg」である。

布袋ル行基 5：ぐし縫いの綴じ目痕を認めるだけである。「綴じ合わせGZx」である。

布袋ワ行基 1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕が、1.0cm程度の間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ワ行基 2：布袋の破れ具合から時間差の使用が窺える。右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める綴じ合わせ痕は、狭端部から広端部へと右から左への斜め方向に認めるが、綴じ目痕と縫い目痕は、0.7cmの間隔で平行する。その綴じ合わせ痕には、狭端縁から16.0cm下がるところと、24.0cm下がるところに、玉留めの圧痕のように見える直径が0.3cmの円形の窪みが認められる。破れはその円形の窪みのあいだで生じていて、その部分の破れの前後の使用を区別することができる。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ワ行基 3：複雑に残った綴じ合わせ痕を観察できる。狭端縁から広端縁までほぼ一直線に伸びる綴じ合わせ痕があり、その綴じ合わせ痕の狭端縁から4.0cm下がるところで、そこから右側へ斜め方向に伸びる別の綴じ合わせ痕が交わり、さらにこの綴じ合わせ痕に斜めに交わり、なおかつ先の綴じ合わせ痕とは6.5～7.0cmの間隔をあけて右側に平行する綴じ合わせ痕、という具合で、3本で構成されている。それぞれを1、2、3とすると、1の綴じ合わせ痕は粗いまつり縫いの綴じ目痕を認めるだけで縫い目痕は確認できない。「綴じ合わせMIXx」である。2は粗いぐし縫いの綴じ目痕を認めるだけで縫い目痕は確認できない。「綴じ合わせGXx」である。3は左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕として認める。両者の間隔は0.7cmである。「綴じ合わせGZg」である。

布袋カ行基 1：左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕がある。ともにぐし縫いである。両者の間隔は1.0cmでほぼ平行する。「綴じ合わせGZg」である。

布袋ヨ行基 1：綴じ合わせ痕が2本ある。右側の綴じ合わせ痕は、左側にまつり縫いの綴じ目痕、右側にもまつり縫いの縫い目痕として認めるが、綴じ目痕と縫い目痕の間隔は5.5cmと広い。左側の綴じ合わせ痕は、左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にもぐし縫いの縫い目痕として認める。両者は0.6cmの間隔で平行する。右側は「綴じ合わせMIZmr」であり、左側は「綴じ合わせGZg」である。

布袋タ行基 1：まつり縫いの痕跡を認め、その左側に縫い目痕を推測させる状況を認めるものの、具体的にそれを観察できない。「綴じ合わせMISx」の可能性を指摘する。

布袋タ行基 2：綴じ合わせ痕が5.0cmほど離れて2本ある。右側の綴じ合わせ痕には、まつり縫いの綴じ目痕を認めるだけである。左側の綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。右側は「綴じ合わせMIXx」であり、左側は「綴じ合わせGSg」である。

布袋タ行基 3：摩滅が著しいため観察が困難である。丸瓦を型木上に戻すことに成功したので、狭端側から広端縁に縦方向に走る綴じ合わせ痕を必ず認めるはずであるが、実際には

観察できていない。分割後に側面調整を施すときに、凹面にあった綴じ合わせ痕も削り落とされたのであろうか。この布袋には、広端縁から狭端部に13.0cm上がるところで、凹面の4分3ほどの部分を占める横方向の足し縫い痕のような痕跡が認められ、「布袋タ行基1」や「布袋タ行基2」とも異なる様相を示しているので、「布袋タ行基3」とする。なお、その足し縫いのような痕跡は、ひっつけられた型木の上での他方の丸瓦にも続いて、その丸瓦をほぼ斜めに横断し、側縁部で角度を得て狭端側に向かい、さらに斜め方向に戻り上がっていく。

布袋タ+ホ行基0：主体布「布タ」と補足布「布ホ」を狭端部でぐし縫いによって縫い足す。布袋にするための綴じ合わせ痕は確認できない。

布袋レ行基1：綴じ合わせ痕が2本ある。右側の綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。両者の間隔は0.8cmである。左側の綴じ合わせ痕も、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。両者の間隔は1.0cmである。この2本の綴じ合わせ痕は狭端部で繋がっている。ともに「綴じ合わせGSg」である。

布袋レ行基2：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕を、0.5cmの間隔で認める。「綴じ合わせGZg」である。

布袋レ行基3：左側にまつり縫いの綴じ目痕、右側にまつり縫いの縫い目痕を、0.5cmの間隔で認める。「綴じ合わせMIZml」である。

布袋ソ行基1：綴じ合わせ痕は、中央の綴じ目痕とその左右にある縫い目痕で構成されている。中央の綴じ目痕は基本的にはぐし縫いであるが、返し縫いをしている箇所が認められる。左右の縫い目痕もぐし縫いであると思われる。割り縫いをしていると考えられる。「綴じ合わせGXg」と表記しておく。

布袋ネ行基1：狭端側では1本の綴じ合わせ痕として、中央部から広端側では2本の綴じ合わせ痕として、すなわち「人」字状に認める。狭端側にあるまつり縫いの綴じ目痕は枝分かかれして、そのまま右側の綴じ合わせ痕の綴じ目痕として続く。枝分かかれしてからの左側の綴じ合わせ痕の綴じ目痕はぐし縫いである。縫い目痕は確認できない。右側は「綴じ合わせMrXx」であり、左側は「綴じ合わせGXx」である。

布袋ネ行基2：狭端側で2本の綴じ合わせ痕として、中央部から広端側では1本の綴じ合わせ痕として、すなわちY字状に認める。おそらく主要な綴じ合わせに対して、襷縫いが施されていると推測できる。襷縫い部分にぐし縫いの痕跡を認めるが、主要な綴じ合わせ痕にはまつり縫いの綴じ目痕を認める。ただしその縫い目痕は不明である。「綴じ合わせMIXx」である。

布袋ネ行基3：まつり縫いの綴じ目痕がある。太い糸で巻き付けるように綴じ合わせている。縫い目痕は認められない。「綴じ合わせMIXx」である。

布袋ナ行基1：右側にぐし縫いの綴じ目痕が、広端側から狭端側に12.2cmほど上がるのところから狭端側に、左側にまつり縫いの縫い目痕があり、全体としてY字状を呈する綴じ合わせ痕を認める。「綴じ合わせGSml」である。破れ具合から時間差の使用が窺える。

布袋ナ行基2：綴じ合わせ痕が2本ある。右側の綴じ合わせ痕は、まつり縫いの綴じ目痕を認める

が、縫い目痕は確認できない。左側の綴じ合わせ痕は、ぐし縫いの綴じ目痕を認めるが、縫い目痕は確認できない。左側の綴じ合わせ痕は、大きく左側へ曲がりながら狭端側から広端側に走るが、広端縁から11.5cm上がるところで方向を変えてまっすぐ下へ、つまり広端縁に向かって伸びる。右側は「綴じ合わせMrXx」であり、左側は「綴じ合わせGXx」である。

布袋ラ行基1：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が、1.3cmの間隔でほぼ平行する。「綴じ合わせGZg」である。

布袋ム行基1：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕を認める。両者の間隔は広端部で5.5cmと広く、狭端部では2.0cm程度に狭まっている。「綴じ合わせMrSg」である。

布袋ム行基2：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が、1.6cmほどの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。

布袋ム+ヨ行基1：主体布が「布ム」、補助布が「布ヨ」である。布袋にするための綴じ合わせ部で足し縫いをもしている。広端部が7.2cm、狭端側が2.5cm前後の台形状にされた「布ヨ」を、両脇で「布ム」に縫い足して、袋にしている。そのため両脇の足し縫いが、布袋にするための綴じ合わせになり、綴じ合わせ痕が2本ある。右側の綴じ合わせ痕も、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。綴じ目痕と縫い目痕の間隔は広端部で0.7cm、狭端側で2.0cmを測る。当然のことながら、縫い目痕は「布ヨ」の部分に認める。左側の綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。綴じ目痕と縫い目痕の間隔は0.4cmほどである。ともに「綴じ合わせGSg」である。

布袋ウ行基1：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が、1.2～1.8cmほどの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。

平瓦の布袋

布袋ロ平1：まつり縫いの綴じ目痕を1本、側縁に斜交して、あるいは平行して一直線に認めるだけで縫い目痕は認めない。「綴じ合わせMrXx」である。

布袋ロ平2：綴じ目痕と縫い目痕の区別がつかないが、2本のぐし縫いの痕跡を0.5～0.6cmの間隔で、蛇行するように認める。「綴じ合わせGXg」である。

布袋ロ平3：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にまつり縫いの縫い目痕がある。両者の間隔は広いところで約0.6cmあるが、ほとんど1本に見えるところもある。「綴じ合わせGZml」である。

布袋ニ平1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にまつり縫いの縫い目痕がある。両者は1.1～1.6cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGSmr」である。

布袋ニ平0：狭端側に布端のまつり縫いを認めるだけである。袋にするための綴じ合わせ痕は不明であるが、まつり縫いに特徴を認める。

布袋ホ平1：左右のどちらにくるかは分からないが、まつり縫いの綴じ目痕を認める。縫い目痕は不明である。「綴じ合わせMxXx」である。

- 布袋ホ平2：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は0.8～0.9cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。
- 布袋へ平1：左側にまつり縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は1.5～3.0cmの間隔で平行し、わずかに蛇行するように認められる。「綴じ合わせMrZg」である。
- 布袋へ平2：まつり縫いの綴じ目痕が1本確認できるだけである。「布袋へ平0†」と同じように、広端部に布端のかがり縫いを認めるが、かがり縫いの方向は左上がり逆になる。「綴じ合わせMxXx」である。
- 布袋へ平0†：綴じ合わせ痕は分からないが、「布袋へ平2」のそれと類似するものの、方向が右上がり異なるかがり縫いが広端部の布端に認める。特徴ある布袋として認定しておく。
- 布袋ト平1：綴じ合わせ痕を2本、平行して認めるが、広端側でわずかに狭まる。両者の間隔は狭端部で8.5cm、広端部で6.0cmを測る。綴じ合わせ痕はともにまつり縫いの綴じ目痕であるが、左側の綴じ目は破れている。ともに「綴じ合わせMIXx」である。
- 布袋ト平2：綴じ合わせ痕を3本、湾曲しながらも、ほぼ平行して認める。右側の綴じ合わせ痕は、右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にまつり縫いの縫い目痕があり、両者は0.8cmの間隔で平行する。中央の綴じ合わせ痕は、まつり縫いが1本認められるだけである。左側の綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕があり、両者は0.5cm程度の間隔で平行する。右側は「綴じ合わせMrSmr」で、中央は「綴じ合わせMrXx」、左側は「綴じ合わせGSg」である。
- 布袋ト+レ平0：主体布は「布ト」で、補足布が「布レ」である。布袋にするための綴じ合わせ痕は分からない。横幅が3.2cmで、丈が6.5cmの範囲に三角形の補足布が縫い足されている。足し縫い目はぐし縫いであるが、片側は破れかけている。
- 布袋チ平1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は1.8cm程度の間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。
- 布袋チ平2：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕を、ほとんど1本の縫い綴じ痕跡のように認める。「綴じ合わせMISg」である。
- 布袋チ平3：部分観察であることから全体がつかみ切れないが、右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕を認めさせる綴じ合わせ痕が右側に、左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕を認めさせる綴じ合わせ痕が左側に、両者を合わせて大きく開いたV字状を呈していたと推測できる。すべてぐし縫いである。右側は「綴じ合わせGSg」であり、左側は「綴じ合わせGZg」である。
- 布袋チ平4：布の右側を上にして重ね合わせた痕跡が、綴じ合わせ部の布のずれで観察することができる。1本のぐし縫いの綴じ目痕だけが観察できる。「綴じ合わせGXx」である。
- 布袋チ平5：まつり縫いの綴じ目痕を1本、側縁に平行して一直線に認めるが、狭端側で破れ、約2.0cmの範囲でU字状に開口している。「綴じ合わせMIXx」である。
- 布袋り平1：右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は2.0～3.8cmの間隔で平行する。「綴じ合わせMrSg」である。
- 布袋り+イ平1：主体布が「布リ」、補足布が「布イ」である。補足布の横幅は狭端部で4.0cm、広

端部で12.0cm程度で、桶の長さ分だけに足される。補足布の足し縫い痕は袋の綴じ合わせ痕と同じで、両者の全体としての見かけは逆V字状を呈している。すなわち、逆V字状の三角形の部分が補足布である。袋にするための、右側の綴じ合わせ痕は、右側に綴じ目痕が、左側に縫い目痕があり、左側の綴じ合わせ痕は、左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕を認める。すべてぐし縫いである。それぞれの綴じ目痕と縫い目痕は1.0cmの間隔で平行する。右側は「綴じ合わせGSg」であり、左側は「綴じ合わせGZg」である。

布袋ヌ平1：右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕のある綴じ合わせ痕を2列に認める。両者は広端部では8.5cm前後の間隔で認めるが、狭端部では重なっていて、逆V字状を呈している。すべてぐし縫いである。おそらく左側の綴じ合わせがあとでなされたのであろう。右側、左側とも「綴じ合わせGSg」である。

布袋ヌ平2：綴じ目痕と縫い目痕がほとんど重なっているのか、あるいは縫い目痕がないのか不明である。まつり縫いの綴じ目痕が観察できるだけである。「綴じ合わせMrXx」である。

布袋ヌ平3：右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕がある。両者の間隔は広端側でやや広く、狭端側に向かって徐々に狭まっていき、ほぼ一本線になる。ともにぐし縫いである。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ヌ平4：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は0.8～1.0cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ヌ平5：左側にまつり縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は2.0cm程度の間隔で平行する。「綴じ合わせMIZg」である。

布袋ヌ+ヌ平0：狭端側に共布を縫い足した痕跡が確認できる。足し縫い痕は左上がりのまつり縫いである。布袋にするための綴じ合わせ痕は分からない。

布袋ヌ+ヌ平1：共布が狭端部で縫い足される。足し縫い痕は右上がりのまつり縫いである。「布袋ヌ+ヌ平0」とは足し縫いの方向が逆になる。布袋にするための綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は1.0～1.5cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ル平1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は0.7～1.0cmの間隔で平行する。狭端部で両者の間隔が2.0cmに広がっている。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ル+ル平0：共布が狭端部で縫い足される。足し縫い痕は右上がりのまつり縫いである。

布袋ワ平1：まつり縫いの綴じ目痕が観察できるだけである。「綴じ合わせMrXx」である。

布袋ワ平2：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は約0.7cmの間隔でほぼ平行する。広端側の布端には綴じ合わせ痕を示す玉留めらしき、直径が1.0cmの円形の窪みが2つ、3cmの間隔で左右に並ぶ。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ワ平3：1本のぐし縫いの綴じ目痕だけが観察できる。「綴じ合わせGXx」である。

布袋ワ+イ平1：主体布が「布ワ」、補足布が「布イ」である。補足布の丈は1.2～1.5cmで広端部側に足される。主体布には、右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕がある。ともにぐし縫いである。両者の間隔は1.0cm前後であるが、中央部の広端部寄りでは破れて、布袋が開

口している。補足布との足し縫い痕はよく分らない。主体布の綴じは「綴じ合わせGSg」である。

布袋ワ+W平0：共布が広端部で足される。布袋にするための綴じ合わせ痕は分らない。

布袋カ平1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は約0.7cmの間隔で平行する。なお、広端部でこの綴じ合わせ目は破れている。「綴じ合わせGSg」である。

布袋カ平2：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は約0.7cmの間隔で平行する。なお、広端部でこの綴じ合わせ目は破れている。「綴じ合わせGZg」である。

布袋カ平3：広端部で4本の縫い綴じの痕跡が観察できる。右側の2本は広端から狭端側に6.0cmほど上がるところで1本の綴じ合わせ痕になる。左側の2本は約2.0cmの間隔で平行する。すべてぐし縫いが引きつられているように見えるが、残存状況が悪いため確実なことは言えない。

布袋カ+ル平0：主体布が「布カ」で、補足布が「布ル」である。補足布は、狭端部側に丈が8.3～9.0cm、横幅は13.7cm以上の部分で足している。なお、「布ル」は布の方向を90度回転させて使用している。足し縫い痕はぐし縫いである。

布袋カ+ル平1：「布カ」と「布ル」が縫い足されることが分かるが、主体布と補足布の関係は分らない。左側に「布カ」、右側に「布ル」を配置すると、左側にぐし縫いの綴じ目痕がある。縫い目痕は不明である。「綴じ合わせ痕GXx」である。

布袋ヨ平1：左側にぐし縫いの綴じ目痕を認めるだけで、縫い目痕は認めない。「綴じ合わせGZx」である。

布袋ヨ+ヨ平0：共布が狭端部で足される。足し縫い痕は右上がりのまつり縫いである。布袋にするための綴じ合わせ痕は分らない。

布袋ヨ+ヨ平1：共布が足される。観察できる資料が細片のため、狭端側に足されるのか、広端側に足されるのかは不明である。足し縫い痕は右上がりのまつり縫いである。「布袋ヨ+ヨ平0」の補足布と比較すると、丈がより長い。布袋にするための綴じ合わせ痕は、ぐし縫いの綴じ目痕を認めるだけで、縫い目痕は分らない。主体布の綴じは「綴じ合わせGXx」である。

布袋ヨ+イ平1：主体布は「布ヨ」で、補足布が「布イ」である。補足布を綴じ目痕が下がっていく広端側に認めるが、丈が、長い部分で約5.0cm、短い部分では約1.5cmと異なり、足される境目は直線にはならない。主体布の丈が一定でないのでこのようになったのであろう。主体布には綴じ合わせ痕が認められ、右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者はほとんど1本の縫い目に見える。綴じ合わせ痕が終わるところから左右にまつり縫いの足し縫い痕が伸び、補足布を縫い足す。主体布の綴じは「綴じ合わせMISg」である。

布袋ヨ+ム平1：主体布は「布ヨ」で、補足布が「布ム」である。補足布を2.5cm程度の丈で狭端側に認める。主体布には右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕がある。ともにごし縫いである。両者は0.6cm程度の間隔で平行する。補足布との足し縫い痕はぐし縫いである。

主体布の綴じは「綴じ合わせGSg」である。

布袋タ平1：まつり縫いの綴じ目痕を1本、端縁にほぼ直交するように一直線に認めるだけで縫い目痕は認めない。「綴じ合わせMIXx」である。

布袋タ平2：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は0.8cm程度の間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

布袋タ+タ平1：共布の足し縫いを認める。残存状況が悪いため全体が分からないが、補足布は広端縁から狭端側に5.5cmほど上がるのところから、幅が9.5cm、丈が約6.0cmで四角く縫い足す。足し縫い痕はぐし縫いである。まつり縫いを広端側に綴じとして認めるが、その綴じ目痕の延長はこの四角く足した共布の下にもかすかに見える。縫い目痕は分からない。「綴じ合わせMIXx」である。なお、この綴じ合わせ痕は「布袋タ平1」のそれと類似するので、「布袋タ平1」の可能性が残る。

布袋タ+ホ平0：主体布は「布タ」で、補足布が「布ホ」である。残存状況が悪いため全体が分からないが、補足布は、広端側から中央部まで一部で四角く縫い足し、その範囲は横幅は4.0cm、丈が約13.0cm以上に及ぶ。足し縫い痕はぐし縫いである。この補足布のある布袋には袋にするための綴じ合わせ痕が確認されていない。

布袋レ平1：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は0.5cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。

布袋レ平2：端縁にほぼ直交する方向に一直線で、約0.7cm幅の綴じ合わせ痕を認めるが、その0.7cm幅を横方向に糸を渡すように綴じ合わせられるため、綴じ目痕と、縫い目痕の判別がつかない。「綴じ合わせXXx」である。

布袋レ平3：残存資料が小片のため、右側にぐし縫いの綴じ目痕を認めるだけで、縫い目は観察できない。「綴じ合わせGXx」である。

布袋レ+ト平0：主体布は「布レ」で、補足布が「布ト」である。布袋にするための綴じ合わせ痕は分からないが、約4.5cm四方の四角形の部分に補足布を縫い足す。足し縫い痕は、両脇がまつり縫い、上端および下端がぐし縫いである。

布袋レ+ホ平1：主体布は「布レ」で、補足布が「布ホ」である。残存状況が悪いため全体が分からないが、補足布を狭端側の一部で縫い足す。足し縫い痕はぐし縫いである。袋にするための綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕があって、1.6cmの間隔で平行する。なお、左側のぐし縫いは補足布を縫い合わせる。「綴じ合わせGSg」である。

布袋レ+ホ平2：主体布は「布レ」で、補足布が「布ホ」である。丈が1.5～3.0cm、横幅は5.5cm以上の部分で細長く補足布を縫い足す。布袋にするための綴じは、足し縫いの右側に接して、ぐし縫いでなされている。「綴じ合わせGXx」である。

布袋ソ平1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は約1.0cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

なお、「布ソ」を使用して、同じ綴じ合わせ痕をもつ布袋は複数ある。綴じ合わせ痕を境に左右で布の織りが異なるように見える布袋と、左右とも同じ織りとして認識できる布袋を認める。左右で布の織りが異なるように見えるのは、同じ織りの布袋が、

使用で傷んだ結果であると考えられるべきかもしれないが、綴じ合わせ痕から判断して、綴じ縫いのときの糸の引き具合加減の違いと考えた方がよい。同じような綴じ合わせ痕をもつ複数の布袋を想定したい。

布袋ソ平2：ぐし縫いの綴じ目痕だけを認める。縫い目痕は観察できない。綴じ目は広端部で破れている。「綴じ合わせGXx」である。

布袋ソ平3：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。両者は約2.0cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGSg」である。

布袋ソナル平0：主体布は「布ソ」で、補足布が「布ル」である。丈が4.0～6.0cmの補足布は、狭端部から広端側に、ぐし縫いで部分的に足されるだけである。補足布が狭端部全体に回っていないので、「布袋ソ平1」と同じ布袋の可能性が残る。

布袋ネ平1：まつり縫いの綴じ目痕を、斜め方向に、あるいは、瓦の端縁にほぼ直交して一直線に認めるだけで、縫い目痕は認めない。「綴じ合わせMrXx」である。

布袋ネ平2：まつり縫いの綴じ目痕を、斜め方向に、あるいは、瓦の端縁にほぼ直交して一直線に認めるだけで、縫い目痕は認めない。「布袋ネ平1」とは、まつり縫いの縫い方向が異なるだけではなく、縫い綴じ糸の太さが異なる。この布袋は0.2cmの太さの糸で綴じ合わされているが、このような太い糸を使用した例はほかにはない。「綴じ合わせMIXx」である。

布袋ネ平3：綴じ合わせ痕が2本ある。右側の綴じ合わせ痕は、まつり縫いの綴じ目痕だけとして、左側の綴じ合わせ痕は右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にまつり縫いの縫い目痕として認める。両者の間隔は約6.0cmで、斜め方向に平行する。右側は「綴じ合わせMrXx」であり、左側は「綴じ合わせMrSmr」である。

布袋ネ平4：綴じ合わせ痕を2本、逆V字状を呈して認める。右側の綴じ合わせ痕は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕として認める。両者は約0.5cmの間隔で平行する。左側の綴じ合わせ痕は、まつり縫いの綴じ目痕を1本だけ認める。右側は「綴じ合わせGSg」であり、左側は「綴じ合わせMrXx」である。

布袋ナ平1：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕が1.6～2.0cmの間隔で平行する。「綴じ合わせGZg」である。

布袋ナ平2：まつり縫いの綴じ目痕を認めるだけで、縫い目痕は認めない。「綴じ合わせMrXx」である。なお、綴じ目痕の右側は、幅が約3.0cmの範囲で、布の縦糸が破れ、横糸だけになっている。

布袋ナナナ平0：狭端側で共布を横方向に縫い足した痕跡が確認できる。足し縫い痕は右上がりのまつり縫いである。綴じ合わせ痕が観察できないので「布袋ナナナ平0」と表記するが、あとで述べる「布袋ナナナ平1」あるいは「布袋ナナナ平2」と同じ布袋である可能性が高い。

布袋ナナナ平1：右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある。狭端側で共布を横方向に縫い足した痕跡が確認できるが、あとで述べる「布袋ナナナ平2」と異なり、足し布は同じ丈の布ではなく、丈にくい違いのある布を使う。足し縫い痕は右上がりのまつり縫いである。「綴じ合わせGSg」である。なお、この布袋を完全に確認させ

る例では、綴じ合わせ目の一部が破れている。

布袋ナナナ平2：左側にぐし縫いの綴じ目痕、右側にぐし縫いの縫い目痕がある。狭端側で共布を横方向に縫い足した痕跡が確認できる。先に述べた「布袋ナナナ平1」と異なり、丈のそろった布を使い、端縁にほぼ平行する右上がりのまつり縫いで足す。「綴じ合わせGZg」である。

第3項 機能形態ごとの属性組成表記

1 軒丸瓦

軒丸瓦は瓦当部と丸瓦部に大きく分けることができ、観察属性もそれらの部位ごとに設定する。なぜなら、瓦当部の文様はすべて瓦範によって表出されているため、範型に規定されてその属性は決定されるが、丸瓦部は、丸瓦との共通する技術形態属性の設定が考えられるからである。確かに一本作りで造られた軒丸瓦も存在するが、それを除くと、別々に造られた瓦当部と丸瓦部が接合されて軒丸瓦が完成すると言える。そして当然のことであるが、その接合法に関する属性も観察することができる。

以下、観察属性を具体的にあげる。なお、軒丸瓦の各部位の呼称については第50図を参照されたい。

1-1 瓦当部属性

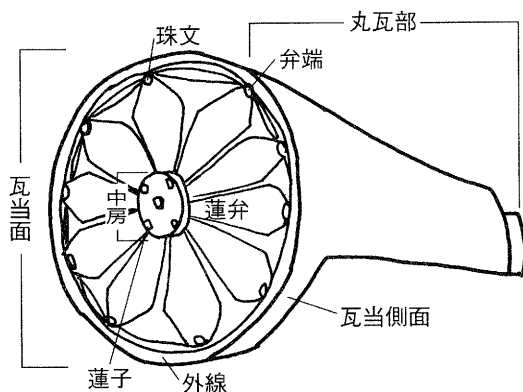
瓦範：A～L（Iを除く11種）

瓦当部に残された技術形態的な特徴は、すでに述べたようにすべて瓦範の違いによって規定されることになるが、この瓦範の違いを認定するためには、瓦当面文様、範型の種類、法量、素材といった諸属性を観察する必要がある。

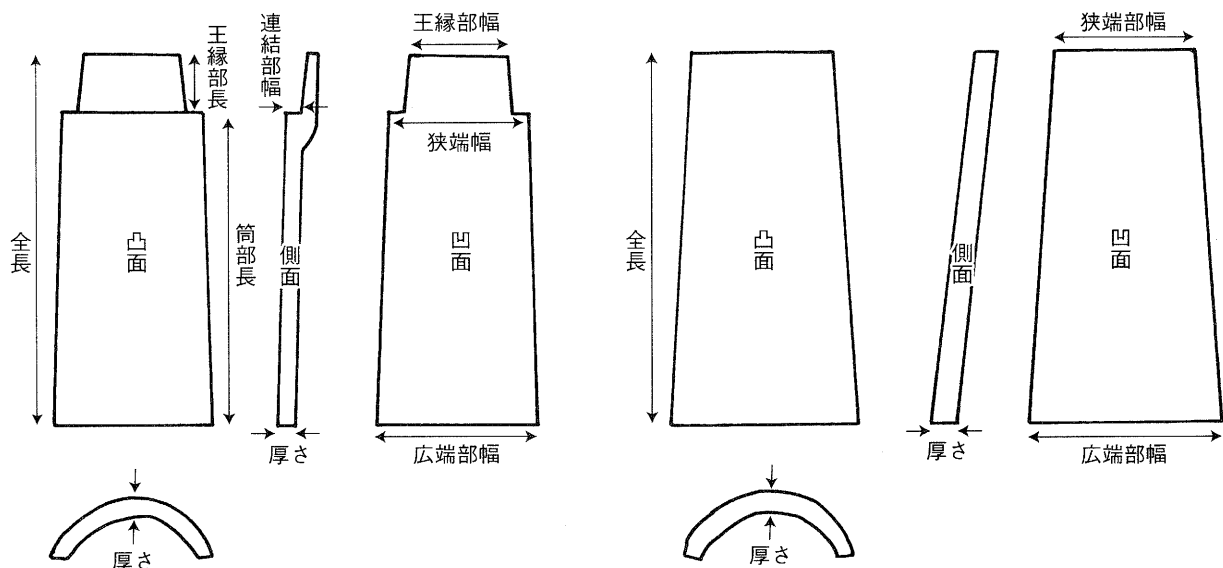
瓦当面文様については、文様の系統からは大きく素弁蓮華文系、単弁蓮華文系、複弁蓮華文系が存在する。素弁系統の瓦当については連弁が10葉のものや8葉のものが存在するが、単弁系統の瓦当は「山田寺式」、複弁系統のものは「川原寺式」のものや「平城宮式」の範疇に入るものである。

なお出土資料のなかには、これらのほかに巴文系の軒丸瓦が存在するが、新堂廃寺廃絶後に建てられた堂宇にかかわる軒丸瓦であることから、ここでは扱わない。

範型に関しては、A型範とB型範の識別が可能であるし（近藤1982）、また、範型の形態も円形であったのか、あるいは方形であったのかを識別できる場合がある。法量については、瓦当面の直径、中房の直径、周縁幅、連弁の幅、長さといった計測属性をとることができる。素材については、今のところ丸瓦部とまったく異なる粘土で造



第50図 軒丸瓦各部位の名称



第51図 丸瓦部凡例図

られた瓦当部を確認していない。

以上の諸属性を総合して、新堂廃寺跡およびオガンジ池瓦窯跡に出土した軒丸瓦の瓦当部を観察すると、今のところA～H、J～Lの11種類の瓦範が存在したことが判明している^(註8)。

また、瓦範のなかには範傷が段階的に認められるものがあるが、それらの記述にあたっては、オリジナルとなる瓦範を0段階のものとし、範傷が進むたびに1段階、2段階……と区別しておく。

なお、これらの瓦範で造られた軒丸瓦の瓦当部に対しては、おのこの瓦範への粘土の詰め込み方、詰め込みののちの裏面の調整、丸瓦部との接合のための裏面加工の有無、接合後の側面調整および裏面調整などといった観察すべき視点が残される。これらのなされ方は、瓦範ごとの造瓦に異なる状況を示しているだけでなく、同じ瓦範を用いても異った成形および調整のされ方をする例がある。これについては、技術系統的な流れ、あるいは造瓦工人の数などを想定するデータとして応用することも可能であろう。しかし、系統的（システムの）差違を反映すると考えられるとはいえ、それらは偶発的表出事象である。すなわち必然的な手の動かし方を判別することが困難な場合もある。とりわけ、裏面調整、側面調整には、その調整処理の仕方に一定の手の動きを認めることができる例もあるものの、造り手の「むら気」の表出を認めるべきであると思われる例もないわけではない。くせの違い、技術成熟度の違いといった要因を明瞭に特定しえないので、観察属性には取り上げるものの、分析属性として扱うには問題がある。今は瓦範ごとの観察で記録するにとどめ、定量的データが整えられたのちの、将来の有効な分析を待ちたいと思う。

1-2 丸瓦部属性（第51図）

丸瓦部属性は、形態、法量といった独自の属性に、先に述べた共通する技術形態属性（i）～（vi）が付け加わる。

形態には玉縁式と行基式の別がある。

法量は、全長、広端部幅、狭端部幅、最大厚をとることができる。さらに玉縁式の資料については、玉縁部長、筒部長、連結部幅をも測ることができる。

以上のような諸属性を観察することになるが、それらのなかで工人のくせ、気分など、偶然的な要素が、あるいは工人の個人的な意志が出てしまう可能性が乏しい属性としては、独自属性の法量に加えて、共通する技術形態属性の（ii）造瓦器具の反映属性と（iii）叩き板の反映属性を考えることができよう。したがって、この3つの属性を丸瓦部の分析・記述に際しての主属性としておこう。

1-3 瓦当部と丸瓦部の接合に関する属性

(x i) 瓦当部裏接合面加工手法

- a 手法：無加工
- b 手法：挿入溝を彫る
- c 手法：段を作り出す

(x ii) 丸瓦部広端面加工手法

- a 手法：無加工
- f 手法：楔形加工
 - f 1：凹面側を斜め切り
 - f 2：凸面側を斜め切り
 - f 3：凹凸両面側を斜め切り
- g 手法：片ほぞ加工
- h 手法：歯車状加工
 - h 1：V字形に切り込み加工
 - h 2：U字形に切り込み加工
 - h 3：波状に浅く切り込み加工

(x iii) 丸瓦部広端縁部加工手法

- a 手法：無加工
- m 手法：凹面縁部に沈線を入れる
- n 手法：凸面縁部に沈線を入れる
- p 手法：凹凸両面縁部に沈線を入れる

軒丸瓦については、以上のように、1 瓦当部、2 丸瓦部、3 接合関係の別に観察属性を設定できるが、接合関係はすべての資料に観察することができないので、瓦当部の範型の変異と、先に指摘した2つの主属性の変異を組成させて、「群」を規定する。資料に実際に認められる属性組成は以下のとおりである。なお、[] 内の表記は、ほとんど消えてしまっているが判じることができる主要叩きを、() 内の+に続く表記は、補助叩きを示す。〈 〉内の表記は、叩き目が消されていて、叩き板の反映属性からは細分できないものの、ほかの下位属性をも併わせ見て細分する群を示す。

軒丸瓦A—玉縁 I 2 Za群

軒丸瓦B—行基 I 1 Za [Cg] 群・行基 I 1 Za [Ch] 群

軒丸瓦C—行基 I 1 Za [Cg] 群・行基 I 1 Za [Ch] 群

軒丸瓦D－行基 I 1 Za [Ae] 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群・行基 I 1 Za [Ag] 群・
 行基 I 1 Za < x v > 群
 軒丸瓦E－行基 I 1 Za [Am] 群・行基 I 1 Za [Cj] 群・行基 I 1 Za < x ii > 群
 軒丸瓦F－行基 I 1 Za < x vii > 群
 軒丸瓦G－行基 I 1 Za < x vi > 群
 軒丸瓦H－行基 I 1 Za < x vi > 群
 軒丸瓦J－行基 I 1 Za < vi > 群・行基 I 1 Za < x ix > 群・行基 I 1 Za < x x i > 群
 軒丸瓦K－玉縁 III 1 Za 群
 軒丸瓦L－玉縁 I 321 Za [J1b] 群・玉縁 III 1 Za 群

2 軒平瓦

軒平瓦も瓦当部と平瓦部に大きく分けることができ、観察属性もそれらの部位ごとに設定できる。瓦当部については、瓦当面文様を主属性として考えることができる。しかし、軒丸瓦のように瓦範を用いて文様表出されるものだけでなく、型挽きという工人の手の動きに左右される表出手法をとるものもあり、そこでの個々の違いを確実に識別できるとは言いがたい。そうであるとはいえ、現時点では、瓦当面文様の視覚的な違いを取り上げるほかに分類の基準を示すことができないので、以下のように観察属性を設定しておく。瓦範を用いて造られた軒平瓦を除いて、型挽き動作がもたらせた瓦当面文様の観察に際して、非客観性から生じうる限界を克服するには、平瓦部の属性とその接合法に関する属性を併わせ考察して属性組成の検討を進めなければならない。

以下、観察属性を具体的にあげる。なお軒平瓦の各部位の呼称については第52図を参照されたい。

2-1 瓦当部属性

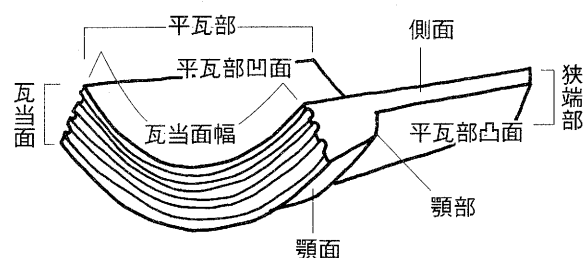
瓦当面文様

瓦当面文様については、文様の系統からは大きく四重弧文系と唐草文系が存在する。

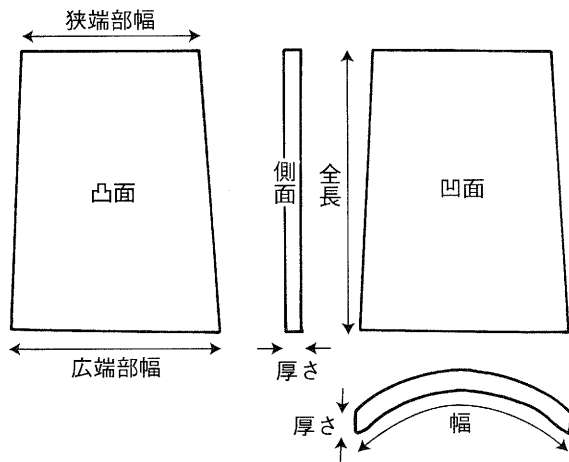
なお出土資料のなかには、これらのほかに連珠文系の軒平瓦が存在するが、新堂廃寺廃絶後に建てられた堂宇にかかわる軒平瓦であるので、ここでは扱わない。

型挽き（四重弧文系）：A A 1～A A 7

四重弧文の瓦当については、すべて「櫛歯状」の施文具（挽き型・型）を瓦当面に当てて文様を描いて施文する。型挽きの文様の特徴からA A 1～A A 7の7種類に分類することができる。なお、四重弧文について記述する際、「弧の数」は凸部分（弧先）の数で数え、上から順に第1弧線、第2弧線……と呼ぶ。凹部分については凹線と呼ぶ。



第52図 軒平瓦各部位の名称



第53図 平瓦部凡例図

面文様でAAとした型挽きの軒平瓦ではとくに重要な属性である。瓦当部を造り出すために貼り足している粘土板の幅と厚さが、最終形態に影響を与えているからである。ただし、この点についても、貼り足す粘土板に規格性があつたという前提がなければならぬので、主属性としては扱わない。

2-2 平瓦部属性 (第53図)

平瓦部属性は、形態、法量の独自の属性に、先に述べた共通する技術形態属性 (i) ~ (vi) が付け加わる。ただし当該資料の成形技法は桶作りに限られるので、さらにはその桶の柵側板を綴じる紐が横方向に桶の表面に浮き出るといふ特異性があるので、(ii) 造瓦器具の反映属性の分類がきわめて重要である。それに加えて、粘土の叩き締め作業が残した、(iii) 叩き板の違いを反映する属性を主属性として取り扱う。

形態：台形あるいは長方形（この区別は狭端幅と広端幅の差が5 cm以上か、あるいは3 cm以上かが一応の目安となる）。

法量：全長、広端部幅、狭端部幅、最大厚。

2-3 瓦当部と平瓦部の接合に関する属性

(x vi) 平瓦部広端縁部凸面加工手法

a 手法：無加工

s 手法：ナデ調整を施す

t 手法：格子叩きを施す

-t11：正格子叩きBb

-t12：正格子叩きBh

-t13：正格子叩きBp

-t14：正格子叩きBq

-t15：正格子叩きBr

瓦範：P

瓦範によって施文された唐草文系の瓦当は、「平城宮式」の範疇に入るものである。^(註9)

P：平城宮6664型式系の文様

すでに述べたように、瓦当部については、上述の瓦当面文様を主属性として記述するが、それに併わせて、顎部形態、法量の属性も観察しておかなければならない。

顎部形態は段顎、直線顎、あるいは曲線顎の別がある。法量は、瓦当

—t21：斜格子叩きCk

※ t手法については、瓦当部と平瓦部を接合するために施された手法とは、厳密には言えない。接合された平瓦部を造るときの叩き締めによる痕跡がたまたま残ったか、あるいは瓦当部を造って貼り足すための粘土板に転写された痕跡にすぎない。しかし軒平瓦の造瓦の違いを理解するための指標として有効であるので、ここにひとつの属性として取り上げる。

(x vii) 瓦当側面部加工手法

a手法：無加工

w手法：1回だけ、ヘラケズリ調整を施す

y手法：2回以上、ヘラケズリ調整を施す

軒平瓦については、瓦当部の瓦当面文様の変異と、平瓦部の2つの主属性の変異を組成させて「群」を規定する。資料に実際に認める属性組成は以下のとおりである。なお、軒丸瓦の記述の場合と同じく、[]内の表記は、ほとんど消えてしまっているが判じることができる主要叩きを示す。〈 〉内の表記は、叩き目が消されていて、叩き板の反映属性からは細分できないものの、ほかの下位属性をも併わせ見て細分する群を示す。

軒平瓦A A1—平瓦Ⅱ0 Za 〈 i 〉 群

軒平瓦A A2—平瓦Ⅱ0 Za 〈 ii 〉 群

軒平瓦A A3—平瓦Ⅱ0 Za 〈 i 〉 群

軒平瓦A A4—平瓦Ⅱ0 Za 〈 i 〉 群

軒平瓦A A5—平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bp] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Br] 群・
平瓦Ⅱ0 Za 〈 iii 〉 群

軒平瓦A A6—平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ck] 群・平瓦Ⅱ0 Za 〈 iii 〉 群

軒平瓦A A7—平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bq] 群・平瓦Ⅱ0 Za 〈 iii 〉 群

軒平瓦P—平瓦Ⅲ2 Za群・平瓦Ⅲ2 Za [J2aj] 群・平瓦Ⅲ2 Za [J2as] 群 (?)

3 丸瓦

丸瓦の観察属性は、軒丸瓦の丸瓦部のそれと同じである。形態属性については、玉縁式と行基式の2種が明瞭に区別でき、この区別が主属性と認定できる型木の形態を規定している。そして叩き板の変異が、それぞれの式に認められるというあり方を呈するので、まず玉縁式と行基式に分けて、そののちに属性組成を、実在する資料の「群」として、以下のように記述する。

なお、軒丸瓦および軒平瓦の記述の場合と同じく、[]内の表記は、ほとんど消えてしまっているが判じることができる主要叩きを、()内の+に続く表記は、補助叩きを示す。そして〈 〉内の表記は、叩き目が消されていて、叩き板の反映属性からは細分できないものの、ほかの下位属性をも併わせ見て細分する群を示す。

3—1 玉縁式

玉縁 I 2 Za 群

玉縁 I 31 Za [J1b] 群

玉縁 I 321 Za [J1a] 群

玉縁 I 321 Za [J1b] 群

玉縁 I 321 Za [J1e] 群

玉縁 I 322 Za [J1b] 群

玉縁 I 323 Za [J1b] 群

玉縁 I 331 Za [J1b] 群

玉縁 I 332 Za [J1b] 群

3—2 行基式

行基 I 1 Za [Aa] 群

行基 I 1 Za [Ab] 群

行基 I 1 Za [Ad] 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Ad) 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Af) 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Cn) 群

行基 I 1 Za [Ae] 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Af) 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群

行基 I 1 Za [Af] 群・行基 I 1 Za [Af] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Af] (+Af) 群・行基 I 1 Za [Af] (+Cn) 群

行基 I 1 Za [Ag] 群・行基 I 1 Za [Ag] (+Ad) 群・行基 I 1 Za [Ag] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Ag] (+Af) 群

行基 I 1 Za [Aj] 群

行基 I 1 Za [Ak] 群

行基 I 1 Za [Am] 群

行基 I 1 Za [Ba] 群

行基 I 1 Za [Bc] 群

行基 I 1 Za [Br] 群

行基 I 1 Za [Bt] 群

行基 I 1 Za [Cg] 群

行基 I 1 Za [Ch] 群

行基 I 1 Za [Cj] 群

行基 I 1 Za [Cn] 群

行基 I 1 Za [J1b]

行基 I 1 Za [J1c] 群

行基 I 1 Za [J1f] 群

行基 I 1 Za [J2ac] 群

行基 I 1 Za [J2ad] 群

行基 I 1 Za < i > ~ < x x iii > 群

4 平瓦

平瓦の観察属性は、軒平瓦の平瓦部のそれと同じである。実在する資料に認める属性組成は以下のとおりである。

なお、丸瓦の記述の場合と同じく、[] 内の表記は、ほとんど消えてしまっているが判じることができる主要叩きを、() 内の+に続く表記は、補助叩きを示す。そして < > 内の表記は、叩き目が消されていて、叩き板の反映属性からは細分できないものの、ほかの下位属性をも併わせ見て細分する群を示す。また、1つの叩き表記に続けて、×以下に併記するのは、1枚の瓦の凸面に2種類の叩き目が観察できることを意味する。端面あるいは端部にだけ認められる補助叩きのようではなく、異なる叩き目が凸面の範囲を違えて並列して認められるものを、補助叩きとは区別して表記する。なお、その場合、先に記す叩き目が広い範囲にわたって認められる。

平瓦 II 0 Aa群・平瓦 II 0 Za [Aa] 群

平瓦 II 0 Za [Ab] 群

平瓦 II 0 Ac群・平瓦 II 0 Za [Ac] 群・平瓦 II 0 Ac (+Ae) 群

平瓦 II 0 Za [Ad] 群・平瓦 II 0 Za [Ad] (+Ad) 群・平瓦 II 0 Za [Ad] (+Ae) 群・平瓦 II 0 Za [Ad] (+Bt) 群・平瓦 II 0 Za [Ad] (+Cn) 群

平瓦 II 0 Ae群・平瓦 II 0 Ae (+Ae) 群・平瓦 II 0 Ae (+Ag) 群・平瓦 II 0 Ae (+Cn) 群・平瓦 II 0 Za [Ae] 群・平瓦 II 0 Za [Ae] (+Ae) 群・平瓦 II 0 Za [Ae] (+Ag) 群・平瓦 II 0 Za [Ae] (+Bt) 群・平瓦 II 0 Za [Ae] (+Cn) 群

平瓦 II 0 Za [Af] 群・平瓦 II 0 Za [Af] (+Ae) 群・平瓦 II 0 Za [Af] (+Af) 群・平瓦 II 0 Za [Af] (+Cn) 群

平瓦 II 0 Za [Ag] 群・平瓦 II 0 Za [Ag] (+Ag) 群・平瓦 II 0 Za [Ag] (+Bt) 群・平瓦 II 0 Za [Ag] (+Cn) 群

平瓦 II 0 Za [Ah] 群

平瓦 II 0 Za* [Aj] 群

平瓦 II 0 Za [Ak] 群・平瓦 II 0 Za* [Ak] 群

平瓦 II 0 Za [Am] 群

平瓦 II 0 Za [Ba] 群

平瓦 II 0 Za [Bb] 群

平瓦 II 0 Za [Bc] 群・平瓦 II 0 Za [Bc] (+Bt) 群

平瓦 II 0 Bd群

平瓦 II 0 Be群

平瓦 II 0 Bf群・平瓦 II 0 Bf×Be群

平瓦 II 0 Bg群

平瓦 II 0 Bh 群
 平瓦 II 0 Bj 群
 平瓦 II 0 Bk 群
 平瓦 II 0 Bm 群
 平瓦 II 0 Bn 群
 平瓦 II 0 Bp 群 · 平瓦 II 0 Za [Bp] 群
 平瓦 II 0 Bq 群 · 平瓦 II 0 Za [Bq] 群
 平瓦 II 0 Br 群 · 平瓦 II 0 Za [Br] 群
 平瓦 II 0 Bs 群 · 平瓦 II 0 Bs (+Ae) 群 · 平瓦 II 0 Bs (+Cn) 群 · 平瓦 II 0 Za [Bs] 群 · 平瓦 II 0 Za
 [Bs] (+Ae) 群 · 平瓦 II 0 Za [Bs] (+Af) 群
 平瓦 II 0 Ca 群
 平瓦 II 0 Cb 群
 平瓦 II 0 Cc 群
 平瓦 II 0 Cd 群
 平瓦 II 0 Ce 群 · 平瓦 II 0 Za [Ce] 群 · 平瓦 II 0 Ce × Ck 群
 平瓦 II 0 Cf 群 · 平瓦 II 0 Za [Cf] 群
 平瓦 II 20 Za [Cg] 群
 平瓦 II 26 Za [Cg] 群
 平瓦 II 27 Za [Cg] 群
 平瓦 II 20 Za [Ch] 群
 平瓦 II 25 Za [Ch] 群
 平瓦 II 27 Za [Ch] 群
 平瓦 II 20 Za [Cj] 群 · 平瓦 II 27 Za [Cj] 群
 平瓦 II 0 Ck 群 · 平瓦 II 0 Ck × Bj 群 · 平瓦 II 0 Ck × Cm 群
 平瓦 II 0 Cm 群 · 平瓦 II 0 Cm × Be 群
 平瓦 II 0 Da 群
 平瓦 II 0 Ea 群 · 平瓦 II 0 Ea (+Ad) 群 · 平瓦 II 0 Ea (+Ae) 群 · 平瓦 II 0 Ea (+Bt) 群 · 平瓦 II 0
 Ea (+Cn) 群 · 平瓦 II 0 Za [Ea] 群 · 平瓦 II 0 Za [Ea] (+Ad) 群 · 平瓦 II 0 Za [Ea] (+Ae)
 群 · 平瓦 II 0 Za [Ea] (+Cn) 群
 平瓦 II 0 Za [Fa] 群
 平瓦 II 0 Za [Ga] 群
 平瓦 II 0 Za [Ha] 群
 平瓦 II 1 Za [J1b] 群
 平瓦 II 1 J1c 群
 平瓦 II 1 J1d 群
 平瓦 II 1 J1e 群 · 平瓦 II 1 Za [J1e] 群
 平瓦 II 1 J1f 群
 平瓦 III 2 J2aa 群

平瓦Ⅲ2 J2ab群
平瓦Ⅲ2 J2ac群
平瓦Ⅲ2 J2ad群
平瓦Ⅲ2 J2ae群
平瓦Ⅲ2 J2af群
平瓦Ⅲ2 J2ag群
平瓦Ⅲ2 J2ah群
平瓦Ⅲ2 J2aj群
平瓦Ⅲ2 J2ak群
平瓦Ⅲ2 J2am群
平瓦Ⅲ2 J2an群
平瓦Ⅲ2 J2ap群
平瓦Ⅲ2 J2aq群
平瓦Ⅲ2 J2ar群
平瓦Ⅲ2 J2as群
平瓦Ⅲ2 J2at群
平瓦Ⅲ2 J2au群
平瓦Ⅲ2 J2aw群
平瓦Ⅲ2 J2ax群
平瓦Ⅲ2 J2ay群
平瓦Ⅲ2 J2az群
平瓦Ⅲ2 J2ba群
平瓦Ⅱ0 Za〈i〉～〈v〉群
平瓦Ⅱ1 Za群
平瓦Ⅱ20 Za群・平瓦Ⅱ21 Za群・平瓦Ⅱ22 Za群・平瓦Ⅱ23 Za群・平瓦Ⅱ24 Za群
平瓦Ⅱ25 Za群・平瓦Ⅱ27 Za群・平瓦Ⅱ28 Za群
平瓦Ⅱ3 Za群

5 垂木先瓦

垂木先瓦は、瓦範によって造られていることから、瓦範の違いによって以下のように記述する。

垂木先瓦R群
垂木先瓦S群
垂木先瓦T群
垂木先瓦U群
垂木先瓦W群

6 熨斗瓦

熨斗瓦は、平瓦を分割して短冊形に造るものであることから、観察属性は平瓦のそれを援用するが、平瓦を分割するのが、焼成前であるのか焼成後であるのかを判定する必要がある。焼成前に分割された熨斗瓦を切熨斗瓦、焼成後に分割したものを割熨斗瓦と区別する。実在の資料に認める属性組成は以下のとおりである。

記述にあたっては、熨斗瓦の素材になった平瓦の側面が残っている方を側面と呼び、切熨斗瓦に加工する段階で半載した面を「半載面」、割熨斗瓦に加工する段階で割った面を「半割面」と呼び分ける。

6-1 切熨斗瓦

切熨斗瓦Ⅱ1 J1d群

6-2 割熨斗瓦

割熨斗瓦Ⅱ0 Aa群

割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Aa] 群

割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群

割熨斗瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群

割熨斗瓦Ⅱ0 Bh群

割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Bs] 群

割熨斗瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) 群

割熨斗瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) (+Cn) 群

割熨斗瓦Ⅱ1 J1d群

割熨斗瓦Ⅱ1 Za群

割熨斗瓦Ⅱ20 Za群

7 隅平瓦

隅平瓦は、平瓦を対角線方向に分割して三角形に近い台形に造ったものであるから、観察属性は平瓦のそれを援用する。1例を確認しているので、隅平瓦1と記述するが、一のあとに続く属性組成表記は、平瓦のそれである。

隅平瓦1 - 平瓦Ⅲ2 J2an群

8 螻羽瓦

螻羽瓦には、四重弧文の瓦当部をもつものが認められる。形態に関しては独自の属性をとりえるが、瓦当部の文様や、造瓦技術などの属性については、軒平瓦あるいは平瓦のそれを援用する。瓦当部の観察できる資料は1例しかない。また、螻羽瓦の総数も少ないので、平瓦の属性組成表記でまとまる単位で群とする。「螻羽瓦」に、続けて一でつないで、素材とする軒平瓦あるいは平瓦に与えられる属性組成表記を付け足す。実在の資料に認める属性組成は以下のとおりである。

蝮羽瓦－軒平瓦 A A5－平瓦 II 0 Za < iii > 群

蝮羽瓦－平瓦 II 0 Za [Bb] 群

蝮羽瓦－平瓦 II 0 Bj 群

蝮羽瓦－平瓦 II 1 Za [J1e] 群

蝮羽瓦－平瓦 II 0 Za < i > 群

蝮羽瓦－平瓦 II 0 Za < iv > 群

9 面戸瓦

面戸瓦には、焼成前に成形する切面戸瓦と、焼成後に割り成形する割面戸瓦の区別ができる。素材とする形態には、丸瓦と平瓦の両者を想定できるが、今のところ、丸瓦を素材とするものしか確認していない。そこで、切面戸瓦と割面戸瓦の別を示す表記のあとに、一でつないで、素材とする丸瓦の属性組成表記を付け足す。実在の資料に認める属性組成は以下のとおりである。

9 - 1 切面戸瓦

切面戸瓦－行基 I 1 Za < vi > 群

切面戸瓦－行基 I 1 Za < x viii > 群

切面戸瓦－玉縁 I 321 Za [J1b] 群

切面戸瓦－玉縁 I 323 Za [J1b] 群

9 - 2 割面戸瓦

割面戸瓦－行基 I 1 Za [Af] (+Cn) 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za [Ak] 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za [J2ad] 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za < ii > 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za < vii > 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za < viii > 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za < x > 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za < x v > 群

割面戸瓦－行基 I 1 Za < x ix > 群

10 鴟尾

完形の姿を想定するとき、手にする鴟尾の破片は極端な部分資料でしかなく、また量的にも少ない。鴟尾に関しては、完形を資料から抽出する共通技術形態属性を認めることができないので、便宜的に厚さ属性から2群に分け、破片資料が取り込んでいるもとの鴟尾の部分ごとにまとめて記述描写を試みる。^(註10)

鴟尾片は41点を確認している。そのうちの3点は軟質で灰黄色を呈するが、残りはすべて須恵質で灰色、あるいは灰青色を呈する。

薄手鴟尾群：厚さが1.5～2.0cm

厚手鴟尾群：厚さが2.5～3.0cm^(註11)以上

11 鬼瓦

挟り部の破片が1点出土しているだけである。個体として記述する。

12 隅木蓋瓦

上面の破片が1点出土しているだけである。個体として記述する。

13 埴

埴については、独自の形態属性に基づいて、方形埴、格座間埴を区別する。格座間埴は1例しか認めていないので、個体として記述する。方形埴については、厚さの違いで分類し、さらに表面および裏面に叩き締め調整が施されているものがあり、それには叩き目の違いをも見る。

したがって、方形埴の観察には、次の属性を設定する。

厚さによる埴の分類

埴1：厚さが5.0cm以上

埴2：厚さが3.5cm前後

埴3：厚さが3.0cm以下

叩き目

B：正格子叩き

B a：叩き板Ba（丸瓦・平瓦に認める叩き目と共通する）

C：斜格子叩き

C t：叩き板Ct（埴に独自の叩き目を認める）

Z：叩き目なし

実在の資料に認める属性組成表記は以下のとおりである。

方形埴1 Ba群

方形埴1 Ct群

方形埴1 Z群

方形埴2 Z群

方形埴3 Z群

格座間埴群

第4項 瓦埴類資料の観察

ここで前節で設定した瓦埴類資料についての属性を組成させて、実在する資料の表記を試みるとともに、各群の定義を示す。

1 軒丸瓦

軒丸瓦A - 玉縁 I 2 Za 群 (第54図 図版2, 3 写真59, 60: 軒丸1 ~ 軒丸13)

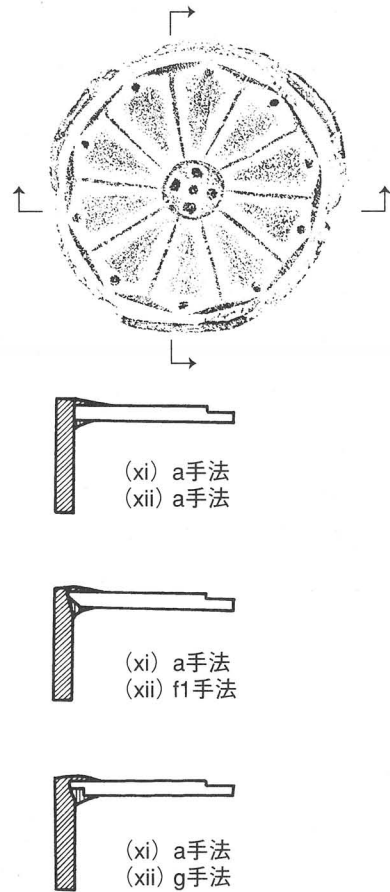
素弁10葉の蓮華文軒丸瓦で(軒丸1~軒丸9)、法隆寺(斑鳩寺)軒丸瓦4C・4Dと同文である(花谷1998;上田1998)。瓦当は、直径が約16.5cm、中房径は約3.2cm、中房での厚さは約2.6cmを測る。蓮弁は弁端が尖り、弁端に珠文が付される。中房の蓮子は1+4で、外側の蓮子は中房の外周より内側に配される。外縁は素縁である。

瓦範は範傷の有無から時間差の使用が窺え、範傷の認められない0段階(軒丸1)と、外区の周溝に2ヶ所の範傷が認められる1段階(軒丸2~軒丸4)に分けることができる。また範型は、瓦当縁に範端の存在を示す粘土の段があり(写真59:軒丸2-1)、瓦当部側面に範端の痕を残す例がないので、瓦当外縁端に終了し、瓦当部側面にかぶらないB型範と推測できる。また、範傷の位置と丸瓦部との接合位置のずれが90度の転回位置で認められることから、方形範の可能性が高いと考える(第54図)。また木目に沿って認められる範傷から、柁目材を使用したことが推測できる(写真59:軒丸2-1,軒丸2-2)。

粘土素材の範への詰め込み方は、粘土板を2枚程度重ねて範に密着させている。

瓦当部裏面は中央が中高で膨張するが(写真59:軒丸2-7)、接合される丸瓦部に沿う方向に逆U字形のナデ調整と、それに直交する方向および不定方向のナデ調整が観察できるもの(軒丸2)と、中央がそれほど中高にならずに(写真60:軒丸4-4)ナデ調整が施されるもの(軒丸3,軒丸4)とがある。ともに瓦当部裏面下半周縁には、瓦当部裏面に中央へ向けての指頭圧痕が残る。瓦当部側面下半には回転使用のナデ調整が認められる。ただし、側面上半部、つまり丸瓦部の接合された範囲は、丸瓦部の接合を強化するために、瓦当部の粘土を丸瓦部上面にかぶせて密着させる痕跡が、直交する方向の指頭圧痕として認められ、下半部に認めるような回転ナデ調整は認められない。

丸瓦部はすべて玉縁 I 2 Za 群と表記できる。丸瓦部の調整は、凸面調整では不定方向の全面ナデ調整①23、横方向のカキ目調整①41(軒丸10,軒丸11)、および縦方向のヘラケズリ調整①32(軒丸2,軒丸4)を施すのを認める。凹面調整を施さない③0である。丸瓦部の分割は凹面側から切り込み、側面調整は凹凸両面側に傾けて分割断面をヘラケズりする調整②



第54図 軒丸瓦A群の丸瓦部接合位置

24である。布袋には「布ハ」(軒丸2, 軒丸4, 軒丸10, 軒丸11)と、「布ヌ」(軒丸12)を使う。「布ハ」の布袋は、青灰色か灰色で硬質の、および灰白色で軟質の軒丸瓦丸瓦部を造るのに使われるが、「布ヌ」の布袋を使って造った丸瓦部は、黒灰色か黒褐色を呈する軟質のものに限られる。すべて胎土は細かい黒色砂粒と石英粒を含む。なお、丸瓦部には玉縁上端縁から13cmほど下がるところの幅の中央に、直径1.0~1.3cmの円孔が焼成前に凸面側から穿たれている(写真60:玉縁5)。

瓦当部と丸瓦部を接合するための加工は、瓦当部裏面はすべて無加工のa手法であるが、丸瓦部広端には、凹面側に楔形加工を施すf1手法(軒丸1, 軒丸2; 写真59:軒丸2-6)、あるいは片ほぞ加工を施すg手法(軒丸10~軒丸11)が認められる。1例だけであるが、丸瓦部広端面が無加工のa手法であるものの、端縁に直交する方向に沈線が施されるものがある。なお、丸瓦部広端が瓦当外縁端に達するものではなく、瓦当外縁端から1.2cm前後離れたところに丸瓦部広端がくるように接合する(写真59:軒丸2-5)。接合位置は高く、凹面側に接合粘土を薄くつけて固定する(写真59:軒丸2-6)。この群とするものの全長を推定させる資料はないが、大阪大学保管資料には、完形品が存在し、その全長は39.5cmを測る(藤・北野1961:図版第2)。

範傷0段階のものに接合される丸瓦部と範傷1段階のものに接合される丸瓦部のあいだで、造瓦技術上の差があるかどうかや、また、丸瓦部広端面の加工手法ならびに瓦当部裏面の加工手法に変異があるかどうかは、範傷0段階の出土例が少ないため確実ではないが、今のところ、この範傷0段階のものは黒灰色で軟質という、範傷1段階のものには認められない質を呈するから、両段階のものには違いがあるとして、範傷1段階のものにつくと思われる丸瓦部を求めると、同じ玉縁I2Za群とする丸瓦部のなかでも、丸瓦部広端部の凸面に①23の不定方向の全面ナデがあり、凹面に③3の同心円当て具痕が認められるものが該当する可能性が高い(写真60:玉縁6, 玉縁7)。

軒丸瓦B-行基I1Za [Cg] 群・行基I1Za [Ch] 群 (第55図 図版3 写真61, 62-軒丸14~軒丸21, 軒丸25~軒丸27)

素弁10葉の蓮華文軒丸瓦で(軒丸14~軒丸21)、四天王寺第I期軒丸瓦Ib1型式と同文である^(註12)。瓦当は、直径が約16.7cm、中房径は約3.0cm、中房での厚さは約2.1cmを測る。蓮弁は弁端が丸みを持ち、弁端に珠文が付される。その珠文を見ると、中房の蓮子は1+4で、外側の蓮子は中房の外縁に沿って配される。中房の外縁に直交する方向に範傷が認められる。外縁は素縁である。

範傷は観察可能な瓦のすべてに認められることから、使用過程で生じた範傷ではなく、瓦範の製作当初からついていたものと推測できる(写真61:軒丸14-1)。また、範傷の位置と丸瓦部との接合位置がアランダムに認められることから円形範であったと推測できる(第55図)。

粘土素材の範への詰め込み方は、粘土板を2枚程度重ねて範に密着させている(写真61:軒丸14-2)。

瓦当部裏面は平坦で、中央に粘土素材を範に詰め込んだときについた指頭圧痕が残る(写真61:軒丸14-3)。下半外周には瓦当外縁に沿うようにナデ調整を施す(写真61:軒丸14-4)。瓦当部側面下半には回転使用のナデ調整が認められる(写真61:軒丸14-5)。

丸瓦部は、凸面が縦方向のナデ調整①12でほぼ完全に叩き目が消されるが、軒丸瓦B群あるいはC群とされる瓦当部の外れた丸瓦部の凸面のナデ調整の下に、斜格子叩き [Cg] および [Ch] の痕跡がががすかに残る資料があるので、行基I1Za [Cg] 群あるいは行基I1Za [Ch] 群の丸瓦

部が接合されることが分かる（写真62：軒丸25-1）。ともに、凹面調整を施さない③0で、分割には凹面側から切り込む。側面調整は、凹凸両面側に傾けるヘラケズリ調整②24を施す。

軒丸瓦B群あるいはC群に、丸瓦部の行基I1Za [Cg] 群（軒丸27）または行基I1Za [Ch] 群（軒丸25，軒丸26）とするものが接合されることは確実であると思うが、実際のところ、行基I1Za [Cg] 群については、接合状況を確実に観察できる資料が少なく、かろうじて観察できる例も瓦当外縁部分しか残っていない（軒丸27；写真62：軒丸27-1）。行基I1Za [Ch] 群（軒丸25，軒丸26）については、軒丸瓦B群だけに接合されるのか、または軒丸瓦C群にだけ接合されるのか、あるいはまた、その両群ともに接合されるのかが確定できていない。今のところ、両群の丸瓦部が軒丸瓦B群およびC群に共通して使われると考えておく。

布袋には「布ネ」を使う（写真61，62：軒丸15-4，軒丸27-3）。綴じ合わせ痕から、行基I1Za [Cg] 群の丸瓦部への布袋は「布袋ネ行基0」、また行基I1Za [Ch] 群の丸瓦部への布袋は「布袋ネ行基2」（写真62：

軒丸26-2）と表記する。前者の布目圧痕が明橙色で軟質の瓦に認められるのに対して、後者の布目圧痕は暗橙色で軟質の瓦に見られる。胎土には細かい黒色砂粒と石英粒、くさり礫が含まれる。

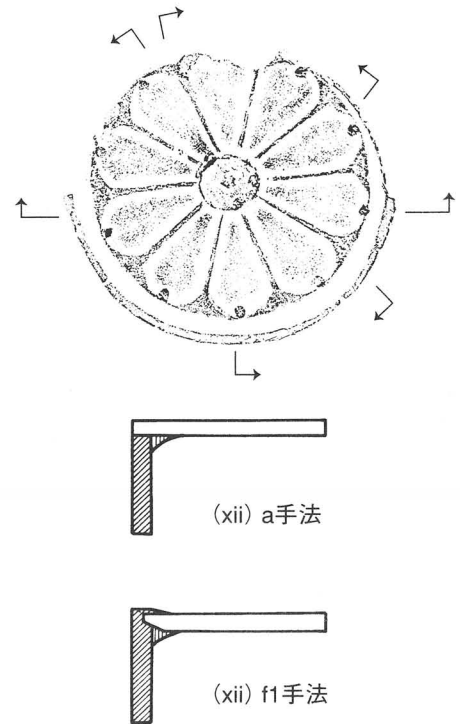
瓦当部と丸瓦部の接合には、丸瓦部広端面を無加工のまま接合するa手法（軒丸14，軒丸16，軒丸18，軒丸25，軒丸27）、およびその凹面側に楔形加工を施すf1手法（写真62：軒丸26-1）が認められる。前者のa手法のものは、丸瓦部広端が外縁端近くにまで達している（写真61，62：軒丸13-2，軒丸14-2，軒丸27-2）。後者のf1手法のものは、丸瓦部広端が外縁端に達せず、外縁端から1.2cm前後離れた位置に丸瓦部広端がくるように接合する。なお、両者とも接合位置は高く、凹面側に接合粘土を薄くつけて固定する。

なお、軒丸瓦B-行基I1Za [Cg] 群とするものの全長は45cm前後であると推測できる。

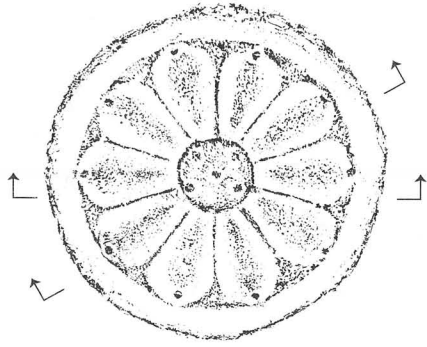
軒丸瓦C-行基I1Za [Cg] 群・行基I1Za [Ch] 群（第56図 図版4 写真63-軒丸22～軒丸27）

素弁10葉の蓮華文軒丸瓦である（軒丸22～軒丸24）。瓦当は、直径が約17.0cm、中房径は約4.1cm、中房での厚さは約2.2cmを測る。蓮弁は弁端が丸みを持ち、弁端に珠文が付される。瓦当の文様構成は軒丸瓦B群と類似するが、中房径が軒丸瓦B群のそれよりも若干大きく、蓮弁中央の稜がより立体的になり、弁端の珠文もやや内側に付されるという違いが認められる（軒丸22）。中房の蓮子は1+4で、中房の周縁よりやや内側に配される。外縁は素縁である。

範型は、瓦当部と丸瓦部が不規則な位置でずれることから、円形範と推測できる（第56図）。粘



第55図 軒丸瓦B群の丸瓦部接合位置



第56図 軒丸瓦C群の丸瓦部接合位置

土素材の範への詰め込み方は、粘土板を2～3枚程度重ねて範に密着させている。

瓦当部裏面は平坦であるが（写真63：軒丸22-1）、指頭圧痕が残る。

丸瓦部は軒丸瓦B群のそれと同じく、行基 I 1 Za [Cg] 群および行基 I 1 Za [Ch] 群のものが接合される。なお、その接合手法についても軒丸瓦B群の場合と同じである。布袋については「布ネ」が使用される（写真63：軒丸22-2）。

素材の胎土には、石英粒と黒色砂粒が目立ち、くさり礫を含むものもある。焼成度および色調は、軟質で橙褐色を呈するものと、やや硬質で灰黒色のものがある。橙褐色のものはくさり礫を含む。

軒丸瓦D - 行基 I 1 Za [Ae] 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群・行基 I 1 Za [Ag] 群・行基 I 1 Za (x v) 群（第57図 図版5, 6 写真63～65-軒丸28～軒丸44）

素弁8葉の蓮華文軒丸瓦で（軒丸28～軒丸43）、法隆寺（斑鳩寺）軒丸瓦6Aと同文である（花谷1998；上田1998）。瓦当は、直径が約16.5cm、中房径は約3.0cm、中房での厚さは約2.0cmを測る。蓮弁は弁端が丸みをもち、弁端に珠文が付される。中房の蓮子は1+4であるが、不明瞭である。中房の周りには細溝がめぐる。蓮子は中房のほぼ中央に1つと、中房の周縁にはみ出し気味に接して、ほぼ等間隔に配される。瓦当の文様構成は後述の軒丸瓦E群のものと類似するが、この群とする資料は、蓮弁が扁平であることと中房の中心蓮子のつけられる位置に、E群のものとは大きな違いが認められる。外区周溝に1ヶ所の範傷が認められる（写真65：軒丸36-2）。外縁は素縁である。

範傷は外区周溝を観察できる資料のすべてに認められることから、使用過程で生じた範傷ではなく、瓦範の製作当初からついていた可能性が高い。範型は、瓦当外縁に範端の存在を示す粘土の段があり、瓦当部側面に範端の痕を残す例がないので、瓦当外縁端に終了し、瓦当部側面にかぶらないB型範と推測できる。また、瓦当部と丸瓦部の接合位置は規則的な位置で認められるものが多いとはいえ、不規則な位置に取り付ける例も認められることから、円形の範型に何らかの目印がつけられていた可能性も想定できる（第57図）。

粘土素材の範への詰め込み方は、粘土板を2枚程度重ねて範に密着させている。

瓦当部裏面は平坦で（写真64：軒丸31-2）、粘土素材を範に詰め込んだときについた指頭圧痕が中央に残るが（写真64：軒丸31-4）、下半外周は外縁に沿うようにナデ調整を施す。瓦当部側面下半には回転使用のナデ調整が認められる。

丸瓦部には今のところ、行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群（軒丸44）、行基 I 1 Za [Ae] 群（軒丸29、軒丸36）、行基 I 1 Za [Ag] 群および行基 I 1 Za 群（軒丸37）の3種類が認められる。これらのうちで瓦当部が失われているものの、接合される丸瓦部が完形品として分かっている資料に行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群（軒丸44）がある。この例から軒丸瓦D - 行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群の全長は約42.5cmであったことが推測できる。

行基 I 1 Za [Ae] 群とする丸瓦部は、行基 I 1 Za [Ag] 群とする丸瓦部とともに、凸面を平行叩

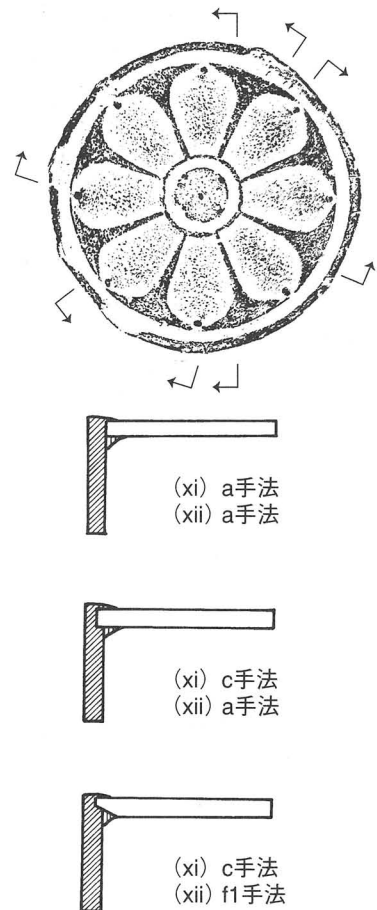
き [Ae] (写真64：軒丸29-2, 軒丸36-3) または [Ag] で叩き成形したのち、横方向のナデ調整①11を施し、それで叩き目が消えている。これらの例と類似する手法で造られた丸瓦には、補助叩きを施さないものと、狭端面および狭端部凸面に補助叩き (+Ad)、(+Ae)、(+Af) あるいは (+Cn) を施すものが確実に存在する (行基9, 行基10, 行基18, 行基19)。今のところ、軒丸瓦D群に確実に接合される丸瓦部で補助叩きを判別できる例としては、上に示した表記のように、行基 I 1 Za [Ae] 群に補助叩き (+Cn) を施すものに限られる (写真65：軒丸44-3)。しかし軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ae] 群の範疇に入るもののほかに、布袋の種類など、ほかの属性を併わせ見ても、補助叩きを施さない行基 I 1 Za [Ae] 群とするべき丸瓦部も確実に存在し、それらは同じ布袋を使って造った丸瓦のなかにも同じ群にあてられるものが存在するだけでなく、のちに述べるように織りの異なる布で作られたものにも存在する。

軒丸瓦D群に接合される丸瓦部は、どの群にあっても、すべて凹面調整を施さない③0である。側面調整は、分割断面と破面を、それらの面と平行的に削り取る②21である。

布袋については、行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群には「布ナ」の布袋を使う (軒丸44)。行基 I 1 Za [Ae] 群は「布ナ」と「布ロ」および「布ニ」の3種類の布が縫い合わされ、かつ綴じ合わされた布袋 (ただし、確実に瓦当部と接合された丸瓦部 (軒丸29) には2種類の布の部分しか確認できないので、それと同じ布袋を使用した丸瓦 (行基7) から3種類の布が綴じ合わされていることを確認する) を (写真90：行基7-1, 行基7-2)、行基 I 1 Za [Ag] 群は行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群と同じ「布ナ」の布袋を使う。

行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群の布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋ナ行基1」と表記するが (写真64：軒丸44-1)、同じ「布ナ」で作られた布袋を使う行基 I 1 Za [Ae] 群の資料 (軒丸36) に認められる綴じ合わせ痕は異なっているので、「布袋ナ行基2」と表記する (写真65：軒丸36-4)。行基 I 1 Za [Ag] 群とする資料には綴じ合わせ痕が観察できないので「布袋ナ行基0」と表記する。また別の行基 I 1 Za [Ae] 群とする資料 (軒丸29) は縫い合わせ痕から「布袋ニナナロ行基0」と表記する (写真64：軒丸29-3)。

これらのほかに、凸面の叩き目が調整によって完全に消されていて群を特定できない丸瓦部に使われた布袋が2種類存在する。ひとつは「布ニ」と「布ロ」が綴じ縫い合わされた布袋であるが、綴じ合わせ痕が確認できていないので「布袋ニナロ行基0」としか表記できないものと、あとひとつは「布ワ」とするきわめて特徴的な織りをもつ布で作られた布袋を使用する例 (軒丸31) である。「布ワ」は平織りではあるが、横糸が波状に通じ、まるでメリヤス編みの裏目のような織り目をも



第57図 軒丸瓦D群の丸瓦部接合位置

つ(写真64:軒丸31-3)。前者の布袋についてはその布袋が使用された丸瓦を特定することができないので行基 I 1 Za 群の丸瓦部としか表記できないが、後者の布袋については特徴的な織り目をもつので、その布袋が使用された丸瓦を探して、行基 I 1 Za [Ab] 群、行基 I 1 Za [Ak] 群、行基 I 1 Za [Bc] 群、行基 I 1 Za <iv> 群、行基 I 1 Za <x iv> 群、行基 I 1 Za <x v> 群に認められる事実を確認した。これらの丸瓦のなかで、瓦当部に接合されたと想定できる丸瓦部の幅を半分する中央に釘穴と考えられる円孔の穿たれた例が、行基 I 1 Za <x v> 群(行基108)には確実に認められる。布袋には「布袋ワ行基 2」が使用されている(写真106:行基108-1)。軒丸31の側縁部にわずかに認められる綴じ合わせ痕が、この丸瓦部(行基108)と同じ「布袋ワ行基 2」の使用を認めさせる。このことから、軒丸瓦 D 群の丸瓦部に「布袋ワ行基 2」が使用されていたことは確かであろう。これらとは別の丸瓦、すなわち、行基 I 1 Za [Ab] 群、行基 I 1 Za [Bc] 群は、行基 I 1 Za <x v> 群と同じ「布袋ワ行基 2」を使用しているが、行基 I 1 Za <x v> 群が、破れる前の「布袋ワ行基 2」を使用しているのに対して、行基 I 1 Za [Ab] 群、行基 I 1 Za [Bc] 群は、破れてからの「布袋ワ行基 2」を使用するというように、これらの造瓦のあいだには時間差を認めることができる。そう考えると、行基 I 1 Za [Ab] 群、行基 I 1 Za [Bc] 群については、確実に瓦当部と接合されていたかどうかは確実なことは言えない。それに対して、行基 I 1 Za [Ak] 群とする丸瓦を造るには「布袋ワ行基 1」が、行基 I 1 Za <x iv> 群には「布袋ワ行基 3」が使われている。また、行基 I 1 Za <iv> 群は綴じ合わせ痕が認められないので「布袋ワ行基 0」としか表記できないが、それらが丸瓦部として確実に瓦当部と接合されていたかどうかについても確定できていない。

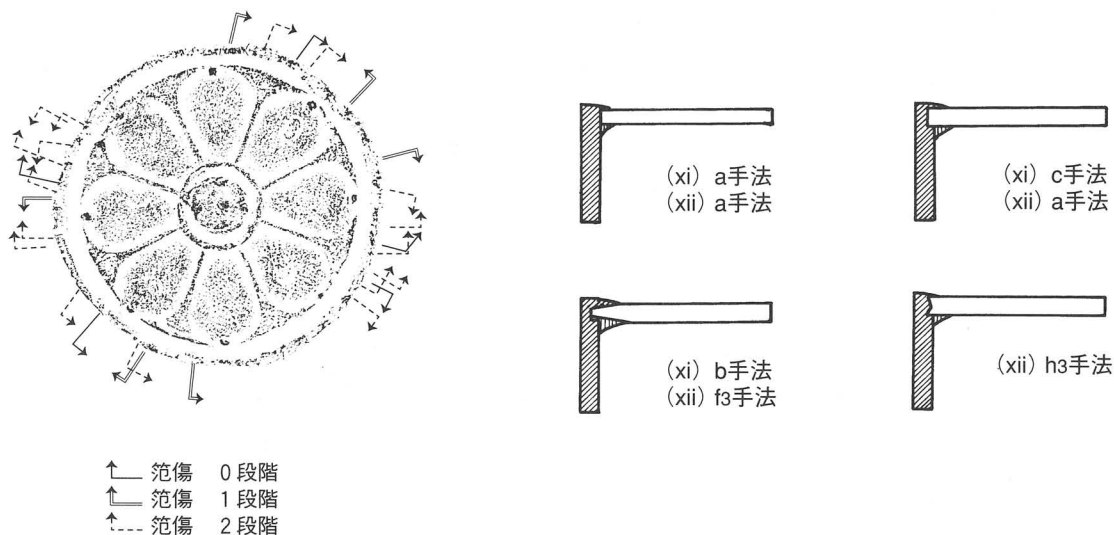
瓦当部と丸瓦部を接合するための加工には、瓦当部裏面が無加工の a 手法(軒丸33)と、段を造り出す c 手法(軒丸28, 軒丸30)が認められる。丸瓦部広端面については、無加工のまま接合する a 手法(軒丸29, 軒丸44)が多いが、凹面側に楔形加工を施す f1 手法も認められる。また、無加工 a 手法の丸瓦部広端面に V 字形の刻み、あるいは不規則な沈線形の刻みが施されたものがあったようで、その刻みが瓦当部裏面に転写されている例がある(写真64:軒丸33-1)。なお、丸瓦部広端が外縁端に達するものはなく、外縁端から 1.2~1.7cm 離れたところに丸瓦部広端がくるように接合している。接合位置は高く、凹面に接合粘土を薄くつけて固定している(写真64:軒丸29-4)。

瓦当部がはずれ、丸瓦部だけが完存した全長 42.5cm の行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群とする丸瓦部には、狭端から広端側に約 21.8cm 上がるところの幅を半分する中央に、凸面側の直径は約 0.7cm、凹面側の直径は約 1.0cm の円孔が、焼成前に凸面側から穿たれている(写真65:軒丸44-1)。

素材の胎土には、石英粒が目立つ。次に黒色砂粒が多く、くさり礫を含むものもある。焼成度および色調は、硬質で、青灰色、灰色あるいは紫灰色を呈するものや、やや軟質で灰褐色のもの、軟質で灰白色あるいは橙褐色のものがある。橙褐色のものはくさり礫を含む。

軒丸瓦 E - 行基 I 1 Za [Am] 群・行基 I 1 Za [Cj] 群・行基 I 1 Za <x ii> 群(第58図 図版7~9 写真66~71-軒丸45~軒丸61)

素弁 8 葉の蓮華文軒丸瓦で(軒丸45~軒丸60)、法隆寺(斑鳩寺)軒丸瓦 6 A と同文である(花谷 1998; 上田 1998)。瓦当は、直径が 16.0~17.0cm、周縁内径は 15.0~16.0cm、中房径は約 3.0cm、中房での厚さは 2.6~2.8cm を測る。蓮弁は弁端が丸みをもち、弁端に珠文が付される。中房の蓮子は 1+4 で、中房の周りには細溝がめぐる。蓮弁は前述した軒丸瓦 D 群のそれと類似するが、軒丸瓦 D 群



第58図 軒丸瓦E群の丸瓦部接合位置

のものよりも膨らみをもち、より立体的で、瓦当の厚さもより部厚い。外縁は素縁である。蓮子の配列はバランスが悪く、中心の蓮子も真ん中ではなく、わずかに右上寄りに置かれ、周辺の4つの蓮子は中房の周縁部に接して配されるが、等間隔ではない（写真67：軒丸47-1）。

瓦範は、範傷の有無、および進行状況から時間差の使用が窺え、すなわち、範傷の認められない0段階（軒丸45，軒丸46；写真66：軒丸45-1）、中房の周りの細溝の右上位に浅くと、左下位に線状の傷がつく1段階（軒丸47～軒丸51；写真67：軒丸47-1）、中房の周りの細溝の右上位に浅くと（1段階と同程度）、左下位にほぼ0.5cm幅の刻線を完全に分断する傷（1段階の線状の傷が深くなる）のつく2段階（軒丸52～軒丸59；写真68：軒丸52-1，53-1）に分けることができる。これらの傷はすべて、瓦当面に認められる柂目圧痕の木目の方向と一致する（写真68：軒丸53-1）。なお、中房の蓮子の明瞭さ、不明瞭さは、範傷の進行と必ずしも整合せず、焼成具合によっても左右される。範型は、瓦当縁に範端の存在を窺わず粘土の段がかすかにあり、瓦当部側面に範端の痕を残す例がないので、瓦当外縁端に終了し、瓦当部側面にかぶらないB型範と推測する。また、瓦当部と丸瓦部の接合位置は不規則であることから円形範が使用されたと考える（第58図）。

粘土素材の範への詰め込み方は、粘土板を2～3枚重ねて範に密着させている。

瓦当部裏面には、横方向あるいは不定方向のナデ調整を施し、裏面中央が膨張するものが多いが、平坦面をもつものも少ないがある。ナデ調整はほとんどが、ほぼ1.2cm幅の角のない断面凹形の窪み状に観察できるので、指ナデと推測できる。しかし、範傷2段階の資料のなかの1例（写真69：軒丸57）だけは、ヘラ削りのような石の動きの観察できるものがあり、それは板状工具を使用したナデ調整によると考えられる。瓦当部裏面下半の外周には周縁に沿うように強く指ナデ調整を施すと認められるものが多い（軒丸47，軒丸52）。この調整は親指と人差し指で側面と同時に角をつまむように施す。このほか、裏面下半の外周を周縁に沿って指でおさえて成形するものもある。このときは、側面は側面だけで別に回転使用のナデ調整を施すので、前述のつまみナデ調整のように裏面と側面をほぼ直角に仕上げるのではなく、鈍角をなすように仕上げる。

丸瓦部は今のところ、行基 I 1 Za [Am] 群（軒丸61）・行基 I 1 Za [Cj] 群（軒丸56）・行基 I

1 Za < x ii > 群（軒丸55）の3種類が認められている。ただし、行基 I 1 Za [Am] 群については瓦当面のはずれた資料しかなく、軒丸瓦 D 群か、軒丸瓦 E 群に接合されると推測できるものの、確実に軒丸瓦 D 群と確定することは難しい。しかし、完形品として存在する行基 I 1 Za < x ii > 群の丸瓦部を接合させる例と比較すると、凸面の叩きの違いがあるものの、法量、凹面調整、凸面調整および側面調整の手法、さらには狭端部が丸みをもちながら内湾気味に薄くなるという端部処理の点で両者は強く類似することから、この E 群の軒丸瓦の丸瓦部とする可能性が強いと考える。

丸瓦部の凸面は横方向のナデ調整① 1 1 で叩き目をすり消すが、行基 I 1 Za [Cj] 群のナデ調整は板状工具で施されたらしく、横方向の板の工具痕が約 9 cm 間隔で規則的に認められる（写真70：軒丸56-6）。凹面はすべて調整を施さない③ 0 である。なお、行基 I 1 Za [Cj] 群とする丸瓦部には、直径が1.5cm前後の不整円形の器具痕を、また行基 I 1 Za < x ii > 群とする丸瓦部には、直径が1.0cm前後の円形の器具痕を認める。

側面調整は、行基 I 1 Za [Cj] 群とするものが、分割断面を凹面側に傾けてヘラケズリ調整② 2 3 を施すのに対して（写真70：軒丸56-8）、行基 I 1 Za [Am] 群（軒丸61）および行基 I 1 Za 群とするもの（軒丸55）のそれは、調整をしたのちのケズリ面が載面に平行をなす② 2 1 である（写真69, 71：軒丸55-4, 軒丸61）。

軒丸瓦 E - 行基 I 1 Za [Cj] 群とするものの全長は、完形品はないが、共通する丸瓦の完形品（行基55, 行基56）から推定して46.5cm前後と考えられる。それに対して、軒丸瓦 E - 行基 I 1 Za < x ii > 群とするものは完形品があり（軒丸55）、全長は36.5cmである。軒丸瓦 E - 行基 I 1 Za [Am] 群（軒丸61）とするものも、瓦当面のはずれた資料であるが、丸瓦部の完存する資料から推測すると、行基 I 1 Za < x ii > 群とするものの全長と同じく、36.5cm前後であることが分かる。

布袋については、行基 I 1 Za [Cj] 群には「布口」（軒丸56；写真70：軒丸56-3）を、行基 I 1 Za < x ii > 群（軒丸55）と行基 I 1 Za [Am] 群（軒丸61）には「布チ」を使う。

行基 I 1 Za [Cj] 群に使われる布袋は綴じ合わせ痕が確認できないことから「布袋口行基 0」と表記する。また行基 I 1 Za < x ii > 群（軒丸55）に使われる布袋は綴じ合わせ痕から「布袋チ行基 3」と表記する。この布袋の左側の縫い目は狭端部まで綴じ目に重ねていて（写真69：軒丸55-4, 5）、さらに綴じ目のところに「Z型」の粘土板の重ね目を認める。この布袋は丸瓦部と丸瓦の双方を造るのに使われていることが、同じ布目圧痕を認めることから分かる。そして布のほつれの違いを判じて、丸瓦部を造るのに先に使われ、そのあとに同じ布袋を使って丸瓦（行基101, 行基102）が造られているのが分かる。行基 I 1 Za [Am] 群に使われる布袋は綴じ合わせ痕から「布袋チ行基 1」と表記する（軒丸61；写真71：軒丸61-3）。さらに、行基 I 1 Za [Cj] 群とするものと同じ型木を使用する別の群とするべき丸瓦があるが（行基 I 1 Za < x > 群）、それには違う布袋を使い、調整の痕跡も異なることに注意しておく。

瓦当部と丸瓦部を接合するための加工には、瓦当部裏面が無加工のa手法（軒丸54）と、挿入溝を彫るb手法（軒丸45, 軒丸46, 軒丸51）、および段を造り出すc手法（軒丸47, 軒丸48, 軒丸53, 軒丸59）が認められる。a手法とc手法は範傷 1 段階と範傷 2 段階に認められるが、b手法は範傷 0 段階と 1 段階のものに認められる。丸瓦部広端面は、無加工のまま接合するa手法が多い。行基 I 1 Za [Cj] 群とするものの丸瓦部広端面には、凹凸両面側に面取りして端面を狭め縮小して、楔状に加工するf3手法が認められる。しかし、軒丸瓦と接合されない、行基 I 1 Za [Cj] 群の丸瓦の広端

(面)部にもそのような処理がされていることからすると、丸瓦部に見る加工は瓦当部との接合のためのものではなく、丸瓦部を造るときの端(面)部処理と見なすことが適切で、その場合は、無加工のa手法とするべきであろう。なお、1例だけではあるが、範傷1段階の瓦当部裏面の丸瓦部との接合部に波状の圧痕が認められる例がある(軒丸47)。浅く波状に彫り込まれるh3手法が丸瓦部広端面に施された歯車状の加工とも言えるものの反映痕であろう(写真67:軒丸47-3)^(註14)。また、段を造り出すc手法を範傷2段階の瓦当部裏面に施したのちに、瓦当部裏面周縁に沿って指頭圧痕を残している例がある(軒丸53;写真68:軒丸53-2)。

丸瓦部広端が瓦当の外縁端に達するものではなく、すべて外縁端から1.5~1.8cm離れたところに丸瓦部広端がくるように接合させる。接合位置は高く、凹面側に接合粘土を薄くつけて固定する。

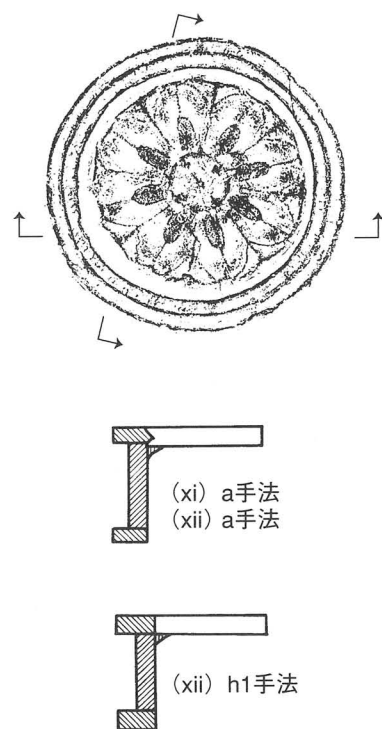
素材の胎土には、石英粒が目立つ。次に黒色砂粒が多いが、くさり礫を含むものもある。焼成度および色調は、硬質で、青灰色、灰色あるいは紫灰色を呈するもの、やや軟質で、灰褐色を呈するもの、軟質で、灰白色または灰橙色を呈するものがある。軟質で灰橙色のものはくさり礫を含む。

軒丸瓦F-行基I1Za〈xvii〉群 (第59図 図版10 写真71, 72-軒丸62~軒丸75)

単弁8葉の「山田寺式」の蓮華文軒丸瓦である(軒丸62~軒丸70)。瓦当は、直径が15.0~16.0cm、中房径は3.0cm、中房での厚さは約2.1cmを測る。蓮弁の中央に通る稜は弁端で間弁のようにT字形、あるいは逆三角形をなす。弁の上には先端がわずかに尖り気味の子葉を1枚おく。なお、子葉の中央に稜は通らない。子葉は、幅が約0.8cm、長さは約2cmを測る。中房の蓮子は1+4で、四角形をなす中房の周辺蓮子の対角線が、対向する1対の間弁を結んだ線に重なるように配されている。外縁には3重の圏線がめぐる。外縁の高さは2.1cm前後と高い。「山田寺式」の範疇に入る軒丸瓦(F、G、H群)のなかでは蓮弁の形状がもっとも細身である(軒丸62)。

範型は、瓦当縁に範端の存在を示す粘土の段があり(写真72:軒丸69)、瓦当部側面に範端の痕を残す例がないので、瓦当外縁端に終了し、瓦当側面にかぶらないB型範と推測できる。瓦当部と丸瓦部の接合位置は不規則であることから円形範が使用されたと推測できる(第59図)。

粘土素材の範への詰め込み方は、蓮子と中房に粘土を詰め込んだあとに、粘土板を2枚程度重ねて、まず、周縁内部だけを範に密着させている(写真72:軒丸63-1)。それから別の粘土板を外縁部分に巻き付け、瓦当側面を指で押さえつけて範に密着させ、外縁を造り出すとともに、その粘土を瓦当部裏面内部に引っ張り込んで裏面を成形している。瓦当部裏面を取り込んで外縁部分がはずれて出土している例が多いのと、周縁内部と外縁部に接合の継ぎ目が認められるのは、このような範への詰め込み方を物語ると思われる(第59図)。



第59図 軒丸瓦F群の丸瓦部接合位置

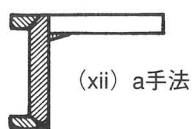
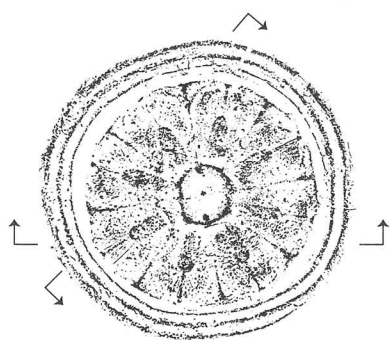
瓦当部裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げるが、下半外周と瓦当部側面には周縁に沿うように成形のときの指頭圧痕が残る。なお、外縁部側縁内面にはナデ調整を施す。

丸瓦部は行基 I 1 Za < x vii > 群とするものである。凸面の叩き目が横方向のナデ調整① 1 1、あるいは不定方向のナデ調整① 1 3 によって完全に消されているため、丸瓦部の特徴を捉えるのは困難である。しかし、軒丸瓦 F 群と接合する丸瓦部の行基 I 1 Za < x vii > 群とするものは、使われる布袋に特徴が認められるので、叩き目が完全に消された行基 I 1 Za 群としか表記できない資料と言っても、特定の抽出識別できる。なお、凹面は調整を施さない③ 0 である。丸瓦部の分割は凸面側から切り込み、側面調整は破面の残る凹面側に広端側から狭端側にヘラケズリ調整② 2 3 を施す。

布袋には「布イ」と「布リ」を足して使う。瓦当部と接合される丸瓦部に認める布袋の綴じ合わせ痕を観察できる資料が少ないので、同じ布袋で造られた丸瓦を観察すると、「布イ」と「布リ」の2つの織り目の粗さの異なる布が、少なくとも広端部で12cm以上の間隔をおいて2ヶ所で縫い足されている(軒丸72)。綴じ合わせ痕を加味して「布袋イ+リ行基1」と表記する(写真72:軒丸72)。なお、この丸瓦部の胎土と、前述の布袋を観察した丸瓦の胎土が必ずしも同質でないことは気をつけねばならないが、軒丸瓦 F 群とする別の瓦当部にはこの丸瓦の胎土に類似するものが確実にある。

瓦当部と丸瓦部を接合するための加工は、丸瓦部広端面に浅いV次形に切り込みを入れる歯車状加工のh1手法を施す(軒丸71~軒丸74)。歯車状の切り込みの間隔は1.2~2.0cmで、深さは0.5cm前後と浅い(写真72:軒丸72-1)。瓦当部裏面には、丸瓦部広端面の歯車状加工の転写が認められる(軒丸62)。また、丸瓦部の広端縁部は凹凸両面に沈線を入れるp手法で加工される。沈線は横方向のものと斜め方向のものがある。ほかに、無加工a手法の瓦当部裏面と無加工a手法の丸瓦部広端面が接合される例も少ないものの認められる(軒丸63)。なお丸瓦部広端が瓦当の外縁端に達するものはまったくなく、外縁端から4cmほど離れたところに丸瓦部広端がくるように接合される。接合位置は高く、凹面側に接合粘土を薄くつけて固定する。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、硬質で特徴的な焼き締まりが認められ、黒色あるいは灰白色を呈する。灰白色のものも断面中央が黒色を呈する場合が多い。



軒丸瓦 G - 行基 I 1 Za < x vi > 群 (第60図 図版11 写真73-軒丸76~軒丸85)

単弁8葉の「山田寺式」の蓮華文軒丸瓦である(軒丸76~軒丸83)。瓦当は、直径が約16.2cm、中房径は約3.4cm、中房での厚さは約2.0cmを測る。蓮弁の中央に通る稜は弁端で逆三角形をなす。弁の上には先端が丸みをもつ子葉を1枚おく。子葉の中央に稜は通らない。子葉の幅は約1.0cm、長さ2.4cmを測る。中房の蓮子は1+4で、四角形をなす中房の周辺蓮子の対角線が、対向する1対

第60図 軒丸瓦G群の丸瓦部接合位置

の間弁を結んだ線に重なるように配される。外縁に3重の圏線がめぐる。外縁の高さは2.2~2.3cmと高い。蓮弁の輪郭はあとに述べる軒丸瓦H群と類似するが、蓮弁の中央に稜が通ることと、子葉の長さが長いことで区別できる(軒丸77)。

範型は、瓦当部側縁に上面から約0.6cmの位置に範端の痕が認められることと、粘土素材の範への詰め込み方からみて、A型範と推定できる。瓦当部と丸瓦部の接合位置が不規則であることから円形範が使用されていたと推測できる(第60図)。

粘土素材の範への詰め込み方は、まず、瓦範上面から測ると約3.5cmの深さのある外縁部分に粘土板を上面で内傾させて詰める。そののち、周縁内部に粘土板を2~3枚重ねて範に密着させている(第60図)(写真73:軒丸76-1)。軒丸瓦F群のもののように外縁と周縁内部が見事にはずれることは少ない。はずれているときは、F群のものとは異なり、外縁部分が瓦当部裏面を取り込んではがれることが少ない。

瓦当部裏面は、調整の痕跡を判別しがたいが、平坦に仕上げられている。なお、外縁部側縁内面にはナデ調整を施す。

丸瓦部については残存状況が悪く、凸面に縦方向のナデ調整①12を施すことと、布袋には「布目」を使うことしか分からないが、同じ布目圧痕の認められる丸瓦を探すと、行基I1Za〈xvi〉群と特定できる。

瓦当部と丸瓦部の接合するための加工は、瓦当部裏面は無加工のa手法である(軒丸76)。丸瓦部広端が瓦当の外縁端に達するものではなく、外縁端から3.5cmほど離れたところに丸瓦部広端がくように接合している。接合位置は高く、接合は凹面側に接合粘土を薄くつけて固定する。

焼成度および色調は、軟質で、灰白色あるいは灰黒色を呈するものと、やや硬質で、明橙黒色を呈するものがある。

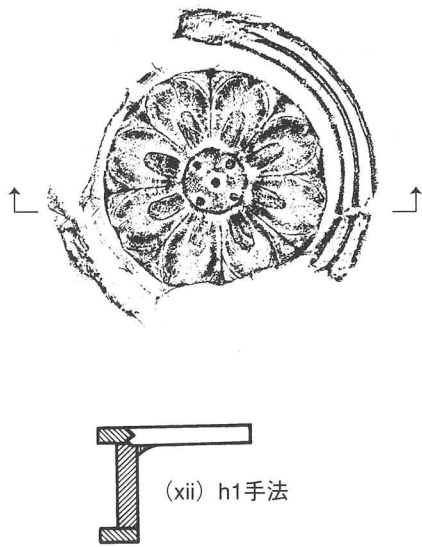
なお、この群の軒丸瓦のなかに1例だけであるが、瓦当部の側面にも四重弧文を施文したものがある(軒丸83;写真73:軒丸83-1)。

軒丸瓦H-行基I1Za〈xvi〉群(第61図 図版11, 12 写真73-軒丸86~軒丸102)

単弁8葉の「山田寺式」の蓮華文軒丸瓦である(軒丸86~軒丸95)。瓦当は、直径が約16.5cm、中房径は約3.4cm、中房での厚さは約2.0cmを測る。蓮弁の中央に稜は通らないが、弁端には間弁のような逆三角形の突起が認められる。弁上に先端が丸みをもつ子葉を1枚おく。子葉の中央に稜は通らない。子葉の幅が1.0~1.2cm、長さは約2.2cmを測る。中房の蓮子は1+4で、四角形をなす中房の周辺蓮子の対角線が、対向する1対の間弁を結んだ線に重なるように配される。外縁に3重の圏線がめぐる。外縁の高さは、多くの場合、2.0cm程度であるが、1.5~2.0cmを測るものが1例ある。外縁と周縁内部とを、水平な面には彫り上げていない瓦範が使われたことを反映しているのであろう。^(註15)瓦当文様は前述の軒丸瓦G群のものと類似するが、ここに記述する軒丸瓦H群とするものは、蓮弁中央に稜が通らず、子葉の長さがG群のものより短いことで区別できる(軒丸86)。

範型は、粘土素材の範型への詰め込み方と、瓦当部側面の上面から約1cmのところ範端の痕を残す例のあることから、A型範と推定できる。ただし、瓦当部と丸瓦部の接合位置の分かる例が1例しかないため、範型の形状は不明である(第61図)。

粘土素材の範への詰め込み方は、まず周縁内部に粘土板を2~3枚重ねて範に密着させ、そのの



第61図 軒丸瓦H群の丸瓦部接合位置

ち、外縁部分に粘土紐を複数本重ねるか、あるいは粘土板を密着させている（第61図）（写真73：軒丸86-1）。

瓦当部裏面は平坦であると言えるが、指頭圧痕が全体に不規則に残る。なお、外縁部側縁内面にはナデ調整が認められる。

丸瓦部の認定は、瓦当部が丸瓦部と接合された状況で出土した資料の残り具合の悪さからきわめて難しい。しかしのちに述べるように、瓦当部と丸瓦部の接合手法が同じ「山田寺式」に属する軒丸瓦F群およびG群のものとは異なる。例えば、重圈文の施された外縁部分だけがはずれているとき、瓦当の外縁上端と瓦当部裏面までの高さが4cm程度あるとすると、外縁上端から2～3cmの高さの部分だけか、あるいは、外縁と丸瓦部だけがついたものを認めることが多い。歯車状の切り込みを施して接合している状態を見せる破片がある（写真73：軒丸100）。

丸瓦部は、その凸面に横方向のナデ調整①11が施され、叩き目が消えているので、行基I1Za群としておく。

今のところ、丸瓦部を造るのに使う布袋には、「布リ」のものが確認されているが（写真73：軒丸101-2）、同じ布目圧痕の認められる丸瓦を探すと、行基I1Za〈xvi〉群と特定できる。

瓦当部と丸瓦部の接合のための加工は、丸瓦部の広端面に浅いV次形に切り込みを入れる歯車状加工のh1手法が施される（軒丸98，軒丸100～軒丸102）。歯車状の切り込みの間隔は2.2～2.3cmで、深さは0.5cm前後と浅い。瓦当部裏面には、丸瓦部広端面の加工の転写と考えられる程度の浅い歯車状の痕跡がある。当然のことながら丸瓦部広端が瓦当の外縁端に達するものではなく、外縁端から2.5～3.5cm離れたところに丸瓦部広端がくるように接合される。接合位置は高く、凹面側に接合粘土を薄くつけて固定する。

焼成度および色調は、軟質で、茶褐色または灰黒色のものと、やや硬質で、灰白色のものがある。

軒丸瓦J - 行基I1Za〈vi〉群・行基I1Za〈xix〉群・行基I1Za〈xxi〉群（第62図 図版13～15 写真74，75 - 軒丸115～軒丸148）

複弁8葉の「川原寺式」の蓮華文軒丸瓦で（軒丸115～軒丸145）、錦織細井廃寺複弁蓮華文軒丸瓦A類（小林1984）や龍泉寺端丸瓦B類（中村1981，1982）と同範とされている。瓦当は、直径が約17.5cm、中房径は約7.1cm、中房での厚さは2.5～2.8cmを測る。中房の蓮子は1+5+10で、中房の外側には突線がめぐり、外縁には内側に突線がめぐり、その外側に中心からみて右側に傾斜する面違鋸歯文を施す（写真74：軒丸116-1）。

範型は、瓦当部側面の上面から約1.1cmの位置に範端の痕を残す例のあることから、A型範と推測できる（写真75：軒丸127-1）。また、瓦当部と丸瓦部の接合位置が不規則であることから、円形範が使用されていたと推測できる（第62図）。

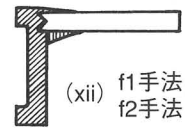
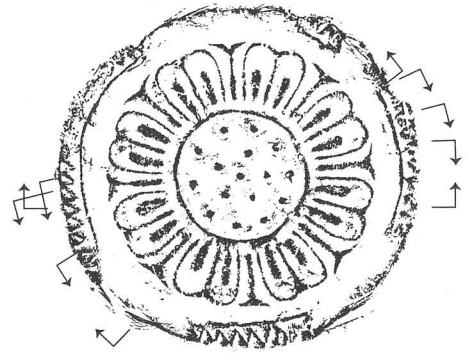
粘土素材の範への詰め込み方は、粘土板を2枚程度重ねて範に密着させている。

瓦当部裏面は、中央に不定方向のナデ調整を、下半外周には外縁に沿うようにナデ調整を施す。平坦に仕上げられるが、指頭圧痕が残る。

丸瓦部は今のところ、行基 I 1 Za < vi > 群 (軒丸147)、行基 I 1 Za < x ix > 群 (軒丸146)、行基 I 1 Za < x x i > 群 (軒丸148) とするものの3種類が認められる。凸面にはすべて縦方向のナデ調整① 1 2を施し、叩き目が消えている。側面調整は、截面と破面とも平行するヘラケズリ調整② 2 1で削り取るものと、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整② 2 4を施すものがある。

行基 I 1 Za < vi > 群とする丸瓦部を造るのに使われる布袋には、「布ル」と「布カ」を使う(写真75:軒丸123-1, 軒丸147-3)。また行基 I 1 Za < x ix > 群とするものには「布ソ」を使う。さらにこれらのほかにも、摩滅のために布目を確認できない資料がある。それは「布ル」、「布カ」および「布ソ」の布目圧痕をもつものと比較すると、瓦の色調、胎土などでまったく異なる様相を示す。すなわち、黄褐色を呈し、粒子の大きなくさり礫の含有が目立つという特徴を認め、「布ソ」の布袋が使われている行基 I 1 Za < x x i > 群とするものに類似する。行基 I 1 Za < vi > 群に使われる布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋ル行基 1」と表記する(写真75:軒丸147-3)。なお、この行基 I 1 Za < vi > 群とする丸瓦部は、凸面の叩き目が縦方向になで消されているが、ナデ目の下に正格子叩き [Br] が施されていたことが確認されている。なぜなら、この行基 I 1 Za < vi > 群 (軒丸147) と行基 I 1 Za [Br] 群 (写真97:行基45-2) に使用された布袋の綴じ合わせ痕と綴じ目の破れ方が共通するからである。つまり、同じ布袋を使ったものが行基 I 1 Za [Br] 群とする丸瓦のなかに確実に存在するので、同じ群とする丸瓦部も同じ叩き目をもつと考えたのである。粘土板の重ね目も同じく「S型」である。また、「布カ」の布袋を使って造られた丸瓦部(写真75:軒丸123-1)に、凸面の叩き目が縦方向になで消されているにもかかわらず、ナデ目の下に正格子叩き [Br] を判じるのは、同じ布袋を使った丸瓦(行基41, 行基42)に正格子叩き [Br] の叩き目を認めるからである。なお、行基 I 1 Za [Br] 群と表記する丸瓦は、型木をはずしてからの分割には凸面側から切り込む。

瓦当部と丸瓦部の接合は、すべて丸瓦部広端面にV字形あるいはU字形の歯車状の切り込みを入れるh1手法(軒丸124, 軒丸127, 軒丸143, 軒丸146)、あるいはh2手法(軒丸115, 軒丸117, 軒丸119, 軒丸120, 軒丸122, 軒丸123, 軒丸125, 軒丸128, 軒丸139, 軒丸140, 軒丸147, 軒丸148)の加工によっている。歯車状加工としては、軒丸瓦F群あるいは軒丸瓦H群とするもので認められるよりも深く切り込む。また、接合のときに丸瓦部を、瓦当部裏面にかなり深く押し込んだことが、歯車状加工の転写から分かる。丸瓦部広端が瓦当の外縁端に達するものではなく、外縁端から3.0cm離れたところにある。接合位置は高いが、接合粘土は凹凸両面に足すことが多い。とりわけ凹面では、粘土を新たに足すかどうかは別として、丸瓦部広端部から狭端部に、粘土が9.0cm近く延ばさ



第62図 軒丸瓦J群の丸瓦部接合位置

れて、丸瓦部の凹面の布目圧痕が見えなくなっている。この接合粘土を厚く、長く延ばす状況は、A群からH群とする軒丸瓦と対比して、この群に特徴的であると言える（写真75：軒丸123）。

焼成度はやや軟質で、色調は、灰白色、黄褐色あるいは明橙褐色を呈する。

軒丸瓦K－玉縁Ⅲ1 Za群（図版16 写真76－軒丸149）

複弁8葉の「川原寺式」の蓮華文軒丸瓦である（軒丸149）。瓦当は、直径が約15.2cm、中房径は約7.0cmを測る。軒丸瓦J群と同じく「川原寺式」の範疇に入るが、軒丸瓦J群のものよりも直径が小さく、また中房の蓮子の数、外縁の施文方法に違いが認められる。すなわち、中房の蓮子は1+5+9である。また、瓦当面の直径が小さいのに、中房の直径がほぼ同じことから、蓮弁は圧縮されたように短く見える。ただし、子葉の大きさは軒丸瓦J群とするものと同じ大きさである。外縁の鋸歯文は、軒丸瓦J群のものとは傾斜方向が逆になり、中心からみて左側に傾斜する面違鋸歯文が施される。また、軒丸瓦J群のように外縁の内側に突線がめぐらない（写真76：軒丸149-2）。

軒丸瓦K群とする資料は確認総数が3点と少ないので、範傷の進行状況などを把握できていない。また、丸瓦部と接合されて軒丸瓦となる瓦当部の例は、外縁の鋸歯部分の破片1点を確認するだけなので、瓦当部と丸瓦部の接合がU字形に切り込む歯車状加工のh2手法を用いることが確認できる^(註16)だけである。また、接合位置は外縁端に達しないものの、外縁端から0.9cm前後と外縁端に近く、その位置も高い。一本作りの資料には瓦当面が一部欠損しているものの、ほぼ完形品が1点あるので、ここではその資料についてだけ記述する。それは軒丸瓦K－玉縁Ⅲ1 Za群と表記する（軒丸149）。

瓦範には範傷が認められ、範傷は外区の周縁部、つまり外縁と蓮弁のあいだに3ヶ所、木目に沿って認められる。このことから瓦範は柁目材を使用していたことが推測できる（写真76：軒丸149-2）。範傷がそれ以上あるどうかは、瓦当面の一部に欠損があるため定かでない。

横置型一本作りのもので、瓦当部の側面を、縦方向のヘラケズリ調整で形を整えたのち、横方向のナデ調整で仕上げる。瓦当部裏面は平坦である。布目圧痕を完全に消し、瓦当部が厚く、中房での厚さが約4.2cmを測るものがあるが、布目圧痕がわずかに残り、厚さも2.8cmと薄いものもある。

丸瓦部は玉縁Ⅲ1 Za群と表記する。凸面には、狭端側から広端側に縦方向のヘラケズリ調整①32を、筒部だけでなく玉縁部にも施す。側面調整は②31で載面・破面に平行する平坦面を造り出す。凹面には、丸瓦部の広端側から半分以上に横方向のナデ調整③1を施し、布目圧痕を消す。狭端部から玉縁部にかけて、瓦当部側面まで布目圧痕が残る（写真76：軒丸149-6）。布には「布ツ」を使う。

完形品の例では、焼成度は硬質で、色調は灰青色であるが、ほかの一本作りの例では軟質で、茶褐色である。1点の接合例は軟質で、灰白色である。

軒丸瓦L－玉縁Ⅰ321 Za [J1b] 群・玉縁Ⅲ1 Za群（図版16～18 写真76, 77－軒丸150～軒丸166）

複弁8葉の「平城宮式」の蓮華文軒丸瓦である（軒丸150～軒丸164）。瓦当は、直径が約15.8cm前後、中房径は約3.8cm、中房での厚さは3.5～5.5cmを測る。中房の蓮子が1+6、外区に珠文がめぐり、外縁に突線の鋸歯文が配されている。瓦当面の文様は「平城宮6304型式」に分類されるが、平城宮出土瓦とは同範ではないという（井西ほか2001：66頁）。

軒丸瓦L群とするものも残存状況が悪く、丸瓦部との接合状況などを観察できる資料はほとんど

ない。しかし、確実に瓦当部と丸瓦部が接合される例（軒丸150～軒丸153，軒丸165，軒丸166）と一本作りの例（軒丸156～軒丸162）が存在することは確認できる。

瓦範は、範傷の有無、および進行状況から時間差の使用が窺え、すなわち、範傷の認められない0段階（軒丸150，軒丸153）、範傷が蓮子と珠文に認められる1段階、範傷が瓦当面を横断して認められる2段階（軒丸156～軒丸162；写真77：軒丸156-1）に細分できる。また範型は、瓦当部側面に範端の痕が観察できるのでA型範と言える。

丸瓦部と接合されて軒丸瓦となる瓦当部の例（軒丸151）は、確実に接合状況を観察できるものはない。しかし、瓦当部がはずれてはいるものの出土状況も併せみると、軒丸瓦L群と接合すると確実に推測させる例があり、玉縁Ⅰ321Za [J1b] 群とするもの（軒丸165，軒丸166）が認められる。

玉縁Ⅰ321Za [J1b] 群とする丸瓦部を造るのに使われる布袋には、「布レ」を使う（写真77：軒丸166-2）。綴じ合わせ痕から「布袋レ玉縁3」と表記する（軒丸165）。

瓦当部と丸瓦部の接合は、丸瓦部広端面に歯車状のU字状切り込みを入れるh2手法の加工によるもの（軒丸165～軒丸166）と、無加工のa手法のもの（軒丸150）がある。

一本作りの丸瓦部は玉縁Ⅲ1Za群にだけ確認している（軒丸156，軒丸162）。範傷が2段階のもので、横置型一本作りで造られている。凸面には縦方向のヘラケズリ調整①32を施す。側面調整は②31であるが、凹面側にも面取りが施される。凹面には縦方向のナデ調整③1を施し、布目圧痕はほとんど消えているが、かすかに残っているところから「布ツ」の織り目を判じる（写真77：軒丸156-2）。布目圧痕および造瓦技術を併わせ考えて、玉縁Ⅲ1Za群と表記するべきであると思われる。

焼成度および色調は、硬質で、灰青色あるいは黄褐色のもの、やや硬質で、灰黒色のもの、軟質で、茶褐色のものがある。

2 軒平瓦

軒平瓦は瓦当面の造り出し方によって、まず挽き型によるもの（AA）と、瓦範によるもの（P）に分け、その瓦当部に接合される平瓦部についての平瓦の属性組成表記を付加することで「群」を定義する。平瓦の属性組成表記には、圧痕から窺う桶の特徴と凸面に残る叩き目属性を大きく関与させるところであるが、その叩き目が何らかの原因で消えていて認識できないものには、Zaという表記を与えておくことになる。しかし、叩き目属性だけを見る限りではZaとする資料も、下位属性とする他の属性のいくつかを併わせ考察することによって、Zaのなかの異なった群として認識できることがある。Zaのあとに〈i〉～〈iii〉と付して、その別を示しておく。

軒平瓦AA1-平瓦Ⅱ0Za〈i〉群（図版19 写真78-軒平1～軒平6）

四重弧文の軒平瓦である（軒平1～軒平6）。瓦当面の厚さは3.5cmを測る。瓦当面の幅は不明であるが、接合される平瓦部と同じ群と認められる平瓦の広端幅が約31.2cmを測るので、軒平瓦AA1群の瓦当面の幅もその数値に近いと推測できる。四重弧文のすべての弧線の幅は0.6～0.7cmで、ほぼ同じ太さである。第1・第4弧線は第2・第3弧線よりも高い。その断面形は丸みをもつ。凹線は、幅が0.3cm、深さは0.3cmを測り、底に平坦面をもつ（写真78：軒平4-1）。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは5.5～6.2cmで、顎の厚さは0.6～1.5cmを測る。

接合される平瓦部は平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群と表記できるものである。完形品はない。布袋に「布リ」を使う（写真78：軒平4-2）。平瓦部の凹面の側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る（軒平4）。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、瓦当部近くをヘラケズリ調整することがあるほか、粘土板の重ね目にナデ調整を施す。同じく凸面には、顎部をも含めて横方向のナデ調整①11を施す。ところで、「布リ」の布袋を使って造られる平瓦には、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群、平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群、平瓦Ⅱ0 Za [Ha] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Ga] 群とするものがあるが、胎土の見かけをも併わせ見ると、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群と表記するものが接合されると思われる。

顎として付け足される粘土板の平瓦部との接合には、平瓦部の接合面にs手法と呼ぶ横方向への比較的強いナデ調整が3回程度施されるようである。顎部の方の接合面にそのナデ調整が転写された痕跡が認められる（軒平1）。

桶をはずしてからの分割は、凹面側から厚さのおよそ半分まで切り込みを入れて、4枚に分割する。そののちに、分割破面だけに狭端側から瓦当の付く広端側に、w手法と呼ぶヘラケズリ調整を施す。この破面調整で、桶をはずしてからの切り込みの方向が分からなくなっている。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや硬質で黑色あるいは灰色を呈するものと、軟質で灰白色あるいは黄灰色を呈するものがある。

なお、軒平瓦A A 1群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦G群である。

軒平瓦A A 2-平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群（図版19 写真78-軒平7～軒平10）

四重弧文の軒平瓦である（軒平7～軒平10）。瓦当面の厚さは3.1cm前後を測る。瓦当面の幅は不明である。四重弧文のすべての弧線の幅は0.6cm前後で、ほぼ同じ太さである。その断面形は丸みをもつ四角形である。凹線は幅が0.4cm、深さは0.5cmを測り、底はU字状を呈する（写真78：軒平8-1）。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは5.0～5.6cmで、顎の厚さは0.9～1.3cmを測る。

接合される平瓦部は平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群と表記できるものである。完形品がないため布目圧痕が観察できるだけである。布袋には「布リ」を使う。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、瓦当部近くをヘラケズリ調整するものがある。凸面には、顎部をも含めて横方向のナデ調整①11を施す。ところで、「布リ」の布袋を使って造られた平瓦には、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群、平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群、平瓦Ⅱ0 Za [Ha] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Ga] 群とするものがあるが、胎土の見かけをも併わせ見ると、平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群とするものが接合されると思われる。

顎として付け足された粘土板の平瓦部との接合には、平瓦部の接合面にs手法と呼ぶ横方向への比較的強いナデ調整が施されたようである。顎部の方の接合面にそのナデ調整が転写された痕跡が認められる（軒平10）。

桶をはずしてからの分割については観察できる資料がないが、分割後には、狭端側から瓦当の付く広端側へw手法と呼ぶヘラケズリ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや硬質で、めくれるように剥離するもので黑色あるいは黄灰色を呈するものと、やや軟質で、黑色を呈するものがある。

なお、軒平瓦A A 2群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦F群である。

軒平瓦A A 3-平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群 (図版19 写真78-軒平11~14)

四重弧文の軒平瓦である(軒平11~14)。瓦当面の厚さは3.6cmを測る。瓦当面の幅は不明であるが、接合される平瓦部と同じ群と認められる平瓦の広端幅が約31.2cmを測るので、軒平瓦A A 3群の瓦当面の幅もその数値に近いと推測できる。四重弧文のすべての弧線の幅は0.6cm前後で、ほぼ同じ太さである。その断面形は強い丸みをもつ。凹線の幅は0.4cm、深さは0.3cmを測り、底に平坦面をもつ(写真78:軒平14-1)。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは5.7~6.7cmで、顎の厚さは0.9~1.7cmを測る。

接合される平瓦部は平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群と表記できるものである。完形品はない。布袋には「布り」を使う(写真78:軒平14-2)。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、瓦当部近くをヘラケズリ調整するものがある。凸面には、顎部も含めて横方向のナデ調整①11を施す。ところで、「布り」の布袋を使って造られた平瓦には、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群、平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群、平瓦Ⅱ0 Za [Ha] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Ga] 群とするものがあるが、胎土の見かけをも併わせ見ると、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群が接合されると思われる。

顎として付け足された粘土板の平瓦部との接合には、平瓦部の接合面に横方向へのナデ調整が認められるが、それほど強くおこなわれていない。顎部の方の接合面に転写された痕跡に、そのナデ調整の程度が見て取れる。接合面の準備はとくにされなかったと思われ、それをa手法と呼ぶ。

桶をはずしてから分割については観察できる資料がないが、分割後には、狭端側から瓦当の付く広端側へ、側面にw手法と呼ぶヘラケズリ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉍物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は、やや軟質で、色調は灰白色、黄灰色、黒灰色を呈する。

なお、軒平瓦A A 3群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦H群である。

軒平瓦A A 4-平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群 (図版19 写真79-軒平15~軒平19)

四重弧文の軒平瓦である(軒平15~軒平19)。瓦当面の厚さは3.2~3.4cmを測る。瓦当面の幅は不明であるが、接合される平瓦部と同じ群と認められる平瓦の広端幅が約31.2cmを測るので、軒平瓦A A 4群の瓦当面の幅もその数値に近いと推測できる。四重弧文のすべての弧線の幅は0.6cm前後で、ほぼ同じ太さである。その断面形は四角形に近い。第2・第3弧線の中央に沈線が認められる例もある。凹線は、幅が0.4cm、深さは0.2cmを測り、底に平坦面をもつ(写真79:軒平17-1)。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは5.7~6.4cmで、顎の厚さは0.7~1.0cmを測る。

接合される平瓦部は平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群と表記できるものである。完形品はない。布袋には「布り」を使う(写真79:軒平17-2)。平瓦部の凹面は基本的には調整を施さない③0であるが、瓦当部近くをヘラケズリ調整するものがある。凸面には、顎部をも含めて横方向のナデ調整①11を施す。ところで、「布り」の布袋を使って造られた平瓦には、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群、平瓦Ⅱ0 Za〈ii〉群、平瓦Ⅱ0 Za [Ha] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Ga] 群とするものがあるが、胎土の見かけをも併わせ見る

と、平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群が接合されると思われる。

顎として付け足された粘土板の平瓦部との接合には、平瓦部の接合面に横方向のナデ調整が認められるが、それほど強くおこなわれていない。顎部の方の接合面に転写された痕跡に、そのナデ調整の程度が見て取れる。接合面の準備はとくにされなかったと思われ、それをa手法と呼ぶ。

桶をはずしてからの分割については観察できる資料がないが、分割後には、狭端側から瓦当の付く広端側に、側面にw手法と呼ぶヘラケズリ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや軟質で、灰白色あるいは黄灰色を呈するものと、硬質で、暗灰色、暗灰青色や灰色を呈するものがある。

なお、軒平瓦AA4群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦H群である。

軒平瓦AA5-平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bp] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Br] 群・平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群 (図版20, 21 写真79~82-軒平20~軒平32)

四重弧文の軒平瓦である(軒平20~軒平32)。瓦当面の幅が34.0cm、瓦当面の厚さは3.65~4.2cmを測る。四重弧文のすべての弧線の幅は0.6~0.9cmで、ほぼ同じ太さである。その断面形は四角形またはカマボコ形を呈する。凹線の幅は0.2~0.3cm、深さは0.1~0.2cmを測り、底面は丸みをもつものが多い(写真79:軒平20-1)。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは6.2~6.7cmで、顎の厚さは0.6~0.9cmを測る。

接合される平瓦部には、平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群(軒平20~軒平22, 軒平26~軒平28)、平瓦Ⅱ0 Za [Bp] 群(軒平29~軒平31)、平瓦Ⅱ0 Za [Br] 群(軒平23, 軒平32)、平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群(軒平24, 軒平25)と表記できるものがある。全長が42.5cm、広端幅は34.0cm、狭端幅は33.5cmを測る。布袋には「布ル」と「布カ」を使う。「布ル」を使用した布袋は綴じ合わせ痕から「布袋ル平1」、「布カ」を使用した布袋には綴じ合わせ痕が観察できる資料がないので「布袋カ平0」と表記する。ただし、平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群と表記する平瓦部の接合される軒平瓦を素材にして造った螭羽瓦-軒平瓦AA5-平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群のなかに「布袋カ平2」と表記できる布袋を使用した例(螭羽2)がある。凹面調整を施さない③0であるが、瓦当部近くをヘラケズリ調整するものがある。接合される平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Bp] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Br] 群とする平瓦部の凸面には、t11手法と呼ぶ正格子叩き [Bb] や、t13手法と呼ぶ正格子叩き [Bp]、t14手法と呼ぶ正格子叩き [Br] が施されると推測できるが、顎部をも含めて横方向へのナデ調整①11を施すので、叩き目がほとんど残っていない。顎として付け足された粘土板と肌別れした平瓦部の方の接合面に残ったそれらの叩き目だけからしか判別できない。ただし、この接合面に、a手法と呼ぶ叩き目の認められないものも存在するので、叩き目が完全にナデ調整で消されてしまっていて平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群とするべきものも接合されたと思われる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に沿って、凹面側から厚さのおよそ半分まで切り込みを入れて、4枚に分割する。そののちに、分割破面だけに狭端側から瓦当の付く広端側にヘラケズリ調整を施し、瓦当の側面にも、y手法と呼ぶヘラケズリ調整で凸面側へ面取りする。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒とし

て含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや軟質で、灰白色、黄灰色、黒灰色や灰褐色を呈するのものと、硬質で、暗灰色あるいは暗灰青色を呈するものがある。

なお、軒平瓦A A 5群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦J群である。

軒平瓦A A 6-平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ck] 群・平瓦Ⅱ0 Za 〈iii〉群 (図版22 写真82, 83-軒平33~軒平38)

四重弧文の軒平瓦である(軒平33~軒平38)。瓦当面の厚さは約3.7cmを測る。瓦当面の幅は不明であるが、接合される平瓦部と同じ群と認められる平瓦の広端幅が31.2~32.2cmを測るので、軒平瓦A A 6群の瓦当面の幅もその数値に近いと推測できる。四重弧文のすべての弧線の幅は0.7~0.8cmで、ほぼ同じ太さである。その断面形は四角形またはカマボコ形を呈する。凹線の幅は、0.15~0.2cm、深さは約0.1cmを測り、底面は丸みをもつものが多い(写真83:軒平35-1)。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは5.7~6.9cmで、顎の厚さは0.7~1.0cmを測る。

接合される平瓦部には、平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群(軒平34~軒平38)、平瓦Ⅱ0 Za [Ck] 群(軒平33)、平瓦Ⅱ0 Za 〈iii〉群と表記できるものがある。全長が41.0~41.5cm、広端幅は31.2~32.2cm、狭端幅は29.0cmを測る。布袋には「布ソ」を使う(写真82, 83:軒平33-2, 軒平35-2)。平瓦部の凹面は基本的には調整を施さない③0であるが、瓦当部近くにヘラケズリ調整を施すことがある。接合される平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群とするものの凸面には、t12手法と呼ぶ正格子叩き [Bh] が、同じく平瓦Ⅱ0 Za [Ck] 群とするものの凸面には、t21手法と呼ぶ斜格子叩き [Ck] が施されたと推測されるが、顎部をも含めて横方向へのナデ調整①11を施しているため、叩き目がほとんど残っていない。しかし、顎として付け足された粘土板と肌別れした平瓦部の方の接合面に叩き目が残る。

桶をはずしてからの分割は、凹面側から厚さのおよそ半分まで切り込みを入れて、4枚に分割する。分割後は調整を施さない②0と、分割破面だけを狭端側から瓦当の付く広端側にヘラケズリ調整するものとあるが、後者については、さらに瓦当の側面にも、y手法と呼ぶヘラケズリ調整で凸面側に面取りする。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は黒褐色、黄褐色や黄褐色白色を呈する。

なお、軒平瓦A A 6群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦J群である。

軒平瓦A A 7-平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bq] 群・平瓦Ⅱ0 Za 〈iii〉群 (図版22 写真83, 84-軒平39~軒平44)

四重弧文の軒平瓦である(軒平39~軒平44)。瓦当面の厚さは3.2~3.3cmを測る。瓦当面の幅は不明であるが、接合される平瓦部と同じ群と認められる平瓦の広端幅が約33.7cmを測るので、軒平瓦A A 7群の瓦当面の幅もその数値に近いと推測できる。四重弧文のすべての弧線の幅は0.5~0.6cmで、ほぼ同じ太さである。その断面形は頂部の丸い三角形状を呈する。凹線は、幅が0.35~0.5cm、深さは0.1~0.2cmを測り、底面は丸みをもつ(写真83:軒平41-1)。瓦当面に施文する挽き型は、瓦当面を正面から見ると、右から左への方向に動かしている。顎部の形態は段顎で、顎の長さは6.2~6.8cmで、顎の厚さは0.7~1.0cmを測る。

接合される平瓦部には、平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群（軒平42）、平瓦Ⅱ0 Za [Bq] 群（軒平43）、平瓦Ⅱ0 Za <iii> 群（軒平39～軒平41、軒平44）と表記できるものがある。全長が42.5cm、広端幅は33.7cm、狭端幅は29.7cmを測る。今のところ、平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Bq] 群については、おのおの1点ずつしか確認できていない。布袋には「布ル」、「布カ」と「布ソ」を使う。「布ル」の布袋（軒平41）は綴じ合わせ痕から「布袋ル平1」と、「布カ」の布袋（軒平43）も綴じ合わせ痕から「布袋カ平1」と表記する。「布ソ」の布袋は綴じ合わせ痕の観察できる資料がないことから「布袋ソ平0」と表記する。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、瓦当部近くにヘラケズリ調整を施すことがある。接合される平瓦Ⅱ0 Za [Bh] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Bq] 群とするものの凸面には、t12手法と呼ぶ正格子叩き [Bh]、t14手法と呼ぶ正格子叩き [Bq] を施したと推測されるが、顎部をも含めて横方向へのナデ調整①11を施していて、叩き目がほとんど残っていない。しかし、顎として付け足された粘土板と肌別れした平瓦部の方の接合面に叩き目が残る。この接合面に叩き目がないものにa手法を認めて、平瓦Ⅱ0 Za <iii> 群とするものも接合されたと推測できる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に沿って、凹面側から厚さのおよそ半分まで切り込みを入れて、4枚に分割する。そののち、分割破面だけを狭端側から瓦当の付く広端側にヘラケズリ調整を施し、さらに瓦当の側面をy手法と呼ぶヘラケズリ調整で凸面側に面取りする。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は黒褐色、黄褐色、黄褐白色あるいは茶褐色を呈する。

なお、軒平瓦A A 7群と類似する胎土を観察する軒丸瓦は軒丸瓦J群である。

軒平瓦P - 平瓦Ⅲ2 Za群・平瓦Ⅲ2 Za [J2aj] 群・平瓦Ⅲ2 Za [J2as] 群 (?) (図版23 写真84 - 軒平45～軒平53)

平城宮6664型式系の唐草文の軒平瓦である（軒平45～軒平53）。瓦当面の幅は26.5cm前後、瓦当面の厚さは6.2cmを測る。花頭形のなかに中心飾りをもち、3回反転の均整唐草文の文様をもつ。唐草第3単位の先端が脇区界線に接する。中心飾りの花頭基部は上外区基部界線に接しない。外区には珠文が配されている。

顎部の形態は、ほとんどが曲線顎であるが、段顎もある。段顎の場合は、顎の長さが5.5～6.5cm、顎の厚さは1.2～1.5cmを測る。なお曲線顎と段顎の違いは、瓦当部をヘラケズリ調整およびナデ調整で成形するときの最終的な手の動きの違いを反映する。最初の段階では、ともに平瓦部の上面と下面を挟み込むように粘土を貼り足す。

接合される平瓦部の大半は、凸面に縦方向のナデ調整①12を施していて、叩き目がほとんど残らないので、平瓦Ⅲ2 Za群としか属性組成表記ができない。しかしそのなかにも、凸面の縄目叩きを [J2aj] と特定できるものが含まれ、それを平瓦Ⅲ2 Za [J2aj] と表記する（写真84：軒平47-1）。その叩き目は、瓦当部端から狭端部への16.0cmほどの範囲には残っておらず、それより狭端部側に認められる。また、瓦当部が残されていないものの、凸面に縄目叩き [J2as] の認められたものがある。この軒平瓦に接合される可能性がきわめて高いと思われる。

平瓦部の凹面には、瓦当部近くに横方向のヘラケズリ調整を施し、またナデ調整を施す。そのため、布目圧痕は消える。しかし瓦当部を造り出すために貼り足した粘土の下に布目圧痕が認められ、

それから布袋に「布ツ」を使うことが分かる（写真84：軒丸47-3）。

瓦当の側面にはヘラケズリ調整を施していて、w手法を認める。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、良好、硬質で、灰青色、黄灰色あるいは茶褐色を呈するものと、やや不良、軟質で、黄橙色、黒茶褐色あるいは灰白色を呈するものがある。

3 丸瓦

3-1 玉縁式

玉縁 I 2 Za群（図版24, 25 写真60, 85-玉縁1～玉縁7）

軒丸瓦A群に接合される丸瓦部（軒丸1～軒丸13）に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。

全長が40.0cm前後、広端幅は23.0cm前後、玉縁幅は約18.5cm、そして連結部の幅は1.5～2.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.5～2.0cmである。

直径が約13.0cmの円筒形の型木に上端を絞った布袋をかぶせ（写真85：玉縁2-1）、その上に型木よりも少し長い粘土板を巻き付け、型木からはみ出た部分を折り曲げて筒部を造る。玉縁部は、丈の短い粘土紐を、先に造り出しておいた筒部の折曲げ面の上に積みあげて造るもの（玉縁1, 玉縁2, 玉縁4）と、筒部を造るときに型木からはみ出た部分を折り曲げないで、型木より少し出た粘土板の内側に粘土紐を付加して造るもの（玉縁3）がある。玉縁部の長さは5cm前後を測るものが多いが、もっとも短いものでは3.5cm、長いものでは7.0cmを認める。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、型木器具痕は認められない。糸切り痕は左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に同心円当て具痕が認められる③3とするべきものもある（写真60：玉縁6, 玉縁7）。また稀に、布袋の綴じ合わせ痕をなで消したり、部分的に縦方向にナデ調整を施す例も認められる。広端縁をヘラケズリ調整で面取りするもの（玉縁1）と、しないもの（玉縁3）がある。

玉縁部の凹面は、玉縁部を造り出すときの粘土紐の連結の仕方の違いにかかわらず、2回以上に分けて左から右へのヘラケズリ調整を施す。そのとき、筒部が付かない方の端部は、えぐり取るように削られるので、筒部が付く端部より薄いものが多い。

布袋には「布ハ」と「布ヌ」を使う。「布ハ」の布袋は綴じ合わせ痕から「布袋ハ玉縁1」、「布袋ハ玉縁2」、「布袋ハ玉縁3」と表記するが、「布ヌ」の布袋には綴じ合わせ痕が確認できていないので「布袋ヌ玉縁0」と表記する。

この群とする丸瓦には、筒部の凸面に対する調整手法に違いがあり、不定方向の全面ナデ調整①14と横方向のカキ目調整①41の2手法（玉縁1）が、今のところ、確認できている。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に、2つに切断する（写真85：玉縁2-2）。そのあとに、筒部の側面にできた截面を深く削る凹凸両面側へのヘラケズリ調整②24を施す。しかし凹面側だけに深く削るヘラケズリ調整②23を施すものもある。凹面の両側縁部を面取りするヘラケズリ調整は、玉縁部と筒部で一気ではなく、それぞれの部分を別々に施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は細かい。焼成度および色調は、軟質で、灰白色を呈するものが圧倒的に多いが、黒灰色や黒褐色を呈するものもある。また、堅緻な感じを与えて須恵質で、灰青色を呈するものも量的には少ないものの認められる。

玉縁 I 31 Za [J1b] 群 (図版25 写真86-玉縁8)

全長が37.3cm前後、狭端幅は22.0cm前後、広端幅は24.5cm前後、玉縁幅は約17.8cm、連結部の幅は約1.5cm、そして玉縁長は4.0~4.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.2~1.8cmである。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。玉縁部と筒部の境目は明確な段状を呈する。玉縁部は、上端部の直径が約8.0cm、下端部の直径は約9.0cm、長さは約5.0cmを測る。筒部の法量は、狭端部の直径が約11.5cm、広端部の直径は約13.5cmを測る。まず玉縁部にあたる粘土板を巻き付けたのち、その下辺に0.8cm前後の幅で筒部を形成するための粘土板を上から重複させて、型木の上の全体形を巻き付け成形する(写真86:玉縁8-1)。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いては、基本的には凹面調整を施さない③0であるが、部分的に縦方向のナデ調整③1を施す例も少量認められる。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ玉縁1」と表記する。

凸面は、成形のときについた叩き目をナデ調整①1がほぼ完全にすり消すが、筒部では、ナデ目の下に縄目叩き [J1b] の痕跡がかすかに残る。玉縁部では、横方向のナデ調整①1 2が観察できるだけで、叩き目については何も言えない。

型木をはずしてからの分割は、玉縁部側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは、分割後の側面調整で分からなくなっている。分割後には、側面にヘラケズリ調整を施すが、玉縁部では凹面側に傾けて削る②2 3が、筒部では玉縁部のつく側から広端側へと凹凸両面側に傾けて削る②2 4を施す。なお、凹面の面取り調整を玉縁部と筒部で別々にしたか、あるいは両部を一気にしたかは、残存資料からは判別できない。丸瓦としての両端部、すなわち玉縁部の上端縁部と筒部の広端縁部は、凹面にナデ調整③1が施される。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は堅緻な感じを与え、色調は黄褐色を呈する。

玉縁 I 321 Za [J1a] 群 (図版26 写真86, 160-玉縁9~玉縁12)

完形品がないため、全長、狭端幅などの法量は不明である。広端幅が23.5cm前後、玉縁幅は約17.0cm、連結部の幅は約1.0cm、そして玉縁長は3.5~4.5cmを測る。全長は、推定値として33.0cm以上であるとは言える。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。玉縁部と筒部の境目に明確な段差はないものの、強い屈曲部をもつ。玉縁部は、上端部の直径が約8.5cm、下端部の直径は約9.5cmを測る。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高(肩部が外に突き出る位置の玉縁部上端からの距離)と凹面屈曲点高(やや感覚的な判定ではあるが、強い屈曲をもつ凹面の曲がり点の玉縁部上端からの距離)との差は2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いては、基本的には凹面調整を施さない③0である。

型木器具痕には2種類がある。広端縁から狭端側に18.5cmほど上がる場所に認められる、ほぼ5.0cm×3.0cmの四角形の突出（玉縁12）や窪み（写真86：玉縁10-1）と、広端縁から狭端側に3.0～4.0cm上がる場所に認められる、ほぼ3.0cm× $17.5 + \alpha$ cmの長方形板状の突出（写真86：玉縁10-2）である。これらの2種類の型木器具痕は、1枚の瓦に併存する場合と、1種類だけを認める場合がある。取り付け位置から、ともに1つの型木に付けられていた器具の部分の反映痕と推測できる。^(註18)

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ玉縁2」と表記する。

凸面には、玉縁部、筒部ともに縄目叩き [J1a] を判じるが、玉縁部では横方向のナデ調整でほぼ完全に消される。筒部では、基本的にはすり消さずに縄目叩きを残すが、すり消す例も少量ながら認められる。広端部では横方向にすり消すものが多い。

型木をはずしてからの分割は、広端側から玉縁部側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れるか、凸面側からかは、分割後の側面調整で分からなくなっている。分割後には、側面と広端面にヘラケズリ調整を施す。玉縁部の側面調整は、資料の残存状況が悪いために不明であるが、筒部には、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す（玉縁12）。^(註19) さらに広端面に右から左へのヘラケズリ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質のものが多く、それらは灰青色、暗灰色あるいは明茶色を呈するが、軟質で明橙色を呈するものもある。

玉縁 I 321 Za [J1b] 群（図版26, 27 写真87-玉縁13~玉縁16）

この群とする丸瓦は、軒丸瓦L群に接合される丸瓦部に認められるのと同じ手法で造られている（図版18：軒丸165）。

全長が39.0cm前後、狭端幅は22.5cm前後、広端幅は24.5cm前後、玉縁幅は約17.0cm、連結面の幅は0.8~1.0cm、そして玉縁長は約6.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.5cm前後である。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。玉縁部と筒部の境目に明確な段差はないものの強い屈曲部をもつ。玉縁部は、上端部の直径が約8.0cm、下端部の直径は9.5cmを測る。筒部は、狭端側の直径が約10.0cm、広端側の直径は約11.0cmである。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高と凹面屈曲点高との差はほとんどなく、また、肩部にあたる粘土の貼り足しが少ないために連結幅は狭い。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。糸切り痕は左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いては、基本的には凹面調整を施さない③0である。

型木器具痕には2種類がある。広端縁から狭端側に16.0cmほど上がる場所に認められる、ほぼ5.0cm×3.5cmの四角形の突出（玉縁13, 玉縁14；写真87：玉縁13-2）と、付く位置を明確にできないが、ほぼ $1.5 + \alpha$ cm× $7.5 + \alpha$ cmの長方形板状の突出である。これら2種類の型木器具痕は、この群とする資料のなかでは単独の存在しか見つけていない。しかし玉縁 I 321 Za [J1a] 群とするもの

の例から判じると、両種類とも1つの型木に付けられていた器具の部分の反映痕と推測できる。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ玉縁3」と表記する。なお、「布袋レ玉縁3」とする布袋は、軒丸瓦L群に接合される丸瓦部を造るのにも使われている。

凸面には、縄目叩き [J1b] を残すが（写真87：玉縁13-1）、玉縁部では横方向のナデ調整で完全に消される。筒部の縄目叩きもほとんどすり消されるが、ナデ目の下にはかすかに残る。

型木をはずしてからの分割は、広端側から玉縁部側に、2つに切断すると推測できる。切り込みを凹面側から入れるか、凸面側からかは、分割後の側面調整で分からなくなっている。分割後に、側面に、玉縁部、筒部ともに凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。さらに瓦全体の広端部にも凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。面取りについては、凹面は玉縁部と筒部を一気に面取り調整を施す。凸面も面取り調整を一気に施して、連結面の一部に及んでいるものがある。玉縁部の上端縁に調整を施すものと施さないものがある。施すものでは、凹面側に横方向のナデ調整③1を施すものと、ヘラケズリ調整③2を施すものがある。玉縁部の上端縁と瓦全体の広端部への調整を先に施し、側面調整はそのあとになる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与え、黄褐色あるいは明茶色を呈するものが多いが、軟質で灰黒色を呈するものもある。

玉縁 I 321 Za [J1e] 群（図版27 写真87, 88-玉縁17, 玉縁18）

全長が39.0cm前後、狭端幅は22.5cm前後、広端幅は24.5cm前後、玉縁幅は約17.0cm、連結部の幅は1.2~1.9cm、そして玉縁長は6.0~6.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.5cm前後である。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。玉縁部と筒部の境目に明確な段差はないものの、強い屈曲部をもつ。玉縁部は、上端部の直径が約8.0cm、下端部の直径は約9.5cm、長さは約6.5cmを測る。筒部は、狭端側の直径が約10.0cm、広端側の直径は約11.0cmである。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高と凹面屈曲点高との差はほとんどなく、約0.5cmである。玉縁 I 321 Za [J1b] 群と表記する丸瓦と形態的に類似するが、この群とする丸瓦の方が肩部の粘土の貼り足しが多いので、連結面の幅が広い。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。糸切り痕は右上から左下への方向で筒部の凹面に認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いては、凹面調整が施されない③0である。

型木器具痕には2種類がある。広端縁から狭端側に20.5cmほど上がるところに認められる、ほぼ5.5cm×3.5cmの四角形の突出（写真88：玉縁18-2）と、付く位置は不明であるが、ほぼ3.0cm×8.0+ α cmの長方形板状の突出（写真87：玉縁17-2）とである。これら2種類の型木器具痕は、この群とする資料のなかでは単独での存在しか見つけていない。しかし、玉縁 I 321 Za [J1a] 群とするものの例から判じると、両種類とも1つの型木に付けられていた器具の部分の反映痕と推測できる。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ玉縁3」と表記する。なお、「布袋レ玉縁3」とする布袋は、軒丸瓦L群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる（図版18：軒丸165）。

凸面には、玉縁部、筒部ともに縄目叩き [J1e] を残すが、玉縁部では横方向のナデ調整で叩き

目をほぼ完全に消し、筒部では部分的にナデ調整ですり消す。

型木をはずしてからの分割は、広端側から玉縁部側に、2つに切断すると推測できる。切り込みを凹面側から入れるか、凸面側からかは、分割後の側面調整で分からなくなっている。分割後には、側面と広端面にヘラケズリ調整を施す。側面調整は、玉縁部、筒部ともに凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。面取りについては、凹面には玉縁部と筒部を一気に面取り調整を施す。凸面も一気に面取り調整を施して、連結面の一部に及んでいるものがある。玉縁部の上端縁に調整を施すものと施さないものがある。施すものでは、凹面に横方向のナデ調整③1を施すものと、ヘラケズリ調整③2を施すものがある。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。玉縁部の上端部および広端部に調整を先に施し、側面調整はそのあとになる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与え、黄褐色あるいは明茶色を呈するものが多いが、須恵質で暗灰色を呈するものもある。また、軟質で灰黒色あるいは暗茶色を呈するものもある。

玉縁 I 322 Za [J1b] 群 (図版28-玉縁19~玉縁22)

完形品がないため、全長は不明である。狭端幅が21.2cm、玉縁幅が16.4cm、広端幅が22.8cm、連結部の幅が0.7~0.8cm、玉縁長は6.5~7.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは約1.0cmである。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。玉縁部と筒部の境目には屈曲部をもつが、緩やかである。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高と凹面屈曲点高との差はほとんどなく、約0.5cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕が残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いては、凹面調整が施されない③0である。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ玉縁3」と表記する。なお、「布袋レ玉縁3」とする布袋は、軒丸瓦L群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版18:軒丸165)。

凸面には、玉縁部、筒部ともに縄目叩き [J1b] を残すが、玉縁部では横方向のナデ調整で叩き目をほとんど消し、筒部では部分的にナデ調整ですり消す。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に、2つに切断する。そののちに、凹凸両面側に傾けて側面の面取り調整を施すが、必ず施すという調整ではない。切断で生じた側面の状況に応じて側面調整を施すようである。そのときの凹面側への面取り調整は、玉縁部と筒部を一気におこなうが、凸面側については、玉縁部には面取り調整を施すものがあるものの、筒部は基本的には面取り調整を施さない。

なお、この群とする資料には、切り込み位置を入れ間違えたのか、側縁に近いところに切り込み線の残る例(玉縁20)が数多く認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや堅緻な感じを与え、黄褐色や明茶色を呈するものが多いが、軟質で、灰黒色、暗茶色あるいは灰白色を呈するものもある。

玉縁 I 323 Za [J1b] 群 (図版28—玉縁23, 玉縁24)

完形品がないため、全長、狭端幅、玉縁幅などの法量は不明である。広端幅は20.9cm、連結部の幅が1.5～1.7cm、玉縁長は約5.2cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.5～2.0cmである。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。玉縁部と筒部の境目には屈曲部をもつが、緩やかである。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高と凹面屈曲点高との差は1.8～3.0cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕が残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いては、凹面調整が施されない③0である。

布袋には「布タ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋タ玉縁1」と表記する。

凸面には、玉縁部、筒部ともに縄目叩き [J1b] を残すが、玉縁部では横方向のナデ調整で叩き目をほとんど消し、筒部では部分的にナデ調整ですり消す。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に、2つに切断する。そののちには破面調整を施さない②0である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものが多いが、やや軟質で灰黒色あるいは明茶色を呈するもの、軟質で黄灰色あるいは明橙色を呈するものもある。

玉縁 I 331 Za [J1b] 群 (図版28—玉縁25～玉縁27)

完形品がないため、全長、広端幅などの法量は不明である。狭端幅は20.5cm、玉縁幅は16.0cm、連結部の幅が1.2～1.5cm、玉縁長は約4.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。砲弾形に近い瓶形を呈するので、玉縁部と筒部の境目にはほとんど屈曲部をもたない。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高と凹面屈曲点高との差は4.0cm以下である。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕が残る、ただし、型木器具痕は認められない。糸切り痕は左上から右下への方向に認められるものがあるが、残っていないものも多い。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いては、基本的には凹面調整を施さない③0であるが、稀に縦方向のナデ調整③1を部分的に施すものもある。

布袋には「布ツ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ツ玉縁1」と表記する。

筒部の凸面は、ナデ調整で叩き目がほとんど消されるが、ナデ目の下に縄目叩き [J1b] をかすかに判じることができる。玉縁部では横方向のナデ調整を施すことが分かるだけで、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に、2つに切断する。そののちには破面調整を施さない②0である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、軟質で黄灰色、明橙色あるいは黒褐色を呈するものが多いが、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰青色を呈するものもある。

玉縁 I 332 Za [J1b] 群 (図版28, 29 写真88—玉縁28～玉縁34)

全長が35.2cm前後、狭端幅は約14.2cm、広端幅は約18.0cm、玉縁幅は約12.0cm、連結部の幅は1.5～1.7cm、そして玉縁長は4.2～5.2cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.5～2.0cmである。

玉縁部を作りつけた瓶形の型木を使う。砲弾形に近い瓶形を呈するため、玉縁部と筒部の境目にはほとんど屈曲部をもたない。玉縁部と筒部にあたる一体の粘土板を型木に巻き付けたのち、肩部にあたる粘土を貼り足して成形する。肩部高と凹面屈曲点高との差は5.0～6.5cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕が残る。糸切り痕は右上から左下への方向に認められる。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。斜め方向にカキ目調整③4を施すものも認められるが、大半は、4つの周縁部を除いては調整を施さない③0である。型木器具痕は1種類が認められる。玉縁部の上縁から広端側に8.0cmほど下がるところに、すなわち筒部の凹面屈曲点のすぐ下にあたるが、そこにほぼ2.0cm×8.0+ α cmの長方形板状の突出(玉縁30, 玉縁32)が認められる。この型木器具痕を認めるのは、今のところ「布ホ」の布袋を使って造られた丸瓦だけである。

布袋には「布ホ」、「布ト」、「布タ」と「布ツ」を使う。おのおのを綴じ合わせ痕から「布袋ホ玉縁1」、「布袋ト玉縁1」、「布袋タ玉縁1」、「布袋ツ玉縁1」と表記する。

筒部の凸面は、ナデ調整で叩き目がほとんど消されるが、ナデ目の下に縄目叩き [J1b] をかすかに判じることができる。玉縁部には横方向のナデ調整を施すことが分かるだけで、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に、2つに切断する。そののちには破面調整を施さない②0である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものと、やや軟質で灰黒色や明茶色を呈するもの、軟質で黄灰色、明橙色あるいは黒褐色を呈するものがある。なお、この群の丸瓦のなかには、平瓦と熔着したものがある(写真142)。

3-2 行基式

行基 I 1 Za [Aa] 群 (図版30, 42 写真89, 101—行基1, 行基2, 行基74)

全長が35.6cm前後、広端幅は25.2cm前後、狭端幅は15.5cm前後を測る。素材は粘土板で、厚さは1.6cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。粘土板の重ね目をなで消すが、そのほかは、4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋チ行基1」、「布袋チ行基2」と表記する。「布袋チ行基1」とする布袋は、軒丸瓦E群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版9:軒丸61)。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかろうじて残る。叩き目は平行叩き [Aa] で、平行線は端縁にほぼ直交する。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断

する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色などを呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Ab] 群 (図版30 写真89—行基3)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.7cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。

布袋には「布ワ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ワ行基2」と表記する。この群とする丸瓦(行基3)および行基 I 1 Za [Bc] 群とするもの(図版37:行基37, 行基38)を造るのに使う布袋は綴じ合わせ目で大きく破れているが(写真89:行基3)、破れる前の布袋を使用して造った丸瓦を、のちに取り上げる行基 I 1 Za < x v > 群と表記するもの(図版50:行基108, 行基109)に認める。なお、「布袋ワ行基2」は軒丸瓦D群に使用されるのを認めるが、今のところ軒丸瓦D群に使用されている布袋は、すべて破れる前のものである。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は平行叩き [Ab] で、平行線は端縁にほぼ直交する。

型木をはずしてから分割は、凸面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。大半の資料で、分割の切り込みが側面の幅全体に及んでいて、側面は断面としてしか確認できない。側面調整を施さない②0と推測できる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は灰色を呈する。

行基 I 1 Za [Ad] 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Ad) 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Af) 群・行基 I 1 Za [Ad] (+Cn) 群 (図版30 写真89—行基4～行基6)

狭端幅は15.2cm前後を測る。全長、広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.2cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。

布袋には「布ニ」と「布ナ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基2」、「布袋ナ行基1」と表記する。「布袋ナ行基1」とする布袋は、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版6:軒丸44)。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目には、凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面、狭端部と、広端部を叩き締める補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Ad] で、端縁に対してほぼ斜め方向に施す。補助叩き目は平行叩き (+Ad)、(+Ae)、(+Af)、および斜格子叩き (+Cn) で、端面に施す場合

は、端縁に対して斜め方向に叩き締める。補助叩き（+Cn）は両端部にも施すが、このときも斜め方向に施す。なお、補助叩きを施さないものもある。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。大半の資料で、分割の切り込みが側面の幅全体に及んでいて、側面は截面としてしか確認できない。側面調整を施さない②0と推測できる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色などを呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Ae] 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Af) 群・行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群（図版31 写真90—行基7～行基11）

これらのなかでも行基 I 1 Za [Ae] (+Cn) 群と表記する丸瓦は、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部に認められるのと同じ手法で造られている（図版6：軒丸44）。

全長が36.5～41.0cm、広端幅は24.0cm前後、狭端幅は16.0cm前後を測る。素材は粘土板で、厚さは2.3cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.5cmの円形の突出が、広端部に認められる例がある（行基9）。ただしその機能は分からない。

布袋には「布ニ」、「布ナ」と「布ロ」を使う。「布ニ」および「布ナ」を単独に使った布袋は、綴じ合わせ痕から、それぞれを「布袋ニ行基1」、「布袋ナ行基1」と表記するが、3種の布を足し縫いして作られた布袋は、綴じ合わせ痕が確認できないので「布袋ニ+ナ+ロ行基0」と表記する（写真90：行基7）。なお、「布袋ニ+ナ+ロ行基0」および「布袋ナ行基1」とする布袋は、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる（図版5, 6：軒丸29, 軒丸44）。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目には、凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面を叩き締める補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Ae] で、端縁に対してほぼ斜め方向に施す。補助叩き目は平行叩き (+Ae)、(+Af)、および斜格子叩き (+Cn) で、端縁に対して斜め方向あるいは平行に叩き締める。なお、補助叩きを施さないものもある。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。大半の資料で、分割の切り込みが側面の幅全体に及んでいて、側面は截面としてしか確認できない。側面調整を施さない②0と推測できる。なお、分割のときに、狭端側から広端縁まで切り込んだあと、逆に狭端側に向けて2.5cm前後戻し切りをする例が多い。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与え

て須恵質で、暗灰色、青灰色、灰青色あるいは紫灰色などを呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰色あるいは明橙色を呈するものもある。

行基 I 1 Za [Af] 群・行基 I 1 Za [Af] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Af] (+Af) 群・行基 I 1 Za [Af] (+Cn) 群 (図版31—行基12～行基16)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.5cmの円形の突出が、広端部に認められる例がある(行基12, 行基14)。ただしその機能は分からない。

布袋には「布口」「布ニ」と「布ナ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基 2」、「布袋ナ行基 1」、「布袋ナ行基 2」、「布袋ニ+ナ+口行基 0」と表記する。なお、「布袋ナ行基 1」、「布袋ナ行基 2」、「布袋ニ+ナ+口行基 0」とする布袋は、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版5, 6: 軒丸44, 軒丸36)。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残り残る。叩き目には、凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面を叩き締める補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Af] で、端縁に対してほぼ斜め方向に施す。補助叩き目は平行叩き (+Ae)、(+Af)、および斜格子叩き (+Cn) で、端縁に対して斜め方向あるいは平行に叩き締める。なお、補助叩きを施さないものもある。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②2 4を施す。なお、分割のときに、狭端側から広端縁まで切り込んだあと、逆に狭端側に向けて2.5cm前後戻し切りをする例が多い。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色、灰青色あるいは紫灰色などを呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰色あるいは明橙色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Ag] 群・行基 I 1 Za [Ag] (+Ad) 群・行基 I 1 Za [Ag] (+Ae) 群・行基 I 1 Za [Ag] (+Af) 群 (図版32 写真90, 155—行基17～行基19)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ニ」と「布ナ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基 1」、「布袋ナ行基 1」、「布袋ナ行基 2」と表記する。なお、「布袋ナ行基 1」、「布袋ナ行基 2」とする布袋は、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版5, 6: 軒丸44, 軒丸36)。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1をものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目には、凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面を叩き締める補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Ag] で、平行線は端縁に直交するか、ほぼ斜め方向になる。補助叩き目は平行叩き (+Ad)、(+Ae)、(+Af)、および斜格子叩き (+Cn) で、端縁に対して斜め方向あるいは平行に叩き締める。なお、補助叩きを施さないものもある。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち破面を、ヘラケズリ調整②1している。なお、分割のときに、狭端側から広端縁まで切り込んだあと、逆に狭端側に向けて2.5cm前後戻し切りをする例が多い。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色、灰青色あるいは紫灰色などを呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰色あるいは明橙色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Aj] 群 (図版33 写真91—行基20, 行基21)

全長が32.5~33.5cm、広端幅は22.8cm、狭端幅は15.8cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ニ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基3」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は平行叩き [Aj] である。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に対して、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②2 3を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色や青灰色、灰青色などを呈するものと、軟質で灰黄色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Ak] 群 (図版33, 34 写真92, 154—行基22~行基26)

全長が33.6~34.6cm、広端幅は20.9~22.8cm、狭端幅は12.9~14.7cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.3~1.8cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ム」と「布ワ」を使う。布袋については、綴じ合わせ痕から「布袋ム行基1」、「布袋ム行基2」、「布袋ワ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は平行叩き [Ak] である。

型木をはずしてからの分割は、おそらく凹面側から切り込みを入れて、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色などを呈するものと、軟質で明橙色を呈するものがある。なお、「布ワ」の布袋を用いて造られた丸瓦には軟質のもの（行基22、行基23）が多い。

行基 I 1 Za [Am] 群（図版34～36 写真93～95、153—行基27～行基33）

軒丸瓦E群に接合される丸瓦部（図版9：軒丸61）に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。

全長が33.6～34.5cm、広端幅は22.3～22.6cm、狭端幅は15.5～16.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.6cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる1.0cm四方の突出が、広端部に認められる例がある（写真94：行基29-1）。ただしその機能は分からない。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋チ行基1」、「布袋チ行基4」、「布袋チ行基5」と表記する。なお、「布袋チ行基1」とする布袋は、軒丸瓦E群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる（図版9：軒丸61）。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は平行叩き [Am] である。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面を、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を、狭端部から広端部に施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

なお、この群とする資料のなかに、幅を半分する中央に釘穴と思われる円孔を穿った例を認めるが（行基33）、そうした穴を穿たれる丸瓦は、軒丸瓦の丸瓦部であったとみて間違いのないと思われる。その丸瓦には、分割後の側面調整は施されない②0である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色を呈するものと、軟質で明橙色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Ba] 群（図版36 写真95—行基34～行基36）

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.9cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕が確認できないので「布袋チ行基0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は正格子叩き [Ba] で、端縁にほぼ直交する方向に施す。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れるか、凸面側からかは分からないが、分割のときの失敗と推測する切り込み痕が凸面側に認められる例があるので（行基35）、凸面側から切断されたと考える。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、赤褐色あるいは灰茶色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Bc] 群（図版37 写真96—行基37～行基39）

全長が40.0cm、狭端幅は16.5cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の反映痕である直径1.0cmの円形の突出が広端部にある。

布袋には「布ワ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ワ行基2」と表記する。「布袋ワ行基2」とする布袋は、破れ具合から時間差のある使用を窺うことができる。この群の丸瓦（行基37、行基38）、および行基 I 1 Za [Ab] 群とするもの（図版30：行基3）を造るには、布袋が破れてから使うが、行基 I 1 Za <x v> 群とするもの（図版50：行基108、行基109）に対しては、破れる前に使っている。なお、「布袋ワ行基2」は軒丸瓦D群に使用されているのを認めるが、今のところ軒丸瓦D群に使用される布袋は、すべて破れる前のものである。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は正格子叩き [Bc] で、左上がりの斜め方向に施す。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れるか凸面側からかは分からない。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、赤褐色あるいは灰茶色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Br] 群（図版38 写真97, 153, 154—行基40～行基45）

全長が41.2cm、広端幅は23.5cm、狭端幅は14.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.1cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.0cmの円形の突出2つが、広端縁から狭端側に2.0cm上がるころと、さらにそれより狭端側に9.0cm上がるころに認められる例がある（写真97：行基41-1）。ただしその機能は分からない。

布袋には「布ル」と「布カ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル行基1」、「布袋カ行基1」と表記する。なお、「布袋ル行基1」とする布袋（写真97：行基45-2）は、軒丸瓦J群に接合される丸瓦部（図版15：軒丸147）を造るのにも使われる。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がcaろうじて残る。叩き目は正格子叩き [Br] で、端縁に対してほぼ平行する方向に施す。なお、狭端側から中央部にかけて縦方向のヘラケズリ調整①32を施す例もある（行基40）。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち分割破面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②1を狭端側から広端側に施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度は、大半が軟質かやや硬質で、前者の色調は黄褐色や暗灰白色のものが多く、後者は暗灰色または灰色である。

行基 I 1 Za [Bt] 群（図版38-行基46, 行基47）

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.4~1.7cmである。

凹面には、糸切り痕、布目圧痕が残る。ただし、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ニ」を使う。綴じ合わせ痕が確認できないので「布袋ニ行基0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がcaろうじて残る。叩き目は正格子叩き [Bt] で、端縁に対して斜め方向に叩き締める。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものと、やや軟質で、灰色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [Cg] 群（図版39 写真98-行基48, 行基49）

軒丸瓦B群およびC群に接合される丸瓦部（図版4：軒丸27）に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。全長が43.5cm、狭端幅は14.0cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8~2.2cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がcaろうじて残る。叩き目は斜格子叩き [Cg] である（写真98：行基48-1）。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断

する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を広端側から狭端側に施す。さらに狭端部と広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度は大半が軟質で、色調は明橙色や茶褐色のものが多いが、暗灰色のものも認められる。

行基 I 1 Za [Ch] 群 (図版39 写真98—行基50～行基54)

軒丸瓦B群およびC群に接合される丸瓦部(軒丸25, 軒丸26)に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。狭端幅は15.6cmを測る。全長、広端幅は不明である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の圧痕と推測できる直径が0.8cmの円形の窪みが1つあるが、破片資料に残されているためにその位置を確定できない(行基54)。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ行基2」と表記する(写真98:行基54)。布袋は狭端側で絞られたように布目圧痕からは窺える。なお、「布袋ネ行基2」とする布袋は、軒丸瓦B群および軒丸瓦C群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版4:軒丸26)。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は斜格子叩き [Ch] である(写真98:行基52-1)。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を広端側から狭端側に施す。さらに狭端部と広端部の凹面にヘラケズリ調整③2を施す例もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大半が軟質で、明橙色や茶褐色のものが多いが、やや硬質で、灰色や灰茶色のものもある。

行基 I 1 Za [Cj] 群 (図版40, 41 写真99, 100—行基55～行基60)

軒丸瓦E群に接合される丸瓦部(図版9:軒丸56)に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。全長が43.5～44.1cm、広端幅は24.0～25.3cm、狭端幅は16.0～16.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.3～2.6cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.0cmの不整円形の突出2つが、広端縁から狭端側に5.5cm上がるところに9.0cmの間隔で、左右に並んで認められる例(写真100:行基57-1)がある。ただし、その機能は分からない。

布袋には「布口」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋口+口行基1」と表記する(写真99, 100:行基58, 行基60, 行基57)。

凸面には、縦方向のナデ調整①22あるいは横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は斜格子叩き [Cj] である。広端部は、左か

ら右へのヘラケズリ調整①31で面取りが施されている。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を広端側から狭端側に施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大半が軟質で、明橙色や茶褐色のものであるが、やや硬質で、青灰色や灰茶色のものもある。

行基 I 1 Za [Cn] 群 (図版41—行基61～行基63)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.3～2.3cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕が残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ニ」と「布ナ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基2」、「布袋ナ行基1」と表記する。なお、「布袋ナ行基1」とする布袋は、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版6:軒丸44)。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は斜格子叩き [Cn] である。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものと、やや軟質で、茶灰色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [J1b] 群 (図版41, 42 写真100—行基64～行基66)

全長は35.5cmを測る。広端幅と狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cmを測る。

凹面には、糸切り痕、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、粘土板の重ね目は認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布レ」と「布ト」を使う。「布レ」の布袋は綴じ合わせ痕から「布袋レ行基1」と表記するが、「布ト」の布袋には綴じ合わせ痕が確認できていないので「布袋ト行基0」とする。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は縄目叩き [J1b] である。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。ただし、切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは判別できない。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。さらに広端部の凹面にヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、軟質で暗褐色や黒

灰色を呈するものが多いが、やや硬質で明茶色を呈するものもある。

行基 I 1 Za [J1c] 群 (図版42 写真100—行基67)

狭端幅は10.5cmを測る。全長と広端幅は不明である。狭端幅から想定してのサイズが小さいことと残り方から判じると、丸瓦以外の、例えば面戸瓦とする使用も考えられる。しかし1例しか確認できていないので、とりあえず丸瓦として記述しておく。素材は粘土板で、厚さは1.7cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ト」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ト行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は縄目叩き [J1c] である。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。ただし、切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは判別できない。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は細かい。焼成度は堅緻で、色調は灰白色を呈する。

行基 I 1 Za [J1f] 群 (図版42—行基68)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0~3.5cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布タ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋タ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は縄目叩き [J1f] である。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。ただし、切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは判別できない。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや堅緻な感じを与える茶灰色のものと、軟質で灰黒色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [J2ac] 群 (図版42—行基69~行基71)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8~2.3cmを測る。

凹面には、布目圧痕が残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ウ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ウ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は縄目叩き [J2ac] である。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な青灰色のものと、軟質で明橙色あるいは灰褐色を呈するものがある。

行基 I 1 Za [J2ad] 群 (図版42—行基72, 行基73)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8~2.2cmを測る。

凹面には、布目圧痕が残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ウ」を使う。綴じ合わせ痕を確認できないので「布袋ウ行基0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡がかるうじて残る。叩き目は縄目叩き [J2ad] である。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は明橙色あるいは灰褐色を呈する。

行基 I 1 Za群

この群には、截頭円筒形の型木を用いて成形されたあと、凸面を横方向のナデ調整で仕上げ叩き目の痕跡をまったく残さないものをまとめる。群を認定する指標基準に造瓦器具の反映属性と凸面の叩きの反映属性を採用しているため、その基準からは、さらに細かい表記を認定できない資料のすべてが、この群に含まれることになる。しかし、法量、胎土、布目圧痕などや、造瓦技術の違いを併わせ考察すると、〈i〉～〈x x iii〉の23種類の別を認定することができる。

〈i〉 (図版43 写真101—行基75, 行基76)

この群とする丸瓦は、凸面に平行叩き [Aa] または [Am] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Aa] 群、行基 I 1 Za [Am] 群とするものと、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

そこで問題になるのは、行基 I 1 Za [Aa] 群とするものには、行基 I 1 Za [Am] 群とするものに確認される型木器具痕が確認できていないことである。しかし両群とも「布袋チ行基1」と表記する布袋を共通して用いていることを認めるので、同じ型木を使用して両群の丸瓦が造られていたと考えることも許されよう。つまり、たまたま手にすることができた行基 I 1 Za [Aa] 群とする資料には、型木器具痕が残されている部分が含まれなかったと仮定しておこう。こう考えたうえで、行基 I 1 Za 〈i〉群とするものの凸面に平行叩き [Aa] が施されているとすれば行基 I 1 Za [Aa]

群のものと、また平行叩き [Am] が施されているとすれば行基 I 1 Za [Am] 群のものと見分けがたいと言いたいのである。

全長が33.6～34.5cm、広端幅は22.3～22.6cm、狭端幅は15.5～16.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.6cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる1.0cm四方の突出が、広端部に認められる例がある。ただしその機能は分からない。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋チ行基 1」と表記する。なお、行基 I 1 Za [Aa] 群と表記する丸瓦に認められる「布袋チ行基 2」の布目圧痕や、あるいは行基 I 1 Za [Am] 群とする丸瓦に認められる「布袋チ行基 4」と「布袋チ行基 5」の布目圧痕は、行基 I 1 Za < i > 群とする丸瓦では確認できていない。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてから分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②2 3を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰青色などを呈するものと、軟質で明橙色を呈するものがある。

< ii > (図版43, 44 写真102, 159—行基77, 行基78)

この群とする丸瓦は、凸面の主要叩きに平行叩き [Ad]、[Ae]、[Af]、[Ag]、あるいは正格子叩き [Bt] が施されているとすれば、それぞれ行基 I 1 Za [Ad] 群、行基 I 1 Za [Ae] 群、行基 I 1 Za [Af] 群、行基 I 1 Za [Ag] 群、行基 I 1 Za [Bt] 群とする丸瓦と造られ方が類似する。この行基 I 1 Za < ii > 群とするものに補助叩き目が確認でき、それらは、平行叩き (+Ad)、(+Ae)、(+Af)、(+Ag) と、正格子叩き (+Bt)、および斜格子叩き (+Cn) である。そこで、実在する資料に組成表記を試みると、次のとおりとなる。行基 I 1 Za < ii > (+Ad) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Ae) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Af) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Ag) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Bt) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Cn) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Ad) (+Ae) 群、行基 I 1 Za < ii > (+Ae) (+Bt) 群と、さらに補助叩きのまったく認められない行基 I 1 Za < ii > 群である。

全長がおそらく35.0cm以上、狭端幅は14.0～16.0cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.5cmの円形の突出が2つ、側縁に平行する一直線上に認められる例がある (写真102: 行基77)。行基77だけでは広端縁からの距離が分からないが、ほかの例を併わせ見ると、広端縁から狭端側に2.0cmほど上がるところに1つ、そこから狭端側に14.0cmほどさらに上がるところにもう1つある。ただしその機能は分からない。

布袋には「布口」、「布ニ」と「布ナ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基1」、「布袋ニ行基2」、「布袋ナ行基1」、「布袋ナ行基2」、「布袋ニ+ナ+口行基0」と表記する。なお、補助叩きが施される資料に認められる布袋の使用状況は次のようになる。行基 I 1 Za < ii > (+Ad) 群は「布袋ニ行基0」、行基 I 1 Za < ii > (+Ae) 群は「布袋ニ行基0」と「布袋ナ行基1」、行基 I 1 Za < ii > (+Af) 群は「布袋ナ行基1」と「布袋ナ行基2」、行基 I 1 Za < ii > (+Ag) 群は「布袋ナ行基0」、行基 I 1 Za < ii > (+Bt) 群（行基77）は「布袋ニ行基1」と「布袋ナ行基0」、行基 I 1 Za < ii > (+Cn) 群（行基78）は「布袋ニ行基1」と「布袋ニ行基2」および「布袋ナ行基1」、行基 I 1 Za < ii > (+Ad) (+Ae) 群は「布袋ニ行基0」、行基 I 1 Za < ii > (+Ae) (+Bt) 群は「布袋ニ行基2」、補助叩きの認められない行基 I 1 Za < ii > 群が「布袋ニ行基1」、「布袋ナ行基0」と「布袋ニ+ナ+口行基0」である。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施している、叩き目の痕跡は残っていない。ただし補助叩きには、平行叩き (+Ad)、(+Ae)、(+Af)、(+Ag) と、正格子叩き (+Bt)、および斜格子叩き (+Cn) を施すことがある。補助叩きの大半は、広端あるいは狭端の両端面に施すが、なかには端縁部の凸面に施す例もある。とりわけ、斜格子叩き (+Cn) が補助叩きとして付加されるものの中に、狭端面に加えて、凸面の狭端縁から約8.5cmの範囲が叩き締められる例（行基78）がある。通常の補助叩きと比較すると、8.5cmの範囲というのは広範囲になるので、主要叩きとして認定すべきかもしれないが、この斜格子叩き (+Cn) は横方向のナデ調整のあとに叩かれているのが明らかなので、補助叩きと認定する。

型木をはずしてからの分割は、おそらく凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色を呈するものと、軟質で灰黄色を呈するものがある。

< iii > (図版44—行基79, 行基80)

この群とする丸瓦は、凸面に平行叩き [Aj] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Aj] 群とする丸瓦と、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ニ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ニ行基3」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施している、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、おそらく凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青

灰色あるいは灰青色などを呈するものと、軟質で灰黄色を呈するものがある。

〈iv〉(図版44—行基81～行基83)

この群とする丸瓦は、凸面に平行叩き [Ak] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Ak] 群とする丸瓦と、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

全長が33.6～34.6cm、広端幅は20.9～22.8cm、狭端幅は12.9～14.7cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.3～1.8cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ム」、「布ワ」と「布ヨ」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ム行基1」、「布袋ム行基2」、「布袋ム+ヨ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、おそらく凹面側から切り込みを入れて、2つに切断する。そのうち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②2 3を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

なお、今のところ、軒丸瓦の丸瓦部に「布ム」あるいは「布ヨ」が使用された例は確認できていないが、「布ワ」を使用した例はある。ただし、軒丸瓦D群の丸瓦部の布目圧痕に「布ワ行基2」の布袋しか確認できていないので、この群の丸瓦部を造るのに使用されている「布袋ワ行基0」と同じ布袋かどうかは分からない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色などを呈するものと、軟質で明橙色を呈するものがある。なお、「布ワ」の布袋を使用して造られた丸瓦には軟質のものが多い。

〈v〉(図版45—行基84, 行基85)

この群とする丸瓦は、凸面に平行叩き [Ba] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Ba] 群とする丸瓦と、造瓦技術の全般にわたって類似する。

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.9cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋チ行基2」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは分からないが、分割のときの失敗と推測する切り込みを凸面側に認める例があるので、凸面側から切り込むと考えられよう。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、

石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、赤褐色あるいは灰茶色を呈するものがある。

〈vi〉 (図版45—行基86, 行基87)

軒丸瓦J群に接合される丸瓦部 (軒丸123, 軒丸147) に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。

この群とする丸瓦は、凸面に平行叩き [Br] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Br] 群とする丸瓦と、造瓦技術の全般にわたって類似する。

全長が41.2cm、広端幅は23.5cm、狭端幅は14.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.1cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.0cmの円形の突出2つが、広端縁から狭端側に2.0cm上がるところと、さらにそれより狭端側に9.0cm上がるところに認められる例がある。ただしその機能は分からない。

布袋には「布ル」と「布カ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル行基1」、「布袋カ行基1」と表記する。なお、「布袋ル行基1」とする布袋は、軒丸瓦J群に接合される丸瓦部 (図版15: 軒丸147) を造るのにも使われる。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののちに、凹面側について分割破面にヘラケズリ調整②1を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黑色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度は大半が軟質かやや硬質で、前者の色調は黄褐色か暗灰白色のものが多いが、後者は暗灰色や灰色である。

〈vii〉 (図版45—行基88, 行基89)

この群とする丸瓦は、凸面に斜格子叩き [Cg] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Cg] 群とする丸瓦と、法量、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

全長が43.5cm、狭端幅は14.0cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8~2.2cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を広端側から狭端側に向けて施

す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度は大半が軟質で、色調は明橙色や茶褐色のものが多いが、暗灰色のものもある。

〈viii〉(図版45—行基90, 行基91)

この群とする丸瓦は、凸面に斜格子叩き [Ch] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Ch] 群とする丸瓦と、法量、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

狭端幅は15.6cmを測る。全長、広端幅は不明である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ行基2」と表記する。なお、「布袋ネ行基2」とする布袋は、軒丸瓦B群および軒丸瓦C群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版4: 軒丸26)。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてから分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そのうち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を広端側から狭端側に向けて施す。さらに狭端部の凹面にヘラケズリ調整③2を施す例もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大半が軟質で、明橙色や茶褐色のものであるが、やや硬質で、灰色や灰茶色のものもある。

〈ix〉(図版46—行基92)

この群とする丸瓦は、凸面に斜格子叩き [Cj] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Cj] 群とする丸瓦と、法量、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

広端幅は24.0cm前後を測る。全長、狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.3~2.6cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.0cmの不整円形の突出2つが、広端縁から狭端側に5.5cm上がるところに 9.0cmの間隔で左右に並んで認められる例がある。ただし、その機能は分からない。

布袋には「布口」を使う。綴じ合わせ痕と縫い合わせ痕から「布袋口+口行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてから分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そのうち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を広端側から狭端側に向けて施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大半が軟質で、明橙色や茶褐色のものであるが、やや硬質で、青灰色や灰茶色のものも認められる。

〈x〉 (図版46 写真102—行基93～行基96)

この群とする丸瓦は、凸面に斜格子叩き [Cj] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [Cj] 群とする丸瓦と、胎土、布目圧痕、型木器具痕などで類似する点も多いが、厳密に見れば、使用される布袋や側面調整の仕方に差がある。

広端幅は21.5～24.5cmを測る。全長、狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0～2.4cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.0cmの不整形の突出が、広端縁から狭端側に5.5cm上がる場所に認められる。行基 I 1 Za [Cj] 群とするものに認めるように、おそらく1対になるものであろう。ただし、その機能は分からない。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ行基3」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①22を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。大半の資料で、切り込みが側面の幅全体に及んでいるので、側面は截面としてしか認められない。しかし側面調整は施さない②0とは推測できる。なお、広端部の凸面側は、狭端側から広端縁に向けて斜め方向にヘラケズリ調整①33、あるいは左から右への回転を利用しないヘラケズリ調整①31を施し、面取りする。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大半が硬質で、青灰色や灰茶色のものであるが、やや軟質で、明橙色のものも認められる。

〈x i〉 (図版47—行基97, 行基98)

この群とする丸瓦は、凸面に縄目叩き [J1b] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [J1b] 群とする丸瓦と、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

残存状況が悪いため、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後を測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕は認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ行基1」と表記する。

凸面には横方向のナデ調整①21が施されていて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは分からない。そのうち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。さらに広端部の凹面にヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、軟質で暗褐色や黒灰色を呈するものが多いが、やや硬質で明茶色を呈するものもある。

〈x ii〉(図版47, 48 写真103, 104—行基99～行基102)

軒丸瓦E群に接合される丸瓦部(図版8:軒丸55)に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。全長が35.2～36.0cm、広端幅は22.0～23.5cm、狭端幅は15.5～16.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.6～2.3cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径0.8cmの円形の突出が、広端縁から狭端側に8.5cmほど上がるところに認められる(行基99, 行基100)。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋チ行基3」と表記する。この「布袋チ行基3」とする布袋は、破れ具合から時間差のある使用を窺うことができる。すなわち、行基100の破れていない段階(写真103:行基100-1)、行基101に認められる、中央部がわずかに破れた段階(写真104:行基101-1)、行基102に認められるように、行基101で見られた中央部の破れに加えて、広端側でも破れが認められるようになる段階(写真104:行基102-1)である。なお、「布袋チ行基3」とする布袋は、軒丸瓦E群に接合される丸瓦部を造るのにも使われる(図版8:軒丸55)。軒丸55と呼ぶ軒丸瓦に観察できる布袋は破れていない段階を示す。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてから分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは分からない。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。さらに広端部の凹面にヘラケズリ調整③2で面取りを施すものがあるが、調整を施さない③0のものもある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色などを呈するものが多いが、軟質で黄褐色を呈するものもある。

〈x iii〉(図版48, 49 写真105—行基103～行基106)

全長が42.3cm、広端幅は23.8cm、狭端幅は17.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.8～2.5cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、糸切り痕、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、型木器具痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は調整を施さない③0である。

布袋には「布へ」と「布ヨ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋へ行基1」、「布袋ヨ行基1」と表記する。なお、この群とする丸瓦のうち、「布へ」の布袋を使用して造られたものには比較的薄手のものが多い。

凸面には、縦方向のヘラケズリ調整①12を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、狭端側から広端側に、2つに切断する。切り込みを凹面側から入れたか、凸面側からかは分からない。なお、分割のときに狭端側から広端縁まで切り込んだあと、また狭端側に向けて4.5cm前後戻し切りをする例がある（写真105：行基103-3）。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

なお、この群とする丸瓦のうち「布へ」の布袋を使用したものに、瓦当部がはずれてどの群の軒丸瓦が判別できないものの、軒丸瓦の丸瓦部として確実に接合されたと思える資料がある（図版18：軒丸167）。ただし、瓦当部のわかっている丸瓦部の資料には「布へ」の布袋の布目圧痕を見つけてはいない。しかし、胎土の観察からすると、軒丸瓦E群の丸瓦部となる可能性が高いと言っておく。また、この群の丸瓦のなかに、凸面にも布袋と同じ「布へ」の布目圧痕が認められる例がある（写真105：行基103-2）。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものと、軟質で黄褐色を呈するものがある。

〈xiv〉（図版49 写真106-行基107）

全長が38.3cm、広端幅は22.0～23.0cm、狭端幅は15.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.5～2.5cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ワ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ワ行基3」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののちに側面調整を施さない②0と、破面調整を施す②1がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は、黄褐色、茶褐色や明橙色を呈するものが多いが、黒色や灰色を呈するものもある。

〈xv〉（図版50 写真106-行基108～行基110）

軒丸瓦D群に接合される丸瓦部（軒丸31）に認められるのと同じ手方で造られた丸瓦である。

狭端幅は15.5cmを測る。全長と広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ワ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ワ行基2」と表記する。「布袋ワ行基2」とする布袋は、破れ具合から時間差のある使用を窺うことができる。この群の丸瓦（行基108、行基110）には、布袋が破れる前に使っているが、行基I1Za [Ab] 群（行基3）、および行基I1Za [Bc] 群の丸瓦（行基37、行基38）を造るのには、布袋が破れてから使っている。

なお、破れる前の「布袋ワ行基 2」とする布袋は（写真106：行基108-1, 行基110）、軒丸瓦D群に接合される丸瓦部（軒丸31）を造るのにも使われる。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののちに側面調整を施さない②0のものと、凹凸両面側に傾けて側面にヘラケズリ調整②24を施すものがある。

なお、丸瓦のひとつ（行基108）は、幅を半分する中央に釘穴と思われる円孔が穿たれていて、軒丸瓦の丸瓦部であったと思わせる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は黄褐色、明橙色や灰色を呈するものがある。

< xvi > (図版50, 51 写真107-行基111~行基120)

全長が40.0cm、広端幅は23.5cm前後、狭端幅は15.0cm前後を測る。素材は粘土板で、厚さは1.5~2.1cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布り」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋り行基 1」、「布袋り行基 2」、「布袋り行基 3」、「布袋り行基 4」、「布袋り行基 5」、「布袋り+り行基 1」と表記するが、「布り」を主体布と補足布に共足しをしている布袋には綴じ合わせ痕を確認していないものもあり、それは「布袋り+り行基 0」と表記する。なお、「布袋り行基 1」とする布袋は表裏で使用されている場合があり、行基113と図示するものは裏側の使用例である。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののちに、側面の凹面側についた分割破面にヘラケズリ調整②1を施す。さらに広端部の凹面に右から左へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、灰色、灰黒色あるいは灰青色を呈するものが圧倒的に多いが、軟質で灰褐色や黒褐色を呈するものもある。

< xvii > (図版51, 52 写真108-行基121~行基125)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布イ」と「布り」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋イ+り行基 1」

と表記する。軒丸瓦F群に接合される丸瓦部（図版10：軒丸72）を造るのに、この「布袋イ+リ行基1」とする布袋が使われる（写真108：行基121-1）。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてから分割は、凸面側から切り込みを入れて、広端側から狭端側に、2つに切断する。そののちに、側面の凹面側についた分割破面にヘラケズリ調整②1を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、灰色、灰黒色あるいは灰青色を呈するものが多いが、軟質で灰褐色や黒褐色を呈するものもある。

〈xviii〉（図版52、53 写真108-行基126～行基131）

この群とする丸瓦は、凸面に斜格子叩き [Cj] が施されているとすれば、行基I1Za [Cj] 群とするものと、胎土、布目圧痕、型木器具痕などの類似する点も多いが、厳密に見れば、使用された布袋や側面調整の仕方などに差違がある。

広端幅が22.5cm、狭端幅は13.5～13.7cmを測る。全長はおそらく31.0cm以上はあると言える。素材は粘土板で、厚さは1.8～2.2cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目は認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。型木器具の部分の反映痕と推測できる直径1.0cmの不整円形の突出2つが、広端縁から狭端側に5.5cm上がるところに、9.0cmの間隔で左右に並んで認められる例がある（写真108：行基127-2）。ただし、その機能は分からない。

布袋には「布ル」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル行基2」、「布袋ル行基3」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残されていない。

型木をはずしてから分割は、凸面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。大半の資料で、切り込みが側面の幅全体に及んでいるので、側面は截面としてしか認められない。側面調整がされていない②0と推測できるが、稀にヘラケズリ調整が凸面側に傾けて施されるもの②22もある。それは狭端側から広端側に向けて施される。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる多量の大きな黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大半が軟質で、明橙色、黒褐色や茶褐色のものであるが、やや硬質で、青灰色や灰茶色のものも認められる。

〈xix〉（図版54-行基132～行基134）

軒丸瓦J群に接合される丸瓦部（図版15：軒丸146）に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6～2.2cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない②0である。

布袋には「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ソ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、広端側から狭端側に、2つに切断する。そののちに、側面の凹面側についた分割破面にヘラケズリ調整②1を施すものと、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与え、明茶色、灰茶色や明橙色を呈するものが多いが、軟質で灰褐色や黒褐色を呈するものもある。

< x x > (図版54—行基135～行基137)

全長は40.0cmを測る。広端幅と狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.4～1.8cmを測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は不明である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ル」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル行基4」、「布袋ル行基5」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、広端側から狭端側に、2つに切断する。そののちに、側面の凹面側についた分割破面にヘラケズリ調整②1を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は灰褐色や黒褐色を呈するものがある。

< x x i > (図版54 写真109, 154—行基138, 行基139)

軒丸瓦J群に接合される丸瓦部に認められるのと同じ手法で造られた丸瓦である。

全長が37.5cm、狭端幅は15.5cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.5～1.8cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、型木器具痕などは認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ラ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ラ行基1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施していて、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凸面側から切り込みを入れて、広端側から狭端側に、2つに切断する。そののちに、側面の凹面側についた分割破面にヘラケズリ調整②1を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。とりわけ赤色砂粒が目立つ。焼成度は軟質で、色調は、黄灰褐色を呈するものが多いが、灰黒色を呈するものもある。

< x x ii > (図版55～57 写真109～111—行基140～行基152)

全長が36.0～37.0cm、広端幅は20.5～25.5cm、狭端幅は14.5～16.0cm前後を測る。素材は粘土板で、厚さは1.5～2.5cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、型木器具痕などが残る。ただし、糸

切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」と「Z型」の両方がある。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。凹面の両側縁（あるいは片側縁）には、幅0.3cm前後の棒状の分割界線が認められる。分割界線は、狭端縁から広端側に3.5cmほど下がるところから、広端縁から狭端側に2.3cmほど上がるところにまで認められる。

布袋には「布ト」、「布タ」と「布レ」および「布ホ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ト行基2」、「布袋タ行基2」、「布袋タ行基3」、「布袋レ行基1」、「布袋レ行基2」、「布袋レ行基3」と表記するが、「布タ」と「布ホ」を足した布袋には綴じ合わせ痕が確認できていないので「布袋タ+ホ行基0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、狭端側から広端側に、2つに切断する。そののち側面に、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。さらに広端部の凹面に、右から左への、あるいは左から右へのヘラケズリ調整③2を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は細かく、精緻な感じを与えるものが多い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与え、灰色、黄褐色あるいは茶褐色を呈するものが圧倒的に多いが、軟質で、黒褐色を呈するものもある。

なお、この群とする丸瓦の凸面は風食されている。表面が荒れて、小さな凹凸を多く認めるものが多い（写真111：行基150）。

この群の資料のなかには、同じ粘土板から造られた、分割以前に型木の上で隣同士にあった2つの丸瓦をひっつけることに成功した例が含まれる（写真110：行基142+行基143）。

< x x iii > (図版57 写真111—行基153, 行基154)

この群とする丸瓦は、凸面に縄目叩き [J2ad] が施されているとすれば、行基 I 1 Za [J2ad] 群とする丸瓦と、胎土、布目圧痕や、造瓦技術の全般にわたって類似する。

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.3~2.8を測る。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。ただし、糸切り痕、粘土板の重ね目、型木器具痕などは認められない。4つの周縁部を除いて、凹面調整を施さない③0である。

布袋には「布ウ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ウ行基1」と表記する。

凸面には横方向のナデ調整①21を施して、叩き目の痕跡は残っていない。

型木をはずしてからの分割は、凹面側から切り込みを入れて、2つに切断する。そののち側面に、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は灰褐色、黒褐色または明橙色を呈する。

4 平瓦

平瓦 II 0 Aa群・平瓦 II 0 Za [Aa] 群 (図版58~62 写真112~115, 140, 141, 153, 155—平1~平17)

全長が39.0~42.0cm、広端幅は32.3cm、狭端幅は29.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.7~1.9cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。ただし、杵側板圧痕は認められない。糸切り痕は、右上がりの斜め方向に認められる例も稀にはあるが、残っていないものが圧倒的に多い。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面は、調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消される。

凹面は平滑であり、両側縁（あるいは片側縁）には、「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。分割界線は途切れることなく、狭端縁に始まり広端縁から2.5cmほど上がるのところまでに認められる。桶に右撚りの撚り紐の分割突線が狭端縁から広端縁近くまで取り付けられていたことが分かる（写真140：平1）。狭端縁の中央に直径が3.5~3.8cm、深さは0.2cmを測る円形の窪み^(註20)が、布目の下に確認できる（写真141：平3，平11）。その位置からみて、桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と考えられるが、その機能は不明である。なお、この円形の窪みは、瓦の狭端部の中央に決まっているが、全円形が残されるもののほか、上半部が縁より外にはみ出て、下半部の半円部しか認められないものもある。おそらく桶の上に粘土板を巻き付けるときに、個体によって若干上下にずれることが生じたのであろう。なお、この群とする平瓦を半割して造った割熨斗瓦Ⅱ0 Aa群の資料のなかに、布目圧痕の下に円形の突出を確認できるものがある（写真141：熨斗3）。

布袋には「布ヌ」、「布ワ」と「布イ」を使う。ただし、「布イ」は補足布として使用されるだけである。「布ヌ」だけで作られる布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋ヌ平1」、「布袋ヌ平2」、「布袋ヌ平3」、「布袋ヌ平4」と、また「布ワ」で作られる布袋も綴じ合わせ痕から「布袋ワ平1」、「布袋ワ平2」と、そして「布ワ」と「布イ」が縫い足される布袋は、綴じ合わせ痕と縫い合わせ痕から「布袋ワ+イ平1」と表記する。なお、この群の平瓦の大半には「布袋ヌ平1」、「布袋ヌ平2」が使われるが、2つの布袋とも桶の高さに比して布の丈が足らず、広端側に布目圧痕がつかない部分がある。

凸面には、一部に横方向のナデ調整①2 1を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が、かなり明瞭に残る。叩き目は平行叩き [Aa] で、端縁にほぼ直交して右から左へと、上から下へ4段にわたって施す。広端側の1段だけに叩き板の上下端の圧痕を認める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。端面は、狭端面がナデ調整によって丸くおさめられているが、広端面は平坦におさめられている。なお、広端部に藁状のものの圧痕のような痕跡が認められる（平7）。藁とは断定できないが、窯入れ前の、乾燥させるときに藁座のようなところに置いたことも考えられる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰青色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、明橙色、赤褐色または赤黒褐色を呈するものがある。

なお、この群の平瓦のなかには、凸面を見ての、広端部の左隅の一角を焼成前に四角く切り落とす例が2例ある（平9，平10）。そのうちの1つは、4分割ののちに広端縁をも斜めに切り落とし、さらに右側縁も凹面側から切り込みを入れて落とす。右側縁は段状を呈し、サイズは小さくなる（平9）。

付記するが、分割直前の桶の上で隣同士であった同じ粘土板で造られた個体をひっつけることに

成功した例が含まれる（平5，平6）。桶枠の復元を試みると、桶枠復元径は、狭端側の径で約38cm、広端側の径が約42cm、高さは $41.5 + \alpha$ cmとなる。桶枠の表面の状況は分かりにくいだが、平瓦の表面に残るきわめてかすかな凹凸から判じる限りでは、平瓦1枚につき幅が4cm前後の枠側板が7～8枚で構成され、平瓦が4枚で1つの桶を構成する可能性が高い。粘土板の重ね目からは、粘土板を2枚合わせて桶の周りに巻いたと想定できる。

平瓦Ⅱ0 Za [Ab] 群（図版63 写真155—平18）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.5～1.7cmである。

凹面には、布目圧痕が残るが、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などは不明である。糸切り痕、枠側板圧痕は認められない。凹面調整は、基本的に施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上にはナデ調整を施す。一部には、凹面にナデ調整③1を認めるものがある。

布袋には「布ヌ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので、「布袋ヌ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を認めるものがあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目は平行叩き [Ab] である。

桶をはずしてからの分割は、側面部を残す資料がないため、具体的には描写できない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや軟質でパサパサした感じを与える。色調は灰色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Ac群・平瓦Ⅱ0 Za [Ac] 群・平瓦Ⅱ0 Ac (+Ae) 群（図版63 写真155—平19～平24）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6～2.6cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、枠側板圧痕は認められない。完形品がないので、広端部と狭端部の識別は確実ではない。広端側から狭端側に凸面上を叩き締めたと考え、粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面は、両端縁辺を除いて、調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上だけは、ナデ調整を施して重ね目を消す。凹面は平滑であり、両側縁（あるいは片側縁）には「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布へ」と「布ヨ」を使う。「布へ」の布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋へ平1」、「布袋へ平2」と表記する。また、綴じ合わせ痕が認められない布袋の末端に特徴的なかがり縫いが認められるものがあり、「布袋へ平0†」と表記するが、あとで述べる平瓦Ⅱ0 Ca群と平瓦Ⅱ0 Za <v> 群の平瓦の造瓦にも使われる。「布ヨ」の布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋ヨ平1」と表記する。

凸面には、部分的に横方向のナデ調整①21を施すものがあるが、この群の平瓦の大半には叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は平行叩き [Ac] で、右上がりの斜め方向に円弧を描くように叩き締める。今のところ1例だけを認めるが、この群とする資料のなかにも端縁部に補助叩きの施されるものがある（平21）。補助叩き目は平行叩き (+Ae) で、端縁に対して右上がり

の方向で広端縁部に付加されている。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。大半のもの側面調整は分割後の調整を施さない②0であるが、凸面側に傾けて分割断面をヘラケズリする②22や、凹凸両面側に傾けてヘラケズリする②24も認められる。端面は、狭端面がナデ調整で丸くおさめられているが、広端面は平坦におさめられている。広端側は調整を施さないものが多いが、凹面側に面取りを施すものもある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや軟質でパサパサした感じを与え、色調は灰色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Ad] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ad] (+Ad) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ad] (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ad] (+Bt) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ad] (+Cn) 群 (図版63 写真155-平25, 26)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.7~2.1cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕が残る。桶器具痕などは残存状況から観察できない。糸切り痕、枠側板圧痕も認められない。粘土板の重ね方はZ型である。凹面は広端部を除いて、調整を施さない③0である。広端から2.5cmほどの範囲に、右から左にヘラケズリ調整③2を施す。

布袋には「布ヌ」、「布ヨ」と「布ナ」を使う。「布ヌ」の布袋は綴じ合わせ痕から「布袋ヌ平5」と表記する。「布ヨ」の、および「布ナ」を共足した布袋は、綴じ合わせ痕が観察できないので「布袋ヨ平0」、「布袋ナ+ナ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものがあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面に付加する補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Ad] である。補助叩き目には、平行叩き (+Ad)、(+Ae)、正格子叩き (+Bt)、斜格子叩き (+Cn) が確認される。Adの平行叩きは、主要叩き [Ad] のときも補助叩き (+Ad) のときも、端面に対して右上がりの斜め方向に施す。補助叩きが、両端面に施されているのかどうかは不明である。

桶をはずしてからの分割については、側面部を残す資料がないため分からない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰青色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰白色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Ae群・平瓦Ⅱ0 Ae (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Ae (+Ag) 群・平瓦Ⅱ0 Ae (+Cn) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ae] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ae] (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ae] (+Ag) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ae] (+Bt) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ae] (+Cn) 群 (図版64 写真154, 155-平27~平29)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.7~2.0cmである。

凹面には、布目圧痕、布袋の足し縫い痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、枠側板圧痕は認めら

れない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。凹面は平滑であり、片側縁には、「5粒／5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布ニ」と「布ナ」をともに共足しして使う。「布ニ」の布袋は、綴じ合わせ痕を確認していないので「布袋ニ+ニ平0」と表記する。「布ナ」の布袋は、綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ナ+ナ平0」、「布袋ナ+ナ平1」と表記する。

凸面には、調整を施さない①0と、横方向のナデ調整を施す①21が一部に認められるが、後者でもナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目は凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端部から端面にかけて付加する補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Ae] で、ほぼ端縁に直交して叩く。補助叩き目には、平行叩き (+Ad)、(+Ae)、(+Ag)、正格子叩き (+Bt)、斜格子叩き (+Cn) の3種類が認められる。補助叩きが両端面ともに施されるかどうかは分からないが、端面だけに施すときと、端部から端面にかけて施すときがある。今のところ、正格子叩きと斜格子叩きは端面だけに、平行叩きは端部から端面にかけてに施されるのを認めている。平行叩きを端部に施すときは、端縁に対して左上がりの斜め方向に、端面に施すときは、端縁に平行して施される。端面だけに施す正格子叩きと斜格子叩きは、ともに端縁に直交させて叩くときと、斜め方向に叩くときがある。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰青色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰白色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Af] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Af] (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Af] (+Af) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Af] (+Cn) 群 (図版64 写真155-平30~平32)

広端幅34.0cmを測る。全長、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.5~2.2cmである。この群の平瓦の出土量は少ない。

凹面には、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕と椀側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。凹面は平滑であり、片側縁には、「5粒／5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布ヌ」、「布ヨ」と「布ナ」を使う。「布ナ」は共足ししている。おのおのの布袋に綴じ合わせ痕を確認できる資料がないので「布袋ヌ平0」、「布袋ヨ平0」、「布袋ナ+ナ平0」と表記する。

凸面には横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目は凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面への補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Af] で、端縁に対して斜め方向に認められ、右上がりもあれば、左上がりもある。補助叩き目には、主要叩きと同じ平行叩き (+Af) のほか、平行叩き (+Ae) と斜格子叩き (+Cn) がある。平行叩き (+Ae) は端面に施され、端縁に対して斜め方向に認める。両端面に施すかどうかは不明である。なお、補助叩きを施さないものもある。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から

広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰青色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰白色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Ag] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ag] (+Ag) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ag] (+Bt) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ag] (+Cn) 群 (図版65 写真116, 153, 158—平33~平36)

広端幅が32.5cm、狭端幅は31.0cmを測る。全長は不明である。素材は粘土板で、厚さは約1.6cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の足し縫い痕、補助叩き目、桶器具痕などが残る。糸切り痕、枠側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方にはZ型が確認されている。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端面にナデ調整③1を施したり、補助叩きを施すものが稀にある。凹面は平滑であり、片側縁には、「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布ニ」と「布ナ」を使う。綴じ合わせ痕あるいは縫い合わせ痕から「布袋ニ平1」、「布袋ナ平2」、「布袋ナ+ナ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目は凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端部から端面にかけて付加する補助叩き目がある。主要叩き目は平行叩き [Ag] で、端縁にほぼ直交して認める。補助叩き目には、平行叩き (+Ag)、正格子叩き (+Bt) と斜格子叩き (+Cn) の3種が、今のところ確認されている。補助叩きが両端面に施されるのかどうかは不明である。正格子叩きは端部の凹凸両面と端面に、平行叩きと斜格子叩きは端面だけに施すものが、今のところ認められている。端部では端縁に対して斜め方向に施す。端面には端縁に直交して施すときもあれば、斜め方向に施すものもある。なお、補助叩きを施さない例もある。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰黒橙色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Ah] 群 (図版66, 67 写真116, 117, 155—平37~平39)

全長が39.5~40.6cm、広端幅は33.2~35.5cm、狭端幅は31.7~33.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕はほとんどの資料には認められないが、数少ない例に、右上から左下への方向に湾曲して認められる。なお、枠側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消す。凹面は平滑であり、片側縁には「5粒/

5 cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には、「布ヨ」と「布ム」を縫い足して使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ヨ+ム平1」と表記する。この布袋は、あとで述べる平瓦Ⅱ0 Za* [Aj] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群・平瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群、および平瓦Ⅱ0 Za [Ba] 群の平瓦を造るのに共通して使われる。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施すものがあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は平行叩き [Ah] で、縦方向、横方向、右上がりおよび左上がりの斜め方向を組み合わせた叩き目である。右から左へと、広端部から狭端部に3～4段に重複的に叩き上げていくが、最下段だけは両斜め方向の叩き目を綾杉状に残す丁寧な叩きを施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。端面は狭端面、広端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色、灰色などを呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za* [Aj] 群 (図版67 写真155-平40, 平41)

残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕と柁側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方には「S型」が確認できている。凹面には調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消す。

布袋には「布ヨ」と「布ム」を縫い足して使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ヨ+ム平1」と表記する。ただし、図示したものにはすべて綴じ合わせ痕の部分が残っていない。なお、「布袋ヨ+ム平1」とする布袋は、平瓦Ⅱ0 Za [Ah] 群のほかに、あとで述べる平瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群・平瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群、および平瓦Ⅱ0 Za [Ba] 群の平瓦を造るのに共通して使われる。

凸面には、叩き目の原体でカキ目調整①4 1を施すが、カキ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は平行叩き [Aj] で、端縁に直交して右から左へと叩き締めたのち、その上に同じ叩き板を使ってカキ目を狭端部から広端部への方向に施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。端面は狭端面、広端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は灰白色や黄褐色を呈するものが多い。

平瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群・平瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群 (図版68～70 写真117～119, 140, 141, 156-平42～平49)

全長が40.6～42.0cm、広端幅は34.5cm前後、狭端幅は29.0～31.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さ

は約2.0cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕および粹側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面には調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上だけは、ナデ調整を施して重ね目を消す。凹面は平滑であり、両側縁（あるいは片側縁）には「5粒／5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

この群の平瓦のなかには、狭端縁の中央に直径が3.5～3.8cm、深さは0.2cmを測る円形の窪みを布目の下に確認できるものがある（平44，平45）。その位置からみて、桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と考えられるが、その機能は不明である。この円形の窪みは、決まって狭端部の中央にあるが、全円形が残されているもののほか（写真141：平45）、上半部が縁より外にはみ出して下半部の半円しか認められないものもある。おそらく桶の上に粘土板を巻き付けるときに、個体によって若干上下にずれることが生じたのであろう。

布袋には「布ヌ」、および「布ヨ」に「布ム」を縫い足したものを使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ヌ平2」、「布袋ヨ+ム平1」と表記する。「布袋ヌ平2」とする布袋は平瓦Ⅱ0 Za [Aa] 群の平瓦を造るのに、また「布袋ヨ+ム平1」とする布袋は平瓦Ⅱ0 Za [Ah] 群、平瓦Ⅱ0 Za* [Aj] 群の平瓦のほか、あとで述べる平瓦Ⅱ0 Za [Ba] 群の平瓦を造るのに共通して使われる。

凸面には、部分的に横方向のナデ調整①2 1を施すものと、叩き目の原体でカキ目調整①4 1を施すものがある。ナデ目またはカキ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は平行叩き [Ak] で、縦方向、右上がりと左上がりの両斜め方向の叩き目を組み合わせて認める。右から左へと縦方向の叩き目がつくように、広端部から狭端部へ3～4段に叩き締めたのちに、その上に重ねて、両斜め方向の叩きを交互に繰り返して叩き締める。さらにその上に部分的にナデ調整を施して仕上げるものと、同じ叩き板を使ってカキ目調整を、狭端部から広端部への方向に施すものがある。このカキ目調整を施す範囲も、全面に施して、ほとんど洗濯板風の見かけを呈するまでになっているものと、極小範囲にしか施さないものまで、個体によって様々である。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。端面は狭端面、広端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、暗灰色を呈するものがある。

なお、平瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群とする平瓦には、広端幅および狭端幅は不明であるが、全長が29.1cmと小さいサイズのものを確認している（平49）。造瓦の仕方、使用布など、普通サイズのものを作るのとまったく変わらない。道具瓦と認定すべきであろうが、不定形に被損しているので、具体的に機能形態を想定できない。ここに特記しておく。

平瓦Ⅱ0 Za [Am] 群（図版71 写真119, 154, 156—平50～平53）

全長が39.0cm、広端幅は34.5cm前後、狭端幅は31.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.3～2.0cm

である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕や枠側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面には調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上だけは、ナデ調整を施して重ね目を消す。凹面は平滑であり、両側縁（あるいは片側縁）には「5粒／5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布ヨ」に「布イ」を縫い足して使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ヨ+イ平1」と表記する（写真119：平50-1）。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものもあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は平行叩き [Am] で、横方向に重ねて施されていて、格子叩きと見誤りそうになる。しかし、格子が規則的に認められないことと、格子を構成するはずの縦線と横線に切り合い関係が規則的でないことから、平行叩きと認定する。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。大半の側面調整は②0で、分割後の調整を施さないが、分割断面を凸面側に傾けて削る②22や、凹凸両面側に傾けて削る②24もある。端面は狭端面がナデ調整によって丸くおさまられるが、広端面は平坦におさまられている。広端部は調整を施さないものが多いが、凹面側に面取りを施すものもある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色または灰色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、白灰色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Ba] 群（図版72 写真120, 156-平54～平56）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、狭端幅などは不明である。広端幅は33.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕や枠側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。なお、粘土板の重ね目が凸面側に認められる例がある（写真120：平56）。凹面調整は、広端と狭端の両縁部を除いて、調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上だけは、ナデ調整を施して重ね目を消す。凹面は平滑であり、両側縁（あるいは片側縁）には左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布ヨ」を使う。この群とする平瓦では、「布ヨ」の布目圧痕しか認めないが、その綴じ合わせ痕を認める布袋が、ほかの群とする平瓦を造るのに使われていて、そこに粗い織り目の「布ム」を狭端側で足しているため、「布袋ヨ+ム平1」と表記できよう。この布袋は、平瓦Ⅱ0 Za [Ah] 群、平瓦Ⅱ0 Za* [Aj] 群、平瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群、および平瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群の平瓦を造るのに共通して使われる。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものもあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は正格子叩き [Ba] で、端縁にほぼ平行して叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から

広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。端面は狭端面、広端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、赤褐色あるいは灰茶色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群 (図版73 写真156-平57~平60)

軒平瓦 A A5群に接合される平瓦部 (図版20, 21: 軒平20~軒平22, 軒平26~軒平28) に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

この群とする資料は、平瓦としては残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。この群の平瓦を平瓦部に使う軒平瓦に法量を求めると、全長が42.5cm、狭端幅は33.5cm、広端幅は34.0cmを測ることが分かる。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、粘土板の重ね目、椀側板圧痕は認められない。

布袋には「布ル」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル平1」と表記する。この群の平瓦の端縁近くに、「布ル」とは認定し切れないものの、共布に似た布をぐし縫いで縫い足した痕跡を残すものがあり (平60)、これについては「布袋ル+ル平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものもあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭がかすかに残る。叩き目は正格子叩き [Bb] である。叩き方も判じがたくなっているが、端縁に対して若干の曲線を描くので、円弧を描くように叩き締めると推測できる。

桶をはずしてから分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。この群のなかに今のところ1例だけ、分割後に側面を凹凸両面側に面取りするもの②24を認める。この平瓦は、布目圧痕がほとんど見えなくなるほど凹面を縦方向に丁寧になで消しているだけでなく、焼き締まりもよく、ほかの瓦とは様子が異なる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、軟質でかなりパサパサした感じを与え、黄褐色や灰茶色を呈するものが多いが、稀にやや硬質で灰青色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Bc] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bc] (+Bt) 群 (図版73 写真156-平61)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.8cmである。

凹面には、布目圧痕が残るが、糸切り痕、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕などは分からない。椀側板圧痕は必ずしも明瞭には残らないが、綴じ紐圧痕と椀側板圧痕を残す他の群の平瓦と類似する要素が多い。この群の平瓦を造るのにも、椀側板を紐で綴じ付けた桶を使っていた可能性が高いと思われる。

布袋には「布チ」を使う。図化した例には綴じ合わせ痕を認めないが、それ以外に、綴じ合わせ

痕から、確実に「布袋チ平1」と表記できるものがある。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものもあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭がかすかに残る。叩き目は、凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端面を叩き締める補助叩き目がある。主要叩き目は正格子叩き [Bc] で、端縁に対して斜め方向に叩き締める部分もあれば、平行あるいは直交して叩き締める部分もある。補助叩き目は正格子叩き (+Bt) で、端縁に対して斜め方向に叩いている。

桶をはずしてからの分割については、側面部を残す資料がないので分からない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Bd群 (図版73 写真154, 156—平62, 平63)

この群とする資料は残存状況が悪く、広端幅、狭端幅などは不明である。ただし、ひつつく資料を見つけたので、全長は42.6cmを測ることが分かる。素材は粘土板で、厚さは1.5cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕や榨側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は平滑であり、片側縁には左撚りを見せる分割界線が残る。凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左へとヘラケズリ調整③2を施すものもある。

布袋には「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ソ平0」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡が明瞭に残る。叩き目は正格子叩き [Bd] である。広端部から狭端部に、右から左へ円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目は端縁に平行するように認められる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。分割後の側面調整には、凹凸両面側に傾けてヘラケズリを施す②24と、調整を施さない②0が認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は軟質で、色調は明橙色や、赤褐色または茶褐色を呈するものが多いが、灰褐色のものもある。

平瓦Ⅱ0 Be群 (図版74 写真141, 156—平64～平66)

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は認められないものが多いが、左上から右下への方向に湾曲して認められる例もある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は平滑であり、榨側板圧痕は認められない。基本的には調整を施さない③0であるが、広端部に右から左へヘラケズリ調整③2を施すものがある。この群の平瓦のなかに、布目圧痕の下に円形の窪みが確認できる例がある (写真141:平65)。直径は約3.5cm、深さ0.2cmを測る円形の窪みである。桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と考え

られるが、その機能は不明である。

布袋には、「布ル」と「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル平1」、「布袋ソ平1」と表記する。ともに図示した例には綴じ合わせ痕を認めない。なお、「布ソ」に「布ル」を足した布の布袋があり、狭端部の、先に述べた円形の窪みの右側3.0cmほどのところに、わずかに「布ル」を補足布としているだけである。その布には綴じ合わせ痕が認められないので「布袋ソ+ル平0」と表記する。ただし、「布ル」が帯状に足し縫いされるのではなく、部分的にだけ使われるので、「布袋ソ平1」とした布袋と同一である可能性が残る。

凸面には、叩き目の痕跡が明瞭に残る。叩き目は正格子叩き [Be] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認められる。なお、[Be] の正格子叩き目は、格子のなかに入る傷の具合から時間差の使用が窺え、傷が1ヶ所の0段階（平64）と、傷が2ヶ所に増える1段階（平65，平66）に分けることができる。ただし、段階の違いに応じての造瓦技術に差はない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹凸両面側に傾けて削る②24、凹面側だけに傾けて削る②23、調整を施さない②0が認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は軟質で、色調は明橙色、赤褐色あるいは茶褐色を呈するものが多いが、灰褐色のものもある。

平瓦Ⅱ0 Bf群・平瓦Ⅱ0 Bf×Be群（図版74 写真156, 157, 164—平67～平70）

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.9cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、左上から右下への方向に湾曲して認められる例もある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。分割界線などの桶器具痕も、分割後の調整のために観察できない。

布袋には「布ル」と「布ソ」を使う。「布ル」の布袋は綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ル平0」と表記し、「布ソ」の布袋は綴じ合わせ痕から「布袋ソ平1」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡が残る。叩き目は正格子叩き [Bf] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部で端縁に平行するように叩き目が認められるものがある。[Bf] の正格子叩き目は、格子のなかに入る傷の具合から時間差の使用が窺え、傷が1ヶ所の0段階（平69）と、傷が2ヶ所に増える1段階（平68，平70）に分けることができる。ただし、段階の違いに応じての造瓦技術に差はない。凸面の叩きには、[Bf]（1段階）の叩き板を主体的に使用し、側縁側の約4.0cmの範囲にだけ側縁に沿うようにして、[Be]（0段階）の叩き板が使われる例がある（平67）。この瓦を造っているあいだに叩き板に傷が生じたと推測できる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹凸両面側に傾けて削る②24、凹面側だけに傾けて削る②23、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は軟質で、色調は明橙色、赤褐色あるいは茶褐色を呈するものが多いが、灰褐色のものもある。

この群の1段階の資料には、凸面を見るようにして、狭端部の左隅を切り落とすものが確認されている。1回ですっぱりと切り落とすのではなく、狭い範囲を3回程度に分けて、角面を取るように落とし、個体によっては隅丸の観を呈するようになっている(平69, 平70)。

またこの群とする資料には、広端縁から狭端部の方へ20.0cmほどの範囲と、側縁から中央へ4.0cmほどの範囲を除いて、中央部から狭端縁の範囲で、凹面の表面が荒れたものが多く認められる(平70)。この荒れた範囲が屋根の上にあって晒されていた表面の範囲と思われる。

平瓦Ⅱ0 Bg群 (図版74 写真157-平71, 平72)

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、左上から右下へ湾曲して認められる例もある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。分割界線などの桶器具痕も、分割後に調整が施されていて観察できない。

布袋には「布ル」と「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ル平0」、
「布袋ソ平0」、「布袋ソ+ル平0」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡が残る。叩き目は正格子叩き [Bg] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認められる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は軟質で、色調は明橙色、赤褐色あるいは茶褐色を呈するものが多いが、灰褐色のものもある。

なお、この群とする資料は凹面側に荒れた部分を残すものが多い。その位置については、資料の残りが悪いため明らかではない。

平瓦Ⅱ0 Bh群 (図版75 写真157-平73~平76)

軒平瓦AA6群(図版22:軒平34~軒平38)、あるいは軒平瓦AA7群(図版22:軒平42)に接合される平瓦部に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

この群とする資料は残存状況が悪く、全長は41.0cm以上あるのが分かるが、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、左上から右下への方向、あるいは右上から左下への方向に湾曲して認められる例がある。粘土板の

重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。片側縁に左撚りを見せる分割界線が残る。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左へヘラケズリ調整③2を施すものもある。この群の平瓦のなかに、布目の下に円形の窪みが確認できる例がある。

布袋には「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ソ平2」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡が明瞭に残る。叩き目は正格子叩き [Bh] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認める。正格子叩き目 [Bh] は、叩き板の潰れ具合から時間差の使用が窺える。叩き板に傷を認めない0段階と（平73, 平74）、叩き板の右角の4つの格子が潰れてなくなる1段階（平75, 平76）に分けることができる。ただし、段階の違いに応じての造瓦技術に差はない。また、1段階の叩き板を使用した平瓦のなかに、全面を叩き締めていないものが1例だけ認められる（平76）。狭端側だけが円弧を描くように叩き締められるが、叩き締めの範囲が狭いだけで、叩き方はほかの例と変わらない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹凸両面側に傾けて削る②24、凸面側だけに傾けて削る②22、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は軟質で、色調は明橙色、赤褐色あるいは茶褐色を呈するものが多いが、灰褐色のものもある。

この群の1段階の資料に、凸面を見ることにして、狭端部の右隅を切り落とすものが確認されている。1回ですっぱりと切り落とすのではなく、狭い範囲を3回程度に分けて、角部を取るよう落とし、個体によっては隅丸の観を呈するようになっている。

平瓦Ⅱ0 Bj群（図版75, 76 写真141, 142, 157—平77～平81）

この群とする資料は残存状況が悪いものの、全長は41.0cm、広端幅が33.5cmであるのが分かる。狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.1cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、右上から左下への方向に湾曲して認められる例がある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。片側縁（あるいは両側縁）に左撚りを見せる分割界線が残る。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左へとヘラケズリ調整③2を施すものがある。この群の平瓦のなかに、布目の下に円形の突出が確認できるものがある（写真141：平79）。突出は、残りの状況が悪いので、正確な直径を測ることができないが、平瓦の狭端部側にあり、高さ約0.2cmを測る。

布袋の大半には「布ソ」を使うが、「布ル」と「布カ」も使う。「布ソ」の布袋は綴じ合わせ痕から「布袋ソ平1」と表記する。「布ル」と「布カ」の布袋には綴じ合わせ痕が確認できていないので、「布袋ル平0」、「布袋カ平0」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡が、そして一部資料に叩き板の輪郭が残る。叩き目は正格子叩き [Bj] である。凸面全体に叩き締めを密に施す場合（平77～平80）と、粗に叩き締める場合（平81）の2

種類がある。密な叩き締めは、広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認められる。粗の叩き締めは、残存状況が悪いため叩き方を細かく観察できないが、叩き方は密な場合と同じであって、その間隔がきわめて粗いために叩き方が違う見かけを呈するようになったと思われる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹凸両面側に傾けて削る②24、凸面側だけに傾けて削る②22、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は軟質で、色調は明橙色、赤褐色あるいは茶褐色を呈するものが多いが、灰褐色のものもある。

なお、この群とする平瓦には、凸面に指紋の残るものが多い（写真142）。

平瓦Ⅱ0 Bk群（図版76, 77 写真140, 141, 154, 157—平82～平90）

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは約1.9cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、左上から右下への方向に湾曲して認められる例もある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は凹凸に見えるが、枠側板圧痕は認められない。片側縁（あるいは両側縁）に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る例がある（写真140：平89）。狭端部では左から右への方向に、広端部では右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施すものがあるが、さらに別に調整を施さないもの③0もある。なお、粘土板の重ね目の上にナデ調整を施すものも認められる。この群の平瓦の布目の下に、狭端側で円形の窪みを、また広端側に長方形の窪みを確認できる例がある。円形の窪みは直径が約4.0cmを測るほぼ正円のもの（平83, 平85）、長径が約4.2cm、短径は約3.3cmの楕円形のもの（写真141：平84）がある。いずれも深さは0.2～0.3cmを測り、その窪みの中央には窪みを分割するように0.5～0.8cm幅の突線が通る。突線の高さは0.1～0.2cmである。長方形の窪みは、長さが3.5cm、幅は約0.8cmで、端縁に平行する方向で認められる（平86, 平88）。その位置は広端縁から狭端側に7.0cmほど上がる場所である。これら円形と長方形の窪みが上下を違えて、端縁に直交する同じ線上にあるのかどうかは分からない。

布袋には「布タ」と「布ホ」を使う。綴じ合わせ痕あるいは縫い合わせ痕から「布袋タ平1」、「布袋タ+ホ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施したのちに、叩きを施す。叩き目は正格子叩き [Bk] である。広端部から狭端部に、右から左へと粗く叩き締める。狭端部では右上がりの斜め方向に叩き締めるが、一部の資料の広端部では、端縁に平行するように叩いている。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、凹凸両面側に傾けて削る②24がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻な感じを与えるが、瓦の質がもろく

ブロック状に崩れる傾向がある。色調は茶褐色、黄褐色あるいは灰白色を呈する。なお灰白色のものはブロック状に崩れない。

この群の平瓦のなかには、布目圧痕が凸面の中央に残る例がある。その布目圧痕は凹面に認められる「布タ」や「布ホ」のものではなく、「布レ」のものである。この事実は、これらの3種類の布が同時に用いられたことを示している。

平瓦Ⅱ0 Bm群（図版78 写真154, 157—平91～平94）

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは約1.8cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、左上から右下への方向に湾曲して認められる例もある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は凹凸に見えるが、枠側板圧痕は認められない。片側縁に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る例がある。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、狭端部には左から右への方向に、広端部では右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施すものもある。また粘土板の重ね目をなで消すものもある。

布袋には「布レ」と「布ホ」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋レ+ホ平1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施したのち、叩きを施す。叩き目は正格子叩き [Bm] である。広端部から狭端部に、右から左へと粗く叩き締めている。狭端部では右上がりの斜め方向に叩き締めるが、広端部では部分的に、叩き目が端縁に平行するように認められる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、凹凸両面側に傾けて削る②24がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻な感じを与えるが、瓦の質がもろくブロック状に崩れる傾向がある。色調は白灰色を呈するものが多いが、茶褐色や黄褐色を呈するものもある。なお灰白色のものはブロック状に崩れない。

この群とする資料には、凸面を見るようにして、狭端部の右隅を切り落とすものが確認されている。隅を斜めに長く切り落としているため、側縁がゆがんでいるように見える。

平瓦Ⅱ0 Bn群（図版78 写真158—平95～平97）

この群とする資料は残存状況が悪く、広端幅が32.0cmであるのが分かるが、全長、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、右上から左下への方向に湾曲して認められる例がある。粘土板には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面は凹凸に見えるが、枠側板圧痕は認められない。片側縁に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る例がある。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、狭端部では左から右への方向に、広端部では右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施すものもあり、そのほかに、粘

土板の重ね目をなで消す例も一部に認められる。この群の平瓦の布目圧痕の下に、狭端側で楕円形の突出が確認できる例がある。楕円形の突出は、長径が約3.7cm、短径が約3.1cm、高さは約0.2cmを測る。

布袋には「布タ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋タ平1」、「布袋タ平2」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施したのちに、叩きを施す。叩き目は正格子叩き [Bn] である。広端部から狭端部に右から左へと粗く叩き締める。狭端部では右上がりの斜め方向に叩き締めるが、広端部では部分的に、叩き目が端縁に平行するように認められる。

桶を外してからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、凹凸両面側に傾けて削る②24がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻な感じを与えるが、瓦の質がもろくブロック状に崩れる傾向がある。色調は茶褐色、黒褐色、黄褐色あるいは白灰色を呈する。

平瓦Ⅱ0 Bp群・平瓦Ⅱ0 Za [Bp] 群 (図版78 写真158-平98, 平99)

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、右上から左下への方向に湾曲して認められる例もある。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施す例もある。

布袋には「布カ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋カ平0」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は正格子叩き [Bp] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認められる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒の大きな粒、石英、長石などが鉱物粒として多量に含まれる。焼成度は大半が軟質で、色調は暗灰白色のものが多いが、茶灰色のものも認められる。

平瓦Ⅱ0 Bq群・平瓦Ⅱ0 Za [Bq] 群 (図版78, 79 写真120, 140, 158-平100~平106)

軒平瓦A A 5群に接合される平瓦部 (図版21: 軒平29~軒平31) に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

全長が42.5cm、広端幅は33.7cm、狭端幅は29.7cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.3~2.8cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。

糸切り痕は、左上から右下への方向に湾曲するものが認められる。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。片側縁に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残るものがある（写真140：平101）。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施す例もある。この群の平瓦のなかには、狭端部の中央に3.5～3.8cmの直径で、深さは0.2cmを測る円形の窪みが、布目圧痕の下に確認できるものがあり（平100）、その位置からみて、桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と思われるが、その機能は不明である。

布袋には「布カ」と「布ル」を使う。綴じ合わせ痕あるいは縫い合わせ痕から「布袋カ平1」、「布袋カ平2」、「布袋カ平3」、「布袋カ+ル平0」と表記する。

凸面には、叩き目が残る。叩き目は正格子叩き [Bq] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認められる。なお広端部の叩き目を一部まで消すものもある。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、調整を施さない②0がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒の大きな粒、石英、長石などが鉱物粒として多量に含まれる。焼成度は大半が軟質で、色調は暗灰白色のものが多いが、茶灰色のものも認められる。

平瓦Ⅱ0 Br群・平瓦Ⅱ0 Za [Br] 群（図版79, 80 写真158—平107～110）

軒平瓦A A5群と接合される平瓦部（図版20：軒平23, 軒平32）に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施すものもある。

布袋には「布ル」と「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ル平1」、「布袋ソ平3」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は正格子叩き [Br] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めるため、広端部では一部の叩き目が端縁に平行するように認められる。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けて削る②23と、調整を施さない②0がある。後者が多い。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒の大きな粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石などが鉱物粒として含まれる。焼成度は大半が軟質かやや硬質で、前者の色調は黄褐色や暗灰白色のものが多いが、後者は暗灰色である。

平瓦Ⅱ0 Bs群・平瓦Ⅱ0 Bs (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Bs (+Cn) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bs] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bs] (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Bs] (+Af) 群 (図版80, 81 写真121, 158—平111~120)

全長が35.4~38.5cm、広端幅は30.5~33.1cm、狭端幅は27.8~32.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは18.0~22.0cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の縫い合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、枠側板圧痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、片側縁には、「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。凹面調整を施さない③0である。この群の平瓦のなかには、狭端縁の中央に直径が3.3cm前後、深さは0.2cmを測る円形の窪みが、布目圧痕の下に確認できるものがあり(平116)、その位置からみて、桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と思われるが、その機能は不明である。

布袋には「布ヌ」、「布ヨ」と「布ナ」を使う。「布ヌ」と「布ナ」の布袋は綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋ヌ平5」、「布袋ヌ+ヌ平1」、「布袋ナ平1」、「布ナ+ナ平0」、「布ナ+ナ平2」と表記する。「布ヨ」の布袋は図示したものには綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕を認めないが、「布袋ヨ+ヨ平1」と表記できる例が確実にある。なお、縫い合わせてはいないが、「布ナ」の布目圧痕の上に、「布ロ」の布目圧痕を認める例がある。また、この群とする平瓦を半割して造った割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Bs] 群のなかに、「布袋ヌ+ヌ平0」と表記できる例(熨斗8)がある。

凸面には、叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。調整を施さない①0と一部に横方向のナデ調整を施す①21があるが、後者でもナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目は凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端部から端面にかけて付加する補助叩き目がある。主要叩き目は正格子叩き [Bs] で、端縁にほぼ直交して認められる。補助叩き目には平行叩き (+Ae)、(+Af) と斜格子叩き (+Cn) がある。主要叩きは、右から左へと狭端側から広端側に数段にわたって叩き締める。

補助叩きについては、両端面に施すもの、広端面にだけ施すもの、そのどちらにも施さないものがある。広端面については、端面だけに施すものと、端面だけでなく端縁部にも施すものがある。凸面を見るようにしたとき、端縁部の平行叩き (+Ae) と (+Af) は端縁に対して右上がりの斜め方向に施し、端面のものは端縁に平行する方向、あるいは右上がりの斜め方向、さらには左上がりの斜め方向に施す。斜め方向で端面に施すもののなかには、右上がりの方向にと左上がりの方向にを重ね合わせて施して斜格子のように見える例もある(平117)。補助叩きとして斜格子叩き (+Cn) を施すものは端面だけに認められる(平118)。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色や青灰色、灰青色、茶褐色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰白色、明橙色または灰赤褐色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Ca群 (図版82 写真158—平121~平123)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cmである。

凹面には、布目圧痕が残るが、糸切り痕、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などは不明である。凹面は平滑である。広端と狭端の両縁部を除いて、調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上だけは、ナデ調整を施して重ね目を消す。片側縁に、左撚りを見せる分割界線が残る。

布袋には「布へ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋へ平2」と表記する。このほかにも特徴的なかがり縫いを認めるものがあり、その布袋については「布袋へ平0十」と表記する。「布袋へ平0十」とする布袋は、すでに述べたように平瓦Ⅱ0 Za [Ac] 群と、あとで述べる平瓦Ⅱ0 Za <v> 群の平瓦を造るのにも使われている。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施すものもあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭の一部が残る。叩き目は斜格子叩き [Ca] である。凸面全体を粗く叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、破面を残さないように切り離れたのち、調整を施さない②0が多いが、凸面側に傾けてヘラケズリ調整②2 2を施すものも認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。めくれて肌分かれするような崩れ方をしている。焼成度は軟質でパサパサした感じを与える。色調は明橙色、赤褐色あるいは灰茶色を呈する。

平瓦Ⅱ0 Cb群 (図版82 写真158—平124～平127)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cmである。

凹面には、布目圧痕、桶器具痕が残るが、糸切り痕、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕などは不明である。凹面は平滑であり、椀側板圧痕は認められない。狭端側には円形の突出を認める。

布袋には「布タ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋タ平1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①2 1を施したのちに、叩きを施す。叩き目は斜格子叩き [Cb] である。右から左へ粗く叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さないのが基本的であるが、凸面側に傾けてヘラケズリ調整②2 2を施すものも認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻な感じを与えるが、瓦の質がもろくブロック状に崩れる傾向がある。色調は茶褐色、黒褐色、黄褐色、赤褐色あるいは白灰色を呈する。

平瓦Ⅱ0 Cc群 (図版82 写真141, 158—平128～平132)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.9～2.7cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕が残るが、糸切り痕、布袋の綴じ合わせ痕などは不明である。粘土板の重ね方はZ型である。凹面は凹凸に見えるが、椀側板圧痕は認められない。

片側縁（あるいは両側縁）に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る例がある。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部に右から左への方向にヘラケズリ調整③2を施すものもある。この群の平瓦の布目圧痕の下に、狭端側に円形の突出を認める例（写真141：平129）と、長方形の窪みを認める例（写真141：平132）がある。円形の突出は直径が約3.1cmのほぼ正円で、高さは0.2～0.3cmを測る。長方形の窪みは長さが3.7cm、幅は約0.8cmで、端縁に平行する方向で認められる。その窪みは狭端縁から広端側に約5.5cm下がるところにある。

布袋には「布タ」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋タ平1」、「布袋タ+タ平1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施したのちに、叩きを施す。叩き目は斜格子叩き [Cc] である。右から左へ粗く叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凸面側だけに傾けて削る②22と、凹凸両面側に傾けて削る②24がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻な感じを与えるが、瓦の質がもろくブロック状に崩れる傾向がある。色調は茶褐色、黒褐色、黄褐色、赤褐色あるいは白灰色を呈する。

なお、この群とする資料には、狭端部の隅を切り落とすものが確認されている（平132）。隅を斜めに長く切り落とすため、側縁がゆがんでいるように見える。

平瓦Ⅱ0 Cd群（図版83 写真159—平133, 平134）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.2cmである。

凹面には、糸切り痕、布目圧痕が残るが、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などは不明である。糸切り痕は左上から右下への方向に湾曲して認められる。凹面は凹凸に見えるが、枠側板圧痕は認められない。側縁部に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る例がある。

布袋には「布タ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋タ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施したのちに、叩きを施す。叩き目は斜格子叩き [Cd] である。右から左へ粗く叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は、凹凸両面側に傾けて削る②24である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻な感じを与えるが、瓦の質がもろくブロック状に崩れる傾向がある。色調は茶褐色、黒褐色、黄褐色、赤褐色あるいは白灰色を呈する。

平瓦Ⅱ0 Ce群・平瓦Ⅱ0 Za [Ce] 群・平瓦Ⅱ0 Ce×Ck群（図版83 写真159, 164—平135, 平136）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6cm前後である。

凹面には、糸切り痕、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残るが、粘土板の重ね目、桶器具痕

などは不明である。ただし、残存状況の悪さから糸切り痕の方向を知ることはできない。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。

布袋には「布ル」、「布カ」と「布ソ」を使う。「布カ」を主体布、「布ル」を補足布とする布袋は、綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋カ+ル平1」と表記する。「布ル」だけ、および「布ソ」の布袋には綴じ合わせ痕が認められないので「布袋ル平0」、「布袋ソ平0」と表記する。なお、「布ソ」の布袋の布目圧痕の例は図示していない。

凸面には、叩き目が残る。一部に叩き目の上に横方向のナデ調整①21を施すものもある。叩き目は斜格子叩き [Ce] である。なお斜格子叩き [Ck] を併用する例も認められる (平136)。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は、凹凸両面側に傾けて削る②24である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でかなりパサパサした感じを与え、色調は明茶橙色、黄褐色あるいは灰茶色を呈するものが多い。

平瓦Ⅱ0 Cf群・平瓦Ⅱ0 Za [Cf] 群 (図版83 写真159—平137～平140)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6cm前後である。

凹面には、糸切り痕、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残るが、残存状況の悪さから糸切り痕の方向を知ることはできない。粘土板の重ね目も不明である。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。側縁部に棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る例がある。

布袋には「布ル」、「布カ」と「布ソ」を使う。ともに綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ル平0」、「布袋カ平0」、「布袋ソ平0」と表記する。

凸面には、叩き目が残る。なお、一部に叩き目の上に横方向のナデ調整①21を施すものも認められる。叩き目は斜格子叩き [Cf] で、密に施される。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹凸両面側に傾けて削る②24、凹面側だけに傾けて削る②23、調整を施さない②0が認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でかなりパサパサした感じを与え、色調は明茶橙色や黄褐色、灰茶色を呈するものが多い。

平瓦Ⅱ26 Za [Cg] 群 (図版83 写真139, 140—平141)

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。確実にこの群と認定できる資料は、今のところ1例しか確認できていない。素材は粘土板で、厚さは2.0cmである。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は、凹面にかすかに残り、左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方は不明である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、広端部にヘラケズリ調整③2を施すものもある。この瓦には、側縁部に本来あるはずの分割界線が中央部に近い位置で認められる (写真140：平141)。瓦の側縁に平行では

なく、わずかではあるが斜めになっている。この分割界線は幅が0.7cmと太く、2段に分けて取り付けられている。上段のものの長さは不明であるが、下段のものは16.0cm以上はある。上段と下段の分割界線が切れる開き間隔は1.5cmほどである。

桶の枡側板圧痕と枡側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の枡側板は、中央で幅が約6.5cm、広端側での幅は7.5cmを測る。平瓦1枚あたりの板の枚数は不明である。枡側板を連結する綴じ紐の圧痕は2段以上にあり、今のところ、「表短目+表長目」として確認できている。綴じ紐圧痕の位置は、上段の「表短目」のものが広端縁から27.0cmほど上がるのところ、「表長目」のものが広端縁から8.4cmほど上がるところである。両者の間隔は約18.5cmである。綴じ紐の本数は、ともに2本どりである。なお、綴じ終わりを示すと思われる玉留めの圧痕のようなものを1つ確認できている。綴じ紐は、撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ平1」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①22を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残るものがある。叩き目は斜格子叩き [Cg] である。

桶をはずしてからの分割は、本来的には分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割すると考えられるが、すでに述べたように出土例のものは分割界線に従って分割されていない。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は堅緻な感じを与えて須恵質で、色調は暗灰色を呈する。

平瓦Ⅱ27 Za [Cg] 群 (図版83, 84 写真139-平142~平146)

この群とする資料は残存状況が悪く、広端幅、狭端幅などは不明であるが、全長は32.0cm以上あることは確認している。素材は粘土板で、厚さは2.0~3.0cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが認められる。糸切り痕は認められない例が多いが、稀に左上から右下への方向に湾曲して認められるものもある(平142)。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上をなで消す。また狭端部にヘラケズリ調整③2を施すものがある。片側縁に「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。桶に撚り紐の分割突線が取り付けられていたことが分かる。撚り紐は2段に分けて取り付けられている。下段のものの長さは14.5cmあり、広端縁から狭端側へ3.0cm上がるのところから上へ付いている。両者の切れる開き間隔は1.5cmほどである。

桶の枡側板圧痕と枡側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の枡側板は、狭端部で幅が約6.5cm、広端側の幅は7.0cm前後を測る。平瓦1枚あたりの板の枚数はおそらく6枚(ただし中央で5枚、両脇が各半枚ずつ)であろう。枡側板を連結する綴じ紐の圧痕は2段に認められ、「表短目+連続目」として確認できる。上段の「表短目」のものは、狭端から広端部に12.5~16.0cm下がるところにある。それは1列にしか認められないと言えるが、近接する2列に認められるところもある。2列に認める場合、その間隔は1.0cm程度である。「表短目」のものから18.5cmほどの間隔をあけて、「連続目」のものがある。「連続目」の綴じ紐圧痕は、広端から5.0~7.5cm上がるところにある。綴じ紐の本数は、ともに2本どりである。ただし、上段の「表短目」のものが2列に認められるところでは、下列の「表短目」のものは1本どりで綴じ付けている。なお、綴じ始めあるいは綴じ終わ

りを示すと思われる玉留めの圧痕のような痕跡や、綴じ紐が隣の枠側板にわたっていない例も認められる（平146）。綴じ紐は、撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ平1」、「布袋ネ平2」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①22が施されるものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残るものがある。叩き目は斜格子叩き [Cg] である。

桶をはずしてから分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。ただし1例だけではあるが、狭端部から広端部に凹面側に傾けてヘラケズリ調整を施す②23が認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものと、やや硬質で灰橙色を呈するもの、軟質で明橙褐色を呈するものなどがある。

なお、凸面のごく小範囲に「布ネ」の布目圧痕を認めるものがある。焼成前の瓦を乾燥させるべく運んだときに、布をあてて持ったのであろうか。

平瓦Ⅱ20 Za [Cg] 群（図版84 写真154, 159—平147～平149）

この群とする資料は、平瓦Ⅱ26 Za [Cg] 群あるいは平瓦Ⅱ27 Za [Cg] 群に含まれる可能性が高いと推測できるが、完形品がなく、枠側板圧痕に綴じ紐が観察できるだけで桶を特定できないことから、便宜的に平瓦Ⅱ20 Za [Cg] 群としておく。

凹面の狭端縁から広端側に2.0cm下がるところに、直径が約1.5cmの突出あるいは窪みが、布目圧痕の下に認められる例がある（平147）。その位置からみて、桶に取り付けられた器具の部分の反映痕と思われるが、その機能は不明である。

造瓦技術については、平瓦Ⅱ26 Za [Cg] 群あるいは平瓦Ⅱ27 Za [Cg] 群とするものと基本的に同じである。この群の平瓦を造るのに使用した布袋については、綴じ合わせ痕から「布袋ネ平3」と表記できるものもある。また、布袋が寸足らずのために凹面に布目圧痕がつかない部分を認めるとき、通常は広端側が多いが、この群の平瓦には、狭端側にそれを認めることが多い（平147, 平148）。枠側板圧痕と綴じ紐圧痕の認められない桶器具を用いて造られたほかの群の平瓦とは異なる。ほとんどの例で布端が垂れ下がったような痕跡を認めることから、粘土板を桶に巻き付けるときに布がずり落ちるような状況が、しばしば起きていたと推測させられる。

平瓦Ⅱ25 Za [Ch] 群（図版85 写真139—平150）

この群とする資料は残存状況が悪く、広端幅、狭端幅などは不明である。確実にこの群に認定できる資料は、今のところ1例しか確認できていない。素材は粘土板で、厚さは2.1cmを測る。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は、見かけでは「Z型」である。凹面は、表面の摩滅が著しいために観察が困難であるが、布目圧痕のつき具合から、おそらく調整を施さない③0であったと思われる。

桶の枠側板圧痕と枠側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の枠側板は、狭端部側での幅は7.0cm

前後、広端部での幅は5.5～6.0cmを測る。平瓦1枚あたりの柾側板の枚数は不明である。この資料には、柾側板を連結する綴じ紐の圧痕が「表短目+表短目」の範囲しか残っていないものの、その残存位置から判断すると、3段以上にあったと推測できる。すなわち「不明+表短目+表短目」と表記すべきなのである。さらに類似するほかの瓦と比較すると、この平瓦の柾側板の狭端部と広端部のそれぞれの幅が、通常のものとは逆転し、狭端部で広く、広端部で狭くなっているのが分かる。桶からはずして分割するときに、広端部を狭く、狭端部を広く截断したと思われる。そこで、3段以上の綴じ紐をもつ資料のなかで、中段と下段に「表短目」の綴じが認められ、なおかつその紐の表面に出る間隔でこの平瓦のものに類似する例を探した。その結果、平瓦Ⅱ25 Za群と表記する平瓦に対する使用を想定する桶を逆さに使って造られたのがこの群の平瓦であると考えに至った。その桶Ⅱ25は、綴じ紐圧痕が「不明+表短目+表短目・表短目」と観察でき、下段にある綴じ紐圧痕は2列に見える。桶を逆転させて使ったこの群の平瓦では見かけ上、その2列の綴じ紐圧痕は最上段にくるべきであるが、唯一残された資料にはその部分が欠損してしまっているのである。先の表記の下線を引いた最初の「不明」に対応する。綴じ紐の本数は、2段の綴じともに2本どりである。綴じ紐は、撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

凹面にはまた「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。本来は側縁に認められるものがあるが、先に述べたように、天地を逆にして瓦を仕上げていることから推察できるように、分割界線(=分割突線)をまったく無視して截断していて、右側縁から5.5cmほど中央寄りに分割界線を残してしまっている。分割突線は桶の上に2段に分けて取り付けられていた。下段の分割突線は12.5cmほどの長さで、広端から約6.0cm上がるころから上に認められる。上段と下段の分割突線が切れて開く間隔は3.0cmほどである。分割界線は側縁と平行ではなく、わずかに右上から左下へと斜めになっている。逆転させて使われた桶の上での分割突線の本来の位置を想定すると、事実は整合する。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕からは「布袋ネ平1」と表記するものを天地を逆にして使用したように見える。また、広端部で布袋の末端部が引きつれていたような見かけを、布目圧痕は呈している。

凸面には、縦方向のナデ調整①22を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残るものがある。叩き目は斜格子叩き[Ch]である。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、瓦上の狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は灰白色を呈する。

平瓦Ⅱ27 Za [Ch] 群 (図版85 写真139, 159-平151~平154)

全長が39.8cm、狭端幅は32.5cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6~2.2cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は、凹面にかすかに残り、左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消す。片側縁に「5粒/5cm」の左撚りを

見せる分割界線が残る。桶に撚り紐の分割突線が取り付けられていたことが分かる。撚り紐は2段に分けて取り付けられている。下段のものの長さは15.5cmで、広端から狭端側に2.5cm上がる場所から上に付いている。上段と下段の分割突線が切れて開く間隔は1.5cmほどである。

桶の杵側板圧痕と杵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の杵側板は、狭端部で幅がほぼ6.0cm、広端側の幅は6.5cm前後を測る。平瓦1枚あたりにほぼ6枚（ただし中央で5枚、両脇が各半枚ずつ）の杵側板で構成される。杵側板を連結する綴じ紐の圧痕は2段に認められ、「表短目+連続目」として確認できる。綴じ紐の圧痕は、上段の「表短目」のものが、狭端縁から広端側に12.0～15.0cm下がるところにある。それから18.0～19.0cmの間隔を開けて「連続目」のものがあり、それは広端から5.0～7.5cm上がる場所にある。綴じ紐の本数は、ともに2本どりである。綴じ紐は、撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

なお、分割界線と杵側板を綴じ付ける紐とが桶に付けられる先後関係は、分割界線が先に取り付けられ、そののちに、杵側板を綴じ付けている（写真139：平152）。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ネ平1」と表記する。布袋が寸足らずであったために凹面に布目圧痕のない部分が生じるときは、通常は広端側にそれを認めることが多いが、この群の平瓦では、狭端側にそれらが認められることが多い。杵側板圧痕と綴じ紐圧痕が認められない桶器具を用いて造られたほかの群の平瓦と異なる。布端が垂れ下がったような痕跡が多く認められることから、粘土板を桶に巻き付けるときに布がずり落ちるような状況が、しばしば起きていたと推測させられる。

凸面には、縦方向のナデ調整①22を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残るものがある。叩き目は斜格子叩き [Ch] である。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色を呈するものと、やや硬質で灰橙色を呈するもの、軟質で明橙褐色を呈するものなどがある。

平瓦Ⅱ20 Za [Ch] 群（図版85, 86—平155～平158）

この群とする資料は、平瓦Ⅱ25 Za [Ch] 群あるいは平瓦Ⅱ27 Za [Ch] 群に含まれる可能性が高いと推測できるが、完形品がなく、杵側板圧痕に綴じ紐が観察できるだけで、桶を特定できない。便宜的に平瓦Ⅱ20 Za [Ch] 群としておく。

造瓦技術については、平瓦Ⅱ25 Za [Ch] 群あるいは平瓦Ⅱ27 Za [Ch] 群の平瓦と基本的に同じであるが、この群の平瓦を造るのに使用した布袋については、綴じ合わせ痕から「布袋ネ平1」と表記するもののほかに、「布袋ネ平2」、「布袋ネ平3」と表記できるものがある。

なお、凸面のごく小範囲に「布イ」の布目圧痕を認めるものがある（平155）。焼成前の瓦を乾燥させるべく運んだとき、布をあてて持ったのであろうか。

平瓦Ⅱ20 Za [Cj] 群・平瓦Ⅱ27 Za [Cj] 群（図版86 写真159—平159～平165）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.5cm前後である。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残るが、糸切り痕、粘土板の重ね目などは不明である。両側縁（あるいは片側縁）に撚りを見せる分割界線が残る。桶に撚り紐の分割突線が取り付けられていたことが分かる。撚り紐は2段に分けて、端縁に直交する直線上に取り付けられている。上段と下段の分割突線が中央で切れて開く間隔は0.8cmほどにすぎない。

枰側板圧痕と枰側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。枰側板の幅は、狭端側で6.5～7.0cm、広端側で7.0cm前後を測る。平瓦1枚あたりの板の枚数は不明である。枰側板を連結する綴じ紐の圧痕は付き方が破片によって異なる。狭端から広端側に約2.5cm下がるところに「表短目」のもの、同じく狭端から広端側に約17.0cm下がるところに「表短目」のもの、また逆に広端から狭端側に約5.0cm上がるところに「表短目」のもの、および広端から狭端側に約7.5cm上がるところに「連続目」のものが、おのおの1列で認められる。破片資料の観察であるから、それらが同一の桶に由来するかどうかは分からないが、広端部に「連続目」の綴じ紐圧痕を認める桶は、桶Ⅱ27と分類するものに該当する。この群の平瓦を造るのに複数の布袋を使うことが確認されるので、複数個の桶の使用の可能性を想定しておかねばならないであろう。

布袋には「布口」と「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋口平2」、「布袋チ平2」、「布袋チ平3」、「布袋チ平4」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①22を施すものが大半であるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残るものがある。叩き目は斜格子叩き [Cj] である。叩き板の長辺を端縁に対してほぼ平行する方向で当てて叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、灰黒色あるいは灰褐色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Ck群・平瓦Ⅱ0 Ck×Bj群・平瓦Ⅱ0 Ck×Cm群（図版87 写真122, 142, 159, 164—平166～平171）

軒平瓦A A 6群に接合される平瓦部（図版22：軒平33）に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

全長が41.0～41.5cm、広端幅は31.2～32.2cm、狭端幅は29.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは約2.1cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は左上から右下への方向にと、右上から左下への方向に残るものがあるが、ともに湾曲して認められる。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上と広端部にナデ調整③1を施すものがある。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。凹面は平滑であり、枰側板圧痕は認められない。狭端部で布目の下に円形の窪みが確認できる例がある（平166）。円形の窪みは直径が約3.0cm、深さは約0.2cmを測る。

布袋には「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ソ平1」と表記する。

凸面には、叩き目が残る。叩き目は斜格子叩き [Ck] である。斜格子叩き [Ck] を主体的に施しながら、側縁に沿ってのみ正格子叩き [Bj]、あるいは斜格子叩き [Cm] を施すものがある。ただし、前者の叩き目は側縁から中央に向かって4.0cmまでの範囲にとどまる。これらの叩き目は広端部から狭端部に右上がりや左下がりのカーブを描くように、また広端部では端縁にほぼ平行するように認められる。広端部の凸面にはナデ調整を施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さないものが多いが、凸面側だけに傾けて削る②22や、凹面側に傾けて削る②23もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、灰黒色あるいは灰褐色を呈するものがある。

なお、この群の平瓦には、凸面に指紋が残るものが多い（写真142：平167）。また破片資料のなかに、幅が約5.3cmしかないにもかかわらず、両側縁に分割の痕跡を残すものがある（平168）。両側縁とも凹面から切り込みが入れられている。凸面側からみての左側縁は破面調整を施さないが、右側縁の破面の一部にはヘラケズリ調整を施している。この瓦片は広端部側が残ったものと推測される。細長い形が原形でその一部が残ったのか、凸形の凸状部分が割れ残ったのかは分からない。機能形態で分けることができないので、とりあえず技術形態で同じ評価を与えることができる平瓦のところに記述しておく。このほかに特殊な例としては、ほぼ完形に復元できた1枚の平瓦には、広端部の右角から約4.0cmと約5.0cmの2点からV字状に2.5cmの深さまで入れられた切り込みの痕跡を認める（平170）。

平瓦Ⅱ0 Cm群・平瓦Ⅱ0 Cm×Be群（図版88 写真142, 159, 164—平172～平176）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残るが、糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方には「Z型」が認められる。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。粘土板の重ね目の上と広端部にナデ調整③1を施すのを除いて、ほかは調整を施さない③0である。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。狭端部に布目の下に円形の窪みが確認できるものがある（平172）。円形の窪みは直径が約3.0cm、深さは約0.2cmを測る。

布袋には「布ソ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ソ平1」と表記する。

凸面には、叩き目が残る。叩き目は斜格子叩き [Cm] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めていて、叩き目は広端部では端縁にほぼ平行する。なお、凸面の広端部にはナデ調整を施す。このほか、斜格子叩き [Cm] と正格子叩き [Be] が隣り合う資料もある。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さないものが多いが、凸面側だけに傾けて削る②22や、凹面側だけに傾けて削る②23もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、

石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、灰黒色あるいは灰褐色を呈するものがある。

なお、狭端部の角を切り落としている例も認められる（平172, 平174）。また、この群とする平瓦には、凸面に指紋が残るものが多い（写真142）。

平瓦Ⅱ0 Da群（図版88 写真142, 153, 160—平177～平182）

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6～2.3cmである。

凹面には、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕が残る。糸切り痕、粘土板の重ね目などは不明である。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目の上と広端部にヘラケズリ調整③2を施すものがある。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。狭端部で布目の下に円形の窪み（平177, 平181）と円形の突出が確認できる例がある（平178）。円形の窪みは直径が約3.5cm、深さは約0.1cmを測る。円形の突出は直径が約3.2cm、高さは約0.2cmを測る。これらはともに桶に取り付けられた器具の部分の反映痕と考えられるが、円形の突出についてはほかの群の例に認めるものと位置が異なることを特記しておく。すなわち、ほかの例では瓦の狭端部の中央に決まって観察できるが、この群とする資料では、片方の側縁に寄って、また狭端縁から広端側に約2.8cm以上下がるところに認める。

布袋には「布ワ」を使う。綴じ合わせ痕あるいは縫い合わせ痕から「布袋ワ平3」、「布袋ワ+ワ平0」と表記する。

凸面には、叩き目が残る。叩き目は平行線—斜線の組み合わせ文叩き [Da] である。広端部から狭端部に、右から左へと円弧を描くように叩き締めていて、広端部では叩き目は端縁にほぼ平行する。なお、凸面の広端部にはナデ調整を施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から大きく切り込みを入れ、破面が生じないように4枚に分割する。なかには凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込んでいるものがある。生じた破面を削る分割後の調整を施さない②0の例もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質でパサパサした感じを与え、色調は明橙色、赤褐色あるいは灰茶色を呈するものが多い。稀にやや硬質で暗灰色を呈するものも認められる。

なお、この群の瓦には、オガンジ池瓦窯でⅡ号窯の窯体の煙道部付近の補修に使用されたようで、二次焼成で赤変し、さらに凸面あるいは凹凸両面に窯壁片が熔着するものが認められる（平182）。

平瓦Ⅱ0 Ea群・平瓦Ⅱ0 Ea (+Ad) 群・平瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Ea (+Bt) 群・平瓦Ⅱ0 Ea (+Cn) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ea] 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ea] (+Ad) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ea] (+Ae) 群・平瓦Ⅱ0 Za [Ea] (+Cn) 群（図版89 写真160—平183～平190）

全長が38.2～40.0cm、広端幅は33.8cm前後を測る。狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は

認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。

布袋には「布ヌ」、「布ヨ」と「布ナ」を使う。「布ヌ」の布袋は綴じ合わせ痕から「布袋ヌ平4」と表記し、おのおのの布の共足した布の布袋は、縫い合わせ痕だけから「布袋ヌ+ヌ平0」、「布袋ヨ+ヨ平0」、「布袋ナ+ナ平0」と表記する。ただし、「布袋ヌ平4」を使用した平瓦については図示していない。なお、凸面の主要叩き目をすり消さない平瓦Ⅱ0 Ea群には、「布ナ」の布袋が必ず使われている。また、この群とする平瓦を半割して造った割熨斗瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) (+Cn) 群のなかに「布袋ナ+ナ平1」と表記できる例(熨斗11)がある。

凸面には、叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。調整を施さない①0と一部に横方向のナデ調整を施す①2 1があるが、後者でもナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目には、凸面全体を叩き締める主要叩き目と、端部から端面にかけて付加する補助叩き目がある。主要叩き目は交差文叩き[Ea]で、端縁にほぼ直交して認められる。補助叩きには平行叩き(+Ad)、(+Ae)、正格子叩き(+Be)と斜格子叩き(+Cn)がある。主要叩きは、右から左へと数段にわたって、広端側から狭端側に叩き締める。補助叩きについては、両端面に施すもの、広端面にだけ施すもの、そのどちらにも施さないものがある。

なお、この群の平瓦の主要叩きの叩き板の潰れ具合から、0段階と1段階の時間差の使用を窺うことができる。この時間差の使用には、補助叩きの種類の組み合わせや使用布袋の違いなどは伴わない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。破面を残さないように切断して、分割後の側面調整を施さない②0もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色、灰青色あるいは茶褐色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰白色、明橙色または灰赤褐色を呈するものがある。

なお、この群とする資料のなかに分割に失敗した例が認められる。分割界線に沿って切り込みが入れているが、狭端側で切り込みから離れないで別のところで割りとれている。おそらく粘土板の重ね目で割れたのであろう。

平瓦Ⅱ0 Za [Fa] 群 (図版90 写真160—平191～平194)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。狭端部は左から右への方向にヘラケズリ調整③2を施す。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。

布袋には「布ワ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋ワ平1」と表記する。

凸面には、一部に横方向のナデ調整①2 1を施すものがあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩

き板の輪郭が残る。叩き目は重ね菱形叩き [Fa] である。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。破面を残さないように切断して、分割後の側面調整を施さない②0もある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色、青灰色あるいは灰青色を呈するものと、軟質でパサパサした感じを与え、灰白色や褐灰色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za [Ga] 群 (図版90 写真160—平195～平199)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。

布袋には「布り」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋り平1」と表記する布袋だけを、今のところ確認している。

凸面には、一部に横方向のナデ調整①21を施すものを認めるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は麻様文叩き [Ga] である。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや軟質で、めくれるように剥離すると言えるが、そのなかでも色調が灰白色あるいは灰黒色のものが軟質であり、明橙黒色のものはやや硬質である。

平瓦Ⅱ0 Za [Ha] 群 (図版90 写真160—平200～平203)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.9cm前後である。

凹面には、布目圧痕が残るが、糸切り痕、粘土板の重ね目、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などは不明である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消す。広端部に左から右へのヘラケズリ調整③2を施すものがある。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。

布袋には「布り」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋り平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①21を施すものがあるが、ナデ目の下に叩き目の痕跡が残る。叩き目は格子—斜線の組み合わせ文叩き [Ha] である。叩き締め方はよく観察できない。叩き目は浅いと言えるだけである。

桶をはずしてのから分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや軟質で、橙色あるいは黒色を呈するものと、やや硬質で、灰色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ1 Za [J1b] 群 (図版91 写真122, 142, 160—平204～平208)

全長が36.2cm前後、広端幅は26.8～27.5cm、狭端幅は22.7～23.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.9～2.4cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶の枠側板圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は、左上から右下へと、右上から左下への両方の斜め方向に、ともに湾曲するように認める。粘土板の重ね方は「Z型」である。凹面の広端部では端縁から1.8cmほどの範囲で左から右へ、狭端部では端縁から2.5cmの範囲で右から左へヘラケズリ調整を施すものがある。

桶の枠側板の幅は、広端側で2.5～2.8cm、狭端側で2.0～2.5cmを測る。平瓦1枚あたり11枚の枠側板で構成される。なお、枠側板を連結する綴じ紐の圧痕は認めない。桶には撚り紐の分割突線が取り付けられている。分割突線は、長さが10.0cm、幅は0.4cmで、11回分右撚りにした紐であると認める。この群の平瓦は分割後に側面調整が施されるため、基本的には瓦上に分割界線の観察はできないが、偶然にも截断位置が分割界線から3.0cmほどずれていた例があるので確認できる。この観察例では、広端側しか残存していないが、同じ長さの撚り紐の分割突線が狭端側にも付けられていたと想定できよう。本来は平瓦の一侧縁をなすことになる、分割するときの目安を意図した分割突線として、この長さの撚り紐が桶の表面の上下2ヶ所に取り付けられたのであろう。

布袋には「布ホ」と「布レ」を使う。それぞれ綴じ合わせ痕から「布袋ホ平2」、「布袋レ平1」、「布袋レ平2」と表記する。

凸面には、全体に横方向のナデ調整①21を施すが、ナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は縄目叩き [J1b] である。広端側では端縁にほぼ直交し、狭端側にいくと左上がりに斜行して円弧を描く叩き締めと、凸面全体で大きく左上がりに斜行して円弧を描く叩き締めの2種類がある。後者は、叩き締めたのちのナデ調整が強く、叩き目はほとんど消える。

桶をはずしてからの分割は、分割後に側面調整が施されて、凹面側から截断されたのか、凸面側からか不明である。側面調整には、凹凸両面側に傾けてケズリ調整②24を施すものが多いが、傾けずに載面・破面に平行して削る②21や凹面側に傾けて削る②23も少ないものの認められる。

端面は狭端面、広端面とも平坦におさめられている。凹面は、狭端側では左から右へ、広端側では右から左へヘラケズリで面取り調整を施す。

素材の胎土は、精良で、大きな砂粒がほとんど含まれない。焼成度は大半が硬質であるが、やや硬質というべきものもあり、色調は黒褐色、淡黄色あるいは黄茶褐色などがある。

平瓦Ⅱ1 J1c群 (図版91 写真123, 142, 161—平209～平211)

全長と狭端幅は不明である。広端幅は25.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は左上から右下へ湾曲するように認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。桶の枠側板圧痕はかすかに認

められる程度で、凹面に凹凸をほとんど認めない。杵側板の幅は、広端側で2.5～3.0cmを測る。

この群の平瓦の一部には、凹面の広端縁から狭端側に5.5cmほど上がるところで、直径が0.8cm程度の円形の窪みが、布目圧痕の下に、0.5cmほどの間隔をあけて横に並列して認められる（平211）。右側の窪みは、隣り合う杵側板との接線に触れて認めるが、左側の窪みは杵側板のほぼ中央にある。その位置から、桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と思われるが、その機能は分からない。

布袋には「布ホ」と「布レ」を使う。ともに綴じ合わせ痕が確認できないので「布袋ホ平0」、「布袋レ平0」と表記する。

凸面には、叩き目が残る。叩き目は縄目叩き [J1c] である。端縁にほぼ直交して、右から左へと数段にわたって叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割後に側面調整が施されたので、凹面側から截断されたのか、凸面側からか不明である。分割には狭端側から広端側に切り込みを入れる。側面調整には、凹凸両面側に傾けてケズリ調整②24を施すものが多いが、凸面側に傾けて削る②22も認められる。凸面のケズリ調整は狭端側から広端側へ施す。なお、この群の平瓦は、広端部の両隅を、広端側から狭端側へと切り落としている。広端部の凹凸両面に面取りを施す例がある。凹面は右から左へ、凸面は左から右に面取りを施す。狭端部については不明である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度はほぼ硬質である。色調は灰白色あるいは明橙色を呈するものが多い。

平瓦Ⅱ1 J1d群（図版92 写真123, 161—平212～平218）

全長が33.0cm、狭端幅は25.5cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.9cm前後である。

凹面には、ヘラケズリ調整③2を施すものがあるが、その範囲が狭いためにほとんどに糸切り痕、粘土板の重ね目、桶の杵側板圧痕、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。糸切り痕は、左上から右下へと、あるいは右上から左下へと、両方の方向に、ともに湾曲するように認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。桶の杵側板圧痕は明瞭に認められ、杵側板の幅は、広端部で2.5～3.0cm、狭端部で2.0～2.5cmを測る。平瓦1枚あたり11枚の杵側板で構成される。なお、杵側板を連結する綴じ紐の圧痕は認められない。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋レ平1」と表記する。

凸面には、叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は縄目叩き [J1d] である。叩き締め方は2種類あり、端縁にほぼ直交して、左から右へと数段にわたって叩き締めるものと、同じく端縁にほぼ直交して左から右へと叩き締めたのち、さらにその上に斜行する叩き締めを付加するものである。その斜め方向の叩き目は、広端部では右上がりの斜め方向になるが、狭端部では右上がりの叩き目と、左上がりの叩き目が、狭端縁から10cmほど広端側に下がるところで交差するように残る。完形品がないので、1枚の平瓦の凸面全体を構成する叩きのパターンを認定することはできない。

桶をはずしてからの分割は、分割後に側面調整がなされたので、凹面側から截断されたのか、凸面側からか不明である。分割には、狭端側から広端側に切り込みを入れる。側面調整には、凸面側に傾けて削る②22が多いが、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施すものもある。凸面

のケズリ調整も狭端側から広端側へと施す。なお、この群とする平瓦を焼成前に半裁して造った切
鬨斗瓦Ⅱ1 J1d群（鬨斗1, 2）と、焼成後に半割して造った割鬨斗瓦Ⅱ1 J1d群（鬨斗12）がある。
後者の割鬨斗瓦は割鬨斗瓦Ⅱ1 J1d群と表記したが、部分的に縦方向のナデ調整①22を施す場合も
認められる。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、
石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、硬質で黄褐色を呈するものと、やや硬
質で明橙色を呈するものがある。

平瓦ⅢJ1e群・平瓦Ⅱ1 Za [J1e] 群（図版93 写真123, 161—平219～平222）

全長が37.2cm、広端幅は31.2cmを測る。狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0～3.1cm
である。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶の枠側板圧痕、桶器具痕などが残る。糸切
り痕は右上から左下へと湾曲するように認められる。粘土板の重ね方は「Z型」である。桶の枠側
板圧痕が明瞭に認められ、枠側板の幅は、広端側で3.0cm前後を測る。狭端側の幅は不明であるが、
残存状況かみらると0.5cmほど広端側の幅よりも狭くなっていると推測できる。平瓦1枚あたりに
11.5枚の枠側板で構成される。なお、枠側板を連結する綴じ紐の圧痕は認められない。

桶器具痕としては、桶を構成する枠側板の1枚の中央に、広端縁から狭端側に4.5cmほど上がる
ところから、ほぼ0.8cm幅の長方形の棒状の溝が、残存資料の狭端側の末端まで約19cmの長さで認
められる。おそらく狭端側に向かってさらに延びていたと推測される。その棒状の溝から右へ8.5
cmほど側縁に寄って、広端縁から狭端側に4.5cmほど上がる、先の棒状の溝の始まる高さと同じ位
置に、直径が0.6cmほどの円形の窪みが認められる。棒状の溝および円形の窪みは、ともに1つの
桶に突線および突起として取り付けられていたものの圧痕である。分割の指標であった可能性も考
えられる。しかしその位置を併わせ考えると、両者ともに分割指標を推定するに合理性はない。と
もにその機能は不明としておさざるをえない。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕が不明であるので「布袋レ平0」と表記する。布袋が広
端部凸面までまわり込んでいることが布目圧痕から分かる例がある。

凸面には、叩き目の痕跡が明瞭に残るものと、広端部の一部に横方向のナデ調整①21を施すも
のがある。後者はナデ目の下に叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は縄目叩き [J1e] で
ある。端縁にほぼ直交して、広端側から狭端側へ数段にわたって、右から左へと叩き締める。

桶をはずしてからの分割は、分割後に側面調整がなされたので、凹面側から截断されたのか、凸
面側からか不明である。分割には狭端側から広端側に切り込みを入れる。側面調整は、凹凸両面側
へ傾けてヘラケズリ調整②24を施す。そのヘラケズリ調整は狭端側から広端側に施す。広端部は
凹凸両面とも、右から左へ面取りを施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、
石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は硬質で、色調は黄橙色を呈する。

平瓦Ⅱ1 J1f群（図版93 写真161—平223, 平224）

この群の資料は残存状況が悪く、出土量も少ないため、法量は不明である。素材は粘土板で、厚

さは1.9cm前後である。

凹面には、布目圧痕、桶の枠側板圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。枠側板の幅は、圧痕からは不規則に見える。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕は不明であるので「布袋レ平0」と表記する。布袋が広端部凸面までまわり込んでいることが布目圧痕から分かる例がある。

凸面には、叩き目の痕跡と叩き板の輪郭が残る。叩き目は縄目叩き [J1f] である。端縁にほぼ直交して、数段にわたって右から左へと叩き締める。

桶をはずしてから分割は、分割後に側面調整が施されたので、凹面側から截断されたのか、凸面側からか不明である。分割には狭端側から広端側に切り込みを入れる。側面調整には、凹凸両面側に傾けて削る②24が多いが、凸面側だけに傾けて削る②22も量的には少ないものの認められる。ヘラケズリ調整とともに、狭端側から広端側に施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は硬質であり、色調は灰黒色あるいは明橙色を呈するものが多い。

平瓦Ⅲ2 J2aa群 (図版94 写真153, 161—平225～平228)

この群とする資料は残存状況が悪く、出土量も少ないため法量は不明である。^(註21) 素材は粘土板で、厚さは2.8cm前後である。

凹面には、布目圧痕が残る。「布ウ」と「布ホ」を使う。糸切り痕は両面ともに残らない。

凸面には、極太の縄目の叩き目が残る。縄目叩き [J2aa] である。全面を同じ方向で叩き締めるのではなく、片側縁部だけ、端縁に対して直交して、ほかはすべて端縁に対して右上がりの斜め方向に流れるような曲線を描いて叩き締める。

側面調整は、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、軟質で明橙色である。

平瓦Ⅲ2 J2ab群 (図版93 写真161—平229～平231)

この群とする資料は残存状況が悪く、出土量も少ないため法量は不明である。^(註22) 素材は粘土板で、厚さは2.5cm前後である。

凹面には、布目圧痕が残る。「布ウ」を使う。糸切り痕は両面ともに残らない。

凸面には、太目の縄目の叩き目が残る。縄目叩き [J2ab] である。全面を同じ方向で叩き締めるのではなく、片側縁部だけ、端縁に対して直交して、ほかはすべて端縁に対して右上がりの斜め方向に流れるような曲線を描いて叩き締める。

側面調整は、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、硬質で灰青色のものと、軟質で灰白色のものがある。

平瓦Ⅲ2 J2ac群 (図版94 写真161-平232, 平233)

この群とする資料は残存状況が悪く、出土量も少ないため法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.1cm前後である。

凹面には、布目圧痕が残る。「布ウ」と「布ホ」を使う。糸切り痕は両面ともに残らない。

凸面には、やや太目の縄目の叩き目が残る。縄目叩き [J2ac] である。端縁に対して右上がりの斜め方向に叩き締めることしか分からない。

側面調整は、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、やや硬質で灰色である。

平瓦Ⅲ2 J2ad群 (図版94 写真154, 161-平234)

この群とする資料は残存状況が悪く、出土量も少ないため法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.5cm前後である。

凹面には、布目圧痕が残る。「布ウ」を使う。糸切り痕は両面ともに残らない。凹面と端面との角を凹面側にヘラケズリ調整③2で削り落とす。

凸面には、やや太目の縄目の叩き目が残る。縄目叩き [J2ad] である。端縁に対して斜め方向に叩き締めることしか分からない。右上から左下へと、および左上から右下への、両方の方向の叩きが混在している。

側面調整については残存資料がないため不明である。端部の凸面に布が回り込んでいることを示す布目圧痕を残す例がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度はやや硬質で、色調は灰色である。

平瓦Ⅲ2 J2ae群 (図版95 写真124, 162-平235)

全長が33.8cm、広端幅は26.3cm、狭端幅は24.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.2cmである。

凹面には、工具を用いてナデ調整③1を施すが、ナデ目の下に布目圧痕がかすかに残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は凹凸両面ともに残る。凹面では右上から左下へ、凸面では左上から右下への方向で認められる。

凸面には、叩き目と指押さえの痕跡が残る。叩き目は縄目叩き [J2ae] で、端縁に直交して9回以上、左から右へとスライドさせるように叩き締める。広端縁から上に約3cmの範囲には叩き目が認められないが、その境目の上には叩き板の角の痕が明瞭に残る。それに対して狭端側は、端縁まで叩き締めていて、叩き板の端を示す角の痕は認められない。指押さえの痕跡は、叩き締めのものについている。凹面に工具を用いてナデ調整を施すときについたのであろう。

側面調整は施さないが、凹面側の両側部には狭端部から広端部に、側縁に沿って指なでした跡が認められる。端面にも調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩起源の石粒、石英、長石などの鉱物粒が認められる。焼成度はやや不良で、色調は茶褐色である。

なお、この群の平瓦は今のところ、1例しか認めていない。

平瓦Ⅲ2 J2af群 (図版95 写真124, 162-平236)

全長が36.1cm、広端幅は26.7cm、狭端幅は24.3cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を斜め方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的にわずかに残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は凹凸両面ともに残る。凹面では左上から右下へ、凸面では右上から左下への方向に認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目、一部に指押さえの痕跡と横方向のナデ目が残る。叩き目は縄目叩き [J2af] である。端縁に対してわずかに斜めの方向に、あるいは直交して8回以上、左から右へとスライドさせるように叩き締める。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。すべて叩き締めのものについている。凹面のナデ調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、やや不良の焼成ではあるが、やや軟質で灰黒色を呈するものと、やや硬質で灰色のものがある。

平瓦Ⅲ2 J2ag群 (図版95, 96 写真125, 162-平237~平240)

全長が36.2~36.5cm、広端幅は27.0~27.8cm、狭端幅は23.6cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.7cmである。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的にわずかに残る。「布ツ」を使う。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡と横方向のナデ目が残る。叩き目は縄目叩き [J2ag] である。端縁にほぼ直交して7回以上、左から右へとスライドさせるように叩き締める。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。すべて叩き締めのものについている。凹面にナデ調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、良好、硬質で茶褐色を呈するものと、やや不良で、軟質で黄橙色を呈するものがある。

平瓦Ⅲ2 J2ah群 (図版96 写真125, 126, 162-平241, 平242)

全長が33.5~35.2cm、広端幅は25.1cm、狭端幅は23.1cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を斜め方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的にわずかに残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は凹凸両面に残る。凹面では左上から右下へ、凸面では右上から左下へ認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が認められる。叩き目は縄目叩き [J2ah] である。端縁に直交して8回前後、左から右へとスライドさせるように叩き締める。狭端部に叩き

板の上端右角の痕が明瞭に認められる例がある。叩き板全体を確実に凸面に当てて叩くのではなく、叩き板の右側にとりわけ力が入ったらしく、瓦の凸面には叩き板の右側の縄目が明瞭に残るのに対して、左側に巻かれた縄目が認められないことが多い。なお、この群の平瓦には、同じ叩き板の表と裏の両面を使用したとしか考えられない例が存在する。表面使用の例（ α ）ばかりのなかに、裏面使用の例（ β ）が1例だけ確認されている（平242）。裏面使用が少ないことと叩き板に巻かれた縄の構成を併わせ考えて、表裏の使用を想定する。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。すべて叩き締めのものについている。凹面のナデ調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩起源の石粒、石英、長石などの鉱物粒が認められる。焼成度は良好、硬質で、色調は灰青色である。

平瓦Ⅲ2 J2aj群（図版97 写真126, 154, 162—平243）

軒平瓦P群に接合される平瓦部（図版23：軒平47）に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。ただし軒平瓦に接合されたこの群の平瓦は、凸面の叩き目がほとんどすり消されている。

全長が35.1cm、広端幅は25.3cm、狭端幅は21.1cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。布には、狭端縁から広端側に9cmほど下がるところに横方向にぐし縫いによる足し縫い痕が認められる。糸切り痕は凹凸両面に残る。凹面では右上から左下へ、凸面では左上から右下への方向にかすかに認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目、一部に指押さえの痕跡と横方向のナデ目①21が認められる。叩き目は縄目叩き [J2aj] である。端縁に直交して7～8回程程度、左から右へスライドさせるように叩き締める。狭端部には叩き板の上端の痕が明瞭に認められる例がある。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。すべて叩き締めのものについている。凹面にナデ調整を施すときについていたのであろう。ナデ調整が狭端部に認められるが、それは叩き目をほとんど消していない。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩起源の石粒、石英、長石などの鉱物粒が認められる。焼成度は良好、硬質で、色調は灰青色である。

平瓦Ⅲ2 J2ak群（図版97 写真162—平244, 平245）

この群とする資料は残存状況が悪く、全長と狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.5cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。布は成形台の全体を覆っておらず、広端部に布の及んでいない範囲が認められる。広端部にある布端には、まつり縫いが認められる。糸切り痕は凹凸両面に残る。凹面では右上から左下へ、凸面では左上から右下への方向に認められる。

凸面には、叩き目が残る。部分的ではあるが横方向のナデ調整①21を施して、叩き目が消えている例もある。叩き目は縄目叩き [J2ak] である。端縁に直交して、左から右へスライドさせるように叩き締める。叩き締め回数は不明である。狭端部には叩き板の上端右角の痕が明瞭に残る例がある。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩起源の石粒、石英、長石などの鉱物粒が認められる。焼成度は良好で須恵質を呈するものと、不良で軟質のものがある。色調は、前者は灰色あるいは灰青色、後者は灰白色あるいは黄橙色である。

平瓦Ⅲ2 J2am群 (図版97, 98 写真127, 162—平246～平248)

全長が36.0cm、広端幅は26.5cm、狭端幅は23.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は、凸面に左上から右下への方向にかすかに認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。叩き目は縄目叩き [J2am] である。凸面の叩き目から叩き板の時間差の使用が窺える。叩き板に巻かれた縄に乱れないものを0段階、乱れが生じたものを1段階と区別しておく。両段階ともに、端縁にほぼ直交して7回程度、左から右へとあまり重ならないようにスライドさせて叩き締める。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。すべて叩き締めののちについている。凹面にナデ調整を施すときについたのであろう。なお、第1段階のものとしては1点だけしか確認できていない。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度はやや良好で、やや硬質である。色調は黄橙色を呈するものと、茶褐色を呈するものがある。

平瓦Ⅲ2 J2an群 (図版98 写真127, 163—平249)

全長が36.3cm、広端幅は25.5cm、狭端幅は24.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.9cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は凹凸両面にかすかに残る。凹面では左上から右下へ、凸面では右上から左下への方向に認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にのみ端縁に対して斜め方向のナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2an] である。端縁にほぼ直交して9回前後、左から右へスライドさせるように叩き締める。広端部には叩き板の上端左角の痕を認める例がある。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。すべて叩き締めののちについている。凹面にナデ調整を施すときについたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度はやや良好で、やや軟質である。色調は灰色を呈する。

平瓦Ⅲ2 J2ap群 (図版98 写真128, 163—平250・図版121 写真148—平251)

全長が37.5cm、広端幅は25.2～28.0cm、狭端幅は22.7～26.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は凸面がかすかに残り、右上から左下への方向に認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。広端部にだけ横方向へのナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2ap] である。端縁にほぼ直交して9回程度、左から右へスライドさせるように叩き締める。広端部に叩き板の上端両角の痕を認める。指押さえの痕跡は、狭端縁部付近に残る。すべて叩き締めのものについている。凹面にナデ調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度はやや良好で、やや軟質である。色調は灰色を呈する。

なお、この群の平瓦のなかに、広端部を凸面側から打ち欠いて、緩やかな円弧を描くように整形する例が認められる (平251)。全長は29.0cmを測る。この群の平瓦の全長が37.5cmあることから、8.0cm前後が打ち落とされたことになる。幅はもとの平瓦のままで、最大幅は27.5cmを測る。意識的に焼成後に平瓦を変形させているので、道具瓦と認定すべきであるが、具体的な機能形態を想定できないので、ここに特記しておく。なお、図については道具瓦類のところに示す (図版121：平251)。

平瓦Ⅲ2 J2aq群 (図版99, 100 写真128～130, 142, 163—平252～平255)

全長が34.0～35.2cm、広端幅は25.0～25.8cm、狭端幅は21.5～22.0cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.6～2.8cmである。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向へのナデ調整を施す。凹凸両面に糸切り痕の残る例がある。凹面では左上から右下へ、凸面では右上から左下への方向に認められる。叩き目は縄目叩き [J2aq] である。叩き目には叩き板の時間差の使用が窺える。叩き板に巻かれた縄に乱れのないものを0段階、乱れが生じたものを1段階と区別しておく。両段階ともに、端縁にほぼ直交して9回前後、左から右へスライドさせるように叩き締める。指押さえの痕跡は、両端縁部付近や、中央部などに認められ、規則的にはついていない。指押さえと言うよりも、手形のような例もある (写真128, 129, 142：平252, 平253)。すべて叩き締めのものについている。凹面にナデ調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は良好、硬質のものが多く、色調は青灰色を呈する。

なお、この群の平瓦のなかには、複数枚が熔着したものがある（写真142）。

平瓦Ⅲ2 J2ar群（図版100, 101 写真130, 163—平256～平258）

全長が36.3cm、広端幅は26.0cm、狭端幅は22.8cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は凹凸両面に残る。凹面では左上から右下へ、凸面では右上から左下への方向に認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向のナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2ar] である。端縁にほぼ直交して7～8回程度、左から右へスライドさせるように叩き締める。広端縁から狭端側に1.5～2.0cm上がる範囲には叩き目の認められない部分があり、その境目の広端側に叩き板の上端両角の痕が残る。指押さえの痕跡は、叩き締めのものについている。凹面に工具を用いてナデ調整を施すときについたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は良好であるが、硬質のものと軟質のものがあり、色調を言えば、前者は青灰色を呈し、後者は灰白色である。

平瓦Ⅲ2 J2as群（図版101 写真131, 163—平259, 平260）

この群の資料の中に軒平瓦の平瓦部として使用されていたものがあるが、おそらく軒平瓦P群に接合されると推測できる。

全長が35.3～36.0cm、広端幅は26.1～26.8cm、狭端幅は22.8～25.2cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は、凸面で左上から右下への方向にかすかに認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向のナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2as] である。端縁にほぼ直交して、右から左へスライドさせるように施すものと、左から右へスライドさせるように施すものがあるが、どちらの方向でも8～10回以上叩き締める。狭端縁から広端側に3cmほど下がる範囲に叩き目の認められない部分があり、その境目の狭端側には叩き板の上端両角の痕が残る。なお、この叩き目の認められない範囲には横方向のナデ目が認められる。指押さえの痕跡は、叩き締めのものについている。凹面に工具を用いてナデ調整を施すときについたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は良好であるが、硬質のものと軟質のものがあり、色調を言えば、前者は青灰色を呈し、後者は黄褐色である。

平瓦Ⅲ2 J2at群（図版101 写真163—平261）

この群とする資料は残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6cm前後で

ある。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は確認できなかった。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。叩き目は縄目叩き [J2at] である。端縁にほぼ直交して、左から右へライドさせるように叩き締める。指押さえの痕跡は、叩き締めめのちについている。凹面に工具を用いてナデ調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は良好であるが、硬質のものと軟質のものがあり、色調をも言えば、前者は青灰色を呈し、後者は灰色である。

平瓦Ⅲ2 J2au群 (図版101, 102 写真131, 132, 163—平262～平265)

この群とする資料には、2種類のサイズのものがある。大型品は全長が約38.5cm、広端幅が約32.0cm、狭端幅は約28.0cmを測る (平265)。小型品は、ほかの群で多く認められるものと同じであると考えられるが、資料の残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、大型品の厚さは2.5cm前後、小型品では1.6cm前後である。大型品と小型品とで調整手法が異なる。

大型品については次のとおりである。凹面には、わずかに狭端部の小範囲にのみナデ調整を施すため、布目圧痕がほとんど消えていない。「布ウ」を使う。糸切り痕は確認できなかった。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。叩き目は縄目叩き [J2au] である。端縁にほぼ直交して11回以上、右から左へスライドさせるように叩き締める。広端部には叩き板の上端右角の痕が残る。側面の凹面側と広端面にはヘラケズリ調整が認められる。側面では狭端部から広端部に、広端面では左から右に削られる。

また小型品は次のように言える。凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すため、布目圧痕は部分的にわずかに残るだけである。「布ト」を使う。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向のナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2au] である。端縁にほぼ直交して、右から左へスライドさせるように叩き締めるが、1枚あたりの叩きの回数は不明である。大型品の例と同じく、広端部には叩き板の上端右角の痕が残る。側面と端面には、ともに調整を施さない。

素材の胎土には、大型品、小型品とも、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、大型品、小型品とも、良好、硬質で青灰色を呈するものと、不良、やや軟質で灰色あるいは黄褐色のものがある。

平瓦Ⅲ2 J2aw群 (図版102 写真163—平266)

この群とする資料は残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.5cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ツ」を使う。糸切り痕は確認できなかった。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向のナデ調整

を施す。叩き目は縄目叩き [J2aw] である。端縁にほぼ直交して、右から左へスライドさせるように叩き締める。叩き締め回数は不明である。指押さえの痕跡は規則的には認められず、すべて叩き締めののちについている。凹面に調整を施すときについたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は良好、硬質であり、色調は青灰色を呈する。

平瓦Ⅲ2 J2ax群 (図版102 写真164-平267)

この群とする資料は残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面は摩滅が著しく、調整の痕跡および布目圧痕などを観察できる資料がない。糸切り痕は確認できなかった。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。叩き目は縄目叩き [J2ax] である。端縁にほぼ直交して、右から左へスライドさせるように叩き締める。叩き締め回数は不明である。指押さえの痕跡は規則的には認められず、すべて叩き締めののちについている。凹面に調整を施すときについたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は不良、軟質であり、色調は黄灰色を呈する。

平瓦Ⅲ2 J2ay群 (図版102 写真164-平268)

この群とする資料は残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.6cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ト」を使う。糸切り痕は確認できなかった。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ斜め方向のナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2ay] である。端縁にほぼ直交して、右から左へスライドさせるように叩き締める。叩き締め回数は不明である。指押さえの痕跡は規則的には認められず、すべて叩き締めののちについている。凹面に調整を施すときについたのであろう。狭端部のナデ調整は、叩き目を一部で消しているものの、その大半は叩き目に及んでいない。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は不良、軟質であり、色調は黄灰色を呈する。

平瓦Ⅲ2 J2az群 (図版102 写真164-平269)

この群とする資料は残存状況が悪く、法量は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.5cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施すが、ナデ目の下には布目圧痕が部分的に残る。「布ト」

を使う。糸切り痕は凹面に残り、右上から左下への方向に認められる。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向のナデ調整を施す。凹凸両面に糸切り痕の残る例もある。糸切り痕は左上から右下への方向に認められる。叩き目は縄目叩き [J2az] である。端縁にほぼ直交して、左から右へスライドさせるように叩き締める。叩き締め回数は不明である。指押さえの痕跡は規則的には認められず、すべて叩き締めののちについている。凹面に調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は良好、硬質のことが多い。色調は青灰色を呈する

平瓦Ⅲ2 J2ba群 (図版102 写真132, 164—平270)

この群とする資料は残存状況が悪く、全長と狭端幅は不明である。広端幅は約27.0cmである。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、ナデ調整③1を横方向に施す。図示したものには布目圧痕は観察できないが、「布ト」の圧痕をナデ目の下に認める例がある。糸切り痕は確認できなかった。

凸面には、ほぼ全面に叩き目が、一部に指押さえの痕跡が残る。狭端部にだけ横方向のナデ調整を施す。叩き目は縄目叩き [J2ba] である。端縁にほぼ直交して、左から右へスライドさせるように叩き締める。叩き締めの回数は不明である。指押さえの痕跡は規則的には認められず、すべて叩き締めののちについている。凹面に調整を施すときについていたのであろう。

側面、端面ともに調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、良好、硬質で青灰色を呈するものと、不良、軟質で灰白色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ0 Za群

この群の平瓦はすべて、横方向のナデ調整①21で仕上げられていて、凸面に叩き目の痕跡をまったく残さない。群認定の指標に、桶などの造瓦器具の反映属性と叩き板の反映属性を採るので、叩き目が残らないものにあてるZaという表記を、叩き目を認めないもののすべてに与えざるをえない。しかし、法量、造瓦技術の痕跡、胎土の見かけという属性を併わせ考察すると、5種類の別が認められる。それらを〈i〉～〈v〉と分けて記述する。

〈i〉 (図版103, 104 写真132, 133, 141, 153—平271～平279)

軒平瓦A A 1群 (図版19: 軒平1～軒平4)、軒平瓦A A 3群 (図版19: 軒平13, 軒平14)、軒平瓦A A 4群 (図版19: 軒平15～軒平17) に接合される平瓦部に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

全長が41.8～42.3cm、広端幅は31.2cm、狭端幅は29.2～30.2cmを測る。素材は粘土板で、厚さは1.7～2.5cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は

凹面にかすかに残り、右上から左下への方向に認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消す。狭端部と広端部にともに右から左へのヘラケズリ調整③2を施すことがある。側縁部には撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。狭端縁の中央に直径が3.0cmで、深さあるいは高さは0.1cmの円形の窪み（平271）あるいは円形の突出が（写真141：平272）、布目圧痕の下に確認できるものがある。その位置から、桶に取り付けられた器具の部分の反映痕と思われるが、その機能は不明である。

布袋には「布リ」と「布イ」を使う。綴じ合わせ痕および縫い合わせ痕から「布袋リ平1」、「布袋リ+イ平1」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①11を施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉍物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、やや硬質で、黒色あるいは灰色を呈するものと、軟質で、灰白色あるいは黄灰色を呈するものがある。

< ii > (図版105—平280～平283)

軒平瓦AA2群に接合される平瓦部（図版19：軒平7～軒平9）に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

この群とする資料は、凸面にあった叩き目がすっかり消されてしまっているので、Zaと表記するが、胎土、布目圧痕、色調、焼成具合などの諸属性を併わせ見ると、平瓦II0Za [Ga] 群とする平瓦に酷似する。凸面に麻様文叩き目 [Ga] が見えないだけと言えるほどである。資料の残存状況が悪く、また出土量も少ないため、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。凹面は平滑であり、杵側板圧痕は認められない。側縁部に撚り紐状のものの圧痕と見える分割界線が残る。

布袋には「布リ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋リ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①11を施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉍物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや軟質で、めくれるように剥離すると言えるが、軟質で色調が灰白色や灰黒色のものと、やや硬質で明橙黒色のものがある。

< iii > (図版105, 106—平284～平289)

軒平AA5群（図版20：軒平24, 軒平25）、軒平AA7群（図版22：軒平39～軒平41, 軒平44）に接合される平瓦部に認められるのと同じ手法で造られた平瓦である。

全長が39.8～40.5cm、狭端幅は32.8cmを測る。広端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.2cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。凹面調整は、調整を施さない③0である。凹面は平滑であり、枠側板圧痕は認められない。狭端部で布目圧痕の下に円形の窪みが確認できる例がある（平289）。窪みは、直径が2.5cm前後、深さは約0.2cmを測る。

布袋には「布ル」、「布カ」と「布ソ」を使う。いずれも綴じ合わせ痕が確認できないので、おのおのを「布袋ル平0」、「布袋カ平0」、「布袋ソ平0」と表記する。「布袋ル平0」の布袋については図示していない。

凸面には、横方向のナデ調整①11を施す。

桶をはずしてから分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度は軟質で、色調は黒褐色、黄褐色および黄褐白色を呈する。

なお、この群の平瓦のなかにサイズの小さいものが1例確認されている（平288）。広端部および狭端部の幅は不明であるが、全長は36.5cmしかない。その瓦を造るのには「布カ」の布が使われている。

<iv> (図版107, 108 写真133, 141, 153—平290～平298)

全長が40.5cm前後、広端幅は30.5cm前後、狭端幅は27.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は残らないものが多いが、左上から右下への方向に湾曲して認められる例がある。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面調整は、調整を施さない③0であるが、狭端部では左から右への方向に、広端部では右から左へヘラケズリ調整③2を施すものがある。粘土板の重ね目の上にナデ調整を施す例もある。凹面は凹凸に見えるが、枠側板圧痕は認められない。狭端部中央で布目圧痕の下に楕円形の窪みが、そしてその窪みから5.0cmほど下がる場所に長方形の突出が、さらにその1.0cmほど下に長方形の窪みがある。また広端部では、広端縁から3.0cm上がる場所に、長方形の突出が、さらにそこから4.5cm上に長方形の窪みを認める。これらの窪みと突出はすべて、1枚の平瓦の中央でほぼ一直線上にある（写真141：平290）。楕円形の窪みは、長径が4.0cm、短径は3.0cm、深さは約0.06cmを測るが、その窪みから中央にやや寄ったところに、幅が0.5cm程度の棒状の突出が認められる。窪みと一直線上にある長方形の突出は、狭端部側のものも、広端部側のものともに長さが3.5cm、幅は0.5cmを測る。長方形の窪みは2つともに、長さが40.5cm前後、幅は0.8cm前後、深さは0.2cm前後を測る。片側縁には棒状のものの圧痕と見える分割界線が残る。

布袋には「布ホ」、「布ト」、「布タ」および「布レ」を使う。綴じ合わせ痕あるいは縫い合わせ痕から「布袋ホ平1」、「布袋ト平1」、「布袋ト平2」、「布袋ト+レ平0」、「布袋タ平2」、「布袋レ平1」、「布袋レ平3」、「布袋レ+ト平0」、「布袋レ+ホ平2」と表記する布袋が確認されている。「布袋タ平2」を使用した平瓦は図示していない。

凸面には不定方向のナデ調整①13を施す。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整には、凹面側だけに傾けてケズリ調整を施す②23と、凸面側だけに傾けてケズリ調整を施す②22がある。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として多量に含まれる。焼成度はやや堅緻であるが、瓦の質がもろくブロック状に崩れる傾向がある。色調は明橙色、茶褐色、黒褐色、黄褐色および白灰色を呈するものが多い。しかし軟質で明黄褐色を呈するものもある。それはパサパサした瓦質をして、ブロック状に崩れることはない。

<v> (図版108, 109 写真153—平299～平303)

この群とする資料は残存状況が悪く、出土量も少ないため、データが不十分である。

全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは1.8～2.7cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが認められるが、桶器具痕は不明である。糸切り痕、椀側板圧痕は認められない。粘土板の重ね目には「S型」と「Z型」の両方がある。凹面は広端部を除いて、調整を施さない③0である。広端部の1.0～1.5cmほどの範囲に右から左にヘラケズリ調整③2を施す。

布袋には「布へ」を使う。綴じ合わせ痕あるいは布端のかがり縫いから「布袋へ平2」、「布袋へ平0↑」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①11を施すため、叩き目はまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、撚り紐による分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて分割する。側面調整は凹凸両面側に傾けて削る②24が多いが、調整を施さない②0も認められる。

素材の胎土には花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、やや硬質で灰白色を呈するものと、軟質で明橙白色を呈するものなどがある。

この群の平瓦には、凹面から見て、広端部の右隅の一角を焼成前に切り落とすもの（平301）を認める。

なお、この群の平瓦は、凸面の調整が横方向のナデ調整であるものの、縦方向あるいは不定方向に凸面がナデ調整され、しかも椀側板圧痕と椀側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る、平瓦Ⅱ21 Za群から平瓦Ⅱ28 Za群とする一群の平瓦に対照して、全体の印象が類似することを付記しておく。

平瓦Ⅱ1 Za群 (図版109 写真142—平304)

全長が約35.0cm、広端幅は約26.7cmを測るが、狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.5cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、桶の椀側板圧痕、布目圧痕などが残る。糸切り痕は認められない。粘土板の重ね方は「S型」である。桶の椀側板圧痕が明瞭に認められ、桶の椀側板は、広端部で幅が2.5～3.5cm、狭端部では幅が2.0～2.5cmを測る。平瓦1枚あたりの椀側板の枚数は不明である。椀

側板を綴じ付けた紐の圧痕は認められない。広端部あるいは狭端部の凹面には、右から左へのヘラケズリ調整を施す。この群とする平瓦の一部には、布目圧痕の下に、直径が0.5cm程度および1.0cm程度の2つの円形の窪みが、3.0cmほどの間隔で上下に認められる（写真142）。その位置から考えて、桶に取り付けられた器具の圧痕と思われるが、その機能は分からない。

布袋には「布レ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料ないので「布袋レ平0」と表記する。

凸面には、横方向のナデ調整①11を施す。

桶をはずしてから分割は、分割ののちになされた側面調整のために、凹面側から截断されたのか、凸面側からかは不明である。分割には狭端側から広端側に切り込んでいる。側面調整には、凹面側に傾けてヘラケズリ調整②23を施すものと、凹凸両面側に傾けてヘラケズリ調整②24を施すものがある。

素材の胎土には花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度は硬質で、色調は茶黄褐色を呈する。

平瓦Ⅱ20 Za群（図版110 写真140—平305～平308）

凸面に叩き目は認められないものの、椀側板圧痕と椀側板を綴じ付けた紐の圧痕を認める平瓦である。完形品がなく、綴じ紐の構成が分からないので、平瓦Ⅱ20 Za群としか認定せざるをえないものをここにまとめる。

造瓦技術については以下で述べる平瓦Ⅱ21 Za群、平瓦Ⅱ22 Za群、平瓦Ⅱ23 Za群、平瓦Ⅱ24 Za群、平瓦Ⅱ25 Za群、平瓦Ⅱ27 Za群、平瓦Ⅱ28 Za群とするものに類似することから、これらの群のいずれかに該当する資料群と言えよう。例えば、この群とする1例（平307）は、特徴的な太い分割界線をもつことから、平瓦Ⅱ22 Za群とする例（平317）に類似する。椀側板および綴じ紐圧痕から見ては桶を特定できないものの、平瓦Ⅱ22 Za群と認定できる可能性が高い。

布袋には「布口」、「布チ」と「布ネ」を使う。「布口」と「布ネ」の布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋口平1」、「布袋口平2」、「布袋口平3」、「布袋ネ平2」、「布袋ネ平4」と、「布チ」の布袋については綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋チ平0」と表記する。なお、この群とする平瓦を半割して造った割熨斗瓦Ⅱ0 Za群のなかに、「布袋チ平5」と表記する例（熨斗14）がある。

平瓦Ⅱ21 Za群（図版110～114 写真134～136, 140, 153—平309～平316）

全長が34.0～39.0cm、広端幅は37.5～39.5cm、狭端幅は30.0～32.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.5～3.5cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は右上から左下への方向、あるいは左上から右下への方向に湾曲して認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目をなで消す。広端部と狭端部ともにヘラケズリ調整③2を施すことがある。広端部にはヘラケズリ調整を施さないものもある。両側縁（あるいは片側縁）には「5粒／5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。分割突線は2段に分けて取り付けられる（写真140：平310）。上段のものの長さは14.0～16.0cmであり、下段の方は16.0～18.0cmである。両者の開き間隔は1.5～3.0cmである。

桶の柵側板圧痕と柵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の柵側板の幅は、狭端側で6.5～7.0cm、広端側で7.0cm前後を測る。平瓦1枚あたりに5枚程度（中央に4枚と両脇にほぼ半枚ずつ）あるいは、6枚程度（中央に5枚と両脇にほぼ半枚ずつ）の柵側板で構成される。柵側板を連結する綴じ紐の圧痕は2段に認められ、「表短目+表短目」と表記できる。ただし、狭端側から広端側に9.5～14.0cm下がるところに上段の「表短目」のものが、そこから広端側にさらに17.0～20.0cm下がるところに下段の「表短目」のものがあるというように、綴じ紐のつく位置にバラツキがあるので、同じ構造をもつ桶であっても複数個の桶が存在した可能性が高い。さらに綴じ紐の本数に変異があり、2本から4本で綴じ付けられている。今のところ、それらの組み合わせには3種類が認められる。すなわち上段、下段とも2本どりの場合、上段が2本どり、下段が3本どりの場合、上段が3本どり、下段が4本どりの場合がある。また、2段の綴じ紐ともに「表短目」とした綴じ紐圧痕は、通常に当然のように認められるものであるが、ほかに、位置を変えて部分的に「表短目」の綴じ紐圧痕が認められる場合がある。その場合、通常の「表短目」の綴じ紐の、上段のものに対してはその下に、下段のものに対してはその上に、1ヶ所から数ヶ所にわたって認められる。この綴じ紐圧痕は、先に「表短目」のものとした綴じ紐のように桶を一周する圧痕を残していない。桶の綴じ付けを補強する役割をもったか、あるいは1ヶ所にしか認められない場合は、綴じ付け紐の綴じ終わりを示している可能性が高いと考えられる。なお、綴じ紐は撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

布袋には「布口」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋口平1」、「布袋口平2」と表記する。凹面に布目圧痕のつかない部分が認められる場合、通常は広端側に認められるが、この群の平瓦には、柵側板圧痕と綴じ紐圧痕の認められない桶器具を用いて造られたほかの群の平瓦と異なり、狭端側にそれらが認められることが多い。またほとんどの例で布端が垂れ下がったような痕跡を認める。粘土板を桶に巻き付けるときに布がずり落ちるような状況が、しばしば起きていたと推測させられる。

凸面には、縦方向のナデ調整①12を施すため、叩き目はまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度および色調は、堅緻な感じを与えて須恵質で、暗灰色あるいは青灰色を呈するものと、やや軟質でパサパサした感じを与え、灰白色、明橙色、灰褐色あるいは明橙茶色を呈するものがある。

なお、この群の平瓦には、凸面から見て、広端部の右隅の一角を、幅約3.0cm、長さ約6.5cmの範囲で四角く（平311）と、広端部の左隅を斜め方向に（平312）、ともに焼成前に切り落とすものを認める。

平瓦Ⅱ22 Za群（図版114 写真137, 140—平317）

全長は38.7cmを測るが、広端幅および狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは2.6cmである。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は

認められない。粘土板の重ね方は「Z型」である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目をなで消す。広端部と狭端部にともにヘラケズリ調整③2を施しているものがある。片側縁に「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る（写真140：平317）。分割突線は2段に分けて取り付けられる。上段のもの長さは約17.5cmで、下段の方は、途中で途切れているため確実とは言いがたいが、おそらく15cm前後あったと推測できる。両者の開き間隔は約1.5cmである。

桶の柵側板圧痕と柵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の柵側板の幅は、狭端側で6.5～7.0cm、広端側で7.0cm前後を測る。平瓦1枚あたりに6枚程度（中央5枚と両脇にほぼ半枚ずつ）の柵側板で構成される。柵側板を連結する綴じ紐の圧痕は2段に認められ、「表短目・表短目+表短目・表短目・表短目」と表記できる。つまり「表短目」の綴じ紐が上段では2列に、下段では3列に近接して認められるのである。上段のものは、狭端側から約11.5cm下がる場所に1列、その下に約0.8cm間隔をおいてもう1列がある。下段のものは、上段の2列目から約17.5cm下がる場所に1列があり、その下に0.5cmずつの間隔で、合計3列の綴じ紐圧痕が認められる。綴じ紐の本数は、それぞれ1本どりである。なお、綴じ紐は撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

布袋には「布チ」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋チ平5」と表記する。凹面に布目圧痕のつかない部分が認められる場合、通常は広端側に認められるが、この群の平瓦には、柵側板圧痕と綴じ紐圧痕の認められない桶器具を用いて造られたほかの群の平瓦と異なり、狭端側にそれらが認められることが多い。またほとんどの例で布端が垂れ下がったような痕跡を認める。粘土板を桶に巻き付けるときに布がずり落ちるような状況が、しばしば起きていたと推測させられる。

凸面には、縦方向のナデ調整①12を施していて、叩き目がまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや硬質で、パサパサした感じを与え、色調は明橙色を呈する。

平瓦Ⅱ23 Za群（図版115 写真137, 140—平318）

全長が35.0cm、広端幅は40.5cm、狭端幅は30.8cmを測る。素材は粘土板で、厚さは3.8cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は凹面にかすかに残り、左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方は「S型」である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目をなで消す。狭端部にヘラケズリ調整③2を施すものがある。左側縁から9.0cmほど中央に寄るところに、「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線を残す例がある。分割界線は縦に2列で、3段にわたって付く。すなわち、右列は上段と下段の2段、左列は中央に1段と付くが、その左列は右列の上下の切れ目の部分の左に重ねるようにずれて認められる。右列の分割界線の長さは、上段のものが約13.0cm、下段の方は約17.0cmで、左列中央の分割界線の長さは約9.0cmである。右列の上段と下段の開き間隔は約1.0cmである。それらの位置からすると、左列中央の分割界線の必要性は理解しがたい。

桶の柵側板圧痕と柵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の柵側板の幅は、狭端側で5.0～6.5cm、広端側で6.5cm前後を測る。平瓦1枚あたりに6枚程度（中央5枚と両脇にほぼ半枚ずつ）の柵側

板で構成される。椀側板を連結する綴じ紐の圧痕は2段に認められ、「表短目+表短目・表短目・表短目」と表記できる。つまり、上段のものは1列で、下段のものは3列に近接して認められるのである。ただし、下段の一番上の列の「表短目」とする綴じ紐は、その他の「表短目」の綴じ紐とは異なり、桶に長方形に彫り込んだ窪みのなかの穴に紐を通してあるため、綴じ紐圧痕が不整形の突出として瓦の凹面に残されている。それぞれの占める位置は、上段のものは狭端から約11.5cm下がるところに1列、下段のものは、上段の位置から約13.5cm下がってまず不整形な突出が並ぶ1列目があり、それから下に約2.5cmずつの間隔をおいて、2列目と3列目の通常の「表短目」の窪みとしての綴じ紐の圧痕が認められる。綴じ紐の本数は、上段のものが2本どり、下段の一番上のものは本数が不明であるが、2列目のものは1本どり、3列目のものは2本どりである。なお、綴じ紐は撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

布袋には「布口」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋口平3」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①12を施すため、叩き目がまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。なお、観察できた資料では、桶に分割突線が取り付けられているにもかかわらず、その圧痕である界線に従って分割されていなくて、分割界線は左側縁から右の方に約10cmずれたところに認める（写真140：平318）。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや硬質で、パサパサした感じを与え、色調は茶褐色を呈する。

なお、凸面側にも部分的に「布口」の痕跡が認められる。焼成前の瓦を乾燥させるべく運んだときに、布をあてて持ったのであろうか。

平瓦Ⅱ24 Za群（図版115, 116 写真138—平319～平321）

全長が35.0～43.5cm、広端幅は40.5cm、狭端幅は38.5cmを測る。素材は粘土板で、厚さは2.5～3.4cmである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、布袋の綴じ合わせ痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は凹面にかすかに残り、右上から左下への方向に、あるいは左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方は「Z型」である。基本的には凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目をなで消す。広端部と狭端部にともにヘラケズリ調整③2を施すものがある。片側縁には「5粒/5cm」の左撚りを見せる分割界線が残る。

桶の椀側板圧痕と椀側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の椀側板の幅は、狭端側で6.0～7.0cm、広端側で7.0cm前後を測る。平瓦1枚あたりに6枚程度（中央5枚と両脇にほぼ半枚ずつ）の椀側板で構成される。椀側板を連結する綴じ紐の圧痕は3段に認められ、「表短目+表短目+表短目」と表記できる。綴じ紐の圧痕を認める位置の違いから、桶は大きく2種類に分けられる。すなわち、上段の紐痕が狭端縁から2.0cm前後下がるところに、中段の紐痕は上段の紐痕から約10.0cm下に、下段の紐痕は中段の紐痕からさらに約18.0cm下に認める桶と、上段の紐痕が狭端縁から2.0cm前後下のところに、中段の紐痕が上段のものから約15.0cm下に、下段の紐痕は中段のものからさらに18.5cm下に認める桶である。それらの綴じ紐の圧痕はすべて「表短目」として認められるが、綴じ紐の本

数は、後者ではすべて2本どりで綴じ付けられるのに対して、前者では2本、2本、3本という組み合わせを認める。なお、綴じ紐は撚りの痕跡が認められるので、縄の可能性が高い。

布袋には「布口」を使う。綴じ合わせ痕から「布袋口平1」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①12を施して、叩き目がまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや硬質で、パサパサした感じを与え、色調は灰青色を呈するものと、茶褐色を呈するものがある。

平瓦Ⅱ25 Za群 (図版117-平322)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.2cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、布袋の綴じ合わせ痕は分からない。粘土板の重ね方は「Z型」である。凹面調整を施さない③0であるが、粘土板の重ね目はなで消す。側縁部にあると推測される分割界線については、破片資料のために観察できない。

桶の柵側板圧痕と柵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の柵側板は中段の綴じ紐の圧痕の位置での幅が約6.0cm、広端部での幅は約7.0cmを測る。平瓦1枚あたりの柵側板の枚数は不明である。柵側板を連結する綴じ紐の圧痕が3段についているのは確実に、「不明+表短目+表短目・表短目」として認められる。中段の「表短目」の紐痕と下段の上列の「表短目」の紐痕との間隔は約14.0cmで、下段の2列の紐痕の間隔は3.0cm前後である。綴じ紐の本数は、すべて2本どりである。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ネ平0」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①12を施して、叩き目がまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや硬質で、パサパサした感じを与え、色調は灰白黄色を呈する。

平瓦Ⅱ27 Za群 (図版117-平323)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.1cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、布袋の綴じ合わせ痕は分からない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。

桶の柵側板圧痕と柵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の柵側板は、下段の綴じ紐の圧痕の位置での幅が約5.0cmを測るのが分かるが、ほかでは不明である。平瓦1枚あたりの柵側板の枚数も不明である。柵側板を連結する綴じ紐の圧痕が2段についているのは確実に、「表短目+連続目」と表記できる。2つの紐痕の間隔は約12.5cmである。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ネ平0」と表記する。凸面には、縦方向のナデ調整①12を施すため、叩き目がまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は、凹凸両面側に傾けてヘラケズリを施す②24である。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。焼成度はやや硬質で、パサパサした感じを与え、色調は明橙色を呈する。

平瓦Ⅱ28 Za群 (図版117-平324)

この群とする資料は残存状況が悪く、また出土量も少ないため、全長、広端幅、狭端幅などは不明である。素材は粘土板で、厚さは2.0cm前後である。

凹面には、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕、布袋の綴じ合わせ痕は分からない。粘土板の重ね方は不明である。凹面は調整を施さない③0である。側縁部にあると推測される分割界線については、破片資料のため観察できない。

桶の枠側板圧痕と枠側板を綴じ付けた紐の圧痕が残る。桶の枠側板は中段での幅が5.5cm前後、広端部での幅が7.0cm前後を測る。平瓦1枚あたりの枠側板の枚数は不明である。枠側板を連結する綴じ紐の圧痕は、残存資料における位置から判断して2段にあったのは確実であると推測されるが、3段以上にあったかどうかは分からない。「不明+連続目・表短目」と2段に表記しておく。下段の上列にある「連続目」の紐痕は、広端部から7.3cm前後上がるところにあり、その「連続目」の紐痕と下列の「表短目」の紐痕との間隔は2.0cm前後である。綴じ紐の本数は、「連続目」のものが1本どり、「表短目」のものが2本どりである。

布袋には「布ネ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ネ平0」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①12を施すため、叩き目がまったく残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界線に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、4枚に分割する。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は粗い。なお、わずかにチャート起源と思われる赤色砂粒が含まれる。焼成度はやや硬質で、パサパサした感じを与え、色調は灰白橙色を呈する。

平瓦Ⅱ3 Za群 (図版117 写真140, 153-平325~平336)

この群とする資料は残存状況が悪く、全長、広端幅、狭端幅は不明である。素材は粘土板で、厚さは1.0~1.9cmと破片によって変異があるが、薄いものが多い。

凹面には、糸切り痕、粘土板の重ね目、布目圧痕、桶器具痕などが残る。糸切り痕は左上から右下への方向に認められる。粘土板の重ね方には「S型」と「Z型」の両方が認められる。凹面調整には、③2のヘラケズリ調整、縦方向のナデ調整③1、および③0の調整を施さないものがある。狭端部には調整を施さないものが多いが、広端部は横方向にヘラケズリ調整③2を施すものが多い。

側縁部に分割界点が認められる(平326, 平327, 平330, 平331)。分割界点は狭端部から7.0cm下

がるところと、広端部から8.5cm上がるところとに、確実に認められる。しかし1枚の瓦についていた箇所については分からない。分割界点は1.0×0.6cmの楕円形の圧痕として認められる（写真140：平327，平331）。

桶の杵側板圧痕と杵側板を綴じ付けた紐の圧痕が残るが、大半が不明瞭である。とくに杵側板圧痕は、綴じ紐の圧痕からそれと分かる程度で、明瞭に認められる例はわずかである。それらには部厚いものが多い。杵側板の幅は、狭端部で5.5cm前後、広端部で7.0cm前後を測る。綴じ紐の圧痕は「表短目」のものが確認されているが、その位置は狭端から8.5～9.5cm下がるところと、広端から約10.5cm上がるところには確実に認められると言える。ただし、綴じ紐の組み合わせについては、確実なところは分からない。また、綴じ紐の圧痕も、杵側板圧痕と同じく、その窪みは浅く、類似する桶構造をもつ桶Ⅱ2が明瞭に認定されるのとは、様相を異にしている。杵側板の綴じ紐は1本どりが確認できているだけである。

なお、綴じ紐の圧痕は通常、窪みとして認められるが、破片資料のなかに圧痕ではなく突出として認められる例が（平326，平328）、この群の例をも含めて、複数存在する。あらゆる資料でほぼ同じ位置にそれらは認められる。綴じ紐の圧痕のつくべきところが突出しているので、桶の上では紐を嵌め込む溝状の彫り込みがあって、その部分の紐の嵌り方の異常が生じたのであろうか。それが突出に反映したのであろう。

布袋には「布ハ」と「布ヌ」を使う。綴じ合わせ痕を観察できる資料がないので「布袋ハ平0」、「布袋ヌ平0」と表記する。

凸面には、縦方向のナデ調整①12、あるいは斜め方向のナデ調整①13を施すものが多いが、カキ目調整①4を施すものもある。いずれにしても、それらの調整のために、叩き目はほとんど残っていない。

桶をはずしてからの分割は、分割界点に従って、凹面側から厚さのおよそ半分まで、狭端側から広端側に切り込みを入れて、おそらく4枚に分割するのであろう。側面調整は②0で、分割後の調整を施さない。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれ、それらの粒子は全体に細かいが、黒色砂粒は、その粒子が粗いために目立っている。このほかチャート起源と思われる赤色砂粒の粒子の粗いものも含まれる場合もある。焼成度および色調は、硬質で、暗灰青色あるいは暗灰色を呈するものと、軟質で、灰褐色あるいは黄灰色を呈するものがある。赤色砂粒を含むものは明茶褐色を呈する。

なお、分割指標として分割突起（＝分割界点に反映）が取り付けられた桶の使用を確認するのは、この群とする平瓦だけである。

5 垂木先瓦^(註24)

垂木先瓦R群（図版118 写真143—垂木先1～垂木先3）

素弁9葉の蓮華文垂木先瓦で、飛鳥寺の垂木先瓦「素弁9弁I型式」と同範であるという（花谷1997）。直径が13.7～14.0cm、中房径は4.0～4.2cm、中房での厚さは2.0cm前後を測る。外縁はなく、中房に蓮子は付けられない。中房の釘穴は、その直径が約0.9cmの円孔で、瓦当面側から焼成前に穿たれる。瓦当裏面には時計回りの回転ナデ調整が認められる。側面はナデ調整ののちに、ヘラケ

ズリ調整で裏面側に面取りを施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれるが、それらの粒子は細かい。ただし軟質のものにはチャート起源の赤色砂粒が目立つ。焼成度および色調は、良好、硬質で灰色を呈するものと、不良、軟質で黒褐色あるいは暗褐色を呈するものがある。

垂木先瓦S群（図版118 写真143－垂木先4～垂木先10）

素弁8葉の蓮華文垂木先瓦である。直径が約12.5cm、中房径は約2.8cm、中房での厚さは約1.5cmを測る。外縁は素縁である。あとに述べる垂木先瓦T群と瓦当文様は類似するが、T群のものよりも弁端が丸みをもち、蓮弁が立体的により膨らんで、瓦当の厚さも部厚い。対向する蓮弁の中央稜線を結ぶ線の上に、中房周縁の蓮子が4つ配される。中房の釘穴は、その直径が約0.7cmの円孔で、瓦当面側から焼成前に穿たれる。瓦当裏面にナデ調整を施すが、とりわけ周縁部のナデ調整は強く、凹線状の痕跡を残す。側面にもナデ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれるが、それらの粒子は比較的細かい。ただし軟質のものにはチャート起源の赤色砂粒が目立つ。焼成度は不良、軟質であり、色調は明褐色または灰茶色を呈する。

垂木先瓦T群（図版118 写真143－垂木先11～垂木先13）

素弁8葉の蓮華文垂木先瓦である。直径が約12.7cm、中房径は2.7～2.8cm、中房での厚さは約1.5cmを測る。外縁は素縁である。前述の垂木先瓦S群と瓦当文様が類似するが、S群のものよりも弁端が尖り気味に丸くおさまり、蓮弁が扁平である。中房周縁の蓮子が同じく4つ配されるが、蓮弁の中央稜線を結ぶ線上ではなく、隣り合う蓮弁を分ける線分の上に配置される。中房の釘穴は、その直径が0.6～0.7cmの円孔で、瓦当面側から焼成前に穿たれる。瓦当裏面にはナデ調整を施すが、周縁部には指頭圧痕が目立ち、波打ったように見える。側面にもナデ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれるが、それらの粒子は比較的細かい。ただし軟質のものにはチャート起源の赤色砂粒が目立つ。焼成度および色調は、良好、硬質で黒灰色を呈するものと、不良、軟質で灰色あるいは明褐色を呈するものがある。

垂木先瓦U群（図版118 写真143－垂木先14～垂木先16）

単弁12葉の蓮華文垂木先瓦である。直径が12.6cm、中房径は約2.8cm、中房での厚さは1.9cmを測る。蓮弁上には先端が丸みをもつ子葉を1枚おく。連弁中央にも子葉にも、稜は通らない。外縁は素縁で、中房に蓮子は付けられない。中房の釘穴は、その直径が約0.6cmの円孔で、瓦当面側から焼成前に穿たれる。瓦当裏面には不定方向のヘラケズリ調整を施す。側面にはナデ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれるが、それらの粒子は比較的細かい。焼成度はやや軟質で、色調は灰黒色や灰白色である。

垂木先瓦W群 (図版118 写真143-垂木先17)

単弁10葉の楕円形の蓮華文垂木先瓦である。長径が約16.8cm、短径は約12.5cm、中房径は約2.5cm、中房での厚さは約1.8cmを測る。蓮弁上には先端が丸みをもつ子葉を1枚おく。連弁中央に稜が通るが、子葉には稜は通らない。外縁は素縁で、中房に蓮子は付けられない。中房の釘穴は、その直径が約0.5cmの円孔で、瓦当面側から焼成前に穿たれる。瓦当裏面には不定方向のヘラケズリ調整を施す。側面にはナデ調整を施す。

素材の胎土には、花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黑色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれるが、それらの粒子は比較的細かい。焼成度はやや軟質で、色調は灰白色である。

6 熨斗瓦

6-1 切熨斗瓦

切熨斗瓦Ⅱ1 J1d群 (図版119 写真144, 147-熨斗1, 熨斗2)

平瓦Ⅱ1 J1d群と表記する平瓦を、焼成前に半截するか、あるいは所定の幅に切る。2点を確認しているが、どちらも全長は不明である。ただし、平瓦Ⅱ1 J1d群とする平瓦を参照すると、全長は33.0cm程度はあったと推測できる。素材は粘土板で、厚さは1.1~1.7cmを測る。半截面である側面にはヘラケズリ調整を施す。なお、この群の熨斗瓦と同じ群とした平瓦Ⅱ1 J1d群は、今のところ平瓦として確認できている例では、凸面に縄目叩きで叩き締めたあと、ナデ調整を施す平瓦Ⅱ1 Za [J1d] 群と表記すべき例しか確認できていない。

熨斗1の資料は、広端に近い部分での幅が18.2cm、狭端幅は17.8cmを測る。使われる布袋は、綴じ合わせ痕から「布袋レ平1」と表記する。熨斗2は、ほぼ中央部分での幅は13.0cmを測る。綴じ合わせ痕が認められないので、その布袋は「布袋レ平0」と表記する。

6-2 割熨斗瓦

割熨斗瓦Ⅱ0 Aa群 (図版119 写真141, 144-熨斗3)

平瓦Ⅱ0 Aa群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。半割面はほぼ一直線になっており、分割後の調整を施さない。

割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Aa] 群 (図版119 写真145-熨斗4)

平瓦Ⅱ0 Za [Aa] 群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。粘土板の重ね目のところで凹面から打撃を加えて割る。半割面はほぼ一直線になっており、分割後の調整を施さない。

割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群 (図版119 写真145-熨斗5)

平瓦Ⅱ0 Za [Ak] 群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。粘土板の重ね目のところで凸面から打撃を加えて割る。半割面はほぼ一直線になっている。

割熨斗瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群 (図版119 写真145-熨斗6)

平瓦Ⅱ0 Za* [Ak] 群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。粘土板の重ね目のところで凸面から打撃を加えて割る。半割面はほぼ一直線になっている。

割熨斗瓦Ⅱ0 Bh群（図版120 写真146－熨斗7）

平瓦Ⅱ0 Bh群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。粘土板の重ね目のところで凸面から打撃を加えて割る。半割面はほぼ一直線になっているが、摩滅しているため、分割後に破面調整を施すかどうか不明である。

割熨斗瓦Ⅱ0 Za [Bs] 群（図版120 写真146－熨斗8）

平瓦Ⅱ0 Za [Bs] 群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。凹面から打撃を加えて割るが、粘土板の重ね目のところでもなく、刻み目も入れないので、半割面は一直線になっていない。分割後に調整を施さない。

割熨斗瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) 群（図版120 写真146－熨斗9）

平瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) 群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。凸面から打撃を加えて粘土板の重ね目のところで割る。半割面はほぼ一直線になっているが、摩滅しているため、分割後に破面調整を施すかどうか不明である。凹面に付着物がある。

割熨斗瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) (+Cn) 群（図版120 写真146, 147, 160－熨斗10, 熨斗11）

平瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) (+Cn) 群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。凸面から打撃を加えて粘土板の重ね目のところで割る。半割面はほぼ一直線になっているが、摩滅しているため、分割後に破面調整を施すかどうか不明である。

割熨斗瓦Ⅱ1 J1d群（図版120 写真147－熨斗12）

平瓦Ⅱ1 J1d群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。粘土板の重ね目のところで分割せずに、広端部の求める分割位置に刻み目のような印をつけて、凹面から打撃を加えて割る。分割後に調整を施さない。

割熨斗瓦Ⅱ1 Za群（図版121 写真147－熨斗13）

平瓦Ⅱ1 Za群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。分割位置の凸面に切り込みを入れて、凸面側から打撃を加えて割る。分割で生じた面の凹面側に細部調整をわずかに施す。

割熨斗瓦Ⅱ20 Za群（図版121 写真147－熨斗14）

平瓦Ⅱ20 Za群と表記する平瓦を、焼成後に半割する。凹面から打撃を加えて割る。分割後に調整を施さない。

7 隅平瓦

隅平瓦Ⅲ2 J2an 群（図版121 写真148－隅平1）

全長は29.0cm、広端幅21.0cm、狭端幅9.0cmを測る。焼成した平瓦Ⅲ2 J2an群と表記する平瓦を素材として、全体の形を三角形に近い台形に成形する。もとの広端側を大きく残して、対角線の方に台形の側辺を、凹面側からの打ち欠きで造り出す。さらに広端部の形状の不均整を解消するため

に、凹面側から打ち欠いてほぼ均整のとれた円弧を広端部に造り出している。平瓦Ⅲ2 J2an群とする平瓦は、全長が37.5cm、広端幅は25.2cm、狭端幅は22.7cmを測るので、隅平瓦への成形は、求める形態を確実に意図した割り取り作業であるという印象を受ける。

8 螻羽瓦

螻羽瓦－軒平瓦A A 5－平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群（図版122 写真149－螻羽1～螻羽4）

軒平瓦A A 5－平瓦Ⅱ0 Za〈iii〉群と表記する軒平瓦を素材にした螻羽瓦である。4点を確認している。螻羽1の資料は瓦当部を正面に見て、左の側縁部を上側に強く折り曲げる。瓦当面の厚さは3.65cm、顎の長さは約6.7cmで、顎の厚さは0.9cmを測る。破片資料であるため、全長、瓦当部の幅などは不明である。瓦当面は、観察の限りでは、軒平瓦A A 5と同じである。螻羽2～螻羽4の資料は側縁部が欠損しているため、軒平瓦と区別が困難であるが、軒平瓦の瓦当面が弧状を描くのに対して、やや平坦に仕上げられていることから螻羽瓦と認定する。

螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群（螻羽10）

平瓦Ⅱ0 Za [Bb] 群と表記する平瓦の片側縁を上側に折り曲げているので、螻羽瓦と認定する。

螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Bj群（図版122－螻羽5，螻羽6）

平瓦Ⅱ0 Bh群と表記する平瓦の片側縁を上側に折り曲げているので、螻羽瓦と認定する。

螻羽瓦－平瓦Ⅱ1 Za [J1e] 群（図版122 写真149－螻羽7）

平瓦Ⅱ1 Za [J1e] 群と表記する平瓦の片側縁を上側に折り曲げているので、螻羽瓦と認定する。側面に沈線を2本、側縁と平行して彫り込む。

螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群（図版122－螻羽9）

平瓦Ⅱ0 Za〈i〉群と表記する平瓦の片側縁を上側に折り曲げているので、螻羽瓦と認定する。

螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群（図版122－螻羽8）

平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群と表記する平瓦の片側縁を上側に折り曲げているので、螻羽瓦と認定する。

9 面戸瓦

9-1 切面戸瓦

切面戸瓦－行基Ⅰ1 Za〈vi〉群（図版122－面戸1）

行基Ⅰ1 Za〈vi〉群と表記する丸瓦の両側縁を90度回転させて、上辺および下辺に取り込み、新たな両側を切り込んで両袖部を造り出す。

切面戸瓦－行基Ⅰ1 Za〈xviii〉群（図版122－面戸2）

行基Ⅰ1 Za〈xviii〉群と表記する丸瓦の両側縁を90度回転させて、上辺および下辺に取り込み、新たな両側を切り込んで両袖部を造り出す。

切面戸瓦－玉縁 I 321 Za [J1b] 群 (図版122 写真149－面戸3)

玉縁 I 321 Za [J1b] 群と表記する丸瓦の両側縁を90度回転させて、上辺および下辺に取り込み、新たな両側を切り込んで両袖部を造り出す。下辺幅は10.0cmを測る。上辺幅は不明である。

切面戸瓦－玉縁 I 323 Za [J1b] 群 (図版122 写真149－面戸4～面戸9)

玉縁 I 323 Za [J1b] 群と表記する丸瓦の両側縁を90度回転させて、上辺および下辺に取り込み、新たな両側を切り込んで両袖部を造り出す。7点を確認するが、下辺が残されている例である面戸4は、下辺幅が5.0cmを、また面戸9は8.5cmを測る。上辺の残された例がないので上辺幅は不明である。面戸9は、ほかの切り面戸瓦と比べると形状が異なることを特記しなければならない。つまり出土した大半の面戸瓦が両袖部を造り出すときに、左右のカーブをほぼ同じような形に造り出すのに対して、面戸9では、左右でやや傾きが異なる。また下辺も、大半の面戸瓦が素材の丸瓦の側縁部をそのまま利用するのに対して、面戸9では丸くカーブさせて造り出す。使用箇所の違いを意識しているのであろう。

9-2 割面戸瓦

割面戸瓦－行基 I 1 Za [Af] (+Cn) 群 (図版123 写真149－面戸10)

行基 I 1 Za [Af] (+Cn) 群と表記する丸瓦を素材とする。下辺幅が16.0cm前後、上辺幅は27.5cmを測る。明瞭な両袖部を造らないで半月状にする。凸面側から打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za [Ak] 群 (図版123 写真149－面戸11～面戸13)

行基 I 1 Za [Ak] 群と表記する丸瓦を素材とする。3点を確認する。両袖部を造り出すもの(面戸11, 面戸13)と片袖部だけを造り出すもの(面戸12)がある。面戸11の資料は、下辺幅が12.0cm前後、上辺幅は25.0cmを測る。その面戸瓦の左側面にもとの丸瓦の狭端面を残す。下辺と両側面とも凹面側から打ち欠き、成形する。面戸13の資料は下辺幅が11.5cm、上辺幅は23.0cmを測る。半月状に近いが、わずかに両袖部を造り出す。下辺には、素材の丸瓦の側縁をそのまま使う。右袖部は凸面側から、左袖部は凹面側から、打ち欠き、成形する。面戸12の資料は、下辺幅が6.5cmであるが、上辺幅は不明である。その下辺には、素材とされる丸瓦の側縁をそのまま使う。両側面はともに凹面側から打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za [J2ad] 群 (図版123－面戸14)

行基 I 1 Za [J2ad] 群と表記する丸瓦を素材とする。下辺幅が6.0cm、上辺幅はおそらく15.0cmを測る。両袖部を造り出す。上辺には素材の丸瓦の側縁をそのまま使う。下辺と両袖部を凹面側から打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za <ii> 群 (図版123－面戸15, 面戸16)

行基 I 1 Za <ii> 群と表記する丸瓦を素材とする。下辺幅が7.0～7.5cm、上辺幅は不明である。両袖部を造り出すもの(面戸15)と、ほとんど造り出さないもの(面戸16)がある。ともに下辺には素材の丸瓦の側縁をそのまま使う。両袖部とも、凹面側から打ち欠き、成形する。袖部をわずかにしか造り出さないものは、面戸瓦の右側面にもとの丸瓦の狭端面を残す。袖部と左側面は凹面側

から打ち欠き、成形されたと推測できるが、摩滅していて確かなことは言えない。

割面戸瓦－行基 I 1 Za 〈vii〉群（図版123－面戸17）

行基 I 1 Za 〈vii〉群と表記する丸瓦を素材とする。両袖部に近い形をわずかに造り出すが、全体形は逆台形状を呈すると言える。下辺幅が9.0cm、上辺幅は不明である。下辺には、素材である丸瓦の側縁をそのまま使う。面戸瓦の両側面とも凹面側から打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za 〈viii〉群（図版123－面戸18）

行基 I 1 Za 〈viii〉群と表記する丸瓦を素材とする。両袖部に近い形をわずかに造り出すが、全体形は逆台形状を呈すると言える。下辺幅が7.5～8.5cm、上辺幅は不明である。下辺には、素材である丸瓦の側縁をそのまま使う。面戸瓦の両側面とも凹面側から打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za 〈x〉群（図版123 写真149－面戸19）

行基 I 1 Za 〈x〉群と表記する丸瓦を素材とする。上辺には、素材である丸瓦の側縁をそのまま使い、下辺は半月状に造り出す。下辺幅が9.0cm前後、上辺幅は17.5cmを測る。半月状を呈する下辺は、凹面側から丁寧に打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za 〈x v〉群（図版123－面戸20）

行基 I 1 Za 〈x v〉群と表記する丸瓦を素材とする。両袖部を造り出す。下辺幅が4.5～5.0cmを測る。下辺には、素材である丸瓦の側縁をそのまま使う。面戸瓦の両側面とも凹面側から打ち欠き、成形する。

割面戸瓦－行基 I 1 Za 〈x ix〉群（図版123－面戸21）

行基 I 1 Za 〈x ix〉群と表記する丸瓦を素材とする。両袖部を造り出す。下辺幅が7.1cmを測る。下辺には、素材である丸瓦の側縁をそのまま使う。面戸瓦の両側面とも凹面側から打ち欠き、成形する。

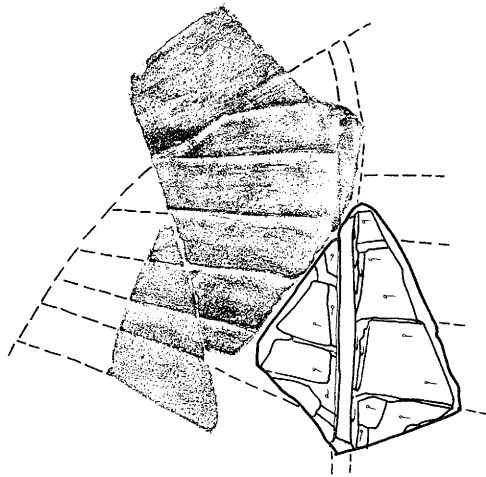
10 鴟尾

薄手鴟尾群（第63図 図版124, 125 写真150, 151－鴟尾1～36）

多くが小さい破片資料で、全部で38点確認している。破片には縦帯部片、胴部片、鱗部片、腹部片、脊稜部片などが含まれる。極端な破片資料で論じることを無意味行為とする立場に立つので、破片の全体における位置がほぼ確実に分かるものだけを記述する。なお、各部名称については『日本古代の鴟尾』（猪熊・大脇ほか1980）に従う。

縦帯部を取り込んでいる破片は6点確認している（鴟尾1～鴟尾6）。縦帯の幅はすべて0.8cm前後と細い。このような縦帯部をもつ破片の1つは、脊稜部と胴部の小部分をも取り込んでいる。鴟尾1と表記するが、岩戸昌子氏がそのI型式の例として報告している破片と「ひつつく」ので（岩戸2001:104頁）、合わせて鱗部の様子まで把握できる（第63図）。

鴟尾1は右側面の破片で、^(註25)縦帯部と脊稜部の交わり具合から、正段が重なっていくうちでも頂部



鴟尾 1 + 大阪府教育委員会調査出土資料

0 10cm

第63図 鴟尾

に近いところにあたるのが分かる。脊稜部は側面から見て5.0cmほどの幅を見せて残るが、断面形で半円形に突出しないことから、幅が広く、左側面に向かうには、緩やかなカーブを描くと思わせる。ただし、胴部には2.7~3.5cm幅の正段が削り出される。鴟尾 1 と「ひつつく」破片（岩戸 2001：123頁、第100図の758）を合わせ見ると、鱗部にはほぼ4.0cm幅の正段が、胴部の正段とはずらせて削り出されるのが分かる。

脊稜部を取り込んだ破片は鴟尾 1 以外に、鴟尾 7 と表記する破片にも認められる。鴟尾 7 は胎土、焼成度、色調なども鴟尾 1 と類似する右側面の破片で、脊稜部と胴部の小部分を取り込んでいる。その脊稜部は、幅が広く平面的で、断面形的には半円形に突出しない、鴟尾 1 のそれに類似する形態を思わせる。^(註26) 胴部の正段の造

り出された傾きが鴟尾 1 のそれとは異なり、鱗部の方により高い角度をとって削り出されている。

鴟尾 2 は鴟尾 1 と同じ個体の右側面の破片と推測できる。縦帯部と鱗部の小部分を取り込んでいる。鴟尾 3 ~ 5 も右側面の破片で、縦帯部と鱗部の小部分を取り込む。胎土、色調などからみて、鴟尾 3 と鴟尾 4 は鴟尾 1 とは別個体と推測できる。それに対して、鴟尾 6 は胴部と縦帯部を取り込んだ右側面の小破片で、胎土、焼成度、色調などは鴟尾 1 と類似する。鴟尾 8 は鴟尾 7 と同じ個体の胴部の小部分を取り込んだ破片と推測できる。

鴟尾 1 から鴟尾 28 までの破片は、胴部あるいは鱗部を取り込んでいるが、のちに述べる鱗部の先端を取り込んでいる破片（鴟尾 9, 鴟尾 10, 鴟尾 28）を除いて、それらには、裏面にも正段が削り出されるものはない。

鱗部の先端を取り込んでいる破片は、3点確認している（鴟尾 9, 鴟尾 10, 鴟尾 28）。鴟尾 10 は左側面の破片であると推測できるが、正段の幅が4.0cm以上であるとしか分からない。鴟尾 9 と鴟尾 28 は右側面の破片であると推測できるが、鴟尾 9 は正段の幅が5.0cm以上、鴟尾 28 は正段の幅が5.5cm以上であるとしか分からない。鴟尾 9 と鴟尾 10 の正段は1枚ごとに切り込みを入れて造り出すが、鴟尾 28 は切り込みが入らない。3点とも裏面にも正段が認められるが、表裏の正段の位置はずらして削り出されている。なお、鴟尾 9 と鴟尾 10 の2つの破片は、先端部の造り出し方が類似することから、同一個体に由来する可能性も否定できないが、鴟尾 28 については先端部の造り出し方が異なるので別個体であることは確実である。

腹部と鱗部を合わせ取り込んでいる破片は、3点確認している（鴟尾 11, 鴟尾 12, 鴟尾 29）。鴟尾 29 は、腹部に左側面の鱗部がつく破片である。鱗部には6.0cm前後の幅の正段が削り出される。腹部のつく部分より外側の鱗部では、裏面にも正段が削り出される。腹部には直径8.0cmの円孔が削り開けられている。円孔の中心から左側面の鱗部までの距離は18cmほどであるから、円孔が腹部の中心にあるとすると、この位置での腹部の幅、すなわち鱗部がつく部分での腹部の幅は約36cmと

いうことになる。鴟尾11は、腹部に右側面の鱗部がつく破片である。正段の幅と削り出し方からみると、鴟尾29と類似し、同一個体の左右の側面の破片である可能性が高い。鴟尾12は、腹部に左側面の鱗部がつく破片である。正段の幅は8.0cm以上はあるとしか分からない。腹部のつく部分より外側の鱗部では、裏面にも正段が削り出される。鴟尾11とは、正段の幅の違いから別個体とすべきか、基底部に近い部分で幅が広く削り出されている同一個体と考えるべきか、判断がつかない。3点ともに、鱗部の厚さは2.0cm前後と同じである。

腹部を取り込んでいる破片は、7点確認している。鴟尾30は、腹部中央の円孔から鱗部がつくところ近くまでを残す破片である。円孔の直径は約8.0cmで、鱗部のつくところまでの間隔を合わせると、鴟尾29とはほぼ同じ大きさになる。

厚手鴟尾群（図版125 写真151－鴟尾37～41）

すべてが破片資料で、5点確認している。すべて須恵質で色調は薄手鴟尾の一群と変わらない。しかし胎土に粒子の粗い長石が目立つ。鱗部片、胴部片あるいは鱗部片、基底部片、胴部片あるいは腹部片の4種に認定できる部分破片がある。

鱗部を取り込んでいる破片（鱗部片）は、2点確認している（鴟尾39、鴟尾40）。鴟尾40は鱗部先端を取り込む破片である。表裏の両面に正段を削り出す。残存資料に認めるカーブから見て、頂部に近いところの鱗部先端の破片であると思われる。薄手鴟尾群とするものに認められるような正段を（鴟尾9、鴟尾10）、1枚ごとに切り込みを入れて造り出さず、先端の面が表面側に傾くように削り出すだけである。厚さは2.5cm前後を測る。鴟尾39も左側面の鱗部先端を取り込む破片である。表面にだけ正段を削り出す。正段の幅は7.5cm以上である。鴟尾40と同じく、先端では正段を1枚ごとに切り込みを入れて造り出さない。厚さは2.5cm前後を測る。裏面に正段を削り出さないので、鴟尾40とは別個体である。

鴟尾38は右側面の破片で、胴部あるいは鱗部を取り込んでいると見える（胴部片あるいは鱗部片）。表面にだけ正段を削り出す。正段の幅は5.0cm、厚さは3.0cmを測る。

鴟尾37は左側面の破片で、胴部と縦帯部を残す基底部片と推測できる。基底部には布目圧痕が認められる。布目圧痕は、縦糸と横糸の方向を判じることができないので確実には言えないが、「布タ」の圧痕の可能性が高い。縦帯は幅1.3cmしか残っていない。厚さは3.0cm前後である。岩戸氏が報告する破片のひとつ（岩戸2001：図資料番号768）にも、基底部に布目圧痕が認められる。それは、胴部、縦帯部、そして鱗部の端を取り込む左側面のものであるが、鴟尾37と比較すると、ほぼ同じ部分を取り込む左側面の破片であるとはいえ、縦帯部の傾きが異なるうえに、厚さが5.0cm前後とより厚いので、別個体である可能性が高い。

鴟尾41は胴部を取り込んだ破片か、腹部を取り込んだ破片か判断がつかない（胴部片あるいは腹部片）。ただし、全体に平坦に造られていることから考えると、腹部の破片であるとするれば巨大な鴟尾になりすぎるので、胴部の破片である可能性が高い。片側面に穴が開けられているのが分かるが、穴の形状は円形でないことは確かであるが、形状は不明である。穴のある側と反対寄りの片表面には、正段に似た削り出しの段が、広くても5.0cm幅の範囲だけに、3段分認められる。もしこの痕跡が正段の部分となるならば、この破片は頭部に近い胴部片であり、その穴は丸瓦を差し込むために造り出されたものと推測できる。腹部片となるならば、その穴は胴部の正段の位置を印すた

めのものであったと思われる。厚さは3.5cm前後を測る。

11 鬼瓦 (図版125-鬼瓦1)

左側の挟り部の破片である。厚さは5.0cmを測るが、全体形は把握できない。ヘラで彫り込んだ痕跡を残す。焼成度は須恵質を呈し、胎土に粒子の粗い長石を多量に含む。厚手鴉尾群とするものの胎土と類似する。

12 隅木蓋瓦 (図版125 写真152-隅木蓋瓦1)

上面後端部の破片である。右側面の一部をわずかに取り込んでいる。厚さは1.9cmを測る。後端には茅負を嵌め込む部分がヘラケズリで造り出されている。右側面から刳形までの距離は約10.8cmを測る。残存している刳形を含めて幅を復元すると26cm以上はあったと推測できる。新堂廃寺の隅木蓋瓦として有名な、鬼面文のある「第1 A形式隅木端覆瓦」と分類されたものが約20.2cmの幅であることからすると(藤沢1961a; 19~22頁)、それより大型品であることが分かる。

素材の胎土には、赤色花崗岩の細粒のほか、泥岩起源と思われる黒色砂粒、チャート起源の赤色砂粒、石英、長石が鉱物粒として含まれる。焼成度および色調は、軟質で、明橙色を呈する。

13 埴

方形埴1 Ba群 (図版125 写真152-埴1, 埴2)

破片資料を3点確認している。長方形の大型の埴である。同じ群と表記できる資料が、1995年度の大阪府教育委員会による寺域外北側の調査で、掘立柱柱穴から礎盤として使用されていた状態で出土し(岩戸2001: 図資料番号791)、それによって長さが約35.5cm、幅は約26.5cm、厚さは約5.5cmを測ることが分かる。表面と裏面ともに、正格子叩き [Ba] で叩き締める。側面にはヘラケズリ調整を施す。

なお、類例が一須賀古墳群採集資料のなかに認められる(小林・栗田・中辻1996)。

方形埴1 Ct群 (図版126 写真152-埴3, 埴4)

破片資料を3点確認している。方形埴1 Ba群とほぼ同じ大きさと推測される。表面と裏面ともに、斜格子叩き [Ct] で叩き締める。この斜格子目 [Ct] は、埴にだけ残る叩き目として認められる。叩き板は、長さが12.0cm以上で幅は10.0cmを測る長方形の板に、0.3cm幅の刻線を刻み込んで、一辺2.0cmほどの菱形と、それを半裁した三角形を作り出すものである。

なお、類例が一須賀古墳群採集資料と叡福寺西方採集資料のなかに認められる(小林・栗田・中辻1996)。

方形埴1 Z群 (図版126-埴5)

破片資料を6点確認している。全体の形状が正方形か、長方形か不明である。厚さは5.0cmを測る。表面、裏面および側面にヘラケズリ調整を施す。

方形埴 2 Z群 (図版126-埴6)

破片資料を11点確認している。もっとも残りのよいものは、 $19.5\text{cm} \times 15.0 + \alpha \text{cm} \times 3.5\text{cm}$ を測る。全体の形状が正方形か、長方形かは不明である。表面と裏面にヘラケズリ調整とナデ調整を併用して施す。側面にはヘラケズリ調整を施す。

方形埴 3 Z群 (図版126-埴7)

破片資料を6点確認している。もっとも残りのよいものは、 $24.0\text{cm} \times 15.0 + \alpha \text{cm} \times 3.0\text{cm}$ を測る。全体の形状が正方形か、長方形かは不明である。表面と裏面にナデ調整を施し、側面にはヘラケズリ調整を施すものとナデ調整を施すものがある。

格座間埴群 (図版126 写真152-埴8)

破片資料を1点確認しているだけである。 $17.5\text{cm} \times 18.0 + \alpha \text{cm} \times 4.5\text{cm}$ を測るが、中央に刳り込みが認められて、全体の形状は分からない。表面と裏面にナデ調整を、側面にはヘラケズリ調整を施す。刳り込み部にもヘラケズリ調整を施す。

第2節 新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類以外の資料

第1項 新堂廃寺跡に出土した資料

新堂廃寺跡からは瓦埴類資料に比較すると量的には少ないものの、土器類、土製品、玉類、金属器類、石器類なども出土した。それらのなかには、伽藍の建造時期にかかわる資料や、新堂廃寺が廃絶されたのちの様子を示唆する資料も含まれる。それらを中心に記述する。

なお、寺域外西側の調査で出土した資料もここで報告する。

1 土器類 (図版127, 128 写真165, 166)

須恵器、土師器、黒色土器、三彩、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、製塩土器などと、ほかに陶磁器も認める。東方建物周辺で出土した資料については、すでに報告しているので(粟田 1999・2000)、ここでは未報告の中門南側の整地土出土資料と、塔および西方建物の周辺で出土した資料、そして寺域外西側の溝から出土した資料を取り上げる。なお、三彩については、中世の遺構から出土したものであるが、1例だけの出土であることと、特殊な品であるので、ここで報告しておく。

【寺域内出土土器】

i) 中門南側の整地土出土土器 (図版127 写真165: 1~21)

天平期の整地土から出土した土器で、7世紀前半~8世紀前半に比定する須恵器と土師器がある。

須恵器には、坏蓋(1, 2)、坏身(3~7)、鉢(8)、平瓶(9, 10)、甕(11)がある。土師器には、坏(12)、高坏(13)、皿(14)、短頸壺(15)、羽釜(16)、甕(17~19)、把手片(20, 21)がある。

ii) 土壙1出土土器 (図版127: 22)

中世に比定する土壌から、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器に混在して三彩(22)が出土した。それぞれが細片であるため、器形は分からない。三彩には花文が描かれているのを認める。

iii) 塔出土土器 (図版128 写真165:23~25)

塔の心柱抜き取り掘方の最上層(黄灰色弱粘質土)から14世紀後半に比定する瓦質の皿(23~25)が出土した。この種の皿は、堺環濠都市遺跡周辺か、あるいは新堂廃寺跡の所在する南河内でも南部域に限って出土するという。鎮壇具のような特殊な使われ方に限られることが指摘されているものにあたる(森島1995)。

iv) 西方建物周辺出土土器 (図版128 写真165:26~31)

すべては、新堂廃寺が廃絶されたあとの堆積層から出土した土器で、7世紀前半~8世紀後半に比定する須恵器、9世紀末から11世紀に比定する土師器、14世紀に比定する瓦器の小皿を認める。

須恵器には、坏蓋(26)、坏身(27, 28)、平瓶(29)がある。土師器には碗(31)がある。瓦器には小皿(30)がある。

【寺域外西側の調査で出土した土器】

溝1と区画溝1から出土した土器を報告する。

i) 溝1出土土器 (図版128 写真165, 166:32~44)

溝1から出土した土器には、7世紀前半~8世紀後半に比定する須恵器と土師器を認める。須恵器には、坏蓋(32, 33)、坏身(34~36)、皿(37, 38)、平瓶(39)が、土師器には、坏(40)、高坏(41)、甕(42)、鍋(43)、把手片(44)がある。

ii) 区画溝1出土土器 (図版128 写真166:45~50)

8世紀代に比定するものもあるが、大半は9世紀末~11世紀に比定する土師器と黒色土器である。土師器には、皿(45~47)、小皿(48)、三足土器(50)を認める。また、それらに混じって少量ではあるが、14世紀に比定する土師器の碗(49)も出土している。

2 土製品 (図版129 写真167:51~57, 59~61)

土製品には、埴仏(51~53)、螺髪(54~57)、鞆の羽口(59~61)を認める。

埴仏のうち、(51)は西方建物周辺で、(52, 53)は東方建物周辺で出土した。(51, 52)は同じ範型による成形で、一個体が2体以上の仏で構成されていることから、長さ、幅とも6.0cm以上あったと推測できる。(53)も範型による成形であるが、(51, 52)に比べると、薄く、小さい埴仏である。仏の頭上には天蓋が表現されている。

螺髪(54)は西方建物周辺で、(55~57)は東方建物周辺で出土した。範型による成形で、底径2.4cm、高さ3.3cmの円錐形を呈する。底部に穴はなく、ほぼ平坦である。

図示した鞆の羽口はすべて中門前面の天平期の整地土からの出土である。ほかに寺域外西側の溝を検出した地区からも出土している。羽口の全長は不明であるが、現存最大長12.5cm、最大外径9.0

cm、内径3.5cmを測る。羽口の径はすべて同じ大きさであることから、限定された鋳造品の製作に使用されたものと推測できる。

3 玉類（図版129：58）

ガラス製の小玉が1点、中門前面の天平期の整地土から出土した。直径0.8cm、厚さ0.4cm、孔径0.4cmを測る。色調は深緑色を呈する。

4 金属器類

青銅製品と鉄製品が出土した。青銅製品を3点認めるが、器形は不明である。鉄製品は断面四角形の釘である。ほかに、鉄滓の出土を見る。

5 石器類（図版129：62，63）

金属器用の手持ち砥石（62，63）が2点出土した。ほかに、粘板岩片、サヌカイト、花崗岩、砂岩、凝灰岩片を認める。サヌカイト製品には石匙、石鏃などが含まれる。

第2項 オガンジ池瓦窯跡に出土した資料

オガンジ池瓦窯跡から出土した資料には、灰原に出土した資料と、窯の周辺から出土した資料がある。前者は瓦窯で焼成されたもので、例えば瓦硯、瓦棺を認めるが、後者には7世紀代に比定する土師器、須恵器および15世紀末～16世紀に比定する土師質土器などの土器類のほかに、陶磁器、埴輪、砥石を見る。

1 瓦窯焼成品

①瓦硯（図版130 写真166：66）

口径18.5cm、底径19.5cm、高さ30cmを測る円硯である。幅1.4cmの海部が外縁に沿ってめぐり、その内側に直径15.5cmの陸部があるが、その高さは不明である。

②瓦棺（図版131 写真167）

棺蓋（1～5）と棺身（6）の両方がある。出土品の大半は、棺蓋の破片資料であるが、厚みの異なる薄い破片を1点だけ認める。これについてはその形から棺身の破片と認める^(註28)。

棺蓋は、もっとも大きく残った破片資料（4）を見ると、棺身の受け部に入る合わせ部が約13.0cm幅で平坦に作られ、製作のときについた布目圧痕が明瞭に残る。布は「布チ」を使う。天井部外面は段状に作られる。その内面はヘラケズリで削り込みを入れて成形される。天井部の厚さは9.5cmを測る。側面は高さが8.5cmで、その面の中位に、0.8cmの深さの溝を、3.5cm幅で作り出す。側面の厚さも9.5cmを測る。なお、図示した資料のうち（1，2）が棺蓋の短側辺部、（3）が短側辺部でも天井部に近い部分、（4）が長側辺部、（5）が天井頂部に近い部分の破片である。

棺身は、厚さが $3.1 + \alpha$ cmの板状の破片として残る。内面にはヘラケズリ調整が施される。棺蓋を受ける面の内面側は、1.3cmの幅の面で面取りがなされている。外面は剥離しているため、調整は不明である。

2 瓦窯周辺出土品

①土器（図版130：64, 65, 67）

7世紀代の土師器（64, 65）と15世紀末～16世紀に比定する土師質土器（67）がある。

②埴輪（図版130：69）

オガンジ池瓦窯周辺での表採品である。円筒埴輪片で、厚さ15cm、タガ幅は1.5cm、タガの高さは0.7cmを測る。タガの断面形は、低い四角形を呈する。残存部での直径は約32.0cmであることから、中型の埴輪であったと推測できる。刷毛目などの調整痕は摩滅のために不明である。お亀石古墳のある丘陵から転落した資料と推測されるが、そうとすれば付近に中期後半ころの古墳が存在したことが示唆される。

③砥石（図版130：68）

金属器用の砥石である。灰原から出土した。

第3節 お亀石古墳に出土した資料

今回の調査では、遺構から主に14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられる土器類が出土している。古墳自体にかかわると考えられる遺物で、器種が特定できるものはすべて流土中からの出土である。ここでは、第1項として今回の調査で出土した須恵器類を掲載し、第2項として中世・近世の遺構から出土した遺物を掲載する。

第1項 須恵器類（図版132）

1は第9調査区第3層上面出土の短頸壺。直立する口縁を有し、体部はやや肩の張る形態である。外面底部は回転ヘラ削りが施されている。口径5.0cm、器高6.4cm。灰色を呈する。

2は第9調査区第3層出土の蓋杯の杯身。立ち上がりは矮小化している。小片であるため、口径の完全な復元は不可能であるが、10cmから14cm内におさまる。灰白色を呈する。

3は第1調査区溝状遺構2の底面出土。小片であるため器種は不明。内面には同心円の当て具痕、外面にはわずかに叩き痕が残る。灰白色を呈する。

4は第7調査区の盛土流土内から出土した甕の口縁部片。外面口縁端部下には櫛状工具により縦位の列点文が連続して施されている。その下方にはヘラ状工具による縦方向の沈線が連続して施されており、その上下端に横方向の幅太の沈線が廻っている。内面はナデ調整がおこなわれている。灰白色を呈する。

5は第7調査区の盛土流土内から出土した甕の肩部片。4とは同一個体と考えられる。頸部に至る部分で折損している。内面には同心円の当て具痕が残り、頸部に至る付近は横方向のナデ調整がおこなわれている。外面には平行叩きがおこなわれているが、一部横方向になで消している。灰白色を呈する。

これらの土器は、3以外はいずれも遺構に伴うものではなく、原位置での出土ではないが、1・2は羨道部東側からの出土であり、4・5は墳丘裾部盛土直上の流土からの出土である。お亀石古

墳に伴う土器である可能性が高いと考える。

時期的には、いずれも7世紀の第2四半世紀内におさまるものである。

第2項 中世・近世遺構出土遺物

1 土器・土製品（図版133）

1～4は瓦質の羽釜である。いずれも鋤柄氏分類（鋤柄1989）のC群Ⅲ・Ⅳ類に属するものである。

1は第2調査区中世遺構面出土。緩やかに内湾する口縁部の外面に凹線が3条廻る。口縁端部は水平に仕上げられているが、やや丸みを残す。体部外面は鏝部下に横方向の削りが僅かに認められる。内面は鏝部上位に横方向の刷毛目が僅かに残る。口径22.4cm。

2は第8調査区中世遺構面出土。やや直立気味に内湾する口縁部の外面に凹線が3条廻る。口縁端部は水平に仕上げられる。体部は丸みが失われ、寸胴化している。体部外面は上半は横方向の削りがおこなわれているが、下半部は縦方向の削りも観察される。内面はナデ調整がおこなわれている。口径25.7cm。

3は第7調査区中世遺構面出土。緩やかに内湾する口縁部の外面に凹線が3条廻る。口縁端部はやや丸みを帯びるがほぼ水平に仕上げられている。ほぼ水平に仕上げられた鏝部の下端には縦方向の削りがおこなわれている。内面は横方向の細かな刷毛調整がおこなわれており、口縁下端のみナデ調整がおこなわれる。口径25.4cm。

4は第7調査区中世遺構面出土。口縁部は緩やかに内湾するが、端部で直立している。口縁端部はほぼ水平に仕上げられている。口縁外面は凹線が3条廻る。体部外面は横方向の削りがおこなわれ、内面は体部に横方向の刷毛調整がおこなわれ、口縁部はそれを横方向になで消している。口径24.0cm。

5は第1調査区溝状遺構1出土の瓦質の片口播鉢。口縁部をやや上下に発達させている。外面は横方向を主体とした削りがおこなわれている。内面は摩耗が激しいが、5～8本単位の卸目が観察できる。口径32.2cm、器高12.8cm。

6は第8調査区中世遺構面出土の土師質の播鉢。口縁部下端をやや発達させる形態である。外面はナデ調整、内面は横方向の刷毛調整がおこなわれている。口径30.5cm。

7は第1調査区溝状遺構1出土の土師質の皿。底部は軽い上げ底状のいわゆる「ヘソ皿」である。底部外面は指押さえのちナデ調整、口縁部内外面は横方向のナデ調整がおこなわれる。乳白色を呈する。口径10.8cm、器高2.2cm。

8は第7調査区中世遺構面出土の土師質の皿。底部は丸みを帯びており、口縁部内外面を横方向のナデ調整をすることにより外面に稜を有する。底部外面は指押さえのちナデ調整をおこなう。器形、製作技法とも9の瓦器皿と類似する。赤褐色を呈する。口径11.7cm、器高2.3cm。

9は第9調査区中世遺構面出土の瓦器皿。製作技法的には8と同様であり、暗文も有さない。口径12.2cm、器高2.7cm。

10・11は第9調査区中世遺構面出土の土師質の板状土製品（写真49上）。両者とも両側縁に面を形成している。全面摩耗しており調整痕は確認できない。10はやや湾曲しており、凹面端部付近には突帯状のものが剥離したかのような痕跡が残っている。この2点のほかにも同一面上に多数の破

片が散乱する状態で出土しており、また各調査区の流土内からも同様の土製品の出土が見られる。現状では不明土製品として報告するしかないが、奈良県香芝市平野2号墳では、横穴式石室内から多数の土師質の埴状遺物の出土が報告されており、報告者はそれらの内、平板状のものを棺敷等の棺台の用途ではないかと考察をおこなっている（下大迫 2001）。お亀石古墳出土のものも、埋葬施設の一部として使用された可能性を残しておきたい。

12は第6調査区中世遺構面出土、13は第2調査区中世遺構面出土の土師器高杯片。13は中空の脚部片であり、内面に僅かにしぼりが観察される。いずれも中世遺構面から出土しているものの、形態から古墳に関連する遺物である可能性がある。

2 平瓦（図版134）

1は第1調査区溝状遺構1の第37層出土。凸面に縦方向の縄目叩きが残る。

2～4は第7調査区中世遺構面出土。2は広端部側の破片であり、凸面に離れ砂状の砂粒が残るが、胎土中にも同様の砂粒を多く含むために判別不明である。3は狭端部側の破片である。凸面中央部側には縦方向の縄目叩きが残る。凹面には明瞭な糸切り痕と縦方向の縄目叩きが残っている。凸面に離れ砂が残る。4は広端部側の破片であり、凸面に縦方向の縄目叩きと離れ砂が残る。凹面には柁側板圧痕状の凹凸が残るが、縦方向のナデ調整によって生じたものと考えられる。

5は第7調査区土壌出土。狭端部から広端部まで残存する半損品であり、全長32.6cmを測る。凹凸両面に離れ砂状の砂粒が残るが、胎土中にも同様の砂粒を多く含むため判別不明である。4と同様に凹面には柁側板圧痕状の凹凸が残るが、縦方向のナデ調整によって生じたものと考えられる。

3 鉄器類（図版132）

1～5は第1調査区の土壌出土。釘と鏝の破片と考えられる。一部木質が残る部分がある。6は第5調査区石組遺構内出土の釘。釘身全体に木質が残っている。7・8は第7調査区の土壌出土。釘の破片と考えられるが、2点とも先端が屈曲している。

4 銅銭（図版132）

9は第1調査区土壌出土の寛永通宝。新寛永銭に属する。「永」字部分は湯の回りが悪く、筋状に銅質が欠落している部分がある。直径2.45cm。

以上の遺物のほかにも、各調査区の流土内からは飛鳥期から中世にかけての瓦類や、近世の土師器などが出土している。飛鳥期の瓦に関してはお亀石古墳の石槨周囲に護壁として用いられている平瓦が外部に流出したものと理解できるが、白鳳期以降に属すると見られる瓦類も多数出土している。また、中世の遺構内からも平瓦の出土が見られるが、瓦葺きの建物が存在した痕跡は認められないことから、その用途に関しては不明確である。丘陵上に位置する古墳周囲からなぜこのように瓦類が出土するのかは、今後の調査・研究の課題となるところである。

第三章の【註】

- (註1) 従来からおこなわれてきた瓦埴類資料の認識ではなく、このような観点で整理を進めた背景には、必ずしも出土状況の良好とは言えない膨大な量の瓦埴類資料を前にして、遺物内容は異なるものの、同じく膨大な量の石器遺物を対象とした研究方法としての属性分析法に成功例をみてきたことがある。この方法については山中一郎氏の研究(山中1994)に負っている。
- (註2) 観察に際しては凹面、凸面とも、広端面を下にして見ることにして、左・右を表現する。
- (註3) 凸面に認められる叩き板の叩き目については、軒丸瓦の丸瓦部だけでなく丸瓦、軒平瓦の平瓦部、平瓦、鬘斗瓦、隅平瓦、螻羽瓦、面戸瓦にも共通する技術形態属性として設定することが可能である。造瓦工程においては、粘土板あるいは粘土紐を叩き締める作業が必須であることを思えば当然である。この叩き作業にこそ、種類の異なる瓦を造り分けたひとつの窯における作業の一貫性を認めさせる鍵があると考えられる。そこでこの共通する技術形態属性の分類には、叩き目の種類がもっとも多く確認されている平瓦と一部の丸瓦に認められるものを基準として用いる。したがって、いくらかの機能形態の瓦資料には、確認が未だなされていない叩き目が観察属性リストには含まれている。
- 叩き板の反映属性である叩き目の細分に際しては、各群ごとにa、b、cとアルファベットの小文字記号を付加して区別する。ただし、アラビア数字やローマ数字と紛らわしいので「i、l、o、v」は用いなかった。また、縄目叩きについては種類が多いことから、桶巻き作りの平瓦および丸瓦の造瓦に使われた叩き板を「J1」、一枚作りの平瓦の造瓦に使われた叩き板を「J2」と区別する。
- なお、叩き目から叩き板が復元できるものについての記述で「左右」、あるいは「縦横」を使う場合は、叩き板の上での左右、あるいは縦横を言う。誤解を避けるために叩き板の上での左右表記、あるいは縦横表記は太字で示してある。瓦に残されたものを言うときはその限りではない。
- (註4) 一枚作りの平瓦の造瓦に使用され、縄目叩きを残した叩き板の幅については、縄の巻き始めが板の端から少し入ったところにあると想定して、巻かれた縄の両端のあいだの長さに1cmを足して幅の数値とする。
- (註5) Zと表記するものは、叩き目が消されたか、あるいは摩滅によって叩き目の観察が困難になっているものである。しかし、かすかにでも叩き目の痕跡の確認できるものは、観察につとめ、[]内に叩き目の種類を示した。なお、叩き目が一部すり消されていても、その範囲が少なく、叩き目のほとんどが明瞭に残されているものはその限りではない。
- (註6) 布袋の綴じ合わせにかかわる用語は、大脇潔および花谷浩の両氏に従い(大脇1991・花谷2002)、以下の記号を使用する。ただし、混同を避けるために、「縫い」および「布の重ね」を表現するアルファベット記号はイタリック表記とする。

M: 綴じ目まつり縫い、G: 綴じ目ぐし縫い

S: 布重ねS型(布の左端を上重ねる)、Z: 布重ねZ型(布の右端を上重ねる)、X: 重ねが認定不能

m: 縫い目まつり縫い、g: 縫い目ぐし縫い

l: まつり縫いの針目左上がり、r: まつり縫いの針目右上がり、x: まつり縫いの方向が認定不能

布の重ね目については、筒状に縫い綴じて折り山を作ることで3重以上の重ね目がでる「重ね折り山布」、完全な筒状に縫い綴じない「非閉袋布」、筒状に綴じる際に折り山を作らないで重ねる「重ね布」に分類できる。なお、ふつうは「重ね折り山布」の袋が用いられるので、「重ね折り山布」の場合はとりたてて記述しない。

布袋の綴じ痕の観察に際して「左右」を使う場合は布袋が桶や型木の上に置かれた状態での左右を言う。誤解を避けるため布袋を指示するときの左右表記は太字で示してある。

- (註7) 布袋の認定に際しては、綴じ合わせ痕を重視するが、筒状に綴じ合わせる場合だけではなく、足りない布を補う場合にも同じような縫い綴じの痕跡が残るため、それらは区別しておかなければならない。後者を足し縫い痕と呼んでおく。ここでは筒状に縫い綴じるための綴じ合わせ痕を第一に重視し、それについて

のみ綴じ合わせ痕を記号化しておく。ただし、布袋の弁別に足し縫いの違いはきわめて有効なデータであることから、以下の本文中にはそれを記述しておく。なお、一枚作りの瓦を造るのに使われた布にも、足し縫い痕を認める例があるが、筒状には綴じ合わせないのでここでは取り上げない。それについては、個々の平瓦群の解説で記述する。

(註8) ここに扱う軒丸瓦は、富田林市教育委員会の発掘調査の出土品に限られるが、本稿で設定した軒丸瓦A～L（Iを除く）群には、大阪府教育委員会の発掘調査の報告書が瓦当型式として認定した軒丸瓦I A01型式が含まれていないことを注記しておく。軒丸瓦I A01型式と設定された瓦は、わたしたちの垂木先瓦S群のものと同範であるが、釘穴が貫通していないことから、軒丸瓦として認定されたのである。1例が知られているだけという資料数の少なさをひとつの理由とするほか、瓦自体の観察からも積極的に軒丸瓦であると認定するに足る根拠がないので、軒丸瓦としての「群」設定に躊躇する。なお、既往の調査報告の記述との互換性をはかるため、以下に、瓦当部だけの関係ではあるが、わたしたちの属性組成的表記の一部である瓦当部のみを設定群と藤澤氏の設定形式（藤沢 1961a）および井西氏の設定型式（井西ほか 2001）との対応を以下に記しておく。

本稿での設定「群」	藤澤氏の設定形式	井西氏の設定型式
軒丸瓦A群；	第一期類無子葉瓣文系類第3形式端丸瓦	I A04型式
軒丸瓦B群；	第一期類無子葉瓣文系類第2A形式端丸瓦	I A05型式
軒丸瓦C群；	第一期類無子葉瓣文系類第2C形式端丸瓦	I A13型式
軒丸瓦D群；	第一期類無子葉瓣文系類第1A形式端丸瓦	I A03型式
軒丸瓦E群；	第一期類無子葉瓣文系類第1B形式端丸瓦	I A02型式
軒丸瓦F群；	第二期類単子葉瓣文系類第1A形式端丸瓦	II A06型式
軒丸瓦G群；	第二期類単子葉瓣文系類第1B形式端丸瓦	おそらくII A07型式
軒丸瓦H群；	第二期類単子葉瓣文系類第1C形式端丸瓦	該当なし
軒丸瓦J群；	第二期類複子葉瓣文系類第1A形式端丸瓦	II A09型式
軒丸瓦K群；	第二期類複子葉瓣文系類第1B形式端丸瓦	II A10型式
軒丸瓦L群；	第四期類複子葉瓣文系類第1A形式端丸瓦	IV A12型式

(註9) ここに扱う軒平瓦は、富田林市教育委員会の発掘調査の出土品に限っているので、瓦範から確認できるのは軒平瓦Pとするものだけである。すなわち平城京6664型式系の文様を認める。このほかに、大阪府教育委員会の発掘調査で、平城京6667型式系の文様をもつ資料も、少量ながら出土していると言う（井西 1996；井西ほか 2001）。また、藤澤氏によって唐草文系の瓦当として、「興福寺式」の軒平瓦が報告されているが（藤沢 1961a）、1960年度の調査で1点出土しただけで、わたしたちの調査も含めて、そののちの調査では出土していない。ともに本報告では取り扱わない。

なお、ここに扱う軒平瓦の中で既往の調査報告と互換性がはかれるのは、瓦当部だけの関係ではあるが、軒平瓦P群がある。それについて藤澤氏は、第四期類均斉唐草文系類第1B形式（藤沢 1961a）、広瀬氏はIV B03型式（井西ほか 2001）と記述している。

(註10) 鷗尾の分類について、最新の型式学的研究の成果であるべき岩戸昌子氏の考えを援用しないのは、【付】に述べるように、部分資料に対する認識に異なる前提をもつからである（本書253～254頁）。

(註11) 数値が連続しないのは、資料の総数が少ないことによる。つづく埴の厚さについても同じことである。

(註12) この群の軒丸瓦の瓦当文様については、四天王寺の第I期軒丸瓦と分類されているI b1型式（網 1997）と同範の可能性が上田陸氏によって指摘されていたが（上田 1998）、実見した結果、同範でないことを確認した。

(註13) 布袋の認定は布の特徴と綴じ痕を指標にしているが、破片資料が綴じ痕部をもってきていないときには、「0」を付すしかない。「0」表記をもつ資料はすべての群の布袋資料に実在するが、「資料総覧」にのみ

書き、その他の場合は記述を進めるのに必要とするときにだけ挙げてある。

- (註14) 大阪府教育委員会刊行の『新堂廃寺』のなかに、この歯車状加工の認められる資料が、富田林市教育委員会の保管資料のなかにあると記述され、「I A 03型式」と指摘されている（井西ほか 2001：62頁）。「I A 03型式」とは、わたしたちの群表記で言えば、軒丸瓦D群と表記するものにあたるが（第Ⅲ章註8参照）、本市の保管資料の軒丸瓦D群の瓦にはそのような加工は確認できない。おそらくここで述べる軒丸瓦E群資料（井西氏の言う「I A 02型式」）との認識の混乱がある。
- (註15) 新堂廃寺跡から出土する「山田寺式」の軒丸瓦の外縁部に施された重圏文について、堀大輔氏は、瓦範に彫り込まれた形の反映ではなく、その部分が挽き型によって施文されたと主張する（堀 2000；2001）。その根拠の1つとして、外縁部の高さが1.5～2.5cmとなって、個体差が大きいことを挙げている。しかしわたしたちの資料では、外縁部の高さは1例のみにほかと異なるものを確認できるにすぎず、むしろ外縁部の高さの個体差は乏しいと言わねばならない。またわたしたちの観察の限りでは、外縁部の高さの違いは、施すときの腕の押圧の強弱を反映した状況を呈していないと言わねばならない。
- わたしたちが、「山田寺式」の軒丸瓦とした軒丸瓦F群には、瓦当縁に範端の存在を示す粘土の段のあること、また、軒丸瓦G・H群には瓦当部側面に範端の痕を示す例のあることからすると、堀氏の主張に従うことはできない。
- (註16) 出土例が1例と少ないため丸瓦部を特定しなかったが、瓦当部裏面に転写された丸瓦部広端面の歯車状加工であるh 2手法と瓦当部の胎土を併せみると、あとで述べる軒丸瓦L群に接続される玉縁I 321 Za [J1b]群と類似する丸瓦部が、この軒丸瓦K群にも接合される可能性が高いことを記しておく。
- (註17) 本報告に玉縁I 2 Za群とする丸瓦は、大阪府教育委員会の調査で報告されている飛鳥時代の有段式丸瓦に該当するが、大阪府教育委員会が1995年度に調査した寺域外北側の調査区から出土したその式の資料について、「丸瓦の側面が観察される資料が少ないが、(概要Ⅱ：第38図957)の側面を観察すると丸瓦を半截する時には凸面側から切り込みを入れ切断し、側面調整を施している。」（井西 2001ほか、99頁）と報告されている。『概要Ⅱ』とは、井西 1997の文献のことで、その53頁の拓本・実測図957の丸瓦を記述している。しかし実測図上には切り込みも、残された破面も描写されていない。ともかく富田林市教育委員会が調査した新堂廃寺跡、オガンジ池瓦窯跡から出土したこの群とする資料を詳細に観察したが、側面調整を十分に施さずに破面の一部が残っているものに限れば、凹面側から切り込みを入れて、玉縁部側から広端側に切断している例しかない。また井西氏の『概要Ⅱ』の第38図950の資料はたまたま写真が載せられているが（図版27）、それによっても、井西氏の上の説明とは逆で、凹面側から切り込みを入れているのは明瞭である。
- (註18) 丸瓦に観察できる型木器具痕については、大脇潔氏の論考のなかに類似する例が認められる（大脇 1991：11頁）。
- (註19) 大阪府教育委員会の調査の報告では、この群とする資料については、梶原義実氏が「有段2類a」と呼んでおり、側面の面取り調整が凹面側にだけなされていると、述べられるが（梶原 2001：190頁）、富田林市教育委員会の調査資料で見ると、確実に凹凸両面側に面取り調整が施されている。
- (註20) 桶に取り付けられた器具の部分の圧痕と考えられる円形の窪みと類似する窪みは、この平瓦Ⅱ0 Za [Aa]群以外にも、平瓦Ⅱ0 Za [Ak]群、平瓦Ⅱ0 Be群、平瓦Ⅱ0 Bh群、平瓦Ⅱ0 Bk群、平瓦Ⅱ0 Bq群、平瓦Ⅱ0 Bs群、平瓦Ⅱ0 Ck群、平瓦Ⅱ0 Cm群、平瓦Ⅱ0 Da群、平瓦Ⅱ0 Za < i > 群、平瓦Ⅱ0 Za < iii > 群、平瓦Ⅱ0 Za < iv > 群とする平瓦にも認める。また窪みではなく、逆に浮き出る突出が、平瓦Ⅱ0 Bj群、平瓦Ⅱ0 Bn群、平瓦Ⅱ0 Cc群、平瓦Ⅱ0 Da群、平瓦Ⅱ0 Za < i > 群とする平瓦、および割熨斗瓦Ⅱ0 Aa群（熨斗3）に造られている瓦に認められる。熨斗瓦についても、元の平瓦を想定すると、その狭端部中央に残る。なお、これらの反映痕の形状は類似するとはいえ、一部に、形の明らかに異なるものがあるので、類似する形状は、桶の構造が類似していたことを示すにすぎず、同じ桶を認定する根拠とはなり切らない。
- (註21) 大阪府教育委員会の調査の報告資料に、ほぼ完形の例があり（井西 1997：61頁、図45の997）、それによると、全長が33.0cm程度、広端幅は25.0cm程度、狭端幅は24.0cm程度であることが分かる。
- (註22) 大阪府教育委員会の調査の報告資料に、ほぼ完形の例があり（井西 1997：61頁、図45の999）、それによる

と、全長が36.0cm程度、広端幅は25.0cm程度、狭端幅は24.0cm程度であることが分かる。

- (註23) お亀石古墳の外護施設に使用された平瓦が1枚、大阪府教育委員会で保管されているが(北野 1985・栗田 2002)、その平瓦は平瓦Ⅱ27 Za群に該当する。
- (註24) 垂木先瓦についても、既往の調査報告での呼称との互換性をはかるため、以下に、藤澤氏の「形式」(藤澤 1961a)と井西氏の「型式」(井西ほか 2001)と、わたしたちの「群」との対応を記しておく。

本稿での設定「群」	藤澤氏の設定形式	井西氏の設定型式
垂木先瓦R群；	該当なし	； I C 01型式
垂木先瓦S群；	第一期類無子葉瓣文系類第1 B形式極端飾瓦	； I C 02型式
垂木先瓦T群；	第一期類無子葉瓣文系類第2 C形式極端飾瓦	； 該当なし
垂木先瓦U群；	該当なし	； 該当なし
垂木先瓦W群；	第二期類単子葉瓣文系類第1 C形式極端飾瓦	； II C 03型式
該当なし ；	該当なし	； I C 04型式

- (註25) 岩戸氏の報告では、実測図からは右側面と判断できるが、記述には「左側面の破片」とされている(岩戸 2001:104頁)。実測図の描写が正しい。
- (註26) 藤澤氏以来の研究の成果を併わせ見るとしても、脊稜部の形態だけを見る限りでは、薄手鷗尾群には、脊稜部が断面形的に少なくとも半円形に突出する形態と、幅広で断面形的には突出しない形態の2種類を指摘することができよう。
- (註27) 方形埴1 Z群と表記できる資料には、ここに記述する厚さが5.0cmのものほかに、大阪府教育委員会の調査の報告資料(岩戸 2001:資料番号792)がある。それは、厚さが6.0cmを測り、36.0cm四方の正方形を呈する、大型の埴である。
- (註28) 「棺身」との判断をするについては、北野耕平氏のご教示を受けた。

【付】

新堂廃寺出土瓦の観察にあたって、従来の研究成果にもとづく分類基準を採用しなかった理由については第Ⅲ章第1節で述べたとおりであるが、その限りでない鴟尾についての最新の型式学的研究である岩戸昌子氏の考えを採用しなかった理由をここに述べる。

新堂廃寺跡に出土した鴟尾については、藤澤一夫氏が検討を加えて、第1 A形式、第1 B形式、第1 C形式の分類を提唱された(藤澤 1961a)。その後、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館の展示カタログ『日本古代の鴟尾』に取り上げられ、A種、B種、C種と表記される(猪熊・大脇ほか 1980: 74、75頁)。しかし、このカタログの記述では、その3種が藤澤氏の分類形式にどう対応するかが明確に述べられていないので、その取り扱いに限定的にならざるをえない。

そして最近になって岩戸昌子氏が、藤澤氏が検討した資料ならびに大阪大学の調査資料に加えて、大阪府教育委員会が1992年度以後に発掘調査によって得ていた資料をも併わせて考察し、7型式10種類の分類を提唱する。そのなかで、岩戸氏は『日本古代の鴟尾』の記述をも取り上げ、藤澤氏の第1 A形式と、『日本古代の鴟尾』に言うA(種)を同義的に扱い、それが岩戸氏のI型式にあたるとする。藤澤氏の第1 A形式が『日本古代の鴟尾』のA(種)にあたるかどうかは確認のしようもないが、藤澤氏の資料の例示が1点の実測図と破片を扱った数葉の写真でしかないので、『日本古代の鴟尾』の記述が、藤澤氏の破片資料に基づく記述描写的補足として使うことができるとすると重宝である。ともかくそのA(種)は記述されている。「……。薄手の造りにもかかわらずかなりの大きさを有していたものと見られる」と(『日本古代の鴟尾』75頁)。この記述が基づいている実際の資料を認めるのが難しいのであるが、岩戸氏は、第1 A形式とA(種)と自らのI型式は同じ資料に基づくと書く。

ところで『日本古代の鴟尾』には、A(種)に対して、「脊稜部は幅9 cm、高さ5 cm程の半円形をなす突帯を上方に伸ばし」(『日本古代の鴟尾』74頁)、と脊稜部の断面形の特徴を記すが、この形態は、そのI型式に属する破片と「ひつつく」ことを岩戸氏も述べている、わたしたちの鴟尾1の形態(本報告書: 235頁、第63図)のそれとは異なる。あえて言うならば、『日本古代の鴟尾』に述べられている脊稜部の描写は、わたしたちの鴟尾1、すなわち岩戸氏のI型式ではなく、むしろ岩戸氏のⅢ型式に図示されている破片(井西ほか 2001: 123頁、第100図の760)に基づいていると言えないであろうか。このように岩戸氏の記述だけからでは先行研究の姿を追いづらい。

岩戸氏の記述と先行研究とのあいだに齟齬があるように思えるが、事の推移を追ってみなくてはならない。

基本的な研究である藤澤氏のものが出発点であることは当然である。破片数や、個々の破片の記述はなく、1個の破片の実測図が提示されたが、第1 A形式を設定する基本的な破片資料をまとめるのは数葉の写真である。『日本古代の鴟尾』に見るA(種)についての記述描写は、それらの破片資料を実見して言葉に置き換えてくれているようにも思えるのである。それによればA(種)とする破片を描写して、それらの破片がまとまって完全な姿の鴟尾を描いているように受け取れる。A(種)とする破片が由来するもとの個体の数については述べられない。

そこで岩戸氏は、その藤澤氏が扱った基礎資料をも実測図にしてくれた。そしてその第1 A形式を設定させる破片資料が複数の異なる型式に分けることができると感じたのである。藤澤氏の記述や『日本古代の鴟尾』の記述からは窺えない論点であるが、氏の分類結果を見る限りでは、その

「Ⅳ型式」の基準資料が部分資料にすぎるとはならないだろうか。Ⅰ型式についてのみ「これまで新堂廃寺ⅠAもしくは新堂廃寺Aと呼ばれているものである」と岩戸氏が書くのであるから(岩戸2001:205頁)、藤澤氏の第ⅠA形式は岩戸氏のⅠ型式だけになるということになる。藤澤氏がすべての鴟尾片を飛鳥時代の産に限定したのに対し、この点はすでに『日本古代の鴟尾』にあって、B(種)およびC(種)に新しい年代を想定されてはいるが、その時期比定の根拠がやや乏しいという印象を拭いがたいものの、岩戸氏がⅤ型式、Ⅵ型式、Ⅶ型式により新しい時期を比定することは妥当であろう。それはともかく、それならⅡ型式、Ⅲ型式、Ⅳ型式を岩戸氏はどのように設定したのであるか、と疑問が生じる。藤澤氏の基礎資料のほかに、Ⅱ型式、Ⅲ型式、Ⅳ型式にあてうる資料を新しく発掘で得たと、その記述からは受け取るよりほかないのである。

ところが岩戸氏の資料操作はそのようにはされていない。写真と実測図から判断する限り、藤澤氏の基礎資料(第ⅠA形式)の破片を、岩戸氏のⅢ型式とⅣ型式の例を示す実測図に見出すことができる。すなわち、岩戸氏は、藤澤氏の第ⅠA形式に異なる個体の破片が混在すると認識して、それを「別型式」に把握しようとしたのではなかろうか。先行研究がⅠ型(形)式と認識しているのであるから、それを変更しようとする後行の研究が、変えるに明確な理由を省略することは許されない。先行研究との整合性を説明するか、あるいはまったく異なった次元の認識の枠組みを提示するしか、選択する道はない。藤澤氏に始まり、井西氏らに至った新堂廃寺跡出土の瓦資料研究は、同じ認識体系のなかで進められてきた。そのなかで後行の研究が型式名を明確で合理的な理由を示さずに変更することはあってはならないと考える。

わたしたちはすでに述べたとおり、ここに報告する資料の検討を始めるにあたって、破片資料での観察をできるだけ排除し、破片を可能な限りのひっつける作業(「接合作業」)に時間を注ぎ、そして得られた資料に対して属性組成表記を採用して、認識できる事実を可能な限りそのまま記録しようと努めることにした。それに対して、鴟尾の分類にあたっては岩戸氏の認識方法を変更する必要を認めなかったため、岩戸分類を採用すべく作業を進めた。しかし、岩戸分類を前にして、その型式設定のための基準資料があまりにも部分資料にすぎるとを改めて確認したのである。新しく大きな個体資料が得られているⅦ型式に比すると、ほかの型式の基準資料が極端に部分資料であるにもかかわらず、同じ調子の論述が展開されているのである。ともかく岩戸氏の型式設定に対しては、一方で、藤澤形式分類の変更の理由が欠けているために、他方では、部分資料の使い方に関する基本的な認識の違いのゆえに、本稿では採らなかった。

なお、時間切れのゆえに十分に検討を果たしていないが、わたしたちは「動作連鎖」の考えをも念頭においてこの検討を進めてきた。その考え方からすると、岩戸分類は、やはり問題を生じさせるのではないかと思う。鴟尾は屋根の上に置かれて、その主たる製作の意図が成就されたのであるが、7世紀前半に所属するとしたⅠ～Ⅳ型式の岩戸4型式の鴟尾を、一体どのような組み合わせで、どのような建物の屋根に、どのようにして飾ったのかと、深く考えさせられるのである。屋根に置かれる必然性は、考古学者の設定する「型式」に優先すると確信する。

第Ⅳ章 まとめ

第1節 新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した瓦埴類資料の所属時期

以上、発掘調査によって確認した事実と、出土した瓦埴類資料に対して属性組成的認識法を用いて検討を加えた。ここで、1) 出土資料の所属時期の決定を試み、2) 時期を違えての新堂廃寺の伽藍配置の変遷について、調査・研究が語るところを綴ってみよう。

個々の機能形態の瓦埴類資料を認識するために、技術形態属性を抽出し、1枚の完形の瓦埴類資料を構成する属性の組成から「群」を認定した。しかし、これらの「群」は、所属時期を示す概念を含まない。

新堂廃寺跡出土の瓦埴類資料のなかで所属時期が、明らかに認められているものに軒丸瓦がある。瓦当文様を指標にして、ほかで出土した軒瓦との比較から、藤澤氏によって早くに認定され、そののちの新堂廃寺跡の調査でも、年代推定に唯一、有効的に作用してきた。しかしその結果として、それに続いた新堂廃寺の研究が軒瓦を研究対象の中心とする姿勢は続けられ、後出の研究によって概念用語が相当の理由もなく変更されることはあったものの、資料の認識体系は同じままであった。そして実際のところは、軒丸瓦と軒平瓦の一部を除くと、機能形態ごとの瓦埴類資料については、具体的に年代を与える作業に成功していない(井西ほか2001)。それには新堂廃寺跡出土の膨大な瓦埴類資料の大半が、層位的に保証された一括遺物として扱えないことにも起因しているが、所属時期を決める方法に軒丸瓦や軒平瓦の瓦当文様のみを取りあげて、それらに接合される丸瓦部や平瓦部に認められるデータが有効的に使われなかったのではなかろうか。

実際のところ、新堂廃寺跡は、遺構の残りがきわめて悪いうえに、軒瓦資料の出土量も少ない。さらにその出土状況も寺域内部のあらゆるところに散布するというように認められるので、おのこの建物の正確な時期推定はおろか、建物に使用された瓦の対応なども知ることがきわめて困難である。そこで、わたしたちが採った方法は、瓦埴類資料の製作技術に着目しての属性組成的認識をおこなうことである。製作技術に認められるさまざまな属性を組成させて「群」を認定し、軒瓦だけではなく、ほかの機能形態をとる瓦埴類資料をも分析対象として、それらにも共通する属性の組成をもとに、根拠をもって新しい視点からの編年を組み立ててみよう。

1. 所属時期の認定法

まず所属時期の推定に異論の少ない軒丸瓦を取り上げ、その丸瓦部に対して丸瓦の「群」表記を適用する。造瓦器具と叩き板のそれぞれの反映属性を指標とする。それに加えて、造瓦器具痕の残され具合も属性として組み合わせ、さらに下位属性とはするものの、布袋の種類をも絡めて検討する。

次に軒丸瓦の丸瓦部には使われてはいないものの、造瓦技術から同じ「群」に認定する丸瓦を取り上げる。ただし、軒丸瓦に見る布袋とは、綴じ合わせ痕あるいは縫い合わせ痕などが異なって表記されるものをも加えて抽出する。布の綴じ合わせ痕が分からないので、たとえば「布袋○行基0」と表記せざるをえなかった布袋が存在する場合、軒丸瓦の丸瓦部では確認できていなくても、軒丸

瓦の丸瓦部としても造られていた可能性は捨て切れないからである。そのうえで、これら丸瓦部と丸瓦に認められる造瓦器具、叩き板、さらには布袋のすべてが、軒丸瓦が示唆する時期に使用されたという前提に立って作業を進める。

なお、軒平瓦と平瓦の認定法についても、軒丸瓦と丸瓦と基本的には同じ認識で作業を進める。

造瓦器具については、同じ「群」に認定されるとしても、器具自体の消耗度が低いとすると、それは長期間にわたって使われ続けた可能性がある。したがって実際のところは、時期推定には慎重にならざるをえない。それに対して、叩き板と布袋については、実際の資料に認めるそれぞれの痛み具合（たとえば、叩き板については傷、布袋については破れ）に注目すると、両者は消耗度がかなり激しかったと推測でき、それらの使用期間を造瓦器具のそれよりもより限定して考えることができよう。ただし、叩き板の反映属性は、そののちの調整で消されてしまうと情報を得ることができない。それに対して下位属性として取り扱うものの、布袋の種類はほぼ常に布目圧痕から弁別でき、造瓦のときを同じくする可能性を窺わせる情報を与えるのにきわめて有効的に作用する。先に述べたとおり、綴じ合わせ痕や縫い合わせ痕を取り込んでいない破片資料は当然存在するので、同じ織りを認める布が使われている瓦同士も、近いときの産として取り扱って作業を進める。

飛鳥期の丸瓦と平瓦

飛鳥期には軒平瓦がないので、すべて軒丸瓦を基準にして時期の同定を試みる。

表2は、飛鳥期の軒丸瓦に認める丸瓦部の技術形態属性を示している。それから、造瓦器具としてI1とI2が、叩き板は、平行叩き [Ae]、[Ag]、[Am]、そして斜格子叩き [Cg]、[Ch]、[Cj]、[Cn] が使われることが分かる。また布袋には「布ロ」、「布ハ」、「布ニ」、「布チ」、「布ヌ」、「布ワ」、「布ネ」、「布ナ」が使われることを知る。

表3は、軒丸瓦の丸瓦部と同じ「群」とする丸瓦のなかでも、さらに補足的に叩き板の使用を認めるもの、あるいはまったく同じ綴じ合わせ痕をもつ布袋だけでなく、同じ綴じ合わせ痕はもたないものの同じ「布」で作られた布袋を使用して造られるものも加えて一群として示す。共通の器具および「布」の使用を理由として、先に表2で示した軒丸瓦の丸瓦部ときわめて近いときの産と認定することが許されよう。そこで、飛鳥期には先の叩き板の種類に加えて、平行叩き [Af] も使われるのが分かる。

表2 飛鳥期の軒丸瓦

瓦当部の群表記	所属時期	造瓦器具	主要叩き目	補助叩き目	布袋の種類	接合丸瓦部の群表記
軒丸瓦A	飛鳥期*	I2	—	—	布袋ハ玉縁0	玉縁I2Za
軒丸瓦A	飛鳥期*	I2	—	—	布袋ハ玉縁1	玉縁I2Za
軒丸瓦A	飛鳥期*	I2	—	—	布袋ヌ玉縁1	玉縁I2Za
軒丸瓦B、または軒丸瓦C	飛鳥期*	I1	[Cg]	—	布袋ネ行基0	行基I1Za [Cg]
軒丸瓦B、または軒丸瓦C	飛鳥期*	I1	[Ch]	—	布袋ネ行基2	行基I1Za [Ch]
軒丸瓦D	飛鳥期*	I1	[Ae]	—	布袋ニナナ口行基0	行基I1Za [Ae]
軒丸瓦D	飛鳥期*	I1	[Ae]	—	布袋ナ行基2	行基I1Za [Ae]
軒丸瓦D	飛鳥期*	I1	[Ae]	(+Cn)	布袋ナ行基1	行基I1Za [Ae] (+Cn)
軒丸瓦D	飛鳥期*	I1	[Ag]	—	布袋ナ行基0	行基I1Za [Ag]
軒丸瓦D	飛鳥期*	I1	—	—	布袋ワ行基2	行基I1Za < x v >
軒丸瓦D	飛鳥期*	I1	—	—	布袋ニナ口行基0	行基I1Za
軒丸瓦E	飛鳥期*	I1	[Am]	—	布袋チ行基1	行基I1Za [Am]
軒丸瓦E	飛鳥期*	I1	[Cj]	—	布袋ロ行基0	行基I1Za [Cj]
軒丸瓦E	飛鳥期*	I1	—	—	布袋チ行基3	行基I1Za < x ii >

飛鳥期*：瓦当で受け入れられている時期

表3 飛鳥期の軒丸瓦の丸瓦部と同群の丸瓦

瓦当部の群表記	造瓦器具	主要叩き目	補助叩き目	布袋の種類	対応瓦当部の群表記
玉縁 I 2 Za	I 2	—	—	布袋ハ玉縁 1	軒丸瓦 A
玉縁 I 2 Za	I 2	—	—	布袋ハ玉縁 2	軒丸瓦 A
玉縁 I 2 Za	I 2	—	—	布袋ハ玉縁 3	軒丸瓦 A
玉縁 I 2 Za	I 2	—	—	布袋ヌ玉縁 0	軒丸瓦 A
行基 I 1 Za [Cg]	I 1	[Cg]	—	布袋ネ行基 1	軒丸瓦 B、または軒丸瓦 C
行基 I 1 Za [Ch]	I 1	[Ch]	—	布袋ネ行基 2	軒丸瓦 B、または軒丸瓦 C
行基 I 1 Za [Ch]	I 1	[Ch]	—	布袋ネ行基 3	軒丸瓦 B、または軒丸瓦 C
行基 I 1 Za [Ae]	I 1	[Ae]	—	布袋ニ行基 1	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ae]	I 1	[Ae]	—	布袋ナ行基 1	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ae]	I 1	[Ae]	—	布袋ニ+ナ+口行基 0	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ae] (+Ae)	I 1	[Ae]	(+Ae)	布袋ナ行基 0	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ae] (+Cn)	I 1	[Ae]	(+Cn)	布袋ナ行基 0	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ag]	I 1	[Ag]	—	布袋ナ行基 1	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ag]	I 1	[Ag]	—	布袋ナ行基 2	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ag] (+Ae)	I 1	[Ag]	(+Ae)	布袋ニ行基 1	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Ag] (+Af)	I 1	[Ag]	(+Af)	布袋ナ行基 1	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za < x v >	I 1	—	—	布袋ワ行基 2	軒丸瓦 D
行基 I 1 Za [Am]	I 1	[Am]	—	布袋チ行基 1	軒丸瓦 E
行基 I 1 Za [Am]	I 1	[Am]	—	布袋チ行基 4	軒丸瓦 E
行基 I 1 Za [Am]	I 1	[Am]	—	布袋チ行基 5	軒丸瓦 E
行基 I 1 Za [Cj]	I 1	[Cj]	—	布袋口+口行基 1	軒丸瓦 E
行基 I 1 Za < x ii >	I 1	—	—	布袋チ行基 3	軒丸瓦 E

表4は、軒丸瓦の丸瓦部に認めるのと同じ種類の叩き板や「布」が、部分的であっても使われる丸瓦の一覧である。これらの抽出に際しても、基本的には表に示した群抽出と同じ認定指標でおこなう。大半の丸瓦に叩き目が残されていないので、まず「布」の種類を認定の指標として作業を進める。そしてすでに確認できていた叩き板の種類に加えて、平行叩き [Aa]、[Ab]、[Ad]、[Aj]、[Ak]、そして正格子叩き [Bc] と [Bt] も飛鳥期に使われることが分かる。

つぎに表2から表4を通じて確認できた叩き板が、たとえ部分的であっても使われていることが確認される丸瓦の一覧を示すのが表5である。この表5で、表2から表4で確認できていた「布」の種類に加えて、「布ム」も飛鳥期に使われることが分かる。

表6は、丸瓦に認める「布」および叩き板が、平瓦の造瓦に使われる例を取り出したものである。「布」と叩き板を指標にして抽出するが、丸瓦に認められた「布」の種類に加えて、「布へ」と「布ヨ」が主要布として、「布イ」が補足的に使われるのが分かる。叩き板は丸瓦に認める種類に加えて、平行叩き [Ac]、[Ah]、正格子叩き [Ba]、[Bs]、平行線-斜線の組み合わせ文叩き [Da]、交差文叩き [Ea]、および重ね菱文叩き [Fa] が使われることを知る。

結論すると飛鳥期の造瓦器具には、丸瓦の造瓦には I 1 と I 2 が、平瓦の造瓦には II 0、II 2 0、II 2 1、II 2 2、II 2 3、II 2 4、II 2 5、II 2 6、II 2 7、II 2 8、II 3 が使われる。また叩き板の種類としては、平行叩きは [Aa] から [Am] のすべてが、そして正格子叩き [Ba]、[Bc]、[Bs]、[Bt]、斜格子叩き [Cg]、[Ch]、[Cj]、[Cn]、平行線-斜線の組み合わせ文叩き [Da]、交差文叩き [Ea]、および重ね菱文叩き [Fa] を認める。そして「布口」、「布ハ」、「布ニ」、「布へ」、「布チ」、「布ヌ」、「布ワ」、「布ヨ」、「布ネ」、「布ナ」、「布ム」を主要布として、また「布イ」を補足布に使うのを知る。

表4 布からみた飛鳥期の丸瓦

飛鳥期の 主要布	補助布	対応丸瓦の群表記	造瓦 器具	主要 叩き目	補助 叩き目	造瓦器具 の推定時期	叩き目の 推定時期	対応軒丸瓦の瓦当部
ロ	口	行基 I 1 Za [Cj]	I 1	[Cj]	—	—	ASK	軒丸瓦E
ロ	—	行基 I 1 Za [Cj]	I 1	[Cj]	—	—	ASK	軒丸瓦E
ロ	—	行基 I 1 Za < ix >	I 1	—	—	—	—	—
ハ	—	玉縁丸瓦 I 2 Za	I 2	—	—	ASK	—	軒丸瓦A
ニ	—	行基 I 1 Za [Ad]	I 1	[Ad]	—	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Ad] (+Ad)	I 1	[Ad]	(+Ad)	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Ad] (+Ae)	I 1	[Ad]	(+Ae)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Ad] (+Cn)	I 1	[Ad]	(+Cn)	—	ASK	—
ニ	ナ+口	行基 I 1 Za [Ae]	I 1	[Ae]	—	—	ASK	軒丸瓦D
ニ	—	行基 I 1 Za [Ae]	I 1	[Ae]	—	—	ASK	軒丸瓦D
ニ	—	行基 I 1 Za [Ae] (+Ae)	I 1	[Ae]	(+Ae)	—	ASK	軒丸瓦D
ニ	—	行基 I 1 Za [Ae] (+Af)	I 1	[Ae]	(+Af)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Af]	I 1	[Af]	(+Ae)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Af] (+Ae)	I 1	[Af]	(+Ae)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Af] (+Af)	I 1	[Af]	(+Af)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Af] (+Cn)	I 1	[Af]	(+Cn)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Ag] (+Ad)	I 1	[Ag]	(+Ae)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Ag] (+Ae)	I 1	[Ag]	(+Ad)	—	ASK	軒丸瓦D
ニ	—	行基 I 1 Za [Aj]	I 1	[Aj]	—	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Bt]	I 1	[Bt]	—	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za [Cn]	I 1	[Cn]	—	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za < ii >	I 1	—	—	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Ad)	I 1	—	(+Ad)	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Ad) (+Ae)	I 1	—	(+Ad) (+Ae)	—	—	ASK —
ニ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Ad) (+Bt)	I 1	—	(+Ad) (+Bt)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Ad)	I 1	—	(+Ae)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Bt)	I 1	—	(+Bt)	—	—	—
ニ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Cn)	I 1	—	(+Cn)	—	ASK	—
ニ	—	行基 I 1 Za < iii >	I 1	—	—	—	—	—
チ	—	行基 I 1 Za [Aa]	I 1	[Aa]	—	—	—	—
チ	—	行基 I 1 Za [Am]	I 1	[Am]	—	—	ASK	軒丸瓦E
チ	—	行基 I 1 Za [Ba]	I 1	[Ba]	—	—	—	—
チ	—	行基 I 1 Za < i >	I 1	—	—	—	—	—
チ	—	行基 I 1 Za < v >	I 1	—	—	—	—	—
チ	—	行基 I 1 Za < x ii >	I 1	—	—	—	—	軒丸瓦E
ヌ	—	玉縁丸瓦 I 2 Za	I 2	—	—	ASK	—	軒丸瓦A
ワ	—	行基 I 1 Za [Ab]	I 1	[Ab]	—	—	—	—
ワ	—	行基 I 1 Za [Ak]	I 1	[Ak]	—	—	—	—
ワ	—	行基 I 1 Za [Bc]	I 1	[Bc]	—	—	—	—
ワ	—	行基 I 1 Za < iv >	I 1	—	—	—	—	—
ワ	—	行基 I 1 Za < x iv >	I 1	—	—	—	—	—
ワ	—	行基 I 1 Za < x v >	I 1	—	—	—	—	軒丸瓦D
ネ	—	行基 I 1 Za [Cg]	I 1	[Cg]	—	—	ASK	軒丸瓦B、または軒丸瓦C
ネ	—	行基 I 1 Za [Ch]	I 1	[Ch]	—	—	ASK	軒丸瓦B、または軒丸瓦C
ネ	—	行基 I 1 Za < vii >	I 1	—	—	—	—	—
ネ	—	行基 I 1 Za < viii >	I 1	—	—	—	—	—
ネ	—	行基 I 1 Za < x >	I 1	—	—	—	—	—
ナ	—	行基 I 1 Za [Ad]	I 1	[Ad]	—	—	—	—
ナ	—	行基 I 1 Za [Ad] (+Af)	I 1	[Ad]	(+Af)	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za [Ae]	I 1	[Ae]	—	—	ASK	軒丸瓦D
ナ	—	行基 I 1 Za [Ae] (+Ae)	I 1	[Ae]	(+Ae)	—	ASK	軒丸瓦D
ナ	—	行基 I 1 Za [Ae] (+Cn)	I 1	[Ae]	(+Cn)	—	ASK	軒丸瓦D
ナ	—	行基 I 1 Za [Af]	I 1	[Af]	—	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za [Af] (+Af)	I 1	[Af]	(+Af)	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za [Af] (+Cn)	I 1	[Af]	(+Cn)	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za [Ag]	I 1	[Ag]	—	—	ASK	軒丸瓦D
ナ	—	行基 I 1 Za [Ag] (+Af)	I 1	[Ag]	(+Af)	—	ASK	軒丸瓦D
ナ	—	行基 I 1 Za [Cn]	I 1	[Cn]	—	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za < ii >	I 1	—	—	—	—	—
ナ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Ae)	I 1	—	(+Ae)	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Af)	I 1	—	(+Af)	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Ag)	I 1	—	(+Ag)	—	ASK	—
ナ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Bt)	I 1	—	(+Bt)	—	—	—
ナ	—	行基 I 1 Za < ii > (+Cn)	I 1	—	(+Cn)	—	ASK	—

ASK：作業上における推定時期を飛鳥期に当てている

表5 叩き目からみた飛鳥期の丸瓦

飛鳥期の 主要叩き目	補助 叩き目	対応丸瓦の群表記	造瓦 器具	主要布	補助布	造瓦器具の 推定時期	布の 推定時期	対応軒丸瓦の瓦当部
[Aa]	—	行基 I 1 Za [Aa]	I 1	チ	—	—	ASK	—
[Ab]	—	行基 I 1 Za [Ab]	I 1	ワ	—	—	ASK	—
[Ad]	—	行基 I 1 Za [Ad]	I 1	ニ・ナ	—	—	ASK	—
[Ad]	(+Ad)	行基 I 1 Za [Ad] (+Ad)	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Ad]	(+Ae)	行基 I 1 Za [Ad] (+Ae)	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Ad]	(+Af)	行基 I 1 Za [Ad] (+Af)	I 1	ナ	—	—	ASK	—
[Ad]	(+Cn)	行基 I 1 Za [Ad] (+Cn)	I 1	ニ	—	—	ASK	軒丸瓦D
[Ae]	—	行基 I 1 Za [Ae]	I 1	ニ・ナ・ロ	—	—	ASK	軒丸瓦D
[Ae]	(+Ae)	行基 I 1 Za [Ae] (+Ae)	I 1	ニ・ナ	—	—	ASK	軒丸瓦D
[Ae]	(+Af)	行基 I 1 Za [Ae] (+Af)	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Ae]	(+Cn)	行基 I 1 Za [Ae] (+Cn)	I 1	ナ	—	—	ASK	—
[Af]	—	行基 I 1 Za [Af]	I 1	ニ・ナ	—	—	ASK	—
[Af]	(+Ae)	行基 I 1 Za [Af] (+Ae)	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Af]	(+Af)	行基 I 1 Za [Af] (+Af)	I 1	ニ・ナ	—	—	ASK	—
[Af]	(+Cn)	行基 I 1 Za [Af] (+Cn)	I 1	ニ・ナ	—	—	ASK	—
[Ag]	—	行基 I 1 Za [Ag]	I 1	ナ	—	—	ASK	—
[Ag]	(+Ad)	行基 I 1 Za [Ag] (+Ad)	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Ag]	(+Ae)	行基 I 1 Za [Ag] (+Ae)	I 1	ニ	—	—	ASK	軒丸瓦D
[Ag]	(+Af)	行基 I 1 Za [Ag] (+Af)	I 1	ナ	—	—	ASK	軒丸瓦D
[Aj]	—	行基 I 1 Za [Aj]	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Ak]	—	行基 I 1 Za [Ak]	I 1	ワ・ム	—	—	ASK	—
[Am]	—	行基 I 1 Za [Am]	I 1	チ	—	—	ASK	軒丸瓦E
[Bc]	—	行基 I 1 Za [Bc]	I 1	ワ	—	—	ASK	—
[Bt]	—	行基 I 1 Za [Bt]	I 1	ニ	—	—	ASK	—
[Cg]	—	行基 I 1 Za [Cg]	I 1	ネ	—	—	ASK	軒丸瓦B、または軒丸瓦C
[Ch]	—	行基 I 1 Za [Ch]	I 1	ネ	—	—	ASK	軒丸瓦B、または軒丸瓦C
[Cj]	—	行基 I 1 Za [Cj]	I 1	ロ	ロ	—	ASK	軒丸瓦E
[Cn]	—	行基 I 1 Za [Cn]	I 1	ニ・ナ	—	—	ASK	—

ASK：作業上における推定時期を飛鳥期に当てている

白鳳期の丸瓦と平瓦

白鳳期に比定される軒丸瓦に接合する丸瓦部に認める技術形態属性を示すのが表7である。白鳳期には、「山田寺式」期から「川原寺式」期を通じて、造瓦器具としてI 1が使われ、布袋の種類については、「山田寺式」期には「布イ」、「布リ」が、「川原寺式」期には「布ル」、「布カ」、「布ソ」が使われることが分かる。[布ツ]については「川原寺式」期なのか、天平期なのか確定できないので保留しておく。また叩き板の種類については、叩き目を観察できる資料がないので分からない。

表8は、白鳳期に比定される軒丸瓦の丸瓦部と同じ「群」とする丸瓦ではあるものの、布袋がまったく同じ綴じ合わせ痕や縫い合わせ痕をもたない一群、あるいは布袋の不明であったものを示す。共通する「群」、あるいは共通する「布」が使われることから、先に示した軒丸瓦の丸瓦部に、その丸瓦の造瓦のときは、きわめて近いと考えることが許されよう。そこで、白鳳期でも「川原寺式」期には、先の「布」に加えて、「布ラ」も使われることが分かる。

表7と表8に示す白鳳期に比定される軒丸瓦の丸瓦部に認める種類の「布」が、部分的にはあっても使われている丸瓦の一覧が表9である。白鳳期とする資料は、基本的には表7で示す群と同じ指標を用いて認定をおこなうが、大半の丸瓦には叩き目が残されていないことから、「布」の種類を指標として抽出する。この作業によって、軒丸瓦の瓦当部からは確認できなかった叩き板の反映属性が判明する。すなわち、「山田寺式」期に使われた叩き板の種類は依然不明ではあるものの、「川原寺式」期には正格子叩き [Br] の叩き板が使われていたことを知る。

次に白鳳期に比定される平瓦について見てみよう。白鳳期の資料は飛鳥期のそれとは異なり、軒平瓦も時期同定に有効的に使える。ただし白鳳期と天平期の区別がつかただけであって、軒平瓦の瓦

表6 布と叩き目からみた飛鳥期の平瓦

飛鳥期の 主要布	飛鳥期の 補助布	飛鳥期の 主要叩き	飛鳥期の 補助叩き	平瓦の群表記	造 瓦 器 具	時期不定 の主要布	時期不定 の補助布	時期不定の 主要叩き目	時期不定の 補助叩き目
ロ	—	[Cj]	—	平瓦 II 0 Za [Cj]	II 0	—	—	—	—
ロ	—	—	—	平瓦 II 20 Za	II 0	—	—	—	—
ロ	—	—	—	平瓦 II 21 Za	II 21	—	—	—	—
ロ	—	—	—	平瓦 II 23 Za	II 23	—	—	—	—
ロ	—	—	—	平瓦 II 24 Za	II 24	—	—	—	—
ハ	—	—	—	平瓦 II 3 Za	II 3	—	—	—	—
ニ	ニ	[Ae]	(+Bt)	平瓦 II 0 Za [Ae] (+Bt)	II 0	ニ	—	—	—
ニ	—	[Ag]	—	平瓦 II 0 Za [Ag]	II 0	—	—	—	—
ニ	—	[Ag]	(+Bt)	平瓦 II 0 Za [Ag] (+Bt)	II 0	—	—	—	—
—	—	—	(+Ae)	平瓦 II 0 Ac (+Ae)	II 0	へ	—	[Ac]	—
チ	—	[Bc]	(+Bt)	平瓦 II 0 Za [Bc] (+Bt)	II 0	—	—	—	—
チ	—	[Cj]	—	平瓦 II 0 Za [Cj]	II 0	—	—	—	—
チ	—	—	—	平瓦 II 0 Za [Da]	II 0	—	—	[Da]	—
チ	—	—	—	平瓦 II 22 Za	II 22	—	—	—	—
ヌ	—	[Aa]	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	II 0	—	—	—	—
ヌ	—	[Ab]	—	平瓦 II 0 Za [Ab]	II 0	—	—	—	—
ヌ	—	[Ad]	—	平瓦 II 0 Za [Ad]	II 0	—	—	—	—
ヌ	—	[Af]	—	平瓦 II 0 Za [Af]	II 0	—	—	—	—
ヌ	—	[Ak]	—	平瓦 II 0 Za* [Ak]	II 0	—	—	—	—
ヌ	ヌ	—	—	平瓦 II 0 Za [Bs]	II 0	—	—	[Bs]	—
ヌ	—	—	—	平瓦 II 0 Za [Bs]	II 0	—	—	[Bs]	—
ヌ	ヌ	—	—	平瓦 II 0 Za [Ea]	II 0	—	—	[Ea]	—
ヌ	—	—	—	平瓦 II 3 Za	II 3	—	—	—	—
ワ	—	[Aa]	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	II 0	—	—	—	—
ワ	—	[Aa]	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	II 0	—	イ	—	—
ワ	ワ	—	—	平瓦 II 0 Za [Da]	II 0	ニ	—	[Da]	—
ワ	—	—	—	平瓦 II 0 Za [Fa]	II 0	—	—	[Fa]	—
—	—	[Ad]	(+Ae)	平瓦 II 0 Za [Ad] (+Ae)	II 0	ヨ	—	—	—
—	—	[Af]	—	平瓦 II 0 Za [Af]	II 0	ヨ	—	—	—
—	—	[Af]	(+Af)	平瓦 II 0 Za [Af] (+Af)	II 0	ヨ	—	—	—
—	—	[Aj]	—	平瓦 II 0 Za* [Aj]	II 0	ヨ	—	—	—
—	—	[Ak]	—	平瓦 II 0 Za [Ak]	II 0	ヨ	—	—	—
—	—	[Am]	—	平瓦 II 0 Za [Am]	II 0	ヨ	—	—	—
—	ム	—	—	平瓦 II 0 Za [Ba]	II 0	ヨ	—	[Ba]	—
—	—	—	(+Ae)	平瓦 II 0 Za [Bs] (+Ae)	II 0	ヨ	—	[Bs]	—
ナ	—	—	—	平瓦 II 0 Za [Ea]	II 0	ヨ	—	[Ea]	—
—	ム	—	—	平瓦 II 0 Za [Ah]	II 0	ヨ	—	[Ah]	—
—	ム	[Ak]	—	平瓦 II 0 Za [Ak]	II 0	ヨ	—	—	—
—	ム	[Ak]	—	平瓦 II 0 Za* [Ak]	II 0	ヨ	—	—	—
—	ム	—	—	平瓦 II 0 Za [Ba]	II 0	ヨ	—	[Ba]	—
—	—	[Am]	—	平瓦 II 0 Za [Am]	II 0	ヨ	イ	—	—
ネ	—	[Cg]	—	平瓦 II 20 Za [Cg]	II 20	—	—	—	—
ネ	—	[Cg]	—	平瓦 II 26 Za [Cg]	II 26	—	—	—	—
ネ	—	[Cg]	—	平瓦 II 27 Za [Cg]	II 27	—	—	—	—
ネ	—	[Ch]	—	平瓦 II 20 Za [Ch]	II 20	—	—	—	—
ネ	—	[Ch]	—	平瓦 II 25 Za [Ch]	II 25	—	—	—	—
ネ	—	[Ch]	—	平瓦 II 27 Za [Ch]	II 27	—	—	—	—
ネ	—	—	—	平瓦 II 20 Za	II 20	—	—	—	—
ネ	—	—	—	平瓦 II 25 Za	II 25	—	—	—	—
ネ	—	—	—	平瓦 II 27 Za	II 27	—	—	—	—
ネ	—	—	—	平瓦 II 28 Za	II 28	—	—	—	—
ナ	—	[Af]	(+Ae)	平瓦 II 0 Za [Af] (+Ae)	II 0	—	—	—	—
ナ	—	[Ag]	(+Ag)	平瓦 II 0 Za [Ag] (+Ag)	II 0	—	—	—	—
ナ	—	[Ag]	(+Cn)	平瓦 II 0 Za [Ag] (+Cn)	II 0	—	—	—	—
ナ	—	—	—	平瓦 II 0 Bs	II 0	—	—	[Bs]	—
ナ	—	—	(+Ae)	平瓦 II 0 Bs (+Ae)	II 0	—	—	[Bs]	—
ナ	—	—	(+Cn)	平瓦 II 0 Bs (+Cn)	II 0	—	—	[Bs]	—
ナ	—	—	(+Bt)	平瓦 II 0 Ea (+Bt)	II 0	—	—	[Ea]	—
ナ	—	—	—	平瓦 II 0 Ea	II 0	—	—	[Ea]	—
ナ	ナ	[Ad]	(+Bt)	平瓦 II 0 Za [Ad] (+Bt)	II 0	—	—	—	—
ナ	ナ	[Ae]	(+Ag)	平瓦 II 0 Ae (+Ag)	II 0	—	—	—	—
ナ	ナ	[Ae]	(+Cn)	平瓦 II 0 Za [Ae] (+Cn)	II 0	—	—	—	—
ナ	ナ	—	(+Ae)	平瓦 II 0 Bs (+Ae)	II 0	—	—	[Bs]	—
ナ	ナ	—	—	平瓦 II 0 Ea	II 0	—	—	[Ea]	—
ナ	ナ	—	—	平瓦 II 0 Za [Ea]	II 0	—	—	[Ea]	—

時期不定：この作業段階では時期が確定できていない

表7 白鳳期・天平期の軒丸瓦

瓦当部の群表記	所属時期	造瓦器具	主要叩き目	布袋の種類	接合丸瓦部の群表記
軒丸瓦F・軒丸瓦G・軒丸瓦H	白鳳期*	I 1	—	布袋イ+リ行基 1	行基 I 1 Za < x vii >
軒丸瓦J	白鳳期*	I 1	—	布袋ル行基 1	行基 I 1 Za < vi >
軒丸瓦J	白鳳期*	I 1	—	布袋カ行基 0	行基 I 1 Za < vi >
軒丸瓦J	白鳳期*	I 1	—	布袋ソ行基 0	行基 I 1 Za < x ix >
軒丸瓦J	白鳳期*	I 1	—	—	行基 I 1 Za < x x i >
軒丸瓦K・軒丸瓦L	白鳳期*、または天平期*	—	—	布ツ	玉縁 III 1 Za
軒丸瓦L	天平期*	I 321	[J1b]	布袋レ玉縁 3	玉縁 I 321 Za [J1b]

白鳳期*：瓦当で受け入れられている時期

天平期*：瓦当で受け入れられている時期

表8 白鳳期の軒丸瓦の丸瓦部と同群の丸瓦

平瓦の群表記	造瓦器具	主要布	補助布	主要叩き目	布の推定時期	対応瓦当部の群表記
行基 I 1 Za < x vi >	I 1	—	—	布袋イ+リ行基 1	YMD	軒丸瓦F・軒丸瓦G・軒丸瓦H
行基 I 1 Za < vi >	I 1	—	—	布袋ル行基 1	KWH	軒丸瓦J
行基 I 1 Za < vi >	I 1	—	—	布袋カ行基 1	KWH	軒丸瓦J
行基 I 1 Za < x ix >	I 1	—	—	布袋ソ行基 1	KWH	軒丸瓦J
行基 I 1 Za < x x i >	I 1	—	—	布袋ラ行基 2	KWH	軒丸瓦J

YMD：作業上における推定時期を「山田寺式」期に当てている

KWH：作業上における推定時期を「川原寺式」期に当てている

当部資料からだけでは「山田寺式」期と「川原寺式」期の区別はできていない（広瀬 2001）。

まず表10に、白鳳期に比定される軒平瓦の瓦当部と平瓦部との関係を示すとともに、使われる叩き板と「布」の種類を示す。すると、白鳳期とする丸瓦の造瓦で使われる布と同じ「布リ」、「布ル」、「布カ」および「布ソ」が使われていることが分かる。もし、丸瓦と平瓦の造瓦に使われる布の種類も同じであると考えることが許されるなら、「布リ」の使用は「山田寺式」期に、「布ル」、「布カ」および「布ソ」の使用は「川原寺式」期にあてることができよう。そうすると、軒平瓦につく瓦当部のうち、AA 1 群からAA 4 群までが「山田寺式」期に、AA 5 群からAA 7 群までが「川原寺

表9 布からみた白鳳期・天平期の丸瓦

主要布	補助布	行基式丸瓦	造瓦器具	主要叩き目	造瓦器具の推定時期	布の推定時期	叩き目の推定時期	対応瓦当部の群表記
イ	リ	行基 I 1 Za < x vii > 群	I 1	—	—	YMD	—	軒丸瓦 F・軒丸瓦 G・軒丸瓦 H
リ	—	行基 I 1 Za < x vi > 群	I 1	—	—	YMD	—	軒丸瓦 F・軒丸瓦 G・軒丸瓦 H
リ	リ	行基 I 1 Za < x vi > 群	I 1	—	—	YMD	—	軒丸瓦 F・軒丸瓦 G・軒丸瓦 H
ル	—	行基 I 1 Za [Br] 群	I 1	[Br]	—	KAW	—	軒丸瓦 J
ル	—	行基 I 1 Za < vi > 群	I 1	—	—	KAW	—	軒丸瓦 J
ル	—	行基 I 1 Za < x viii > 群	I 1	—	—	KAW	—	軒丸瓦 J
ル	—	行基 I 1 Za < x x > 群	I 1	—	—	KAW	—	—
カ	—	行基 I 1 Za [Br] 群	I 1	[Br]	—	KAW	—	軒丸瓦 J
カ	—	行基 I 1 Za < vi > 群	I 1	—	—	KAW	—	軒丸瓦 J
ソ	—	行基 I 1 Za < x vi > 群	I 1	—	—	KAW	—	軒丸瓦 J
ラ	—	行基 I 1 Za < x x i > 群	I 1	—	—	KAW	—	軒丸瓦 J
ツ	—	玉縁 I 331 Za [J1b] 群	I 331	[J1b]	—	KAWまたはHIJ	HIJ	軒丸瓦 K・軒丸瓦 L
レ	—	玉縁 I 31 Za [J1b] 群	I 31	[J1b]	—	HIJ	HIJ	軒丸瓦 L
レ	—	玉縁 I 321 Za [J1a] 群	I 321	[J1a]	HIJ	HIJ	—	—
レ	—	玉縁 I 321 Za [J1b] 群	I 321	[J1b]	HIJ	HIJ	HIJ	軒丸瓦 L
レ	—	玉縁 I 321 Za [J1e] 群	I 321	[J1e]	HIJ	HIJ	—	—
レ	—	玉縁 I 322 Za [J1b] 群	I 322	[J1b]	—	HIJ	HIJ	軒丸瓦 L
レ	—	行基 I 1 Za < x i > 群	I 1	—	—	HIJ	—	—
レ	—	行基 I 1 Za < x x ii > 群	I 1	—	—	HIJ	—	—

YMA：作業上における推定時期を「山田寺式」期に当てている

KMH：作業上における推定時期を「川原寺式」期に当てている

HIJ：作業上における推定時期を天平期に当てている

表10 白鳳期・天平期の軒平瓦

瓦当部の群表記	所属時期	造瓦器具	主要布	主要叩き目	接合平瓦部の群表記
軒平瓦AA1・軒平瓦AA3・軒平瓦AA4	白鳳期*	Ⅱ0	リ	—	平瓦Ⅱ0Za<i>
軒平瓦AA2	白鳳期*	Ⅱ0	リ	—	平瓦Ⅱ0Za<ii>
軒平瓦AA5	白鳳期*	Ⅱ0	ル	[Bb]	平瓦Ⅱ0Za [Bb]
軒平瓦AA5	白鳳期*	Ⅱ0	カ	[Bp]	平瓦Ⅱ0Za [Bp]
軒平瓦AA5	白鳳期*	Ⅱ0	ル	[Br]	平瓦Ⅱ0Za [Br]
軒平瓦AA5	白鳳期*	Ⅱ0	カ	—	平瓦Ⅱ0Za<iii>
軒平瓦AA6	白鳳期*	Ⅱ0	ソ	[Ck]	平瓦Ⅱ0Za [Ck]
軒平瓦AA6	白鳳期*	Ⅱ0	ソ	[Bh]	平瓦Ⅱ0Za [Bh]
軒平瓦AA6	白鳳期*	Ⅱ0	—	—	平瓦Ⅱ0Za<iii>
軒平瓦AA7	白鳳期*	Ⅱ0	ソ	[Bh]	平瓦Ⅱ0Za [Bh]
軒平瓦AA7	白鳳期*	Ⅱ0	カ	[Bq]	平瓦Ⅱ0Za [Bq]
軒平瓦AA7	白鳳期*	Ⅱ0	カ	—	平瓦Ⅱ0Za<iii>
軒平瓦AA7	白鳳期*	Ⅱ0	ル	—	平瓦Ⅱ0Za<iii>
軒平瓦P	天平期*	Ⅲ2	ツ	—	平瓦Ⅲ2Za
軒平瓦P	天平期*	Ⅲ2	ツ	[J2aj]	平瓦Ⅲ2Za [J2aj]

白鳳期*：瓦当で受け入れられている時期
 天平期*：瓦当で受け入れられている時期

表11 白鳳期の軒平瓦の平瓦部と同群の平瓦

平瓦の群表記	造瓦器具	主要布	補助布	主要叩き目	布の推定時期	対応瓦当部の群表記
平瓦Ⅱ0Za<i>	Ⅱ0	リ	イ	—	YMD	軒平瓦AA1
平瓦Ⅱ0Za<ii>	Ⅱ0	リ	—	—	YMD	軒平瓦AA1・軒平瓦AA3・軒平瓦AA4
平瓦Ⅱ0Za<iii>	Ⅱ0	リ	—	—	YMD	軒平瓦AA2
平瓦Ⅱ0Za [Bb]	Ⅱ0	ル	ル	[Bb]	KWH	軒平瓦AA5
平瓦Ⅱ0Za [Bh]	Ⅱ0	ソ	—	[Bh]	KWH	軒平瓦AA6
平瓦Ⅱ0Za [Bp]	Ⅱ0	カ	—	[Bp]	KWH	軒平瓦AA5
平瓦Ⅱ0Za [Bq]	Ⅱ0	カ	—	[Bq]	KWH	軒平瓦AA7
平瓦Ⅱ0Za [Br]	Ⅱ0	ル	—	[Br]	KWH	軒平瓦AA5
平瓦Ⅱ0Za [Br]	Ⅱ0	ソ	—	[Br]	KWH	軒平瓦AA5
平瓦Ⅱ0Za [Ck]	Ⅱ0	ソ	—	[Ck]	KWH	軒平瓦AA6
平瓦Ⅱ0Za<iii>	Ⅱ0	カ	—	—	KWH	軒平瓦AA5・軒平瓦AA7
平瓦Ⅱ0Za<iii>	Ⅱ0	ソ	—	—	KWH	軒平瓦AA7

YMA：作業上における推定時期を「山田寺式」期に当てている
 KWH：作業上における推定時期を「川原寺式」期に当てている

式」期にあたることになる。そこで、「川原寺式」期に使われる叩き板に、正格子叩き [Bb]、[Bh]、[Bp]、[Bq] と、斜格子叩き [Ck] も加わることになる。

表11は、白鳳期に比定する軒平瓦に接合する平瓦部と同じ「群」とする平瓦の一覧である。ここで、先に示した表10には認めない「布イ」の使用を「山田寺式」期に見つけることになる。この事実は、平瓦の造瓦にも、丸瓦の造瓦と同じ「布」が使用されていたとの推測を補強し、白鳳期のなかでも、「山田寺式」期と「川原寺式」期では異なった「布」が使われていたと考えさせる。

白鳳期に比定される軒平瓦の平瓦部と同じ「群」とする平瓦に認める「布」を指標にして取り出した、そのほかの平瓦を示すのが表12である。これによって、「山田寺式」期にも平瓦の造瓦には麻様文叩き [Ga] と、格子-斜線の組み合わせ文叩き [Ha] の叩き板が使われることが分かる。それに対して「川原寺式」期には、先に判明している叩き板に加えて、正格子叩き [Bd]、[Be]、[Bf]、[Bg]、[Bj] と、斜格子叩き [Ce]、[Cf]、[Cm] も使われていることを知る。

結論すると、白鳳期の造瓦器具は、「山田寺式」期と「川原寺式」期ともに共通して、丸瓦の造瓦にはⅠ1が、平瓦の造瓦にはⅡ0が使われていることになる。叩き板は、どちらの時期にも平行叩きは認めず、「山田寺式」期には、麻様文叩き [Ga]、格子-斜線の組み合わせ文叩き [Ha] を認めるだけであるのに対し、「川原寺式」期には正格子叩き [Bb]、[Bd]、[Be]、[Bf]、[Bg]、[Bh]、[Bj]、[Bp]、[Bq] と、斜格子叩き [Ce]、[Cf]、[Ck]、[Cm] が使われることが分かる。

表12 布からみた白鳳期・天平期の平瓦

主要布	補助布	平瓦の群表記	造瓦器具	主要叩き目	布の所属時期	造瓦器具の所属時期	叩き目の所属時期	対応瓦当部の群表記
リ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Ga]	Ⅱ0	[Ga]	YMD	—	—	—
リ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Ha]	Ⅱ0	[Ha]	YMD	—	—	—
リ	—	平瓦Ⅱ0 Za < i >	Ⅱ0	—	YMD	—	—	軒平瓦AA1・軒平瓦AA3・軒平瓦AA4
リ	—	平瓦Ⅱ0 Za < ii >	Ⅱ0	—	YMD	—	—	軒平瓦AA2
リ	イ	平瓦Ⅱ0 Za < i >	Ⅱ0	—	YMD	—	—	軒平瓦AA1・軒平瓦AA3・軒平瓦AA4
ル	—	平瓦Ⅱ0 Za [Bb]	Ⅱ0	[Bb]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA5
ル	—	平瓦Ⅱ0 Za [Be]	Ⅱ0	[Be]	KWH	—	—	—
ル	—	平瓦Ⅱ0 Za [Bf]	Ⅱ0	[Bf]	KWH	—	—	—
ル	—	平瓦Ⅱ0 Za [Br]	Ⅱ0	[Br]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA5
ル	—	平瓦Ⅱ0 Ce	Ⅱ0	[Ce]	KWH	—	—	—
ル	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	Ⅱ0	—	KWH	—	—	軒平瓦AA7
ル	ル	平瓦Ⅱ0 Za [Bb]	Ⅱ0	[Bb]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA5
カ	—	平瓦Ⅱ0 Bj	Ⅱ0	[Bj]	KWH	—	—	—
カ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Bp]	Ⅱ0	[Bp]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA5
カ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Bq]	Ⅱ0	[Bq]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA7
カ	—	平瓦Ⅱ0 Bq	Ⅱ0	[Bq]	KWH	—	KWH	—
カ	—	平瓦Ⅱ0 Cf	Ⅱ0	[Cf]	KWH	—	—	—
カ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Cf]	Ⅱ0	[Cf]	KWH	—	—	—
カ	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	Ⅱ0	—	KWH	—	—	軒平瓦AA5・軒平瓦AA7
カ	ル	平瓦Ⅱ0 Ce×Ck	Ⅱ0	[Ce]×[Ck]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Bd	Ⅱ0	[Bd]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Be	Ⅱ0	[Be]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Bf	Ⅱ0	[Bf]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Bg	Ⅱ0	[Bg]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Bh	Ⅱ0	[Bh]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Bh]	Ⅱ0	[Bh]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA6
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Bj	Ⅱ0	[Bj]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Br]	Ⅱ0	[Br]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA5
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Cf	Ⅱ0	[Cf]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Cf]	Ⅱ0	[Cf]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Ck	Ⅱ0	[Ck]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA6
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Za [Ck]	Ⅱ0	[Ck]	KWH	—	KWH	軒平瓦AA6
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Ck×Bj	Ⅱ0	[Ck]×[Bj]	KWH	—	KWH	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Ck×Cm	Ⅱ0	[Ck]×[Cm]	KWH	—	KWH	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Cm	Ⅱ0	[Cm]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Cm×Be	Ⅱ0	[Cm]×[Be]	KWH	—	—	—
ソ	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	Ⅱ0	—	KWH	—	—	軒平瓦AA 5
ソ	ル	平瓦Ⅱ0 Be	Ⅱ0	[Be]	KWH	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ0 Bm	Ⅱ0	[Bm]	HIJ	—	—	—
レ	ホ	平瓦Ⅱ0 Bm	Ⅱ0	[Bm]	HIJ	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	Ⅱ1	[J1b]	HIJ	—	HIJ	—
レ	—	平瓦Ⅱ1 J1c	Ⅱ1	[J1c]	HIJ	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ1 J1d	Ⅱ1	[J1d]	HIJ	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ1 J1e	Ⅱ1	[J1e]	HIJ	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ1 J1f	Ⅱ1	[J1f]	HIJ	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	Ⅱ0	—	HIJ	—	—	—
レ	ホ	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	Ⅱ0	—	HIJ	—	—	—
レ	ト	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	Ⅱ0	—	HIJ	—	—	—
レ	—	平瓦Ⅱ1 Za	Ⅱ1	—	HIJ	—	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2ae	Ⅲ2	[J2ae]	KWHまたはHIJ	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2af	Ⅲ2	[J2af]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2ag	Ⅲ2	[J2ag]	KWHまたはHIJ	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2ah	Ⅲ2	[J2ah]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2aj	Ⅲ2	[J2aj]	KWHまたはHIJ*	HIJ	天平期*	軒平瓦P
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2ak	Ⅲ2	[J2ak]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2am	Ⅲ2	[J2am]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2an	Ⅲ2	[J2an]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2ap	Ⅲ2	[J2ap]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2aq	Ⅲ2	[J2aq]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2ar	Ⅲ2	[J2ar]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2as	Ⅲ2	[J2as]	KWHまたはHIJ*	HIJ	天平期*	軒平瓦P
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2at	Ⅲ2	[J2at]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—
ツ	—	平瓦Ⅲ2 J2aw	Ⅲ2	[J2aw]	KWHまたはHIJ*	HIJ	—	—

YMA：作業上における推定時期を「山田寺式」期に当てている
 KWH：作業上における推定時期を「川原寺式」期に当てている
 HIJ：作業上における推定時期を天平期に当てている
 天平期*：瓦当で受け入れられている時期

「布」は、平瓦と丸瓦の両方の造瓦に、「山田寺式」期には「布イ」と「布リ」が、「川原寺式」期には「布ル」、「布カ」および「布ツ」の使用を知る。ただし、「川原寺式」期に比定する丸瓦の造瓦には「布ラ」も使われている。なお、飛鳥期とする平瓦の造瓦に補足的に使われていた「布イ」は、白鳳期の「山田寺式」期にも使われていることは見てきたとおりであるが、白鳳期には主体布で使われていることを特記しておく。いずれにしても、白鳳期のなかでも、「山田寺式」期と「川原寺式」期のあいだには、造瓦器具を除いて、叩き板および「布」の種類から見ると共通して使われるものがない。時期を違えて、種類の異なる叩き板と「布」が使われているのは明瞭である。

天平期の平瓦と丸瓦

天平期に比定される軒丸瓦は、残存状況が悪く、そのうえ出土量も少ないので、瓦当資料からデータを抽出することはかなり困難である。

まず、天平期の軒丸瓦に接合する丸瓦部に認める技術形態属性を示すのが表7である。確実に天平期の瓦当として異論のない「平城宮式」の軒丸瓦L群とするものに接続する丸瓦部の群表記と同じである丸瓦が存在するものを探すと、玉縁 I 321 Za [J1b] 群だけを認め、その造瓦には「布レ」が使われることだけ分かる。ほかは一本作りで造られているために、丸瓦として同じ群とするものが存在しない。ただし、一本作りで造られた軒丸瓦の丸瓦部には、「布ツ」の布目圧痕を認める。この「布ツ」を使って造られる丸瓦部に接合する瓦当部には2種類があり、ひとつは「川原寺式」瓦当文様をもつ軒丸瓦K群とするものであり、^(註1)あとひとつは「平城宮式」瓦当文様をもつ軒丸瓦L群とするものである。「布ツ」の使用時期が瓦当文様で示されるとして、「川原寺式」期にあてうるのか、もうひとつの「平城宮式」期にあてうるのかは問題として残されるが、すでに見てきたように、白鳳期に比定されるほかの軒丸瓦あるいは軒平瓦には、「布ツ」はまったく使用されていないことは特記しておかねばならない。しかし、飛鳥期と白鳳期にまたがって使用された「布イ」の例もあるので、なお量的な検討を経て「布ツ」の使用についての結論を得なければならない。

次に、天平期に比定される「平城宮式」瓦当部に接合する丸瓦部に認める布目圧痕から、同じ「布」であるとする「布レ」を用いて造った丸瓦を取り上げるのが表9である。「布レ」を使う丸瓦の造瓦には、造瓦器具としては先に示した I 321に加えて、I 31、I 322および I 1が使用されている。叩き板には、縄目叩き [J1a]、[J1e] も使われたことが分かる。

次に、軒平瓦を見てみよう。天平期に比定される軒平瓦の平瓦部に認める技術形態属性を示すのが表10である。平瓦部の造瓦には、造瓦器具として成形台Ⅲ2が使われる。布袋には、先に問題にした「布ツ」が使われている。叩き板には、縄目叩き [J2aj] を認める。

軒平瓦から得られる情報が少ないので、天平期に比定する平瓦を認定するにあたって、軒平瓦の平瓦部では確認できないものの、丸瓦の造瓦に使われる「布レ」が平瓦の造瓦にも使用されると仮定して、それをも加えて一覧にするのが表12である。すると結論として、天平期の造瓦器具として、平瓦の造瓦にⅡ0、Ⅱ1、Ⅲ2が使用され、叩き板には正格子叩き [Bm]、縄目叩き [J1c]、[J1d]、[J1f]、[J2ae]、[J2af]、[J2ag]、[J2ah]、[J2aj]、[J2ak]、[J2am]、[J2an]、[J2ap]、[J2aq]、[J2ar]、[J2as]、[J2at]、[J2aw] が使われることが分かる。布袋には、先の「布レ」と「布ツ」に加えて、「布ホ」と「布ト」も使われることを知る。

新堂廃寺跡出土丸瓦、平瓦および道具瓦の所属時期

以上、飛鳥期、白鳳期を細分しての「山田寺式」期および「川原寺式」期、天平期の4つの時期に認められる造瓦器具の特徴、叩き板の種類、「布」の種類を同定を試みてきたが、それらをまとめて、丸瓦、平瓦、道具瓦に認める「群」のおのおのの所属時期を示すのが表13である。軒丸瓦の丸瓦部、軒平瓦の平瓦部、丸瓦、平瓦から得られるデータを総合した結果、さらにおのおのの時期の造瓦の姿の特徴を確認することができる。先の検討で所属時期の確定できなかった「布」の種類には「布タ」、「布ウ」が、叩き板の種類には斜格子叩き [Ca]、縄目叩き [J2aa]、[J2ab]、[J2ac]、[J2ad]、[J2au]、[J2av]、[J2ax]、[J2ay]、[J2az]、[J2ba] がある。「布」の種類のうち、「布タ」は、「布ホ」、「布ト」、「布レ」と、「布ウ」は「布ト」と取り替えて使用されていることからすると、「布タ」と「布ウ」は天平期に使用されていたことが分かる。所属時期の確定できなかった叩き板のうち、斜格子叩き [Ca] はその叩き板を使用して造られた平瓦Ⅱ0 Ca群で、飛鳥期に比定される「布へ」の使用されていることからすると、斜格子叩き [Ca] も飛鳥期の叩き板とあてうることができよう。一方、縄目叩きについては、それらの縄目叩きを使用して造られる平瓦のすべてに、天平期の造瓦器具である成形台Ⅲ2が使われることからすると、叩き板も天平期の時期にあてうるできよう。

以下に、時期ごとに造瓦器具、叩き板の種類、「布」の種類をまとめてみよう。

造瓦器具の種類

飛鳥期	丸瓦 (I1、I2)
	平瓦 (Ⅱ0、Ⅱ20、Ⅱ21、Ⅱ22、Ⅱ23、Ⅱ24、Ⅱ25、Ⅱ26、Ⅱ27、Ⅱ28、Ⅱ3)
「山田寺式」期	丸瓦 (I1)、平瓦 (Ⅱ0)
「川原寺式」期	丸瓦 (I1)、平瓦 (Ⅱ0)
天平期	丸瓦 (I1、I31、I321、I322、I323、I331、I332、Ⅲ1)
	平瓦 (Ⅱ0、Ⅱ1、Ⅲ2)

叩き板の種類

飛鳥期	すべての平行叩き [Aa] ~ [Am]、正格子叩き [Ba]、[Bc]、[Bs]、[Bt]、斜格子叩き [Ca]、[Cg]、[Ch]、[Cj]、[Cn]、平行線-斜線の組み合わせ文叩き [Da]、交差文叩き [Ea]、重ね菱文叩き [Fa]
「山田寺式」期	麻様文叩き [Ga]、格子-斜線の組み合わせ文叩き [Ha]
「川原寺式」期	正格子叩き [Bb]、[Bd]、[Be]、[Bf]、[Bg]、[Bh]、[Bj]、[Bp]、[Bq]、[Br]、斜格子叩き [Ce]、[Cf]、[Ck]、[Cm]
天平期	正格子叩き [Bk]、[Bm]、[Bn]、斜格子叩き [Cb]、[Cc]、[Cd]、縄目叩きすべての [J1a] ~ [J2ba]

布の種類

飛鳥期	「布ロ」、「布ハ」、「布ニ」、「布へ」、「布チ」、「布ヌ」、「布ワ」、「布ヨ」、「布ネ」、「布ナ」、「布ム」、および補足的に使用する「布イ」
-----	--

表13 新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡に出土した丸瓦・平瓦・道具瓦の所属時期

瓦資料の群表記	造瓦器具の 推定時期	叩き目の 推定時期	布の種類	布の 推定時期	所属時期
玉縁 I 2 Za	ASK	—	ハ・ヌ	ASK	飛鳥期
玉縁 I 31 Za [J1b]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
玉縁 I 321 Za [J1a]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
玉縁 I 321 Za [J1b]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
玉縁 I 321 Za [J1e]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
玉縁 I 322 Za [J1b]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
玉縁 I 323 Za [J1b]	—	HIJ	タ	—	天平期
玉縁 I 331 Za [J1b]	—	HIJ	ツ	HIJ	天平期
玉縁 I 332 Za [J1b]	—	HIJ	ホ・ト・タ・ツ	HIJ	天平期
行基 I 1 Za [Aa]	—	ASK	チ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ab]	—	ASK	ワ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ad]	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ad] (+Ad)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ad] (+Ae)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ad] (+Af)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ad] (+Cn)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ae]	—	ASK	ロ・ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ae] (+Ae)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ae] (+Af)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ae] (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Af]	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Af] (+Af)	—	ASK	ロ・ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Af] (+Ae)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Af] (+Cn)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ag]	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ag] (+Ad)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ag] (+Ae)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ag] (+Af)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Aj]	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ak]	—	ASK	ワ・ム	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Am]	—	ASK	チ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ba]	—	ASK	チ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Bc]	—	ASK	ワ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Br]	—	KWH	ル・カ	KWH	〔川原寺式〕期
行基 I 1 Za [Bt]	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Cg]	—	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Ch]	—	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Cj]	—	ASK	ロ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [Cn]	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za [J1b]	—	HIJ	ト・レ	HIJ	天平期
行基 I 1 Za [J1c]	—	HIJ	ト	HIJ	天平期
行基 I 1 Za [J1f]	—	HIJ	タ	—	天平期
行基 I 1 Za [J2ac]	—	—	ウ	—	天平期
行基 I 1 Za [J2ad]	—	—	ウ	—	天平期
行基 I 1 Za < i >	—	—	チ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii >	—	—	ロ・ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Ad)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Ad) (+A e)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Ae)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Ae) (+Bt)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Af)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Ag)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Bt)	—	—	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < ii > (+Cn)	—	—	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < iii >	—	—	ニ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < iv >	—	—	ヨ・ム	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < v >	—	—	チ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < vi >	—	—	ル・カ	KWH	〔川原寺式〕期
行基 I 1 Za < vii >	—	—	ネ	ASK	飛鳥期
行基 I 1 Za < viii >	—	—	ネ	ASK	飛鳥期

行基 I1 Za < ix >	—	—	ロ	ASK	飛鳥期
行基 I1 Za < x >	—	—	ネ	ASK	飛鳥期
行基 I1 Za < x i >	—	—	レ・ト	HIJ	天平期
行基 I1 Za < x ii >	—	—	チ	ASK	飛鳥期
行基 I1 Za < x iii >	—	—	へ・ヨ	ASK	飛鳥期
行基 I1 Za < x iv >	—	—	ワ	ASK	飛鳥期
行基 I1 Za < x v >	—	—	ワ	ASK	飛鳥期
行基 I1 Za < x vi >	—	—	リ	YMD	〔山田寺式〕期
行基 I1 Za < x vii >	—	—	イ・リ	YMD	〔山田寺式〕期
行基 I1 Za < x viii >	—	—	ル	KWH	〔川原寺式〕期
行基 I1 Za < x ix >	—	—	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
行基 I1 Za < x x >	—	—	ル	KWH	〔川原寺式〕期
行基 I1 Za < x x i >	—	—	ラ	KWH	〔川原寺式〕期
行基 I1 Za < x x ii >	—	—	ホ・ト・タ・レ	HIJ	天平期
行基 I1 Za < x x iii >	—	—	ウ	—	天平期
平瓦 II0 Za [Aa]	—	ASK	ヌ・ワ・イ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ab]	—	ASK	ヌ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Ac	—	ASK	へ・ヨ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Ac (+Ae)	—	ASK	へ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ac]	—	ASK	へ・ヨ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ad]	—	ASK	ヌ・ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ad] (+Ad)	—	ASK	ヌ・ヨ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ad] (+Ae)	—	ASK	ヌ・ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ad] (+Bt)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ad] (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Ae	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Ae (+Ae)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Ae (+Ag)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Ae (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ae]	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ae] (+Ae)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ae] (+Ag)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ae] (+Bt)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ae] (+Cn)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Af]	—	ASK	ヌ・ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Af] (+Ae)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Af] (+Af)	—	ASK	ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Af] (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ag]	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ag] (+Ag)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ag] (+Bt)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ag] (+Cn)	—	ASK	ニ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ah]	—	ASK	ヨ・ム	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za* [Aj]	—	ASK	ヨ・ム	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ak]	—	ASK	ヌ・ヨ・ム	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za* [Ak]	—	ASK	ヌ・ヨ・ム	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Am]	—	ASK	ヨ・イ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Ba]	—	ASK	ヨ・ム	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Bb]	—	KWH	ル	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Za [Bc]	—	ASK	チ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Za [Bc] (+Bt)	—	ASK	チ	ASK	飛鳥期
平瓦 II0 Bd	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Be	—	KWH	ル・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Bf×Be	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Bf	—	KWH	ル・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Bg	—	KWH	ル・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Bh	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Bj	—	KWH	ル・カ・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦 II0 Bk	—	HIJ	ホ・タ	HIJ	天平期
平瓦 II0 Bm	—	HIJ	ホ・レ	HIJ	天平期
平瓦 II0 Bn	—	HIJ	タ	—	天平期
平瓦 II0 Bp	—	KWH	カ	KWH	〔川原寺式〕期

平瓦Ⅱ0 Za [Bp]	—	KWH	カ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Bq	—	KWH	ル・カ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za [Bq]	—	KWH	カ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Br	—	KWH	ル・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za [Br]	—	KWH	ル・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Bs	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Bs (+Ae)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Bs (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Bs]	—	ASK	ヌ・ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Bs] (+Ae)	—	ASK	ヌ・ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Bs] (+Af)	—	ASK	ヌ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ca	—	—	ヘ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Cb	—	HJ	タ	—	天平期
平瓦Ⅱ0 Cc	—	HJ	タ	—	天平期
平瓦Ⅱ0 Cd	—	HJ	タ	—	天平期
平瓦Ⅱ0 Ce	—	KWH	ル・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za [Ce]	—	KWH	ル	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Ce×Ck	—	KWH	ル・カ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Cf	—	KWH	カ・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za [Cf]	—	KWH	カ・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ20 Za [Cg]	ASK	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ26 Za [Cg]	ASK	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ27 Za [Cg]	ASK	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ20 Za [Ch]	ASK	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ25 Za [Ch]	ASK	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ27 Za [Ch]	ASK	ASK	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ20 Za [Cj]	ASK	ASK	ロ・チ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ck	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Ck×Bj	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Ck×Cm	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Cm	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Cm×Be	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Da	—	ASK	ワ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ea	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ea (+Ad)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ea (+Ae)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ea (+Bt)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Ea (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Ea]	—	ASK	ヌ・ヨ・ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Ea] (+Ad)	—	ASK	ヨ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Ea] (+Ae)	—	ASK	ヨ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Ea] (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Fa]	—	ASK	ワ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ0 Za [Ga]	—	YMD	リ	YMD	〔山田寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za [Ha]	—	YMD	リ	YMD	〔山田寺式〕期
平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	HJ	HJ	ホ・レ	HJ	天平期
平瓦Ⅱ1 J1c	HJ	HJ	ホ・レ	HJ	天平期
平瓦Ⅱ1 J1d	HJ	HJ	レ	HJ	天平期
平瓦Ⅱ1 J1e	HJ	HJ	レ	HJ	天平期
平瓦Ⅱ1 J1f	HJ	HJ	レ	HJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2aa	HJ	HJ	ホ・ウ	HJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ab	HJ	HJ	ウ	—	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ac	HJ	HJ	ホ	HJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ad	HJ	HJ	ウ	—	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ae	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2af	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ag	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ah	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2aj	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ak	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2am	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2an	HJ	HJ	ツ	KWHまたはHJ	天平期

平瓦Ⅲ2 J2ap	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2aq	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ar	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2as	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2at	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2au	HIJ	HIJ	ト・ウ	HIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2aw	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ax	HIJ	—	—	—	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ay	HIJ	HIJ	ト	HIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2az	HIJ	HIJ	ト	HIJ	天平期
平瓦Ⅲ2 J2ba	HIJ	HIJ	ト	HIJ	天平期
平瓦Ⅱ0 Za < i >	—	—	イ・リ	YMD	〔山田寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za < ii >	—	—	リ	YMD	〔山田寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za < iii >	—	—	ル・カ・ソ	KWH	〔川原寺式〕期
平瓦Ⅱ0 Za < iv >	—	—	ホ・ト・タ・レ	HIJ	天平期
平瓦Ⅱ0 Za < v >	—	—	ヘ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ1 Za	HIJ	—	レ	HIJ	天平期
平瓦Ⅱ20 Za	ASK	—	ロ・チ・ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ21 Za	ASK	—	ロ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ22 Za	ASK	—	チ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ23 Za	ASK	—	ロ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ24 Za	ASK	—	ロ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ25 Za	ASK	—	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ27 Za	ASK	—	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ28 Za	ASK	—	ネ	ASK	飛鳥期
平瓦Ⅱ3 Za	ASK	—	ハ・ヌ	ASK	飛鳥期
切鬨斗瓦Ⅱ1 J1 d	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
割鬨斗瓦Ⅱ0 Aa	—	—	ワ	—	—
割鬨斗瓦Ⅱ0 Za [Aa]	—	ASK	ヌ	ASK	飛鳥期
割鬨斗瓦Ⅱ0 Za [Ak]	—	ASK	ヨ	ASK	飛鳥期
割鬨斗瓦Ⅱ0 Za* [Ak]	—	ASK	ヨ	ASK	飛鳥期
割鬨斗瓦Ⅱ0 B h	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
割鬨斗瓦Ⅱ0 Za [Bs]	—	ASK	ヌ	ASK	飛鳥期
割鬨斗瓦Ⅱ0 Ea (+Ae) (+Cn)	—	ASK	ナ	ASK	飛鳥期
割鬨斗瓦Ⅱ1 Za [J1d]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
割鬨斗瓦Ⅱ1 Za	HIJ	—	レ	HIJ	天平期
割鬨斗瓦Ⅱ20 Za	ASK	—	チ	ASK	飛鳥期
隅平瓦Ⅲ2 J2an	HIJ	HIJ	ツ	KWHまたはHIJ	天平期
螻羽瓦－軒平瓦AA5－平瓦Ⅱ0 Za < iii >	—	—	カ	KWH	〔川原寺式〕期
螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za [Bb]	—	KWH	—	—	〔川原寺式〕期
螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za [Bj]	—	KWH	ソ	KWH	〔川原寺式〕期
螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za [J1e]	—	HIJ	レ	HIJ	天平期
螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za < i >	—	—	リ	YMD	〔山田寺式〕期
螻羽瓦－平瓦Ⅱ0 Za < iv >	—	—	タ	—	天平期
切面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < vi >	—	—	カ	KWH	〔川原寺式〕期
切面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < x viii >	—	—	ル	KWH	〔川原寺式〕期
切面戸瓦－玉縁Ⅰ321 Za [J1b]	HIJ	HIJ	レ	HIJ	天平期
切面戸瓦－玉縁Ⅰ323 Za [J1b]	HIJ	HIJ	タ	—	天平期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za [Af] (+Cn)	—	ASK	ニ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za [Ak]	—	ASK	ワ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za [J2ad]	—	HIJ	ウ	—	天平期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < ii >	—	—	ナ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < vii >	—	—	ネ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < viii >	—	—	ネ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < x >	—	—	ネ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < x v >	—	—	ワ	ASK	飛鳥期
割面戸瓦－行基Ⅰ1 Za < x ix >	—	—	ソ	KWH	〔川原寺式〕期

A S K : 作業上における推定時期を飛鳥期に当てている
 Y M A : 作業上における推定時期を〔山田寺式〕期に当てている
 K W H : 作業上における推定時期を〔川原寺式〕期に当てている
 H I J : 作業上における推定時期を天平期に当てている

「山田寺式」期 ……………「布イ」、「布リ」
「川原寺式」期 ……………「布ル」、「布カ」、「布ソ」、「布ラ」
天平期……………「布ホ」、「布ト」、「布タ」、「布レ」、「布ツ」、「布ウ」

以上のような使用状況を、おのおのの時期に認めることが判明する。これを見ると、白鳳期とする「山田寺式」期と「川原寺式」期のあいだでさえ、使用道具が異なって使われると指摘できる。造瓦器具を除いて、叩き板や「布」は両時期に使い続けられる例をほとんど認めない。また飛鳥期における使用道具の変異の豊富さに比べて、そののちの時期の道具使用のあり方は、道具の種類が比較的にまとまりがよいことを知る。伽藍創建時の造瓦体制の規模が大きかったことを単に物語るのであろうか。または、長期間にわたって伽藍が建造され続けたことを物語るのであろうか。確実なことは言い切れない。

いずれにしても、時期ごとに造瓦に使われる道具が異なる事実が窺える。そして膨大な量の瓦埴類資料に適用する属性組成的認識の結果に、寺域内での出土状況を絡ませることで、ルロワ＝グーランの主張した「動作連鎖」としての瓦資料の把握を試み、翻って、おのおのの伽藍の造営のされ方を理解するに至るであろう。さらにおのおのの時期における造瓦道具の使い分けをも窺い、この面でのデータを新堂廃寺への瓦供給を担った造瓦体制を考察する基礎資料とすることになろう。それは今少しの将来の課題としたい。

第2節 新堂廃寺の伽藍の復元

ここで、前節で明らかにした瓦埴類資料の所属時期にかかわるデータにもとづいて、新堂廃寺の伽藍の造営の実体を時を追いつつ眺めていこう（第64図）。

なお、瓦埴類資料の所属時期について実年代を当てることは困難ではあるものの、飛鳥期としたものは7世紀前半、白鳳期は7世紀後半とするが、白鳳期のなかでも「山田寺式」期としたものは7世紀中葉から後葉、「川原寺式」期としたものを7世紀末葉と細分しておく。天平期としたものを8世紀代とするが、平瓦からみると、天平期を前半と後半に分けることは可能であることを指摘しておく。

新堂廃寺造営前のころの景観

新堂廃寺の造営前の景観は1998年度の大阪府教育委員会の調査でかなり明らかになっている（小浜ほか1999）。とりわけ、寺域の南側の調査によって旧地形が明らかになり、西側の羽曳野丘陵から東側に向かって派生する小丘陵が舌状に何本も張り出す起伏の多い地形であったとされている。新堂廃寺が造営された地も、そのような舌状に張り出す地形のひとつであったが、それらのなかでも比較的広い平坦面のある地が選ばれたようである。伽藍中心域の地形を見ると、北が高く、南に低い緩傾斜地をなし、すぐ西側には羽曳野丘陵が形成した谷地形を認め、東側にも自然地形の傾斜があり、大きな段差が存在する。そのままでは伽藍の中心域を東西に大きく広げることができないことが分かる。北側の状況は、今のところ確認できていないが、オガンジ池瓦窯の南側に存在した谷から流れる自然流路が東に向かっていたと推測できる。南側にも羽曳野丘陵が形成した谷地形に起

因する自然流路がわずかに蛇行しながら西から東に流れ、伽藍完成ののちも、南門から約30.0m南側にその自然流路が埋められることなく存在していた。南方向から伽藍に向かっては直線的に人が往来できない状況が確認されている。

このような立地条件のもとに新堂廃寺が造営されるのであるが、伽藍造営以前にすでに、開発の手が周辺に及んでいたことが新堂廃寺跡の下層遺構から推測できる。とりわけ伽藍中心域の下層には掘立柱建物を構成するであろう複数の方形の柱掘方が知られ、新堂廃寺造営前にすでに居住がされていたと思える（栗田2001）。

新堂廃寺の造営は、飛鳥期に始まる。まず着手されるのは寺域の範囲設定である。東西幅については、地形からくる制約によっておのずと範囲は限定されるようである。南限については、南門の下層から検出された幅2.0m、深さ0.7mで、伽藍の中心線に直交する東西方向に掘削された溝が、伽藍の区画のために設けられた（小浜ほか1999）。寺域の内部については、中心伽藍の造営範囲を設定するための整地がおこなわれる。整地と言っても、北に高く、南に低い自然の緩傾斜地を平坦にするための造成ではない。あくまでも中心伽藍の造営範囲を印すためのものでしかない。10.0cm前後の厚さで、緩傾斜地を覆うように黒褐色弱粘質土を置いている^(註2)。この整地の範囲については、西端辺を確認できただけであるが、この西端辺が、伽藍の中心線から西へ約19.2mに位置することから、寺域の東西幅はおそらく40.0m近くはあったと推測できる。なお、この西端辺は西面回廊基壇の東辺と想定した位置にほぼ一致する。整地土の南北の広がりについては明らかではないが、北側では金堂基壇土下にも確実に認められ、南側は2000年度に調査した中門の北辺を検出するために設けた第6調査区の内部すべてに広がって認められるものの、1998年度に調査した中門では確認できなかったことから、中門の北辺から北に向かって少なくとも金堂までは確実にこの整地土が広がっていたと推測できる。このことからこの整地土は創建時の新堂廃寺の回廊で囲まれた聖域内部の地表面として機能していたと推測する。

創建時の伽藍

1998年度の調査は、中門と中門東脇の南面回廊が飛鳥期に創建されたことを確認し、2000年度の調査が、創建当初から再建後と同じ位置に塔があったことを明らかにした。飛鳥期には南から北に向かって中門、塔、回廊が建造されていたことが確実にされた。金堂については、基壇自体が再建後のものしか残っていないので創建時の状況が不明であるが、伽藍造営直前の整地土が金堂基壇の下にも認められることから、位置を変えずに金堂が再建された可能性が強い^(註3)。講堂については、通常の伽藍配置から考えて、金堂のさらに北側にあったことは推測されるが、飛鳥期創建時から講堂も確実にあったかどうかは確認できていない。しかし、創建当初から西面回廊も存在したことからすると、講堂も建てられていた可能性が強い。飛鳥期創建時の新堂廃寺の伽藍配置は、従来から想定されてきたとおり、中門、塔、金堂、講堂と一直線上に並び、中門から東西に派生する回廊がこれらの伽藍の回りを取り囲んで講堂に取り付く「四天王寺式伽藍配置」であったことは確実であろう（第65図）。中門推定南辺から講堂推定北辺までの南北長が約95.0m、東西回廊の広がりから推しての東西幅は約54.0mであり、その範囲（約1町×半町）の総面積は約0.5haであったと推察する。

創建時の伽藍の建造順序であるが、飛鳥期創建時の金堂所用瓦が確定できていないので、金堂と

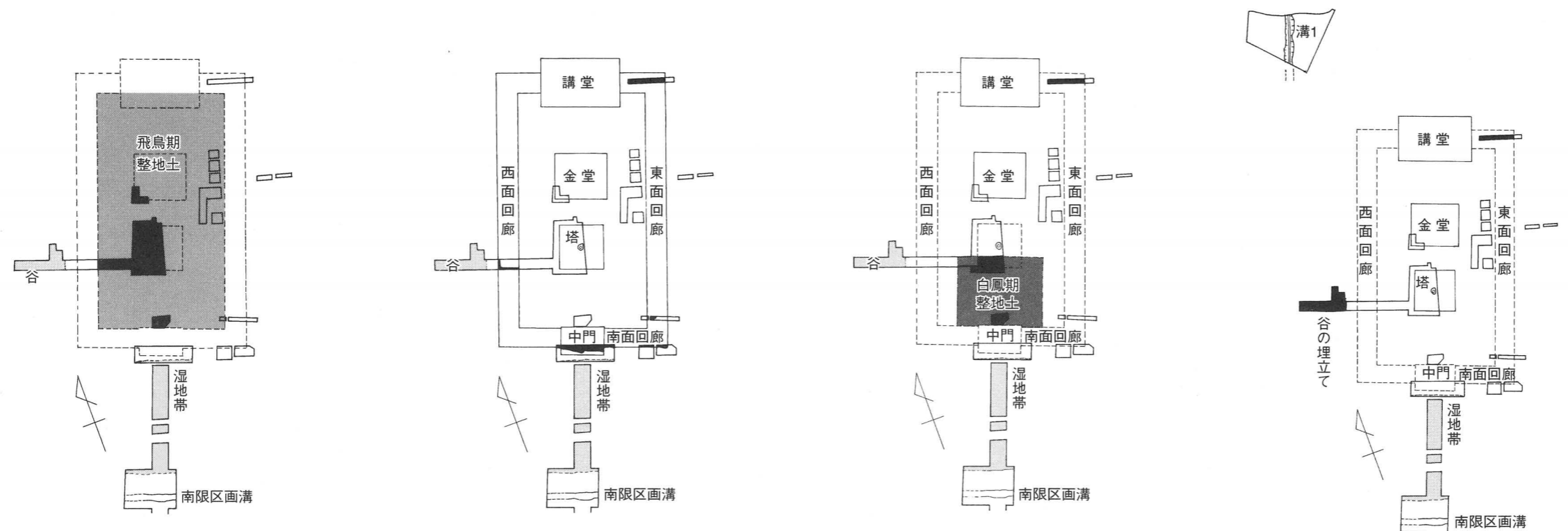
塔の建造順序は不明のままである。飛鳥期の伽藍の存在を確実に言える塔、中門、回廊のなかでは、塔が最初に建造された。創建時の塔所用瓦は、塔基壇南辺からの出土瓦をみる限りにおいては軒丸瓦A—玉縁I2Za群の軒丸瓦、玉縁I2Za群の丸瓦、平瓦II3Za群の平瓦の組み合わせであり、機能形態ごとにひとつの群だけからなる。瓦の葺き替えなども認めないほどのきわめて短期間で塔は倒壊し、再建されたことを示唆する。中門と回廊は一連の造作で建造されていることから、少なくとも、南面回廊については、中門と同じときに着手している可能性が強い。創建時の中門所用瓦には、飛鳥期の軒丸瓦として認定できるすべての「群」にあてるものを、量の多寡を問わなければ、認めると言える。塔のように短期間に倒壊しなかった事実で整合しているのであろう。それらのなかでは軒丸瓦D群と軒丸瓦E群とするものももっとも多く、次にまとめて認めるのは、軒丸瓦B群—行基I1Za [CgあるいはCh]群と、軒丸瓦C群—行基I1Za [CgあるいはCh]群とするものである。丸瓦と平瓦についても、量の多寡を問わなければ、様々な「群」とするものを認めると言えるが、まとめて認める丸瓦には、行基I1Za <ii>群、行基I1Za <x>群、行基I1Za [Cg]群、行基I1Za [Ch]群などとするものがある。これらの丸瓦のなかには、軒丸瓦D群、あるいは軒丸瓦B群および軒丸瓦C群の丸瓦部として造られたものと同じ「群」とするものを認めるので、造瓦時の群組成は、出土状況の示すそれと整合する。平瓦には、平瓦II20Za [Cg]群、平瓦II27Za [Cg]群、平瓦II20Za [Ch]群、平瓦II27Za [Ch]群、平瓦II20Za群などとするものを多く認める。創建時の塔所用瓦と同じ「群」である平瓦II3Za群とするものも中門から出土しているが、それは量的には少ない。

西面回廊については、西方建物周辺で出土した飛鳥期にあてる瓦群が、創建時の西面回廊所用瓦と推測できる。軒丸瓦D群と軒丸瓦E群のものとともに、丸瓦としては行基I1Za <iv>群、あるいは行基I1Za <xiv>群、行基I1Za <xv>群とするものを、平瓦としては、平瓦II0Za [Bs]群とするものを比較的まとめて認める。一方、東面回廊については、東方建物周辺で出土した飛鳥期にあてうる瓦群が、創建時の東面回廊所用瓦と推測できる。軒丸瓦には、やはり軒丸瓦D群とするものが多く、丸瓦には、行基I1Za [Am]群、行基I1Za <ii>群とするもののほかに、西面回廊でも認める行基I1Za <xiv>群、行基I1Za <xv>群とするものを比較的まとめて認める。平瓦も、西面回廊でと同じく、平瓦II0Za [Bs]群のものを比較的まとめて認める。

南面回廊所用瓦の「群」組成が不明であるので確実なことを未だ言い切れないものの、中門と西面・東面回廊のあいだでは所用瓦に違いのあることを指摘できる。正面に飾られる軒丸瓦は共通しているのではあるが、その後ろ側に置かれる丸瓦と平瓦には「群」レベルでの違いがある。その事実を若干の時間差と考えるか、あるいは建物ごとにそうした瓦の造り分けをしたのかは、未解決の問題である。

しかし、塔と中門のあいだでの所用瓦に認める大きな違いは、建造時期差を考慮することができるであろうから、初期伽藍造営のための整地がおこなわれた範囲内の建物が先に着手され、そののちそれらの回りを取り囲む中門や回廊が建造されたと思われる。

なお、創建時の伽藍の周辺は、中門の南側に広がる谷が完全に埋め立てられないで、湿地状態のままであり、人の往来は不可能であった(小浜ほか1999)。また、西面回廊の西辺から西へ約4.3mのところにも大きな谷があり、それも埋め立てられていなかった(浅野・藤沢・坪井1961)。

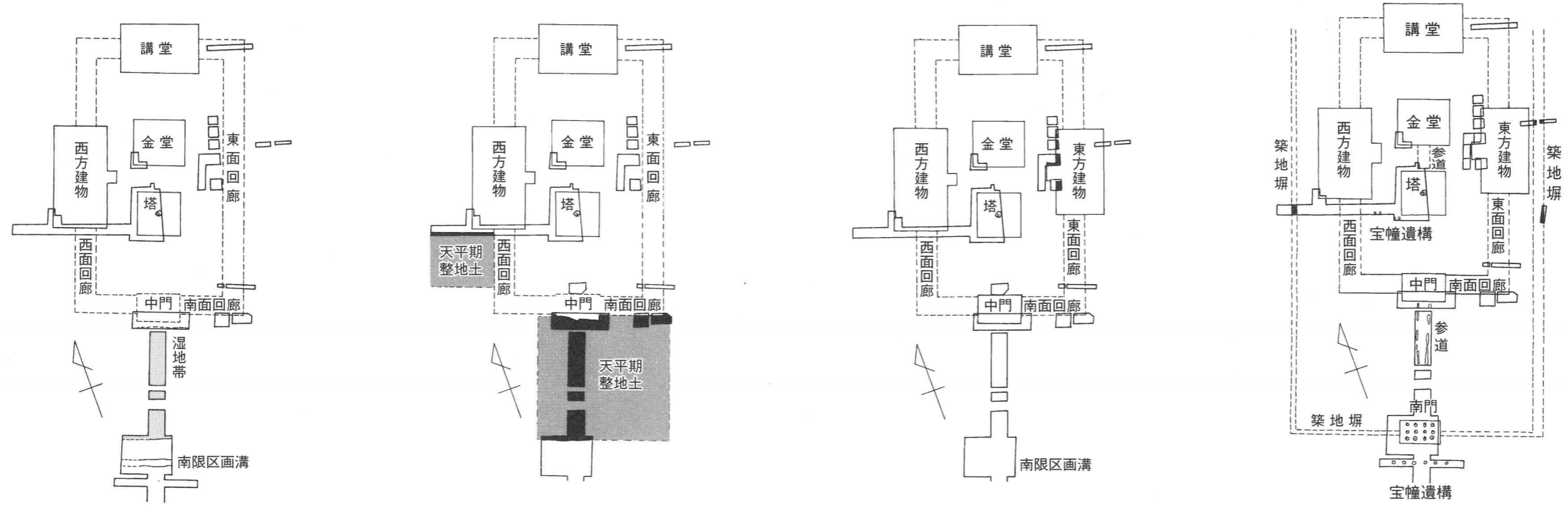


7世紀初頭

7世紀前半

7世紀中葉

7世紀後半



7世紀末葉

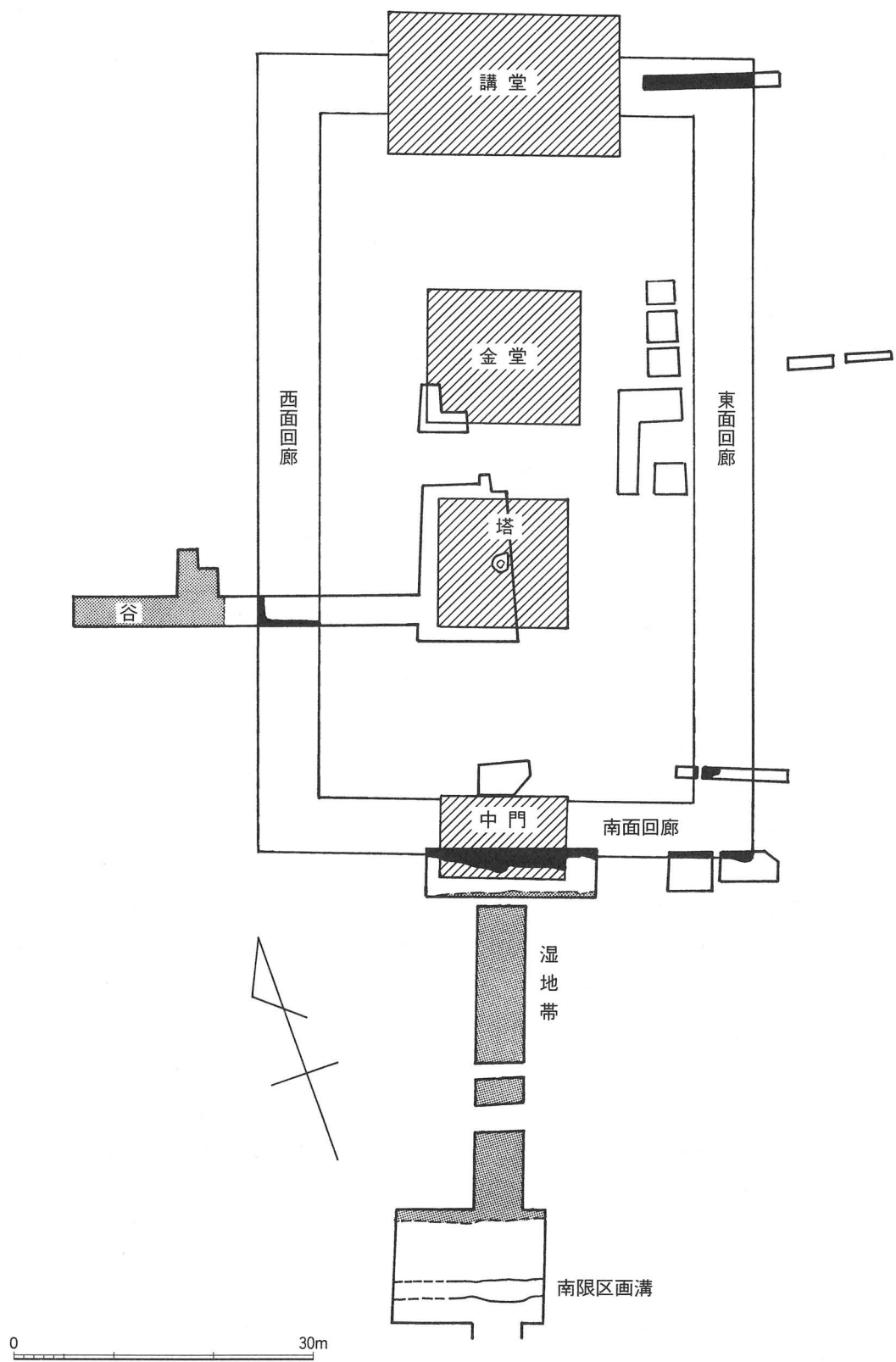
8世紀初頭

8世紀前半

8世紀後半



第64図 新堂廢寺伽藍建造變遷図



第65図 創建伽藍配置復元想定図

塔の再建

多くの伽藍のなかで、最初に再建されるのが塔である。創建時の塔に葺かれた瓦が機能形態ごとに単一の「群」で組成されていることから、短期間の内に倒壊したと推測したのであるが、その原因については明らかではない。いずれにしても塔基壇の南側約4分の1が崩れ、その部分を白鳳期に積み直している。しかし再建にあたっては、崩れた基壇部分だけを再生するのではなく、周辺地形も含めて整地し直している。つまり、塔の再建とともに、塔周辺も整地しているのである。崩れた基壇を修復するために積んだ、にぶい黄橙色弱粘質土(10YR6/4)は塔基壇内部から、基壇周辺にも積まれる。その範囲は、塔基壇の西辺から西へ約7.0mのところまで、南辺から南へ約17.0mのところ(中門の北辺近く)まで広がっている。この再建時整地土は飛鳥期の創建時整地土の直上に積み、基壇の南辺より南側では、創建時の塔所用瓦を大量に含んでいる。なお、塔基壇の南辺から南側に認めるにぶい黄橙色弱粘質土を最下層とする版築土層の広がり、東側へは把握できていないが、西側は、塔基壇の西辺から西へ約7.0mのところまで認める。

塔基壇の南西辺あるいは南辺で検出した玉石列の玉石の下あるいは玉石のあいだに置かれた瓦は、白鳳期でも「山田寺式」期にあてられるので、白鳳期でも「川原寺式」期の瓦が使われる以前に塔の建て替えに着手されたことが窺える。

塔の再建基壇の基底部だけが確認されたにすぎないが、再建工事に使用したと推測される杭の痕跡としてピットを、基壇の南辺で確認している。基壇内部から周辺へむけて整地をおこない、0.5mほどの嵩上げを地盤に施したのちに、基壇の全体形状を修復するべく、桝板で囲ったのであろう。杭は桝板を固定するための添え木であったと考えられる。

なお、第6調査区で確認した性格不明の掘立柱建物遺構は、ここに言う基壇内部から積み直した整地土であるにぶい黄橙色弱粘質土層の上面から、柱穴を切り込んで^(註4)いる。塔の再建のときに同じく新築された建物の遺構であるが、全体規模を把握していない。

寺域および伽藍の東西域への拡張

「四天王寺式伽藍配置」の伽藍配置で創建された新堂廃寺の寺域は、白鳳期に西側にあった谷を埋めることで大きく造成、拡大される。造成時期は白鳳期であることは確実であるが、谷を埋めた土から出土した瓦に創建時の塔所用瓦と中門・回廊所用瓦の両方が含まれるので、塔の倒壊が起因して塔の南側の整地がなされるにわずかに遅れることと、造成の時期をより限定できよう。

寺域西側の谷を埋めて、そこに西方建物の西辺部が重なるように建てられる。西方建物を創建するために、それまで伽藍を取り囲んでいた西面回廊の一部、すなわち西方建物と重複する部分が取り壊される。そして西方建物が白鳳期に建てられ、さらに天平期になって建て替えられたことは早くに知られている(浅野・坪井・藤沢1961)。しかしこの白鳳期に創建された西方建物の所用瓦は、「川原寺式」期にあてることができる瓦が圧倒的に多いことから、塔が再建されたのちに西方建物が建立されたと言える。

西面回廊は西方建物が建てられた部分については潰されるが、西方建物に取り付いて存続した。西面回廊所用瓦は、一部が、「山田寺式」期に葺き替えられているものの、大半が飛鳥期のままで、使用され続けた可能性がある。しかし、西方建物が創建されたときに西面回廊も「川原寺式」の瓦に葺き替えられたのかどうかということについては、今のところ確実なことは言えない。

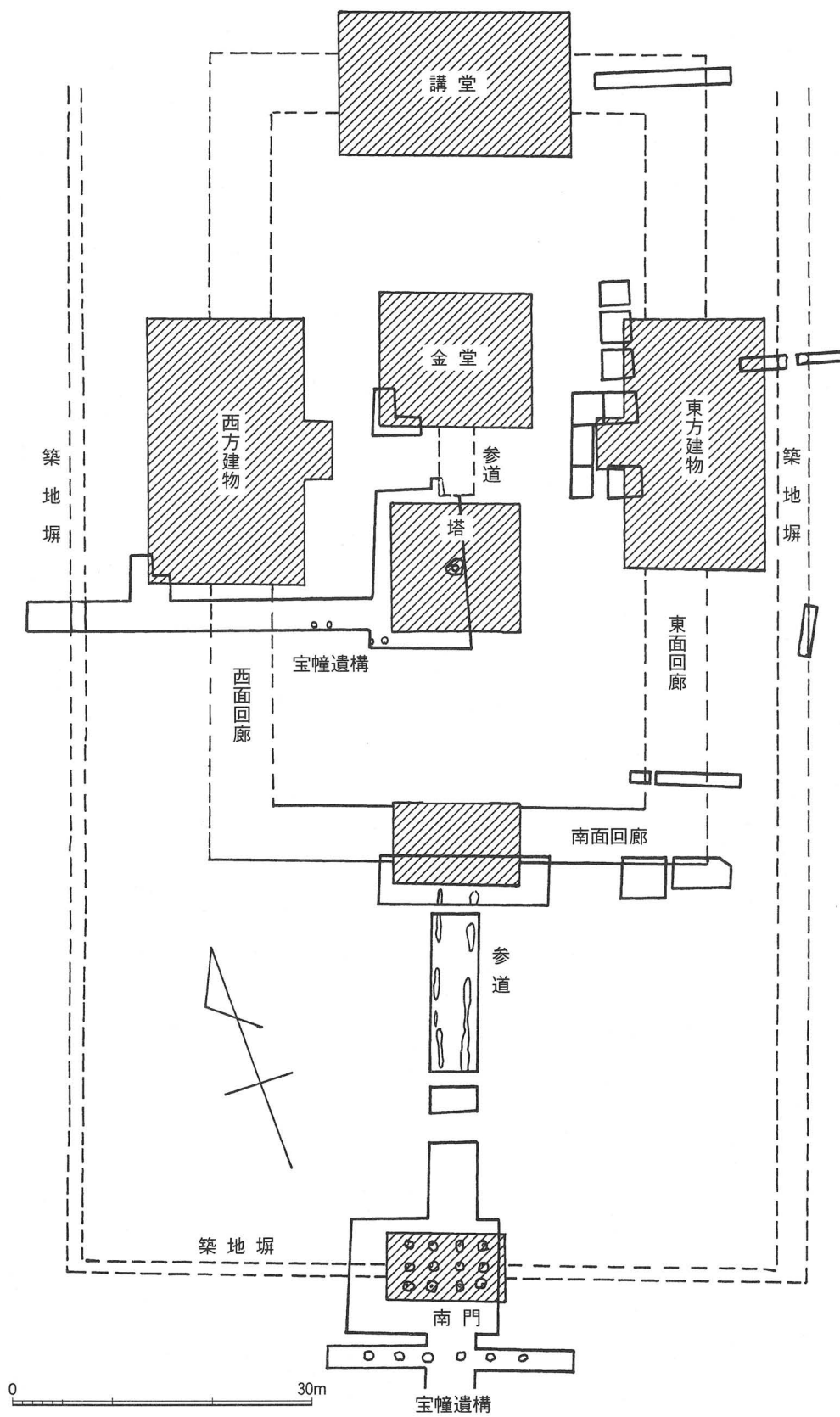
東面回廊は、この段階では、創建時の姿のままであり、潰されることなく、「山田寺式」期に一部の瓦が葺き替えられつつ存続していたようである。ただし、天平期の初めには、東方建物の建立によって、西面回廊と同じように、東方建物が重複する部分が潰される。東方建物の創建の時期は、西方建物のそれよりも若干遅れる。東方建物所用瓦は天平期の瓦で、それも縄目叩きが使用されるよりも前のものである。叩き目のすり消された平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群や、正格子叩きの平瓦Ⅱ0 Bm群、斜格子叩きの平瓦Ⅱ0 Cb群～平瓦Ⅱ0 Cd群とそれぞれする平瓦を認め、そして丸瓦は行基Ⅰ1 Za〈x x ii〉群とするものが圧倒的に多いことから推して、天平期になって建物が完成したと考えるべきであろう。その規模は、立地に制限されて西方建物よりも若干小さくなる。この東方建物に多用された瓦の色彩は白色から黄白色で、西方建物所用瓦に見られる赤色とは、東西で見事なコントラストを示したと思われる。

一方中門は、白鳳期になっても、瓦が葺き替えられることはあっても、創建時の建物がなお使われていた。この段階では、中門周辺の状況も創建時とほとんど変わらず、正面は依然と湿地状態のままであったと推測される。中門所用瓦は白鳳期に入ってから、「川原寺式」の瓦に葺き替えられたらしく、中門周辺から多量の「川原寺式」の瓦が出土している。ただし、同じ「川原寺式」の瓦とはいえ、平瓦を観察すると、西方建物所用瓦と中門葺き替え瓦とでは、平瓦の造瓦に使われる「布袋」に違いがあることから、ほぼ同じときであっても、建物ごとに瓦は造り分けられたと推測される。この創建時の中門は、東方建物が完成されるまで存続していたと思われる。

なお、西方建物を建てるために埋め立てた西側に存在した谷に代わって、羽曳野丘陵から流れる水の排水施設として、このころ、寺域の西側に新たに溝が掘削されている。

新堂廃寺の伽藍の完成

西方建物が塔と金堂の西側に追加配置されたのち、再度、寺域の南側で造成がおこなわれる。中門の建て替えに伴う造成で、中門・南門間にあった湿地を埋めるとともに、中門と回廊の南側も同じ土で整地している。この整地のときに、中門東脇の南面回廊がさらに東へ拡張された可能性も指摘されているが（小浜ほか 1999：10頁）、すでに見てきたように、回廊は創建時の規模のまま、一部を壊して存続していたのであろう。回廊規模を拡張したと小浜氏が考えたのは、回廊と中門を再建するときの整地土が、中門より南にあった湿地を埋め立てて南門までを整地した土と同じであるだけでなく、創建時の南面回廊の東端よりさらに東側へも広がっていたことに起因するからである。しかし、この整地の様相は、創建時の塔が再建されるときに状況と似ることを想起しなければならないであろう。すでに述べたように、創建時の塔は、基壇土の4分の1が崩れたために再建されたのであるが、再建の際、崩れた基壇部分だけを再度積み上げるのではなく、周辺域も含めて整地し直しているのである。つまり、地形的に低い南側周辺地を嵩上げしたのち、創建時と同じ規模で塔の基壇は再建されているのである。回廊の整地も同じ状況でなされたのではなかろうか。中門・南門間、さらに回廊前面から回廊東端、そしてさらに東側にかけて同じ質の土で、同じ堆積順をたどって整地されているのであり、中門が規模を大きく再建された可能性をあえて考えることはない。それと同じとすれば、回廊規模の拡張をあえて考える必要はないであろう。建物の規模を大きくすることを意図する整地ではなく、北が高く、南が低い地形をより水平な地形に変えようとする整地の意図を読むべきであろう。創建当初、地形そのものは斜面地のままにして建てられた伽藍を、再



第66図 最終の伽藍配置想定図

建するときに、より低い南側を埋め立てて、平らな地がまず求められたと考えるべきであろう。中門の再建、南門の創建ののちに整備された中門・南門間の参道の標高が、創建時の南面回廊の基壇土の基底部より高くなることから考えて、再建建物は創建時よりも高いレベルに立て直された可能性が高いと言えるからである。中門東脇の南面回廊は拡幅されることなく、再建ののちも同じ位置に、同じ規模で建てられていたのであろう。1959年の予備調査のトレンチ39で検出された、東側に落ちる段差の位置が、南面回廊の東端から直角に北に曲げ、延長した線上にくることと、その段差のある部分から白鳳期の「山田寺式」期にあてうる軒丸瓦が出土していることは(北野 1960)、飛鳥期以降にも東面回廊が存在していたことを裏付ける。さらに、西面回廊の西辺の外側で段差のある部分でも、回廊に近いところで量的には少ないものの、飛鳥期にあてうる平瓦Ⅱ3 Za群、平瓦Ⅱ20Za群、行基Ⅰ1 Za〈ii〉群、行基Ⅰ1 Za〈x iii〉群とするものに混じって、白鳳期でも「川原寺式」期にあてうる平瓦Ⅱ0 Bh群、行基Ⅰ1 Za〈vi〉群、行基Ⅰ1 Za〈x x i〉群とするものと、天平期にあてうる平瓦Ⅱ0 Za〈iv〉群とするものが出土していることから判断すると、天平期までその位置で回廊が存在したと整合する。つまり、中門から東西に派生した回廊は、創建期と同じ位置でそれぞれ北へ曲がり、延び、それぞれ西方建物、東方建物に取り付いたあと、さらに北に延びて、そして曲がって、講堂に取り付いていたと想定できる。

中門の再建、南門の創建のための整地は天平期に入ってから始まる。また、これとほぼ同じ時期か、あるいは若干遅れる時期に寺域の西側も築地塀建造のための整地がおこなわれる。西面回廊の西側にあった段差が埋められ、築地塀の西辺までが整地される。

中門の南側の整地土には大量の瓦とともに、8世紀初頭の土器も含まれることから、中門の再建と時をほぼ同じくして東方建物も完成したと推測される。再建中門所用瓦と、東方建物所用瓦が平瓦の「群」組成に違いが認められるものの、軒丸瓦、および丸瓦に同じ「群」のものを多く使用しているからである。再建中門所用瓦には、軒丸瓦L群、行基Ⅰ1 Za〈x x ii〉群、平瓦Ⅱ0 Bk群、平瓦Ⅱ0 Bn群とそれぞれする瓦が多用されている。

一方南門は、中門再建ののちに完成したようである。南門所用瓦は平瓦Ⅲ2Jad群などの一枚作りの縄目叩きの平瓦と、玉縁Ⅰ321 Za [J1b]などの瓶形の型木を使って造られた丸瓦が多用されたことから(梶原 2001)、中門の再建よりは時が若干遅れると推測できる。そして、南門が完成したのちに、東西の築地塀が建てられたと推測できる。このころには金堂・塔間の参道も整備され、新堂廃寺の伽藍造営は完結したと考えられる。

なお、西方建物も南門完成と前後する時期に南北規模だけを縮小して建て替えられている。再建された西方建物の瓦積基壇に、軒丸瓦L群や縄目叩きの施された瓦が含まれていたことからそれと分かる(浅野・坪井・藤沢 1961)。

天平期の初めのころには、新堂廃寺の伽藍は南から北に向かって、南門、中門、塔、金堂、講堂が一直線上に並び、塔と金堂の東西には東方建物、西方建物が配置され、中門から派生する回廊が東西の両建物に取り付いて、さらに北に延びて、講堂に取り付くように曲がったのであろう。そして少しののちに、南門から派生する築地塀が伽藍を取り囲んだと推測する。この伽藍配置は今までに、我が国では例を知らないことから「新堂廃寺式伽藍配置」と呼んでおく(第66図)。そしてこの完成した伽藍群には、宝幢遺構も配置されていたことが判明している。現時点では、南門の正面、および塔の正面とその西側面にだけ確認されている。このときの寺域は、東西築地塀のあいだの東

西幅が約80.0m、南門から講堂の想定北辺までの南北長は約150.0mで、およそ1.2haにまで広がったと推測される。

第3節 お亀石古墳の復元

今回の調査により、お亀石古墳は中世、実年代で14世紀後半から15世紀初頭にかけての時期に、墳丘周縁の改変がおこなわれたことが明らかとなった。その改変範囲は、墳丘北側から東側、南側にかけて「コ」の字形に及んでいる。また、第Ⅱ章第3節に記述したように、お亀石古墳に用いられた閉塞石と考えられる川原石が中世遺構面から出土する状況から見て、同時期に主体部の破壊（盗掘）がおこなわれた可能性が高い。

このような状況下ではあるが、本節では各調査区で得ることのできたお亀石古墳の墳丘および埋葬施設のデータから、古墳の墳丘プランと築造過程を考察することでまとめとしたい。

第1項 墳形・墳丘規模の復元（第67図）

今回の調査において、お亀石古墳の墳丘形態・墳丘規模を復元するうえでもっとも良好な資料を得ることができたのは、墳丘の北辺と東辺に設定した調査区である。北辺に位置する第1調査区では丘陵から墳丘を切り離す区画溝を、東辺に位置する第7・第8調査区では墳丘の裾部分を確認することができた。

まず、第7・第8調査区では、墳丘裾部の盛土とともに、墳丘の裾部を設定する溝が検出された。盛土と溝は南北方向に直線的に延びている。このことにより、お亀石古墳が方墳であることが確認された。

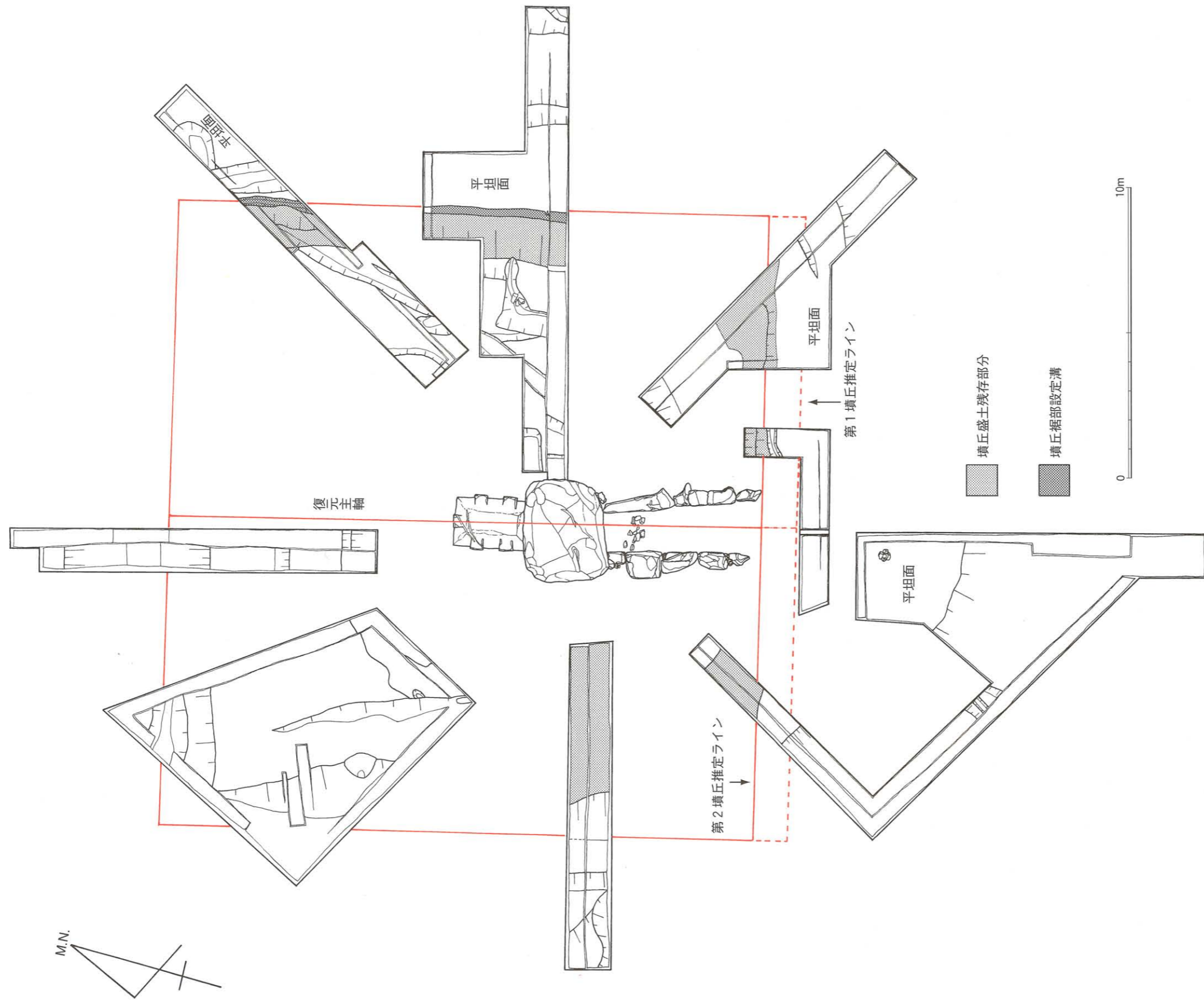
盛土は溝の埋土上にまで及ぶ部分と及ばない部分がある。今回の調査の結果によってお亀石古墳の墳丘上には葺石・敷石などの外部施設が存在しないことは確実であるため、墳丘は完全な土造りであったことになる。したがって墳丘築造後の盛土の流失を考慮に入れると、墳丘の平面規模に関しては、この溝が墳丘平面プランを復元するうえでの基礎資料となる。

また、現在確認しうる墳丘裾部（墳丘区画溝と残存する墳丘盛土の下端部）の高さを見ると、表14のようになる。この表から、お亀石古墳は石槨部基底面に墳丘裾部を一致させた古墳であることが想定できる。そのなかでも、第1調査区(註6)の溝状遺構2の底面がやや低いものの、全体的な傾向からすると墳丘裾部は北側が僅かに高く、南側が僅かに低かったようである。このような規格性も、墳丘復元のうえで大きな役割を担うと考える。

第7調査区の南壁・北壁、第8調査区の北西壁で断面確認した溝の東側肩部を直線で結ぶと、調査主軸に対して、N2°Eのラインを示すことになる。これは、お亀石古墳で石槨として使用されている家形石棺の主軸が、調査主軸に対してN4°Eであることに相関するものと思われる。このことから、お亀石古墳は石槨の主軸方向を基に築かれた方墳である可能性が高いと言える。

表14 お亀石古墳墳丘裾部標高一覧表（単位m）

測定地点	石槨部基底面	第1調査区区画溝底面	第2調査区溝底面	第3調査区盛土下端	第4調査区盛土下端	第6調査区盛土下端	第7調査区盛土下端	第8調査区盛土下端
標高	96.87	96.60	96.90	96.98	96.50	96.65	96.70	96.90



第67図 お亀石古墳墳丘プラン復元図

そこで、今回の墳丘復元においては、復元基点を石槨部蓋石北側の縄掛突起北端部中央に置き、その点から墳丘裾部設定溝のラインである調査主軸N 2° Eを復元主軸とした。

復元主軸からの墳丘裾部設定溝の東側肩部までの直交距離は、10.75mになる。溝を超える範囲での盛土は想定されないため、この長さを2倍にした距離21.5mが墳丘東西幅の最大値となる。

墳丘プラン復元作業の次段階として、裾部設定溝から第1調査区の墳丘区画溝底面南端に直交するコーナー部分を導き出し、そのコーナー部分を基点として一辺21.5mの正方形を垂直投影した。それが第67図の第1墳丘推定ラインである。

まず、この墳丘推定ライン内で、各調査区での墳丘盛土の残存部分がすべておさまっていることが確認できる。そのうえで注目できるのは、第3調査区の地山傾斜変換部である（第29図参照）。第3調査区では、残存する墳丘盛土西端から西側に地山は約20度の傾斜角で降下するが、調査基点から西に10.65mの地点で約10度の緩傾斜へと変化する。この傾斜変換部が墳丘推定ラインの西辺にはほぼ一致していることが看取できる。地山面は、この先も傾斜変換を繰り返しながら西側に降下していくために断定はできないものの、この地点が標高96.48mであることから、この傾斜変換部分に墳丘西側裾部が反映している可能性が高いと考える。

『概報』では、この一辺21.5mの正方形の投影する第1墳丘推定ラインまでしか考察をおこなわず、その復元では「～墳丘の築造基点（墳丘中心点）が復元主軸上で石槨（家形石棺）の中心部よりやや北に位置する～」ことを指摘した。しかしながら、この復元では「～現存する羨道部の南端の側石からさらに1m以上墳丘が前方に延びることになる。」（横山2002）と問題を提起している。

今回の報告では埋葬施設に関する検討（第Ⅱ章第3節第4項埋葬施設を参照）で、お亀石古墳は現在遺存する羨道部側壁南端部で築造当時も開口していたものと推定した。そこで、墳丘の南辺が開口部までと仮定し、第2墳丘推定ラインを設定すると、お亀石古墳はどのような規模になるだろうか。

まず、この推定ラインでもっとも問題の生じる部分は第6調査区の墳丘盛土である。この調査区では、確認されている墳丘盛土が推定ラインより約0.5m南方に広がることになる。逆に、第4調査区で確認された墳丘盛土の南端部とはこの推定ラインが一致している。この推定ラインから復元主軸の距離を測定すると、南北長は20.1mに相当する。この規模で墳丘の築造基点（墳丘中心点）を求めると、基点は石槨部内面奥壁（北壁）に位置することになる。

それでは、このように南北規模、東西規模において僅かではあるが長方形をなす方墳というものに妥当性はあるのであろうか。

松井忠春氏は、その論文（松井1979）で、7世紀の大形方墳は「墳丘の短辺と長辺との差の小さい長方形の平面を基本原則^(註7)」としていたものと考察をおこなっている。松井氏はこの論拠として赤坂天王山古墳、石舞台古墳、岩屋山古墳、用明陵古墳、推古陵古墳、谷首古墳、葉室塚古墳を対象とした方墳各辺の計測をおこなっており、この内石舞台古墳、葉室塚古墳を除く古墳の短辺と長辺の比が1：1.04～1.08であることを示している^(註8)。

お亀石古墳は、その東西辺が最大21.5mと考えられ、南北辺を20.1mと推定すると、その短辺と長辺の比は1：1.07であり、松井氏の示す数値内におさまることになる。

以上の考察から、この第2推定ラインが示す方形プランが現状では有力であろうと考える。この場合、墳丘東西幅に関しては、今回の復元では最大値（墳丘東側の墳丘裾部設定溝の東側肩部）を

求めているため、古墳築造時に墳丘設定が溝の中央部分でおこなわれたとすると、微少ではあるが東西規模が小さくなることを付記しておく。

このほかに、墳丘東側から南側にかけて、墳丘裾部外周に平坦面が確認されている。第Ⅱ章第3節第3項で述べた理由により、これは古墳築造時に形成されたと考えられる。この平坦面は、第3調査区・第4調査区では確認できていないため、墳丘の南辺から東辺にかけて「逆L」字状に廻っていたものと考えられるが、東辺の部分に関しては、南から北に向かいその幅を広げていたものと見なされる^(註9)。

墳丘上部の段築等の構造については、今回の調査では確認するに至らなかった。したがって、今回の墳形の復元は現段階で確認しうる墳丘の基底面に対するものとなる。しかしながら、第3調査区の墳丘盛土の残存状況（第30図参照）を見ると、この範囲での段築は想定しがたい。可能性としては、墓壙から主体部天井石を覆う範囲での上段部の存在が残るであろうが、現在お亀石古墳の墳丘盛土は天井石付近までしか残存しておらず、この先も確認しうる術を持ちえない。

本項での復元の結論としては、お亀石古墳は東西幅を最大21.5mとし、南北幅を20.1mとする方墳であり、墳丘北辺には底幅約2mの墳丘区画溝を有し、墳丘南辺から東辺にかけて平坦面を形成しているということになる。しかし前述したように、第6調査区での盛土の範囲の問題などは残されたままであり、今後ともさらなる検討が必要であろう。

第2項 古墳築造工程の復元（第68図）

①選地

古墳は、新堂廃寺跡の北西方向0.3kmの丘陵上に築かれる。古墳の立地する尾根は、羽曳野丘陵の支脈が南東方向に突出している部分であるが、この尾根の東方にはさらに別の尾根が南北方向に走っており、古墳から東方平地部の展望は良好とは言えない。また尾根の南方には谷筋が通っており、このような立地は風水思想を反映しているものと考えられる。

古墳は、このような尾根の頂部ではなく中腹に位置しており、いわゆる「山寄せの古墳」の立地状況を示している。またその地点は、尾根筋が一旦縮約し、さらに南方に向かって隆起する部分であり、この隆起部分を古墳の墳丘として利用している。このことにより、古墳の後方（北側）規模に関しては地形的な制約が存在したことが分かる。

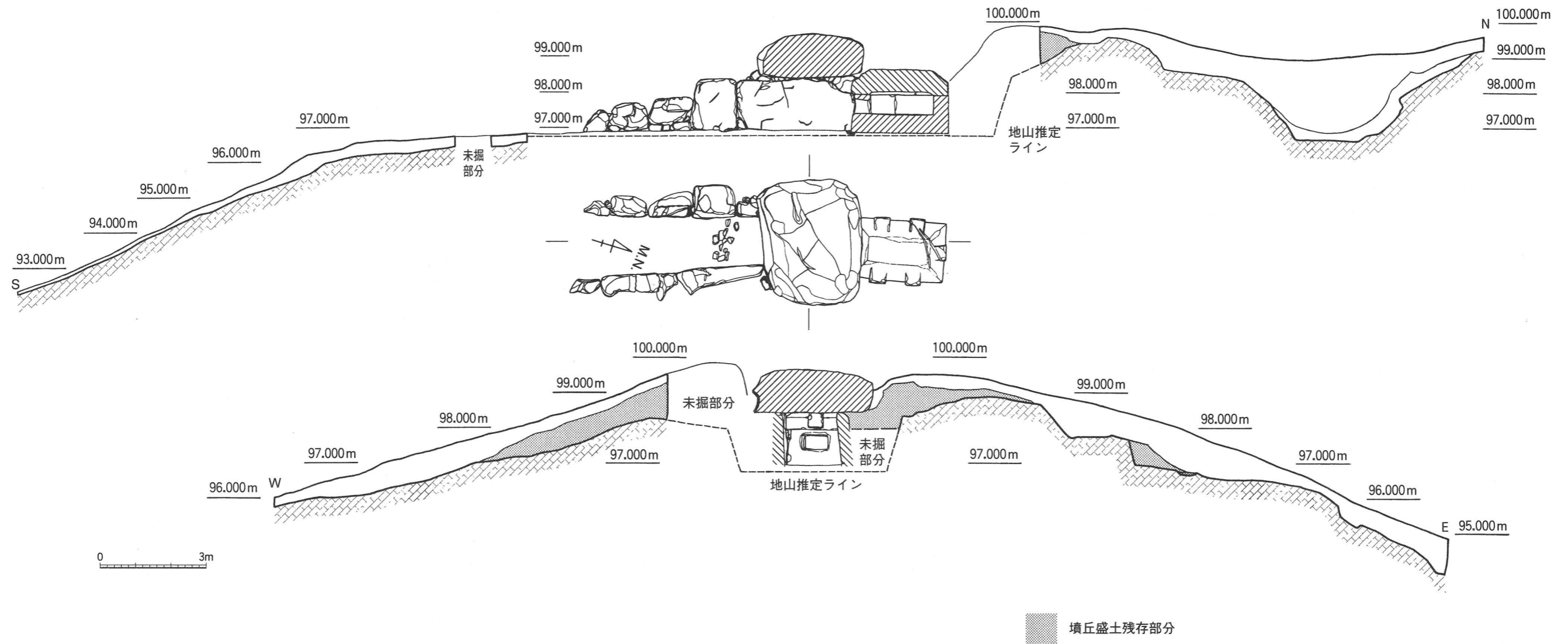
②整地

各調査区において墳丘盛土が確認された部分では、地山と盛土とのあいだに旧表土などの間層は認められないため、墳丘の築造予定地内に整地をおこなったことが判明している。

③墓壙の掘削

整地後、まず墓壙の掘削がおこなわれたものと考えられる。その根拠は、本章第1項で詳細を記述したところであるが、石槨部の底面が墳丘裾部の高さと一致することに求められる。墓壙床面高と墳丘裾部高が近似値を示していることから、基準となる水準点が存在したことは明らかであり、まず墓壙の掘削による墳丘基底面の確定がおこなわれたものと考えられる。

また、墓壙の設定された位置に関しては、尾根の稜線上を中心とはしておらず、やや西に偏した位置に掘削をおこなっている。尾根の空間的には稜線上に墳丘中心部を設定しても十分に同規模の墳丘が築造できるものと考えられるため、ほかにその目的を求めなくてはならない。



第68図 お亀石古墳調査主軸断面図

そこで注目されるのが、墳丘の東から南に作り出されている平坦面の存在である。この平坦面は、第7調査区では東西幅約3.5m、第8調査区で幅4m以上の規模で形成されている。この平坦面以東は急勾配で地山が降下していることから、平坦面の東限には当初より制約があったことが窺われる。このように考えると、お亀石古墳の墳丘の築造に際しては、古墳の設計段階から墳丘とともに墳丘裾周りの平坦面の形成が重要な規定として存在したのではなからうか。この規定の存在のため、墳丘自体の中心軸を尾根稜線より西に設定したものと^(註10)考えたい。

④墳丘区画溝の掘削・墳丘裾部の掘削、設定

墓壙床面を墳丘基底面とする墳丘周辺の掘削がおこなわれる。墳丘北辺には尾根から墳丘を切り離す区画溝が、また墳丘北西部の墳丘西辺に当たる部分には地山の削り出しがおこなわれる。また、墳丘東辺には地山をカットした平坦面が形成され、墳丘裾部を示す溝が設定される。この溝は、同様に平坦面が形成される墳丘南辺では確認されていない。これは後世の攪乱によるものとも考えられるが、第4調査区に関しては、墳丘の西辺南半部には平坦面の形成はおこなわれていないことが第3調査区の調査から明らかであることから、平坦面を形成しない部分には当初よりこの溝は形成されなかったものと想定できる。

ここまでの過程において、墓壙の掘削、墳丘区画溝、墳丘裾周りの掘削による大量の排出土が想定される。古墳の立地する尾根上にはこれら大量の土を保管する空間が十分には存在しないため、この段階で墳丘盛土も同時並行でおこなわれたものと考えられる。盛土は地山の低所、墳丘の西側から南側にかけておこなわれるが、この段階での盛土は第3調査区で確認された盛土の安定面、標高98.3m地点までおこなわれたものと推定する。

⑤埋葬施設の構築

この段階は第4段階との明確な先後関係はなく、ほぼ同時期に進められた工程であろう。

埋葬施設の構築に関しては、第Ⅱ章第3節第4項でその順序に関して考察をおこなったが、この段階ではそのなかでの第3段階、羨道部側壁の構築までがおこなわれる。

ここまでの過程で墳丘の裾部の盛土も完成し、古墳はその設計図とおりの方形プランを示すこととなる。

⑥石槨部上石（家形石棺蓋）・天井石の設置、瓦積みの護壁の構築

羨道部前方の構造は不明であるが、この段階で埋葬施設の完成となる。ここで問題となるのは被葬者の石槨部への埋葬時期である。

被葬者が棺に入れられて埋葬施設の開口部から運び込まれ、石槨の横口から搬入されたとなると、被葬者の埋葬は墳丘の完成後でも可能なことになる。しかしながら、お亀石古墳の石槨部に関しては、従来より横口部からの棺の搬入に否定的な研究者が多い（北垣 1985・山本 1988）。その主たる根拠はその横口部の規模の小ささに求められている。お亀石古墳の横口は、石槨部外面から内面に向かって「ハ」の字状に狭まっており、もっとも規模の小さくなる内面での計測値は高さ0.39m、横幅0.67mである。確かに成人の体幅を考えると被葬者を棺に入れての横口からの搬入には無理があるように思われる。

一方被葬者を石槨部の上方（家形石棺の蓋が設置されていない状態）から埋葬したと考えると、被葬者の埋葬はこの第6段階の前でなくてはならない。

現在我々はこの問題を解決する資料を持ちえていない。^(註11)したがってここでおこなう考察も推測の

域を出ないものであるが、筆者は第5段階終了後に石槨上部より被葬者が埋葬されたものとする。この論拠となるのは、横口からの棺の搬入が困難と考えられる以外には、以下の3点がある。

1. 墓壙内への石槨部（家形石棺）の設置の際、棺蓋は設置されておらず、棺身を設置したのちに羨道部側壁を構築したと考えられること。換言すると、この段階では石槨部の上部は空いていたと考えられること。
2. 第3調査区において、盛土を平坦に安定させている層が確認されているが、その標高は天井石の下面より下に位置する。また安定層の上面には花崗岩の小礫とともに炭化物の広がりが見られる。同様に、第7調査区の墓壙内埋土においても、天井石の下、盛土安定面とほぼ同一の高さにおいて炭化物の広がりが見られる。これらの状況から、本項で提示している第5段階と第6段階のあいだに一定の時間的な経過が見られること。
3. 石槨部横口に用いられている石栓は、その重量と空間的な制限から、天井石設置後では人力による閉塞が困難と考えられること。

以上の3点は、いずれも根拠とするには推測の部分が多く、今後とも議論の対象となるであろうが、この種の横口式石槨墳の機能を考察するうえでも重要な部分と考えられるため、ひとつの「推論」として提示しておきたい。

⑦墳丘上部の構築・川原石による羨道部の閉塞

現在お亀石古墳には、高さにおいて天井石付近までしか墳丘盛土は残存していない。したがって墳丘の上部構造の復元は不可能と言わざるをえない。

また、川原石による羨道部の閉塞も、どの位置でおこなわれたかは不明である。そのなかでも敢えて候補地点を挙げるならば、羨道部床面の溝状施設、または羨道部側壁第2石の前面で閉塞されたのではないかと考える。

以上、今回の調査で得ることのできた資料を用いてお亀石古墳の築造過程に関する考察をおこなった。推論に推論を重ねた部分もあり、検討も十分におこなえたとは言えないが、本稿で残された問題は今後の課題としてさらなる研究・検討を期待している。

第Ⅳ章の【註】

- 1) この軒丸瓦については、「川原寺式」という瓦当文様の系統から藤澤氏によって白鳳期の産とされた。しかし井西氏によって、造瓦技術が「平城宮式」の複弁蓮華文軒丸瓦と類似することから、この軒丸瓦を天平期に下げるべきであるとの見解が示された（井西 1997：67頁）。
- 2) すでに第Ⅱ章の註2でも述べたように、この層は地形を覆うように置いたとするが、整地土と認定する黒褐色弱粘質土はきわめて硬く締まり、なおかつその直上に薄い炭層を認める範囲があったことからすると、古墳などでも築造範囲を決めるためになされるのと同じように、地面を焼くことで造営範囲を決めた可能性が高いと考える。もしそうであれば、「整地土」と呼ぶのは用語として適切でないかもしれない。便宜的にこの黒褐色弱粘質土を整地土と記述しておく。
- 3) 金堂については、2000年度の調査もその西南隅を発掘しているが、1960年に測量された金堂遺構の測量図を国土座標に載せることを目的にしたため、1960年の調査トレンチを再掘削し、基壇最下段（といってもそれより上段は削平されて残されていないが）に据え置かれた玉石列を再確認したにすぎない。ただし、飛鳥期の整地土とした黒褐色粘質土を識別し、断面観察から1960年の調査では認識されていなかった、新しい知見をつけ加えた。玉石列の石のあいだや、石の直下に瓦が置かれていることも再確認したが、遺構そのものと

見なしてそのまま埋め戻してある。発掘調査のときに見たことの記憶に限られるが、天平期にあてうる縄目叩きの瓦はない。格子叩きの瓦で、白鳳期でも「川原寺式」期とすべきものであった。そののちの分析の進展に伴って、格子目の種類の識別は重要であるとの確信に至っているが、遺憾ながら、発掘調査のときには、格子目の特定を果たしていない。

- 4) 建物の性格を把握できなかったのが、本報告の記述の対象外とするが、調査結果の詳細はすでに公けにしている（栗田 2001：24～25頁）、それを参照されたい。
- 5) 東方建物は西方建物と同じ消長をたどると考えていた（栗田 2000：27頁）。西方建物とは違って建て替えは認められなかった東方建物は、建物基壇の西辺に沿って検出された雨落溝から、7世紀後半～8世紀初頭とする土師器と須恵器が出土したこと、および平瓦に正格子叩きの施されたものがあるものの、縄目叩きの施されたものが認められなかったことの2点から、白鳳期に建てられ、天平期まで続いたと結論づけた。しかし、出土遺物の検討の結果、その見解に修正を加えることが必要になった。瓦の整理・検討が進み、瓦埴類資料の確実な所属時期を把握したので、この雨落溝から出土した、正格子叩きが施された平瓦は天平期に年代付けできる平瓦Ⅱ0 Bm群と認定すべきことが分かった。ここで訂正しておく。
- 6) このように石槨部基底面と墳丘盛土基盤面が一致することが横口式石槨墳の特徴であることは、一瀬和夫氏によって指摘されている（一瀬 1988）。
- 7) 松井氏は同箇所が付された註に、「また墳丘は格段の東西辺を長辺、南北辺を短辺とするを原則としたようである。」と記述している（松井 1979：82頁）。
- 8) 石舞台古墳に関しては、墳丘がほぼ正方形であるのに対し空陸が長方形をなしていることから、墳丘を短辺49.80m、長辺53.0mに復元している。この場合の短辺と長辺の比は1：1.06である（松井 1979：82～83頁）
- 9) このような平坦面に関して、テラスまたは基壇という用語が用いられることがある。都出比呂志氏は、古墳時代終末期の古墳が丘陵の斜面部に位置することが多いことを指摘したうえで、それらの古墳がテラス状の基壇を作り出している場合には、丘陵の低い側と側面には存在するが高い側には作らないのがふつうであるから段築とは区別すべきと述べている。さらに同氏は、このテラスが横穴式石室原理の儀礼の定着にともなって、葬送儀礼の場が入り口付近の前庭部とその周辺に移ったために、この時期に新たに生まれた儀礼用施設と考えている（都出 1992）。お亀石古墳においては、さらに丘陵下方で墳丘施設が存在する可能性も完全に否定しきれないため、現段階では「平坦面」という名称を与えて認識しておく。
- 10) このような視点のほかに、墓壙の形成が尾根の稜線上に位置しない理由として、埋葬施設の構築の際に、天井石を墓壙の東（地山の高所）から設置するためではないかという指摘を北野耕平氏から受けている。
- 11) 同様の横口を有する石槨墳で、内部から横口より規模の大きい棺等が検出されることがあれば解明の手がかりを得られると考えられるが、現在までそのような報告例はなされていない。

【引用文献】

- 浅野清・坪井清足・藤沢一夫（1961）『河内新堂・烏含寺跡の調査』（大阪府文化財調査報告 第12輯），大阪。
- 網伸 也（1997）「四天王寺出土瓦の編年的考察」，大脇潔ほか（編）『堅田直先生古希記念論文集』所収，京都，535-551頁。
- 栗田 薫（1996）「甲田南遺跡の弥生時代集落の歴史的意義」，栗田薫ほか（編）『平成7年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告27）所収，富田林（大阪），42-49頁。
- 栗田 薫（2000）「Ⅱ 新堂廃寺」，栗田薫（編）『平成11年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告31）所収，富田林（大阪），11-28頁。
- 栗田 薫（2001）『平成12年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告32），富田林（大阪）。
- 栗田 薫（2002）「お亀石古墳の築造年代—新堂廃寺出土瓦との比較をとおして—」，森郁夫ほか（編）『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』所収，奈良，16-32頁。
- 栗田薫・田中正利（1997）『平成8年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告28），富田林（大阪）。
- 石田茂作（1936）『飛鳥時代寺院址の研究』，東京。
- 石田茂作（1948）「塔の中心礎石の研究」，『伽藍論攷（仏教考古学の研究第一）』所収，丹波市町（奈良・天理），192-235頁。
- 一瀬和夫（1988）「終末期古墳の墳丘」，網干善教先生華甲記念会（編）『網干善教先生華甲記念考古學論集』所収，吹田（大阪），613-664頁。
- 井藤 徹（1966）『鍋塚古墳発掘調査概要』（大阪府文化財調査概要1966），大阪。
- 井西貴子（1996）『新堂廃寺発掘調査概要』（大阪府教育委員会刊行），大阪。
- 井西貴子（1997）『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』（大阪府教育委員会刊行），大阪。
- 井西貴子ほか（2001）『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1），大阪。
- 井西貴子（2001）「新堂廃寺造瓦集団の系譜と動向～軒丸瓦からのアプローチ～」，井西貴子ほか『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1）所収，大阪，157-168頁。
- 猪熊兼勝（1976）「飛鳥時代墓室の系譜」，奈良国立文化財研究所（編）『研究紀要Ⅲ』（奈良国立文化財研究所学報第28冊）所収，奈良，39-55頁。
- 猪熊兼勝・大脇潔ほか（1980）『日本古代の鴟尾』，奈良国立文化財研究所飛鳥資料館，奈良。
- 岩瀬透・栗田薫（1994）「喜志集落における弥生時代中期墓域の形成について—喜志遺跡・喜志西遺跡の方形周溝墓を中心として—」，岩瀬透（編）『喜志西遺跡発掘調査概報・Ⅲ』（大阪府教育委員会刊行）所収，大阪，37-63頁。
- 岩戸晶子（2001）「道具瓦から見る新堂廃寺～鴟尾と鬼瓦を中心に～」，井西貴子ほか『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1）所収，大阪，197-202頁。
- 上田 睦（1998）「河内の斑鳩寺・四天王寺系軒丸瓦」，奈良国立文化財研究所（編）『斑鳩寺・四天王寺の創建瓦と高句麗系軒丸瓦』所収，奈良国立文化財研究所，奈良，220-223頁。
- 上野勝巳（1978）『太子町古墳墓—磯長谷古墳群—』（太子町教育委員会刊行），太子（大阪）。
- 梅原末治（1913）「南河内の三小群集墳」，『歴史地理』第22巻，第5号掲載，50-56頁。
- 梅原末治（1914）「近時調査せる河内の古墳（上）（河内調査報告8）」，『考古学雑誌』第5巻，第3号掲載，61-67頁。
- 大脇 潔（1991）「研究ノート 丸瓦の製作技術」，奈良国立文化財研究所（編）『研究論集Ⅸ』（奈良文化財研究所学報第49冊）所収，奈良，1-56頁。
- 梶原義実（2001）「奈良時代における新堂廃寺の造瓦組織～丸瓦・平瓦の分析より～」，井西貴子ほか『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1）所収，大阪，187-196頁。
- 喜田貞吉（1912）「南河内の珍しい石棺」，『歴史地理』第19巻，第3号掲載，32-38頁。
- 北垣聰一郎（1985）「いわゆる終末期石槨古墳の構造的変遷について—大和・河内を中心として—」，末永先生米

- 寿記念会（編）『末永先生米寿記念献呈論文集 乾』所収，奈良，845-874頁。
- 北野耕平（1951）「錦織縄文遺跡について」、『古代学研究』，第5号掲載，34-35頁。
- 北野耕平（1964）「第三章 富田林真名井古墳」，藤直幹・井上馨・北野耕平『河内における古墳の調査』（大阪大学文学部国史研究室研究報告 第一冊）所収，京都，51-83頁。
- 北野耕平（1985）「第五章 古墳時代の富田林」，富田林市史編集委員会（編）『富田林市史』第1巻所収，富田林（大阪），195-470頁。
- 小浜 成（1995）『柿ヶ坪・尾平・寛弘寺遺跡発掘調査概要 一般国道309号富田林バイパス建設にともなう発掘調査』（大阪府教育委員会刊行），大阪。
- 小浜 成ほか（1999）『新堂廃寺発掘調査概要Ⅲ』（大阪府教育委員会刊行），大阪。
- 小林義孝（1983）「歴史的環境—喜志遺跡遺構分布（弥生時代）」，小林義孝ほか『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（大阪府教育委員会刊行）所収，大阪，2-9頁。
- 小林義孝（1984）「錦織細井廃寺発掘調査概要」，小林義孝ほか『大阪府文化財調査概要 1984年度』（大阪府教育委員会刊行）所収，大阪。
- 小林義孝（1994）「甲田南遺跡の弥生時代—中間的な総括のために—」，小林義孝（編）『甲田南遺跡発掘調査概要』（大阪府教育委員会刊行）所収，大阪9-38頁。
- 小林義孝・栗田薫・中辻亘（1996）「渡辺忠教氏採集の考古資料の意義（2）」，『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第2号所収，太子町（大阪），29-46頁。
- 近藤喬一（1982）「瓦の範と瓦当」，坪井清足ほか（編）『考古学論考』（小林行雄博士古稀記念論文集）所収，東京，615-642頁。
- 佐原 真（1972）「平瓦桶巻き作り」，『考古学雑誌』第58巻，第2号掲載，30-70頁。
- 下大迫幹洋（2001）「Ⅱ 平野2号墳第2次調査」，香芝市二上山博物館（編）『香芝市埋蔵文化財発掘調査概要 14—平成12年度—』所収，香芝（奈良），2-14頁。
- 白石太一郎ほか（1998）「シンポジウム河内飛鳥と終末期古墳」，羽曳野市教育委員会（編）『河内飛鳥と終末期古墳 横口式石槨の謎』所収，東京，171-176頁。
- 鋤柄俊夫（1989）「第1章 大阪府南部の瓦質土器生産（1）」，（財）大阪文化財センター（編）『大阪文化財論集—（財）大阪文化財センター設立15周年記念論集—』所収，大阪，289-302頁。
- 高橋健自（1913）「河内に於ける一種の古墳」，『考古学雑誌』第4巻，第4号掲載，16-32頁。
- 谷井濟一ほか（1934）『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯』（大阪府刊行），大阪。
- 都出比呂志（1992）「墳丘の型式」，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎（編）『古墳時代の研究7』所収，東京，15-73頁。
- 坪井清足（1961）「墓制の変貌」，浅野清・小林行雄（編）『世界考古学大系第4巻 日本Ⅳ歴史時代』所収，東京，89-99頁。
- 中辻亘・栗田薫（1994）『錦織南遺跡Ⅱ』（錦織南遺跡調査会刊行），富田林（大阪）。
- 中辻亘・栗田薫（1999）『平成10年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告30），富田林（大阪）。
- 中辻亘・忍薫（1982）『中野遺跡Ⅲ』（富田林市埋蔵文化財調査報告7），富田林（大阪）。
- 中辻亘・田川友美・栗田薫（1993）『錦織南遺跡』（錦織南遺跡調査会刊行），富田林（大阪）。
- 中村 浩（1981）『龍泉寺—坊院跡および瓦窯跡群の発掘調査報告書—』（大谷女子大学資料館報告書 第5冊），富田林（大阪）。
- 中村 浩（1982）「第五章 龍泉寺出土瓦の編年的考察」，『龍泉寺Ⅱ—坊院跡および修法跡の発掘調査報告書—』（大谷女子大学資料館報告書 第7冊），所収，富田林（大阪），36-50頁。
- 西秋良宏（1998）「序章 解説」，大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保（編訳）『石器研究入門』（原著者M.-L. Inizan, H. Roche, J.Tixer）所収，東京，13-14頁。
- 西口陽一（1995）『大阪府富田林高等学校改築工事に伴う谷川遺跡発掘調査概要・Ⅰ—富田林市谷川町所在—』（大阪府教育委員会刊行），大阪。

- 花谷 浩 (1997) 「飛鳥寺同範瓦二題」, 奈良国立文化財研究所 (編) 『奈良国立文化財研究所年報1997-I』所収, 奈良, 12-13頁。
- 花谷 浩 (1998) 「斑鳩寺の創建瓦」, 奈良国立文化財研究所 (編) 『斑鳩寺・四天王寺の創建瓦と高句麗系軒丸瓦』所収, 奈良, 1-11頁。
- 花谷 浩 (2002) 「第V章 遺物 2 瓦 埴 類 D 平瓦」, 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 (編) 『大和山田寺跡』(奈良文化財研究所学報第63冊) 所収, 奈良, 249-277頁。
- 林部 均 (1998) 「大和・河内における横口式石槨の成立と展開」, 網干善教先生古稀記念論文集刊行会 (編) 『網干善教先生古稀記念 考古学論集』所収, 吹田 (大阪), 927-954頁。
- 広瀬和雄 (1995) 「横口式石棺の編年と系譜」, 『考古学雑誌』第80巻, 第43号掲載, 34-74頁。
- 広瀬雅信 (2001) 「新堂廃寺の重弧紋軒平瓦」, 井西貴子ほか『新堂廃寺』(大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1) 所収, 大阪, 177-186頁。
- 藤直幹・北野耕平 (1961) 『河内新堂廃寺 (第一期調査概要報告書)』(大阪大学文学部国史研究室・大阪府教育委員会刊行), 大阪。
- 藤澤一夫 (1941) 『仏教考古学論叢』(『考古学評論』第三輯), 大阪。
- 藤沢一夫 (1961a) 「遺物」, 浅野清・坪井清足・藤沢一夫『河内新堂・烏舎寺跡の調査』(大阪府文化財調査報告第12輯) 所収, 大阪, 13-28頁。
- 藤沢一夫 (1961b) 「新堂廃寺とその性格」, 浅野清・坪井清足・藤沢一夫『河内新堂・烏舎寺跡の調査』(大阪府文化財調査報告第12輯) 所収, 大阪, 29-36頁。
- 堀田啓一 (1965) 「西日本における横口式石棺の古墳について」, 『先史学研究』第5号掲載, 京都, 16-22頁。
- 堀 大輔 (2000) 「新堂廃寺の山田寺式軒瓦」, 古代瓦研究会 (編) 『第4回シンポジウム 飛鳥時代の瓦づくり IV-山田寺式軒瓦の成立と展開(1)-』所収, 106-110頁。
- 堀 大輔 (2001) 「山田寺式軒丸瓦における外縁の挽き型施紋について」, 井西貴子ほか『新堂廃寺』(大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1) 所収, 大阪, 173-172頁。
- 松井忠春 (1979) 「七世紀の大形方墳について」, 平安博物館記念論文集編集委員会 (編) 『日本古代学論集』所収, 京都, 75-90頁。
- 森 浩一 (1972) 「奈良・大阪における横口式石槨の系譜」, 奈良県立橿原考古学研究所 (編) 『壁画古墳高松塚』所収, 奈良, 69-75頁。
- 森島康雄 (1995) 「6 瓦器 椀 (2) 分類」, 中世土器研究会 (編) 『概説 中世の土器・陶磁器』所収, 京都, 319-330頁。
- 山中一郎 (2002) 「考古学 濱田耕作」, 礪波護・藤井讓治 (編) 『京大東洋学の百年』所収, 京都, 99-131頁。
- 山中一郎 (1994) 『石器研究のダイナミズム』, 高槻 (大阪)。
- 山本 彰 (1978) 『『横口式石槨』考・兵家古墳の占める位置』, 奈良県立橿原考古学研究所 (編) 『兵家古墳群』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第37冊), 奈良, 190-198頁。
- 山本 彰 (1981) 『錦織南遺跡-縄文時代晩期河道の調査-』(大阪府教育委員会刊行), 大阪。
- 山本 彰 (1981) 「オーコー8号墳」, 羽曳野市教育委員会 (編) 『羽曳野の終末期古墳』所収, 羽曳野 (大阪), 16-18頁。
- 山本 彰 (1988) 「終末期古墳の編年-大阪南部の古墳を中心として-」, 網干善教先生華甲記念会 (編) 『網干善教先生華甲記念考古学論集』所収, 吹田 (大阪), 645-663頁。
- 横山成己 (2002) 『平成13年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告33), 富田林 (大阪)。
- 吉岡 哲 (1976) 「河内・大和における横口式石槨の機能について」, 横田健一先生還暦記念会 (編) 『古代史論叢』所収, 259-278頁。
- 和田晴吾 (1989) 「畿内・横口式石槨の諸類型」, 『立命館史学』10号掲載, 京都, 23-49頁。
- 渡辺 誠 (1971) 「大阪府富田林市錦織出土の縄文土器」, 『古代文化』第23巻, 第3号掲載, 63-67頁。

資料総覧

新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡
に出土した瓦埴類資料

軒丸瓦一覽表

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
軒丸1	2	59	軒丸瓦A	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	範傷0段階
軒丸2	2	59	軒丸瓦A-玉縁I2Za	2000	調査区3	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	範傷1段階
軒丸3	2	59	軒丸瓦A	2000	調査区5E-1	-	廃絶期の層	-	範傷1段階
軒丸4	2	60	軒丸瓦A-玉縁I2Za	1984	14h	溝1	上層	布袋ハ玉縁0	範傷1段階
軒丸5	2	-	軒丸瓦A	1998	A調査区	-	表採	-	
軒丸6	2	-	軒丸瓦A	1998	-	-	表土	-	
軒丸7	2	-	軒丸瓦A	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸8	2	-	軒丸瓦A	2000	調査区1	-	床土	-	
軒丸9	2	-	軒丸瓦A	2000	調査区6	-	廃絶期の層	-	
軒丸10	2	60	軒丸瓦おそらくA-玉縁I2Za	2000	調査区3	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	
軒丸11	2	60	軒丸瓦おそらくA-玉縁I2Za	2000	調査区3	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	
軒丸12	3	60	軒丸瓦おそらくA-玉縁I2Za	2000	調査区3	-	白鳳期整地土	布袋又玉縁1	
軒丸13	3	-	軒丸瓦おそらくA-玉縁I2Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ハ玉縁0	
NM1	-	-	軒丸瓦おそらくA-玉縁I2Za	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ハ玉縁0	
軒丸14	3	61	軒丸瓦B	1985	I号窯	灰原	下層	-	
軒丸15	3	61	軒丸瓦B-行基I1Za [CgまたはCh]	2000	調査区6	-	白鳳期整地土	布袋ネ行基0	
軒丸16	3	61	軒丸瓦B	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸17	3	62	軒丸瓦B	1984	41	区画溝1	上層	-	
軒丸18	3	-	軒丸瓦B-行基I1Za [CgまたはCh]	1984	41	区画溝1	上層	布袋ネ行基0	
軒丸19	3	-	軒丸瓦B	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸20	3	-	軒丸瓦B	1998	A・C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸21	3	-	軒丸瓦B	2000	調査区2	-	旧耕土	-	
NM2	-	-	軒丸瓦B	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸22	4	63	軒丸瓦C-行基I1Za [CgまたはCh]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基0	
軒丸23	4	-	軒丸瓦C	1985	I号窯	灰原	最下層	-	
軒丸24	4	-	軒丸瓦C	2000	調査区3	-	表採	-	
NM3	-	-	軒丸瓦C	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM4	-	-	軒丸瓦C	1985	I号窯	灰原	下層	-	
軒丸25	4	62	軒丸瓦BまたはC-行基I1Za [Ch]	2000	調査区3N	-	公園造成土	布袋ネ行基0	
軒丸26	4	62	軒丸瓦BまたはC-行基I1Za [Ch]	1984	中央	溝1	下層	布袋ネ行基2	
軒丸27	4	62	軒丸瓦BまたはC-行基I1Za [Cg]	1984	10f	溝1	上層	布袋ネ行基0	
NM5	-	-	軒丸瓦BまたはC-行基I1Za [CgまたはCh]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基0	
NM6	-	-	軒丸瓦BまたはC-行基I1Za [CgまたはCh]	2000	調査区6	-	白鳳期整地土	布袋ネ行基0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM7	-	-	軒丸瓦またはC-行基 I 1 Za [CgまたはCh]	2000	調査区 6	-	白鳳期整地土	布袋ナ行基 0	
軒丸28	5	63	軒丸瓦D	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸29	5	64	軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ae]	1984	14h	溝 1	上層	布袋ニ+ナ+ロ行基 0	
軒丸30	5	63	軒丸瓦D	1998	B調査区	土抗 1	下層	-	
軒丸31	5	64	軒丸瓦D-行基 I 1 Za < x v >	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ワ行基 2	破れる前の布を使用
軒丸32	5	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ニ行基 0	布袋はおそらく布袋ニ+ロ行基0
軒丸33	5	64	軒丸瓦D	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸34	5	-	軒丸瓦D	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸35	5	65	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	1984	14h	溝 1	上層	布袋ナ行基 0	
軒丸36	5	65	軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ae]	1984	14h	溝 1	上層	布袋ナ行基 2	
軒丸37	6	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	1997	A地区	-	第3層	布袋ナ行基 0	丸瓦部は行基 I 1 Za < ii > 群の可能性が高い
軒丸38	6	-	軒丸瓦D	2000	調査区 6 S	-	廃絶期の層	-	
軒丸39	6	-	軒丸瓦D	2000	調査区 4	-	-	-	
軒丸40	6	-	軒丸瓦D	2000	調査区 5 C	-	廃絶期の層	-	
軒丸41	6	-	軒丸瓦D	2000	調査区 3	-	-	-	
軒丸42	6	-	軒丸瓦D	2000	調査区 3	-	-	-	
軒丸43	6	-	軒丸瓦D	1985	I号窯	灰原	-	-	
軒丸44	6	65	軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ae] (+Cn)	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ナ行基 1	
NM8	-	-	軒丸瓦D	1984	9 n	区画溝 1	下層	-	
NM9	-	-	軒丸瓦D	1984	-	区画溝 2	上層	-	
NM10	-	-	軒丸瓦D	1997	F地区	ピット 3	-	-	
NM11	-	-	軒丸瓦D	1997	F地区	-	第4層	-	
NM12	-	-	軒丸瓦D	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM13	-	-	軒丸瓦D	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM14	-	-	軒丸瓦D	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM15	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 1	-	盛土	-	
NM16	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 2	-	旧耕土	-	
NM17	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 3	-	公園造成土	-	
NM18	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 3	-	-	-	
NM19	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	-	
NM20	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	-	
NM21	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 5 E-1	-	廃絶期の層	-	
NM22	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 5 E-2	-	廃絶期の層	-	
NM23	-	-	軒丸瓦D	2000	調査区 6	-	第4層	-	
NM24	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ae]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ナ行基 2	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM25	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ae]	2000	調査区 5 E-3	-	廃絶期の層	布袋ナ行基 2	
NM26	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za [Ag]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ナ行基 0	
NM27	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za < x v >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ワ行基 2	
NM28	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ワ行基 0	
NM29	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 E-2	-	廃絶期の層	布袋ワ行基 0	
NM30	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	2000	調査区 4	-	-	布袋ニ+口行基 0	
NM31	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 S35-1	-	埋め戻し土	布袋ニ行基 0	
NM32	-	-	軒丸瓦D-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 E	-	廃絶期の層	布袋ニ行基 0	
軒丸45	7	66	軒丸瓦E	1985	I号窯	灰原	最下層	-	范傷 0 段階
軒丸46	7	66	軒丸瓦E	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	范傷 0 段階
軒丸47	7	67	軒丸瓦E	1985	I号窯	灰原	最下層	-	范傷1段階・接合手法はh3手法
軒丸48	7	67	軒丸瓦E	1985	I号窯	灰原	表採	-	范傷 1 段階
軒丸49	7	66	軒丸瓦E	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	范傷 1 段階
軒丸50	7	67	軒丸瓦E	1998	-	-	表採	-	范傷 1 段階
軒丸51	7	66	軒丸瓦E	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	范傷 1 段階
軒丸52	7	68	軒丸瓦E	1985	I号窯	灰原	下層	-	范傷 2 段階
軒丸53	8	68	軒丸瓦E	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	范傷 2 段階
軒丸54	8	68	軒丸瓦E	1984	14h	溝 1	上層	-	范傷 2 段階
軒丸55	8	69	軒丸瓦E-行基 I 1 Za < x ii >	1984	南端	溝 1	上・下層	布袋ナ行基 3	范傷 2 段階・破れる前の布袋を使用
軒丸56	9	70	軒丸瓦E-行基 I 1 Za [Cj]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋口行基 0	
軒丸57	9	69	軒丸瓦E	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸58	9	-	軒丸瓦E	2000	調査区 5 N	-	-	-	范傷 2 段階
軒丸59	9	70	軒丸瓦E	1984	南端	溝 1	下層	-	范傷 2 段階
軒丸60	9	-	軒丸瓦E	1984	14h	溝 1	上層	-	范傷 2 段階
軒丸61	9	71	軒丸瓦-行基 I 1 Za [Am]	1984	南端	溝 1	下層	布袋ナ行基 1	
NM33	-	-	軒丸瓦E	1997	B地区	土抗1	上層	-	范傷 2 段階
NM34	-	-	軒丸瓦E	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	范傷 2 段階
NM35	-	-	軒丸瓦E	1984	北端	溝 1	下層	-	
NM36	-	-	軒丸瓦E	1984	北端	区画溝 1	埋土	-	
NM37	-	-	軒丸瓦E	1984	4 d	区画溝 1	上層	-	
NM38	-	-	軒丸瓦E	1985	I号窯	灰原	下層	-	
NM39	-	-	軒丸瓦E	1997	B地区	土抗 1	下層	-	
NM40	-	-	軒丸瓦E	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
NM41	-	-	軒丸瓦E	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
NM42	-	-	軒丸瓦E	1998	B調査区	土抗 1	上層	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM43	-	-	軒丸瓦E	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM44	-	-	軒丸瓦E	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM45	-	-	軒丸瓦E	2000	調査区5	-	廃絶期の層	-	
NM46	-	-	軒丸瓦E	2000	調査区5W	-	公園造成土	-	
NM47	-	-	軒丸瓦E-行基 I 1 Za [Cj]	1984	14i	溝1	上層	布袋口行基0	
NM48	-	-	軒丸瓦E-行基 I 1 Za < ix >	1984	12g	溝1	上層	布袋口行基0	
NM49	-	-	軒丸瓦E-行基 I 1 Za < ix >	1984	14i	溝1	上層	布袋口行基0	
NM50	-	-	軒丸瓦E-行基 I 1 Za < ix >	1984	13h	溝1	上層	布袋口行基0	
NM51	-	-	軒丸瓦E-行基 I 1 Za < ix >	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋口+ロ行基1	
軒丸62	10	71	軒丸瓦F	1998	-	溝1	上層	-	接合手法はhl手法
軒丸63	10	72	軒丸瓦F	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	-	
軒丸64	10	-	軒丸瓦F	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸65	10	-	軒丸瓦F	1998	A調査区	-	-	-	
軒丸66	10	-	軒丸瓦F	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸67	10	-	軒丸瓦F	2000	調査区3	-	-	-	
軒丸68	10	-	軒丸瓦F	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸69	10	72	軒丸瓦F	2000	調査区5E-1	-	天平期整地土	-	側面に「布り」の圧痕あり
軒丸70	10	-	軒丸瓦F	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸71	10	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1997	F地区	-	第2層	布袋イ行基0	接合手法はhl手法
軒丸72	10	72	軒丸瓦F-行基 I 1 Za < xvii >	1984	7f	区画溝1	上層	布袋イ+リ行基1	接合手法はhl手法
軒丸73	10	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1997	A地区	-	第4層	布袋イ行基0	接合手法はhl手法
軒丸74	10	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	土抗7	-	布袋イ行基0	接合手法はhl手法
軒丸75	10	72	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋イ行基0	接合手法はhl手法
NM52	-	-	軒丸瓦F	1998	A調査区	-	第5層	-	
NM53	-	-	軒丸瓦F	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM54	-	-	軒丸瓦F	2000	調査区3 S34-3	-	-	-	
NM55	-	-	軒丸瓦F	2000	調査区3	-	-	-	外縁部内面に「布り」の圧痕あり
NM56	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	瓦当裏面のみ
NM57	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1997	B地区	-	第3層	布袋イ行基0	
NM58	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za < xvii >	1997	F地区	-	第4層	布袋イ+リ行基1	
NM59	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za < xvii >	1997	B地区	土抗1	上層	布袋イ行基0	
NM60	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1997	B地区	土抗1	上層	布袋イ行基0	
NM61	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1997	B地区	-	第3層	布袋イ行基0	
NM62	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1997	C地区	土抗1	-	布袋イ行基0	
NM63	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	A・B調査区	-	第5層	布袋イ行基0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM64	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋り行基 0	
NM65	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	土抗 1	下層	布袋り行基 0	
NM66	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	-	第 5 層	布袋り行基 0	
NM67	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh1手法
NM68	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh1手法
NM69	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	土抗 5		布袋り行基 0	
NM70	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	土抗 7	埋土	布袋り行基 0	
NM71	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	土抗 8	上層	布袋り行基 0	接合手法はh1手法
NM72	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り行基 0	
NM73	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM74	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り行基 0	
NM75	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za < x vii >	2000	調査区 2	-	盛土	布袋り行基 1	
NM76	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	2000	調査区 3	-	-	布袋り行基 0	
NM77	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	2000	調査区 3	-	-	布袋り行基 0	
NM78	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	2000	調査区 4	-	-	布袋り行基 0	
NM79	-	-	軒丸瓦F-行基 I 1 Za	2000	調査区 6 S34-5	-	埋め戻し土	布袋り行基 0	
軒丸76	11	72,73	軒丸瓦G	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸77	11	73	軒丸瓦G	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸78	11	-	軒丸瓦G	1998	C調査区	土抗 8	下層	-	
軒丸79	11	-	軒丸瓦G	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸80	11	-	軒丸瓦G	1984	4 d	区画溝 1	上層	-	
軒丸81	11	-	軒丸瓦G	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸82	11	-	軒丸瓦G	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸83	11	73	軒丸瓦G	1997	A地区	瓦溜 1	埋土	-	
軒丸84	11	-	軒丸瓦G-行基 I 1 Za	2000	調査区 5E	-	盛土	布袋り行基 0	
軒丸85	11	-	軒丸瓦G-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 E-1	-	-	布袋り行基 0	
軒丸86	11	73	軒丸瓦H	1984	4d	区画溝 1	上層	-	
軒丸87	11	-	軒丸瓦H	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸88	11	-	軒丸瓦H	2000	調査区 5 W-1	-	廃絶期の層	-	
軒丸89	11	-	軒丸瓦H	2000	調査区 3 S34-3	-	-	-	
軒丸90	11	-	軒丸瓦H	2000	調査区 5	-	-	-	
軒丸91	11	-	軒丸瓦H	1999	I地区	溝 9	埋土	-	
軒丸92	11	-	軒丸瓦H	1997	A地区	瓦溜 2	埋土	-	
軒丸93	11	-	軒丸瓦H	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸94	11	-	軒丸瓦H	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
軒丸95	11	-	軒丸瓦H	1998	B調査区	土抗1	下層	-	
軒丸96	12	-	軒丸瓦H	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸97	12	-	軒丸瓦H	1997	-	-	-	-	
軒丸98	12	-	軒丸瓦H-行基I1Za	1997	C地区	土抗1	埋土	布袋り行基0	
軒丸99	12	-	軒丸瓦H-行基I1Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り行基0	
軒丸100	12	73	軒丸瓦H-行基I1Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸101	12	73	軒丸瓦H-行基I1Za	1997	B地区	土抗1	上層	布袋り行基0	
軒丸102	12	-	軒丸瓦H-行基I1Za	1999	G地区	土抗1	埋土	布袋り行基0	
軒丸103	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	F地区	瓦溜2	埋土	-	
軒丸104	12	-	軒丸瓦GまたはH	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸105	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	B地区	土抗1	上層	-	
軒丸106	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	B地区	-	上層	-	
軒丸107	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	A地区	-	第3層	-	
軒丸108	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	A地区	-	第4層	-	
軒丸109	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	H地区	-	第3層	-	
軒丸110	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	B地区	土抗1	上層	-	
軒丸111	12	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区4	-	-	-	
軒丸112	12	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区3 S34-3	-	-	-	
軒丸113	12	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区6	-	-	-	
軒丸114	12	-	軒丸瓦GまたはH	1997	H地区	溝2	下層	-	
NM80	-	-	軒丸瓦H	1998	C調査区	土抗8	上層	-	
NM81	-	-	軒丸瓦H	2000	調査区3	-	-	-	
NM82	-	-	軒丸瓦H	2000	調査区3 S34-3	-	-	-	
NM83	-	-	軒丸瓦H	2000	調査区5 S35-2	-	-	-	
NM84	-	-	軒丸瓦GまたはH	1984	-	-	-	-	
NM85	-	-	軒丸瓦GまたはH	1984	5e	区画溝1	上層	-	
NM86	-	-	軒丸瓦GまたはH	1997	A地区	-	第3層	-	
NM87	-	-	軒丸瓦GまたはH	1997	B地区	土抗1	上層	-	
NM88	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
NM89	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
NM90	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	A調査区	土抗6	下層	-	
NM91	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	-	-	-	
NM92	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	土抗1	下層	-	
NM93	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	土抗1	埋土	-	
NM94	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM95	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM96	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM97	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	土抗1	下層	-	
NM98	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	-	第5層	-	
NM99	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NM100	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM101	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM102	-	-	軒丸瓦GまたはH	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM103	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区4	-	-	-	
NM104	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 S35-2	-	埋め戻し土	-	
NM105	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 N	-	-	-	
NM106	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 C	-	廃絶期の層	-	
NM107	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 W	-	盛土	-	
NM108	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 W	-	公園造成土	-	
NM109	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 W-2	-	廃絶期の層	-	
NM110	-	-	軒丸瓦GまたはH	2000	調査区5 E-3	-	廃絶期の層	-	
NM111	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1997	-	-	-	布袋り行基0	接合手法はh1手法
NM112	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1997	B地区	土抗1	上層	布袋り行基0	接合手法はh1手法
NM113	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1997	B地区	-	下層	-	接合手法はh1手法
NM114	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1998	A・C調査区	-	廃絶期の層	-	接合手法はh1手法
NM115	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1998	A・C調査区	-	廃絶期の層	-	
NM116	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM117	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM118	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NM119	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り行基0	
NM120	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	2000	調査区1	-	盛土	布袋り行基0	
NM121	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	2000	調査区3	-	-	布袋り行基0	接合手法はh1手法
NM122	-	-	軒丸瓦GまたはH-行基 I 1 Za	2000	調査区3 S34-3	-	埋め戻し土	布袋り行基0	
NM123	-	-	軒丸瓦H-行基 I 1 Za	2000	調査区5 S35-2	-	埋め戻し土	-	
軒丸115	13	74	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法
軒丸116	13	74	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < x ix >	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸117	13	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法
軒丸118	13	74	軒丸瓦J	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸119	13	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法
軒丸120	13	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
軒丸121	13	-	軒丸瓦J	1998	A調査区	土抗16	-	-	
軒丸122	13	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法
軒丸123	13	75	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < vi >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ行基 0	接合手法はh2手法
軒丸124	13	-	軒丸瓦J	1997	B地区	土抗1	上層	-	接合手法はh1手法
軒丸125	13	-	軒丸瓦J	1997	B地区	-	表土	-	接合手法はh2手法
軒丸126	13	-	軒丸瓦J	1984	北端	溝1	下層	-	
軒丸127	14	75	軒丸瓦J-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	-	接合手法はh1手法
軒丸128	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 W-1	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法
軒丸129	14	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < x x i >	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸130	14	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	土抗1	上層	-	
軒丸131	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 C	-	廃絶期の層	-	
軒丸132	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 4	-	-	-	
軒丸133	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 3 S	-	-	-	接合手法はh2手法
軒丸134	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 3	-	-	-	
軒丸135	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 6 S	-	廃絶期の層	-	
軒丸136	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 S34-1	-	-	-	
軒丸137	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 3 E	-	盛土	-	
軒丸138	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	-	
軒丸139	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	-	接合手法はh2手法
軒丸140	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 S35-3	-	埋め戻し土	-	接合手法はh2手法
軒丸141	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 4	-	-	-	
軒丸142	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	-	
軒丸143	14	-	軒丸瓦J	1985	I号窯	灰原	下層	-	接合手法はh1手法
軒丸144	14	-	軒丸瓦J	2000	調査区 5 S35-1	-	埋め戻し土	-	
軒丸145	14	-	軒丸瓦J	1997	B地区	土抗1	上層	-	
軒丸146	15	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < x ix >	2000	調査区 5 W	-	公園造成土	布袋カ行基 0	接合手法はh1手法
軒丸147	15	75	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < vi >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ行基 1	接合手法はh2手法・行基5と同じ布袋を使用
軒丸148	15	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < x x i >	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	接合手法はh2手法
NM124	-	-	軒丸瓦J	1997	B地区	土抗1	最下層	-	
NM125	-	-	軒丸瓦J	1997	D地区	溝2	埋土	-	
NM126	-	-	軒丸瓦J	1997	F地区	-	表土	-	
NM127	-	-	軒丸瓦J	1998	A調査区	溝2	上層	-	
NM128	-	-	軒丸瓦J	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
NM129	-	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	土抗1	上層	-	
NM130	-	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	土抗1	下層	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NMI131	-	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NMI132	-	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NMI133	-	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	土抗1	上層	-	
NMI134	-	-	軒丸瓦J	1998	B調査区	-	-	-	
NMI135	-	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NMI136	-	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NMI137	-	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NMI138	-	-	軒丸瓦J	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NMI139	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区3	-	-	-	
NMI140	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区3	-	-	-	
NMI141	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区3	-	-	-	
NMI142	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区3	-	公園造成土	-	
NMI143	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区3(S)	-	公園造成土	-	
NMI144	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	盛土	-	
NMI145	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI146	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI147	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI148	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI149	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI150	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI151	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI152	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5N	-	盛土	-	
NMI153	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5N	-	-	-	
NMI154	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5W	-	公園造成土	-	
NMI155	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5E-1	-	廃絶期の層	-	
NMI156	-	-	軒丸瓦J	2000	調査区5E-1	-	廃絶期の層	-	
NMI157	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<vi>	1997	B地区	土抗1	上層	布袋ル行基0	
NMI158	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<vi>	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基0	
NMI159	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<vi>	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基0	
NMI160	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<vi>	2000	調査区3	-	-	布袋ル行基0	
NMI161	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<vi>	2000	調査区4	-	-	布袋ル行基0	
NMI162	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<xix>	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NMI163	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za<xix>	2000	調査区5W-2	-	廃絶期の層	布袋ル行基0	
NMI164	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za	2000	調査区2	-	表土	-	
NMI165	-	-	軒丸瓦J-行基I1Za	2000	調査区5N	-	盛土	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM166	-	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 W	-	公園造成土	-	
NM167	-	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 S34-1	-	埋め戻し土	-	
NM168	-	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za	2000	調査区 5 E-2	-	廃絶期の層	-	
NM169	-	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < x x i >	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
NM170	-	-	軒丸瓦J-行基 I 1 Za < x x i >	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒丸149	16	76	軒丸瓦K-玉縁Ⅲ1 Za	1984	15f	溝 1	上層	布ツ	接合手法はh2手法
NM171	-	-	軒丸瓦K	1998	B調査区	土抗 1	-	-	
NM172	-	-	軒丸瓦K	2000	調査区 1	-	表土	-	
軒丸150	16	-	軒丸瓦L	2000	調査区 5 E	-	盛土	-	
軒丸151	16	-	軒丸瓦L	1997	B地区	瓦溜 2	上層	-	
軒丸152	16	-	軒丸瓦L	2000	調査区 5 E-2	-	天平期整地土	-	
軒丸153	16	76	軒丸瓦L	1984	5 f	区画溝 1	上層	-	
軒丸154	17	-	軒丸瓦L	1969	II号窯	窯体内	-	-	接合手法はa手法
軒丸155	17	-	軒丸瓦L	1985	I号窯	灰原	-	-	
軒丸156	17	77	軒丸瓦L-玉縁Ⅲ1 Za	2000	調査区 5 W	-	公園造成土	布ツ	
軒丸157	17	-	軒丸瓦L	1998	A調査区	参道側溝	下層	-	
軒丸158	17	-	軒丸瓦L	2000	調査区 5 W	-	公園造成土	-	
軒丸159	17	-	軒丸瓦L	1998	A調査区	溝 2	下層	-	
軒丸160	17	-	軒丸瓦L	1998	B調査区	土抗 1	上層	-	
軒丸161	17	-	軒丸瓦L	2000	調査区 5 C・N	-	公園造成土	-	
軒丸162	17	-	軒丸瓦L	1998	A調査区	溝 2	上層	-	
軒丸163	17	-	軒丸瓦L	2000	調査区 5	-	-	-	
軒丸164	17	-	軒丸瓦L	1997	D地区	-	第 4 層	-	
軒丸165	18	-	軒丸瓦L-玉縁 I 321 Za [J1b]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋レ玉縁 3	接合手法はh2手法
軒丸166	18	77	軒丸瓦L-玉縁 I 321 Za [J1b]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋レ玉縁 0	接合手法はh2手法
NM173	-	-	軒丸瓦L	1984	-	-	表採	-	
NM174	-	-	軒丸瓦L	1997	B地区	-	第 3 層	-	
NM175	-	-	軒丸瓦L	1997	B地区	瓦溜 2	埋土	-	
NM176	-	-	軒丸瓦L	1997	D地区	-	第 2 層	-	
NM177	-	-	軒丸瓦L	1997	D地区	-	第 4 層	-	
NM178	-	-	軒丸瓦L	1997	F地区	-	第 3 層	-	
NM179	-	-	軒丸瓦L	1998	A調査区	-	第 2 層	-	
NM180	-	-	軒丸瓦L	1998	B調査区	土抗 1	埋土	-	
NM181	-	-	軒丸瓦L	1998	B調査区	土抗 1	埋土	-	
NM182	-	-	軒丸瓦L	1998	B調査区	-	廃絶期の層	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NM183	-	-	軒丸瓦L	2000	調査区2	溝7	上層	-	
NM184	-	-	軒丸瓦L	2000	調査区2	-	盛土	-	
NM185	-	-	軒丸瓦L	2000	調査区3	-	公園造成土	-	
NM186	-	-	軒丸瓦L	2000	調査区5	-	表採	-	
NM187	-	-	軒丸瓦L	2000	調査区5W	-	盛土	-	
NM188	-	-	軒丸瓦L	2000	調査区5W	-	公園造成土	-	
NM189	-	-	軒丸瓦L-玉縁 I 32I Za [I1b]	1997	B地区	土抗1	上層	布袋し玉縁0	
軒丸167	18	-	軒丸瓦一行基 I 1 Za < x iii >	1984	15h	溝1	上層	布袋へ行基 I	軒丸瓦DまたはE群
NM190	-	-	軒丸瓦一行基 I 1 Za < x iii >	1969	II号窯	燃焼室西半	-	布袋へ行基 I	軒丸瓦DまたはE群
NM191	-	-	軒丸瓦一行基 I 1 Za < x iii >	2000	調査区3	溝1	上層	布袋へ行基0	軒丸瓦DまたはE群

軒平瓦一覧表

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
軒平1	19	-	軒平瓦AA1-平瓦 II 0 Za < i >	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平2	19	-	軒平瓦AA1-平瓦 II 0 Za < i >	2000	調査区3	-	-	布袋り平0	
軒平3	19	-	軒平瓦AA1-平瓦 II 0 Za < i >	2000	調査区3	-	-	-	
軒平4	19	78	軒平瓦AA1-平瓦 II 0 Za < i >	1984	13h	溝1	上層	布袋り平0	分割界線が認められる
軒平5	19	-	軒平瓦AA1	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
軒平6	19	-	軒平瓦AA1	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH1	-	-	軒平瓦AA1	1984	7g	区画溝1	上層	-	
NH2	-	-	軒平瓦AA1	1997	A地区	-	表土	-	
NH3	-	-	軒平瓦AA1	1999	G地区	土抗1	上層	-	
NH4	-	-	軒平瓦AA1	2000	調査区3	-	-	-	
NH5	-	-	軒平瓦AA1	2000	調査区3	-	公園造成土	-	
軒平7	19	-	軒平瓦AA2-平瓦 II 0 Za < ii >	2000	調査区5(C)	-	公園造成土	布袋り平0	
軒平8	19	78	軒平瓦AA2-平瓦 II 0 Za < ii >	2000	調査区6	-	廃絶期の層	-	
軒平9	19	-	軒平瓦AA2-平瓦 II 0 Za < ii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平10	19	-	軒平瓦AA2	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	-	
NH6	-	-	軒平瓦AA2	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH7	-	-	軒平瓦AA2-平瓦 II 0 Za < ii >	1997	B地区	-	表土	布袋り平0	
NH8	-	-	軒平瓦AA2	1997	B地区	-	第1層	-	
NH9	-	-	軒平瓦AA2	1997	D地区	-	第4層	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NH10	-	-	軒平瓦AA2	1998	B調査区	土抗1	下層	-	
NH11	-	-	軒平瓦AA2	2000	調査区2	-	旧耕土	-	
NH12	-	-	軒平瓦AA2	2000	調査区4	-	-	-	
NH13	-	-	軒平瓦AA2	2000	調査区5(C)	-	廃絶期の層	-	
軒平11	19	-	軒平瓦AA3	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒平12	19	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	土抗5	下層	-	
軒平13	19	-	軒平瓦AA3-平瓦II0Za<i>	1999	G地区	土抗8	上層	布袋り平0	
軒平14	19	78	軒平瓦AA3-平瓦II0Za<i>	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
NH14	-	-	軒平瓦AA3	1997	B地区	-	第2層	-	
NH15	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	土抗1	下層	-	
NH16	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH17	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH18	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	廃絶期の層	-	
NH19	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH20	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH21	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
NH22	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH23	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH24	-	-	軒平瓦AA3	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH25	-	-	軒平瓦AA3	1999	H地区	-	第4層	-	
NH26	-	-	軒平瓦AA3	1999	H地区	溝2	上層	-	
NH27	-	-	軒平瓦AA3	1999	I地区	-	第1層	-	
NH28	-	-	軒平瓦AA3	2000	調査区3	-	-	-	
NH29	-	-	軒平瓦AA3	2000	調査区3	-	-	-	
NH30	-	-	軒平瓦AA3	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	-	
NH31	-	-	軒平瓦AA3	2000	調査区5E-2	-	廃絶期の層	-	
軒平15	19	-	軒平瓦AA4-平瓦II0Za<i>	1997	B地区	土抗1	上層	布袋り平0	
軒平16	19	-	軒平瓦AA4-平瓦II0Za<i>	2000	調査区2-1	-	表土	布袋り平0	
軒平17	19	79	軒平瓦AA4-平瓦II0Za<i>	1985	I号窯	灰原	下層	布袋り平0	
軒平18	19	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
軒平19	19	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	灰原	中層	-	
NH32	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH33	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH34	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	灰原	第3層	-	
NH35	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NH36	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH37	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH38	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH39	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
NH40	-	-	軒平瓦AA4	1985	I号窯	窯体	表採	-	
NH41	-	-	軒平瓦AA4-平瓦II0Za<i>	1997	B地区	土抗1	上層	布袋り平0	
NH42	-	-	軒平瓦AA4	1997	D地区	-	第4層	-	
NH43	-	-	軒平瓦AA4-平瓦II0Za<i>	2000	調査区5E-1	-	公園造成土	布袋り平0	
NH44	-	-	軒平瓦AA4	2000	調査区3	-	-	-	
軒平20	20	79	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平1	分割界線が認められる
軒平21	20	80	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平22	20	80	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平1	
軒平23	20	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒平24	20	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za<iii>	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒平25	20	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za<iii>	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
軒平26	20	-	軒平瓦おそらくAA5-平瓦II0Za<iii>	1998	C調査区	土抗7	-	-	
軒平27	21	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
軒平28	21	81	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平29	21	81	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平30	21	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平31	21	82	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	
軒平32	21	82	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋り平0	分割界線が認められる
NH45	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A調査区	土抗6	上層	-	
NH46	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A調査区	土抗6	下層	-	
NH47	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A調査区	-	廃絶期の層	-	
NH48	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A・C調査区	-	廃絶期の層	-	
NH49	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	A・C調査区	-	廃絶期の層	-	
NH50	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋り平1	
NH51	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH52	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	C調査区	-	廃絶期の層	-	
NH53	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	
NH54	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区1	-	耕土	-	
NH55	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区3	-	公園造成土	-	
NH56	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区3 S35-4	-	埋め戻し土	-	
NH57	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区5 S35-2	-	埋め戻し土	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NH58	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区5N	-	-	-	
NH59	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NH60	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区5E-2	-	公園造成土	-	
NH61	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区6	-	廃絶期の層	-	
NH62	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
NH63	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
NH64	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za < iii >	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
NH65	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NH66	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Bp]	1997	B地区	-	表土	-	
NH67	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	B調査区	-	廃絶期の層	-	
NH68	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	A・C調査区	-	第2層	-	
NH69	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	第2層	-	
NH70	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	第2層	-	
NH71	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NH72	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NH73	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NH74	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NH75	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
NH76	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	土抗8	下層	-	
NH77	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	C調査区	土抗8	下層	-	
NH78	-	-	軒平瓦AA5-平瓦II0Za [Br]	1998	-	-	第2層	-	
軒平33	22	82	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Ck]	2000	調査区3	-	公園造成土	布袋ソ平0	
軒平34	22	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5N	-	-	布袋ソ平0	
軒平35	22	83	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ソ平0	
軒平36	22	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5C	-	公園造成土	布袋ソ平0	
軒平37	22	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E-1	-	公園造成土	布袋ソ平0	
軒平38	22	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ソ平0	
NH79	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ソ平0	
NH80	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区3	-	公園造成土	-	
NH81	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区3	-	公園造成土	-	
NH82	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区3	-	-	-	
NH83	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区3	-	-	布袋ソ平0	
NH84	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区3S	-	-	-	
NH85	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区4	-	-	-	
NH86	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5C	-	盛土	布袋ソ平0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NH87	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5C	-	公園造成土	布袋ソ平0	
NH88	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5C	-	公園造成土	-	
NH89	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NH90	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5W-1	-	廃絶期の層	-	
NH91	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5W-2	-	廃絶期の層	布袋ソ平0	
NH92	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5W-2	-	廃絶期の層	-	
NH93	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	盛土	布袋ソ平0	
NH94	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	盛土	-	
NH95	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ソ平0	
NH96	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ソ平0	
NH97	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ソ平0	
NH98	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	-	
NH99	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E-1	-	公園造成土	布袋ソ平0	
NH100	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E-2	-	廃絶期の層	布袋ソ平0	
NH101	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E-3	-	廃絶期の層	布袋ソ平0	
NH102	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5N	-	-	布袋ソ平0	
NH103	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5N	-	-	-	
NH104	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5N	-	-	-	
NH105	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5N	-	-	-	
NH106	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5N	-	-	-	
NH107	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S34-1	-	埋め戻し土	布袋ソ平0	
NH108	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S34-1	-	埋め戻し土	-	
NH109	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	-	
NH110	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	布袋ソ平0	
NH111	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	布袋ソ平0	
NH112	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	布袋ソ平0	
NH113	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5S35-2	-	埋め戻し土	-	
NH114	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za < iii >	2000	調査区5	-	埋め戻し土	-	
NH115	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za < iii >	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	-	
NH116	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za [Bh]	2000	調査区5E	-	公園造成土	-	
NH117	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za < iii >	2000	調査区5E	-	公園造成土	-	
NH118	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za < iii >	2000	調査区5W	-	公園造成土	-	
NH119	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za < iii >	2000	調査区5W	-	公園造成土	-	
NH120	-	-	軒平瓦AA6-平瓦II0Za < iii >	2000	-	-	表採	-	
軒平39	22	-	軒平瓦AA7-平瓦II0Za < iii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
軒平40	22	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	B調査区	—	天平期整地土	—	
軒平41	22	83	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ル平I	
軒平42	22	83	軒平瓦AA7—平瓦II0Za [Bh]	1997	—	—	—	布袋ソ平0	
軒平43	22	83	軒平瓦AA7—平瓦II0Za [Bq]	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋カ平I	
軒平44	22	84	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1997	A地区	—	第2層	布袋カ平0	
NH121	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1997	C地区	—	第2層	—	
NH122	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1997	—	—	表採	—	
NH123	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	
NH124	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	A調査区	—	天平期整地土	布袋カ平0	
NH125	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	A・B調査区	—	廃絶期の層	—	
NH126	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	B調査区	土抗1	下層	—	
NH127	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	B調査区	土抗1	下層	—	
NH128	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	B調査区	—	廃絶期の層	—	
NH129	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	B調査区	—	天平期整地土	—	
NH130	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	C調査区	土抗8	下層	—	
NH131	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	1998	—	—	表採	布袋ル平0	
NH132	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	2000	調査区2	—	表土	布袋ル平0	
NH133	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	2000	調査区3	—	—	布袋ル平0	
NH134	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	2000	調査区3	—	公園造成土	—	
NH135	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	2000	調査区3	—	公園造成土	—	
NH136	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	2000	調査区5C	—	公園造成土	—	
NH137	—	—	軒平瓦AA7—平瓦II0Za<iii>	2000	調査区5S35-2	—	埋め戻し土	—	
軒平45	23	84	軒平瓦P—平瓦III2Za	2000	調査区5W	—	廃絶期の層	—	
軒平46	23	84	軒平瓦P—平瓦III2Za	2000	調査区4	—	—	—	
軒平47	23	84	軒平瓦P—平瓦III2Za [J2aj]	1984	3f	区画溝1	埋土	布ツ	
軒平48	23	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1997	B地区	土抗1	第3層	—	
軒平49	23	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1997	B地区	土抗1	第1層	—	
軒平50	23	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1998	A調査区	土抗6	埋土	—	
軒平51	23	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	2000	調査区2	—	旧耕土	—	
軒平52	23	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1997	B地区	土抗1	第1層	—	
軒平53	23	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1997	B地区	土抗1	第1層	—	
NH138	—	—	軒平瓦おそらくP—平瓦III2Za [J2as]	2000	調査区1	—	第2層	布ツ	
NH139	—	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1984	—	区画溝1	—	—	
NH140	—	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1984	—	—	表採	—	
NH141	—	—	軒平瓦P—平瓦III2Za	1997	A地区	瓦溜1	上層	—	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
NH142	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1997	B地区	土抗1	上層	布ツ	
NH143	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1997	B地区	土抗1	上層	-	
NH144	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1997	B地区	土抗1	上層	-	
NH145	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1997	B地区	-	第3層	-	
NH146	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1997	B地区	-	第4層	-	
NH147	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1997	F地区	土抗1	下層	-	
NH148	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1998	A・C調査区	-	第1層	-	
NH149	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1998	A・C調査区	土抗8	埋土	-	
NH150	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1998	C調査区	-	廃絶期の層	-	
NH151	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1998	-	-	第2層	-	
NH152	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	1999	H地区	-	第4層	-	
NH153	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	溝7	上層	-	
NH154	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	溝7	上層	-	
NH155	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	-	旧耕地	-	
NH156	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区5 S35-2	-	埋め戻し土	-	
NH157	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	-	旧耕地	-	
NH158	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	-	旧耕地	-	
NH159	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	-	旧耕地	-	
NH160	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区2	-	旧耕地	-	
NH161	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	調査区5 E	-	公園造成土	-	
NH162	-	-	軒平瓦P-平瓦Ⅲ2 Za	2000	-	-	表採	-	

丸瓦一覧表

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
玉縁1	24	85	玉縁I2 Za	1984	14h	溝1	上層	布袋ハ玉縁3	
玉縁2	24	85	玉縁I2 Za	2000	調査区3 S	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁2	
玉縁3	24	-	玉縁I2 Za	2000	調査区3 S	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	
玉縁4	25	-	玉縁I2 Za	2000	調査区3 S	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	
玉縁5	25	60	玉縁I2 Za	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ハ玉縁1	軒丸瓦A-玉縁I2Za群の丸瓦部
玉縁6	25	60	玉縁I2 Za	2000	調査区3 S	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	
玉縁7	25	60	玉縁I2 Za	2000	調査区6	-	白鳳期整地土	布袋ハ玉縁0	
玉縁8	25	86	玉縁I31 Za [J1b]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋レ玉縁1	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
玉縁9	26	86	玉縁 I 321 Za [J1a]	2000	調査区 5 C	—	公園造成土	布袋レ玉縁 0	
玉縁10	26	86	玉縁 I 321 Za [J1a]	1969	II号窯	窯体内	—	布袋レ玉縁 2	四角形凹形器具痕・長方形凸形あり
玉縁11	26	—	玉縁 I 321 Za [J1a]	1985	II号窯	窯体外	灰層	布袋レ玉縁 0	
玉縁12	26	160	玉縁 I 321 Za [J1a]	1669	窯	窯体内	—	布袋レ玉縁 2	四角形凸形器具痕あり
玉縁13	26	87	玉縁 I 321 Za [J1b]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋レ玉縁 3	四角形凸形器具痕あり
玉縁14	26	—	玉縁 I 321 Za [J1b]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋レ玉縁 3	四角形凸形器具痕あり
玉縁15	27	—	玉縁 I 321 Za [J1b]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋レ玉縁 0	
玉縁16	27	—	玉縁 I 321 Za [J1b]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋レ玉縁 3	
玉縁17	27	87	玉縁 I 321 Za [J1e]	1969	II号窯	煙道部	—	布袋レ玉縁 3	長方形凸形器具痕あり・煙道瓦
玉縁18	27	88	玉縁 I 321 Za [J1e]	1969	II号窯	煙道部	—	布袋レ玉縁 3	四角形凸形器具痕あり・煙道瓦
玉縁19	28	—	玉縁 I 322 Za [J1b]	2000	調査区 2	雨落溝	—	布袋レ玉縁 3	
玉縁20	28	—	玉縁 I 322 Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	—	布袋レ玉縁 3	
玉縁21	28	—	玉縁 I 322 Za [J1b]	2000	調査区 2	—	旧耕地	布袋レ玉縁 0	
玉縁22	28	—	玉縁 I 322 Za [J1b]	2000	調査区 5 C	—	公園造成土	布袋レ玉縁 3	
玉縁23	28	—	玉縁 I 323 Za [J1b]	2000	調査区 5 S35-1	—	埋め戻し土	布袋タ玉縁 1	
玉縁24	28	—	玉縁 I 323 Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	—	布袋タ玉縁 0	
玉縁25	28	—	玉縁 I 331 Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	—	布袋ツ玉縁 1	
玉縁26	28	—	玉縁 I 331 Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	—	布袋ツ玉縁 1	
玉縁27	28	—	玉縁 I 331 Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	—	布袋ツ玉縁 1	
玉縁28	28	—	玉縁 I 332 Za [J1b]	1984	15h	溝 1	上層	布袋ホ玉縁 1	
玉縁29	29	—	玉縁 I 332 Za [J1b]	2000	調査区 5 C	—	公園造成土	布袋タ玉縁 1	
玉縁30	29	—	玉縁 I 332 Za [J1b]	1984	6 g	区画溝 1	上層	布袋ホ玉縁 0	長方形凸形器具痕あり
玉縁31	29	—	玉縁 I 332 Za [J1b]	1997	F地区	—	第2層	布袋ト玉縁 1	
玉縁32	29	—	玉縁 I 332 Za [J1b]	1984	—	区画溝 1	上層	布袋ホ玉縁 0	長方形凸形器具痕あり
玉縁33	29	88	玉縁 I 332 Za [J1b]	1984	13h	溝 1	上層	布袋タ玉縁 0	
玉縁34	29	—	玉縁 I 332 Za [J1b]	1984	—	—	—	布袋ト玉縁 0	
行基 1	30	—	行基 I 1 Za [Aa]	1984	14i	溝 1	上層	布袋チ行基 2	
行基 2	30	89	行基 I 1 Za [Aa]	1985	I号窯	燃焼室・灰原	作業面造成土	布袋チ行基 1	焼きひずみ著しい
行基 3	30	89	行基 I 1 Za [Ab]	1988	C調査区	—	天平期整地土	布袋ワ行基 2	破れた後の布袋を使用
行基 4	30	89	行基 I 1 Za [Ad]	1988	B調査区	—	天平期整地土	布袋ニ行基 1	
行基 5	30	—	行基 I 1 Za [Ad]	1988	C調査区	—	天平期整地土	布袋ナ行基 1	
行基 6	30	—	行基 I 1 Za [Ad] (+Ad)	2000	調査区 3S	—	公園造成土	布袋ニ行基 2	
行基 7	31	90	行基 I 1 Za [Ae]	1985	I号窯	上段燃焼室北半	作業面造成土	布袋ニナナナナ行基 0	
行基 8	31	—	行基 I 1 Za [Ae]	1988	B調査区	—	天平期整地土	布袋ナ行基 1	
行基 9	31	—	行基 I 1 Za [Ae] (+Ae)	1988	B調査区	—	天平期整地土	布袋ナ行基 0	凹形器具痕あり・おそらく布袋ナ行基 1

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
行基10	31	—	行基 I 1 Za [Ae] (+Cn)	2000	調査区 5 S35-1	—	埋め戻し土	布袋ナ行基 0	
行基11	31	—	行基 I 1 Za [Ae]	2000	調査区 5 C	—	廃絶期の層	布袋ニ行基 1	
行基12	31	—	行基 I 1 Za [Af]	1998	B調査区	—	天平期整地土	—	円形器具痕あり
行基13	31	—	行基 I 1 Za [Af] (+Af)	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ナ行基 2	
行基14	31	—	行基 I 1 Za [Af] (+Ae)	1998	A調査区	—	天平期整地土	布袋ニ行基 0	円形器具痕あり
行基15	31	—	行基 I 1 Za [Af] (+Cn)	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋ニ行基 0	
行基16	31	—	行基 I 1 Za [Af]	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋ナ行基 0	布袋ナ行基 2 の可能性が高い
行基17	32	155	行基 I 1 Za [Ag]	2000	調査区 5 C・W	—	公園造成土	布袋ナ行基 1	
行基18	32	—	行基 I 1 Za [Ag] (+Ae)	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ニ行基 1	
行基19	32	90	行基 I 1 Za [Ag] (+Af)	1984	—	溝 1	上層	布袋ナ行基 1	
行基20	33	91	行基 I 1 Za [Aj]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ニ行基 3	焼きひずみ著しい
行基21	33	91	行基 I 1 Za [Aj]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ニ行基 3	
行基22	33	—	行基 I 1 Za [Ak]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ワ行基 1	
行基23	33	92	行基 I 1 Za [Ak]	1998	A調査区	—	天平期整地土	布袋ワ行基 0	
行基24	34	154	行基 I 1 Za [Ak]	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ム行基 2	
行基25	34	92	行基 I 1 Za [Ak]	1984	中央	—	第2層	布袋ム行基 0	
行基26	34	92	行基 I 1 Za [Ak]	1984	13g	区画溝1・溝1	上層	布袋ム行基 0	
行基27	34	93	行基 I 1 Za [Am]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋チ行基 0	
行基28	35	93・153	行基 I 1 Za [Am]	1985	I号窯	—	—	布袋チ行基 1	焼きひずみ著しい
行基29	35	94	行基 I 1 Za [Am]	1984	中央	溝 1	上層	布袋チ行基 5	四角形器具痕・焼きひずみが著しい
行基30	35	94	行基 I 1 Za [Am]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋チ行基 4	焼きひずみが著しい・粘土版重ね目上に指紋あり
行基31	36	95	行基 I 1 Za [Am]	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋チ行基 1	焼きひずみ著しい
行基32	36	—	行基 I 1 Za [Am]	1984	南端	溝 1	下層	布袋チ行基 1	
行基33	36	—	行基 I 1 Za [Am]	1997	B地区	—	第2層	布袋チ行基 0	軒丸ID-行基 I 1 Za [Am] 群の可能性が高い
行基34	36	95	行基 I 1 Za [Ba]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋チ行基 0	
行基35	36	—	行基 I 1 Za [Ba]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋チ行基 0	
行基36	36	—	行基 I 1 Za [Ba]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋チ行基 0	
行基37	37	—	行基 I 1 Za [Bc]	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋ワ行基 2	破れた後の布袋を使用
行基38	37	96	行基 I 1 Za [Bc]	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋ワ行基 2	破れた後の布袋を使用
行基39	37	96	行基 I 1 Za [Bc]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ワ行基 0	円形器具痕あり
行基40	38	97・153	行基 I 1 Za [Br]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ル行基 0	
行基41	38	97・154	行基 I 1 Za [Br]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋カ行基 0	円形器具痕あり
行基42	38	—	行基 I 1 Za [Br]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋カ行基 0	
行基43	38	—	行基 I 1 Za [Br]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ル行基 0	
行基44	38	—	行基 I 1 Za [Br]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ル行基 0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
行基45	38	97	行基 I 1 Za [Br]	2000	調査区 5 E-1	-	廃絶期の層	布袋レ行基 1	(軒丸147)と同じ布袋を使用
行基46	38	-	行基 I 1 Za [Bt]	1998	A・B調査区	-	第3層	布袋ニ行基 0	
行基47	38	-	行基 I 1 Za [Bt]	2000	調査区 6	-	天平期整地土	布袋ニ行基 0	
行基48	39	98	行基 I 1 Za [Cg]	1999	G地区	-	第3層	布袋ネ行基 1	
行基49	39	-	行基 I 1 Za [Cg]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 0	
行基50	39	-	行基 I 1 Za [Ch]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ネ行基 2	
行基51	39	-	行基 I 1 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 0	
行基52	39	98	行基 I 1 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 0	
行基53	39	-	行基 I 1 Za [Ch]	1984	中央	溝 1	下層	布袋ネ行基 0	
行基54	39	98	行基 I 1 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 2	円形器具痕あり
行基55	40	99	行基 I 1 Za [Cj]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ロ行基 0	
行基56	40	99	行基 I 1 Za [Cj]	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋ロ+ロ行基 1	軒丸瓦D群と同じ布袋を使用
行基57	40	100	行基 I 1 Za [Cj]	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋ロ+ロ行基 1	円形器具痕あり
行基58	41	99	行基 I 1 Za [Cj]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ロ+ロ行基 1	
行基59	41	-	行基 I 1 Za [Cj]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ロ+ロ行基 1	
行基60	41	99	行基 I 1 Za [Cj]	1984	14h	溝 1	上層	布袋ロ+ロ行基 1	
行基61	41	-	行基 I 1 Za [Cn]	2000	調査区 3 N	-	公園造成土	布袋ナ行基 0	
行基62	41	-	行基 I 1 Za [Cn]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ニ行基 0	
行基63	41	-	行基 I 1 Za [Cn]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ニ行基 2	
行基64	41	100	行基 I 1 Za [Jlb]	1984	6g・7g 区画溝 1	-	上・下層	布袋レ行基 1	
行基65	42	-	行基 I 1 Za [Jlb]	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	布袋ト行基 0	
行基66	42	-	行基 I 1 Za [Jlb]	1998	調査区 3 N	-	表土	布袋レ行基 1	
行基67	42	100	行基 I 1 Za [Jlc]	1997	A地区	瓦溜 1	埋土	布袋ト行基 1	
行基68	42	-	行基 I 1 Za [Jlf]	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	布袋タ行基 1	
行基69	42	-	行基 I 1 Za [J2ac]	2000	調査区 3	-	-	布袋ウ行基 1	
行基70	42	-	行基 I 1 Za [J2ac]	2000	調査区 5 W	-	公園造成土	布袋ウ行基 0	
行基71	42	-	行基 I 1 Za [J2ac]	2000	調査区 5 W-1	-	廃絶期の層	布袋ウ行基 0	
行基72	42	-	行基 I 1 Za [J2ad]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋ウ行基 0	
行基73	42	-	行基 I 1 Za [J2ad]	1997	B地区	土抗 1	上層	布袋ウ行基 0	
行基74	42	101	行基 I 1 Za [Aa]	1984	中央・14h	溝 1	上・下層	布袋チ行基 0	焼きひずみが著しい
行基75	43	101	行基 I 1 Za < i >	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋チ行基 0	焼きひずみが著しい
行基76	43	-	行基 I 1 Za < i >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋チ行基 0	焼きひずみが著しい
行基77	43	102	行基 I 1 Za < ii > (+Bt)	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ニ行基 1	円形器具痕有り
行基78	44	102・159	行基 I 1 Za < ii > (+Cn)	1998	トレンチ	-	天平期整地土	布袋ナ行基 1	
行基79	44	-	行基 I 1 Za < iii >	1984	-	-	表探	布袋ニ行基 0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
行基80	44	-	行基 I 1 Za < iii >	1984	14h	溝 1	下層	布袋ニ行基 0	おそらく布袋ニ行基 3
行基81	44	-	行基 I 1 Za < iv >	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋ム+ヨ行基 1	
行基82	44	-	行基 I 1 Za < iv >	1984	南端	溝 1	下層	布袋ム行基 2	籠みずみ著しい・袴か [A] 叩き目がある
行基83	44	-	行基 I 1 Za < iv >	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋ム行基 1	
行基84	45	-	行基 I 1 Za < v >	1985	I号窯	灰原	下層	布袋チ行基 0	
行基85	45	-	行基 I 1 Za < v >	1985	I号窯	灰原	下層	布袋チ行基 0	
行基86	45	-	行基 I 1 Za < vi >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋ル行基 1	凸面に砂がべつとり付着
行基87	45	-	行基 I 1 Za < vi >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ行基 1	
行基88	45	-	行基 I 1 Za < vii >	1997	D地区	-	第 4 層	布袋ネ行基 1	
行基89	45	-	行基 I 1 Za < vii >	1984	10f	溝 1	上層	布袋ネ行基 1	かすかに [Cg] 叩き目がある
行基90	45	-	行基 I 1 Za < viii >	1988	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 0	
行基91	45	-	行基 I 1 Za < viii >	1988	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 2	
行基92	46	-	行基 I 1 Za < ix >	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋ロ行基 0	
行基93	46	-	行基 I 1 Za < x >	1984	13h	溝 1	上層	布袋ネ行基 3	
行基94	46	-	行基 I 1 Za < x >	1988	B調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基 3	
行基95	46	-	行基 I 1 Za < x >	1984	10f	溝 1	上層	布袋ネ行基 0	布袋ネ行基 3 の可能性が高い
行基96	46	102	行基 I 1 Za < x >	1984	南端	-	第 2 層	布袋ネ行基 3	
行基97	47	-	行基 I 1 Za < x i >	2000	調査区 5 W	-	公園造成土	布袋レ行基 0	
行基98	47	-	行基 I 1 Za < x i >	1988	C調査区	-	天平期整地土	布袋レ行基 1	
行基99	47	103	行基 I 1 Za < x ii >	1984	中央	溝 1	下層	布袋チ行基 0	円形器具痕あり
行基100	47	103	行基 I 1 Za < x ii >	1984	南端	溝 1	上層	布袋チ行基 3	円形器具痕あり・破れる前の布袋を使用
行基101	48	104	行基 I 1 Za < x ii >	1985	I号窯	窯体内	壁面瓦積	布袋チ行基 3	中央部が破れた布を使用
行基102	48	104	行基 I 1 Za < x ii >	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋チ行基 3	中央部と広端部が破れた布を使用
行基103	48	105	行基 I 1 Za < x iii >	1985	I号窯	窯体内	壁面瓦積	布袋ヘ行基 1	凸面に「布ヘ」の圧痕あり
行基104	49	-	行基 I 1 Za < x iii >	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ヨ行基 1	
行基105	49	-	行基 I 1 Za < x iii >	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ヨ行基 1	
行基106	49	105	行基 I 1 Za < x iii >	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ヨ行基 0	
行基107	49	106	行基 I 1 Za < x iv >	1998	A・C調査区	-	天平期整地土	布袋ワ行基 3	
行基108	50	106	行基 I 1 Za < x v >	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ワ行基 2	破れる前の布袋を使用・軒瓦D群の瓦部
行基109	50	-	行基 I 1 Za < x v >	1989	II号窯	窯体内	-	布袋ワ行基 2	破れる前の布袋を使用
行基110	50	106	行基 I 1 Za < x v >	2000	調査区 5 S35-1	-	埋め戻し土	布袋ワ行基 2	破れる前の布袋を使用
行基111	50	107	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋リ行基 1	
行基112	50	107	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋リ行基 1	
行基113	50	107	行基 I 1 Za < x vi >	1998	B調査区	土抗 1	下層	布袋リ行基 1	布袋は裏側を使用
行基114	51	-	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋リ行基 2	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
行基115	51	-	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I 号窯	下部燃焼室	埋土	布袋リ行基 2	
行基116	51	-	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I 号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋リ行基 3	
行基117	51	-	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I 号窯	下部燃焼室	埋土	布袋リ行基 4	
行基118	51	107	行基 I 1 Za < x vi >	1999	G地区	-	第1~3層	布袋リ行基 5	
行基119	51	-	行基 I 1 Za < x vi >	1985	I 号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋リ+リ行基 0	
行基120	51	107	行基 I 1 Za < x vi >	2000	調査区 6	-	表土	布袋リ+リ行基 1	
行基121	51	108	行基 I 1 Za < x vii >	1985	I 号窯	窯体内・灰原	作業面造成土	布袋イ+リ行基 1	出土図面あり
行基122	52	-	行基 I 1 Za < x vii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋イ+リ行基 1	
行基123	52	-	行基 I 1 Za < x vii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋イ+リ行基 1	
行基124	52	-	行基 I 1 Za < x vii >	2000	調査区 5 C	-	公園造成土	布袋イ+リ行基 1	
行基125	52	-	行基 I 1 Za < x vii >	1985	I 号窯	下部燃焼室	埋土	布袋イ+リ行基 1	
行基126	52	-	行基 I 1 Za < x viii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 0	
行基127	52	108	行基 I 1 Za < x viii >	1985	I 号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ル行基 2	器具痕あり
行基128	53	-	行基 I 1 Za < x viii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 2	
行基129	53	-	行基 I 1 Za < x viii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 2	
行基130	53	-	行基 I 1 Za < x viii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 2	
行基131	53	108	行基 I 1 Za < x viii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 3	
行基132	54	-	行基 I 1 Za < x ix >	2000	調査区 5 S35-1	-	埋め戻し土	布袋ソ行基 1	
行基133	54	-	行基 I 1 Za < x ix >	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	布袋ソ行基 1	
行基134	54	-	行基 I 1 Za < x ix >	2000	調査区 5 S35-1	-	埋め戻し土	布袋ソ行基 0	
行基135	54	-	行基 I 1 Za < x x >	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 0	
行基136	54	-	行基 I 1 Za < x x >	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 4	
行基137	54	-	行基 I 1 Za < x x >	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ル行基 4	
行基138	54	109・154	行基 I 1 Za < x x i >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ラ行基 0	
行基139	54	109	行基 I 1 Za < x x i >	1985	I 号窯	灰原	下層	布袋ラ行基 1	
行基140	55	109	行基 I 1 Za < x x ii >	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋タ行基 0	
行基141	55	110	行基 I 1 Za < x x ii >	2000	調査区 2	-	旧耕土	布袋タ行基 2	
行基142	55	110	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	A地区	瓦溜 1	埋土	布袋タ行基 3	
行基143	55	110	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	D地区	瓦溜 2	埋土	布袋タ行基 3	
行基144	55	111	行基 I 1 Za < x x ii >	2000	調査区 5 S35-1	-	埋め戻し土	布袋タ+ホ行基 0	
行基145	56	111	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	D地区	瓦溜 2	埋土	布袋レ行基 1	
行基146	56	-	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	D地区	-	第4層	布袋レ行基 2	
行基147	56	-	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	D地区	瓦溜 2	埋土	布袋レ行基 2	
行基148	56	111	行基 I 1 Za < x x ii >	1984	12h	溝 1	上層	布袋レ行基 3	
行基149	56	-	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	D地区	瓦溜 2	埋土	布袋レ行基 0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
行基150	57	111	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	D地区	—	第4層	布袋レ行基0	
行基151	57	109	行基 I 1 Za < x x ii >	1997	A地区	瓦溜2	埋土	布袋レ行基0	
行基152	57	111	行基 I 1 Za < x x ii >	1984	13h	溝1	上層	布袋ト行基2	
行基153	57	—	行基 I 1 Za < x x iii >	2000	調査区 5 W-2	—	廃絶期の層	布袋ウ行基1	
行基154	57	111	行基 I 1 Za < x x iii >	2000	調査区 5 W-2	—	廃絶期の層	布袋ウ行基0	

平瓦一覧表

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平1	58	112・140	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	14i	溝1	上層	布袋ヌ平1	
平2	58	112	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	北端・南端	溝1	下層	布袋ヌ平1	
平3	59	113・141	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	中央	溝1	下層	布袋ヌ平1	凹形凹形器具痕あり
平4	59	113・153	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	13g	溝1	上層	布袋ヌ平2	
平5	60	114	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	13g	溝1	上層	布袋ヌ平1	平6と接合
平6	60	114	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	14h	溝1	上層	布袋ヌ平1	平5と接合
平7	60	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	北端・13h	溝1	上・下層	布袋ヌ平1	
平8	60	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	中央・13r	溝1	上層	布袋ヌ平3	
平9	61	115	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	13g	溝1	上層	布袋ヌ平0	隅切り瓦
平10	61	115	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	13g・13i	溝1	上層	布袋ヌ平1	隅切り瓦
平11	62	141	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	南端	溝1	上層	布袋ヌ平0	凹形凹形器具痕あり
平12	62	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ヌ平4	凹形凹形器具痕あり
平13	62	155	平瓦 II 0 Za [Aa]	1984	3e	区画溝1	上層	布袋ヌ平4	
平14	62	—	平瓦 II 0 Aa	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋ワ平2	
平15	62	—	平瓦 II 0 Za [Aa]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ワ平2	
平16	62	—	平瓦 II 0 Aa	1998	A調査区	—	天平期整地土	布袋ワ平1	平192と同じ布袋を使用
平17	62	—	平瓦 II 0 Aa	1984	2e	区画溝1	上層	布袋ワ+イ平1	
平18	63	155	平瓦 II 0 Za [Ab]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ヌ平0	
平19	63	—	平瓦 II 0 Ac	1997	B地区	土抗1	上層	布袋ハ平1	
平20	63	—	平瓦 II 0 Ac	1997	B地区	—	下層	布袋ハ平2	
平21	63	—	平瓦 II 0 Ac (+Ae)	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ハ平0+	平123・平303と同じ布袋を使用
平22	63	—	平瓦 II 0 Ac	2000	調査区 5 W	—	天平期整地土	布袋ヨ平1	
平23	63	155	平瓦 II 0 Ac	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ハ平0	
平24	63	—	平瓦 II 0 Za [Ac]	1984	中央	溝1	上層	布袋ハ平0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平25	63	155	平瓦II0Za [Ad] (+Ae)	2000	調査区5 N	-	-	布袋ヨ平0	
平26	63	-	平瓦II0Za [Ad] (+Bt)	1984	10f	溝1	上層	布袋ナ+ナ平0	
平27	64	155	平瓦II0Ae (+Ag)	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ナ+ナ平0	
平28	64	-	平瓦II0Za [Ae] (+Bt)	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ニ+ニ平0	瓦窯
平29	64	154	平瓦II0Za [Ae] (+Cn)	1984	-	溝1	上層	布袋ナ+ナ平0	瓦窯
平30	64	-	平瓦II0Za [Af] (+Ae)	1984	中央	溝1	下層	布袋ナ平0	
平31	64	-	平瓦II0Za [Af]	1984	14g	溝1	上層	布袋ヨ平0	
平32	64	155	平瓦II0Za [Af] (+Af)	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ヨ平0	
平33	65	116	平瓦II0Za [Ag]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋ニ平0	
平34	65	-	平瓦II0Za [Ag] (+Ag)	1969	II号窯	窯体内	-	布袋ナ平2	
平35	153・158	-	平瓦II0Za [Ag] (+Bt)	1984	-	溝1	上層	布袋ニ平1	
平36	65	-	平瓦II0Za [Ag] (+Cn)	1984	4d	溝2	上層	布袋ナ平0	
平37	66	116	平瓦II0Za [Ah]	1984	14h	溝1	上層	布袋ヨ+ム平1	
平38	66	117	平瓦II0Za [Ah]	1984	13g	溝1	上層	布袋ヨ+ム平1	
平39	67	155	平瓦II0Za [Ah]	1984	13h	溝1	上層	布袋ヨ+ム平1	
平40	67	-	平瓦II0Za* [Aj]	1984	14i	溝1	上層	布袋ヨ平0	
平41	67	155	平瓦II0Za* [Aj]	1984	13g	溝1	上層	布袋ヨ平0	
平42	68	117・156	平瓦II0Za [Ak]	1984	中央	溝1	下層	布袋ヨ平0	
平43	68	-	平瓦II0Za [Ak]	1984	12g	溝1	上層	布袋ヨ+ム平1	
平44	69	-	平瓦II0Za [Ak]	1984	13g	溝1	上層	布袋ヨ平0	凹形凹形器具痕あり
平45	69	118・141	平瓦II0Za [Ak]	1984	南端	溝1	上層	布袋ヨ平0	凹形凹形器具痕あり
平46	70	118・140	平瓦II0Za* [Ak]	1984	中央	溝1	上層	布袋ヨ平0	
平47	70	119	平瓦II0Za* [Ak]	1984	13h・13g	溝1	上層	布袋ヨ+ム平1	
平48	70	-	平瓦II0Za* [Ak]	1984	12h	溝1	上層	布袋ヌ平2	
平49	70	119	平瓦II0Za* [Ak]	1984	12g	溝1	上層	布袋ヨ平0	小型品
平50	71	119	平瓦II0Za [Am]	1984	13h	溝1	上層	布袋ヨ+イ平1	
平51	71	156	平瓦II0Za [Am]	1984	13i・14h	溝1	下層	布袋ヨ平0	
平52	71	154	平瓦II0Za [Am]	1984	3d	溝2	上層	布袋ヨ+イ平1	
平53	71	119	平瓦II0Za [Am]	1984	3e	溝2	上層	布袋ヨ+イ平1	
平54	72	120	平瓦II0Za [Ba]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ヨ+ム平1	
平55	72	120・156	平瓦II0Za [Ba]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ヨ+ム平1	
平56	72	120	平瓦II0Za [Ba]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ヨ平0	
平57	73	156	平瓦II0Za [Bb]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ル平0	
平58	73	-	平瓦II0Za [Bb]	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ル平0	
平59	73	-	平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区5 S34-1	-	埋め戻し土	布袋ル平0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平60	73	—	平瓦II0Za [Bb]	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋+ホル平0	
平61	73	—	平瓦II0Za [Bc] (+Bt)	1984	13h	溝1	上層	布袋+ホル平0	
平62	73	154・156	平瓦II0Bd	2000	調査区5W	—	公園造成土	布袋+ホル平0	
平63	73	—	平瓦II0Bd	2000	調査区5C	—	廃絶期の層	布袋+ホル平0	
平64	74	156	平瓦II0Be	2000	調査区5S35-1	—	埋め戻し土	布袋+ホル平0	[Be] 0段階
平65	74	141	平瓦II0Be	2000	調査区5E	—	公園造成土	布袋+ホル平0	[Be] 1段階・円形凹形器具痕あり
平66	74	—	平瓦II0Be	2000	調査区5W	—	公園造成土	布袋+ホル平0	[Be] 1段階
平67	74	164	平瓦II0Bf×Be	2000	調査区5C	—	公園造成土	布袋+ホル平0	[Bf] 1段階・[Be] 0段階
平68	74	156	平瓦II0Bf	2000	調査区5E	—	公園造成土	布袋+ホル平1	[Bf] 0段階
平69	74	—	平瓦II0Bf	2000	調査区5W	—	公園造成土	布袋+ホル平0	[Bf] 1段階
平70	74	157	平瓦II0Bf	2000	調査区5C	—	公園造成土	布袋+ホル平0	[Bf] 1段階
平71	74	157	平瓦II0Bg	2000	調査区5E	—	公園造成土	布袋+ホル平0	
平72	74	—	平瓦II0Bg	2000	調査区5E-2	—	公園造成土	布袋+ホル平0	
平73	75	157	平瓦II0Bh	2000	調査区5C	—	公園造成土	布袋+ホル平2	[Bh] 0段階
平74	75	—	平瓦II0Bh	2000	調査区5S35-1	—	埋め戻し土	布袋+ホル平0	[Bh] 0段階
平75	75	157	平瓦II0Bh	2000	調査区5W	—	公園造成土	布袋+ホル平0	[Bh] 1段階
平76	75	—	平瓦II0Bh	2000	調査区5W-2	—	廃絶期の層	布袋+ホル平0	[Bh] 1段階
平77	75	—	平瓦II0Bj	2000	調査区5E-2	—	廃絶期の層	布袋+ホル平0	
平78	76	—	平瓦II0Bj	2000	調査区5C	—	公園造成土	布袋+ホル平0	
平79	76	141・157	平瓦II0Bj	2000	調査区5S35-1	—	埋め戻し土	布袋+ホル平0	円形凹形器具痕あり
平80	76	—	平瓦II0Bj	1997	F地区	落ち込み	—	布袋+ホル平0	
平81	76	157	平瓦II0Bj	1984	14h	溝1	上層	布袋+ホル平0	凸面は粗に叩き締め
平82	76	—	平瓦II0Bk	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋+ホル平0	[Bk] 段階不明
平83	77	—	平瓦II0Bk	1997	F地区	—	第4層	布袋+ホル平0	[Bk] 段階不明・円形凹形器具痕あり
平84	77	141	平瓦II0Bk	1997	C地区	—	第3層	布袋+ホル平0	[Bk] 段階不明・円形凹形器具痕あり
平85	77	—	平瓦II0Bk	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋+ホル平0	[Bk] 段階不明・円形凹形器具痕あり
平86	77	141・154	平瓦II0Bk	1999	I地区	溝9	最下層	布袋+ホル平0	[Bk] 0段階・長方形器具痕あり
平87	77	157	平瓦II0Bk	2000	調査区2	溝5	—	布袋+ホル平0	[Bk] 0段階
平88	77	157	平瓦II0Bk	2000	調査区5E-2	—	廃絶期の層	布袋+ホル平0	[Bk] 1段階・長方形器具痕あり
平89	77	140	平瓦II0Bk	1984	13h	溝1	上層	布袋+ホル平0	[Bk] 0段階
平90	77	—	平瓦II0Bk	2000	調査区5E-1	—	公園造成土	布袋+ホル平1	[Bk] 0段階
平91	78	—	平瓦II0Bm	1997	F地区	—	第3層	布袋+ホル平0	
平92	78	—	平瓦II0Bm	1969	II号窯	窯体中央	—	布袋+ホル平0	
平93	78	154・157	平瓦II0Bm	1997	A地区	瓦溜2	—	布袋+ホル平0	
平94	78	—	平瓦II0Bm	1997	F地区	—	第2層	布袋+ホル平1	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平95	78	158	平瓦II0 Bn	1997	B地区	土抗1	上層	布袋タ平2	
平96	78	-	平瓦II0 Bn	2000	調査区2	溝5	-	布袋タ平0	
平97	78	-	平瓦II0 Bn	1997	B地区	土抗1	上層	布袋タ平0	
平98	78	-	平瓦II0 Bp	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
平99	78	-	平瓦II0 Bp	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
平100	78	-	平瓦II0 Bq	1998	B調査区	-	天平期整地土	-	凹形凹形器具痕あり
平101	79	140	平瓦II0 Za [Bq]	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋カ平1	
平102	79	-	平瓦II0 Bq	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ平2	
平103	79	-	平瓦II0 Bq	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ平3	
平104	79	-	平瓦II0 Bq	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋カ+ル平0	表面に砂がべつとり付着
平105	79	158	平瓦II0 Bq	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
平106	79	120	平瓦II0 Bq	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋カ平0	
平107	79	-	平瓦II0 Za [Br]	1985	I号窯	灰原	下層・表探	布袋ル平0	
平108	79	-	平瓦II0 Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル平0	
平109	80	-	平瓦II0 Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ソ平3	
平110	80	-	平瓦II0 Za [Br]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ル平1	
平111	80	121	平瓦II0 Bs	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ナ平0	
平112	80	121・158	平瓦II0 Bs (+Ae)	1984	13h	溝1	上層	布袋ナ+ナ平2	
平113	81	-	平瓦II0 Bs (+Ae)	2000	調査区5C	-	公園造成土	布袋ナ平1	
平114	81	-	平瓦II0 Za [Bs]	2000	調査区5W-2	-	廃絶期の層	布袋ヌ+ヌ平1	
平115	81	-	平瓦II0 Za [Bs]	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ヌ平5	
平116	81	-	平瓦II0 Za [Bs]	2000	調査区5W	-	公園造成土	布袋ヌ+ヌ平1	凹形凹形器具痕あり
平117	81	-	平瓦II0 Za [Bs](+Ae)	2000	調査区5C	-	公園造成土	布袋ヨ平0	
平118	81	-	平瓦II0 Bs (+Ch)	1997	B地区	-	第1層	布袋ナ平0	
平119	81	-	平瓦II0 Bs (+Ae)	1997	D地区	溝2	最下層	布袋ナ+ナ平0	
平120	81	-	平瓦II0 Za [Bs]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ヌ平0	
平121	82	158	平瓦II0 Ca	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ハ平0	
平122	82	-	平瓦II0 Ca	1985	I号窯	灰原	下層	-	
平123	82	-	平瓦II0 Ca	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ハ平0 †	平21・平303と同じ布袋を使用
平124	82	158	平瓦II0 Cb	2000	調査区2	溝5	-	布袋タ平0	
平125	82	-	平瓦II0 Cb	1997	B地区	土抗1	上層	布袋タ平0	
平126	82	-	平瓦II0 Cb	1997	D地区	溝2	-	布袋タ平1	
平127	82	-	平瓦II0 Cb	1997	B地区	土抗1	上層	布袋タ平1	
平128	82	158	平瓦II0 Cc	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋タ平0	
平129	82	141	平瓦II0 Cc	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	布袋タ平2	凹形凹形器具痕あり

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平130	82	-	平瓦 II 0 Cc	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋タ+タ平 I	
平131	82	-	平瓦 II 0 Cc	2000	調査区 5 E-1	-	公園造成土	布袋タ平 0	
平132	82	141	平瓦 II 0 Cc	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋タ平 0	長方形器具痕あり
平133	83	-	平瓦 II 0 Cd	1969	II号窯	上方東壁部	-	布袋タ平 0	
平134	83	159	平瓦 II 0 Cd	1997	D地区	瓦溜 2	下層	布袋タ平 0	
平135	83	-	平瓦 II 0 Ce	2000	C調査区	-	-	布袋ル平 0	
平136	83	159・164	平瓦 II 0 Ce×Ck	2000	調査区 5 E	-	公園造成土	布袋カ+ル平 I	
平137	83	-	平瓦 II 0 Za [Cf]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ソ平 0	
平138	83	159	平瓦 II 0 Cf	2000	調査区 5 E-1	-	公園造成土	布袋ソ平 0	
平139	83	-	平瓦 II 0 Cf	2000	調査区 5 W	-	盛土	布袋カ平 0	
平140	83	-	平瓦 II 0 Za [Cf]	2000	調査区 5 C	-	公園造成土	布袋カ平 0	
平141	83	139・140	平瓦 II 26 Za [Cg]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平142	83	139	平瓦 II 27 Za [Cg]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 2	
平143	84	139	平瓦 II 27 Za [Cg]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 2	
平144	84	-	平瓦 II 27 Za [Cg]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 0	
平145	84	-	平瓦 II 27 Za [Cg]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平146	84	139	平瓦 II 27 Za [Cg]	1985	I号窯	灰原	-	布袋ネ平 0	
平147	84	-	平瓦 II 20 Za [Cg]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 3	
平148	84	159	平瓦 II 20 Za [Cg]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 3	
平149	84	154	平瓦 II 20 Za [Cg]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 0	
平150	85	139	平瓦 II 25 Za [Ch]	1998	A調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平151	85	-	平瓦 II 27 Za [Ch]	2000	調査区 3 S	-	白鳳期整地土	布袋ネ平 0	扁平な瓦
平152	85	139	平瓦 II 27 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平153	85	-	平瓦 II 27 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平154	85	159	平瓦 II 27 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 0	
平155	85	-	平瓦 II 20 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平156	85	-	平瓦 II 20 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 3	
平157	85	-	平瓦 II 20 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 2	
平158	86	-	平瓦 II 20 Za [Ch]	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ平 1	
平159	86	-	平瓦 II 20 Za [Cj]	1984	中央	溝 1	上層	布袋ロ平 2	
平160	86	-	平瓦 II 20 Za [Cj]	1984	5 d	区画溝 1	上層	布袋ロ平 0	
平161	86	159	平瓦 II 20 Za [Cj]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ロ平 0	
平162	86	-	平瓦 II 20 Za [Cj]	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋ロ平 0	
平163	86	-	平瓦 II 20 Za [Cj]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ロ平 0	
平164	86	-	平瓦 II 20 Za [Cj]	1985	I号窯	灰原	下層	布袋チ平 3	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平165	86	—	平瓦 II 27 Za [Cj]	1984	中央	溝 1	下層	布袋ヲ平 2	
平166	87	—	平瓦 II 0 Ck	2000	調査区 5 N	—	—	布袋ソ平 1	円形凹形器具痕あり
平167	87	142	平瓦 II 0 Ck	1999	I 地区	溝 9	最下層	布袋ソ平 1	凸面に指紋が多く認められる
平168	87	—	平瓦 II 0 Ck	2000	調査区 5 W	—	公園造成土	布袋ソ平 0	サイズが特殊
平169	87	164	平瓦 II 0 Ck×Bj	2000	調査区 5	—	—	布袋ソ平 0	
平170	87	159	平瓦 II 0 Ck×Bj	2000	調査区 5 C	—	廃絶期の層	布袋ソ平 0	
平171	87	122・164	平瓦 II 0 Ck×Cm	2000	調査区 5 C	—	廃絶期の層	布袋ソ平 1	
平172	88	—	平瓦 II 0 Cm	1984	14i	溝 1	上層	布袋ソ平 0	円形凹形器具痕あり
平173	88	—	平瓦 II 0 Cm	1984	14i	溝 1	上層	布袋ソ平 0	
平174	88	—	平瓦 II 0 Cm	2000	調査区 5 E-1	—	公園造成土	布袋ソ平 0	
平175	88	159	平瓦 II 0 Cm	2000	調査区 5 W	—	公園造成土	布袋ソ平 1	
平176	88	164	平瓦 II 0 Cm×Be	2000	調査区 5 W	—	公園造成土	布袋ソ平 0	
平177	88	—	平瓦 II 0 Da	1984	13h	溝 1	上層	布袋ヲ平 0	円形凹形器具痕あり
平178	88	—	平瓦 II 0 Da	1998	B 調査区	—	天平期整地土	布袋ヲ平 3	円形凹形器具痕あり
平179	88	153	平瓦 II 0 Da	1998	C 調査区	—	天平期整地土	布袋ヲ平 0	窯壁補修瓦
平180	88	—	平瓦 II 0 Da	1969	II 号窯	北端煙道直下	—	布袋ヲ平 0	窯壁補修瓦
平181	88	160	平瓦 II 0 Da	1984	10f	溝 1	上層	布袋ヲ + ヲ平 0	円形凹形器具痕あり
平182	88	142	平瓦 II 0 Da	1969	II 号窯	北端煙道直下	—	布袋ヲ平 0	窯壁付着・窯壁補修瓦
平183	89	—	平瓦 II 0 Ea (+Bt)	1984	南端	溝 1	上層	布袋ヲ平 0	[Ea] 0 段階
平184	89	—	平瓦 II 0 Ea	1997	B 地区	—	第 4 層	布袋ヲ + ヲ平 0	[Ea] 1 段階
平185	89	—	平瓦 II 0 Ea	1997	F 地区	溝 7	—	布袋ヲ平 0	
平186	89	—	平瓦 II 0 Ea	2000	調査区 5 W-2	—	公園造成土	布袋ヲ + ヲ平 0	[Ea] 1 段階
平187	89	160	平瓦 II 0 Ea (+Ae)	1984	中央	溝 1	下層	布袋ヲ平 0	[Ea] 1 段階
平188	89	—	平瓦 II 0 Za [Ea]	2000	調査区 5 E-3	—	公園造成土	布袋ヲ + ヲ平 0	
平189	89	—	平瓦 II 0 Za [Ea]	1984	11g	溝 1	上層	布袋ヌ + ヲ平 0	
平190	89	—	平瓦 II 0 Za [Ea]	1998	B 調査区	—	天平期整地土	布袋ヨ平 0	
平191	90	—	平瓦 II 0 Za [Fa]	1985	I 号窯	灰原	下層	布袋ヲ平 0	
平192	90	—	平瓦 II 0 Za [Fa]	1985	I 号窯	灰原	下層	布袋ヲ平 1	平16と同じ布袋を使用
平193	90	160	平瓦 II 0 Za [Fa]	1984	4 d	区画溝 1	—	布袋ヲ平 0	
平194	90	—	平瓦 II 0 Za [Fa]	1969	II 号窯	窯体内北半上方	埋土	布袋ヲ平 0	
平195	90	160	平瓦 II 0 Za [Ga]	1985	I 号窯	上部燃室北半	作業面造成土	布袋リ平 1	
平196	90	—	平瓦 II 0 Za [Ga]	1985	I 号窯	窯体内	作業面造成土	布袋リ平 0	
平197	90	—	平瓦 II 0 Za [Ga]	1985	I 号窯	窯体内	作業面造成土	布袋リ平 0	
平198	90	—	平瓦 II 0 Za [Ga]	1985	I 号窯	窯体内	作業面造成土	布袋リ平 1	
平199	90	—	平瓦 II 0 Za [Ga]	1985	I 号窯	窯体内	作業面造成土	布袋リ平 0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平200	90	—	平瓦Ⅱ0 Za [Ha]	2000	調査区2	—	盛土	布袋レ平0	
平201	90	160	平瓦Ⅱ0 Za [Ha]	1997	B地区	土抗1	上層	布袋レ平0	
平202	90	—	平瓦Ⅱ0 Za [Ha]	2000	調査区3 E	—	—	布袋レ平0	
平203	90	—	平瓦Ⅱ0 Za [Ha]	1997	B地区	土抗1	—	布袋レ平0	
平204	91	122	平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	1997	B地区	土抗1	上層	布袋レ平0	
平205	91	160	平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	1969	Ⅱ号窯	燃焼室西半上	—	布袋レ平1	
平206	91	160	平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	1984	14h	溝1	上層	布袋レ平2	
平207	91	—	平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布袋ホ平2	
平208	91	—	平瓦Ⅱ1 Za [J1b]	1984	13i	溝1	上層	布袋レ平1	
平209	91	123・161	平瓦Ⅱ1 J1c	1997	A地区	土抗1	—	布袋レ平0	
平210	91	—	平瓦Ⅱ1 J1c	1969	Ⅱ号窯	—	—	布袋ホ平0	
平211	91	142	平瓦Ⅱ1 J1c	1997	C地区	溝9	—	布袋レ平0	
平212	92	123	平瓦Ⅱ1 J1d	1969	Ⅱ号窯	—	—	布袋レ平0	
平213	92	—	平瓦Ⅱ1 J1d	1997	D地区	瓦溜2	—	布袋レ平0	
平214	92	161	平瓦Ⅱ1 J1d	1969	Ⅱ号窯	燃焼室	上	布袋レ平0	
平215	92	—	平瓦Ⅱ1 J1d	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布袋レ平0	
平216	92	161	平瓦Ⅱ1 J1d	2000	調査区5 E	—	公園造成土	布袋レ平1	
平217	92	—	平瓦Ⅱ1 J1d	1997	B地区	土抗1	上層	布袋レ平0	
平218	92	—	平瓦Ⅱ1 J1d	1969	Ⅱ号窯	—	—	布袋レ平0	
平219	93	123	平瓦Ⅱ1 Za [J1e]	1969	Ⅱ号窯	北側煙出直下	—	布袋レ平0	長方形鉄皿形, および八角形凹形器具あり
平220	93	—	平瓦Ⅱ1 Za [J1e]	1969	Ⅱ号窯	北側煙出直下	—	布袋レ平0	
平221	93	—	平瓦Ⅱ1 J1e	1997	A地区	瓦溜2	—	布袋レ平0	
平222	93	161	平瓦Ⅱ1 J1e	1997	D地区	—	第4層	布袋レ平0	
平223	93	161	平瓦Ⅱ1 J1f	1997	A地区	瓦溜1	上層	布袋レ平0	
平224	93	—	平瓦Ⅱ1 J1f	1997	B地区	土抗1	下層	布袋レ平0	
平225	94	153	平瓦Ⅲ2 J2aa	2000	調査区5 W-2	—	廃絶期の層	布ホ	
平226	94	161	平瓦Ⅲ2 J2aa	1999	G地区	溝2	上層	布ウ	
平227	94	—	平瓦Ⅲ2 J2aa	1997	C地区	—	表土	布ウ	
平228	94	—	平瓦Ⅲ2 J2aa	1997	B地区	土抗1	—	布ウ	
平229	94	—	平瓦Ⅲ2 J2ab	1997	A地区	瓦溜2	—	布ウ	
平230	94	161	平瓦Ⅲ2 J2ab	1997	D地区	瓦溜2	下層	布ウ	
平231	94	—	平瓦Ⅲ2 J2ab	1997	F地区	—	表土	布ウ	
平232	94	—	平瓦Ⅲ2 J2ac	1997	B地区	土抗1	上層	布ホ	
平233	94	161	平瓦Ⅲ2 J2ac	1997	B地区	土抗1	上層	布ホ	
平234	94	154・161	平瓦Ⅲ2 J2ad	1998	A・C調査区	—	第4層	布ウ	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平235	95	124・162	平瓦Ⅲ2 J2ac	1997	D地区	—	第4層	布ツ	
平236	95	124・162	平瓦Ⅲ2 J2af	1984	14i・14h	溝1	上・下層	布ツ	
平237	95	125・162	平瓦Ⅲ2 J2ag	1969	Ⅱ号窯	煙道部	—	布ツ	
平238	96	—	平瓦Ⅲ2 J2ag	1969	Ⅱ号窯	北端煙道直下	—	布ツ	
平239	96	—	平瓦Ⅲ2 J2ag	1984	15i	溝1	上層	—	
平240	96	—	平瓦Ⅲ2 J2ag	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布ツ	
平241	96	125・162	平瓦Ⅲ2 J2ah (α)	1997	B地区	土抗1	上層	布ツ	
平242	96	126・162	平瓦Ⅲ2 J2ah (β)	1984	13i	溝1	上層	布ツ	叩き板裏面使用
平243	97	126・162	平瓦Ⅲ2 J2aj	1984	13h	溝1	上層	布ツ	
平244	97	162	平瓦Ⅲ2 J2ak	1969	Ⅱ号窯	—	上層	布ツ	
平245	97	—	平瓦Ⅲ2 J2ak	1997	D地区	瓦溜2	—	布ツ	
平246	97	127・162	平瓦Ⅲ2 J2am	1969	Ⅱ号窯	煙道部	—	布ツ	[J2am] 0段階・煙道瓦
平247	98	—	平瓦Ⅲ2 J2am	1969	Ⅱ号窯	北端	—	布ツ	[J2am] 0段階
平248	98	162	平瓦Ⅲ2 J2am	1997	B地区	土抗1	上層	布ツ	[J2am] 1段階
平249	98	127・163	平瓦Ⅲ2 J2an	1984	14i・15i	溝1	上層	布ツ	
平250	98	128・163	平瓦Ⅲ2 J2ap	1984	13h	溝1	上層	布ツ	
平251	121	148	平瓦Ⅲ2 J2ap	2000	調査区2	—	旧耕土	布ツ	道具瓦
平252	99	128	平瓦Ⅲ2 J2aq	1984	13h	溝1	上層	布ツ	[J2aq] 破階・両端部に手の圧痕が明確に認められる
平253	99	129・162・163	平瓦Ⅲ2 J2aq	1984	13h	—	—	布ツ	[J2aq] 破階・手の圧痕が明確に認められる
平254	99	129・163	平瓦Ⅲ2 J2aq	1984	—	溝1	上層	布ツ	[J2aq] 1段階
平255	100	130	平瓦Ⅲ2 J2aq	1984	13h	溝1	上層	布ツ	[J2aq] 1段階
平256	100	130	平瓦Ⅲ2 J2ar	1984	13h	溝1	上層	布ツ	
平257	100	163	平瓦Ⅲ2 J2ar	1984	13h	溝1	上層	布ツ	
平258	101	—	平瓦Ⅲ2 J2ar	1997	B地区	土抗1	上層	布ツ	
平259	101	131・163	平瓦Ⅲ2 J2as	1984	14h	溝1	上層	布ツ	
平260	101	—	平瓦Ⅲ2 J2as	1969	Ⅱ号窯	燃焼室	—	布ツ	
平261	101	163	平瓦Ⅲ2 J2at	1984	3c	区画溝1	上層	布ツ	
平262	101	163	平瓦Ⅲ2 J2au	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布ト	
平263	101	—	平瓦Ⅲ2 J2au	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	—	
平264	101	131	平瓦Ⅲ2 J2au	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布ト	
平265	102	132	平瓦Ⅲ2 J2au	2000	調査区5C	—	廃絶期の層	布ウ	大型品
平266	102	163	平瓦Ⅲ2 J2aw	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布ツ	
平267	102	164	平瓦Ⅲ2 J2ax	1984	—	区画溝1	下層	—	
平268	102	164	平瓦Ⅲ2 J2ay	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布ト	
平269	102	164	平瓦Ⅲ2 J2az	1969	Ⅱ号窯	窯体内	—	布ト	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平270	102	132	平瓦Ⅲ2 I2ba	1969	Ⅱ号窯	—	—	—	—
平271	103	141	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平1	凹形凹形器具痕あり
平272	103	132・141	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋り平0	凹形凸形器具痕あり
平273	103	133	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1997	A地区	瓦溜1	上層	布袋り平0	—
平274	104	—	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1985	I号窯	上部燃焼室	作業面造成土	布袋り平0	—
平275	104	153	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋り+イ平1	—
平276	104	153	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1985	I号窯	上部燃焼室	作業面造成土	布袋り平1	—
平277	104	—	平瓦Ⅱ0 Za < i >	2000	調査区 6 S34-5	—	埋め戻し土	布袋り+イ平1	—
平278	104	—	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	布袋り平0	—
平279	104	—	平瓦Ⅱ0 Za < i >	1985	I号窯	上部燃焼室	作業面造成土	布袋り平0	—
平280	105	—	平瓦Ⅱ0 Za < ii >	1984	4d	区画溝1	第1層	布袋り平0	—
平281	105	—	平瓦Ⅱ0 Za < ii >	1985	I号窯	燃焼室	—	布袋り平0	—
平282	105	—	平瓦Ⅱ0 Za < ii >	1985	I号窯	上部燃焼室	作業面造成土	布袋り平0	—
平283	105	—	平瓦Ⅱ0 Za < ii >	1985	I号窯	上部燃焼室	作業面造成土	布袋り平0	—
平284	105	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	1998	B・C調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	—
平285	105	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	—
平286	106	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	—
平287	106	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	—
平288	106	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	—
平289	106	—	平瓦Ⅱ0 Za < iii >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	凹形凹形器具痕あり
平290	107	133・141	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	13h	溝1	上層	布袋り平1	器具痕あり
平291	107	153	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	14i・14l	溝1	上層	布袋り平2	—
平292	107	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平0	—
平293	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	13h・14h	区画溝1・溝1	上層	布袋り平1	—
平294	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	13h	溝1	上層	布袋り+レ平0	—
平295	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	—	区画溝2	下層	布袋り+ホ平2	—
平296	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋り平1	—
平297	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	13h	溝1	上層	布袋り+ト平0	—
平298	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < iv >	1984	—	区画溝2	下層	布袋り平1	—
平299	108	—	平瓦Ⅱ0 Za < v >	1984	南端	溝1	上層	布袋りへ平2	—
平300	109	—	平瓦Ⅱ0 Za < v >	1985	I号窯	焼成室	作業面造成土	布袋りへ平2	—
平301	109	—	平瓦Ⅱ0 Za < v >	1984	—	溝1	上層	布袋りへ平2	隅切り瓦
平302	109	—	平瓦Ⅱ0 Za < v >	1984	10h	溝1	上層	布袋りへ平0	—
平303	109	153	平瓦Ⅱ0 Za < v >	2000	調査区 5 W	—	廃絶期の層	布袋りへ平0 †	—
平304	109	—	平瓦Ⅱ1 Za	1997	B地区	土抗1	下層	布袋り平0	—

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
平305	110	—	平瓦Ⅱ20 Za	1998	A調査区	—	天平期整地土	布袋ネ平4	
平306	110	—	平瓦Ⅱ20 Za	1985	I号窯	灰原	下層	布袋ネ平2	
平307	110	140	平瓦Ⅱ20 Za	1985	I号窯	調査区外灰原	下層	布袋ナ平0	分割界線が太い
平308	110	—	平瓦Ⅱ20 Za	1985	I号窯	灰原	最下層	布袋ロ平0	
平309	110	—	平瓦Ⅱ21 Za	1984	中央・12g・13g	溝1	上層	布袋ロ平1	
平310	111	134・140	平瓦Ⅱ21 Za	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ロ平0	
平311	111	134	平瓦Ⅱ21 Za	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ロ平0	
平312	112	135	平瓦Ⅱ21 Za	1984	19h	溝1	上層	布袋ロ平0	
平313	112	135	平瓦Ⅱ21 Za	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ロ平2	
平314	113	136	平瓦Ⅱ21 Za	1984	14g	溝1	上層	布袋ロ平2	
平315	113	—	平瓦Ⅱ21 Za	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ロ平1	
平316	114	136・153	平瓦Ⅱ21 Za	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ロ平1	
平317	114	137・140	平瓦Ⅱ22 Za	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ナ平5	分割界線が太い
平318	115	137・140	平瓦Ⅱ23 Za	1985	I号窯	窯体内	表採	布袋ロ平3	
平319	115	138	平瓦Ⅱ24 Za	1984	12h	溝1	上層	布袋ロ平1	
平320	116	—	平瓦Ⅱ24 Za	1984	13h	溝1	上層	—	
平321	116	138	平瓦Ⅱ24 Za	1985	I号窯	上部燃焼室北半	作業面造成土	布袋ロ平0	
平322	117	—	平瓦Ⅱ25 Za	1998	C調査区	—	天平期整地土	布袋ネ平0	
平323	117	—	平瓦Ⅱ27 Za	1985	I号窯	窯体内	作業面造成土	布袋ネ平0	
平324	117	—	平瓦Ⅱ28 Za	1998	A調査区	—	天平期整地土	布袋ネ平0	
平325	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ヌ平0	凹面ヘラケケズリ
平326	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区1	—	盛土	布袋ハ平0	
平327	117	140	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区1	—	表土	布袋ハ平0	
平328	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ヌ平0	
平329	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	—	
平330	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ヌ平0	
平331	117	140	平瓦Ⅱ3 Za	1998	B調査区	—	天平期整地土	布袋ハ平0	
平332	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ハ平0	
平333	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ヌ平0	
平334	117	153	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ハ平0	
平335	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ハ平0	
平336	117	—	平瓦Ⅱ3 Za	2000	調査区3 S	—	白鳳期整地土	布袋ハ平0	

道具瓦一覽表

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
垂木先1	118	143	垂木先瓦R	2000	調査区6	-	白鳳期整地土	-	
垂木先2	118	-	垂木先瓦R	1984	南端	溝1	上層	-	
垂木先3	118	-	垂木先瓦R	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
垂木先4	118	143	垂木先瓦S	1985	I号窯	灰原	下層	-	
垂木先5	118	-	垂木先瓦S	2000	調査区5 S35-1	-	埋め戻し土	-	
垂木先6	118	-	垂木先瓦S	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
垂木先7	118	-	垂木先瓦S	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
垂木先8	118	-	垂木先瓦S	1998	A・B調査区	-	第4層	-	
垂木先9	118	-	垂木先瓦S	1998	C調査区	-	天平期整地土	-	
垂木先10	118	-	垂木先瓦S	1998	B調査区	-	-	-	
垂木先11	118	143	垂木先瓦T	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	
垂木先12	118	143	垂木先瓦T	1985	I号窯	灰原	-	-	
垂木先13	118	-	垂木先瓦T	2000	A調査区	-	-	-	
垂木先14	118	143	垂木先瓦U	2000	調査区5 N	-	-	-	
垂木先15	118	-	垂木先瓦U	2000	調査区3	-	再建塔基壇上面	-	
垂木先16	118	-	垂木先瓦U	1985	I号窯	灰原	最下層	-	
垂木先17	118	143	垂木先瓦W	2000	調査区5 S34-1	-	-	-	
垂木先18	-	-	垂木先瓦S、あるいはT	2000	調査区6	-	白鳳期整地土	-	
鬘斗1	119	144	切鬘斗瓦II1 J1d	1969	II号窯	-	-	布袋レ平1	2つの小円形凸形器具痕あり
鬘斗2	119	147	切鬘斗瓦II1 J1d	1969	II号窯	窯体内	-	布袋レ平0	
鬘斗3	119	141・144	割鬘斗瓦II0 Aa	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ワ平1	円形凸形器具痕あり
鬘斗4	119	145	割鬘斗瓦II0 Za [Aa]	1984	13h	溝1	上層	布袋ヌ平1	
鬘斗5	119	145	割鬘斗瓦II0 Za [Ak]	1984	中央	溝1	上層	布袋ヨ平0	
鬘斗6	119	145	割鬘斗瓦II0 Za* [Ak]	1984	中央	溝1	下層	布袋ヨ平0	
鬘斗7	120	146	割鬘斗瓦II0 Bh	2000	調査区5 W	-	天平期整地土	布袋ソ平2	
鬘斗8	120	146	割鬘斗瓦II0 Za [Bs]	2000・1984	調査区5W-2・4d	区画溝1	廃絶期の層	布袋ヌ+ヌ平0	
鬘斗9	120	146	割鬘斗瓦II0 Ea (+Ae)	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ナ平0	[Ea] 1段階
鬘斗10	120	146	割鬘斗瓦II0 Ea (+Ae) (+Cn)	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ナ+ナ平0	[Ea] 0段階
鬘斗11	120	147・160	割鬘斗瓦II0 Ea (+Ae) (+Cn)	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ナ+ナ平1	[Ea] 0段階
鬘斗12	120	147	割鬘斗瓦II1 Za [J1d]	1997	B地区	土坑1	上層	布袋レ平0	
鬘斗13	121	147	割鬘斗瓦II1 Za	1984	7f	区画溝1	上層	布袋レ平0	
鬘斗14	121	147	割鬘斗瓦II20 Za	1998	B調査区	-	天平期整地土	布袋チ平5	小円形凸形器具痕あり
隅平1	121	148	隅平瓦III2 J2an	2000	調査区5 E-2	-	廃絶期の層	布ッ	
蝶羽1	122	149	蝶羽瓦一軒平瓦AA5-平瓦II0 Za < iii >	2000	調査区5 E-1	-	公園造成土	布袋カ平0	

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
蝶羽2	122	-	蝶羽瓦-軒平瓦AA5-平瓦II0Za<iii>	2000	調査区5S35-1	-	埋め戻し土	布袋カ平2	
蝶羽3	122	-	蝶羽瓦-軒平瓦AA5-平瓦II0Za<iii>	2000	調査区5E	-	公園造成土	-	
蝶羽4	122	-	蝶羽瓦-軒平瓦AA5-平瓦II0Za<iii>	2000	調査区5S	-	公園造成土	布袋カ平0	
蝶羽5	122	-	蝶羽瓦-平瓦II0Bj	1984	南	-	表探	-	
蝶羽6	122	-	蝶羽瓦-平瓦II0Bj	2000	調査区5E	-	公園造成土	布袋ソ平0	
蝶羽7	122	149	蝶羽瓦-平瓦II1Za [J1e]	1969	II号窯	窯体内	-	布袋レ平0	
蝶羽8	122	-	蝶羽瓦-平瓦II0Za<iv>	1985	I号窯	-	-	布袋タ平0	
蝶羽9	122	-	蝶羽瓦-平瓦II0Za<i>	1997	B地区	-	第3層	布袋リ平0	
蝶羽10	-	-	蝶羽瓦-平瓦II0Za [Bb]	2000	調査区1	-	表土	-	
蝶羽11	-	-	蝶羽瓦-平瓦II0Za<iii>	2000	調査区3	-	-	布袋カ平0	
面戸1	122	-	切面戸瓦-行基I1Za<vi>	2000	調査区2	溝1	上層	布袋カ行基0	
面戸2	122	-	切面戸瓦-行基I1Za<xviii>	1984	-	溝1	下層	布袋ル行基0	
面戸3	122	149	切面戸瓦-玉縁I321Za [J1b]	1985	I号窯	灰原	-	布袋レ玉縁0	
面戸4	122	149	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	2000	調査区2	-	旧耕土	布袋タ玉縁0	
面戸5	122	-	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	-	布袋タ玉縁0	
面戸6	122	-	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	2000	調査区2	-	旧耕土	布袋タ玉縁0	
面戸7	122	-	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	2000	調査区2	-	旧耕土	布袋タ玉縁0	
面戸8	122	-	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	-	布袋タ玉縁0	
面戸9	122	149	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	1969	II号窯	窯体内	-	布袋タ玉縁0	
面戸22	-	-	切面戸瓦-玉縁I323Za [J1b]	1969	II号窯	-	-	布袋タ玉縁0	
面戸10	123	149	割面戸瓦-行基I1Za [Af] (+Cn)	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ニ行基0	円形凸形器具痕有り
面戸11	123	149	割面戸瓦-行基I1Za [Ak]	1997	D地区	瓦溜2	上層	布袋ワ行基0	
面戸12	123	-	割面戸瓦-行基I1Za [Ak]	1984	13h	溝1	上層	布袋ワ行基1	
面戸13	123	-	割面戸瓦-行基I1Za [Ak]	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	布袋ワ行基0	
面戸14	123	-	割面戸瓦-行基I1Za [J2ad]	1997	B地区	土抗1	上層	布袋ウ行基0	
面戸15	123	-	割面戸瓦-行基I1Za<ii>	2000	調査区5W	-	公園造成土	布袋ナ行基0	
面戸16	123	-	割面戸瓦-行基I1Za<ii>	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	布袋ナ行基1	
面戸17	123	-	割面戸瓦-行基I1Za<vii>あるいは<viii>	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基0	
面戸18	123	-	割面戸瓦-行基I1Za<viii>	2000	C調査区	-	-	布袋ネ行基0	
面戸19	123	149	割面戸瓦-行基I1Za<x>	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ネ行基0	
面戸20	123	-	割面戸瓦-行基I1Za<xv>	1998	C調査区	-	天平期整地土	布袋ワ行基0	
面戸21	123	-	割面戸瓦-行基I1Za<xix>	2000	調査区5C	-	廃絶期の層	布袋ソ行基0	
鴟尾1	124	150	薄手鴟尾群	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	右側面(背稜部・胴部・縦帯部)
鴟尾2	124	-	薄手鴟尾群	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	右側面(胴部・縦帯部・髯部)
鴟尾3	124	-	薄手鴟尾群	1998	A調査区	-	天平期整地土	-	右側面(胴部・縦帯部・髯部)

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
鴉尾4	124	—	薄手鴉尾群	1998	—	—	第2層	—	右側面(縦帯部・鱗部)
鴉尾5	124	—	薄手鴉尾群	1998	B調査区	—	天平期整地土	—	右側面(縦帯部・鱗部)
鴉尾6	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	右側面(胴部・縦帯部)
鴉尾7	124	150	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	右側面(背稜部・胴部)
鴉尾8	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	右側面(胴部)
鴉尾9	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	第5層	—	右側面(鱗部端)
鴉尾10	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	左側面(鱗部端)
鴉尾11	124	150	薄手鴉尾群	1998	A・B・C調査区	—	表層・第3層・第4層	—	右側面(鱗部)
鴉尾12	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	左側面(鱗部)
鴉尾13	124	—	薄手鴉尾群	2000	調査区6 S34-5	—	埋め戻し土	—	右側面(鱗部)
鴉尾14	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾15	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾16	124	—	薄手鴉尾群	1998	C調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾17	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾18	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾19	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	第2層	—	(鱗部)
鴉尾20	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾21	124	—	薄手鴉尾群	2000	調査区1	—	表土	—	(鱗部)
鴉尾22	124	—	薄手鴉尾群	1998	C調査区	—	第5層	—	(鱗部)
鴉尾23	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾24	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾25	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾26	124	—	薄手鴉尾群	1998	B調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾27	124	—	薄手鴉尾群	1998	C調査区	—	天平期整地土	—	(鱗部)
鴉尾28	124	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	右側面(鱗部端)
鴉尾29	124	151	薄手鴉尾群	1998	A・C調査区	—	天平期整地土	—	左側面(鱗部)・(腹部)
鴉尾30	125	151	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾31	125	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾32	125	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾33	125	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾34	125	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾35	125	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾36	125	—	薄手鴉尾群	1998	A調査区	—	天平期整地土	—	(腹部)
鴉尾37	125	151	厚手鴉尾群	1998	A・C調査区	—	第5層	布タ	左側面(胴部・縦帯部の基底部)
鴉尾38	125	151	厚手鴉尾群	1998	A・C調査区	—	第4層	—	(鱗部)

遺物番号	図版	写真	分類名(群)	調査年度	出土地点	出土遺構	出土層位	布袋	備考
鷓尾39	125	-	厚手鷓尾群	1998	A調査区	-	第5層	-	(鱗部)
鷓尾40	125	-	厚手鷓尾群	1998	B調査区	土抗1	下層	-	左側面(鱗部端)
鷓尾41	125	-	厚手鷓尾群	2000	調査区3S	-	公園造成土	-	(腹部)
鬼瓦1	125	-	鬼瓦	1998	B調査区	土抗2	-	-	
隅木蓋1	125	152	隅木蓋瓦	2000	調査区6 S34-5	-	埋め戻し土	-	
埴1	125	152	方形埴1Ba群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
埴2	125	-	方形埴1Ba群	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
S9	-	-	方形埴1Ba群	1985	I号窯	下部燃焼室	-	-	
埴3	126	152	方形埴1C群	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
埴4	126	-	方形埴1C群	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
S10	-	-	方形埴1C群	1985	I号窯	下部燃焼室	埋土	-	
埴5	126	-	方形埴1Z群	1985	I号窯	灰原	最下層	-	
S11	-	-	方形埴1Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S12	-	-	方形埴1Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S13	-	-	方形埴1Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S14	-	-	方形埴1Z群	1985	I号窯	-	表採	-	
S15	-	-	方形埴1Z群	2000	調査区5W	-	公園造成土	-	
埴6	126	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	-	作業面造成土	-	
S16	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S17	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S18	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S19	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S20	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S21	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S22	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S23	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S24	-	-	方形埴2Z群	1985	I号窯	-	表採	-	
S25	-	-	方形埴2Z群	1984	13h	溝1	-	-	
埴7	126	-	方形埴3Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S26	-	-	方形埴3Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S27	-	-	方形埴3Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S28	-	-	方形埴3Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S29	-	-	方形埴3Z群	1985	I号窯	灰原	下層	-	
S30	-	-	方形埴3Z群	1984	8f	溝1	上層	-	
埴8	126	152	格座間埴群	1985	I号窯	灰原	最下層	-	

お亀石古墳の石材の石種と採石地

奥田 尚

お亀石古墳の石槨・前室・敷石に使用されている石材の石種を肉眼で観察した。観察の結果と石材の推定される採石地について述べる。

石槨の石材

石槨は刳抜式家形石棺の小口部に穴をあけ、石槨としたような形のもので、石槨の上面には縄掛け突起が付いている。石槨を上面から見れば、突起が頭・足・尾になり亀のようにも見える。石槨の上部（棺蓋）は凝灰角礫岩で、石槨の下部（棺身）も凝灰角礫岩である。小口部の穴を閉塞する石栓は黒雲母石英安山岩である。石槨の石材は観察場所によって構成礫が少し異なる。各石種の特徴と推定される採石地について述べる。

棺蓋の凝灰角礫岩：西北隅の北側斜面、南西の突起の上面の二箇所を観察した。

西北隅の北側斜面；色は灰色である。構成粒は流紋岩・松脂岩・安山岩・泥岩？・凝灰岩である。流紋岩は青灰色、粒形が亜円、粒径が0.5～1 cm、量のごくごく僅かで、石基がガラス質である。松脂岩は黒色、粒形が亜角、粒径が0.5～4 cm、量のごくごく僅か、石基がガラス質である。安山岩は褐色・灰色のものがある。いずれも石基がガラス質である。褐色の安山岩は、粒形が角、粒径が0.5～3 cm、量が中である。灰色の安山岩は、粒形が角、粒径が0.5～10 cm、量のごく僅かである。泥岩？は茶褐色で、粒形が亜円、粒径が0.5～1.5 cm、量が僅かである。凝灰岩は褐色と黄土色のものがある。褐色の凝灰岩は、粒形が角、粒径が0.5～6 cm、量が僅かで、基質が緻密で軟らかい。黄土色の凝灰岩は粒形が亜角、粒径が0.5～3 cm、量が中で、基質が緻密で軟らかい。基質は細粒の粒からなり、緻密である。

南西の突起の上面；色は灰色である。構成粒は流紋岩・松脂岩・安山岩・凝灰岩・片麻状黒雲母花崗岩である。流紋岩は青灰色、粒形が亜円、粒径が0.5～1 cm、量が僅かで、石基がガラス質である。松脂岩は黒色、粒形が亜角、粒径が0.5～1 cm、量が僅か、石基がガラス質である。安山岩は褐色・茶褐色・灰色のものがある。いずれも石基がガラス質である。褐色の安山岩は、粒形が角、粒径が0.5～1.5 cm、量が僅かである。茶褐色の安山岩は、粒形が角、粒径が0.5～8 cm、量が中である。灰色の安山岩は、粒形が角、粒径が0.5～2 cm、量が僅かで、石基がガラス質である。凝灰岩は褐色と黄土色のものがある。褐色の凝灰岩は、粒形が角、粒径が0.5～1.5 cm、量が僅かで、基質が緻密である。黄土色の凝灰岩は粒形が角、粒径が0.5～1.5 cm、量が僅かで、基質が緻密である。片麻状黒雲母花崗岩は突起の加工時に削られており、全形が認められないが、白色で、粒形が角、粒径が12 cmで、鉱物粒が粗粒である。基質は細粒の粒からなり、緻密である。

棺身の凝灰角礫岩：石室内の右上の部分で観察した。色は灰色である。構成粒は流紋岩・松脂岩・安山岩・アプライト・凝灰岩である。流紋岩は青灰色、粒形が亜円、粒径が0.5～1 cm、量のごくごく僅かで、石基がガラス質である。松脂岩は黒色、粒形が亜角、粒径が0.5～1 cm、量が僅か、石基がガラス質である。安山岩は褐色と茶褐色のものがある。いずれも石基がガラス質である。

褐色の安山岩は、粒形が角、粒径が0.5～4 cm、量が多い。茶褐色の安山岩は、粒形が角、粒径が2～4 cm、量が中である。アプライトは灰白色、粒形が亜円、量がごくごく僅か、鉱物粒が中粒である。凝灰岩は灰白色、粒形が亜角、粒径が0.3～1 cm、量が中である。基質は細粒の粒からなり、緻密である。

以前は観察条件が悪く、細部の観察が出来にくかったが、今回は表面の付着物も比較的少なく、観察し易かった。観察した部分によって、若干構成粒種が異なるが、棺蓋・棺身共に安山岩質の火山礫が多く含まれる凝灰角礫岩で、棺蓋と棺身は同じ場所で採石された石と推定される。以前は流紋岩・松脂岩・軽石・花崗岩の礫を含む凝灰角礫岩で、中部ドンズルボー層の凝灰岩を推定していたが、流紋岩・松脂岩の殆どがガラス質の安山岩であることが分かり、泥岩？も含まれることから、このような岩相を示す凝灰角礫岩は二上山付近では産していないことが明らかとなった。片麻状黒雲母花崗岩の礫が含まれることから、基盤を構成する岩石が領家花崗岩類が分布するような場所が推定され、且つ、角張った凝灰岩や安山岩礫が含まれ、溶結していないことから、溶結凝灰岩を生じる阿蘇のような火山噴出物ではない。安山岩は瀬戸内火山岩石区に分布するようなガラス質の安山岩である。以上のような条件と岩相の比較から、小豆島の西方に位置する豊島から産する豊島石の岩相の一部に似ている。豊島石は石燈籠等の石造物として瀬戸内海周辺に見られる石である。しかし、石棺材としての類例を見聞していない。豊島石の産状の確認や岩相の比較をする必要がある。

石棺の黒雲母石英安山岩：色は灰色である。球状の発泡孔がごく僅かに見られ、粒径が1～1.5 mmである。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は褐色透明で、球状をなし、周囲が融食されている。粒径が3～6 mm、量がごく僅かである。長石は灰白色で、融食されたものと短柱状のものがある。融食された長石は球状をなし、粒径が5～7 mm、量が僅かである。短柱状の長石は粒径が1～5 mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1 mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は羽曳野市の鉢伏山の東斜面に分布する黒雲母を含む石英安山岩の岩相の一部に似ている。

前室の石材

前室に使用されている石材の石種は黒雲母花崗岩・角閃石閃緑岩・斑糲岩・黒雲母石英安山岩・流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩・流紋岩質火山礫凝灰岩A・流紋岩質火山礫凝灰岩B・片麻状斑状黒雲母花崗岩A・片麻状斑状黒雲母花崗岩B・片麻状斑状黒雲母花崗岩C・片麻状斑状柘榴石黒雲母花崗岩・片麻状閃緑岩である。黒雲母石英安山岩は大きな石の間隙を充填するために使用されている。また、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩は川原石様の石で、大きな石材の間隙を充填する石に使用されている。石槨の左側の上部に、前室との間を充填するために流紋岩質火山礫凝灰岩A（左側）・流紋岩質火山礫凝灰岩B（右側）の方形の加工石が充填材として使用されている。このことは柏原市平尾山古墳群第34支群8号墳の石槨と前室の間隙を充填するために太子町の牡丹洞付近の流紋岩質火山礫凝灰岩が使用されていることと共通点がある。石材は壁面を加工されているものが多く、側面や上面にも加工が及んでいるものも多い。石種の特徴と採石推定地について述べる。

黒雲母花崗岩：色は灰色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は岩橋山付近に分布する黒雲母花崗岩（政岡1978の平石花崗閃緑岩の一部^(註2)）の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川等に転がる様な形状をなすことから、平石谷で採石されたと推定される。

角閃石閃緑岩：色は灰色である。鉱物の粒径に変化がある。長石と角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～8mm、量が非常に多い。角閃石は黒色、粒径が2～6mm、量が中である。

このような岩相を示す石は太子町畑付近に分布する斑糲岩～閃緑岩（政岡1978の変ノーライトの一部）の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川に転がる様な形状をなすことから、太井川の谷で採石されたと推定される。

斑糲岩：色は灰緑色である。長石の短柱状の斑晶が目立つ。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～3mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～6mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が2～3mm、量が中である。

このような岩相を示す石は太子町畑付近に分布する斑糲岩～閃緑岩（政岡1978の変ノーライトの一部）の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川に転がる様な形状をなすことから、太井川の谷で採石されたと推定される。

黒雲母石英安山岩：色は灰色である。球状の発泡孔がごく僅かに見られ、粒径が1～1.5mmである。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は褐色透明で、球状をなし、周囲が融食されている。粒径が3～6mm、量がごく僅かである。長石は灰白色で、融食されたものと短柱状のものがある。融食された長石は球状をなし、粒径が5～7mm、量が僅かである。短柱状の長石は粒径が1～5mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は羽曳野市の鉢伏山の東斜面に分布する黒雲母を含む石英安山岩の岩相の一部に似ている。一部に自然面が見られる割石であり、岩相的に石栓の岩相と非常に似ていることから、一部の石材は石栓の加工破片である可能性もある。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩：色は暗灰色で、粒形が亜円である。溶結が顕著である。構成粒は流紋岩と長石である。流紋岩は灰白色、灰色で、粒形が亜角、粒径が2～8mm、量が中である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が1～3mm、量が多い。基質はガラス質である。

このような岩相を示す川原石様の石は当古墳の東方にある石川の川原に見られる。

流紋岩質火山礫凝灰岩A：色は灰白色である。構成粒は溶結凝灰岩・軽石である。溶結凝灰岩は顕著な溶結が見られ、茶褐色で、粒形が亜角・亜円、粒径が0.2～3cm、量が中、基質がガラス質である。軽石は白色、粒形が亜角、亜円、粒径が0.5～1.5cm、量が多い。基質は緻密である。

このような岩相を示す石は二上層群下部ドンズルボー層の凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては太子町の鹿谷寺跡北方付近が推定される。

流紋岩質火山礫凝灰岩B：色は淡茶褐色である。構成粒は溶結凝灰岩・軽石である。溶結凝灰岩は黒色と黄土色のものがある。黒色の溶結凝灰岩は顕著な溶結が見られ、粒形が亜角、粒径が0.2～1.5cm、量が中、基質がガラス質である。黄土色の溶結凝灰岩は微かに溶結が見られ、粒形が角、

粒径が0.5～1.5cm、量が中、基質が緻密である。軽石は灰白色、粒形が垂円、粒径が0.5～1.5cm、量が僅かである。基質はややガラス質である。

このような岩相を示す石は二上層群下部ドンズルボー層の凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては太子町の鹿谷寺跡北方付近が推定される。

片麻状斑状黒雲母花崗岩 A：色は灰色で、片麻状を示す。灰白色の長石の斑晶が散在する。斑晶は粒径が5～30mm、量が中である。基質は石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が0.5～2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が中である。

このような岩相を示す石は千早赤阪村水分から河南町平石にかけての平石谷の南部に分布する片麻状黒雲母花崗岩（政岡1978の片麻状花崗閃緑岩の一部）の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川等に転がる様な形状をなすことから、平石谷で採石されたと推定される。

片麻状斑状黒雲母花崗岩 B：色は灰色で、片麻状を示す。灰白色の長石の斑晶が散在する。斑晶は粒径が10～40mm、量が僅かである。基質は石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～6mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5～2mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。集合して1～2cmの細長いレンズ状をなす。

このような岩相を示す石は千早赤阪村水分から河南町平石にかけての平石谷の南部に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川に転がる様な形状をなすことから、平石谷で採石されたと推定される。

片麻状斑状黒雲母花崗岩 C：色は灰白色で、片麻状を示す。灰白色の長石の斑晶が散在する。斑晶は粒径が10～30mm、量が中である。斑晶と基質の長石とを明瞭に区分できにくい。基質は石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～8mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量が僅かである。細長いレンズ状に延びている。

このような岩相を示す石は河南町東山から平石にかけての平石谷の北部に分布する片麻状黒雲母花崗岩（政岡1978の平石花崗閃緑岩の一部）の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川に転がる様な形状をなすことから、平石谷で採石されたと推定される。

片麻状斑状柘榴石黒雲母花崗岩：色は灰色で、片麻状を示す。白色のアプライト脈が斜めにはいる。幅は6cmで、細粒から粗粒の石英と長石が噛み合っている。灰白色の長石の斑晶が散在する。斑晶は粒径が5～35mm、量が僅かである。基質は石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5～2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。柘榴石は濃赤色、球状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。柘榴石の粒が集合して、1mm程の球状をなす。

このような岩相を示す石は千早赤阪村水分から河南町平石にかけての平石谷の南部に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川等に転がる様な形状をなすことから、平石谷で採石されたと推定される。また、発掘時に出土しているアプライトの加工破片は脈状にみられるアプライトの岩相に似ている。この石の加工片の可能性もある。

片麻状閃緑岩：色は灰白色で、片麻状を示す。長石と角閃石が噛み合っている。長石は白色、粒径が3～15mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～10mm、量が僅かである。片麻状の方向に並ん

でいる。

このような岩相を示す石は太子町畑付近に分布する斑糲岩～閃緑岩（政岡1978の変ノークライトの一部）の岩相の一部に似ている。加工面以外は谷川に転がる様な形状をなすことから、太井川の谷で採石されたと推定される。

敷石の石種

前室の床面に敷かれている敷石の石種はアプライト・流紋岩・石英安山岩・砂岩・礫質砂岩・礫岩・チャートである。粒径は3～5cmで、拳大のものは見られない。これら石種の特徴について述べる。

アプライト：色は灰白色、粒形が亜角、量がごく僅かである。粗粒の石英と長石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色・灰色で、粒形が亜角・亜円、量が中である。石基がガラス質である。

石英安山岩：色は褐色で、粒形が角、量がごくごく僅かである。石英と長石の斑晶が見られる。加工破片である。

砂岩：色は灰白色、粒形が亜角・亜円で、量が中である。中粒砂からなる。

礫質砂岩：色は灰白色、粒形が亜角、量がごくごく僅かである。流紋岩の粒径が2～8mmの亜円礫が僅かに混じる。基質は中粒砂である。

礫岩：色は灰白色・灰色で、粒形が亜角・亜円、量がごく僅かである。流紋岩やチャートの粒形が2～6mmの亜円礫が多く含まれる。

チャート：色は茶灰色・灰色で、粒形が亜角・亜円、量が僅かである。

以上の様な岩相で、粒形が似ている石は、石英安山岩を除けば、当古墳の東方にある石川の川原石に似ている。しかし、石川の川原石には花崗岩類が半数を占めるが、敷石には殆ど見られなく、表面が滑らかで、円磨度が高い石が使用されている。採石時に意図的な採取がなされた為と推定される。

石材の採石について

石材の使用位置と採石地、他の古墳との関連性について述べる。

石槨材：石槨の棺身と棺蓋には同質の石が使用され、畿内では類例を見ない特異な石材である。形状は横穴式石室に安置されている剝抜式家形石棺と同じ形である。棺蓋の形状を示す類例としては鉢伏山南峰古墳がある。観音塚古墳や観音塚西古墳の石槨の上部石がどのような形状をしているかは今後の調査の結果を待たなければならない。これらの石槨材は鉢伏山付近の石英安山岩である。他地から運ばれているものではない。

石槨の閉塞に使用されている石栓の石英安山岩は鉢伏山の東斜面の石である。石栓のような閉塞石と石槨材との関係を見れば、二上山系の凝灰岩の石槨に石英安山岩の閉塞石が使用されている古墳は羽曳野市の小口山古墳や明日香村の牽牛子塚古墳であり、石英閃緑岩の石槨の内部閉塞に石英安山岩の閉塞石が使用されている例が河南町の塚廻古墳である。前室を持たない古墳や前室を持つ古墳があるが、閉塞石に石英安山岩が使用されていることに共通性がある。家形石棺の棺材に鉢伏山の石英安山岩が使用されている例を見ない。お亀石古墳が築造された時期に鉢伏山の石英安山岩

を閉塞石に使用することに何かの意味があったのだろう。

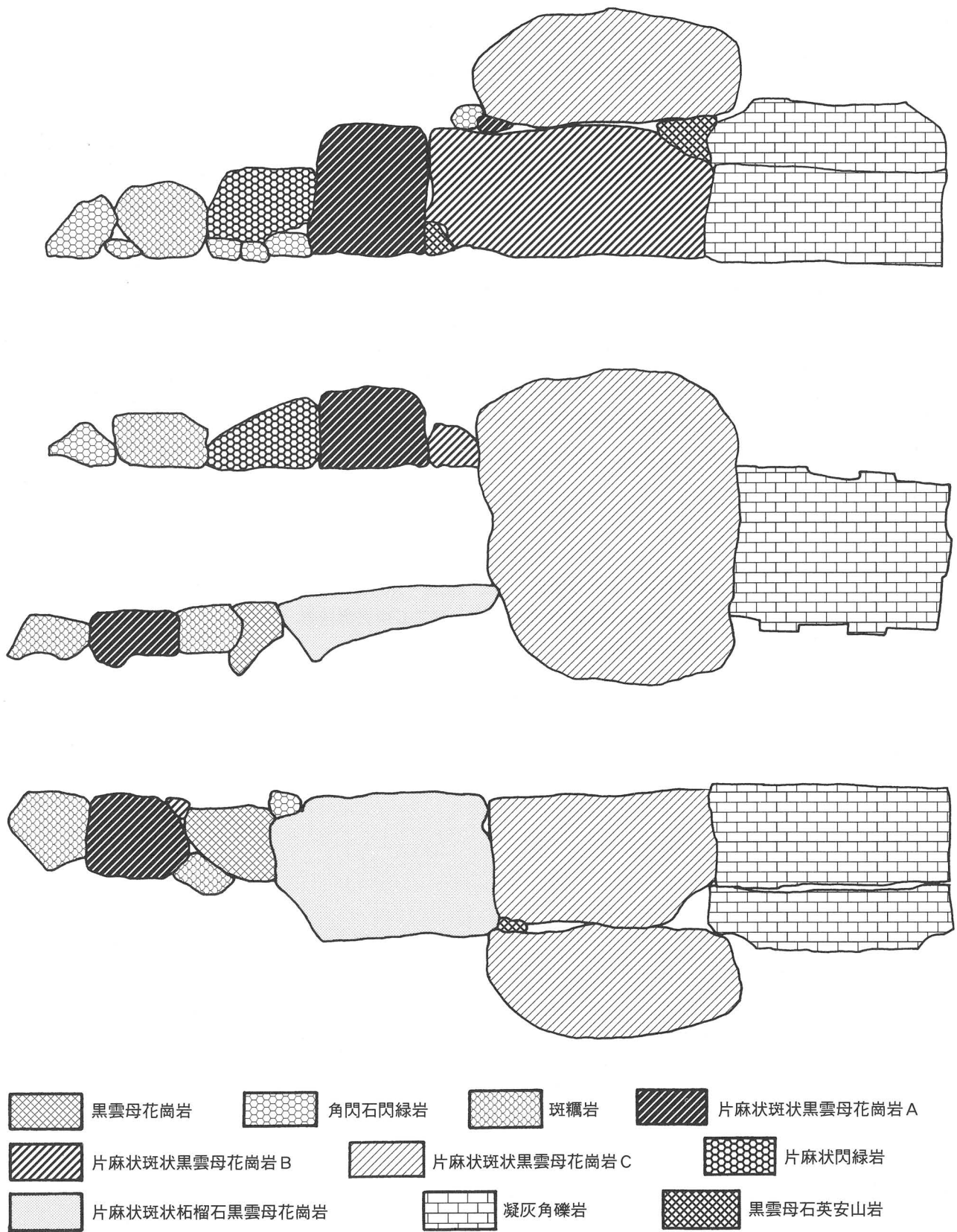
前室の石材：当古墳を築造している付近には石室を造れるような石材が産しないことから、他地から石材を運んだと言える。石室材は主として平石谷と太井川の谷で採石されたと推定される。また、大きな石の間隙を充填するために加工石片や石川の川原石や石英安山岩が使用されている。充填材としての石英安山岩を石川の川原よりも遠地となる鉢伏山付近の谷から石材として運ばねばならなかったのだろうか。二上山系の凝灰岩の使用位置については、前述したように類例となる古墳に平尾山古墳群13支群1号墳がある。石槨と前室の間隙部に二上山系の白色凝灰岩の加工石が充填されている。お亀石古墳の前室の西側壁の奥の充填材に火山礫凝灰岩が使用されているのも同様の例と言えよう。

敷石には石川の川原石が使用され、閉塞石にも川原石が使用されていたようである。

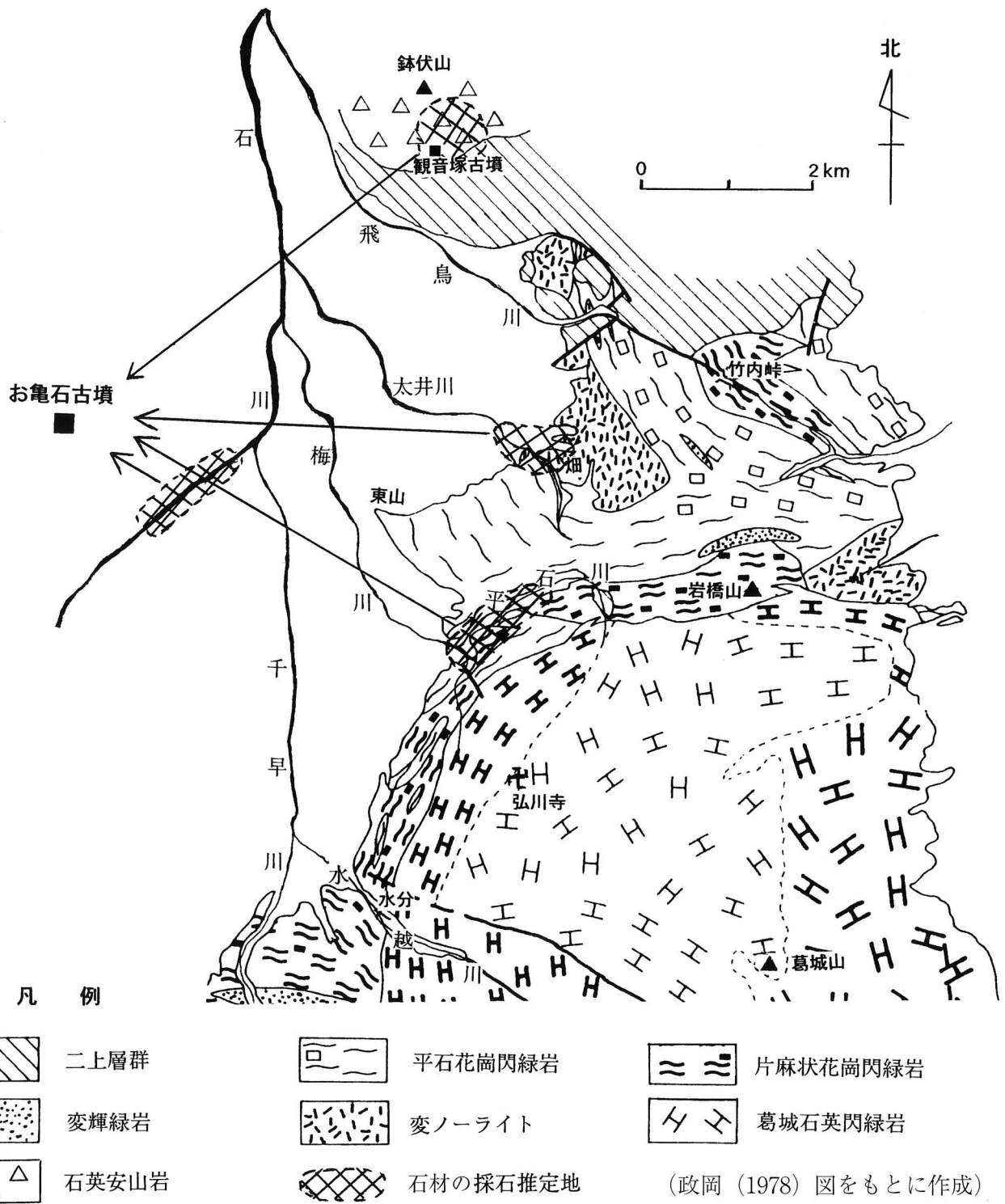
石槨と前室との関係を見れば、高取町の寺崎白壁塚古墳では石英閃緑岩を共に使用されており、ボウジ1号墳では斑状黒雲母花崗岩、平尾山古墳群第13支群1号墳では黒雲母花崗岩、観音塚古墳や鉢伏山南峯古墳等では石英安山岩が使用されている。石槨材と前室材が同じような場所から採石されているのが常であるが、お亀石古墳の場合のみが石材の使用で異なると言える。

【註】

- 1) 奥田尚 (1995) 終末期古墳の石材. 古代学研究, 132, pp.29~38. 古代学研究会
- 2) 政岡邦夫 (1978) 金剛山地における南部領家帯の地質. M T L 中央構造線、中央構造線の形成過程に関する総合研究－研究連絡紙－No.3, pp.81~86



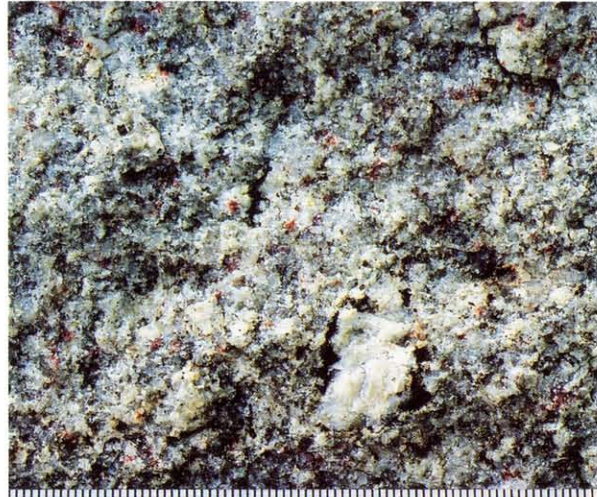
第1図 お亀石古墳の石材の石種



第2図 お亀石古墳の石材採石推定地



右の石材のアプライト脈と出土の屑石



片麻状斑状柘榴石黒雲母花崗岩



黒雲母花崗岩



黒雲母石英安山岩



凝灰角礫岩（棺蓋の南西の突起部）



凝灰角礫岩（棺蓋の北西部）



角閃石閃綠岩



斑糲岩



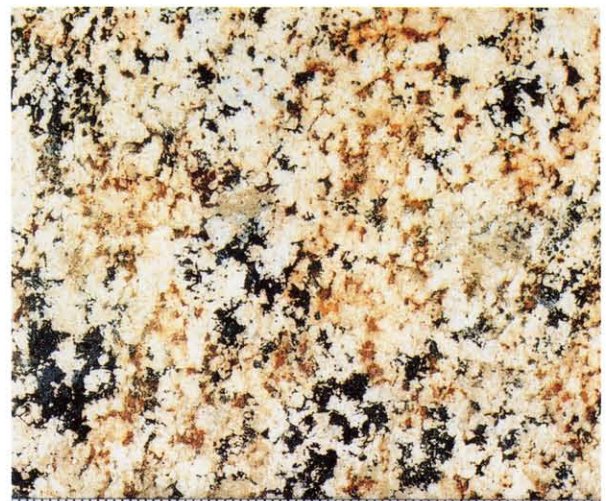
片麻状斑状黒雲母花崗岩 A



片麻状斑状黒雲母花崗岩 B



片麻状斑状黒雲母花崗岩 C



片麻状閃綠岩

Research Reports on Buried Cultural Properties in Tondabayashi, No. 35

Shindo-Haiji, Oganji-Ike-Gayo and Okameishi-Kofun
(Report of the Excavations)

2 0 0 3

Tondabayashi City, Board of Education

CONTENTS (TEXT)

Foreword

Introductory explanation

Aknowledgement

Chapter I Understandings on the sites

SS.1 Location of the sites and their environs

SS.2 Background of the excavations

PG.1 *Shindo-Haiji*(Relics of the ancient Buddhist temple of *Shindo*)

PG.2 *Oganji-Ike-Gayo*(Kilns for firing roof-tiles of *Oganji* Pond)

PG.3 *Okameishi-Kofun*(Tumulus of *Okameishi*)

Chapter II Results of the excavations

SS.1 *Shindo-Haiji*

PG.1 Excavation zones

PG.2 The results: inside of the temple

1 Pagoda

2 Main hall

3 Western hall

4 Eastern hall

5 Middle gate

6 Roofed semi-enclosed corridors

7 Earthen walls with roof

8 Walking paths within the temple

9 Flagpoles

PG.3 The results: outside of the temple

SS.2 *Oganji-Ike-Gayo*

PG.1 The kiln: no. I

PG.2 The kiln: no. II

SS.3 *Okameishi-Kofun*

PG.1 Tumuli on the *Habikino* Hills in the *Asuka* period

PG.2 Location of the tumulus of *Okameishi* and its excavation zones

PG.3 The results:

1 Zone: no.1

2 Zone: no.2

3 Zone: no.3

4 Zone: no.4

5 Zone: no.5

6 Zone: no.6

7 Zone: no.7

8 Zone: no.8

9 Zone: no.9

PG.4 Burial structures

1 Stone structure as a coffin

2 Front chamber and passageway to the chamber

3 Block stones for burials

4 Construction order of the structure

Chapter III Artefacts

SS.1 Roof-tiles found at the sites: *Shindo-Haiji* and *Oganji-Ike-Gayo*

PG.1 Aims and methods for the research---the characteristics of the materials and their readings---

PG.2 Definitions of the attributes and the main attributes

PG.3 Functional 'groups' and their remarks as attribute-assemblages

PG.4 Observation of the materials

1 Round eaves tiles

2 Flat eaves tiles

3 Round tiles

3-1 *Tamabuchi*-type: round roof-tiles with lip on the rear end

3-2 *Gyoki*-type: round roof-tiles slightly tapering at the rear end to fix into the upper tile

4 Flat tiles

5 Rafter-end tiles

6 Ridge tiles

7 Corner-end (triangle-shaped) tile

8 Barge (gable orverhang) tiles

9 Filler tiles or gap fill-tiles

10 Curved fishtails: ornamentals at ridge-end tiles

11 Ridge-end tile

12 Cover-tile of hip rafter

13 Non-roofing tiles

SS.2 Other artefacts found at the sites: *Shindo-Haiji* and *Oganji-Ike-Gayo*

PG.1 *Shindo-Haiji*

1 Pottery

2 Earthen objects

3 Glass beads

4 Metallic objects

- 5 Stone implements
 - PG.2 *Oganji-Ike-Gayo*
 - 1 Artefacts found inside the kilns
 - 2 Artefacts found around the kilns
 - SS.3 Artefacts found at *Okameishi-Kofun*
 - PG.1 *Sue* pottery related to the construction of *Okameishi-Kofun*
 - PG.2 Artefacts after the Medieval era
 - 1 Pottery and earthen objects
 - 2 Flat tiles
 - 3 Iron nails
 - 4 Coins
- 【Supplementary note】

Chapter IV Conclusion

- SS.1 Dating roof-tiles derived from the sites: *Shindo-Haiji* and *Oganji-Ike-Gayo*
- SS.2 The history of arrangement of buildings at *Shindo-Haiji*
- SS.3 Investigation on *Okameishi-Kofun*
 - PG.1 Reconstruction of the burial mound
 - PG.2 Process of making the tumulus

Bibliography

Appendix: Conclusive tables: lists of roof-tile-groups and their picking-up spots

Supplementary discussion by Hisashi OKUDA:

Identifications of the types of rock by naked eyes observation on stone materials from *Okameishi-Kofun* and of their sources.

English Table of Contents

Japanese Summary

English Summary

Korean Summary

FRONTISPIECES

1. Panorama of the area of excavations: *Shindo-Haiji*, *Oganji-Ike-Gayo* and *Okameishi-Kofun*
2. *top*, Foundation-platform of the pagoda, from the SE. : *Shindo-Haiji*
bottom, Foundation-stone of central pillar of the pagoda, from the SW. : *Shindo-Haiji*
3. *top*, Panorama of *Oganji-Ike-Gayo* (an aerial photograph)
bottom, *Oganji-Ike-Gayo*: nos. I and II

4. top, Panorama of *Okameishi-Kofun*, from the N.
bottom, *Okameishi-Kofun* from the passageway

TABLES

Tables:

1. List of features excavated in and around *Okameishi-Kofun*
2. Round eaves tiles dated to the *Asuka* period
3. Round-tiles: parts composed on round eaves tiles dated to the *Asuka* period
4. Kinds of cloth sacks used for making round tiles dated to the *Asuka* period
5. Kinds of paddles used for making round tiles dated to the *Asuka* period
6. Kinds of cloth sacks used for making flat tiles dated to the *Asuka* period
7. Round eaves tiles dated to the *Hakuho* and the *Tempyo* periods
8. Round-tiles: parts composed on round eaves tiles dated to the *Hakuho* period
9. Kinds of cloth sacks used for making round tiles dated to the *Hakuho* and the *Tempyo* periods
10. Flat eaves tiles of the *Hakuho* and the *Tempyo* periods
11. Flat-tiles: parts composed on flat eaves tiles dated to the *Hakuho* period
12. Kinds of cloth sacks used for making flat tiles dated to the *Hakuho* and the *Tempyo* periods
13. Dating the roof-tiles derived from the sites: *Shindo-Haiji* and *Oganji-Ike-Gayo*
14. Levels of basements of *Okameishi-Kofun*

FIGURES

1. Location of *Shindo-Haiji*, *Oganji-Ike-Gayo* and *Okameishi-Kofun*
2. Excavation zones of *Shindo-Haiji*
3. Plan and cross section of the foundation-platform of pagoda
4. Plan and cross section of the southern side of abandonment of roof-tiles used for the original pagoda
5. Stratigraphic profile of the trench: nos.1, 2 and 3 in the foundation-platform of pagoda
6. Foundation-stone of central pillar of pagoda
7. Plan and cross section of the reconstructed four pillars placed at the inner corners of pagoda
8. Plan and cross section of the foundation-platform of main hall(berm of southwestern corner)
9. Plan and cross section of the foundation-platforms of western hall, cloister (western sector)and precinct outer wall with roof (western sector)

10. Cross section of the foundation-platform of original western hall
11. Plan and cross section of the foundation-platform of eastern hall
12. Plan and cross section of the foundation-platform of Middle gate (the southern half)
13. Plan and cross section of the foundation-platform of cloister (eastern sector)
14. Plan and cross section of the earthen wall with roof (eastern sector)
15. Plan of the walking path between the pagoda and the main hall
16. Plan of the walking path between the Middle gate and the South gate
17. Plan of excavation zones outside of the temple
18. Cross section of the ditch: no.1 and the outer ditch: no.1 accompanying a building
19. Plan of the roof-tiles kilns: nos. I and II of *Oganji-Ike-Gayo*
20. Plan and cross section of the roof-tiles kilns: nos. I and II of *Oganji-Ike-Gayo*
21. Plan of the upper combustion chamber of the roof-tiles kiln: no. I of *Oganji-Ike-Gayo*
22. Cross section of the wall of roof-tiles kiln: no. II of *Oganji-Ike-Gayo*
23. Plan and cross section of the roof-tiles kiln: no. II of *Oganji-Ike-Gayo*
24. Survey map of the burial mound of *Okameishi-Kofun* and the excavation zones
25. Plan and cross section of the excavation zone: no.1, *Okameishi-Kofun*
26. Stratigraphic profile of the tumulus and burial mound in the excavation zone: no.1, *Okameishi-Kofun*
27. Stratigraphic profile of the tumulus and the burial mound in the excavation zone: no.2, *Okameishi-Kofun*
28. Plan and cross section of the excavation zone: no.2, *Okameishi-Kofun*
29. Plan and cross section of the excavation zone: no.3, *Okameishi-Kofun*
30. Stratigraphic profile of the tumulus and burial mound in the excavation zones: nos.3 and 7, *Okameishi-Kofun*
31. Stratigraphic profile of the basement of burial mound in the excavation zone: no.4, *Okameishi-Kofun*
32. Plan and cross section of the excavation zones: nos.4 and 5, *Okameishi-Kofun*
33. Plan and cross section of the excavation zone: no.6, *Okameishi-Kofun*
34. Stratigraphic profile of the basement of burial mound in the excavation zone: no.7, *Okameishi-Kofun*
35. Plan and cross section of the excavation zone: no.7, *Okameishi-Kofun*
36. Plan and cross section of the excavation zone: no.8, *Okameishi-Kofun*
37. Stratigraphic profile of the basement of burial mound in the excavation zone: no.8, *Okameishi-Kofun*
38. Plan and cross section of the excavation zone: no.9, *Okameishi-Kofun*
39. Plan and cross section of the stone structure for burials, *Okameishi-Kofun*
40. A sketch of the structure for burials, *Okameishi-Kofun*
41. Stone structure protecting the coffin, *Okameishi-Kofun*
42. Block stones for burials, *Okameishi-Kofun*

43. Classification of paddles: parallel-incised pattern
44. Classification of paddles: lattice-incised pattern
45. Classification of paddles: oblique-lattice-incised, parallel/oblique lines, and crossing lines patterns
46. Classification of paddles: piling diaper, hemp-like, lattice/oblique lines and cord-wrapped patterns
47. Classification of paddles: cord-wrapped pattern (2)
48. Classification of paddles: cord-wrapped pattern (3)
49. Classification of cloth sacks
50. Denomination of the parts for round eaves tiles
51. Denomination of the parts for round tiles
52. Denomination of the parts for flat eaves tiles
53. Denomination of the parts for flat tiles
54. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group A
55. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group B
56. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group C
57. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group D
58. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group E
59. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group F
60. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group G
61. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group H
62. Joint positions of the antefix with round tiles; round eaves tiles: group J
63. An example of curved fishtails: ornamental ridge-end tiles
64. Process of construction for *Shindo-Haiji*
65. The original arrangement of buildings of *Shindo-Haiji*: type *Shitennoji* (四天王寺式)
66. The final arrangement of buildings of *Shindo-Haiji*: type *Shindo-Haiji* (新堂麿寺式)
67. Reconstruct plan of the burial mound, *Okameishi-Kofun*
68. Central cross section of the burial mound, *Okameishi-Kofun*

FIGURES AND PHOTOGRAPHS FOR SUPPLEMENTARY DISCUSSION

Fig.1 Kinds of stones used for *Okameishi-Kofun*

Fig.2 Sources supposed of stone materials used for *Okameishi-Kofun*

Photo 1

Photo 2

CONTENTS (ILLUSTRATIONS)

PLATES

Plates

1. Location of *Shindo-Haiji*, *Oganji-Ike-Gayo*, *Okameishi-Kofun* including neighboring sites
2. Round eaves tiles, group A
3. Round eaves tiles, groups A, B
4. Round eaves tiles, group C
5. Round eaves tiles, group D
6. Round eaves tiles, group D
7. Round eaves tiles, group E
8. Round eaves tiles, group E
9. Round eaves tiles, group E
10. Round eaves tiles, group F
11. Round eaves tiles, group G
12. Round eaves tiles, group H
13. Round eaves tiles, group J
14. Round eaves tiles, group J
15. Round eaves tiles, group J
16. Round eaves tiles, groups K, L
17. Round eaves tiles, group L
18. Round eaves tiles, group L
19. Flat eaves tiles, groups AA1, AA2, AA3, AA4
20. Flat eaves tiles, group AA5
21. Flat eaves tiles, group AA5
22. Flat eaves tiles, groups AA6, AA7
23. Flat eaves tiles, group P
24. *Tamabuchi* type round tiles, group I 2 Za
25. *Tamabuchi* type round tiles, groups: I 2 Za; I 31 Za [J1b]
26. *Tamabuchi* type round tiles, groups: I 321 Za [J1a] ; I 321 Za [J1b]
27. *Tamabuchi* type round tiles, groups I 321 Za [J1b] ; I 321 Za [J1e]
28. *Tamabuchi* type round tiles, groups I 322 Za [J1b] ; I 323 Za [J1b] ; I 331 Za [J1b] ;
I 332 Za [J1b]
29. *Tamabuchi* type round tiles, group I 332 Za [J1b]
30. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Aa] ; I 1 Za [Ab] ; I 1 Za [Ad] ; I 1 Za [Ad]
(+Ad)
31. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Ae] ; I 1 Za [Ae] (+Ae); I 1 Za [Ae] (+Cn); I 1

- Za [Af] ; I 1 Za [Af] (+Ae); I 1 Za [Af] (+Af); I 1 Za [Af] (+Cn)
32. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Ag] ; I 1 Za [Ag] (+Ae); I 1 Za [Ag] (+Af)
33. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Aj] ; I 1 Za [Ak]
34. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Ak] ; I 1 Za [Am]
35. *Gyoki* type round tiles, group I 1 Za [Am]
36. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Am] ; I 1 Za [Ba]
37. *Gyoki* type round tiles, group I 1 Za [Bc]
38. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Br] ; I 1 Za [Bt]
39. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Cg] ; I 1 Za [Ch]
40. *Gyoki* type round tiles, group I 1 Za [Cj]
41. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [Cj] ; I 1 Za [Cn] ; I 1 Za [J1b]
42. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za [J1b] ; I 1 Za [J1c] ; I 1 Za [J1f] ; I 1 Za [J2ac] ; I 1 Za [J2ad] ; I 1 Za [Aa]
43. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < i > ; I 1 Za < ii > (+Bt)
44. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < ii > (+Cn); I 1 Za < iii > ; I 1 Za < iv >
45. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < v > ; I 1 Za < vi > ; I 1 Za < vii > ; I 1 Za < viii >
46. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < ix > ; I 1 Za < x >
47. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x i > ; I 1 Za < x ii >
48. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x ii > ; I 1 Za < x iii >
49. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x iii > ; I 1 Za < x iv >
50. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x v > ; I 1 Za < x vi >
51. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x vi > ; I 1 Za < x vii >
52. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x vii > ; I 1 Za < x viii >
53. *Gyoki* type round tiles, group I 1 Za < x viii >
54. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x ix > ; I 1 Za < x x > ; I 1 Za < x x i >
55. *Gyoki* type round tiles, group I 1 Za < x x ii >
56. *Gyoki* type round tiles, group I 1 Za < x x ii >
57. *Gyoki* type round tiles, groups I 1 Za < x x ii > ; I 1 Za < x x iii >
58. Flat tiles, group II 0 Za [Aa]
59. Flat tiles, group II 0 Za [Aa]
60. Flat tiles, group II 0 Za [Aa]
61. Flat tiles, group II 0 Za [Aa]
62. Flat tiles, groups II 0 Za [Aa] ; II 0 Aa
63. Flat tiles, groups II 0 Za [Ab] ; II 0 Ac; II 0 Ac(+Ae); II 0 Za [Ac] ; II 0 Za [Ad] (+Ae);
II 0 Za [Ad] (+Bt)
64. Flat tiles, groups II 0 Ae(+Ag); II 0 Za [Ae] (+Bt); II 0 Za [Ae] (+Cn); II 0 Za [Af] ; II 0
Za [Af] (+Af)
65. Flat tiles, groups II 0 Za [Ag] ; II 0 Za [Ag] (+Ag); II 0 Za [Ag] (+Bt); II 0 Za [Ag]
(+Cn)

66. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ah}]$
67. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ah}]$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Aj}]$
68. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ak}]$
69. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ak}]$
70. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za}^* [\text{Ak}]$
71. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Am}]$
72. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ba}]$
73. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Bb}]$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Bc}] (+\text{Bt})$; $\text{II } 0 \text{ Bd}$
74. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Be}$; $\text{II } 0 \text{ Bf}$; $\text{II } 0 \text{ Bf} \times \text{Be}$; $\text{II } 0 \text{ Bg}$
75. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Bh}$; $\text{II } 0 \text{ Bj}$
76. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Bj}$; $\text{II } 0 \text{ Bk}$
77. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Bk}$
78. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Bm}$; $\text{II } 0 \text{ Bn}$; $\text{II } 0 \text{ Bp}$; $\text{II } 0 \text{ Bq}$
79. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Bq}$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Bq}]$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Br}]$
80. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Br}]$; $\text{II } 0 \text{ Bs}$; $\text{II } 0 \text{ Bs} (+\text{Ae})$
81. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Bs} (+\text{Ae})$; $\text{II } 0 \text{ Bs} (+\text{Cn})$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Bs}]$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Bs}] (+\text{Ae})$
82. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Ca}$; $\text{II } 0 \text{ Cb}$; $\text{II } 0 \text{ Cc}$
83. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Cd}$; $\text{II } 0 \text{ Ce}$; $\text{II } 0 \text{ Ce} \times \text{Ck}$; $\text{II } 0 \text{ Cf}$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Cf}]$; $\text{II } 26 \text{ Za } [\text{Cg}]$; $\text{II } 27 \text{ Za } [\text{Cg}]$
84. Flat tiles, groups $\text{II } 27 \text{ Za } [\text{Cg}]$; $\text{II } 20 \text{ Za } [\text{Cg}]$
85. Flat tiles, groups $\text{II } 25 \text{ Za } [\text{Ch}]$; $\text{II } 27 \text{ Za } [\text{Ch}]$; $\text{II } 20 \text{ Za } [\text{Ch}]$
86. Flat tiles, groups $\text{II } 20 \text{ Za } [\text{Ch}]$; $\text{II } 20 \text{ Za } [\text{Cj}]$; $\text{II } 27 \text{ Za } [\text{Cj}]$
87. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Ck}$; $\text{II } 0 \text{ Ck} \times \text{Bj}$; $\text{II } 0 \text{ Ck} \times \text{Cm}$
88. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Cm}$; $\text{II } 0 \text{ Cm} \times \text{Be}$; $\text{II } 0 \text{ Da}$
89. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Ea}$; $\text{II } 0 \text{ Ea } (+\text{Ae})$; $\text{II } 0 \text{ Ea } (+\text{Bt})$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ea}]$
90. Flat tiles, groups $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Fa}]$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ga}]$; $\text{II } 0 \text{ Za } [\text{Ha}]$
91. Flat tiles, groups $\text{II } 1 \text{ Za } [\text{J1b}]$; $\text{II } 1 \text{ J1c}$
92. Flat tiles, group $\text{II } 1 \text{ J1d}$
93. Flat tiles, groups $\text{II } 1 \text{ J1e}$; $\text{II } 1 \text{ Za } [\text{J1e}]$; $\text{II } 1 \text{ J1f}$
94. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2aa}$; $\text{III } 2 \text{ J2ab}$; $\text{III } 2 \text{ J2ac}$; $\text{III } 2 \text{ J2ad}$
95. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2ae}$; $\text{III } 2 \text{ J2af}$; $\text{III } 2 \text{ J2ag}$
96. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2ag}$; $\text{III } 2 \text{ J2ah}$
97. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2aj}$; $\text{III } 2 \text{ J2ak}$; $\text{III } 2 \text{ J2am}$
98. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2am}$; $\text{III } 2 \text{ J2an}$; $\text{III } 2 \text{ J2ap}$
99. Flat tiles, group $\text{III } 2 \text{ J2aq}$
100. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2aq}$; $\text{III } 2 \text{ J2ar}$
101. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2ar}$; $\text{III } 2 \text{ J2as}$; $\text{III } 2 \text{ J2at}$; $\text{III } 2 \text{ J2au}$
102. Flat tiles, groups $\text{III } 2 \text{ J2au}$; $\text{III } 2 \text{ J2aw}$; $\text{III } 2 \text{ J2ax}$; $\text{III } 2 \text{ J2ay}$; $\text{III } 2 \text{ J2az}$; $\text{III } 2 \text{ J2ba}$
103. Flat tiles, group $\text{II } 0 \text{ Za } \langle i \rangle$

104. Flat tiles, group II 0 Za < i >
 105. Flat tiles, groups II 0 Za < ii > ; II 0 Za < iii >
 106. Flat tiles, group II 0 Za < iii >
 107. Flat tiles, group II 0 Za < iv >
 108. Flat tiles, groups II 0 Za < iv > ; II 0 Za < v >
 109. Flat tiles, groups II 0 Za < v > ; II 1 Za
 110. Flat tiles, groups II 20 Za; II 21 Za
 111. Flat tiles, group II 21 Za
 112. Flat tiles, group II 21 Za
 113. Flat tiles, group II 21 Za
 114. Flat tiles, groups II 21 Za; II 22 Za
 115. Flat tiles, groups II 23 Za; II 24 Za
 116. Flat tiles, group II 24 Za
 117. Flat tiles, groups II 25 Za; II 27 Za; II 28 Za; II 3 Za
 118. Rafter-end tiles, group R to group W
 119. Ridge tiles, groups II 1 J1d; II 0 Aa; II 0 Za [Aa] ; II 0 Za [Ak] ; II 0 Za* [Ak]
 120. Ridge tiles, groups II 0 Bh; II 0 Za [Bs] ; II 0 Ea(+Ae); II 0 Ea(+Ae) (+Cn); II 1 J1d
 121. Ridge tiles, groups II 1 Za; II 20 Za; Corner-end tiles, group III 2 J2an; Flat tiles, group III 2 J2ap
 122. Barge tiles and filler tiles
 123. Filler tiles
 124. Curved fishtails: ornamental ridge-end tiles
 125. Curved fishtails: ornamental ridge-end tiles, a terminal ridge-end tile, a cover-tile of hip rafter and square non-roofing tiles
 126. Square non-roofing tiles
 127. Pottery from *Shindo-Haiji*
 128. Pottery from *Shindo-Haiji*
 129. Earthen objects and glass beads from *Shindo-Haiji*
 130. Pottery, cylindrical *haniwa* and stone implements from *Oganji-Ike-Gayo*
 131. Tileware coffin (fragments) from the roof-tile kiln: no. I , *Oganji-Ike-Gayo*
 132. *Sue* pottery from the burial mound and Iron nails and Coins from the Medieval layer, *Okameishi-Kofun*
 133. Pottery and earthen objects from the Medieval layer, *Okameishi-Kofun*
 134. Flat tiles from the Medieval layer, *Okameishi-Kofun*

PHOTOGRAPHS

1. An aerial photograph of *Shindo-Haiji* from the NW., upper regions. (in 1959, by courtesy of the Asahi Shimbun Company)

2. A view of the excavation from the SE. in 1959; seeing backward the *Oganji* Pond and the tumulus of *Okameishi* (*Okameishi-Kofun*)
3. A view of the excavation from the N. in 1959
4. Excavation zones: nos. 3 and 5 from the W. in 2000
5. *top*, Panorama of the foundation-platform for pagoda, from the SW.; *bottom*, South-western side of foundation-cobbles for the final pagoda
6. *top*, Pillar-base-stone and the pounding in of an earthen foundation in a depression made for four pillars, from the E.; *bottom*, Pillar-base-stone from the NE.
7. *top*, Cross section of the southern side of pit for the Pillar-base-stone, from the E.; *bottom*, Pounding in of an earthen foundation in a depression made for the pillar at the south-western corner, from the E.
8. *top*, Abandonment of roof-tiles used for the original pagoda, from the E.; *bottom*, Cross section of the pounding earth at the southern side of the pagoda, from the N.
9. *top*, Southern side of foundation-cobbles of the pagoda rebuilt and abandonment of roof-tiles used for the original pagoda, from the S.; *bottom*, Foundation-cobbles for the original pagoda, from the S.
10. *top*, Trace of removal of central pillar for the pagoda rebuilt, from the E.; *bottom*, Cross section of pit for the central pillar, from the W.
11. *top*, Southwestern corner of foundation-platform for the main hall, from the SW.; *bottom*, Cross section of the northern side of foundation-platform for the main hall, from the S.
12. Excavation zones: nos. 3 and 5 from the E. in 2000
13. *top*, Southwestern corner of foundation-platform for the main hall, from the W.; *bottom*, Pounding in of an earthen foundation in a depression made for the original western hall, from the E.
14. Foundation-platform faced with stacked roof-tiles for the western hall, from the S. in 1959
15. *top*, Northwestern side of foundation-platform for the eastern hall, from the S.; *bottom*, Northwestern side of foundation-platform for the eastern hall, from the NW.
16. *top*, Part of steps and northwestern side of the foundation-platform for the eastern hall, from the W.; *bottom*, Southwestern side of the foundation-platform for the eastern hall, from the W.
17. *top*, Trace of removal of foundation-cobbles for the eastern hall and part of steps, from the NW.; *bottom*, Cross section of the rain gutter for the eastern hall, from the N.
18. *top*, A view of the eastern half of foundation-platform for the eastern hall, from the E.; *bottom*, A view of the eastern half of foundation-platform for the eastern hall, from the S.
19. *top*, Joint-part of the Middle gate with the cloister, from the SE.; *bottom*, Joint-part of the Middle gate with the cloister, from the E.
20. *top*, Rest of foundation-platform for the eastern cloister, from the E.; *bottom*, An aerial photograph (a distant view) of level difference on the rest of foundation-platform for the eastern cloister, from the NW. (in 1959, by courtesy of the Asahi Shimbun Company)

21. *top*, Rest of foundation-platform for the western cloister, from the N.; *bottom*, Cross section of the southern side of dale-like features below the western hall, from the N.
22. *top*, Eastern earthen wall with roof, from the E.; *bottom*, Western earthen wall with roof, from the N.
23. *top*, Walking path between the pagoda and the main hall, from the S.; *bottom*, Walking path between the Middle gate and the South gate and features above the Middle gate, from the W.
24. *top*, Pits for the flagpoles at the southern side of the pagoda, from the W.; *bottom*, Pits for the flagpoles at the western side of the pagoda, from the S.
25. *top*, Northwestern excavation zone, outside the temple, from the W.; *bottom*, Northwestern excavation zone, outside the temple, from the N.
26. *top*, Cross section of the ditch: no.1 at the northwestern excavation zone, outside the temple, from the N. ; *bottom*, Ditch: no.1 at the northwestern excavation zone, outside the temple, from the E.
27. *top*, Kiln: no. II before the excavation, from the S.; *bottom*, Kiln: no. I before the excavation, from the S.
28. *top*, Working place in front of the kiln: no. II, from the S.; *bottom*, Cross section of the working place soil of the kiln: no. II, from the S.
29. *top*, Upper fire box and firing chamber of the kiln no. I ①, from the S. ; *bottom*, Upper fire box and firing chamber of the kiln: no. II ②, from the N.
30. *top*, Roof-tiles in the working place soil of the kiln: no. II (the upper firing chamber of the kiln : no. I), from the N. (see a round eaves tile : group A) ; *bottom*, Roof-tiles in the upper fire box soil of the kiln : no. I, from the E. (see a round eaves tile: group F and a flat eaves tile: group AA4)
31. *top*, Roof-tiles in the upper fire box (the lower firing chamber) soil of the kiln : no. I ①, from the S. ; *bottom*, Roof-tiles in the upper fire box (the lower firing chamber) soil of the kiln : no. I ②, from the S.
32. *top*, Panorama of the kilns: nos. I and II, from the S.; *bottom*, A view of the kiln: no. I, from the E.
33. *top*, A view of the kiln : no. II, from the S.; *bottom*, Western wall of the kiln : no. II, from the E.
34. *top*, Accumulation of roof-tiles in the kiln: no. II, from the N.; *bottom*, Accumulation of roof-tiles in the kiln: no. II, from the S.
35. *top*, Covering-tile on the flue hole of the kiln: no. II, from the S.; *bottom*, Flue hole of the kiln: no. II, from the S.
36. *top*, Floor of the kiln: no. II, from the S.; *bottom*, Firing box of the kiln: no. II (in detail), from the S.
37. *top*, Panorama of *Okameishi-Kofun*, from the S. upper regions; *bottom*, Panorama of *Okameishi-Kofun*, from the NE. upper regions

38. *top*, Structure opened of *Okameishi-Kofun*, from the SE.; *bottom*, Structure for burials of *Okameishi-Kofun*, from the NW. upper regions
39. *top*, Excavation zone: no.1, from the N.; *bottom*, Cross section of pit sediment and mound in the excavation zone: no.1, from the N.
40. *top*, Northern half of the excavation zone: no.2, from the N.; *bottom*, Ditch-like features in the excavation zone: no.2, from the SW.
41. *top*, Excavation zone: no.3, from the W.; *bottom*, Cross section of mound in the excavation zone: no.3, from the SW.
42. *top*, Cross section of mound in the excavation zone: no.3, from the W.; *bottom*, Excavation zone: no.3, from the NE. (see the cobbles)
43. *top*, Cross section of basement of mound in the excavation zone: no.4, from the S.; *bottom*, Northern half of the excavation zone: no.5, from the N.
44. *top*, Excavation zone: no.6, from the NW.; *bottom*, Cross section of mound in the excavation zone: no.6, from the SE.
45. *top*, Cross section of burial pit and mound in the excavation zone: no.7, from the NE.; *bottom*, Pit of the Medieval era in the excavation zone: no.7, from the NW.
46. *top*, Basement of mound in the excavation zone: no.7, from the NE.; *bottom*, Cross section of basement of mound in the excavation zone: no.7, from the NE.
47. *top*, Northeastern half of the excavation zone: no.8, from the NE.; *bottom*, Medieval artefacts in the excavation zone: no.8, from the NE.
48. *top*, Cross section of basement of mound in the excavation zone: no.8, from the E.; *bottom*, Excavation zone: no.9, from the E.
49. *top*, Earthen objects in the excavation zone: no.9, from the S.; *bottom*, Cross section of basement of mound in the excavation zone: no.9, from the SW.
50. *top*, Structure for burials (protecting the coffin; covering stone-slab), from the N.; *bottom*, Stone structure for burials, from the NW.
51. *top*, Entrance of passageway, from the SE.; *bottom*, Entrance of passageway, from the SW.
52. *top*, Western wall of passageway, from the SE.; *bottom*, Eastern wall of passageway, from the SW.
53. *top*, Filling stones between the western wall of passageway and the covering stone-slab ①, from the SE.; *bottom*, Filling stones between the western wall of passageway and the covering stone-slab ②, from the SE.
54. *top*, Filling stones at the basement of eastern wall of passageway, from the SW.; *bottom*, Filling stones between the eastern wall of passageway and the covering stone-slab, from the W.
55. *top*, Front view of the stone structure, from the S.; *bottom*, Stone structure: wall: covering stone-slab, from the S.
56. *top*, Stone structure, from the SW.; *bottom*, Stone structure, from the SE.
57. *top*, Construction of stone structure and western wall, from the SE.; *bottom*, Entrance of stone structure, from the S.

58. *top*, Entrance of stone structure and block stones, from the SW.; *bottom*, Stone structure:
block stones: wall, from the SW.
59. Round eaves tiles: group A
60. Round eaves tiles: group A
61. Round eaves tiles: group B
62. Round eaves tiles: group B
63. Round eaves tiles: groups C, D
64. Round eaves tiles: group D
65. Round eaves tiles: group D
66. Round eaves tiles: group E
67. Round eaves tiles: group E
68. Round eaves tiles: group E
69. Round eaves tiles: group E
70. Round eaves tiles: group E
71. Round eaves tiles: groups E, F
72. Round eaves tiles: groups F, G
73. Round eaves tiles: groups G, H
74. Round eaves tiles: group J
75. Round eaves tiles: group J
76. Round eaves tiles: groups K, L
77. Round eaves tiles: group L
78. Flat eaves tiles: groups AA1, AA2, AA3
79. Flat eaves tiles: groups AA4, AA5
80. Flat eaves tiles: group AA5
81. Flat eaves tiles: group AA5
82. Flat eaves tiles: groups AA5, AA6
83. Flat eaves tiles: groups AA6, AA7
84. Flat eaves tiles: groups AA7, P
85. Round tiles, *Tamabuchi* type: group I 2 Za
86. Round tiles, *Tamabuchi* type: groups I 31 Za [J1b] ; I 321 Za [J1a]
87. Round tiles, *Tamabuchi* type: groups I 321 Za [J1b] ; I 321 Za [J1e]
88. Round tiles, *Tamabuchi* type: groups I 321 Za [J1e] ; I 332 Za [J1b]
89. Round tiles, *Gyoki* type: groups I 1 Za [Aa] ; I 1 Za [Ab] ; I 1 Za [Ad]
90. Round tiles, *Gyoki* type: groups I 1 Za [Ae] ; I 1 Za [Ag] (+Af)
91. Round tiles, *Gyoki* type: group I 1 Za [Aj]
92. Round tiles, *Gyoki* type: group I 1 Za [Ak]
93. Round tiles, *Gyoki* type: group I 1 Za [Am]
94. Round tiles, *Gyoki* type: group I 1 Za [Am]
95. Round tiles, *Gyoki* type: groups I 1 Za [Am] ; I 1 Za [Ba]

96. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za [Bc]$
97. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za [Br]$
98. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za [Cg]$; $I 1 Za [Ch]$
99. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za [Cj]$
100. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za [Cj]$; $I 1 Za [J1b]$; $I 1 Za [J1c]$
101. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za [Aa]$; $I 1 Za \langle i \rangle$
102. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za \langle ii \rangle (+Bt)$; $I 1 Za \langle ii \rangle (+Cn)$; $I 1 Za \langle x \rangle$
103. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za \langle x ii \rangle$
104. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za \langle x ii \rangle$
105. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za \langle x iii \rangle$
106. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za \langle x iv \rangle$; $I 1 Za \langle x v \rangle$
107. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za \langle x vi \rangle$
108. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za \langle x vii \rangle$; $I 1 Za \langle x viii \rangle$
109. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za \langle x x i \rangle$; $I 1 Za \langle x x ii \rangle$
110. Round tiles, *Gyoki* type: group $I 1 Za \langle x x ii \rangle$
111. Round tiles, *Gyoki* type: groups $I 1 Za \langle x x ii \rangle$; $I 1 Za \langle x x iii \rangle$
112. Flat tiles: group $II 0 Za [Aa]$
113. Flat tiles: group $II 0 Za [Aa]$
114. Flat tiles: group $II 0 Za [Aa]$
115. Flat tiles: group $II 0 Za [Aa]$
116. Flat tiles: groups $II 0 Za [Ag]$; $II 0 Za [Ah]$
117. Flat tiles: groups $II 0 Za [Ah]$; $II 0 Za [Ak]$
118. Flat tiles: groups $II 0 Za [Ak]$; $II 0 Za^* [Ak]$
119. Flat tiles: groups $II 0 Za^* [Ak]$; $II 0 Za [Am]$
120. Flat tiles: groups $II 0 Za [Ba]$; $II 0 Za [Bq]$
121. Flat tiles: groups $II 0 Bs$; $II 0 Bs (+Ae)$
122. Flat tiles: groups $II 0 Ck \times Cm$; $II 1 Za [J1b]$
123. Flat tiles: groups $II 1 J1c$; $II 1 J1d$; $II 1 J1e$
124. Flat tiles: groups $III 2 J2ae$; $III 2 J2af$
125. Flat tiles: groups $III 2 J2ag$; $III 2 J2ah$
126. Flat tiles: groups $III 2 J2ah$; $III 2 J2aj$
127. Flat tiles: groups $III 2 J2am$; $III 2 J2an$
128. Flat tiles: groups $III 2 J2ap$; $III 2 J2aq$
129. Flat tiles: group $III 2 J2aq$
130. Flat tiles: groups $III 2 J2aq$; $III 2 J2ar$
131. Flat tiles: groups $III 2 J2as$; $III 2 J2au$
132. Flat tiles: groups $III 2 J2au$; $III 2 J2ba$; $II 0 Za \langle i \rangle$
133. Flat tiles: groups $II 0 Za \langle i \rangle$; $II 0 Za \langle iv \rangle$
134. Flat tiles: group $II 21 Za$

135. Flat tiles: group II 21 Za
136. Flat tiles: group II 21 Za
137. Flat tiles: groups II 22 Za; II 23 Za
138. Flat tiles: group II 24 Za
139. Flat tiles: groups II 26 Za [Cg] ; II 27 Za [Cg] ; II 25 Za [Ch] ; II 27 Za [Ch]
140. Partition guide lines and point-marks left on flat tiles
141. Imprints of mould apparatus left on flat tiles and ridge tiles made by the bucket-moulding method
142. Imprints of mould apparatus left on flat tiles made by the bucket-moulding method: palm-prints, finger-prints: tiles used for mending the wall of kiln: tiles melted down
143. Rafter-end tiles: group R to group W
144. Ridge tiles
145. Ridge tiles
146. Ridge tiles
147. Ridge tiles
148. Flat tile: group III 2 J2ap; Corner-end (triangle-shaped) tile: group III 2 J2an
149. Barge tiles and filler tiles
150. Curved fishtails, ornamental ridge-end tiles
151. Curved fishtails, ornamental ridge-end tiles
152. Cover tiles of hip rafter and non-roofing tiles
153. Imprints of cloth (cloth [I] to [WA])
154. Imprints of cloth (cloth [KA] to [U])
155. Padding traces: parallel-incised patterns (Aa~Aj)
156. Padding traces: parallel-incised patterns (Ak~Am) to lattice-incised patterns (Ba~Bf(0))
157. Padding traces: lattice-incised patterns (Bf(1)~Bm)
158. Padding traces: lattice-incised patterns (Bn~Bt) to oblique-lattice-incised patterns (Ca~Cc)
159. Padding traces: oblique-lattice-incised patterns (Cd~Cn)
160. Padding traces: patterns of parallel/oblique lines (Da~Ha) to cord-wrapped patterns (J1a~J1b)
161. Padding traces: cord-wrapped patterns (J1c~J1f: J2aa~J2ad)
162. Padding traces: cord-wrapped patterns (J2ae~J2am)
163. Padding traces: cord-wrapped patterns (J2an~J2aw)
164. Padding traces: cord-wrapped patterns (J2ax~J2ba); composite patterns: Bf×Be: Ce×Ck: Ck×Bj: Ck×Cm: Cm×Be
165. pottery
166. pottery
167. Buddha-image tiles: tube of bellows: tileware coffin (fragments)

新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳

この報告書は、大阪府富田林市緑ヶ丘町に所在する、飛鳥時代の古代寺院である新堂廃寺跡と、そこで使用する瓦を焼いたオガンジ池瓦窯跡、そして寺を建立した檀越（だんおつ）の墓と考えられるお亀石古墳の、3遺跡の発掘調査の成果を示す。

発掘調査は富田林市教育委員会によっておこなわれたが、新堂廃寺跡は1984年、および1997年から2000年に、オガンジ池瓦窯跡は1969-70年と1985年に、お亀石古墳は2001年に実施した。それぞれの遺跡を切り離して考えることはできない。これらの3つの遺跡はこれらの発掘調査の成果から、国の史跡に指定された。

考古資料のほとんどは瓦類であるが、従来からなされてきた「型式分類」をもとに、さらに細かく資料を観察して、そのデータを属性組成として記載する。その新しい方法を用いた結果を推論して、今まで年代付けの資料とはされてこなかった丸瓦や平瓦も年代決定作業に活用する道を開く。こうしてより細かく識別する瓦資料を、発掘調査で明らかにされた出土状況に照らして、新堂廃寺の伽藍配置の7世紀初めの創建から8世紀後半の完成に至る時を追っての変遷を概述する。

以下に、1) 瓦資料の年代決定と、2) 伽藍配置の復元についてまとめる。

1) 新堂廃寺跡とオガンジ池瓦窯跡では、飛鳥期、白鳳期（「山田寺式」期と「川原寺式」期に細分）および天平期の瓦資料が多量に出土した。ほとんどは破片資料であったので、徹底的にひつつける作業を試み、より完形に近い資料を得ることに努めた。そうして、造瓦器具の特徴、叩き板の種類および布袋に見る布の種類を属性として取り上げ、1枚の瓦をそれらの属性の組成で認識し、「群」を認定する。そこから技術反映属性の操作を経て、造瓦技術の特徴を4つの時期に特定し、瓦の年代決定の作業を完成する（表13参照）。

2) 新堂廃寺は、飛鳥時代に「四天王寺式」の伽藍配置で創建された。講堂、金堂、塔、中門が中軸線上に並ぶ配置である。しかしわずかののちに塔は崩壊し、瓦積基壇をも部分的に再構築して、塔は再建される。白鳳期のことで、「川原寺式」の瓦が使われるより以前であるのは確実である。

塔が再建されたあとに、西面回廊の中央部を壊して、そこに新しく堂が加えられる。この新堂は天平期に再建されることになるが、創建は白鳳期の後半で、「川原寺式」の瓦が使われた時期である。少しののち、天平期の初めに、その新堂に対して対称的な位置に、東面回廊を壊して、またもうひとつの堂が建てられる。それから、まさに天平期に、南門が、すべての伽藍を取り囲む築地塀とともに完成される（第64～66図）。この最終的な伽藍配置は、それまでに例を見ないので、「新堂廃寺式」と呼ぼう。

Shindo-Haiji (新堂廃寺) · Oganji-Ike-Gayo (オガンジ池瓦窯) ·
Okameishi-Kofun (お亀石古墳)

This report contains the results of the excavations executed at three sites; *Shindo-Haiji*: the relics of an ancient Buddhist temple, called *Shindo* (New Temple), *Oganji-Ike-Gayo*: the kilns for firing roof-tiles of *Oganji Pond* and *Okameishi-Kofun*: the tumulus of *Okameishi* (Tortoise-shaped stone). The temple of *Shindo* is located in Midorigaoka-cho, Tondabayashi-City, Osaka, Japan, dated to the *Asuka* period: the beginning of the 7th century. The kilns of *Oganji Pond* are found just beside the ancient temple as a provider of roof-tiles for the construction through the *Asuka* and the *Tempyo (Nara)* periods. The tumulus of *Okameishi* is situated on a hillock behind the kilns, supposed as the tomb for the founder of the temple.

These sites were excavated by the Board of Education, Tondabayashi-City; in 1984 and from 1997 to 2000 at the temple, in 1969-70 and 1985 at the kilns, and finally in 2001 at the tumulus. The three sites constitute an inseparable unit, which has been classified as an historical zone of national importance by the Ministry.

Most of the archaeological materials derived from these sites are roof-tiles. On the basis of a typological analysis, so commonly carried out, 'groups' of attribute-assemblage are recognized by a means of finer observations on the materials. This new approach permits us to date roof-tiles more finely, even for simple round and flat roof-tiles. As our excavations registered the picking-up spots of the roof-tiles related to the arrangement of buildings within temple cloister, so our fine dating will speak more correctly of the history of the temple, from the foundation (in the beginning of the 7th century) to the completion of arrangement (in the 8th century).

The following is a résumé on two remarks of our analysis: 1) the dating of roof-tiles, 2) the history of the arrangement.

1) Two sites, the temple and the kilns, offer us lots of roof-tiles attributable to the *Asuka*, the *Hakuho* (including the epochs of using the *Yamadadera* type- and the *Kawaharadera* type-roof-tiles) and the *Tempyo* periods. Unhappily most of them are small fragmented pieces. So we have done our best to attach pieces to pieces in order to have complete roof-tiles as many as possible.

Then we find, on the more complete roof-tiles, the characteristics of tools, especially buckets molding or wooden models, and the kinds of paddles and cloth sacks, respectively used for making the roof-tiles. Treating these attributes as the main ones, assemblages of the three are obtained to define the 'groups'. The characteristics, as well as the kinds, are all the technical reflections, so, it will be reduced that making techniques for the roof-tiles were different according to the periods. Consequently we will draw conclusive dates for each group of roof-tiles, as shown in table 13 (see. pp. 267 to 270).

2) The temple is founded in the *Asuka* period with the arrangement of type *Shitennoji* (四天王寺式 : to arrange an auditorium, a main hall, a pagoda and a Middle gate on a central line). But in a very short time, the pagoda falls down, so, having reconstructed partially the foundation-platform with stacked roof-tiles, another pagoda is inevitably rebuilt. It is in the *Hakuho* period, surely before using the *Kawaharadera* type-roof-tiles.

After the reconstruction of the pagoda, demolishing the part of the cloister of western side, roofed semi-enclosed corridor, a new hall is added on the line of the western cloister. It is in the later part of the *Hakuho* period: the epoch of using the *Kawaharadera* type-roof-tiles, though this hall becomes rebuilt in the *Tempyo* period. A little later, at the beginning of the *Tempyo* period, at the opposite side of the hall, another hall is also founded. And then it is in the very *Tempyo* period that the South gate, as well as the earthen wall with roof enclosing all the buildings, will be completed (see figs. 64 to 66). As this final arrangement should be considered as an originality, so we propose to call it the type *Shindo-Haiji* (新堂廢寺式) .

新堂廢寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お龜石古墳

이 보고서는 大阪府富田林市綠ヶ丘町에 소재한 飛鳥時代의 고대사원인 新堂廢寺(신도우 하이 지)址와 그곳에서 사용된 기와를 제조한 オガンジ池(오간지이케)瓦窯址, 그리고 사원 건립 주체(檀越)의 무덤이라 생각되는 お龜石(오카메이시)古墳 등 세 가지 유적에 대한 발굴조사 성과에 관한 것이다.

발굴조사는 富田林市教育委員會에 의하여 이루어졌는데, 新堂廢寺는 1984년 및 1997년~2000년에, オガンジ池瓦窯는 1969~1970년 및 1985년에, お龜石古墳은 2001년에 각각 실시되었다. 이 유적들을 각각 별개의 것으로 생각할 수는 없다. 이들 세 유적은 지금까지 실시된 발굴조사 성과를 토대로 국가 史跡으로 지정되었다.

출토자료의 대부분은 기와류였는데, 지금까지 연구되어 온 「型式分類」를 바탕으로 하여 보다 자세히 자료를 관찰하여 거기서 얻어진 데이터를 屬性組成으로서 기재한다. 이와 같은 새로운 방법에 의한 결과를 바탕으로 하여, 지금까지 연대를 부여하기 위한 자료로서 활용되지 않았던 수기와·암기와도 연대를 결정하는 작업에 활용해 보고자 한다. 이러한 작업을 통해 보다 자세히 식별한 기와자료들을, 발굴조사에서 밝혀진 출토 상황에 비추어, 7세기 초의 創建에서 8세기의 完成에 이르는 新堂廢寺 伽藍配置의 변천과정을 概述한다.

이하, 1) 기와 자료의 연대 결정, 2) 伽藍配置의 복원에 대하여 정리한다.

1) 新堂廢寺址와 オガンジ池瓦窯址에서는 飛鳥期, 白鳳期(「山田寺式」期和「川原寺式」기로 세분된다) 및 天平期の 기와 자료가 다량으로 출토되었다. 대부분이 파편이었으므로 철저한 접합 작업을 통해 보다 완형에 가까운 자료를 얻고자 노력하였다. 그리하여 造瓦器具의 특징, 타날판의 종류 및 布의 종류를 속성이라 정하고, 각 기와를 이와 같은 속성조성으로 인식하여 「群」을 설정한다. 그런 다음 기와에 반영된 제작 기술의 속성 분류 작업을 하여 造瓦 기술의 특징을 네 시기로 특정, 기와의 연대 결정 작업을 완성한다(표 12 참조).

2) 新堂廢寺는 飛鳥時代に「四天王寺式」伽藍配置로써 창건되었다. 강당, 금당, 탑, 중문이 중심선상에 배치되는 것이다. 그러나 탑은 얼마 되지 않아 붕괴되었고 瓦積基壇도 부분적으로 재구축되어 탑은 재건되었다. 이는 白鳳期에 일어난 일로서, 「川原寺式」막새 기와가 사용되기 이전임이 확실하다.

탑이 재건된 후에 서쪽 회랑 중앙부를 없애고 그곳에 새로운 堂(건물)을 세웠다. 이 新堂은 天平期에 재건되는데, 창건 시기는 白鳳期 후반이며, 「川原寺式」막새 기와가 사용되었던 시기이다. 그 얼마 뒤인 天平期 초에는, 그 新堂과 대칭하고 있던 동쪽 회랑을 없애고 또 하나의 堂(건물)을 세웠다. 그리고 이 天平期에, 모든 伽藍을 둘러싸는 築地塀(담장)과 함께 남문이 완성되었다(제 64~66도). 新堂廢寺의 최종적인 伽藍配置는 전례가 없는 것이므로 「新堂廢寺式」이라 부르고자 한다.

新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳

本文編 (図版編とも
全2冊セット)

発行年月日 2003年3月31日 第1刷

2004年5月31日 第2刷

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

報告書抄録

ふりがな	しんどうはいじ・おがんじいけがようあと・おかめいしこふん							
書名	新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳							
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告							
巻次	35							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	粟田 薫・横山成己・北野耕平・中辻 亘							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどうはいじあと 新堂廃寺跡	とんだばやしし 富田林市 みどりがおかちよう 緑ヶ丘町	27214	17	34° 20' 24"	135° 36' 13"	1998.3.19~ 1998.3.31 1998.4.1~ 1999.3.31 1999.9.8~ 1999.9.30 2000.9.1~ 2001.1.31	538	寺域などの 範囲確認調査
おがんじいけがようあと オガンジ池瓦窯跡	とんだばやしし おおあざ 富田林市大字 なかのみどりがおかちよう 中野・緑ヶ丘町	27214	18	34° 30' 40"	135° 36' 00"	1969.12~ 1970.2 1985.11~ 1986.2	160	オガンジ池 の堤改修等
おかめいしこふん お亀石古墳	とんだばやしし 富田林市 おおあざなか 大字中野	27214	19	34° 30' 43"	135° 35' 56"	2001.11.19~ 2002.3.29	240	古墳の墳形 と規模の確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂廃寺跡	寺院跡	飛鳥時代~ 平安時代・中世・近世		中門基壇 南面回廊基壇 中門・南門間、参道側溝 東方建物、階段、雨落ち溝 基壇化粧石抜取穴 塔基壇、心礎据付掘方 塔心礎 塔四天柱礎石据付のため の地業ピット 塔・金堂間の参道 西面回廊基壇 東・西築地塀基壇 宝幢遺構、溝、土坑 ピット		軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦 丸瓦、平瓦、隅木蓋瓦 鴟尾、土師器、須恵器、三彩 黒色土器、瓦器、瓦質土器 陶磁器、鞆の羽口、埴仏 螺髪、サヌカイト		飛鳥期創建の中門 および回廊を検出 天平期の東方建物の 基壇を検出 飛鳥期の塔心礎を 検出
オガンジ池I号瓦窯跡	窯跡	飛鳥時代~白鳳時代		半地下式登窯		軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦 丸瓦、平瓦、円面硯、瓦棺 埴、砥石、土師器		新堂廃寺創建時 から再建後の所用 瓦を供給した瓦窯
オガンジ池II号瓦窯跡	窯跡	白鳳時代~天平時代		半地下式平窯		軒丸瓦、丸瓦、平瓦		
お亀石古墳	古墳	飛鳥時代		墓壙、墳丘盛土 区画溝、平坦面		瓦片、須恵器、閉塞石		墳形と規模を確認

